三重県埋蔵文化財調査報告１１５－４

一般国道23号中勢道路建設事業に伴う

大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告

１９９５．３

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の県庁所在地である津市は、伊勢平野のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、古来より多くの遺跡が営まれてきた地域です。

ここに報告する大古曽遺跡、山籠遺跡、宮ノ前遺跡は、一般国道23号中勢道路建設に伴って、現状保存が困難なために緊急に発掘調査を実施し、記録保存を行なった遺跡です。大古曽遺跡では旧石器時代のナイフ形石器が出土し、津市の歴史が2万年以上も遡ることが判りました。山籠遺跡では弥生時代の竪穴住居が10棟確認され、出土した石器、土器とともに当時の生活の一端を垣間見ることができました。宮ノ前遺跡では縄文時代から室町時代にわたり、連綿と人々が生活を続けてきた場所であることがわかりました。

現地での遺跡は消滅いたしましたが、これらの遺跡を調査した結果、図面、写真、遺物が残りました。本書はその記録類を整理した報告書です。ここにその結果を公開することにより本書が当地域の歴史研究に役立つとともに、文化財保護への一層の理解が深まることを切に願うものであります。

調査にあたりましては、建設省中部地方建設局、同三重工事事務所、社団法人中部建設協会、津市教育委員会および地元の方々には温かい御理解と御協力を頂きました。文末になりましたが、ここに記して感謝の意を表するものであります。

平成7年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長　川　村　政　敬

例　言

1．本書は、平成５・６年度に三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した一般国道23号中勢道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書のうち大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡・コウゼンジ遺跡の報告書である。コウゼンジ遺跡については、範囲確認調査のみ実施しているが、前言の中で記述した。また大古曽遺跡については、Ａ地区を橋垣内遺跡の一部として報告することとしたため、本書では大古曽遺跡はＢ地区とＣ地区のみ報告するものとした。

2．調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の負担による。

3．発掘調査は昭和63年度、平成元～３・５年度に、整理・報告書作成業務は平成５・６年度に実施した。その体制は下記のとおりである。

・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県教育委員会文化課（昭和63年度）
　　三重県埋蔵文化財センター（平成元年度以降）
・調査協力　津市教育委員会
・現場作業　社団法人中部建設協会

4．大古曽遺跡の現地調査は、平成３年度にＢ地区を渡辺尚登・山口格・天野秀昭が、平成５年度にＣ地区を山口格・清水正明が担当した。山籠遺跡は増田安生・浅生悦生が、宮ノ前遺跡は平成元年度に増田安生・浅生悦生が、平成５年度に本堂弘之・清水正明がそれぞれ担当した。

5．本書作成にかかる報文執筆者は、目次および文末にその氏名を記した。

6．発掘調査ならびに整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

青木哲哉（立命館大学）・磯部克（三重県立津西高等学校）・上村安生（斎宮歴史博物館）・久保勝正（斎宮歴史博物館）・近藤玲（㈶徳島県埋蔵文化財センター）・冨田靖男（三重県立博物館）・長屋幸二（㈶岐阜県埋蔵文化財センター）・新田剛（鈴鹿市教育委員会）・秦好利（津田学園中学校）・八賀晋（三重大学人文学部）・藤澤良祐（瀬戸市歴史民俗資料館）・山下純生（三重県立博物館）

7．本書所収遺跡については、既に『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ（三重県教育委員会 1989)、『同』Ⅱ（三重県埋蔵文化財センター　1990)、『同』Ⅲ（同　1991)、『同』Ⅳ（同　1992)、『同』Ⅵ（同 1994)、『中勢道路調査ニュース』№1・2・6・9・16・20にその調査途中の概報を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

8．本書に用いた地図および遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。当該遺跡では磁北はＮ６°20′Ｗ座標北から振れている。

9．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

10．本書に用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。なお遺構の名称・番号は、調査時点および調査途中の概報での呼称を踏襲せずに、新たに改称したものである。

ＳＡ	柱列・柵	ＳＢ	掘立柱建物	ＳＤ	溝・自然流路	ＳＥ	井戸
ＳＨ	竪穴住居	ＳＫ	土坑	Ｐ	柱穴・小穴	ＳＸ	中世墓
ＳＺ	その他						

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ．前言
1．調査に至る経過……（河北）… 1
2．調査の体制……（河北）… 1
3．調査経過……（河北）… 5

Ⅱ．大古曽遺跡
1．位置と環境……（山口）… 7
2．調査の方法
（1）現地調査の方法……（山口）… 7
（2）資料整理の方法……（山口）… 9
3．調査の経過……（山口）… 9
4．層序……（山口）… 14
5．遺構と遺物
（1）溝・自然流水路……（山口）… 23
（2）掘立柱建物……（清水・山口）… 47
（3）柱列……（山口）… 50
（4）土坑……（山口）… 52
（5）中世墓……（山口）… 56
（6）その他……（山口）… 59
6．結語
（1）調査区内における遺構の変遷……（山口）… 63
（2）遺跡の立地条件と遺構変遷過程の関係……（山口）… 66
（3）集落を溝で囲むことについて……（山口）… 67
（4）掘立柱建物群の構成とその特質……（山口）… 67
（5）毛無川中流域における集落構造の変遷……（山口）… 68
（6）条里制の施行と方形土地区画の出現……（山口）… 71
（7）地名から見た志登茂川流域の条里制……（山口）… 71
（8）ＳＤ10出土の漆壺について……（山口）… 73
7．地理学的考察
（1）津市・毛無川中流域の地形環境……（青木）… 83
8．自然科学分析
（1）平成３年度一般国道２３号埋蔵文化財発掘調査にかかる大古曽遺跡の火山灰同定報告
……（パリノ・サーヴェイ 株式会社）… 97
（2）大古曽遺跡Ａ・Ｃ地区自然科学分析報告……（パリノ・サーヴェイ 株式会社）… 100

Ⅲ．山籠遺跡
1．はじめに
（1）遺跡の立地と周辺の状況……（中村）… 121

（２）周辺の歴史的環境（弥生時代）……（中村）… 121
（３）調査の方法……（中村）… 123
（４）記録・整理の方法……（中村）… 123
２．調査の成果　－層序と遺構－
（１）基本層序……（中村）… 124
（２）遺構の概要……（中村）… 124
（３）各説……（中村）… 127
３．調査の成果　－遺物－
（１）土器……（中村）… 132
（２）石器……（穂積）… 138
４．調査のまとめ
（１）遺構（竪穴住居）について……（中村）… 147
（２）出土土器について……（中村）… 148
（３）出土石器について……（穂積）… 148
（４）調査の課題……（中村）… 150

Ⅳ．宮ノ前遺跡
１．位置と環境……（本堂）… 155
２．調査経過の概要……（本堂）… 157
３．Ａ地区の調査
（１）基本層序と遺構検出面……（本堂）… 158
（２）遺構……（本堂）… 158
（３）遺物
Ａ．縄文時代の遺物……（穂積）… 185
Ｂ．弥生時代の遺物……（倉田）… 185
Ｃ．古墳時代の遺物……（穂積）… 187
Ｄ．飛鳥・奈良時代の遺物……（倉田）… 187
Ｅ．平安時代の遺物……（倉田）… 193
Ｆ．中世の遺物……（倉田）… 194
Ｇ．その他の遺物……（倉田・穂積）… 203
４．Ｂ地区の調査
（１）遺構……（本堂）… 205
（２）遺物……（本堂）… 205
５．Ｃ地区の調査……（本堂）… 206
６．Ｄ地区の調査
（１）遺構……（本堂）… 207
（２）遺物……（本堂）… 207
７．結語
（１）遺構について……（本堂）… 208
（２）遺物について……（倉田）… 209

（付）森山東遺跡出土の漆器椀について……（筒井）… 247

図 版 目 次

Ⅱ．大古曽遺跡
ＰＬ１　試料中の火山ガラスの顕微鏡写真…… 99
ＰＬ２　試料中の火山ガラスおよび砂分の状況 103
ＰＬ３　花粉の顕微鏡写真…… 104
ＰＬ４　調査区遠景…… 105
　　Ｃ地区東側階段状水田面…… 105
ＰＬ５　Ｂ地区全景…… 106
　　Ｃ地区全景…… 106
ＰＬ６　Ｂ地区第１遺構面…… 107
　　Ｃ地区第１遺構面…… 107
　　Ｃ地区東側拡張区…… 107
ＰＬ７　ＳＢ２９・３０…… 108
　　ＳＢ２４…… 108
ＰＬ８　ＳＢ２２…… 109
　　ＳＢ２３…… 109
　　ＳＢ２５検出状況…… 109
　　ＳＢ２５…… 109
ＰＬ９　ＳＸ４６…… 110
　　ＳＸ４７…… 110
　　ＳＸ４８…… 110
　　ＳＸ４９…… 110
ＰＬ10　ＳＫ４３…… 111
　　ＳＫ３８・ＳＤ１０…… 111
　　足跡検出状況…… 111
ＰＬ11　Ｃ地区西側拡張区…… 112
　　ＳＤ９埋土堆積状況…… 112
　　ＳＤ４遺物出土状況…… 112
　　ＳＫ４５…… 112
ＰＬ12　ＳＤ５遺物出土状況…… 113
　　ＳＺ５０…… 113
　　ＳＤ９遺物出土状況…… 113
　　足跡検出状況…… 113
　　ＳＤ１０遺物出土状況…… 113
　　東壁36ｍ地点の落ち込み…… 113
　　ＳＤ１２遺物出土状況…… 113
　　火山灰検出状況…… 113
ＰＬ13　ＳＤ１出土遺物…… 114
ＰＬ14　ＳＤ１・２・４出土遺物…… 115
ＰＬ15　ＳＤ４出土遺物…… 116
ＰＬ16　ＳＤ４・５・９・10出土遺物…… 117
ＰＬ17　ＳＤ１２・１３・２１・ＳＫ４１・４２・
　　４３出土遺物…… 118
ＰＬ18　ＳＫ３８・４３・ＳＸ４６・４７・４８・
　　４９・包含層出土遺物…… 119
ＰＬ19　ＳＸ47・包含層出土遺物…… 120
Ⅲ．山籠遺跡
ＰＬ20　調査区全景…… 151
ＰＬ21　調査区南部竪穴住居…… 152
　　ＳＨ１・２…… 152
　　ＳＨ４…… 152
　　ＳＨ５…… 152
　　ＳＨ６…… 152
　　ＳＨ７…… 152
　　ＳＨ８…… 152
　　ＳＨ９・１０…… 152
ＰＬ22　出土遺物…… 153
ＰＬ23　出土遺物…… 154
Ⅳ．宮ノ前遺跡
ＰＬ24　調査前全景…… 223
　　遺跡遠景…… 223
ＰＬ25　第１遺構面全景…… 224
　　第２遺構面全景…… 224
ＰＬ26　第３遺構面・Ｃ地区全景…… 225
　　第４遺構面全景…… 225
ＰＬ27　第５遺構面全景…… 226
　　ＳＫ１…… 226
ＰＬ28　ＳＨ２…… 227
　　ＳＨ３…… 227
ＰＬ29　ＳＨ４…… 228
　　ＳＨ５…… 228
ＰＬ30　ＳＨ６…… 229
　　ＳＨ７…… 229
ＰＬ31　ＳＨ８…… 230
　　ＳＨ９～11…… 230
ＰＬ32　ＳＢ12・13…… 231
　　ＳＢ14…… 231
ＰＬ33　ＳＢ18・19、ＳＫ24…… 232
　　ＳＢ29・30、ＳＫ42…… 232
ＰＬ34　ＳＢ31…… 233
　　ＳＫ36　遺物出土状況…… 223
ＰＬ35　ＳＫ37　遺物出土状況…… 234
　　ＳＤ51　遺物出土状況…… 234
ＰＬ36　Ｂ地区全景…… 235
　　Ｄ地区全景…… 235
ＰＬ37　出土遺物…… 236
ＰＬ38　出土遺物…… 237
ＰＬ39　出土遺物…… 238
ＰＬ40　出土遺物…… 239
ＰＬ41　出土遺物…… 240
ＰＬ42　出土遺物…… 241
ＰＬ43　出土遺物…… 242
ＰＬ44　出土遺物…… 243
ＰＬ45　出土遺物…… 244
ＰＬ46　出土遺物…… 245

挿　図　目　次

Ⅰ．前言
第１図　中勢道路(8・9・10工区)内遺跡位置図…２
第２図　山籠遺跡・コウゼンジ遺跡・宮ノ前遺跡試掘坑位置図……６
Ⅱ．大古曽遺跡
第３図　遺跡位置図……８
第４図　調査区位置図……10
第５図　調査区設定図……11
第６図　調査区東壁土層断面図１……15
第７図　調査区東壁土層断面図２……16
第８図　調査区東壁土層断面図３……17
第９図　調査区（Ｃ地区）南壁土層断面図……18
第10図　調査区（Ｃ地区）西壁土層断面図……19
第11図　調査区（Ｂ地区）西壁土層断面図……20
第12図　調査区（Ｂ地区）北壁土層断面図……21
第13図　調査区（Ｂ地区）南壁土層断面図……22
第14図　土層図位置図……24
第15図　遺構全体図……25～26
第16図　ＳＤ１土層断面図……27～28
第17図　ＳＤ１土層断面図……29
第18図　ＳＤ１遺物実測図１……30
第19図　ＳＤ１遺物実測図２……31
第20図　ＳＤ１遺物実測図３……32
第21図　ＳＤ２遺物実測図……33
第22図　ＳＤ２土層断面図……33
第23図　ＳＤ３土層断面図……33
第24図　ＳＤ４遺物実測図１……34
第25図　ＳＤ４遺物出土状況図……35～36
第26図　ＳＤ４土層断面図……37
第27図　ＳＤ４遺物実測図２……37
第28図　ＳＤ４遺物実測図３……37
第29図　ＳＤ５土層断面図……38
第30図　ＳＤ５遺物実測図……38
第31図　ＳＤ６土層断面図……39
第32図　ＳＤ７遺物実測図……39
第33図　ＳＤ８土層断面図……39
第34図　ＳＤ９土層断面図１……40
第35図　ＳＤ９土層断面図２……41
第36図　ＳＤ９中層遺物出土状況図……42
第37図　ＳＤ９出土遺物実測図……42
第38図　土器集中地点遺物出土状況図・出土遺物実測図……43
第39図　ＳＤ10実測図・遺物出土状況図・出土状況図……44
第40図　ＳＤ12土層断面図……45
第41図　ＳＤ12出土遺物実測図……45
第42図　ＳＤ13～21出土遺物実測図……46
第43図　ＳＢ22実測図……48
第44図　ＳＢ23実測図……48
第45図　ＳＢ24実測図……48
第46図　ＳＢ25実測図……48
第47図　ＳＢ26・27実測図……49
第48図　ＳＢ28実測図……49
第49図　ＳＢ29・30実測図、ＳＢ29出土遺物実測図……50
第50図　ＳＢ31～35実測図、ＳＢ35出土遺物実測図……51
第51図　ＳＢ36・37実測図……51
第52図　ＳＫ38土層断面図・出土遺物実測図…52
第53図　ＳＫ39土層断面図……52
第54図　ＳＫ40実測図、出土遺物実測図……53
第55図　ＳＫ41実測図、出土遺物実測図……54
第56図　ＳＫ42実測図、出土遺物実測図……54
第57図　ＳＫ43実測図、出土遺物実測図……55
第58図　ＳＫ44出土遺物実測図……56
第59図　ＳＫ45実測図……56
第60図　ＳＸ46実測図、出土遺物実測図……56
第61図　ＳＸ47出土遺物実測図……57
第62図　ＳＸ47実測図……57
第63図　ＳＸ48実測図、出土遺物実測図……57
第64図　ＳＸ49実測図、出土遺物実測図……57
第65図　ＳＺ50土層断面図……59
第66図　ピット出土遺物実測図……59
第67図　包含層出土遺物実測図１……60
第68図　包含層出土遺物実測図２……61
第69図　包含層出土遺物実測図３……62
第70図　大古曽遺跡遺構変遷図１……64
第71図　大古曽遺跡遺構変遷図２……65
第72図　大古曽遺跡・橋垣内遺跡・六大Ｂ遺跡遺構変遷図……69～70
第73図　志登茂川流域の「数字坪」「仮名坪」分布図……72
第74図　地形分類図……84
第75図　下位段丘の地質断面図……86
第76図　完新世段丘と現氾濫原の地質断面図…89
第77図　支流性の扇状地（大古曽遺跡）における地質断面図……90
第78図　地形環境の変遷１……92
第79図　地形環境の変遷２……94
第80図　試料採取層準模式土層断面図……99
第81図　Ｃ地区試料番号④の花粉化石組成……102
Ⅲ．山籠遺跡

第82図　山籠遺跡周辺地形図…… 121
第83図　山籠遺跡調査区位置図…… 122
第84図　調査区小地区割り図…… 123
第85図　遺構配置図…… 123
第86図　平面図、土層断面図…… 125～126
第87図　遺構平面・断面図１…… 128
第88図　遺構平面・断面図２…… 129
第89図　遺構平面・断面図３…… 130
第90図　遺構平面・断面図４…… 131
第91図　土器実測図１…… 133
第92図　土器実測図２…… 134
第93図　土器実測図３…… 136
第94図　土器実測図４…… 137
第95図　石器実測図１…… 140
第96図　石器実測図２…… 141
第97図　石器実測図３…… 142
第98図　竪穴住居の方向と最大傾斜線との関係
…… 147
Ⅳ．宮ノ前遺跡
第99図　遺跡位置図…… 156
第100図　遺跡地形図……157
第101図　調査区位置図……158
第102図　ＳＫ１実測図……158
第103図　第１遺構面平面図…… 159～160
第104図　第３遺構面平面図…… 161～162
第105図　第４遺構面平面図…… 163～164
第106図　第５遺構面平面図……165
第107図　Ａ地区中央部南北土層断面図……166
第108図　縄文・弥生時代遺構配置図……167
第109図　ＳＨ２・３実測図……168
第110図　ＳＨ４・５実測図……169
第111図　飛鳥時代遺構配置図……170
第112図　ＳＨ８実測図……171
第113図　ＳＨ６・７実測図……171
第114図　ＳＨ９～11実測図……172
第115図　ＳＢ12・13,ＳＤ17 実測図……173
第116図　ＳＢ14実測図……174
第117図　ＳＤ15・16実測図……174
第118図　中世遺構配置図……175
第119図　ＳＢ18・19, ＳＥ20,ＳＫ24実測図… 176
第120図　ＳＤ28実測図……177
第121図　ＳＥ32～34実測図……178
第122図　ＳＢ29～31,ＳＫ42 実測図……179
第123図　ＳＫ36・37遺物出土状況図…… 180
第124図　ＳＤ26・50・51実測図…… 180～181
第125図　ＳＤ27実測図……181
第126図　ＳＥ52・53実測図……182
第127図　土坑実測図……184
第128図　縄文時代の遺物実測図……185
第129図　竪穴住居出土遺物実測図１……186
第130図　古墳時代の遺物実測図……187
第131図　竪穴住居出土遺物実測図２……189
第132図　包含層出土遺物実測図１……191
第133図　包含層出土遺物実測図２……192
第134図　包含層出土遺物実測図３……193
第135図　井戸・土坑出土遺物実測図……195
第136図　溝出土遺物実測図１……197
第137図　溝出土遺物実測図２……198
第138図　井戸･包含層･ピット出土遺物実測図　199
第139図　包含層・ピット出土遺物実測図……201
第140図　墨書土器実測図……202
第141図　土製品・木製品・石製品・鉄製品実測図
…… 203
第142図　時期不明遺物実測図……204
第143図　Ｂ地区平面図・土層断面図……205
第144図　Ｂ地区出土遺物実測図……206
第145図　Ｃ地区平面図……206
第146図　石敷小祠遺構実測図……206
第147図　Ｄ地区出土遺物実測図……207
第148図　Ｄ地区平面図・土層断面図……207
第149図　納所遺跡ＳＢ６実測図……208
（付）森山東遺跡出土の漆器椀について
第150図　出土遺物実測図……247

表　目　次

Ⅰ．前言
第１表　一般国道23号中勢道路内遺跡調査経過・予定表…… 3
第２表　本書所収調査遺跡一覧表…… 5
Ⅱ．大古曽遺跡
第３表　検出層位と切り合い関係による遺構の新旧関係…… 64
第４表　土器観察表１…… 75
第５表　土器観察表２…… 76
第６表　土器観察表３…… 77
第７表　土器観察表４…… 78
第８表　土器観察表５…… 79
第９表　土器観察表６…… 80
第10表　土器観察表７…… 81
第11表　石器観察表…… 82
第12表　鉄製品観察表…… 82
第13表　木製品観察表…… 82
第14表　毛無川中流域左岸の層序…… 86
第15表　毛無川中流域右岸の層序…… 89
第16表　Ｃ地区試料番号④の花粉分析結果…… 101
Ⅲ．山籠遺跡
第17表　土器観察表１…… 143
第18表　土器観察表２……144
第19表　土器観察表３…… 145
第20表　石器観察表…… 146
第21表　竪穴住居一覧表…… 147
Ⅳ．宮ノ前遺跡
第22表　土坑一覧表…… 183
第23表　出土遺物観察表１…… 212
第24表　出土遺物観察表２…… 213
第25表　出土遺物観察表３…… 214
第26表　出土遺物観察表４…… 215
第27表　出土遺物観察表５…… 216
第28表　出土遺物観察表６…… 217
第29表　出土遺物観察表７…… 218
第30表　出土遺物観察表８…… 219
第31表　出土遺物観察表９…… 220
第32表　出土遺物観察表10…… 221
第33表　出土遺物観察表11…… 222
（付）森山東遺跡出土の漆器椀について
第34表　三重県内出土の漆器一覧表(1)…… 244
第35表　三重県内出土の漆器一覧表(2)…… 245
第36表　三重県内出土の漆器一覧表(3)…… 246
第37表　三重県内出土の漆器一覧表(4)…… 247

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

中勢バイパスは、鈴鹿市玉垣町から一志郡三雲町に至る延長33.8kmの一般国道23号のバイパスで、鈴鹿市、河芸町、津市、久居市、嬉野町、三雲町を通る。国道23号の交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用の誘導を図り、中勢地域の経済発展に寄与する事を目的に計画されたものである。

この計画地内にかかる埋蔵文化財発掘調査については、昭和57年１月に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無の照会を受けた。昭和58年度に三重県教育委員会が主体となり、関係市町村教育委員会の協力を得て、計画路線内の分布調査を行った。昭和59年５月に建設省にその結果を回答するとともに、建設省中部地方建設局三重工事事務所、県道路建設課と今後の取扱いについて協議を重ねた。

この中勢バイパスのうち津市大里窪田町の主要地方道津関線から同市大字神戸の都市計画道路雲出野田線にいたる7.2kmの区間の計画道路が中勢道路として、昭和59年４月に事業採択された。この計画道路に所在する埋蔵文化財は、遺跡数18件、遺跡面積（分布調査面積）約130,000㎡である。これらの埋蔵文化財の取扱いについては、建設省中部地方建設局三重工事事務所と三重県教育委員会文化課の間で協議し、現状保存が困難な部分については事前の発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。

昭和63年４月に建設省中部地方建設局長と三重県知事が協定を締結し、昭和63年度から平成７年度までの８年間で事前の発掘調査を実施していくことになった。

事業の実施にあたっては、作業員の安全確保と発掘調査の適正かつ円滑な推進を期して、現地作業を建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託した。これを受けて、発掘調査業務の分担に関する事項についても建設省中部地方建設局長と三重県教育委員会教育長及び社団法人中部建設協会理事長の三者で、昭和63年４月８日付けで「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結した。その後事業計画の進展に合わせて、平成３年10月31日付けで、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「協定変更書（第１回）」を、平成５年９月７日付けで「協定変更書（第２回）」を締結し、調査計画と道路建設事業との調整を図った。

2．調査の体制

調査主体は三重県教育委員会で、調査担当は昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは、県教育委員会規則により設置された三重県埋蔵文化財センターである。調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づく協定を締結して、津市教育委員会から派遣職員を得て、強力な調査体制を整えた。

本書に所収した遺跡については、昭和63～平成３・５年度に現地調査を、平成５・６年度に整理・報告書作成業務をそれぞれ実施したが、その体制は以下のとおりである。

・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県教育委員会文化課（昭和63年度）
　　三重県埋蔵文化財センター（平成元年度以降）

〔昭和63年度〕

文化財第二係長　伊藤久嗣
主査　　吉水康夫
主事　　増田安生
主事　　浅生悦生（津市教育委員会から派遣）
臨時調査員　和気清章・油田秀紀
調査協力者　宮澤織江・新井ゆう子・森　貴子
　　谷口裕美・園田純子・陰山誠一
　　粂敏明・若松剛・川辺光則
　　下井則幸・奥山テルヨ・畑ひろ子
調査指導　　八賀　晋（三重大学人文学部）

第１図　中勢道路（８・９・10工区）内遺跡位置図（１：50,000）

（国土地理院１：25,000　椋本・白子・津西部・津東部）

工区		遺跡名	調査対象面積(㎡) 範囲確認調査	本調査	調査年度 昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9
6工区	6	稲生遺跡	185	2,100				範	2,100					
	7	南谷遺跡	176	1,300				範	1,300					
	8	間瀬口遺跡	96	−					範					
	9	拝原遺跡	64	−					範					
	10	高井A遺跡	96	(4,700)					範			4,500	200	
8工区	18	丸市遺跡	128	−						範				
	19	山王遺跡	128	−						範				
	20	内垣内遺跡	128	−						範				
	21	天堤古墳	55	−						範				
	22	河崎遺跡	256	−						範				
	23	六大A遺跡	352	〔13,020〕						範	範	8,830	4,190	
9工区	24	六大B遺跡	456	26,235	範		17,525	3,420	範3.350	1,270	670			
	25	橋垣内遺跡	176	12,000	範	7,000	4,925	75						
	26	大古曽遺跡	680	12,435	範		範	5,160	範240	7,035				
	27	新池2号墳		(1,000)									範1,000	
	28	新池1号墳	20	−	範									
	29	西岡古墳	70	2,000				範	2,000					
	30	西岡2号墳	30	−				範						
	31	山籠遺跡	208	1,100	範	1,100								
	32	門脇北古墳		1,100		1,100								
	33	コウゼンジ遺跡	80	−	範									
	34	宮ノ前遺跡	144	2,800	範	2,700				100				
	35	森山東遺跡	240	5,230	4,230範	1,000								
	36	太田遺跡	469	3,320	3,320範									
	37	松ノ木遺跡	144	7,800	範	7,800								
	65	長遺跡	0	(2,000)								2,000		
10工区	38	蔵田遺跡	608	〔12,800〕		範					5,600	6,810	390	
	39	位田遺跡	416	(7,100)		範							7,100	
	40	替田遺跡	176	(7,900)		範							7,900	
	41	弐ノ坪遺跡	320	(5,700)		範								5,700
	42	里前遺跡	160	(3,000)		範								3,000
	43	鎌切3号墳	−	−										
範囲確認調査			6,061		2,229	1,700	300	461	324	1,047	範		範	
本調査合計				134,640	7,550	20,700	22,450	8,655	8,990	8,405	15,100	17,500	16,590	8,700

第1表　一般国道23号中勢道路内遺跡　調査経過・予定表　　〔　〕一部調査済（　）未調査（1995.3）

工楽善通（奈良国立文化財研究所）
安田喜憲（国立国際日本文化研究センター）

〔平成元年度〕

主幹兼調査第二課長　山澤義貴
第三係長　浅生悦生（津市教育委員会から派遣）
主　事　増田安生・森川幸雄
主　事　村木一弥（津市教育委員会から派遣）
臨時調査員　竹内英昭・油田秀紀
調査協力員　青木哲哉（立命館大学）
調査補助員　横谷領子・宮澤織江・新井ゆう子
陰山誠一・清山　健・河村万里子
竹島直美・大西貴夫・川辺光則
森　貴子・谷口裕美・野間達也
江崎康裕
室内整理員　市川嘉子・畑ひろ子・小坂規美子
堀さや子・奥山晃子
調査指導　八賀　晋（三重大学人文学部）
堀場義平（三重大学教育学部）
森　勇一（愛知県埋蔵文化財センター）
磯部　克（三重県立津西高等学校）

〔平成2年度〕

次長兼調査第二課長　山澤義貴
第三係長　浅生悦生（津市教育委員会から派遣）
主　事　渡辺尚登・杉谷政樹・森川幸雄
近藤　健
主　事　村木一弥（津市教育委員会から派遣）
臨時調査員　竹内英昭・油田秀紀
調査補助員　陰山誠一・中本　淳・大西貴夫
葛山拓也・河角龍典・丸澤友加
室内整理員　市川嘉子・畑ひろ子・小坂規美子
太田浩子・森川尚子・駒田　泉
調査指導　青木哲哉（立命館大学）
岡田茂弘（国立歴史民俗博物館）
岡田　登（皇學館大学）
肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）
塩谷　格（三重大学生物資源学部）
八賀　晋（三重大学人文学部）
広瀬和久（三重県農業技術センター）
原　正之（三重県農業技術センター）
堀場義平（三重大学教育学部）
村上　隆（奈良国立文化財研究所）
森　勇一（愛知県埋蔵文化財センター）
永草康次（愛知県埋蔵文化財センター）

〔平成3年度〕

調査第二課長　新田　洋
主査兼第三係長　駒田利治
主　事　渡辺尚登・近藤　健・天野秀昭
主　事　村木一弥・山口　格（津市教育委員会から派遣）
調査補助員　中本　淳・葛山拓也・河角龍典
前田誠治
室内整理員　市川嘉子・太田浩子・小坂規美子
森川尚子・駒田　泉
調査指導　青木哲哉（立命館大学）
八賀　晋（三重大学人文学部）
冨田靖男（三重県立博物館）
山下純生（三重県立博物館）
吉田　隆（稲生神社）

〔平成5年度〕

主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第三係長　倉田直純
主　事　清水正明・本堂弘之・小菅文裕
技　師　穂積裕昌
主　事　山口　格・中村光司（津市教育委員会から派遣）
調査補助員　藤田有紀・川崎志乃・杉﨑淳子
室内整理員　市川嘉子・太田浩子・小坂規美子
伊藤友子
調査指導　青木哲哉（立命館大学）
井上喜久男（愛知県陶磁資料館）

〔平成6年度〕

主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第三係長　河北秀実
主　事　本堂弘之・山本義浩・中川　明
技　師　穂積裕昌
主　事　宮田勝功・中村光司（津市教育委

員会から派遣）
調査補助員　藤田有紀・川崎志乃・杉崎淳子
田中美穂
室内整理員　市川嘉子・脇葉輝美・太田浩子
森川絹代・小坂規美子・鈴木　妙
調査指導　置田雅昭（天理大学文学部）
金原正明（天理大学付属天理参考館）
宮本長二郎（東京国立文化財研究所）
山本輝雄（九州大学工学部）

・調査協力　津市教育委員会
・現場作業　社団法人中部建設協会

3．調査経過

大古曽遺跡、山籠遺跡、宮ノ前遺跡、コウゼンジ遺跡の発掘調査は、範囲確認調査および本調査を昭和63～平成３・５年度に実施した。以下にこれらの遺跡の調査経過を簡単に記述する。

昭和63年度は、第１次調査として、５月末から７月上旬にかけて、大古曽遺跡の範囲確認調査を行った。また平成元年１月から２月にかけて、山籠遺跡、宮ノ前遺跡、コウゼンジ遺跡の範囲確認調査を行った。

大古曽遺跡では、24カ所に試掘坑を設定したが、その結果、古墳時代後期、中世、近世にわたる集落遺跡と推定されるにいたり、この時点においては、要本調査面積を19,700㎡とした。

山籠遺跡は19カ所の試掘坑を設定したが、竪穴住居を検出し、弥生土器が出土したことから、弥生時代の集落であることが判明した。要本調査面積は1,100㎡とした。

宮ノ前遺跡は10カ所に試掘坑を設定し、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の遺構・遺物が確認され長期間にわたる集落の可能性が推定された。要本調

番号	遺跡名地区名	調査区分	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考
26	大古曽遺跡	範囲確認調査	津市一身田大古曽字山ノ口		昭和63年5月25日～7月6日		グリッド24カ所
	大古曽遺跡	範囲確認調査	津市一身田大古曽字山ノ口	300	平成2年5月7日～7月11日	森川幸雄 近藤　健	トレンチ 4×75m
	大古曽遺跡B地区	本調査	津市一身田大古曽字山ノ口	5,160	平成3年7月1日～4年1月16日	渡辺尚登・山口　格 天野秀昭	
	大古曽遺跡C地区	本調査	津市一身田大古曽字山ノ口	4,210	平成5年4月13日～11月10日	清水正明 山口　格	
31	山籠遺跡	範囲確認調査	津市河辺町字山籠		平成元年1月～2月		グリッド19カ所
	山籠遺跡	本調査	津市河辺町字山籠	1,100	平成元年12月4日～2年3月23日	増田安生 浅生悦生	
33	コウゼンジ遺跡	範囲確認調査	津市河辺町字門脇		平成元年1月～2月		グリッド4カ所
34	宮ノ前遺跡	範囲確認調査	津市長岡町字宮ノ前		平成元年1月～2月		グリッド10カ所
	宮ノ前遺跡A・B・C地区	本調査	津市長岡町字宮ノ前	2,700	平成元年4月11日～2年3月17日	増田安生 浅生悦生	
	宮ノ前遺跡D地区	本調査	津市長岡町字宮ノ前	100	平成5年4月15日～4月26日	本堂弘之 清水正明	

第２表　本書所収調査遺跡一覧

査面積は4,100㎡とした。

コウゼンジ遺跡は、分布調査時には道路計画路線外に遺物が散布していたが、事業地内は山の急傾斜地と谷湿田であり、遺物はあまりみられなかった。試掘調査の結果、耕作土から中・近世の遺物が出土しただけで、当初の推定どおり遺跡の中心は西側の事業地外と考えられ、事業地内は遺跡ではなく本調査の必要はないと判断された。

平成元年度は山籠遺跡、宮ノ前遺跡の本調査を実施した。

山籠遺跡は、調査面積が1,100㎡で、12月4日に調査を開始したが、2mを越す盛土があったために調査は予想以上に時間がかかり、終了は翌2年3月23日となった。調査の結果、弥生時代中期の竪穴住居10棟を検出し、当該期の土器・石器も出土した。現地説明会は3月3日に実施したが、約70名の参加者があった。

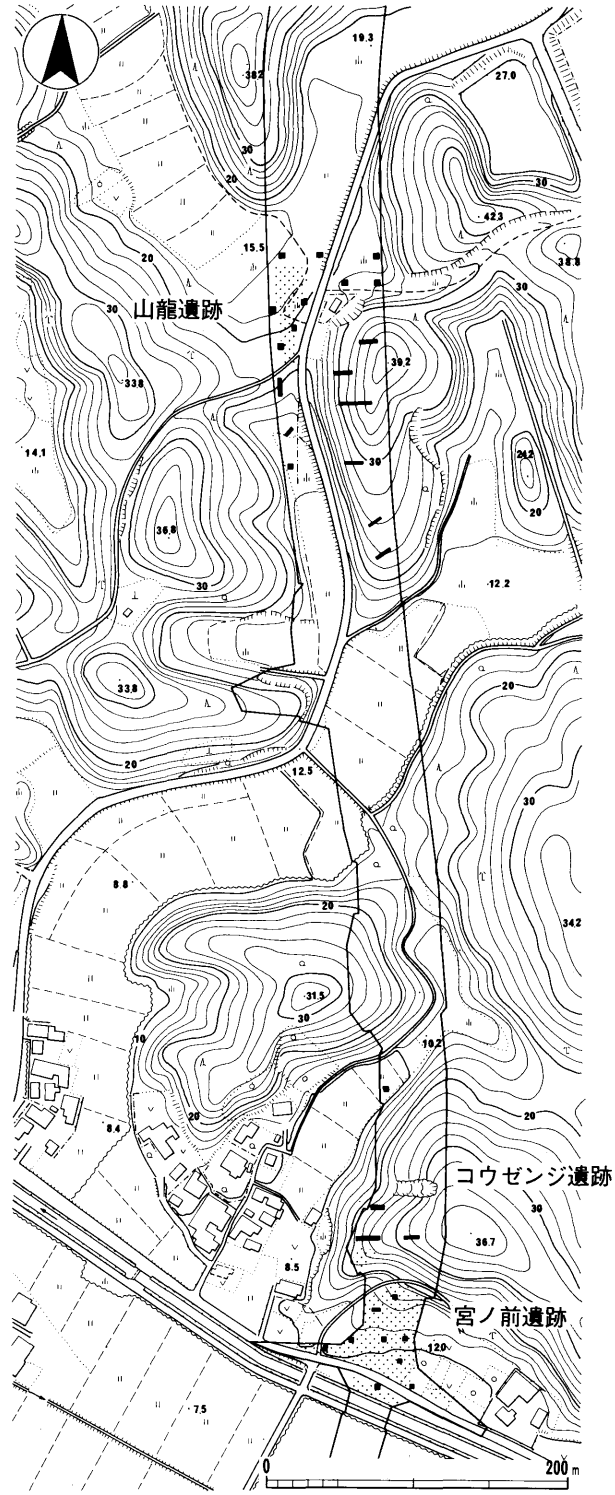
宮ノ前遺跡はA・B・C地区合計2,700㎡の発掘調査をおこなった。調査は元年4月11日に開始したが、予想以上に堆積土があったために、調査に時間がかかり、終了は翌2年3月17日となった。縄文時代から江戸時代までの長期にわたる遺構・遺物が確認された。

平成2年度は大古曽遺跡の第1次調査をおこなった。昭和63年度に一部範囲確認調査を行い遺跡縁辺部とした地域で、4×75mのトレンチ調査を行い、土層断面調査とプラントオパール分析を実施した。その結果、大古曽遺跡の最終的な本調査対象面積を14,200㎡と決定した。

平成3年度は大古曽遺跡B地区で、5,160㎡の調査を3年7月1日から翌4年1月16日まで実施した。遺構は、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物や鎌倉時代の土坑墓を検出し、遺物は、縄文時代から江戸時代までの長期にわたるものが出土した。

平成5年度は大古曽遺跡C地区と宮ノ前遺跡D地区の調査をおこなった。

大古曽遺跡C地区は、B地区の南に接する地区である。調査面積は4,210㎡で、5年4月13日から11月10日まで実施した。遺構は飛鳥から奈良時代の掘立柱建物を検出した。また旧石器時代の石器が出土し、津市の歴史を遡らせる資料を得ることができた。



第2図　山籠遺跡・コウゼンジ遺跡・宮ノ遺跡試掘坑位置図

宮ノ前遺跡D地区は、諸般の事情により当年度まで本調査が見送られていた地区である。100㎡程の調査であったが、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が出土した。

（河北秀実）

Ⅱ．津市一身田大古曽 大古曽遺跡

1．位置と環境

大古曽遺跡（1）は、三重県津市一身田大古曽字山ノ口に所在する。ここは伊勢湾西岸一帯に広がる伊勢平野の中央部に位置し、伊勢国と近江国の境をなす鈴鹿山脈南端部から伊勢湾に向かって南東に延びる見当山丘陵の北側縁辺部にあたる（写真1）。

調査区は、この見当山丘陵北側に刻まれた小支谷の出口に形成された、小規模な扇状地状の段丘斜面に位置する（写真4）。大古曽遺跡は周知の遺跡であり、古墳時代の遺跡と考えられてきた[①]が、中勢バイパス建設に伴う分布・試掘調査の結果、「北が緩斜面をなす丘陵を住居域にした古墳時代後期、中世、近世の複合遺跡」であり、「近世に集落があり、東に移転したという伝承も残っている」と認識されるに至った[②]。現況は水田であり、東へ向かって100mで約5mの比高差をもって傾斜している。

周辺の遺跡を概観すると、近年特に注目されるのが橋垣内遺跡（2）と六大B遺跡（3）である。橋垣内遺跡では飛鳥時代を中心とする掘立柱建物が70数棟検出され、六大B遺跡では条里推定方向とほぼ一致する奈良時代の掘立柱建物をはじめ、平安・鎌倉時代に至る計70数棟の掘立柱建物が検出された。また遺物についても、橋垣内遺跡からは円面硯・土馬・斎串等が、六大B遺跡からは和同開珎銀銭・土馬・円面硯・木簡・石帯の巡方・400点を超える緑釉陶器片が出土した。さらに六大B遺跡は平城宮跡出土木簡の「伊世国奄伎郡」（表）「久菩多里私部小［　］」（裏）の記載とも併せて“久菩多里”の官衙遺構と推定されている[③]。

2．調査の方法

調査の方法は、原則としてこれまでに行ってきた一般国道23号中勢道路の発掘調査方法に従った。

但し地区設定については、これまでの各遺跡における設定方法が必ずしも統一されていないため、今後の調査上の便宜や遺跡を記録保存するにあたっての有効性を考慮して、国土座標を用いた六大B遺跡の設定方法に倣った。

1．現地調査の方法

地区設定（座標値区分と地形区分）

調査区の設定は平面直角座標系の第Ⅵ原点からの座標値に基づいて行った。

また、調査が複数年次にわたるため、調査区全体を現状の地形区分を基にA～Cの3地区に分け、B地区を平成3年度に、A・C地区を平成5年度にそれぞれ調査した（第4図）。

大地区設定と小地区設定

座標値の100m単位を大地区の境界線とし、今回の大古曽遺跡の調査区を含む8カ所の大地区にA～Hの名称を与えた（第4図）。

さらに各大地区を南北・東西方向共に25等分し、一辺4mの小地区を設けた（第5図）。小地区の位置表示は、各大地区毎に北から南へA～Y、西から東へ1～25の記号を与え、大地区の名称と組み合わせて示した。（例：センター杭№786が所在する地区は「F－H13」となる）

遺構カードの作成

遺構の検出状況を記録するため小地区毎に1／40の略測図を作成した。記録のポイントは遺構の切り合い関係と埋土の種類・状況である。

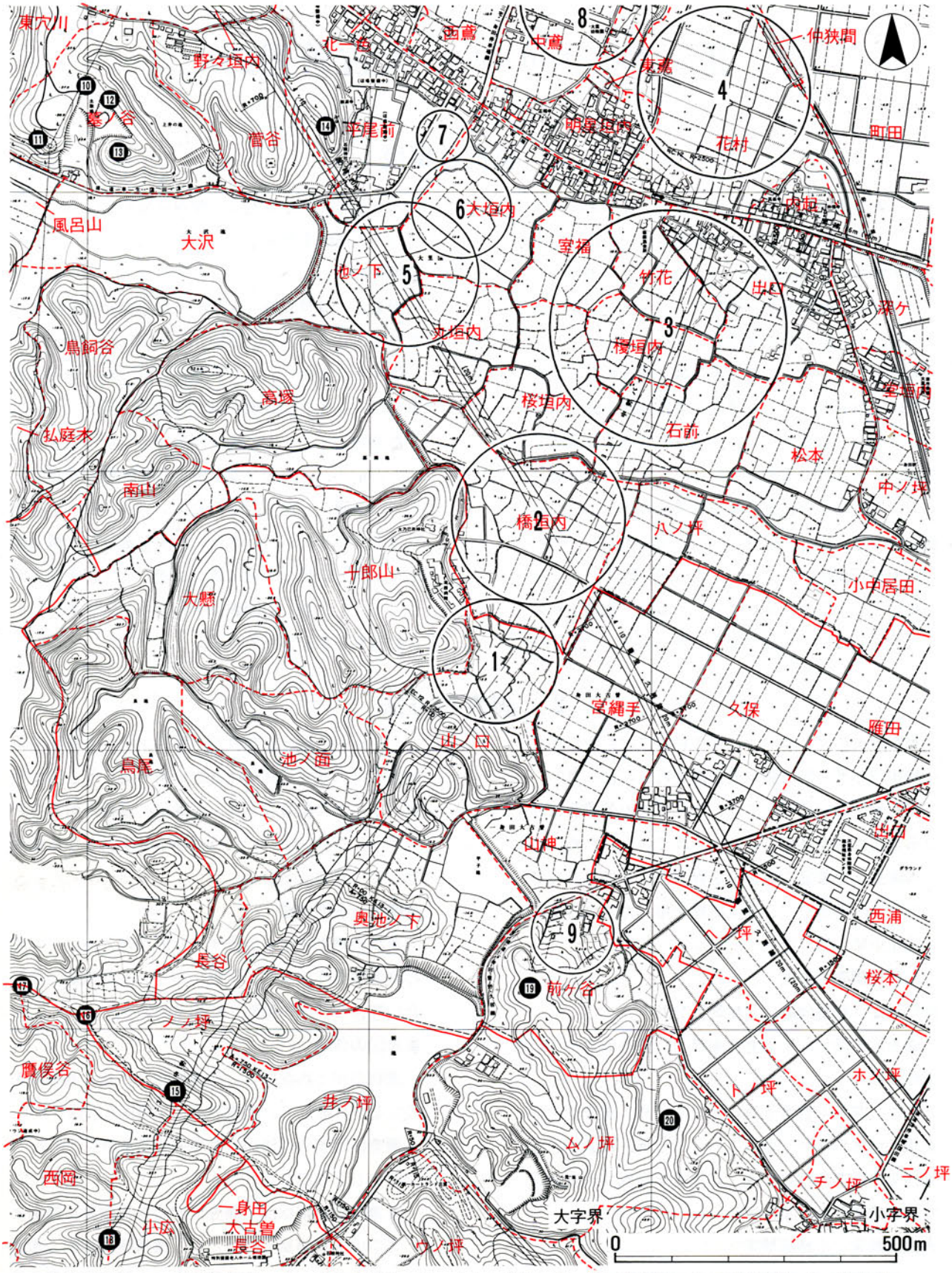
実測図の作成

遺物の出土状況図は、各遺構毎に任意に基準点を設定して作成した。遺構埋土の土層図も同様である。

調査区外壁の土層図は各壁面毎に基準点（0m点）を設定して作成した。

各遺構の完掘状況・調査区内の地形測量は原則として空中写真測量で行ったが、遺構検出面が2面認められた範囲については第1面（上層）の実測を遣り方測量及び平板測量で行った。

また、第1面の実測図を空中写真測量による第2面の遺構実測図に対応させるため、第1面の実測基



1．大古曽遺跡　2．橋垣内遺跡　3．六大B遺跡　4．六大A遺跡　5．大垣内遺跡　6．安養院跡　7．政所跡
8．中蔦遺跡　9．前ヶ谷遺跡　10～12．墓の谷古墳群　13・14．管ヶ谷古墳群　15～17．新池古墳群　18．西岡古墳
19．前ヶ谷古墳　20．犬頭山古墳

——— 大字界　- - - - - 小字界

第3図　遺跡位置図（1：10,000）

準点に対空標識を設置して第２面の空中写真測量時に写し込んで図化した。

写真撮影

遺構検出状況・土層堆積状況は主としてカラーリバーサルで、その他（作業風景・遺物出土状況・遺構完掘状況等）はカラーリバーサルとモノクロネガ共に撮影した。

通常の撮影は35㎜版で行ったが、重要遺構の遺物出土状況・完掘状況・調査区全景等には35㎜版のほかに６×９㎝×版や４×５インチ版も用いて、カラーリバーサル・モノクロネガ共に撮影した。

またこれ以外にも、現地説明会等では35㎜コンパクトカメラ（カラーネガ）や８㎜ビデオカメラを用いて状況の記録に努めた。

２．資料整理の方法

出土遺物

洗浄・注記の後、全体を遺構出土遺物とその他のもの（表採・遺物包含層等）に大別し、遺構出土遺物は各遺構毎に分類した。そしてそれぞれから実測な遺物をピックアップし、遺構出土遺物は各遺構毎に且つ遺物の種類別に、その他のものは遺物の種類別に、用紙を分けて実測した。実測済の遺物は実測図の登録番号順に遺構単位で整理・保管したが、本書に実測図を掲載した遺物は、各遺構毎にまとめて遺物番号順に整理・保管し、報告書掲載の実測図との照合を容易にしている。

実測図

遺構実測図・遺物実測図共に、各遺構毎に分類したのち全体に通し番号を付して整理・保管している。また、これとは別にマイクロフィルム撮影による整理・保管も行っている。

写真

フィルムの種類毎に撮影順にファイルして保管している。またモノクロネガ・カラーネガには検索用としてベタ焼きを添付してファイルしている。

拓本

対応する遺物実測図に貼り付けて保管している。本書の図版作成にはコピーを用いた。

３．調査の経過

大古曽遺跡にかかる中勢道路予定地内の試掘調査は昭和63年度と平成２年度の２度にわたって行われた。その結果、遺構・遺物の認められなかった部分を除き調査対象面積を14,200㎡とした。

本調査は全体をＡ～Ｃの３地区に分け、平成３年度にＢ地区を、平成５年度にＡ・Ｃ地区を調査した。

平成３年度　Ｂ地区の調査では掘立柱建物・溝・土坑墓等が検出されたほか、Ｃ地区へ続く溝が確認された。またＢ地区東側トレンチで火山灰ブロックが確認され、これを分析した結果姶良Tn火山灰であることが判明した。さらにこの分析に伴って、大古曽遺跡が立地する段丘の形成は遅くとも８万年前までには行われており、それ以後この地域の地形は安定した状態にあって、旧石器時代人の生活舞台となった可能性が考えられるとの見解を得た。

平成５年度　Ａ地区とＢ地区の間は浅い谷状地形の湿潤地となっており、Ａ地区は地形的には大古曽遺跡よりもむしろ橋垣内遺跡に繋がるものと考えられ、平成元年度に調査を行った橋垣内遺跡Ｂ地区で検出された掘立柱建物群に連なる遺構の存在が推定された。

またＣ地区ではＢ地区で検出した掘立柱建物群・溝・土坑墓群を中心とした遺構群の全容把握を課題とし、併せてＢ地区で確認した姶良Tn火山灰のより安定的な堆積状況の確認と、旧石器時代の資料発見を期待して調査を開始した。

「調査日誌」（抄）

Ｂ地区（平成３年度）

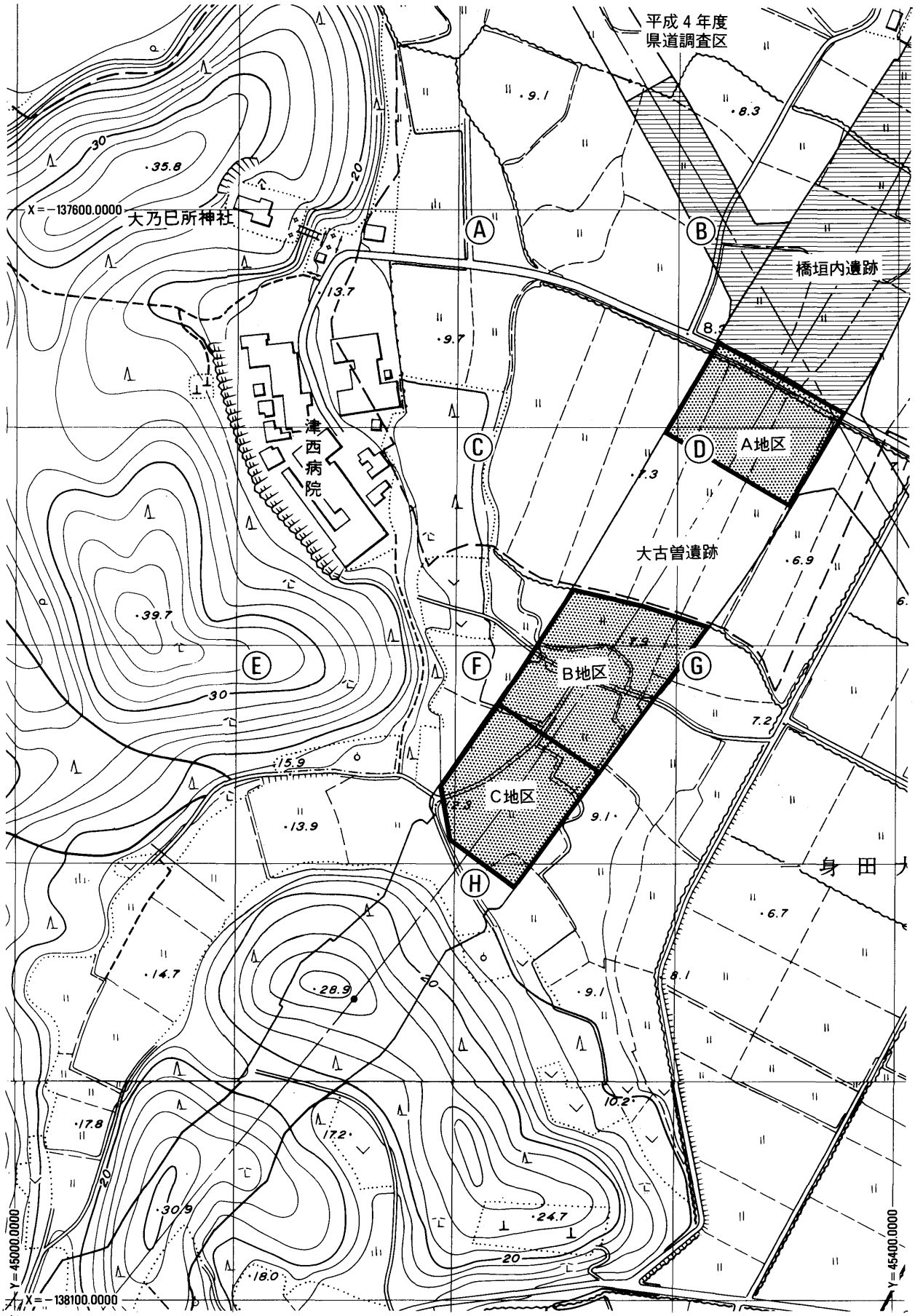
＜平成３年＞

６月17日　（社）中部建設協会と協議、表土はぎ等の予定を決定する。

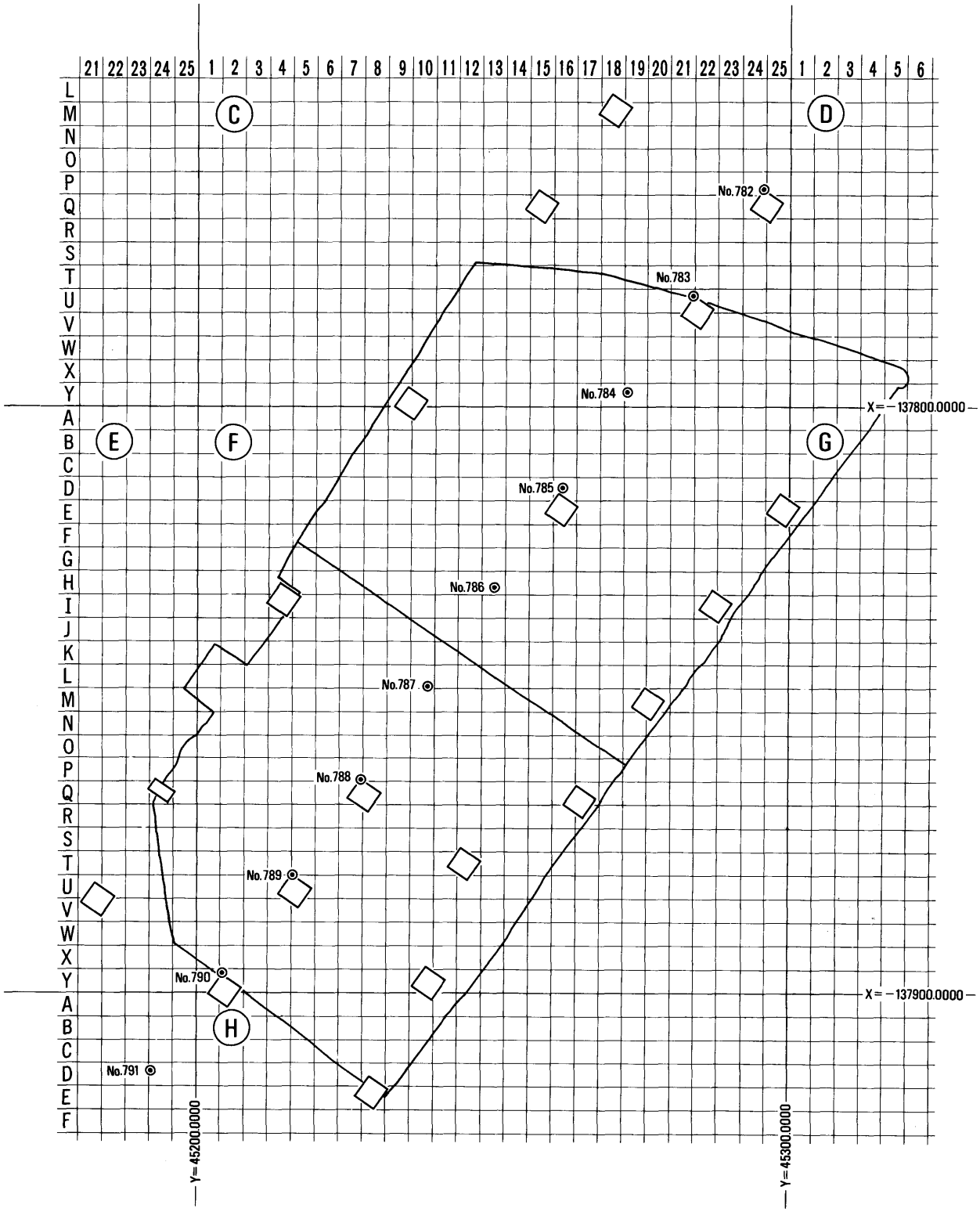
６月18日　センター杭確認。№779・786・787・790は使用可。他はすべて使用不可。

６月21日　表土はぎ開始。Ｂ地区を南北に２分割し、北側をＢ１南側をＢ２と仮称、表土はぎはＢ１のみ行う。

７月１日　地区杭設定。
手掘り開始。調査区東側に沿ってトレンチを設定。表土上面より約１ｍ掘り下げる。雨天のため15:30 頃作業中止。



第４図　調査区（大地区）設定図（1：2,500）



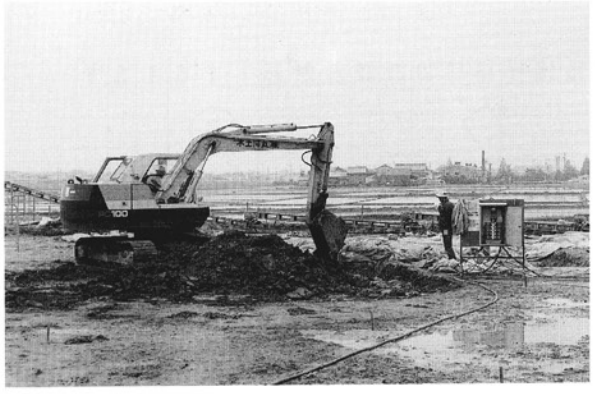
第５図　調査区設定図（１：1,000）

７月３日　Ｂ１地区東側（トレンチ沿い幅約３ｍ）を黒色泥土層上面まで掘り下げる。これより西側は耕作土の１層下で遺構検出を行う。

７月５日　雨天のため発掘作業中止。トレンチの排水作業のみ行う。

７月８日　Ｂ１地区の外周に沿って排水溝を掘る。同時に遺構検出レベルの再確認を行う。

７月10日　遺構カード作成開始。終了後すぐに遺構埋土を掘りはじめる。



表土はぎ（Ｃ地区）

7月12日　Ｂ１地区中央部南側の遺物包含層より石鏃１点出土。チャート製、完形。

7月17日　Ｂ１地区中央部南端でピット多数検出。径約10～30㎝。埋土は暗灰色と黒褐色の２種あり。後者が前者を切っている場合が多い。Ｂ１地区西側も遺構検出開始。

7月18日　Ｂ１地区遺構検出つづき。突然の雨により10:00で作業中止。11:00より現場プレハブで安全講習会を実施。加えて近藤主事による歴史講座を行う。内容は日本史の時代区分とそれに対応する中勢道路内の遺跡について。

7月19日　Ｂ１地区東側は遺構検出面が複数認められることを確認。検出済遺構の実測について駒田係長と打合せ。

7月22日　Ｂ１地区西側遺構検出つづき。灰色土上面では遺構なし。暗灰色土上面まで掘り下げる。

7月23日　レベル基準杭をＢ１北東隅に設置。Ｂ１・Ｂ２境の農道部分の表土はぎを行う。

※この頃Ｂ１地区東壁に火山灰ブロックを確認。分析用サンプル採取。

7月31日　調査第２課会議のため作業中止。

8月１日　Ｂ１地区東側完掘状況撮影。

8月８～12日　Ｂ１地区東側第１遺構面実測。

※この頃Ｂ１地区西側で牛の足跡を検出。

8月26日　高田高校地歴部体験発掘（第１日）。中勢道路内の遺跡を概説。終了後現場作業に入り、遺構検出を行う。

8月27日　高田高校地歴部体験発掘（第２日）。現場作業続き。この日に限って何も出ない。

体験発掘（Ｂ地区）

9月３日　午後から三者協議を行う。

9月10日　Ｂ１地区中央部の黒褐色土層上面で検出した溝数条を平板測量。

9月11日　平板測量つづき。終了後、黒褐色土層を除去し黄褐色土層上面で遺構検出を行う。

10月14日　三重県立博物館の冨田館長・山下課長による足跡の鑑定。牛の足跡であることが確定。

10月15日　足跡の写真撮影。

10月21日　三重テレビの取材を受ける。

10月22日　Ｂ１地区南壁際の土坑は土坑墓と判明。

10月24日　足跡を石膏で型取りする。

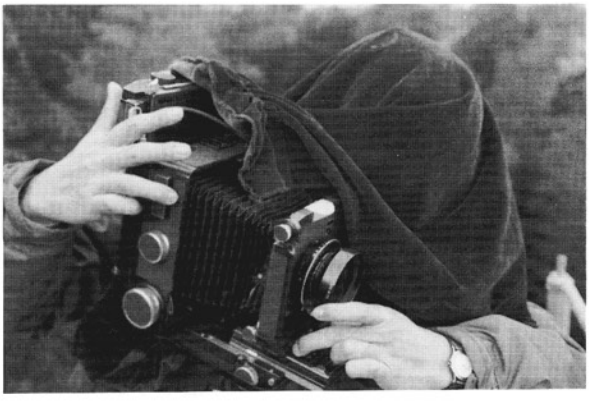
11月14日　一身田小学校が現場見学。約100 名。

12月３日　Ｂ２地区南東側で掘立柱建物検出。

12月24日　発掘作業終了。

＜平成４年＞

1月13日　航空写真測量のための掃除開始。掃除が終了した遺構から完掘写真を撮影する。



遺構完掘状況の撮影（Ｂ地区）

1月16日　航空写真測量。航測終了後、Ｂ地区全景・

掘立柱建物・土坑墓の写真撮影。

1月18日　14：00～現地説明会。

2月20日～21日　立命館大学青木講師による地質調査。B1地区東壁採取の土壌サンプルを見てもらい火山灰であることが確認される。

2月24日　掘立柱建物の柱穴の断ち割り・写真撮影・実測を行う。現地調査終了。

※B1地区東壁の土壌サンプルを分析した結果、姶良Tn火山灰であることが確認される。

現地説明会（B地区）

C地区（平成5年度）

＜平成5年＞

4月13日　表土はぎ開始。

4月19日　地区杭設定。

4月20日　手掘り開始。

4月27日　調査区北西側（第1面）遺構検出・写真撮影終了。遺構は検出されず。

4月28日　調査区南側遺構検出開始。同時に南壁をけずり、排水溝を掘る。

5月13日　調査区南側にローリングタワー3段を設置。撮影・検出状況の観察・記録用とする。

5月20日　調査区南東部で掘立柱建物2棟検出。

6月1日　SK1でチャート製フレイク3点出土。旧石器出土の可能性を考慮し、埋土のふるい掛けを行う。

6月2日　SD10遺物出土状況の実測に中村主事の応援を得、無事終了。

6月8日　SK1でさらにチップを2点発見。SD1～7の検出開始。

6月11日　建設省島村専門官、埋蔵文化財センター伊藤主幹・倉田主査が現場を視察。

6月16日　SD1～2にトレンチを設定。土器片出土。

6月21日　埋蔵文化財センター若林次長・新田課長・倉田主査が現場を視察。

7月19日　調査風景ビデオ撮影。

7月21日　SD1でナイフ形石器が出土、旧石器の存在が確認される。

7月28日　これまでに出土した石器を作業員に見せながら、石器調査の注意事項を説明。

8月5日　調査区南東部（第1面）の遺構実測完了。

8月6日　雨天のため現場作業中止。現地説明会の準備を行う。

8月7日　14:00 ～現地説明会（A地区も）。雨天にもかかわらず約130 名が参加。

8月23日　高田高校体験発掘（第1日）。大古曽遺跡の概要説明の後遺構検出を行う。SD3の底でフレイク多数出土。

8月24日　高田高校体験発掘（第2日）。昨日検出した遺構を掘る。終了後に現時点での調査成果の説明とQ＆A。

8月26日　SD3の底で有舌尖頭器出土。

遺構掘削作業風景（C地区）

8月27日　調査区内完掘。航空写真測量のための掃除開始。

9月1日　航空写真測量（A地区も）。14:00 ～調査第2課会議。A・C地区を視察。調査状況の説明を行う。

9月2日　全景写真撮影。

9月17日　トレンチ延長。分層・写真撮影・実測終了。遺構検出面より約1m下で火山灰ブロックを含む層を確認。

9月20日　調査区東壁実測終了。

9月29日　航測素図現地校正終了。調査区南壁とトレンチで土壌サンプル採取。

10月15日　東側拡張区遺構検出開始。

10月19日　東側拡張区遺構検出終了。

10月22日　SD１とSD９の切り合いを再度確認。SD１がSD９を切っていると判断。

10月26日　東側拡張区完掘。写真撮影終了。

10月28日　西側拡張区完掘。写真撮影・遺構実測終了。

10月29日　西側拡張区埋め戻し完了。東側拡張区（第１面）遺構実測終了。

11月１日　東側拡張区第２面遺構検出開始。SD３のつづきを検出。写真撮影後掘り下げる。底で石鏃１点フレーク数点出土。土器等はなし。出土地点記録後、完掘。

11月２日　東側拡張区第２面実測終了。拡張区北・東壁実測終了。

11月９日　立命館大学青木講師による地質調査（第１日）。調査区東壁沿いにトレンチ２カ所設定。先に行ったＡ地区のトレンチ調査では火山灰を確認。

11月10日　立命館大学青木講師による地質調査（第２日）。南側トレンチ底近くで腐食物を含む層を確認。土壌分析用のサンプル採取。

東壁南端部、遺構検出面より数10cm下で腐食物を含む層を確認。土壌分析用のサンプル採取。現地調査終了。

※採取した土壌サンプルの分析を業者に委託する。

地質調査（Ｂ地区）

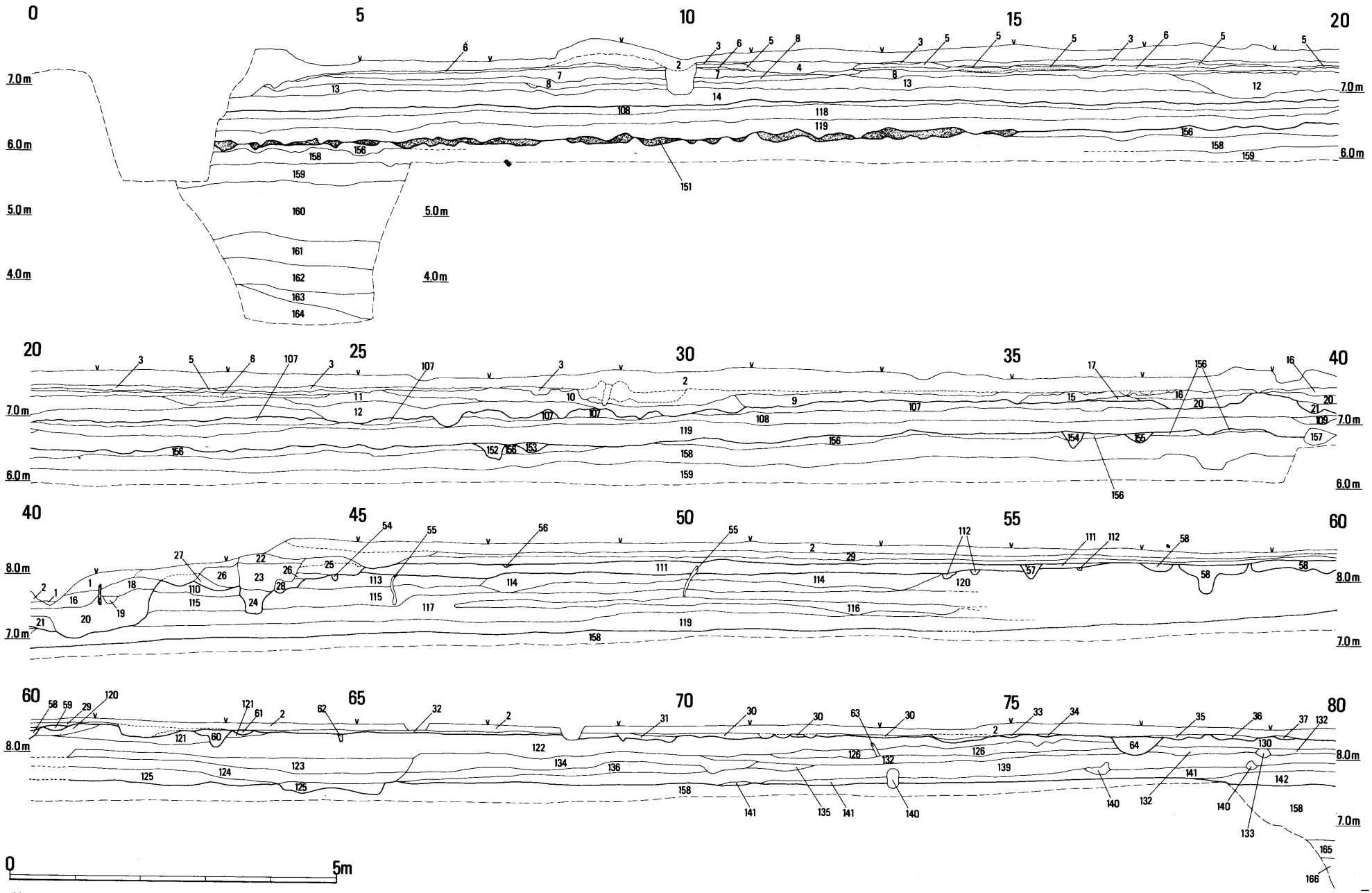
4．層　序

調査区内の基本層序は、Ⅰ．耕作土（５～20cm）、Ⅱ．黄灰色シルト・黒褐色粘質土互層（遺物包含層20～40cm）、Ⅲ．暗黄灰色粘質土または黒褐色シルト（遺構基盤層５～50cm）である。しかしⅠ層とⅡ層の間には水田造成に伴う灰色シルトの盛土がみられる場合が多く、Ⅱ層の遺物包含層とⅢ層の遺構基盤層の状況も必ずしも一定せず、上に示した基本層序と異なる場合が少なくない。そこで以下に調査区とその周辺の地形も含めて土壌の堆積状況を記述し、欠を補いたい。

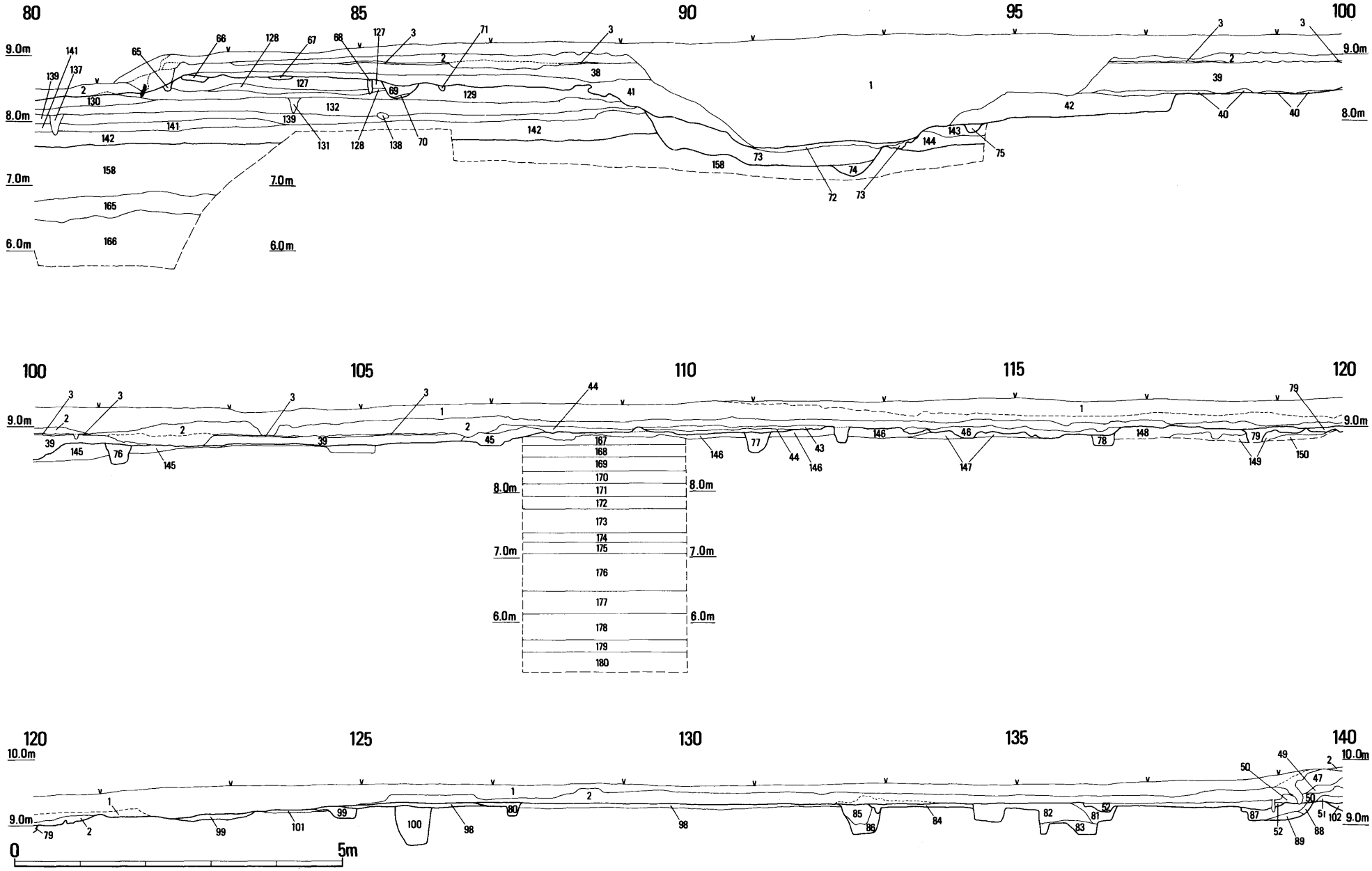
調査区は東へ下る扇状地上にあり、現在は階段状の水田面が広がっている。調査区外壁の土層を観察すると、現在の耕作土の下には薄い整地土層が複数みられ、水田の造成と拡大が繰り返し行われた様子がわかる。現在の耕作土からは、縄文時代の石鏃から近・現代の陶磁器類に至る多種多様な遺物が出土している。

耕作土とこれに伴う盛土の下には西の谷から繰り返し流入した土壌が扇状地の地形に沿って緩やかに傾斜しながら堆積し、数次にわたって遺物包含層を形成している。これら一連の自然堆積層は先に述べた階段状の水田造成によってかなりの削平を受けているため、調査区内における各層の堆積状況は断続的にしか追うことが出来ないが、基本的には自然流路の氾濫によるとみられる黄灰色シルトと、自然流路がやや安定した時期に形成されたとみられる有機質を多く含んだ黒褐色粘質土が繰り返し堆積したものと考えられる。このことは、これら自然堆積層からの出土遺物が比較的少量であることや、時期的に異なる遺物が混在している状況からも窺える。

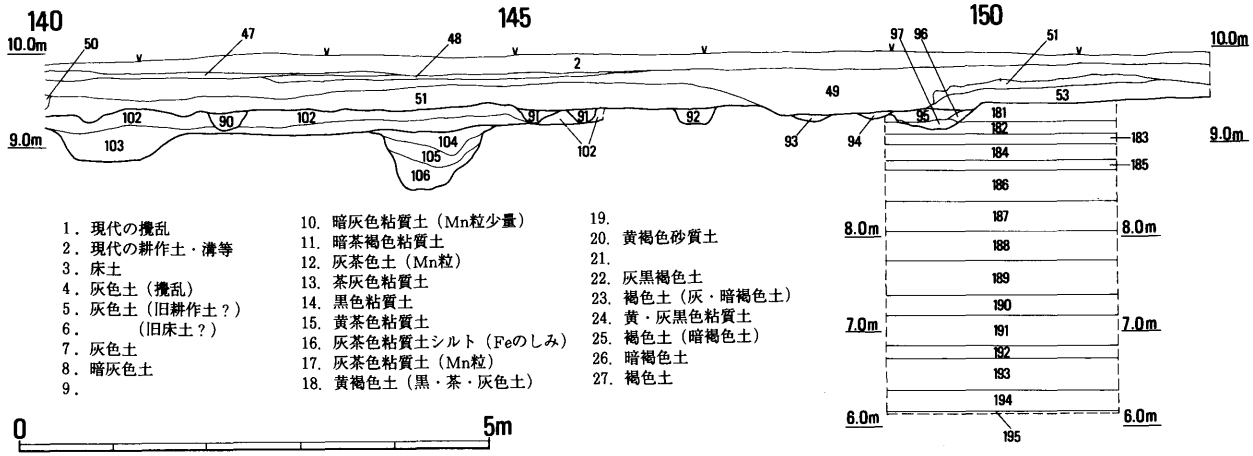
遺構検出面はＢ・Ｃ両地区とも２面存在する。Ｂ地区では調査区東部において第14層上面（第６図）と第108層上面（同上）で、Ｃ地区においては第102層上面（同上）と第103 層下面（同上）で確認された。ただしＢ地区の第１遺構面（写真５）は黒色粘質土上面であり、遺構埋土の土質・色調がこれに酷



第６図　調査区東壁土層図１（１：80）

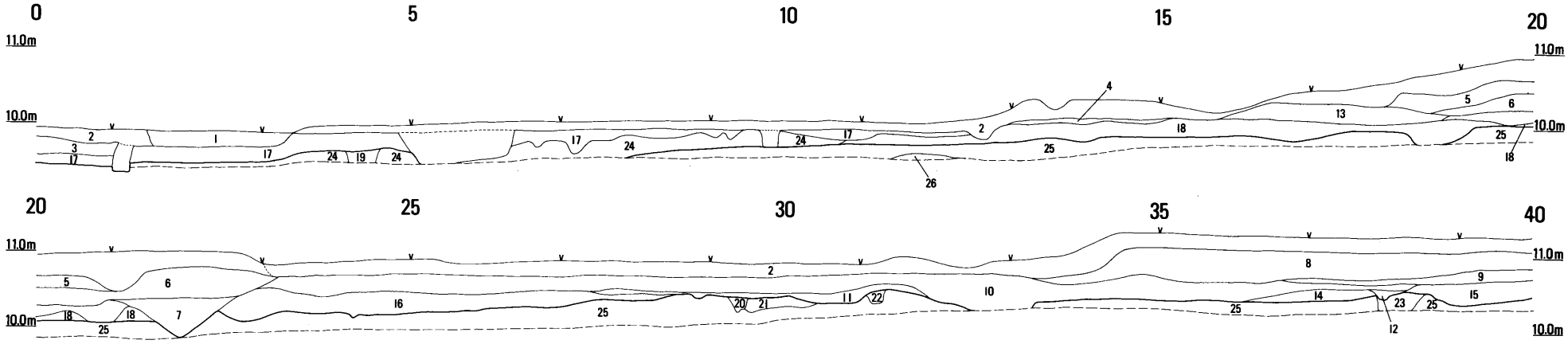


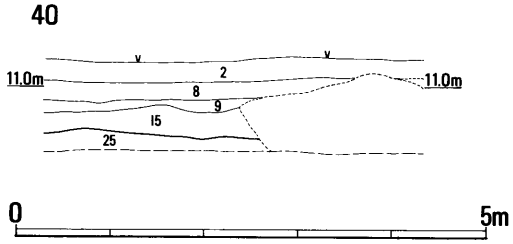
第７図　調査区東壁土層図２（１：80）



1．現代の攪乱
2．現代の耕作土・溝等
3．床土
4．灰色土（攪乱）
5．灰色土（旧耕作土？）
6．　　（旧床土？）
7．灰色土
8．暗灰色土
9．
10．暗灰色粘質土（Mn粒少量）
11．暗茶褐色粘質土
12．灰茶色土（Mn粒）
13．茶灰色粘質土
14．黒色粘質土
15．黄茶色粘質土
16．灰茶色粘質土シルト（Feのしみ）
17．灰茶色粘質土（Mn粒）
18．黄褐色土（黒・茶・灰色土）
19．
20．黄褐色砂質土
21．
22．灰黒褐色土
23．褐色土（灰・暗褐色土）
24．黄・灰黒色粘質土
25．褐色土（暗褐色土）
26．暗褐色土
27．褐色土
28．暗褐色砂質土
29．茶色土
30．黄褐色土（茶褐色土）
31．淡褐色砂質土（暗褐色土）
32．30に同じ
33．
34．
35．
36．
37．
38．2.5Y 5／1 黄褐色シルト
39．2.5Y 6／1 黄灰色シルト（Fe少量、Mn粒）
40．7.5YR4／2 灰褐色粘土質シルト（Fe少量、Mn粒）
41．7.5YR4／2 灰褐色シルト
42．7.5YR3／3 暗褐色シルト質粘土（Fe柱状のしみ、Mn粒）
43．2.5Y 5／2 暗灰黄色シルト
44．2.5Y 7／2 灰黄色シルト
45．10YR5／2 灰黄褐色シルト（Fe）
46．10YR6／1 褐灰色粘土質シルト（粘質）
47．10YR6／6 明黄褐色シルト（Fe）
48．10YR4／1 褐灰色砂質シルト（Fe、Mn）
49．10YR3／3 暗褐色シルト（Fe、Mn粒）
50．10YR4／1 褐灰色シルト（Fe、Mn粒）
51．7.5YR3／2 黒褐色シルト（Fe、Mn粒）
52．10YR4／2 灰黄褐色シルト（Fe少量、炭化粒）
53．10YR4／3 にぶい黄褐色シルト（Fe、Mn粒）
54．暗褐色砂質土
55．褐色粘質土
56．
57．暗褐色土
58．57に同じ
59．淡褐色砂質土
60．57に同じ
61．明褐色砂質土（茶褐色土）
62．黄褐色土（茶褐色土）
63．59に同じ
64．
65．
66．暗褐灰色砂質土
67．
68．褐灰色砂質土
69．灰色砂質土
70．暗灰色土
71．
72．10YR5／3 にぶい黄褐色砂
73．10YR4／1 褐灰色シルト（粘質）
74．7.5YR2／1 黒色粘土
75．7.5YR4／2 灰褐色粘土質シルト
76．10YR6／2 灰黄褐色シルト（Mn粒）
77．5YR4／1 褐灰色シルト（Mn粒）
78．7.5YR4／1 褐灰色シルト（やや粘質）
79．10YR4／2 灰黄褐色シルト（やや粘質）
80．10YR4／2 灰黄褐色シルト（Fe）
81．10YR6／2 灰黄褐色シルト（Fe、Mn少量）
82．7.5YR4／2 灰褐色シルト（Fe柱状のしみ、Mn粒）
83．7.5YR6／3 にぶい褐色粘土質シルト（やや粘質、Fe、Mn粒）
84．10YR5／3 にぶい黄灰色シルト（Fe）
85．7.5YR3／2 黒褐色シルト
86．83に同じ
87．2.5Y 5／1 黄灰色細砂（Fe）
88．10YR4／2 灰黄褐色シルト（Fe柱状、Mn粒）
89．10YR6／1 褐灰色細砂（Mn粒）
90．10YR3／2 黒褐色シルト（やや粘質、炭化物含む、Fe柱状、Mn粒）
91．7.5YR4／2 灰褐色細砂（Fe）
92．7.5YR4／2 灰褐色粘土
93．10YR5／1 褐灰色粘土質シルト（Fe）
94．10YR4／2 灰黄褐色粘土質シルト（Fe、Mn少量）
95．10YR5／2 灰黄褐色粘土質シルト（粘質、Fe、Mn粒）
96．10YR5／3 にぶい黄褐色細砂（Fe、Mn粒）
97．10YR5／1 褐灰色細砂（Fe柱状）
98．10YR3／2 黒褐色シルト（Fe柱状、Mn粒）
99．7.5YR4／2 灰褐色シルト
100．10YR2／2 黒色シルト質粘土
101．10YR3／2 黒褐色シルト（Fe柱状、Mn粒）
102．10YR6／2 灰黄褐色シルト（粘質、Fe柱状、Mn粒
103．10YR5／2 灰黄褐色シルト（やや粘質、Fe）
104．10YR7／1 灰白色シルト（Fe）
105．10YR7／3 にぶい黄橙色砂（Fe少量）
106．2.5Y 6／1 黄灰色砂
107．淡黄色砂質土
108．暗黄灰色粘質土
109．
110．暗褐色土
111．褐色土
112．暗褐色土
113．褐色砂質土
114．褐色砂質土
115．黒色土
116．暗褐色土
117．明褐色砂質土
118．暗黒灰色粘質土
119．黒灰色粘質土
120．淡褐色砂質土
121．褐色土
122．明褐色砂質土
123．黒褐色土
124．
125．黄灰色砂（粘土まじり）
126．明褐色土
127．
128．
129．黄灰色砂質土
130．黒色土
131．
132．
133．淡灰褐色土
134．
135．
136．淡褐色土
137．灰白色細砂
138．137に同じ
139．淡褐色土
140．灰白色細砂
141．褐色粘土
142．2.5YR2／1 赤黒色シルト質粘土
143．7.5YR5／2 灰褐色粘土
144．7.5YR5／1 褐灰色粘土
145．5YR3／1 黒褐色シルト（やや粘質）
146．7.5YR2／2 黒褐色シルト（Fe、Mn）
147．7.5YR6／1 褐灰色砂
148．10YR5／2 灰黄褐色シルト（やや粘質土）
149．10YR7／2 にぶい黄橙色砂
150．7.5YR4／2 灰褐色粘土質シルト（Fe）
151．ＡＴ火山灰
152．黒灰色粘土
153．暗灰色粘土
154．暗灰色粘土（炭化物粒）
155．154に同じ
156．黄灰色シルト質粘土
157．黒灰色粘土
158．（淡紫）灰色細砂質粘土
159．黄灰白色シルト質粘土
160．黄灰白色砂まじりシルト質粘土
161．青灰色シルト質細砂
162．青灰色細砂
163．青灰色粗砂・極細砂
164．青灰色砂礫（径２cm以下の礫）
165．灰白色シルト質砂（細砂）
166．灰白色シルト質粘土（砂まじり）
167．褐灰色シルト質細砂
168．暗褐色シルト
169．暗灰色細砂質シルト
170．褐灰色シルト質細砂
171．褐灰色細砂質シルト
172．淡紫灰色シルト
173．灰色細砂質シルト
174．灰色細砂質シルト
175．灰色シルト質細砂
176．灰色細砂質シルト
177．赤褐色細砂
178．灰色細砂質シルト
179．青灰色シルト質細砂
180．青灰色細砂質シルト
181．暗褐灰色シルト質細砂
182．黄灰色シルト質細砂
183．褐灰色シルト質細砂
184．暗灰色細砂質シルト
185．褐灰色細砂質シルト
186．灰色シルト質細砂
187．灰色細砂質シルト
188．褐灰色シルト
189．灰白色細砂質シルト
190．灰白色シルト
191．灰色シルト質細砂
192．青灰色細砂質シルト
193．褐灰色シルト（腐蝕物多い）
194．青灰色細砂
195．褐灰色シルト（腐蝕物多量に混入）

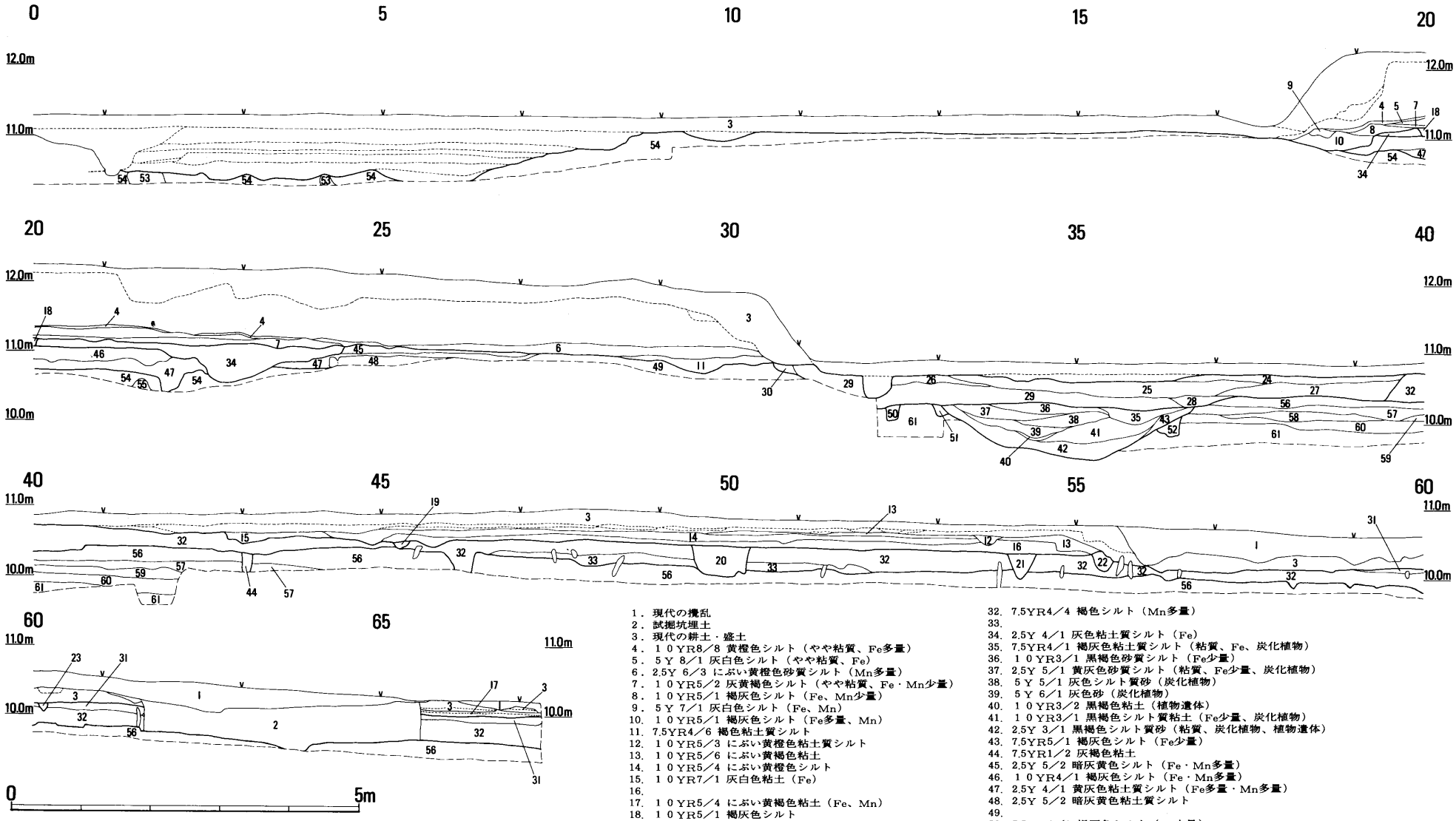
第８図　調査区東壁土層図３（１：80）





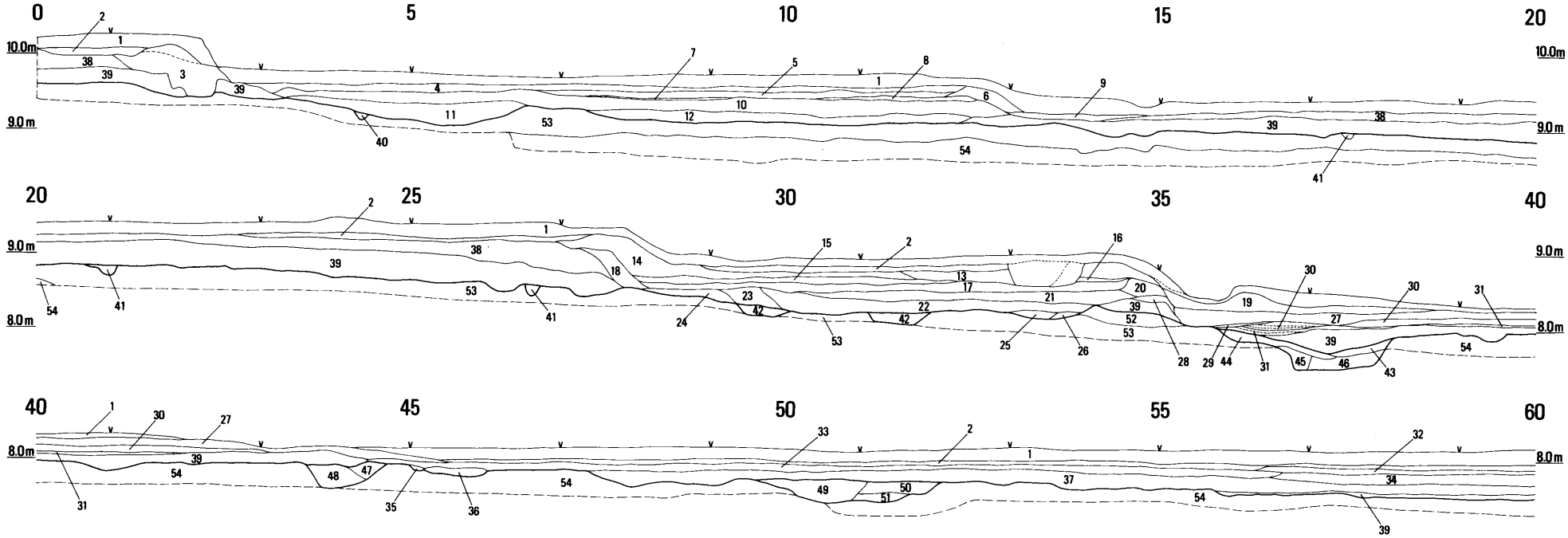
1．現代の攪乱
2．現代の耕作土・盛土
3．10YR3／3 暗褐色シルト（Fe、Mn粒）
4．2.5Y 5／1 黄灰色シルト（Fe）
5．2.5Y 6／4 にぶい黄色砂質シルト
6．2.5Y 7／2 灰黄色シルト砂質
7．2.5Y 6／1 黄灰色粘土質シルト（Fe少量）
8．5Y 6／1 灰色砂質シルト（Fe、Mn）
9．2.5Y 6／1 黄灰色粘土質シルト（Fe）
10．2.5Y 5／2 暗灰黄色砂質シルト（Fe少量）
11．2.5Y 6／1 黄灰色シルト（Fe少量）
12．7.5Y 6／1 灰色砂質シルト（Fe少量）
13．2.5Y 5／2 暗灰黄色砂質シルト
14．10YR4／2 灰黄褐色シルト
15．5Y 5／1 灰色粘土質シルト（Fe少量）
16．7.5YR4／2 灰褐色粘土質シルト
17．10YR4／3 にぶい黄褐色シルト（Fe、Mn粒）
18．2.5Y 5／1 黄灰色シルト質粘土（Fe少量、Mn多量）
19．10YR4／1 褐灰色シルト質粘土（Fe少量、Mn）
20．7.5YR3／2 黒褐色粘土
21．10YR6／2 灰黄褐色粘土質シルト
22．10YR3／1 黒褐色粘土
23．5Y 4／1 灰色粘土質シルト（Fe少量）
24．10YR5／3 にぶい黄褐色シルト（Fe少量、Mn多量）
25．N 6／1 灰色粘土

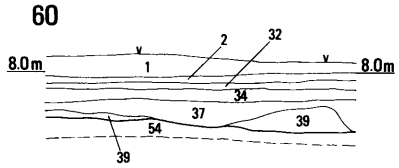
第9図　調査区（C地区）南壁土層図（1：80）



1．現代の攪乱
2．試掘坑埋土
3．現代の耕土・盛土
4．10YR8／8 黄橙色シルト（やや粘質、Fe多量）
5．5Y 8／1 灰白色シルト（やや粘質、Fe）
6．2.5Y 6／3 にぶい黄橙色砂質シルト（Mn多量）
7．10YR5／2 灰黄褐色シルト（やや粘質、Fe・Mn少量）
8．10YR5／1 褐灰色シルト（Fe、Mn少量）
9．5Y 7／1 灰白色シルト（Fe、Mn）
10．10YR5／1 褐灰色シルト（Fe多量、Mn）
11．7.5YR4／6 褐色粘土質シルト
12．10YR5／3 にぶい黄橙色粘土質シルト
13．10YR5／6 にぶい黄褐色粘土
14．10YR5／4 にぶい黄橙色シルト
15．10YR7／1 灰白色粘土（Fe）
16．
17．10YR5／4 にぶい黄褐色粘土（Fe、Mn）
18．10YR5／1 褐灰色シルト
19．7.5YR4／4 褐色粘土質シルト（Mn多量）
20．10YR3／4 暗褐色粘土
21．7.5YR3／4 暗褐色シルト
22．10YR6／2 灰黄褐色粘土（Mn多量）
23．2.5Y 5／2 暗灰黄色シルト質粘土（Fe）
24．7.5YR4／6 褐色粘土質シルト
25．10YR6／3 にぶい黄橙色シルト（やや粘質、Fe少量）
26．10YR6／2 灰黄褐色シルト（Fe多量）
27．7.5YR6／8 橙色砂質シルト
28．7.5YR5／1 灰褐色砂質シルト（Fe少量）
29．7.5YR5／1 褐灰色シルト（やや粘質、Fe少量）
30．7.5YR4／1 褐灰色シルト（Fe少量）
31．10YR4／4 褐色シルト（Mn）
32．7.5YR4／4 褐色シルト（Mn多量）
33．
34．2.5Y 4／1 灰色粘土質シルト（Fe）
35．7.5YR4／1 褐灰色粘土質シルト（粘質、Fe、炭化植物）
36．10YR3／1 黒褐色砂質シルト（Fe少量）
37．2.5Y 5／1 黄灰色砂質シルト（粘質、Fe少量、炭化植物）
38．5Y 5／1 灰色シルト質砂（炭化植物）
39．5Y 6／1 灰色砂（炭化植物）
40．10YR3／2 黒褐色粘土（植物遺体）
41．10YR3／1 黒褐色シルト質粘土（Fe少量、炭化植物）
42．2.5Y 3／1 黒褐色シルト質砂（粘質、炭化植物、植物遺体）
43．7.5YR5／1 褐灰色シルト（Fe少量）
44．7.5YR1／2 灰褐色粘土
45．2.5Y 5／2 暗灰黄色シルト（Fe・Mn多量）
46．10YR4／1 褐灰色シルト（Fe・Mn多量）
47．2.5Y 4／1 黄灰色粘土質シルト（Fe多量・Mn多量）
48．2.5Y 5／2 暗灰黄色粘土質シルト
49．
50．7.5YR4／1 褐灰色シルト（Fe少量）
51．50に同じ
52．10YR5／2 灰黄褐色シルト（Fe少量）
53．10Y 6／1 灰色シルト（灰オリーブ）
54．5Y 5／1 灰色粘土質シルト
55．
56．10YR7／1 灰白色シルト（Fe）
57．10YR6／1 褐灰色シルト（Fe少量、Mn少量）
58．10YR5／1 褐灰色シルト（Fe少量）
59．7.5YR4／2 灰褐色シルト（Mn）
60．10YR5／2 灰黄褐色シルト
61．7.5YR6／1 褐灰色シルト（Fe少量）

第10図　調査区（C地区）西壁土層図（1：80）

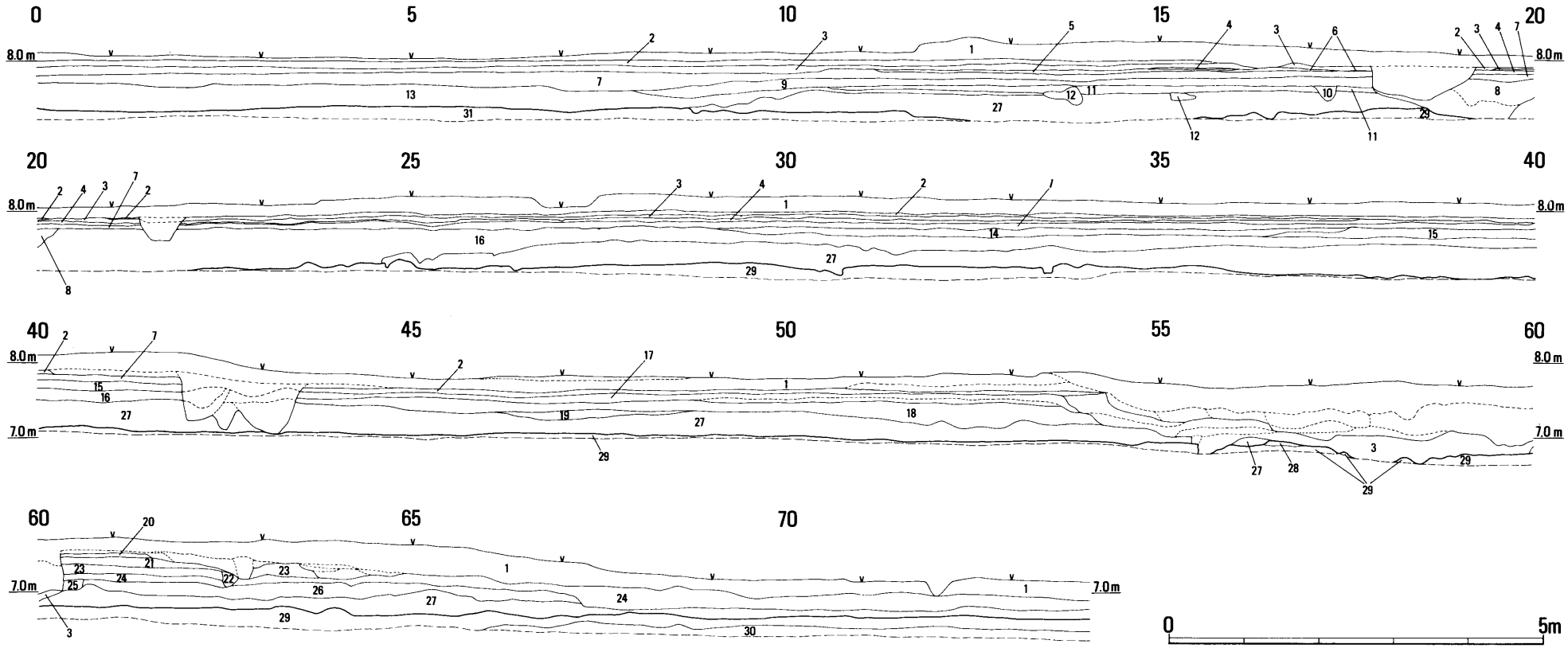




1．現代の耕作土
2．明黄褐色シルト（床土）
3．灰褐色シルト
4．明黄褐色シルト（粘質）
5．明褐灰色シルト
6．灰色土
7．黒褐色シルト
8．７に同じ
9．灰色シルト
10. 灰褐色シルト質粘土
11. 褐灰色シルト（粘質）
12. 褐灰色シルト粘質土
13.
14. 灰色シルト
15. 灰白色シルト質粘土
16. 黄灰色土
17. 灰色シルト質粘土
18.
19. 灰色土
20. 灰白色シルト
21. 灰黄色シルト
22. 褐灰色シルト（粘質）
23. 灰色シルト（粘質）
24. 灰色粘土質シルト
25. 褐灰色シルト質粘土
26. 灰色シルト（粘質）
27. 灰色シルト（粘質・旧耕土）
28. 灰色シルト
29. 明褐灰色シルト（旧床土）
30. 灰色シルト
31. 灰白色シルト（黒褐色シルト）
32. 灰白色シルト
33. 灰色シルト
34. 褐灰色シルト
35. 暗灰褐色シルト
36. 黄褐色シルト（粘質）
37. 暗褐灰色シルト
38. 灰黄褐色シルト
39. 黒褐色シルト（粘質）
40. 明黄褐色シルト（粘質）
41. 黒褐色シルト質粘土
42. 黒褐色シルト（粘質）
43. 灰色シルト質粘土
44. 黒褐色粘土質シルト
45. 黒褐色シルト質粘土（54.灰白色シルトのブロック）
46. 暗黒褐色シルト（粘質）
47. 暗黒褐色シルト質粘土
48. 暗灰褐色シルト（54. 灰白色シルトのブロック）
49. 黒褐色シルト（粘質、54. 灰白色シルトのブロック）
50. 黒褐色シルト（粘質）
51. 黒褐色シルト
52. 黒褐色シルト質粘土
53. 黄橙色砂質シルト
54. 灰白色シルト（弱粘質）

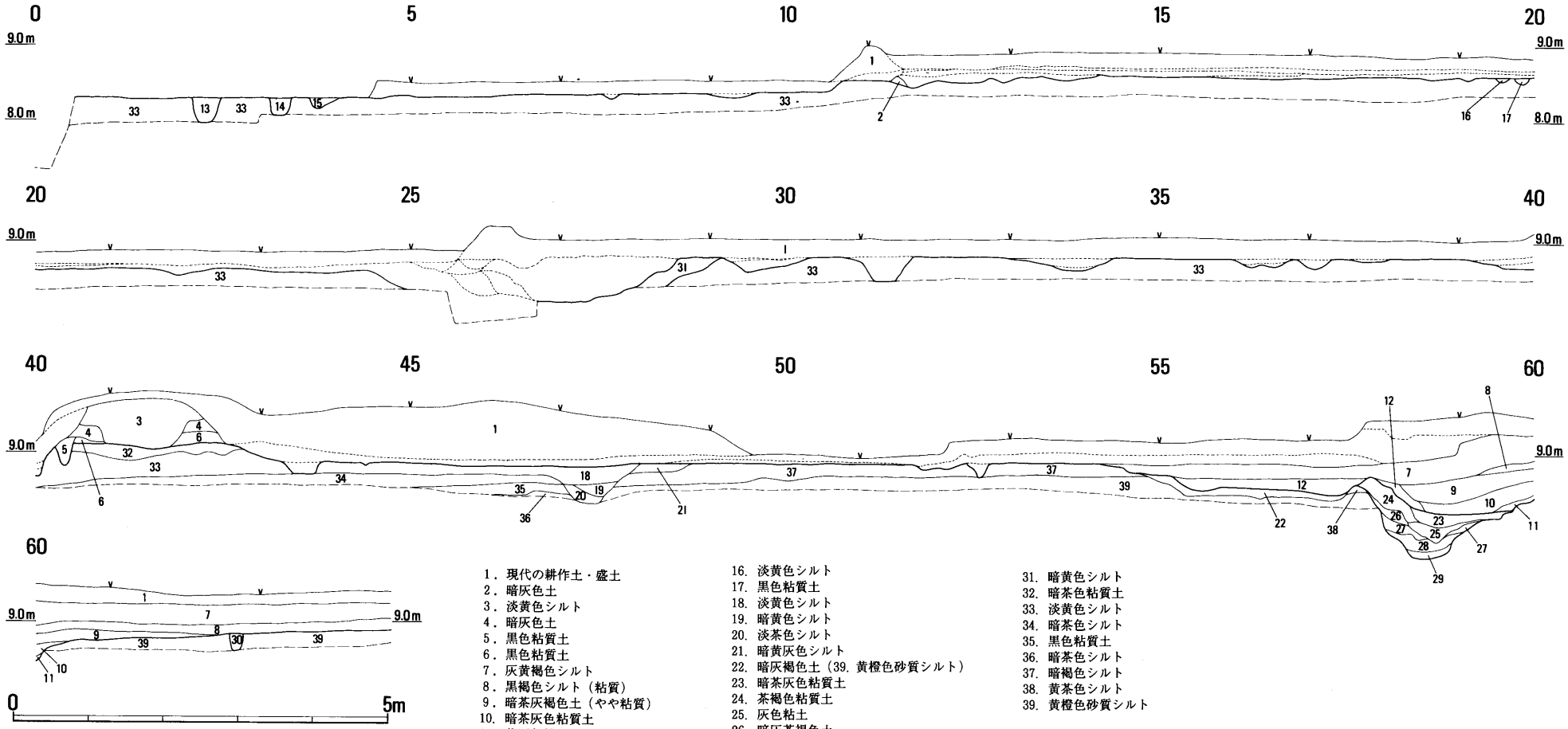
0　　5m

第11図　調査区（Ｂ地区）西壁土層図（１：80）



1．現代の耕作土
2．床土
3．灰白色シルト（旧耕土）
4．黄褐灰色シルト（旧床土）
5．灰褐色シルト
6．暗褐灰色シルト
7．褐灰色シルト
8．攪乱
9．灰褐色シルト
10．暗黒灰色シルト（灰色シルトブロック）
11．褐灰色シルト
12．黄灰色土
13．暗褐灰色シルト
14．褐灰色シルト
15．灰色シルト
16．灰褐色シルト
17．暗褐灰色シルト
18．灰色シルト
19．黒灰色シルト（弱粘質）
20．灰色シルト
21．灰黄褐色シルト
22．暗褐灰色シルト
23．明黒褐色シルト
24．灰褐色シルト
25．灰黄褐色シルト
26．暗灰褐色シルト（弱粘質）
27．黒褐色粘土質シルト
28．暗黄褐色シルト
29．黄褐色シルト
30．

第12図　調査区（B地区）北壁土層図（1：80）



1．現代の耕作土・盛土
2．暗灰色土
3．淡黄色シルト
4．暗灰色土
5．黒色粘質土
6．黒色粘質土
7．灰黄褐色シルト
8．黒褐色シルト（粘質）
9．暗茶灰褐色土（やや粘質）
10．暗茶灰色粘質土
11．茶灰色粘土
12．茶褐色粘質土
13．
14．茶褐色土
15．淡茶褐色土
16．淡黄色シルト
17．黒色粘質土
18．淡黄色シルト
19．暗黄色シルト
20．淡茶色シルト
21．暗黄灰色シルト
22．暗灰褐色土（39．黄橙色砂質シルト）
23．暗茶灰色粘質土
24．茶褐色粘質土
25．灰色粘土
26．暗灰茶褐色土
27．淡黄色粘質土
28．灰色粘土（39．黄橙色砂質シルト）
29．灰色シルト（粘質、火山灰・植物遺体微量）
30．暗茶褐色粘質土
31．暗黄色シルト
32．暗茶色粘質土
33．淡黄色シルト
34．暗茶色シルト
35．黒色粘質土
36．暗茶色シルト
37．暗褐色シルト
38．黄茶色シルト
39．黄橙色砂質シルト

第13図　調査区（Ｂ地区）南壁土層図（１：80）

似しているため、第２遺構面で確認できた遺構の中に本来第１遺構面で確認されるべきものが含まれている可能性は否定できない。これに対し、Ｃ地区で確認した第１遺構面（写真６）と第２遺構面の違いは明瞭である（第８図144ｍ地点）。

また今回の調査では、遺構検出面よりも下層の堆積状況についても多くの情報を得ることが出来た。

Ｂ地区の調査で設定した調査区東側のトレンチ北端部において、第119層と156層に挟まれてブロック状の火山灰が堆積していることが確認されたため（第６図３～15ｍ地点）、サンプルを採取し火山灰同定を行った結果、姶良Tn火山灰であることが確認された。さらにこの分析に伴って大古曽遺跡が立地する扇状地状の段丘の形成年代についても有益な情報を得た。[4]

５．遺構と遺物

Ｂ・Ｃ地区で検出された遺構は時期不明のものが多く、また複数時期にわたるとみられる遺構も存在するため、ここでは遺構を出土遺物と共に各種類毎に記述し、時期別の遺構の状況については結語で総括的に記述することとする。

また、出土遺物についての記述は形態の特徴及び成形技法の特徴に重点を置き、法量・調整技法等については遺物観察表にまとめた。

（１）溝・自然流水路

調査区内では多数の溝・自然流水路が検出された。特にＣ地区においては調査区のほぼ全面にわたって多数の流路が検出され、旧石器時代～中世にかけての各種の遺物が出土した。以下各遺構毎に概要を述べる。なお土層図中の太線は調査担当者が判断した堆積の単位を示す線である。

ＳＤ１　Ｃ地区中央部を東流する自然流水路である。７ヵ所にトレンチを設定して断面観察を行った結果、ＳＤ１は複数の流れが重複したものであることが判明した（第16・17図　土層図１～７）。遺構掘削当初は断面観察結果を基に各堆積単位毎の分層発掘に努めたが、いずれの堆積単位も後代の流路による侵食が大きく、１つの堆積単位を安定的に追うことは出来なかった。従ってここではＳＤ１全体の出土遺物を各時期毎に大別し、その概要を記述するに止める。

石器（１～18、写真33・34）　主にＳＤ１の底面に貼り付く様な状況で出土している。石材は、チャートの占める割合が高いがサヌカイトも混在し、頁岩も少量含まれる。[5] １は切出し形のナイフ形石器である。基部と刃部背面に対向調整を行っている。先端部側に素材剥片を剥離した際のバルブが明瞭に残る。灰白色の頁岩製。２はサヌカイト製の縦長剥片で下部は欠損している。上端部腹面のバルブはよく発達している。磨滅はみられない。断面形態が整った台形をしており、安定した剥片剥離技法の存在が窺える。３は台形の細石刃核である。黒色チャート製で磨滅はみられない。打面調整の後、細かい頭部調整を行っている。４はサヌカイト製のスクレイパーである。５～18はフレイク及びチップである。チャートの割合が高いがサヌカイトも混在する。

須恵器（19～52、写真35）　19～31は杯蓋である。19はＳＤ１出土遺物の中では数少ない稜を有する例であるが、残存する天井部外面に回転ヘラケズリ調整はみられない。器壁は薄く、稜から口縁部にかけてやや開き気味の形態を示す点が特徴的である。20～23は口縁端部内面にロクロナデによる斜めの面を有し、断面形態は三角形を呈する。特に21は器体全体に強いロクロナデが施されており、口縁端部内面の斜めの面もひときわシャープである。24は器壁が薄く稜の痕跡は全く残存しないが、口縁端部内面には段を有する。25は扁平なツマミを有する。26～27は断面形態が半円形に近く、成形・調整技法の省略が進んでいる。口縁端部は丸く収まる。28～29は天井部外面ヘラ切り未調整あるいは粗いナデであり、19～27に比べると口径も小さい。30は口縁部内面にカエリを有する。31は口縁端部がほぼ垂直に下がり、直線的なツマミが付く。

32～45は杯身である。32～34は口径が大きく、たちあがり部の断面形態がやや内弯気味を呈する。35～37はたちあがり部の断面形態が外反気味であり、36～37は32～35に比べて口径がやや小さい。38～39

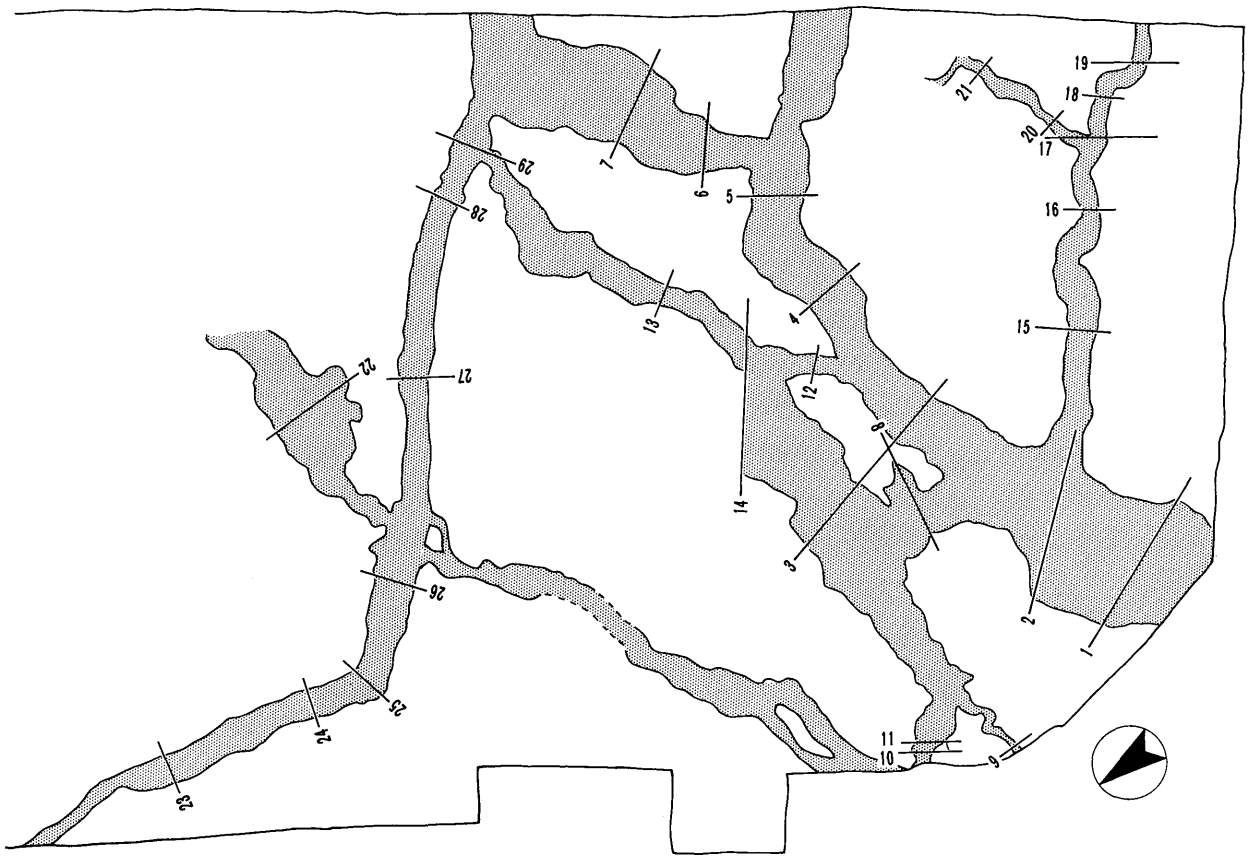
は口径がさらに小さく、39は強いロクロナデが施されてやや特異な形態を呈する。40～45は受け部をもたない。40は器壁がやや内弯気味に立ち上がり、底部は丸みを帯びて不安定な形態を呈する。41～44は扁平な底部を有し、器壁はほぼ直線的に立ち上がるが、41～42は僅かに内弯気味である。45は底部に高台を有する。高台はやや外開きで、底面はほぼ全面が接地する。

46は瓹または壺の口頸部と思われるが、小片のため詳細は不明である。

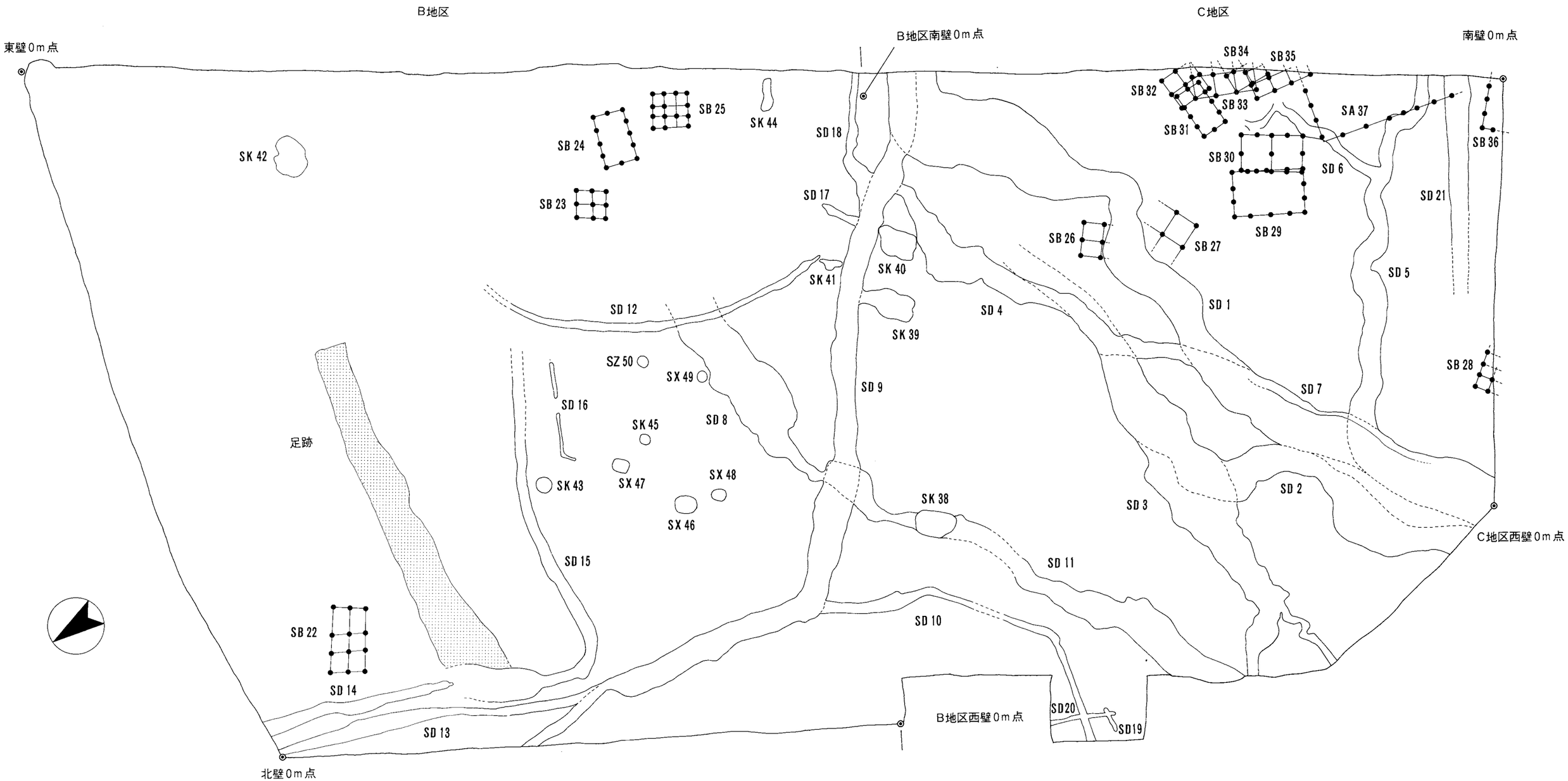
47～49は高杯である。47は脚部の下半部のみが残存する。脚端部はくびれて帯状に発達し、表面には回転カキメ状の調整がみられる。脚部は中間部の2条の沈線で上下に区画されているとみられ、下部には方形の三方透かしが施されている。48も脚部の下半部のみが残存するが、透かし穴等はみられない。脚端部は外面に僅かな膨らみをもち、接地部は平面を呈する。49は約2/3が残存する。断面形態は36に類似し、底部約1/2に回転ヘラケズリがみられる。脚部に透かし穴等はなく、脚端部には外傾する面を有する。

50は甕である。口縁端部は折り返されて垂下する。断面形態は方形に近い。51は甕あるいは器台の口縁部とみられるが、小片のため詳細は不明である。口縁端部は折り返されて垂下する。

52は鉢と思われるが小片のため詳細は不明である。

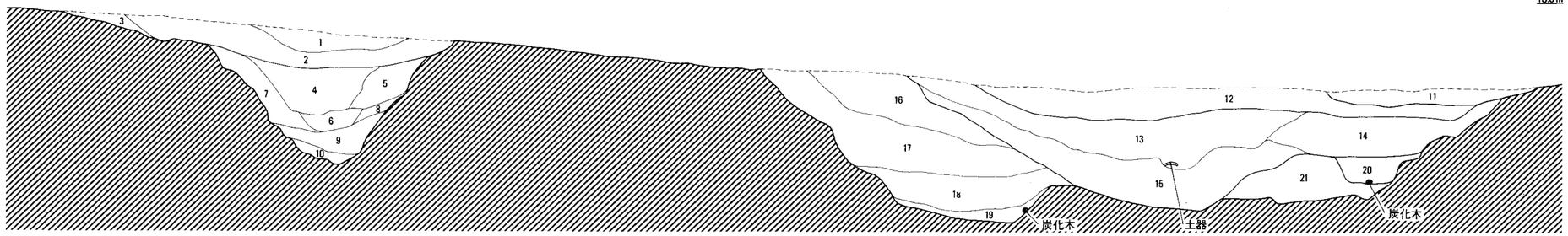


第14図　土層図位置図



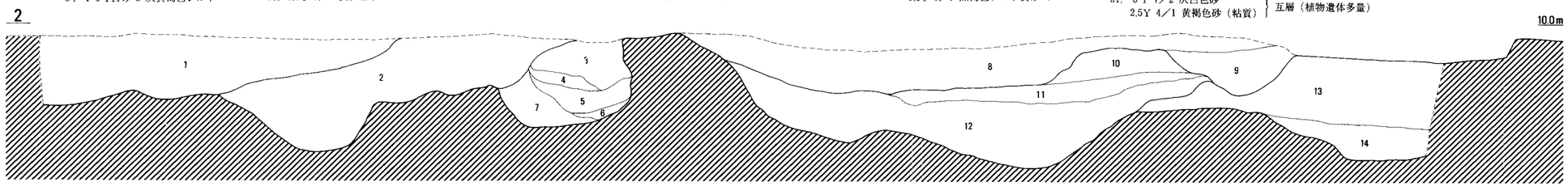
第15図　遺構全体図（1：400）

1



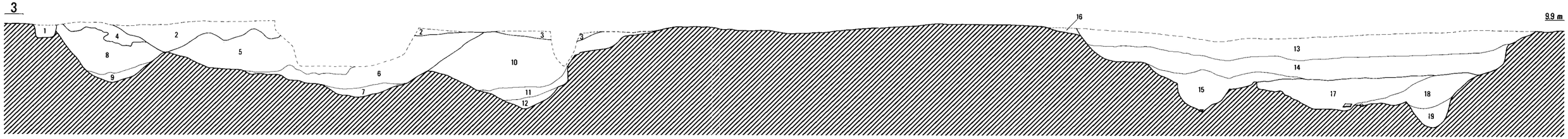
1．2.5Y 6／1 黄灰色砂（Fe）
2．10YR5／2 灰黄褐色砂（Fe少量）
3．7.5Y 6／1 灰色シルト
4．2.5Y 6／2 灰黄色砂
5．10YR4／2 灰黄褐色シルト
6．5Y 5／1 灰色砂
7．10YR3／1 黒褐色粘土質シルト
8．2.5Y 6／2 灰黄色シルト（黒色シルト質粘土ブロック）
9．2.5Y 6／1 黄灰色砂（炭化物）
10．2.5Y 5／1 黄灰色砂
11．10YR5／4 にぶい黄褐色砂（明黄褐色シルトブロック）
12．1に同じ
13．5Y 5／1 灰色砂（粘質）
14．5Y 5／1 灰色粘土質シルト ｜ 5Y 6／1 灰色砂 ｝ 混合
15．7.5Y 6／1 灰色砂 ｜ 2.5Y 4／1 黄褐色粘土 ｝ 互層
16．10Y 7／1 灰白色シルト質砂
17．5Y 6／1 灰色砂 ｜ 2.5Y 3／1 黒褐色シルト質砂 ｝ 混合
18．2.5Y 4／1 黄灰色砂（植物遺体多量）
19．5Y 6／1 灰色粘土 ｜ 5Y 7／1 灰白色砂 ｝ 混合
20．5Y 5／1 灰色シルト質粘土
21．5Y 7／2 灰白色砂 ｜ 2.5Y 4／1 黄褐色砂（粘質） ｝ 互層（植物遺体多量）

2



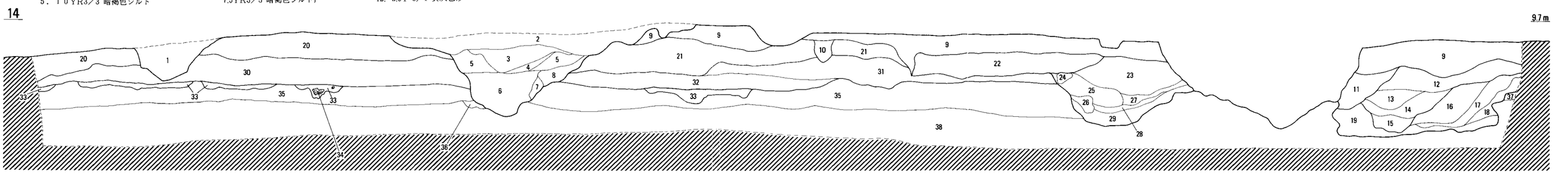
1．2.5Y 5／1 黄灰色砂質シルト ｜ 2.5Y 5／3 黄褐色砂質シルト ｝ 互層
2．5Y 5／1 灰色シルト質砂 ｜ 2.5Y 6／4 にぶい黄色シルト質砂 ｝ 互層
3．2.5Y 6／2 灰黄色シルト質砂（Fe少量）
4．10YR5／6 黄褐色粘土質シルト
5．5Y 6／1 灰色シルト質砂
6．2.5Y 5／1 黄灰色シルト（Fe少量）
7．2.5Y 6／1 黄褐色砂（Fe）
8．2.5Y 6／2 灰黄色シルト質砂（Fe多量）
9．10YR6／6 明黄褐色粘土質シルト（粘質、Fe）
10．10YR6／8 明黄褐色シルト質砂（Fe少量）
11．10YR5／1 褐灰色砂質シルト（Fe少量）
12．10YR3／1 黒褐色シルト質粘土 ｜ 2.5Y 4／1 黄灰色砂 ｝ 混合（植物遺体）
13．10YR6／6 明黄褐色砂シルト質砂 ｜ 2.5Y 6／1 黄灰色 ｝ 互層
14．10YR5／6 黄褐色粘土（砂まじり） ｜ 2.5Y 6／3 にぶい黄色砂（粘質） ｝ 混合

3



1．5YR7／1 明褐灰色シルト質砂
2．10YR4／2 灰黄褐色シルト質砂
3．2.5Y 6／2 灰黄色砂
4．10YR3／3 暗褐色シルト
5．10YR3／3 暗褐色シルト
6．10YR4／2 灰黄褐色砂 ｜ 10YR6／6 明黄褐色砂 ｝ 互層
7．10YR3／1 黒褐色シルト
8．7.5YR4／2 灰褐色砂 ｜ 7.5YR3／3 暗褐色シルト ｝ 互層
9．5YR5／2 灰褐色シルト
10．10YR6／3 にぶい黄橙色砂 ｜ 10YR6／1 褐灰色砂 ｝ 互層
11．10YR4／1 褐灰色砂
12．2.5Y 6／1 黄灰色砂
13．5Y 6／1 灰色砂（Fe）
14．2.5Y 6／1 黄灰色砂
15．10Y 5／1 灰色砂
16．10YR6／3 にぶい黄橙色シルト質砂
17．5Y 6／2 灰オリーブ色砂（Fe少量）
18．7.5Y 6／2 灰オリーブ色砂
19．5Y 6／4 オリーブ黄色砂礫

14



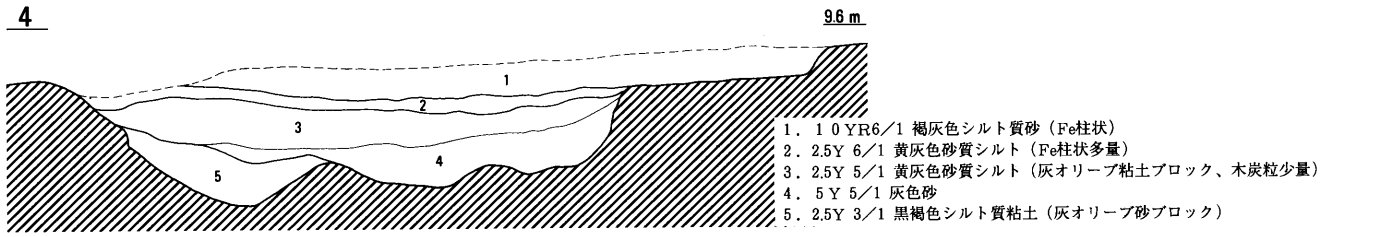
1．10YR5／4 にぶい黄褐色砂（Fe少量）
2．10YR5／2 灰黄褐色砂（Fe、Mn）
3．10YR7／2 にぶい黄橙色砂
4．7.5YR4／2 灰褐色シルト質砂
5．7.5YR5／2 灰褐色砂質シルト（Fe、Mn）
6．7.5YR4／1 褐灰色シルト（Fe、Mn少量）
7．7.5YR4／1 褐灰色砂質シルト（Fe少量）
8．10YR5／3 にぶい黄褐色砂
9．7.5YR5／6 明褐色砂（Fe、Mn少量）
10．10YR7／3 にぶい黄橙色砂（Fe少量、Mn少量）
11．10YR6／3 にぶい黄橙色粘土質シルト（Fe） ｜ 10YR7／3 にぶい黄橙色砂（Fe少量） ｜ 10YR6／3 にぶい黄橙色砂（Fe少量、Mn少量） ｝ 互層
13．10YR6／4 にぶい黄橙色砂（炭化物少量）
14．7.5YR5／4 にぶい褐色砂（Fe少量、炭化物少量）
15．7.5YR4／4 褐色砂 ｜ 10YR4／1 褐白色粘土 ｝ 互層（炭化物少量）
16．7.5YR3／1 黒褐色シルト（やや粘質、Fe少量、炭化物少量）
17．10YR7／1 灰白色砂（Fe少量、Mn少量）
18．7.5YR6／2 灰褐色砂
19．10YR4／1 褐灰色シルト（粘質、Fe）
20．10YR6／2 灰黄褐色砂質シルト（Fe少量）
21．7.5YR7／3 にぶい橙色シルト質砂（Fe、Mn）
22．10YR5／3 にぶい黄褐色砂（Fe少量、Mn少量）
23．7.5YR4／1 褐灰色砂（Fe少量、Mn少量）
24．10YR6／6 明黄褐色砂
25．7.5YR3／1 黒褐色シルト
26．10YR6／2 灰黄褐色砂（Fe少量）
27．10YR5／2 灰黄褐色砂（炭化物）
28．7.5YR4／1 褐灰色シルト質砂
29．7.5YR3／1 黒褐色シルト質粘土（木炭粒多量） ｜ 10YR7／6 明黄褐色砂（Fe） ｝ 互層
30．7.5YR7／2 明褐灰色シルト質砂（Fe、Mn少量）
31．10YR7／6 黄橙色シルト質砂（Fe少量、Mn少量）
32．7.5YR5／2 灰褐色シルト（Fe、Mn）
33．7.5YR5／2 灰褐色シルト質粘土（Fe）
34．火山灰ブロック（10YR7／6 明黄褐色）
35．7.5YR4／2 灰褐色シルト（Fe、Mn少量）
36．7.5YR5／1 褐灰色砂質シルト（Fe少量）
37．10YR6／6 明黄褐色シルト（Fe、Mn少量）
38．10YR5／2 灰黄褐色粘土質シルト（Fe）

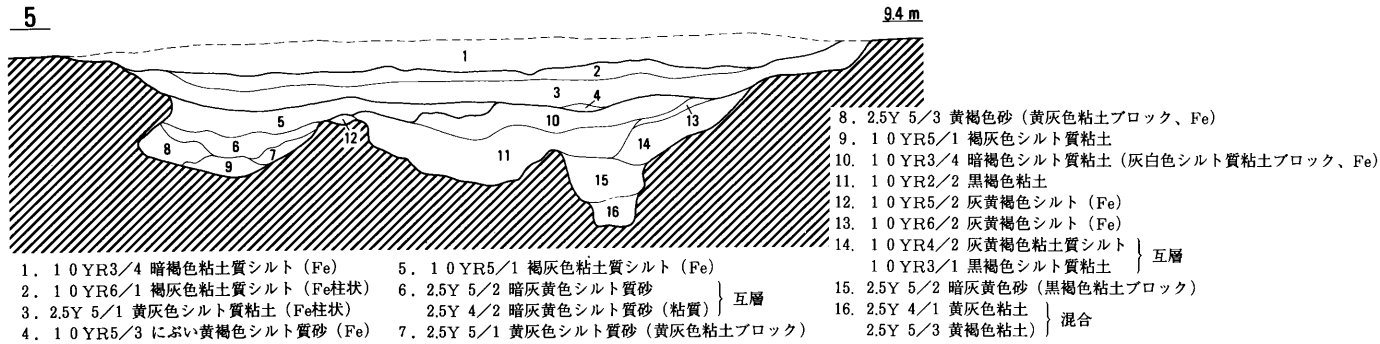
0　2m

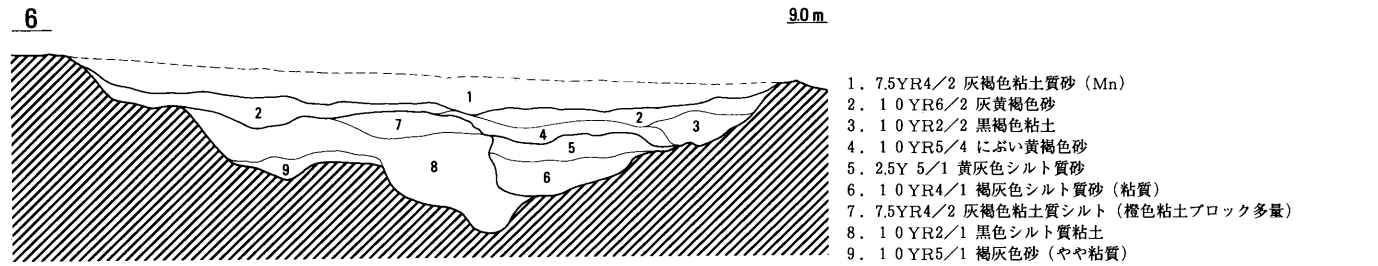
第16図　ＳＤ１土層断面図（土層図１～３・14）（１：40）

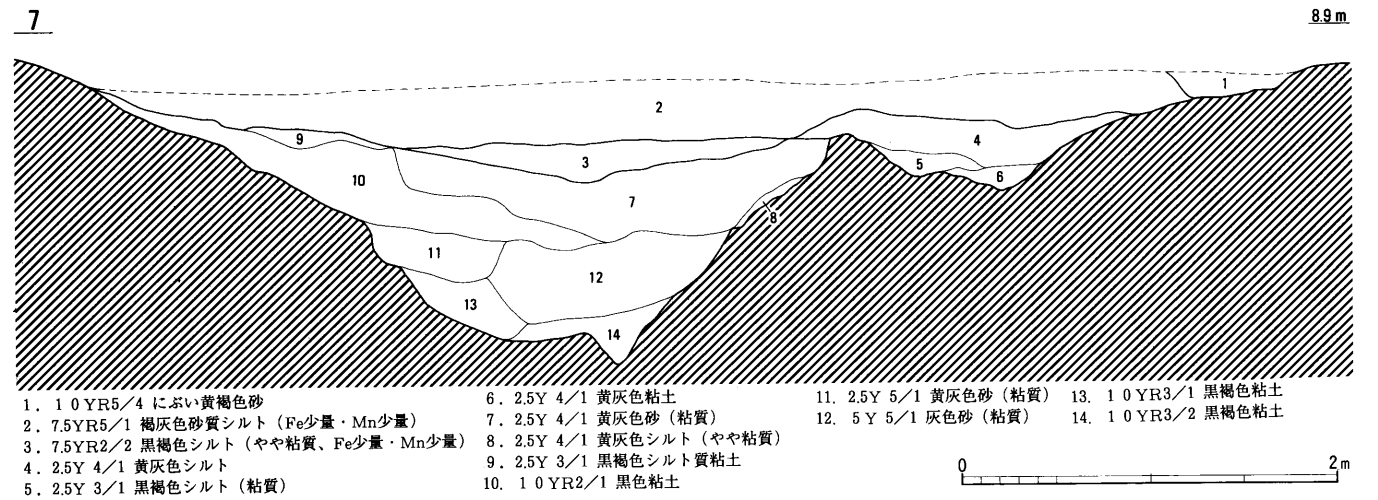
口縁端部に沈線が１条巡る。

土師器（53～64）　53～58は甕である。53は頸部と体部の接合後の調整が不完全であり、接合部の内面が突出している。頸部の厚さはほぼ均一で、口縁端部は丸く収まる。54・55の頸部と体部の接合部の内面は滑らかである。頸部の厚さは54・55共に下半部が厚く端部が薄い。口縁端部は軽くつまみ上げる様なヨコナデ調整を行ったとみられ、外面は垂直よりやや内傾する面をもち、内面は僅かに窪んでいる。また、頸部の外反の度合いは54の方が大きい。56・57は53～55に比べて口径が小さい。56が強いヨコナデと端部のつまみだしで鋭角的な断面形態を呈するのに対し、57は滑らかな面をもって大きく外反し、端部も丸く収まる。58は体部下半のみの破片である









第17図　ＳＤ１土層断面図（土層図４～７）（１：40）

が、56・57と同規模の甕であろう。

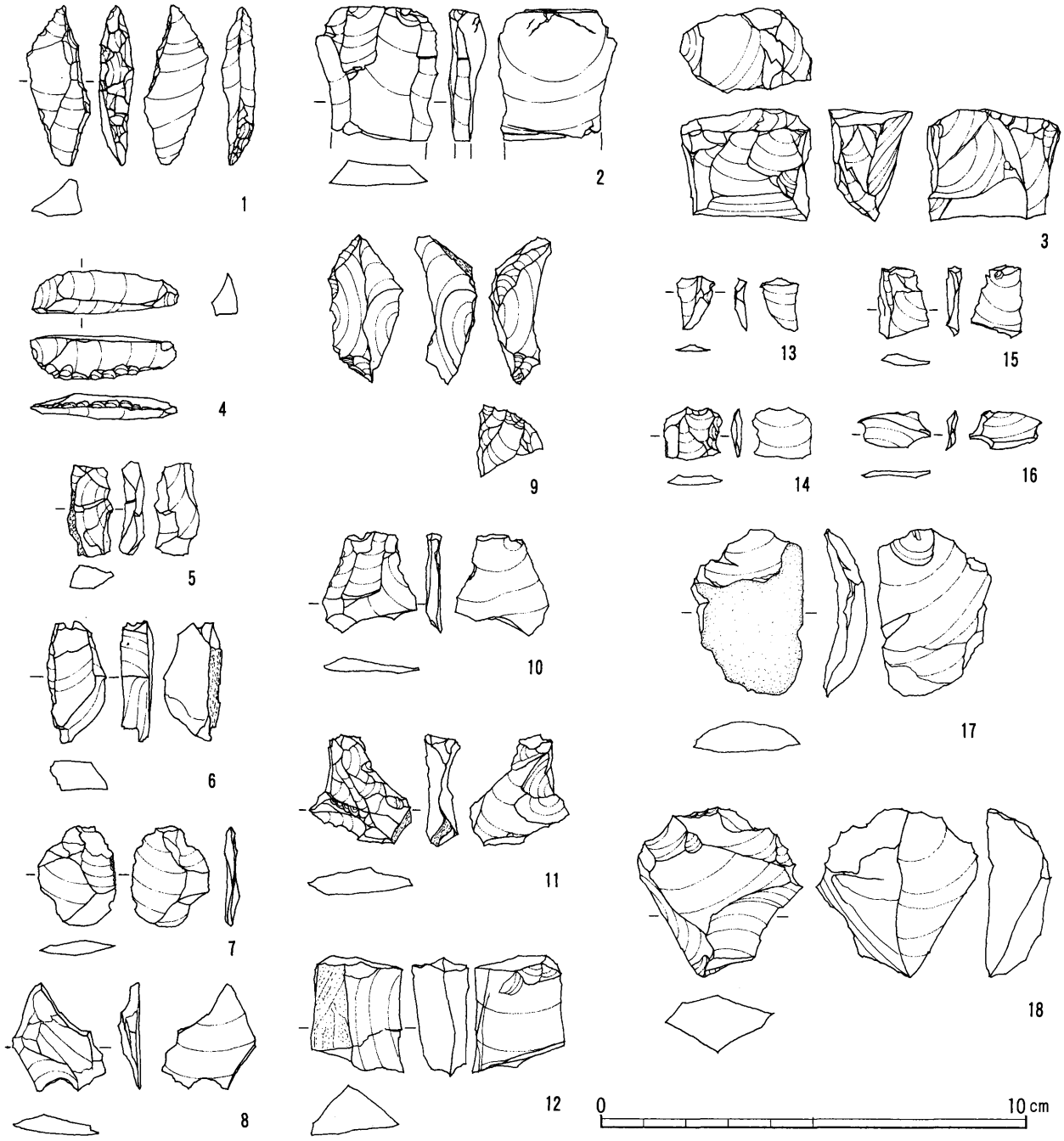
59は杯である。器壁の厚さはほぼ均一で、口縁端部は丸く収まる。

60は長頸壺である。頸部下部がわずかに欠失しているが同一個体とみられる。頸部の厚みはほぼ均一であるが、口縁部は薄く、端部は尖り気味となる。

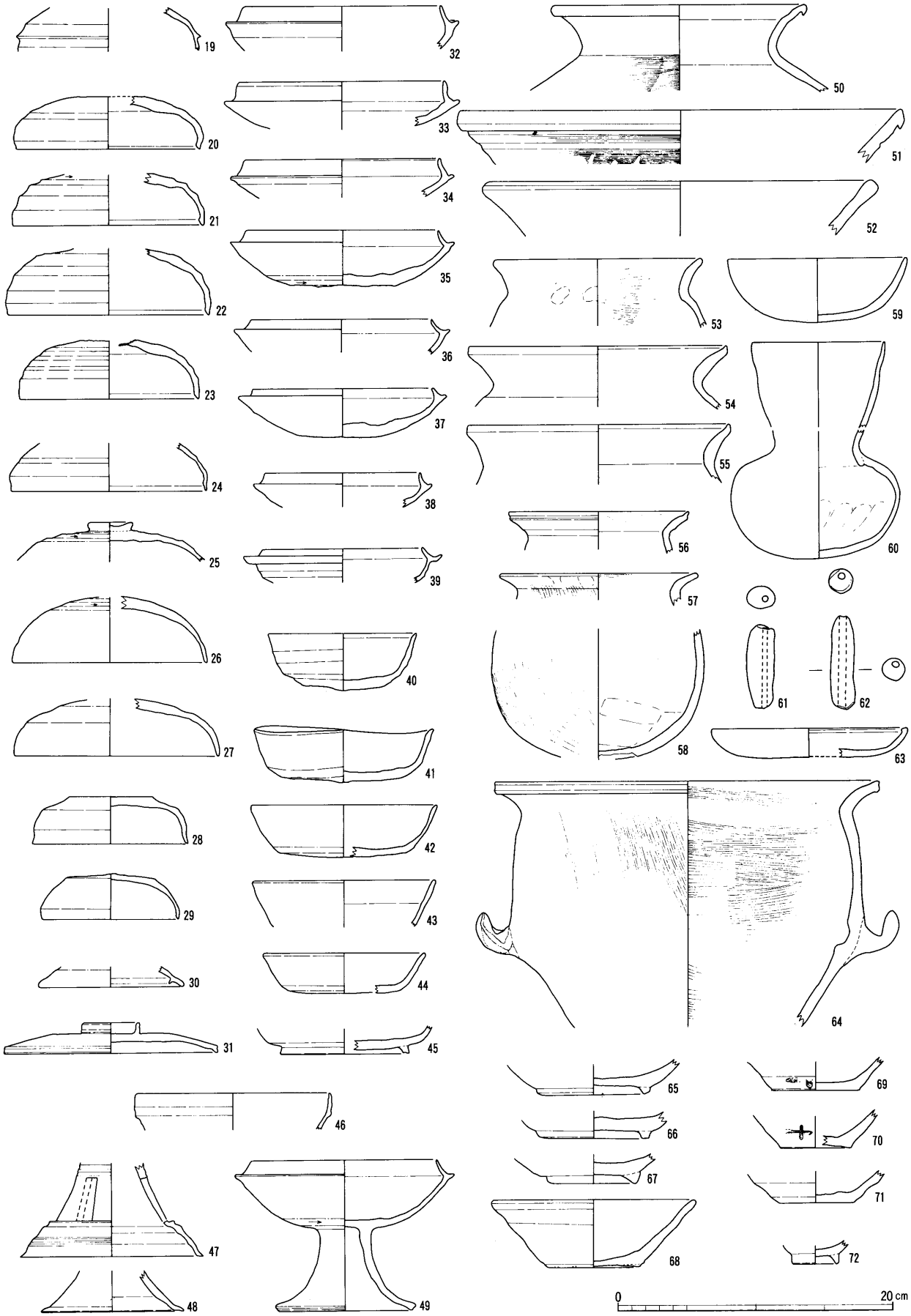
61・62は土錘である。共に粗雑な作りであり、穴の位置も中心からズレている。

63は皿である。口縁端部内面が突出し、断面三角形の稜をなす。

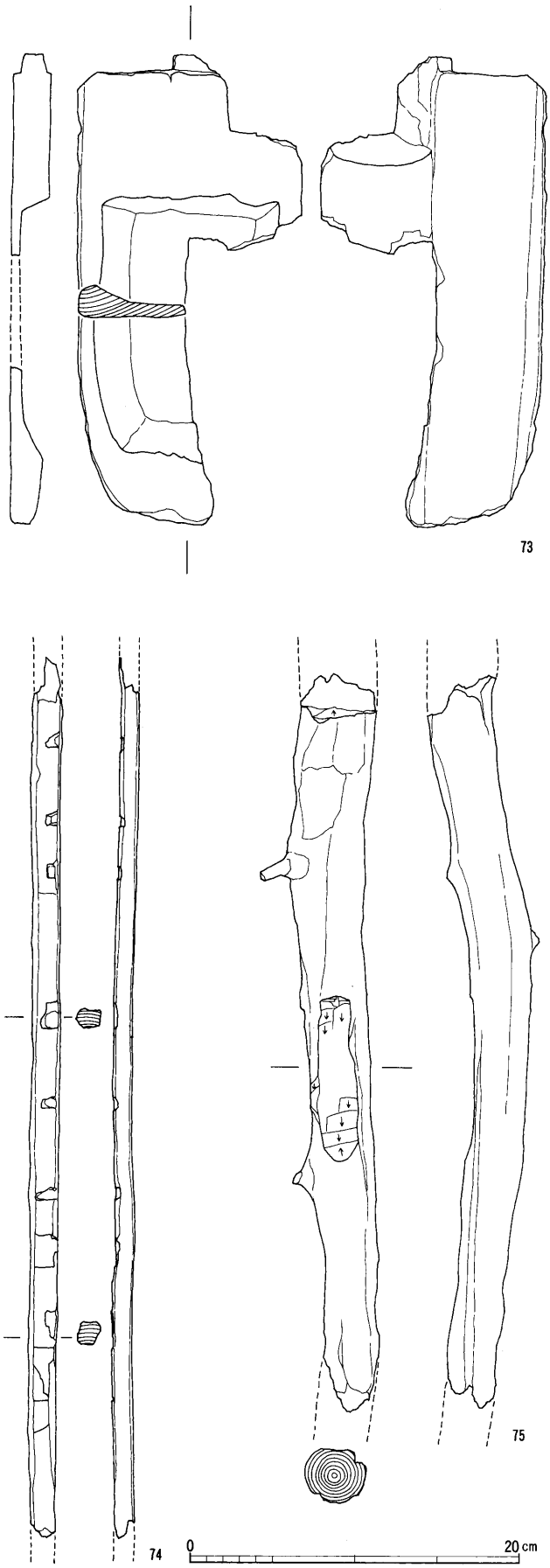
64は甕である。口縁端部外面が直立し、中央部が凹線状にわずかに窪む。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケが施され、体部は外面がタテハケ、内面にはヨコハケが施される。体部ほぼ中央部に把手が付くが、作りは粗雑である。把手接合部内面に圧着痕とみられる円形の窪みがみられる。



第18図　ＳＤ１遺物実測図１　（２：３）



第19図　ＳＤ１出土遺物実測図２（１：４）



第20図　ＳＤ１出土遺物実測図３　（１：４）

山茶椀・山皿（65～72）　65～71は山茶椀である。65～67はやや退化した高台をもつもので、65は尾張編年第5⑥型式、66は渥美編年第５型式に相当する。68は高台が大半剝離しているもので、尾張編年第６型式に相当する。69～71は高台をもたないもので、69・70は瀬戸編年第８型式に相当する。共に体部外面下部に墨書がみられるが、残存状況が悪く判読できなかった。

72は山皿である。高台外面がほぼ直立するもので尾張編年第４型式に相当する。

木製品（73～75）　木製品も少量ながら出土している。73は上端中央に柄の痕跡とみられる突出部をもち、一見踏み鋤形を呈するものであるが、表面中央に四角い大きな刳りをもち、十能形あるいは槽の一種とも考えられる。また、一隅が裏面から四角く刳られており、２次加工を受けているとみられる。74は断面四角形の細い材に浅い納穴状の加工痕がみられるものである。当初建築部材の一種かと思われたが、穴が浅く位置・形状とも不規則であるため、用途は不明である。75は一見自然木とみえるものであるが、上端と中央部に加工痕がみられる。

なお、ここには図示できなかったが縄文土器片が２点出土しており、植物繊維の混入が認められる。

ＳＤ２（第21・22図）　ＳＤ１からＳＤ３へ流れ込む形で検出された自然流水路である。埋土の堆積状況を観察した結果、ＳＤ３を切っていると判断された。流路の行方はＳＤ４と重複しており確定は困難であるが、ＳＤ４の横断面右岸側で旧流水路との重複が確認されており、これをＳＤ３の痕跡とみるならば、ＳＤ３の右岸にほぼ接する辺りをＳＤ１と平行する方向に流れていたと考えられる。

出土遺物は石器３点（76～78）のみで、76・77はフレイク、78はポイントチップである（写真35）。

ＳＤ３（第23図）　Ｃ地区西端から東へ、ＳＤ１と平行して流れる自然流水路である。埋土は非常によく締まっており、一見して古い堆積層であることがわかる。人工遺物は全く出土していない。

ＳＤ４　Ｃ地区中央部でＳＤ１から派生する形で北東方向へ延びる。埋土はほぼ均一な砂層であり撹乱等はみられないが、ＳＤ９付近へくると後代の流れ込みによるとみられる堆積状況の乱れが観察された

（第26図）。

出土遺物は6世紀後半～7世紀前半とみられる土師器（80～86）と須恵器（87～114）にほぼ限られ、他に磨滅した面をもつ大型の礫（79）と木製品（115）が出土している（第24図、写真23）。

土師器（80～86）　80は壺の肩部である。ＳＤ１出土の土師器長頸壺（60）の頸部接合部内面が内傾しているのに対し、ほぼ垂直に立ち上がる。

81～85は甕である。口径・器形共に多様であるが、各々これに伴って口縁部の成形技法にも違いが認められる。

86は残存率が低く磨滅しており詳細不明である。

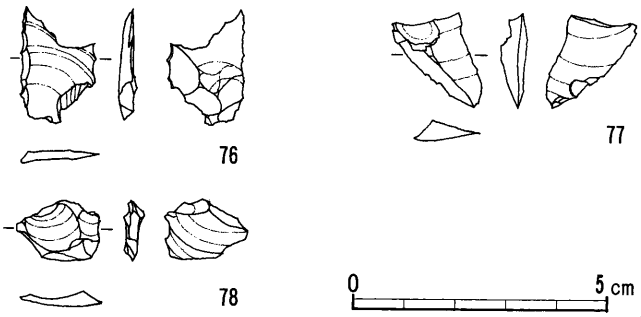
須恵器（87～114、写真36）　87～95は杯蓋である。法量・形態共に各種みられる。型式的には陶邑編年ＴＫ209～ＴＫ217型式⑦にほぼ相当するが、87は明確な稜をもち古い様相を示す。

96～105は杯身である。杯蓋とほぼ同じ様相を示す。96のみがやや古い様相を示す点も同様である。

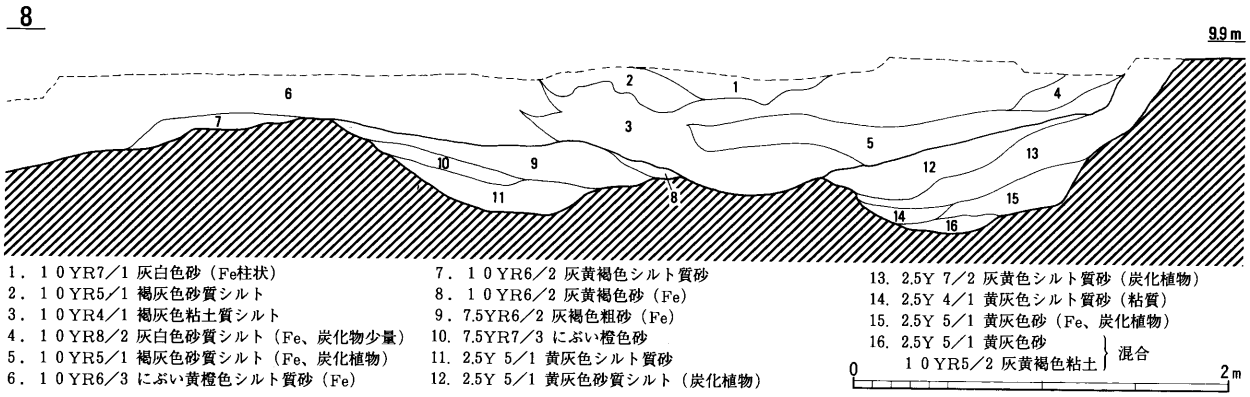
106は双耳壺である。頸部は短く直線的にやや開き、口縁端部は平らに仕上げられている。

107は甕である。頸部の下半部が欠失しており、上半部との境に沈線が巡る。口縁端部直下に突帯と沈線が巡り、下部の沈線との間に縦方向のヘラ描き直線文が施される。

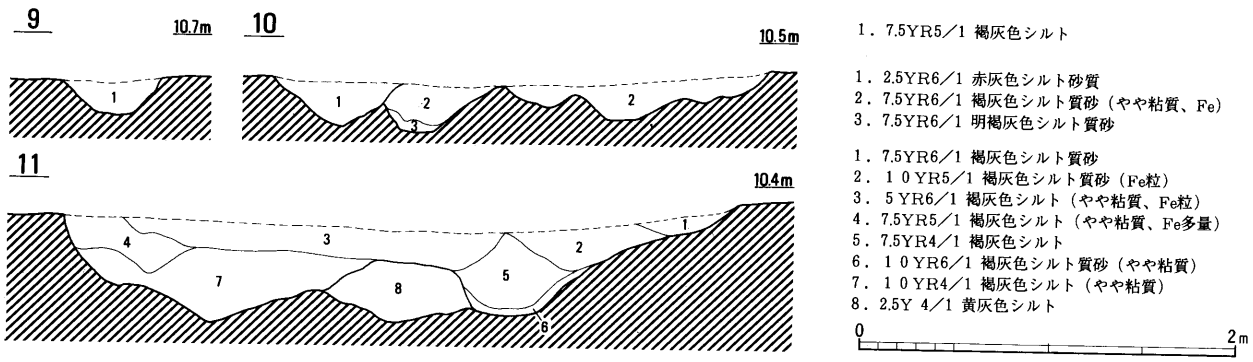
108・109は高杯である。108は脚部下半が欠失している。杯部外面下半部には櫛状工具による細かい波状文が施されるが、施文の状況も他の部位の調整も粗雑である。



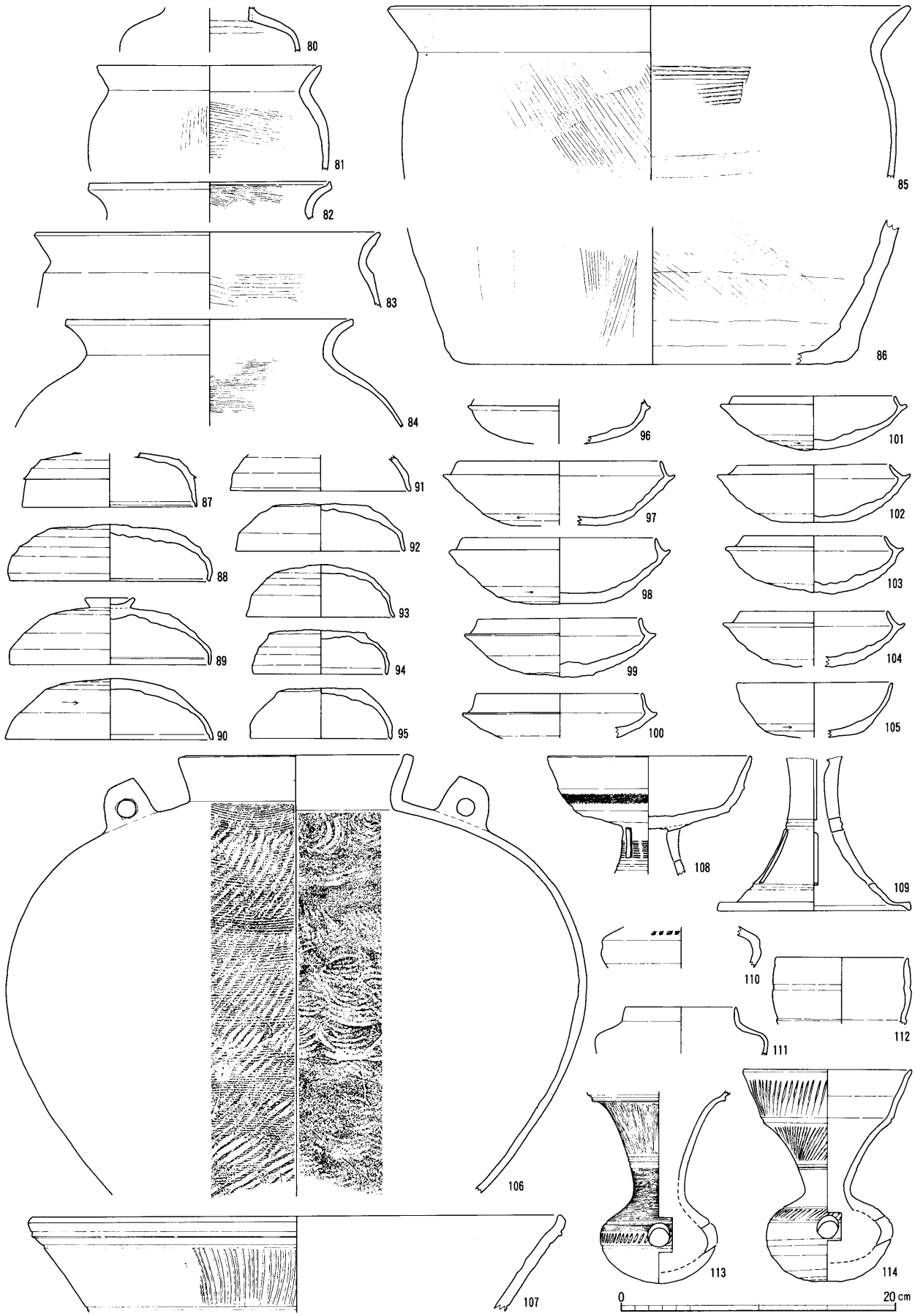
第21図　ＳＤ２遺物実測図（２：３）



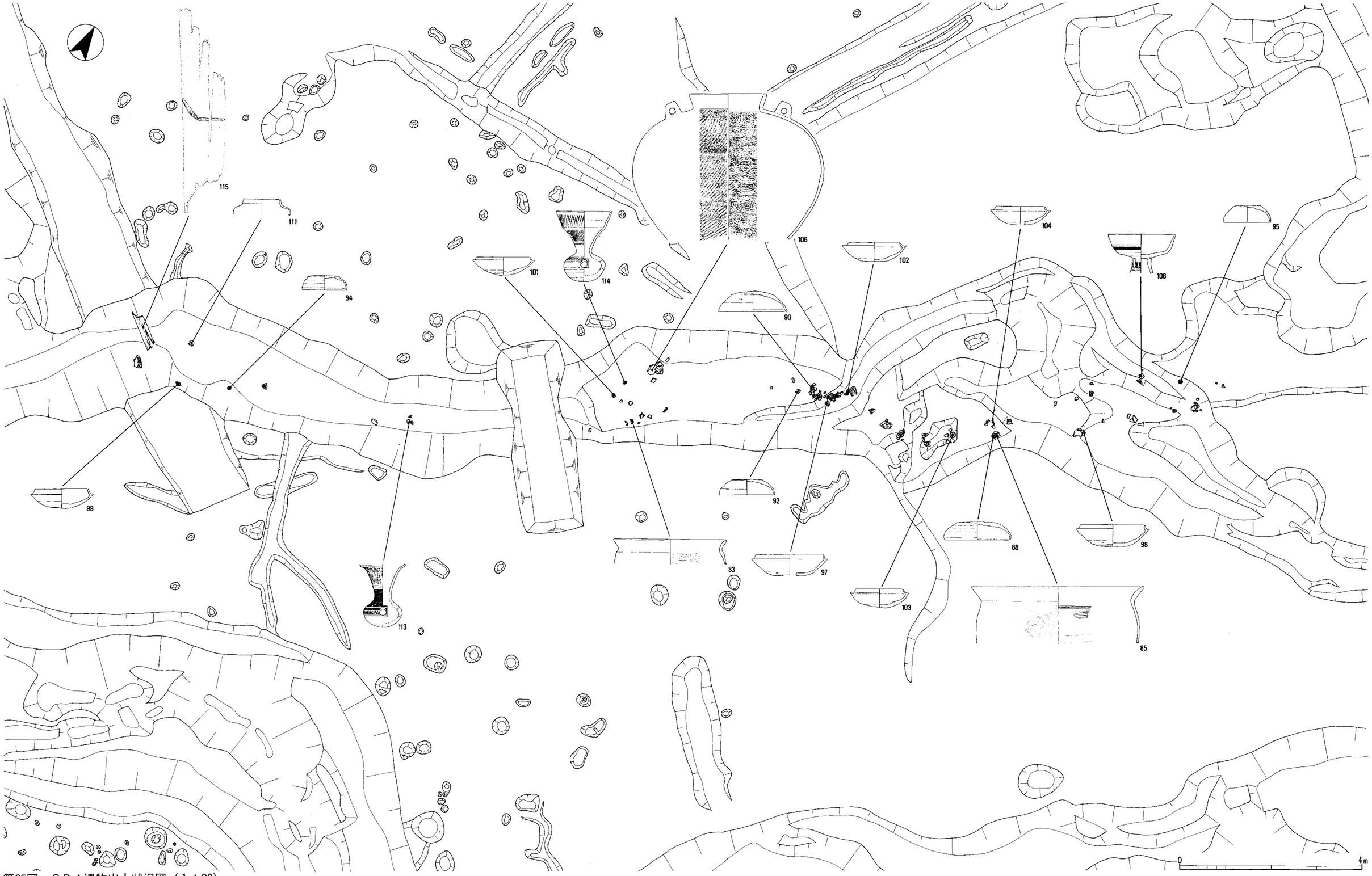
第22図　ＳＤ２土層断面図（１：40）



第23図　ＳＤ３土層断面図（１：40）



第24図　ＳＤ４出土遺物実測図１（１：４）



第25図　ＳＤ４遺物出土状況図（１：80）

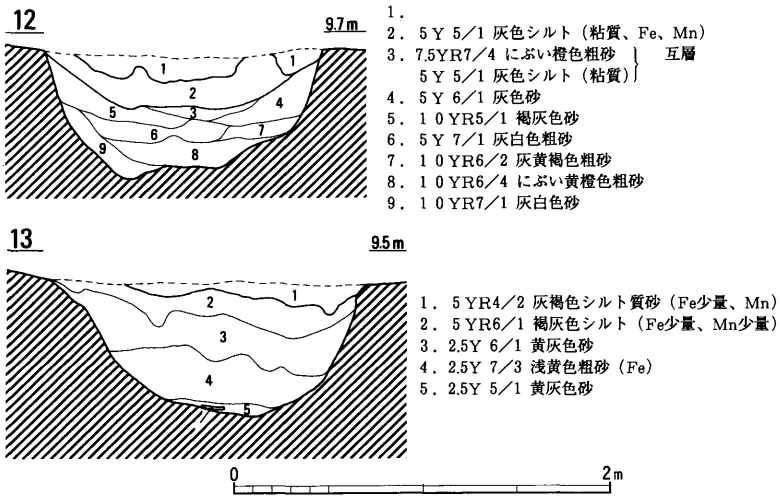
111は短頸壺である。器壁は薄く整形は粗雑である。

112 は椀とみられるが、小片のため詳細は不明。

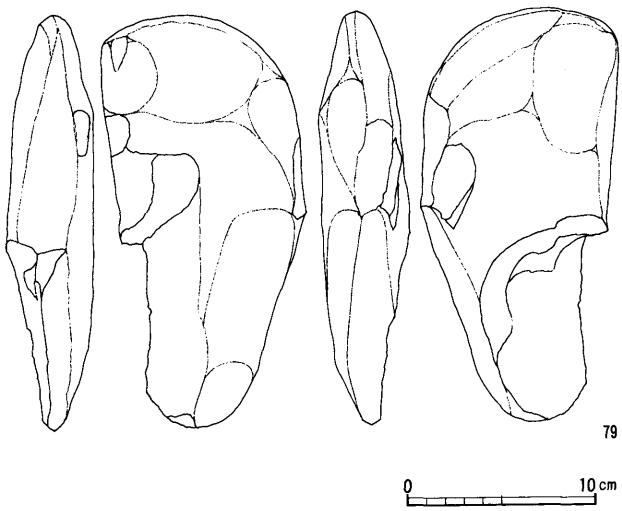
110・113・114は瓹である。113は頸部と口縁部の境に突帯が巡るもので、頸部上半部は上から下への串状工具による直線文、下半部は回転カキメ状の調整が施される。114は口縁部と頸部の境に沈線が巡り、口縁部と頸部上半部には右上から左下へのヘラ描き直線文が施される。

石製品（79、写真35）　一部欠損しているが、両面の中央部を除くほぼ全面に研磨によるとみられる磨滅がある。不整形なものではあるが、砥石として使用されたものであろう。

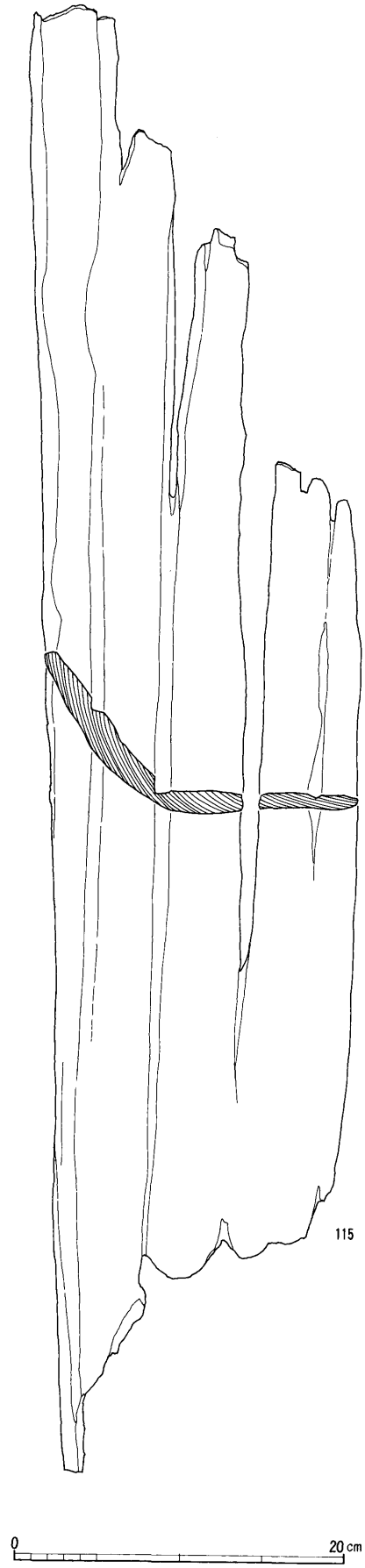
木製品（115）　出土層位は須恵器杯身（99）と同じである。断面形が「く」の字形を呈し、槽あるい



第26図　ＳＤ４土層断面図（土層図12・13）（１：40）



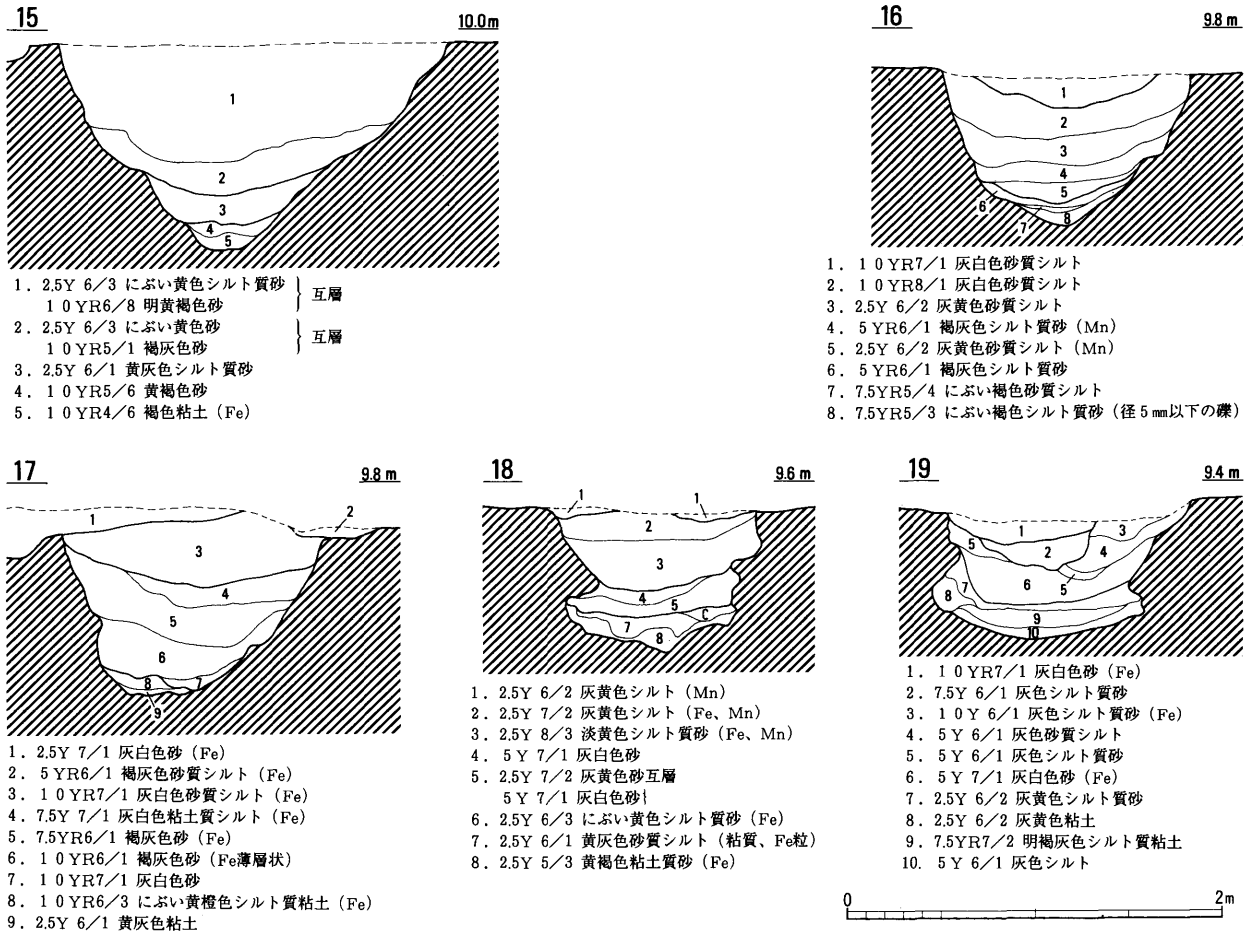
第27図　ＳＤ４遺物実測図２（１：４）



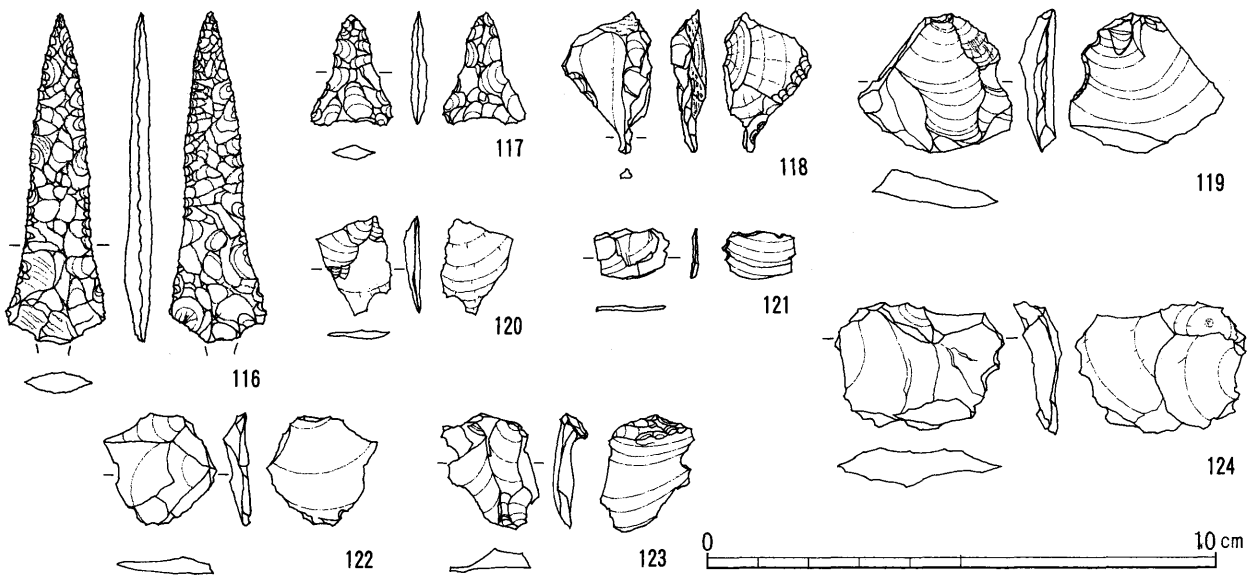
第28図　ＳＤ４遺物実測図３（１：４）

は木樋の一部と考えられる。腐食しているため加工痕は判然としない。

ＳＤ５　Ｃ地区南西部でＳＤ１から派生する形で南東方向へ延びる。西半部はＳＤ１と同一面（第１面）で検出できたが、東半部は明確に検出できなかったため、約20cm掘り下げて再度検出作業を行った。その結果、西半部に続くラインが明確に検出されさらに調査区東壁付近で東へ派生する形でＳＤ６が検出



第29図　ＳＤ５土層断面図（土層図15～19）（１：40）



第30図　ＳＤ５遺物実測図（２：３）

された。

埋土はほぼ均一な締まりのない砂の堆積で、最下層のみがよく締まったシルトである（第29図）。

出土遺物は有舌尖頭器（116）をはじめとする石器類のみで出土層位は最下層に限られる（写真25・37）。また上部の埋土中にも後代の遺物は全く混入せず、ＳＤ１をはじめとする他の遺構埋土と比べて極めて安定した状態であったことがわかる。このことはＳＤ５の検出層位が他の遺構群と明らかに異なっている（第８図　東壁土層断面図３　144ｍ地点参照）こととも符合し、少なくともＣ地区西側にはＳＤ５に伴う比較的安定した生活面が一時期存在したことがわかる。

石器（116～124）　116は有舌尖頭器である。茎部が僅かに欠損している。両面に対向調整が施されるが図正面側の調整はやや粗く、剝離の幅・長さ共にバラツキが多い。石材は異なるが、形態は朝日遺跡出土資料に類似例がみられる[8]。サヌカイト製。117は凹基無茎鏃、118は石錐、他は剝片である。

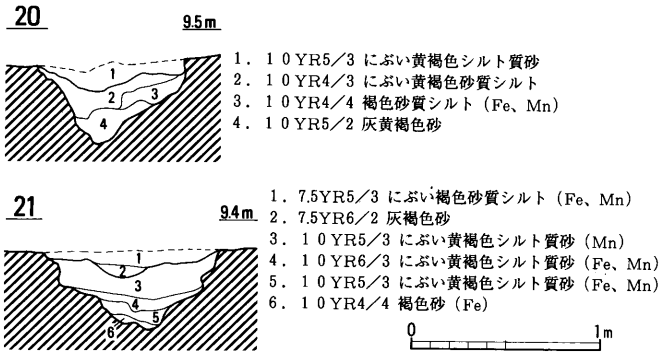
ＳＤ６　ＳＤ５から派生する形で東へ延びる。検出面はＳＤ５と同一であるが、底のレベルに差があり合流部では段差が付く。また遺物の出土は全くなくＳＤ５とは様相を異にするものである。ただし埋土についてはＳＤ５と同様の砂の層であり、堆積状況も類似する（第29図）。

ＳＤ７　ＳＤ１右岸で断続的に検出された。山茶椀・木製品（125）が出土しており、中世以降に形成されたと考えられる。

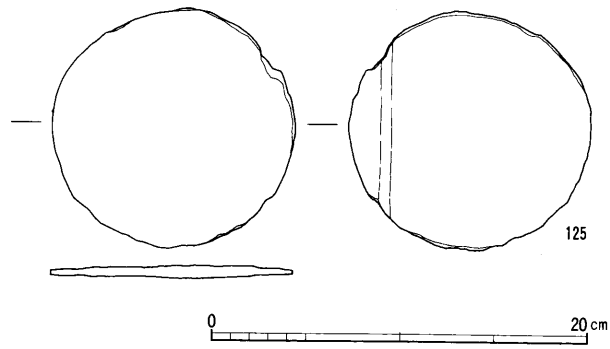
木製品（125）　曲物の蓋板であるが、腐食のため木取りは不明である。

ＳＤ８　Ｂ地区南西部で検出した自然流水路である。Ｂ地区調査時に一定区画の埋土を完掘したが、遺物の出土は全く認められず、ＳＤ８東側の遺構群の下部へもぐり込むことが確認されたため、完掘した区画の土層図を作成・記録するに止めた（第33図）。しかしＣ地区調査時に検出したＳＤ11がＳＤ８へ延びる方向で検出されており、２つの流路は同一遺構と推定される。

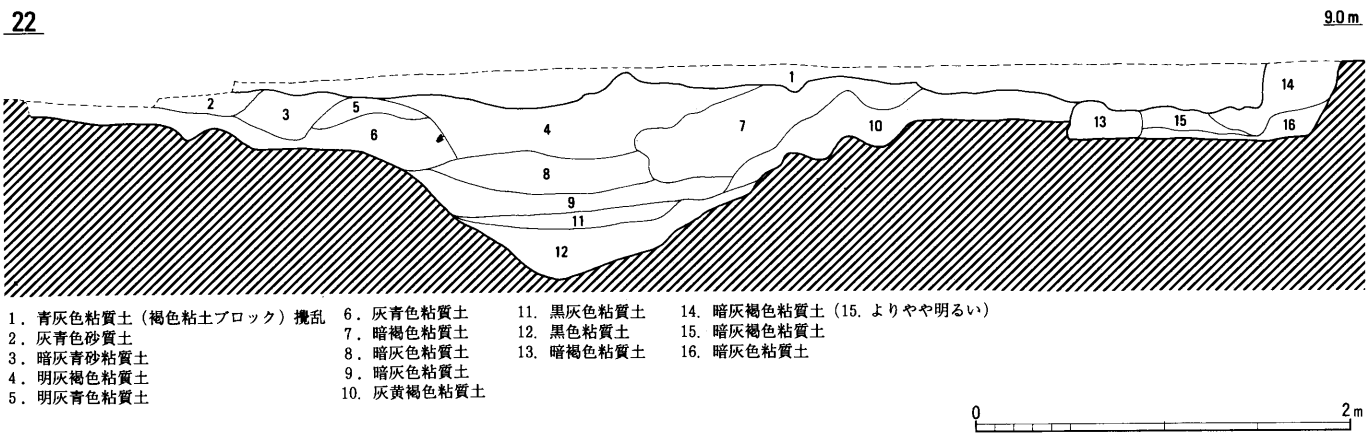
ＳＤ９　調査区全体を南北に二分するかたちで延びる溝である。平面形はＢ地区西隅で「く」の字に折



第31図　ＳＤ６土層断面図（１：40）



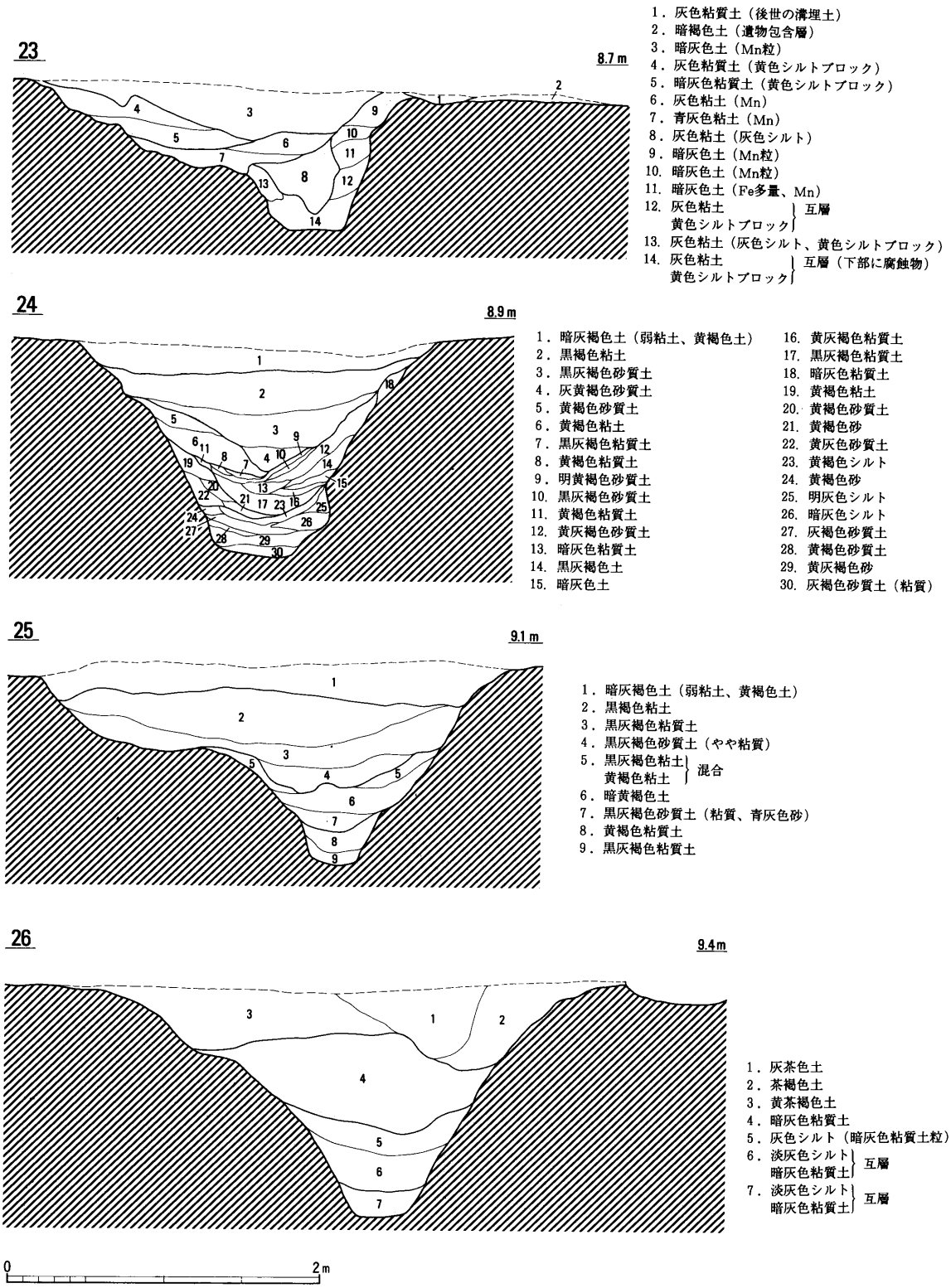
第32図　ＳＤ７遺物実測図（１：40）



第33図　ＳＤ８土層断面図（１：40）

れ曲がる形で、一方はＢ地区西壁中央部へ、他方は東壁Ｂ・Ｃ地区境付近へ直線的に延びる。いずれも調査区外へ延びており、平面規模は不明である。断面形はＶ字形で、残存する肩の幅は２～３ｍ、深さは１～1.5ｍ程度である。底の幅は30㎝前後で底面のレベルは標高7.5ｍ前後でほぼ水平である。

埋土の堆積状況については、７箇所で断面観察を行った。その結果、埋土は数単位に大別できることが判明し、遺物の出土状況にも一定のまとまりがあることが確認された（第34～36図、写真22）。以下、



第34図　ＳＤ９土層断面図（土層図23～26）１（１：40）

遺物の出土状土状況について概要を記す。

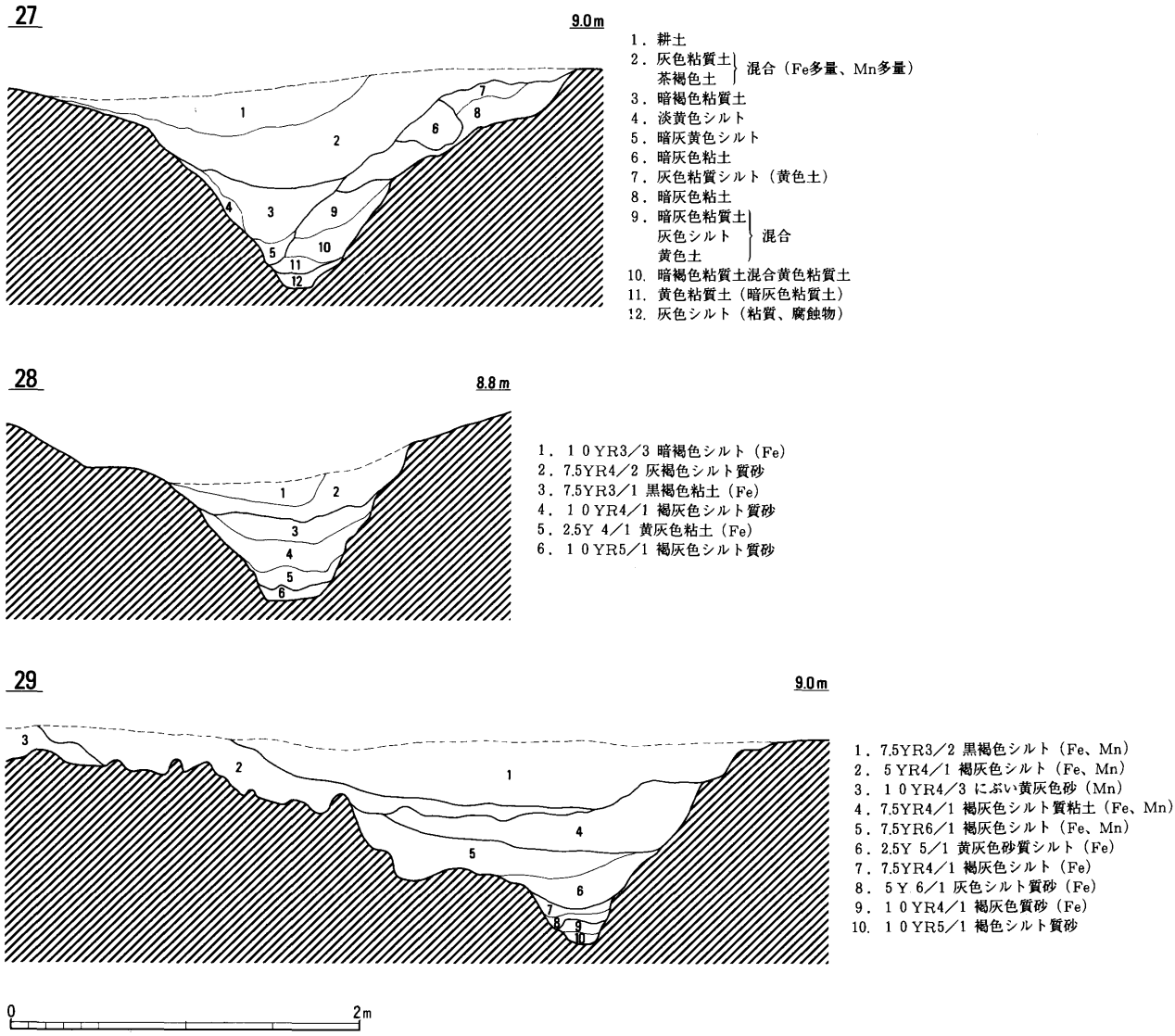
126～133は土層図24第２～４層及び土層図25第２～４層より出土した。134～145は出土状況から二大別される。134～141は第36図にみる通り一括出土遺物であり、これを包含する土壌の比較検討を行った結果、出土層位は土層図28第３～５層に相当すると考えられる（写真26）。また、出土地点は土層図29に近いがここはＳＤ４との接点に当たり、ＳＤ４上部にみられる後代の流れ込みによって攪乱を受けたために、他の地点とは異なる堆積状況を示すものと思われる。142～145は土層図28第３～５層他より出土した。146～151は土層図27第12層より出土した。

以上の状況から、126～133を上層、134～145を中層、146～151を下層と捉えることが可能であり、上層は13世紀の遺物の中に８世紀の遺物が混入し、中層は８世紀の遺物の中に７世紀の遺物が混入し、下層は７世紀の遺物を中心とする。また、土層図23・24・27では各々７－８層間・４－５層間（写真22）・５－６層間で溝の掘り直しとみられる堆積状況が観察される。（土層図24は左右反転して作図）

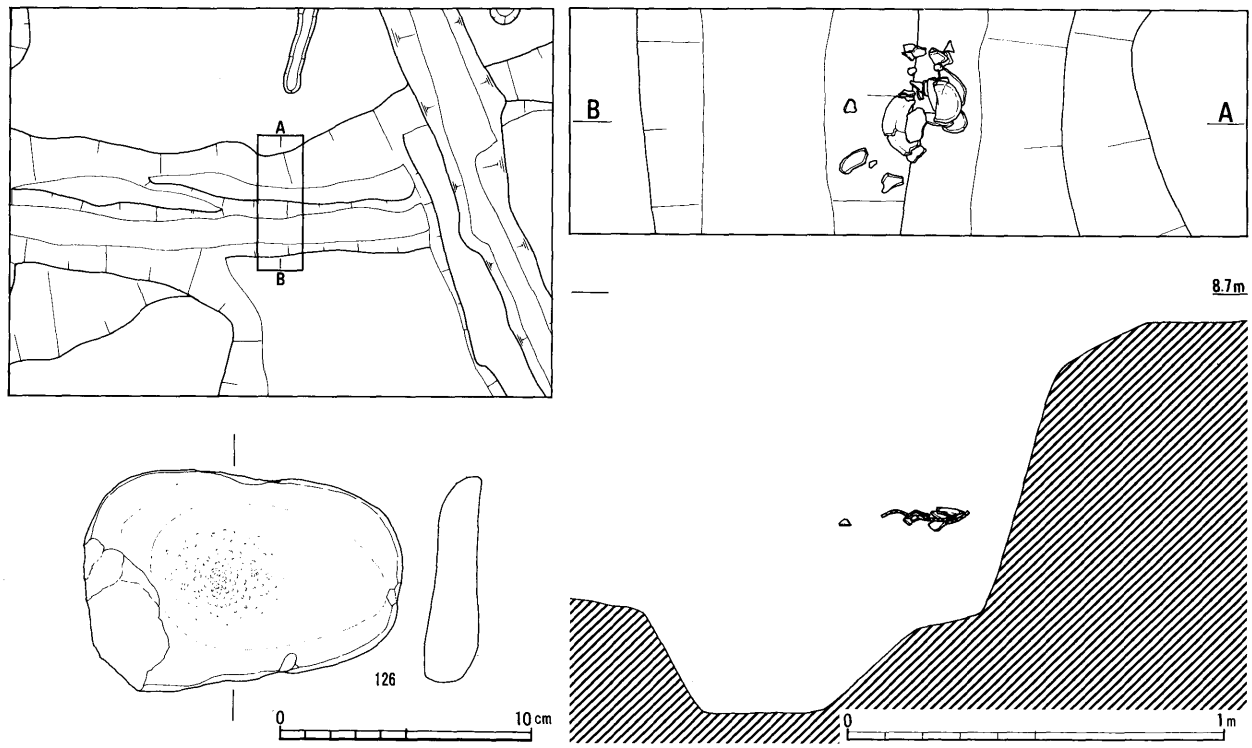
以上の様な遺物の出土状況と埋土の堆積状況からＳＤ９の開削を７～８世紀とし、13世紀頃に再利用するために掘り直したとみることができる。

出土遺物（写真37）上層（126～133）　126は扁平で滑らかな砂岩礫で片面中央部に敲打痕がみられる。窪みは浅く滑らかであり、磨石としても使用されたものであろう。

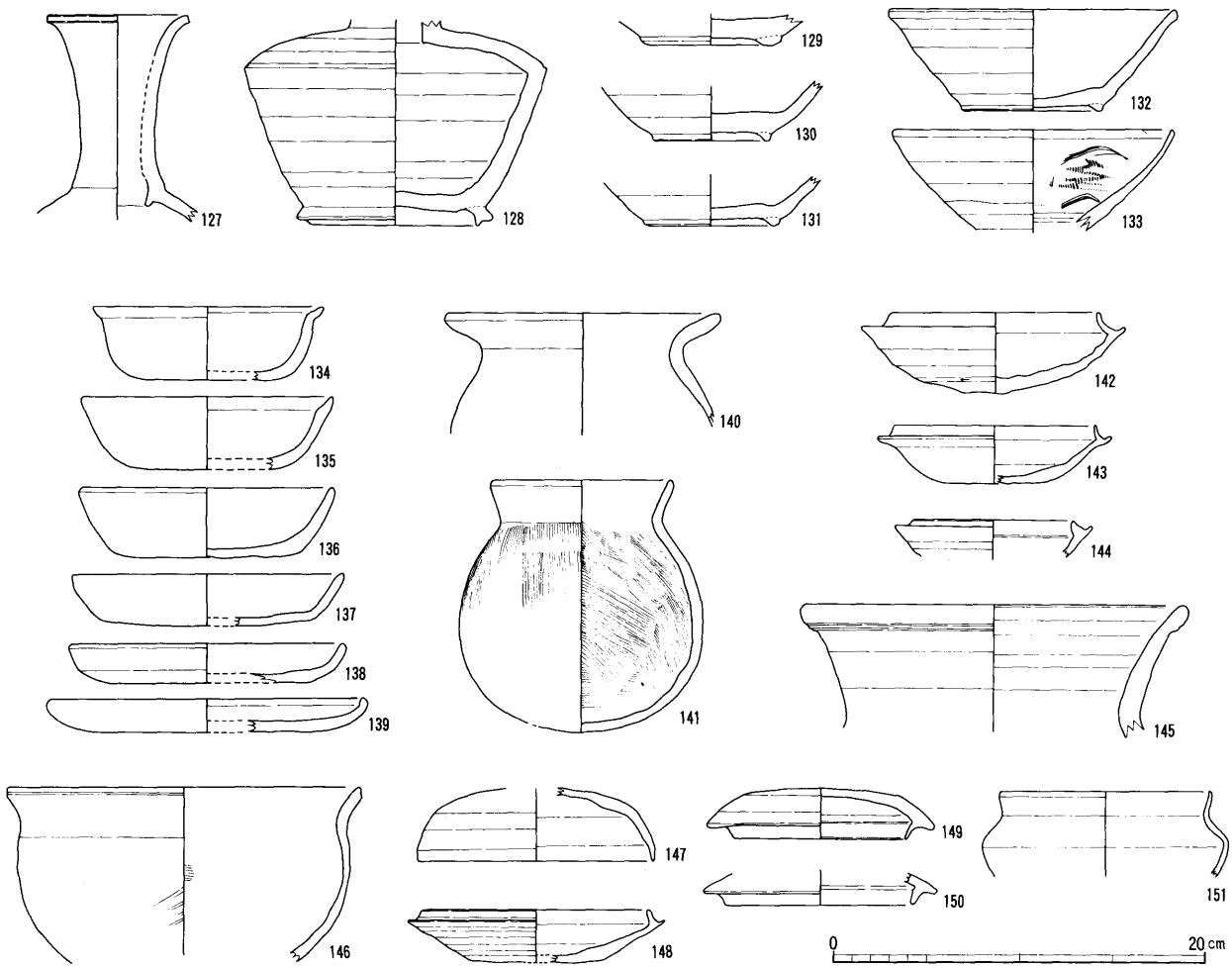
127・128は須恵器長頸壺である。127は口縁端部



第35図　ＳＤ９土層断面図２（土層図27～28）（１：40）



第36図　ＳＤ９中層遺物出土状況図（左１：100、右１：20）



第37図　ＳＤ９出土遺物実測図（126は１：３、127～151は１：４）

外面にほぼ直立する面をもつ。頸部に沈線はみられず、肩部も張りがなく丸みを帯びる。128は肩部が張り、稜の直上に沈線が一条巡る。高台は高く、内端面で接地する。

129～132は山茶椀である。いずれも高台にモミガラ痕が残り、体部はわずかに丸みを残す。129は渥美編年５～６型式、130～132は尾張編年６型式に相当する。

133は青磁椀である。器壁は薄手でやや内弯気味に立ち上がる。内面の体部と底部の境に段をもつ。体部内面に櫛状工具による施文がみられ、釉は外面下１/３を残して施釉される。太宰府編年Ⅲ－１に相当する。

中層（134～145）　134～139は土師器杯及び皿である。134 は口縁部が受け口状に屈曲するもので、体部は直立気味で器高は高い。135は口縁部内面が強くヨコナデされて面をもつ。136は口縁端部が丸く収まる。137は器高が低く、口径がやや大きい。138は口縁部下部にヨコナデによる稜線をもつ。139は口縁端部が内側に巻き込まれる。

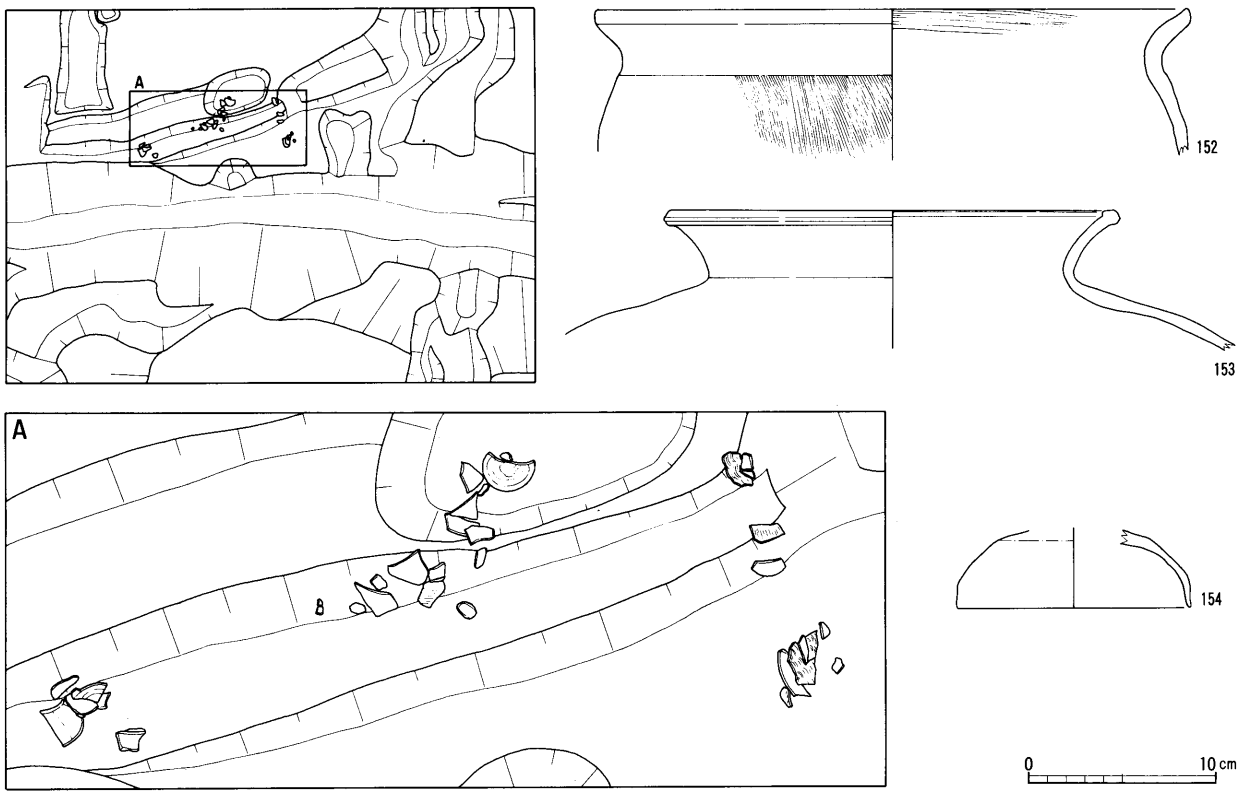
140～141は甕である。140は口縁部が外反して肥厚し、端部外面にヨコナデによる面をもつ。体部外面はタテハケ、内面はナナメハケ調整が施される。

142～144は須恵器杯身である。142は口径11.2cmで、底部ヘラ切り未調整。143は口径10.8cmで、器壁は薄く底部は平らである。144は口径8.5cmで、たちあがり部が短く非常に厚い。

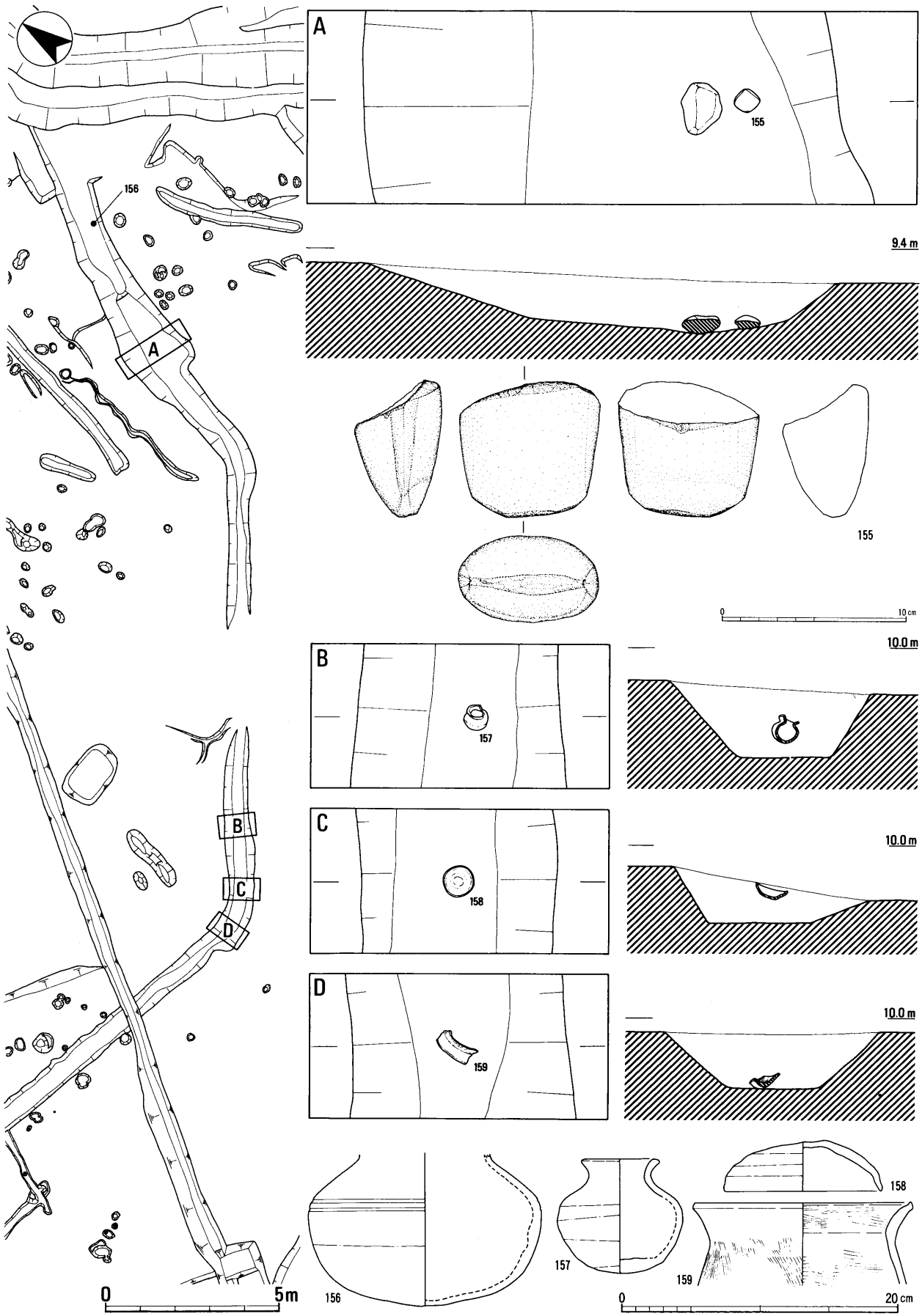
145 は須恵器甕である。口縁部が外側に肥厚し、下部に沈線状の段をもつ。

下層（146～151）　146は土師器甕である。器面は磨滅しているが、体部内面にヨコハケ調整の痕跡がみられる。口縁部は滑らかに外反し、端部外面に沈線が一条巡る。147は須恵器杯蓋である。稜の痕跡は認められない。148は須恵器杯身である。体部は直線的に開き、器高が低く扁平な形態を呈する。149・150須恵器蓋である。149は口縁端部が最も厚く、かえりの外面は滑らかにヨコナデされている。150は端部から天井部へかけての厚みがほぼ均一である。かえりは内面が直線的に成形されている。151は須恵器短頸壺である。器壁は薄く、調整も粗雑である。

土器集中地点　ＳＤ９とＳＤ18の接点付近で土師器・須恵器が集中して出土した。出土レベルが浅く、遺



第38図　土器集中地点実測図（１：100）、遺物出土状況図（１：20）、出土遺物実測図（１：４）



第39図　ＳＤ10実測図（１：160)、遺物出土状況図（１：20)、出土遺物実測図（155は２：３、156～159は１：４）

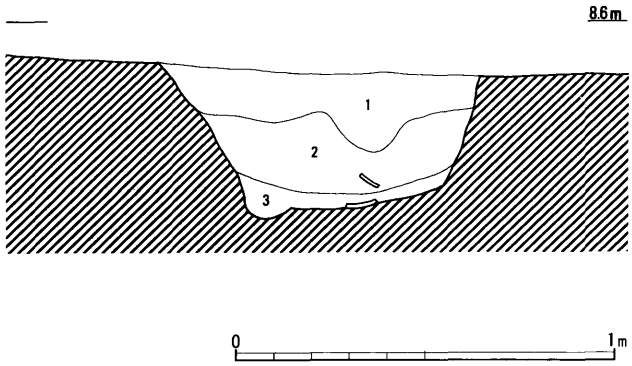
構に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物（152～154）　152は土師器甕である。口縁端部外面にほぼ直立する面をもつ。口縁部内面にヨコハケ、体部外面にタテハケが施される。153は須恵器甕である。口縁部が肥厚し、外面に凸線状の段をもつ。154は須恵器杯蓋である。天井部外面に1/2程度の回転ヘラケズリが施される。

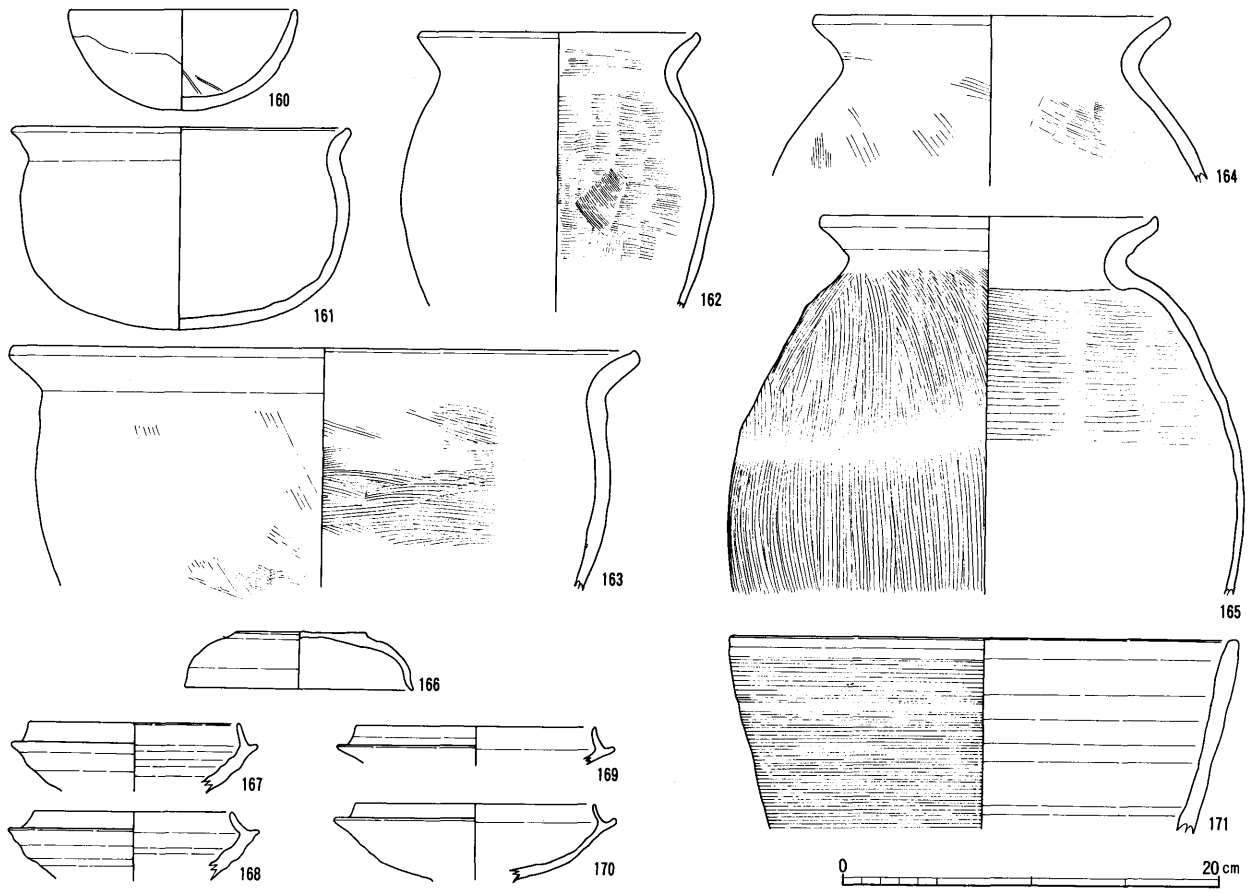
ＳＤ10（第37図）　Ｃ地区北端部で検出した溝であるが、八角形の一部を構成する様な、幾何学的な平面形を呈する（写真19）。幅約80cm、深さ約20cmで残存するが、ＳＤ９に合流する北側部分では幅が拡がっている。埋土は褐色土の単層である。溝は南北２箇所で折れ曲がっているが、遺物は北側のコーナーより北側と、南側のコーナー付近（写真27）から出土した。また、両コーナーの中間部分が途切れているが、これは後世の削平によるものと考えられる。

出土遺物（155～159、写真36）　155は磨製石斧である。折れて大半が失われているが、刃部と割れ口に磨滅がみられ、磨り石あるいは石杵に転用されたものと考えられる。156は須恵器壺である。肩部に２条の沈線が巡る。157は須恵器小型壺である。内外両面に漆が多量に膠着した状態で出土した。158は須恵器杯蓋で、天井部はヘラ切り未調整である。159 は土師器甕である。口縁端部外面に内傾する面をもち、内面には上端のツマミアゲに伴う窪みがみられる。体部外面はタテハケ、内面はヨコハケが施される。

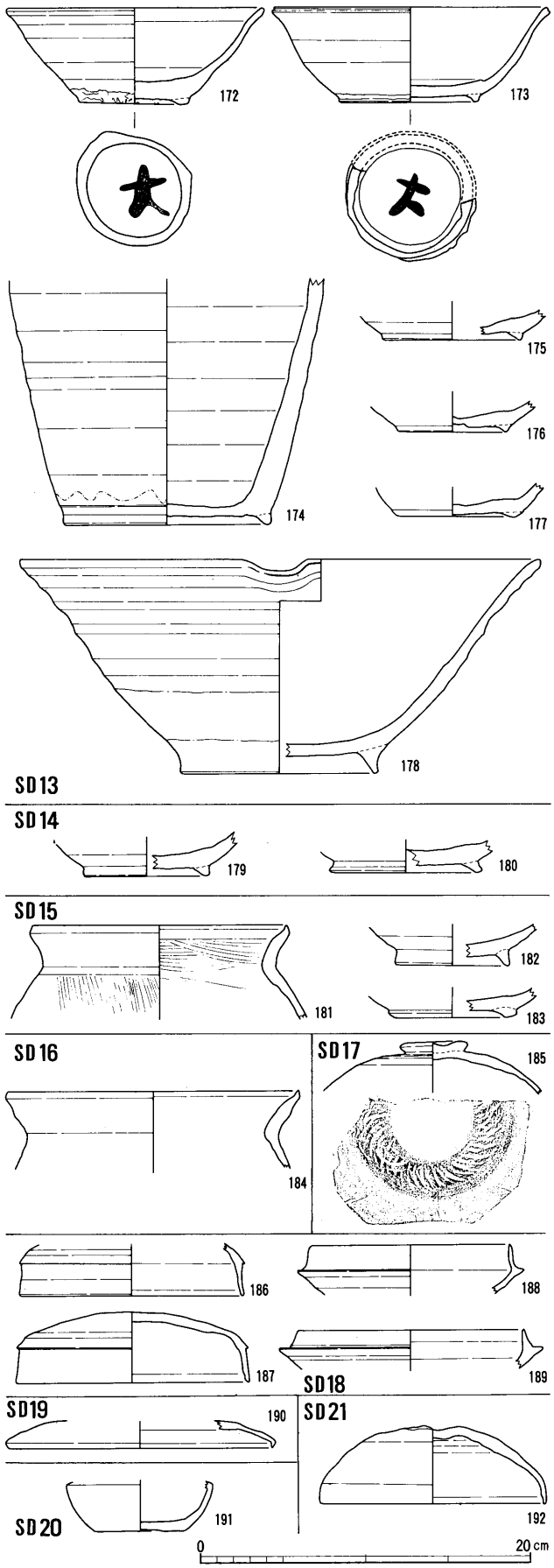
ＳＤ11　Ｃ地区西壁中央部から東北東へ流れる自然流水路である。途中に土坑状の落ち込み（ＳＫ38）



第40図　ＳＤ12土層断面図（１：20）



第41図　ＳＤ12出土遺物実測図（１：４）



第42図　ＳＤ13～ＳＤ21出土遺物実測図（１：４）

があり、ＳＤ９まで達する。ＳＤ９に切られてはいるが、ＳＤ８に繋がる可能性も考えられる。人工遺物は全く出土していない。

ＳＤ12　Ｂ地区南側を弧状に走る溝である。幅約80cm、深さ約40cm。埋土は３層に分けられるが、第２層の灰色砂は締まりが悪く、完形の土師器（160・161）が出土しており、比較的短期間で埋没したものとみられる。

ＳＤ13　Ｂ地区北端西壁際で数条検出された南北方向の溝のうちの１つである。褐色の埋土から灰釉陶器（174）、山茶椀（172～173・175～177）・片口鉢（178）が出土した。

ＳＤ14　ＳＤ13の東側に平行して検出された。赤褐色の埋土から山茶椀が出土している。

ＳＤ15　Ｂ地区中央部を東西方向に走る。水田区画の形成に伴うとみられる。土師器・山茶椀が少量出土した。

ＳＤ16　Ｂ地区南半部で検出された東西方向に走る短い溝の１つである。土師器小片が少量出土したのみである。

ＳＤ17　Ｂ地区南端部で検出された。褐色の埋土から須恵器（185）等が出土した。185は扁平なつまみが付く蓋である。天井部内面に円弧スタンプがみられる。

ＳＤ18　Ｂ地区南端で検出された。遺跡が立地する斜面とは逆方向に傾斜しており、ＳＤ９に流れ込む様な形をとる。灰色砂の埋土から須恵器（186～189）等が出土した。

ＳＤ19　Ｃ地区西拡張区で検出した。須恵器杯蓋（190）が１点出土したのみである。

ＳＤ20　ＳＤ19を切る状況で検出した。須恵器(191)が１点出土したのみである。ＳＤ10との切り合いは認められなかった。

ＳＤ21　Ｃ地区南壁に平行して直線的に走る。須恵器杯蓋（192）が完形で出土した。　（山口　格）

（２）掘立柱建物

Ｂ・Ｃ地区合わせて15棟の掘立柱建物を検出した。

ＳＢ22　Ｂ地区北端部で検出した桁行３間（6.65m）×梁行２間（3.45m）の東西棟の総柱建物である。

1柱間は不等間であり柱通りも悪いが、桁行の中央の柱間は狭く柱穴も浅いことが確認できる。棟方向はN52.5°Wである。東隅の柱穴が深く沈み込んでいるのは、この辺りを境に遺構基盤層が締まりの良い弱粘質灰白色シルトから締まりの悪い黄褐色シルトに代わることによるものかもしれない。周辺で多数のピットを検出したが建物プランは確認出来ず、単独で存在したものと考えられる（写真10）。

出土遺物は磨滅した土師器の小片のみで図示出来るものはない。

ＳＢ23　Ｂ地区南端部で検出した2間（2.88m）×2間（2.80m）の総柱建物である。平面プランはほぼ正方形であり方向はN37.2°Eである。中央の柱穴は柱通りに沿って南へ約30cmずれており、径は外側の柱穴よりもやや小さいが底のレベルには特に差異はみられない（写真11）。

出土遺物は土師器・須恵器の小片で混入とみられるものはないが、図示できるものはない。

ＳＢ24　Ｂ地区南端部で検出した桁行4間（5.25m）×梁行2間（3.22m）の東西棟の建物である。棟方向はN71.7°Wである。桁行の柱間が梁行の柱間より狭く、柱間の平均値は前者が約1.31m、後者が1.61mである。柱掘形はＳＢ22・23に比べるとやや大きく径約50～80cmである（写真9）。

出土遺物は土師器・須恵器の細片のみで、図示できるものはない。

ＳＢ25　Ｂ地区南端部で検出した桁行3間（3.52m）×梁行3間（3.46m）の南北棟の総柱建物であり、棟方向はN31.3°Eである。柱穴が検出されなかった箇所が2ヵ所あり、後世の削平による消滅あるいは柱穴が残らない構造（台石をもつなど）の柱が存在したものかもしれない。（写真12・13）。

出土遺物は土師器・須恵器の小片のみである。

ＳＢ26　Ｃ地区中央部東寄りで検出した。ＳＤ1と重複しているため1間（2.12m）×2間（3.48m）のプランを確認したに止まるが、南へ延びて2間×2間以上の建物になると考えられる。これに従えば棟方向がN41.5°Eの南北棟となる。

出土遺物は土師器の小片のみで、図示できるものはない。

ＳＢ27　Ｂ地区中央部南東寄りで検出した。ＳＢ26と同様にＳＤ1と重複しているため、1間（2.64m）×1間（2.50m）のプランを確認したに止まるが、2間×2間以上の建物になる可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＢ28　Ｃ地区南西端で検出した。調査区南壁にかかっているため全体のプランは確認できなかったが、壁面に柱列に対応するピットが確認されたため3間（3.82m）×1間（約1.30m）以上の建物であると考えられるが、東西方向の柱間は平面検出によるものではないため正確な数値は不明である。柱列は3間のうち中央の1間（1.15m）が両側（1.31～1.35m）に比べやや狭い。柱列の方向はN36.6°Wである。

遺物は出土していない。

ＳＢ29　Ｃ地区南側で検出した桁行4間（7.32m）×梁行3間（4.62m）の南北棟の建物である。

棟方向はN31.9°Eである。東側柱列と隣接するＳＢ30の西側柱列に一部重複がみられ、ＳＢ30に切られていることが確認された。柱掘形は方形のものが大半を占め、隅柱の掘形は他のもの（約40×50cm）に比べ大型（約60×80cm）である。梁行の柱間は等間と考えられるが、桁行の柱間は中央の2間が広く（1.86～2.08m）外側の1間が狭い（1.52～1.75m）（写真8）。

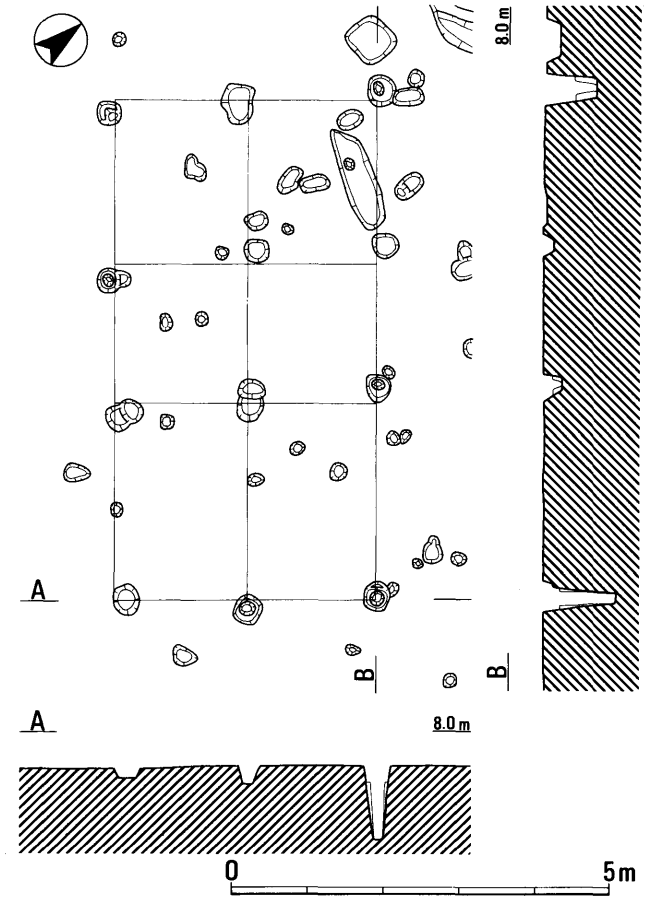
出土遺物は須恵器杯身（193 ）および土師器小片である。

ＳＢ30　Ｂ地区南側で検出した桁行4間（6.34m）×梁行2間（3.75m）の南北棟の建物である。棟方向はN35.9°Eである。東隅の柱穴が隣接するＳＢ29の南隅の柱穴を切っている状況が確認された。梁行の柱間（1.82m～1.93m）は桁行の柱間（1.32～1.80m）よりもやや広いが、桁行・梁行それぞれは

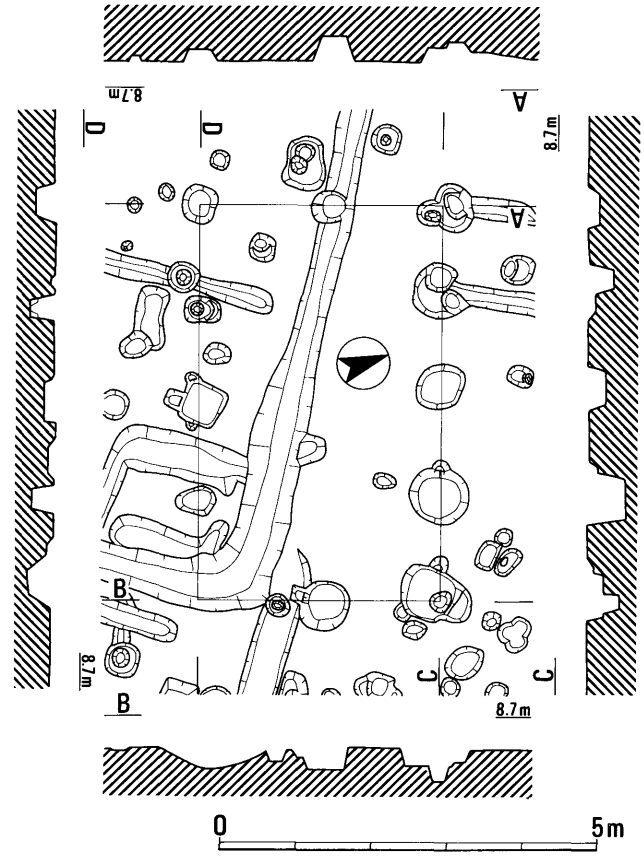
出土遺物は束柱穴から出土した須恵器杯身（194）1点のみである。器壁が薄く、受け部直下で体部が屈曲する点が特徴的である。口縁端部は欠損しておる通し柱をもつ建物と考えられる（写真8）。

出土遺物は土師器小片で図示できるものはない。

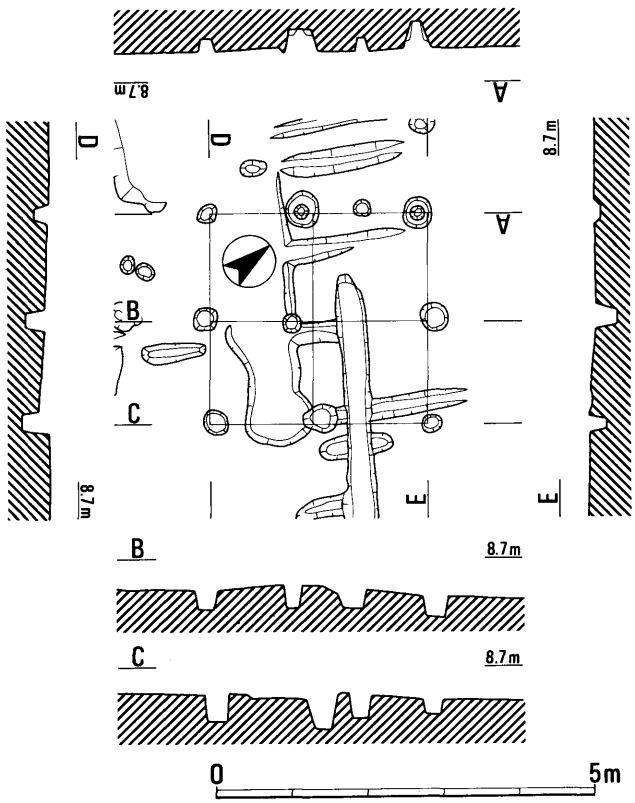
ＳＢ31　Ｃ地区南東部東壁際で検出した桁行4間（5.00m）×梁行2間（2.72m）の東西棟の建物である。棟方向はE1.1°Sである。柱間は桁行と梁行がほぼ等しい。ＳＢ32と柱穴が1つ重複するが、



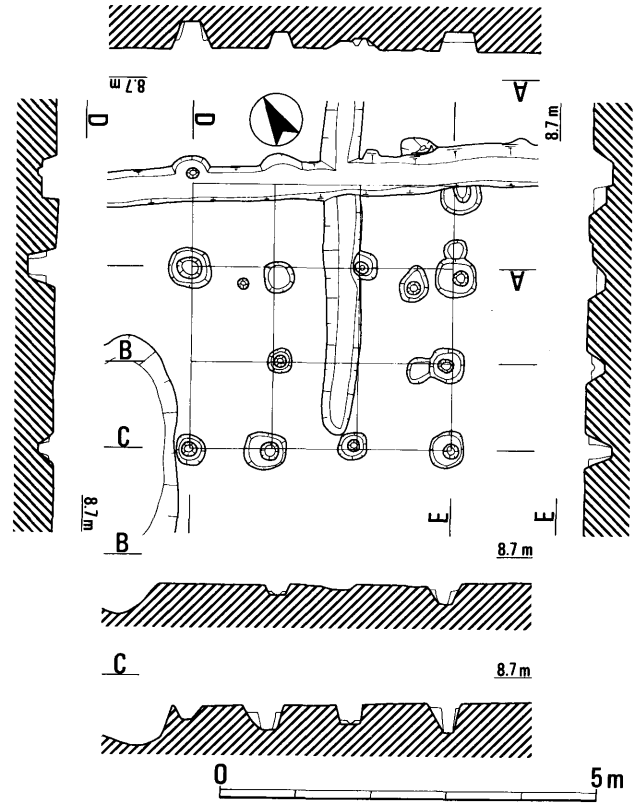
第43図　ＳＢ22実測図（１：100）



第45図　ＳＢ24実測図（１：100）



第44図　ＳＢ23実測図（１：100）



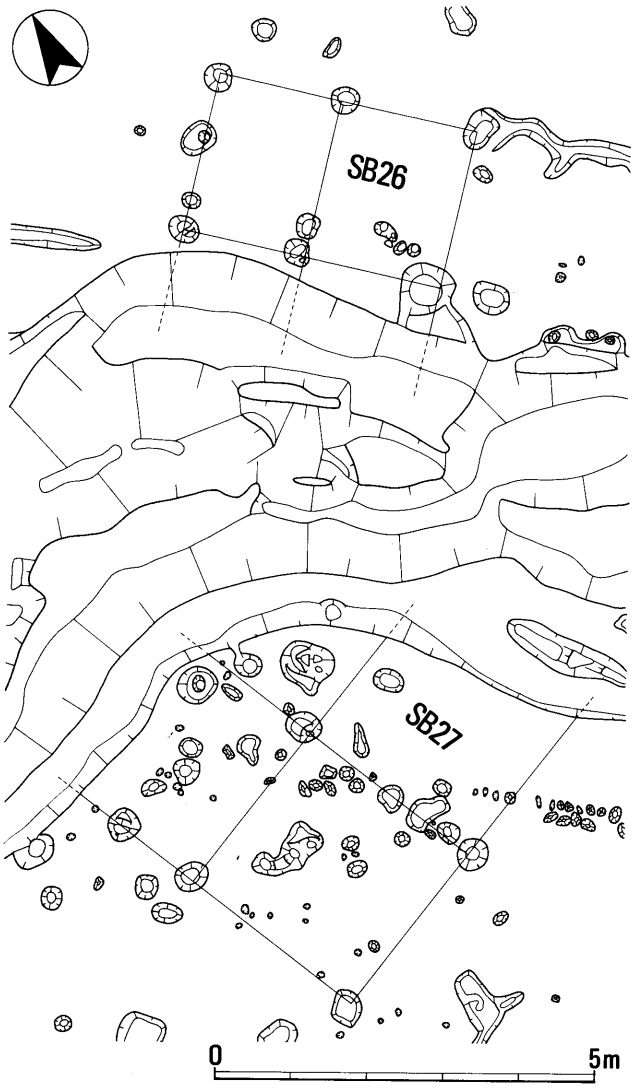
第46図　ＳＢ25実測図（１：100）

切り合い関係は確認できなかった。

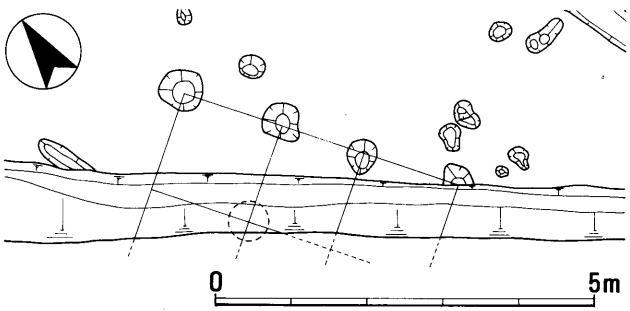
遺物は全く出土しなかった。

ＳＢ32　Ｃ地区南東部東壁際で検出した。2間(3.52m)×2間（3.52m）の総柱建物とみられるが南東隅の柱穴は調査区外となり、未確認である。また北辺を東に延長した所にもピットが検出されており、桁行3間以上の東西棟の建物となる可能性も考えられる。棟方向はN1.2°Wであり、柱掘形は円形である。

遺物は全く出土しなかった。



第47図　ＳＢ26・27実測図（1：100）



第48図　ＳＢ28実測図（1：100）

ＳＢ33　Ｃ地区南東部東壁際で検出した建物である。3間（6.33m）×1間（2.19m）のプランを確認したが、調査区外へ延びるため全体規模は不明である。柱穴がＳＢ32・ＳＢ34と各1ヵ所重複する。確認できた範囲では柱間は等間で柱掘形は円形である。また棟方向は東西・南北どちらとも決めがたいが、3間検出した柱列の方向はN26.7°Eである。

遺物は全く出土しなかった。

ＳＢ34　Ｃ地区南東部東壁際で検出した建物である。2間（3.77m）×1間（2.04m）のプランを確認したが、調査区外へ延びるため全体規模は不明である。柱穴がＳＢ33と1ヵ所重複する。確認できた範囲では柱間は東西方向（2.04m）が南北方向(1.88～1.89m）よりもやや長く、東西を棟方向とするならばN85.5°Wの東西棟の建物となる。

遺物は全く出土しなかった。

ＳＢ35　Ｃ地区南東部東壁際で検出した建物である。3間（6.07m）×2間（3.06m）のプランを確認したが、調査区外へ延びるため全体規模は不明である。南北列の柱間は3間のうち中央の1間（1.77m）が狭く、外側（2.11～2.77m）が広い。東西列の柱間は南北列よりもかなり狭い（1.49～1.57m）。南北列の方向はN10.2°Eであり、棟方向は東西の可能性が考えられるが断定は避けたい。柱掘形は不整形のものが多いが方形のものもみられる。
り口径は不明である。

ＳＢ36　Ｃ地区南端部壁際で検出した建物である。3間（4.36m）×1間（1.21m）のプランを確認したが、調査区外へ延びるため全体規模は不明である。柱間は1間の列よりも3間の列（1.37～1.53m）の方が広く、3間の列を桁行きと考えるならば棟方向がN44.1°Wの南北棟となる。

遺物は全く出土しなかった。

（清水正明・山口　格）

（3）柱列

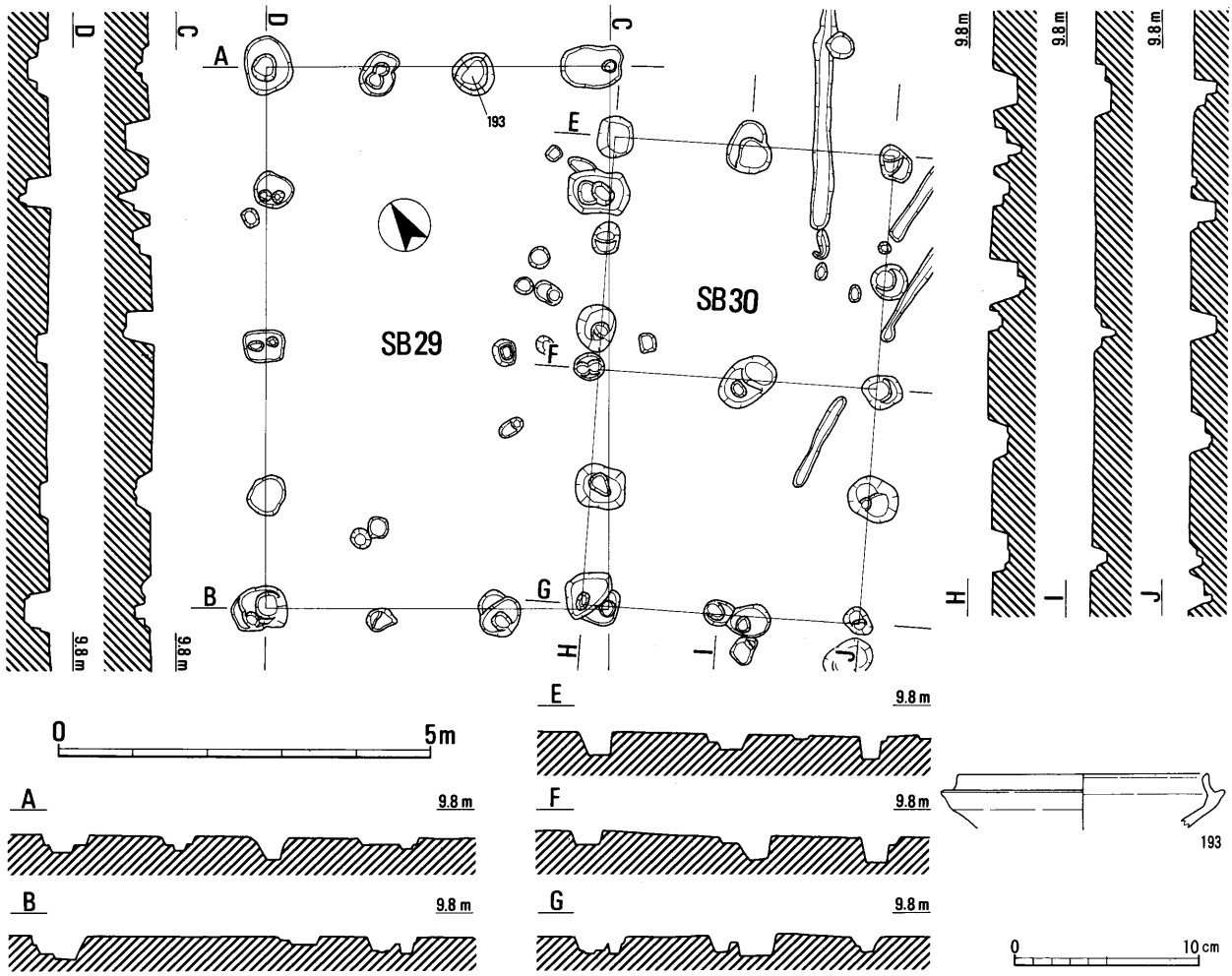
ＳＡ37　Ｃ地区南端部東壁際で検出した。東西４間（約6.5ｍ）×南北８間（13.9ｍ）のＬ字形を呈するが、南北列の北から３間目は柱穴が３個近接しており、柱間・間数には不確定要素が残る。柱掘形には方形・円形両方がみられる。南北列の方向はＮ15.2°Ｅである。柱穴からの出土遺物は認められない。

なお、柱列の内側にあたる調査区東側の状況については、未調査であるため推定は困難であるが、現在確認されている掘立柱建物群（ＳＢ26～36）の分布状況からみても東側へ建物群が拡がることはまず間違いなく、また、周辺の地形観察によっても少なくとも水田２～３枚分のスペースが標高9.1ｍのレベルで存在する（写真２）。谷から流れ出る水の被害を直接的に被る恐れのない場所に占地して建物を構築し、なかでも最も高い位置に重要施設を配置したと推定される。

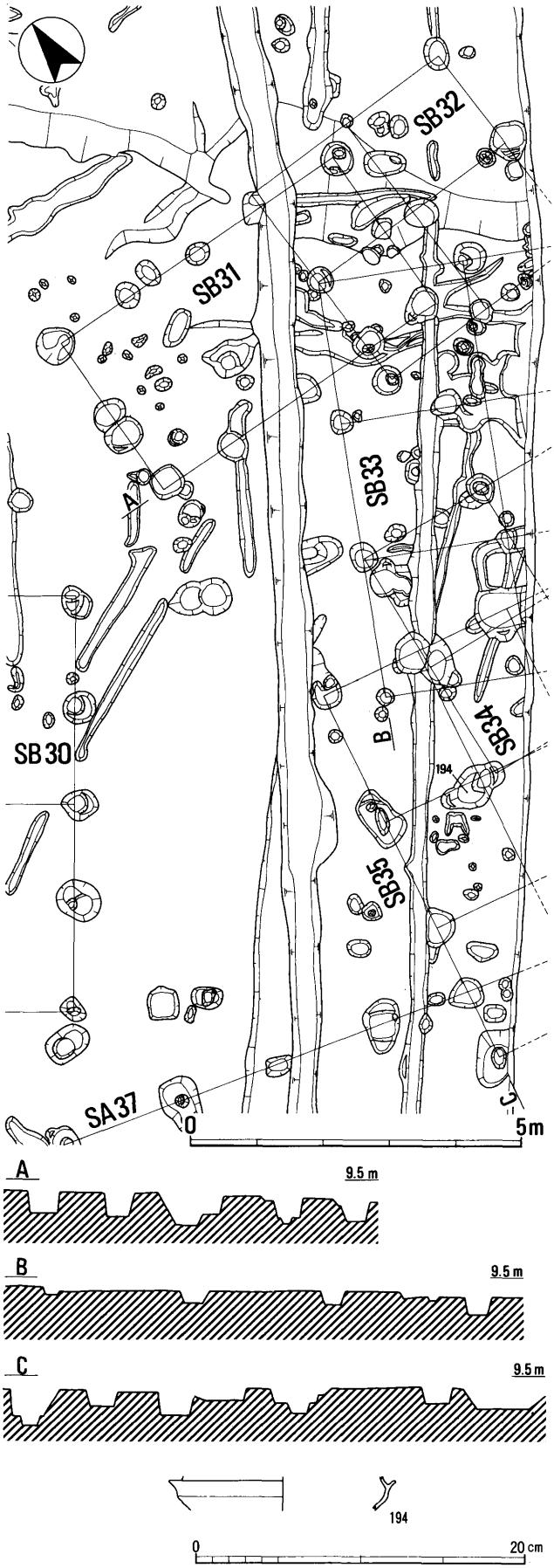
（山口　格）

（4）土坑

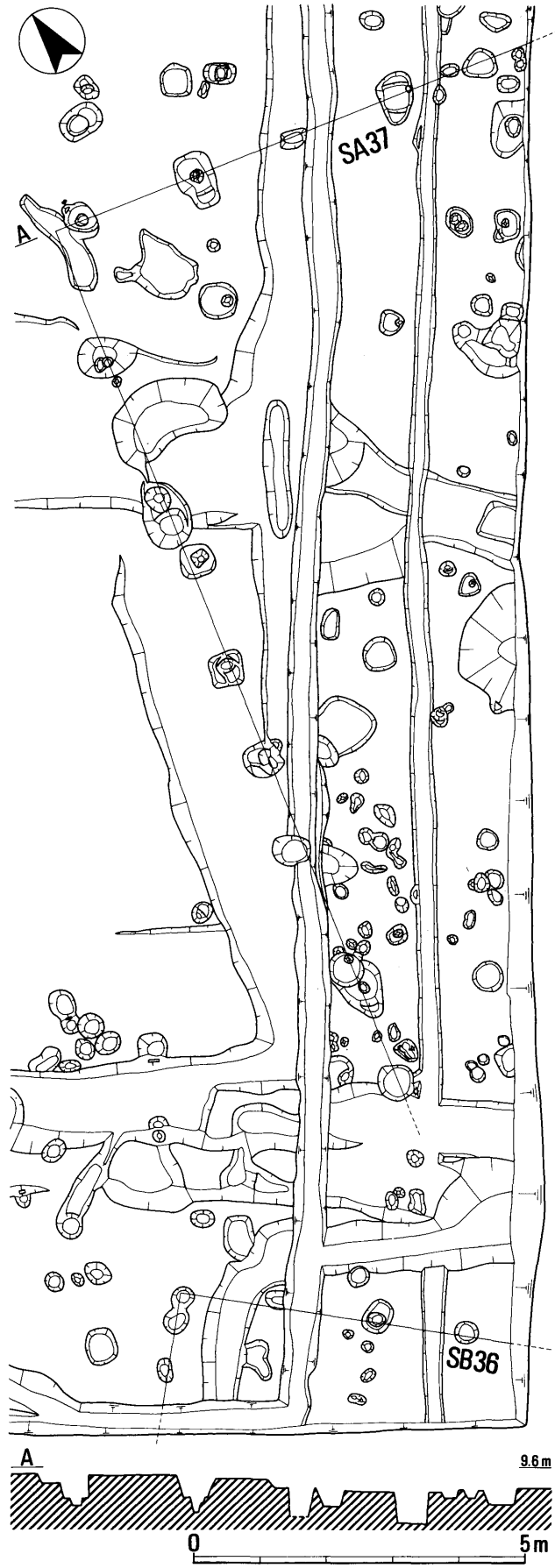
ＳＫ38　ＳＤ11埋土掘削中に一部が土坑状に落ち込むことが確認されたため、セクションベルトを残して掘り下げた（第50図）。埋土はＳＤ11からの流れ込みによるものとみられる。第３層以下の各層には、



第49図　ＳＢ29・30実測図（１：100）、ＳＢ29出土遺物実測図（１：４）



第50図　ＳＢ31～35実測図（１：100）
ＳＢ35出土遺物実測図（１：４）



第51図　ＳＢ36、ＳＡ37実測図（１：100）

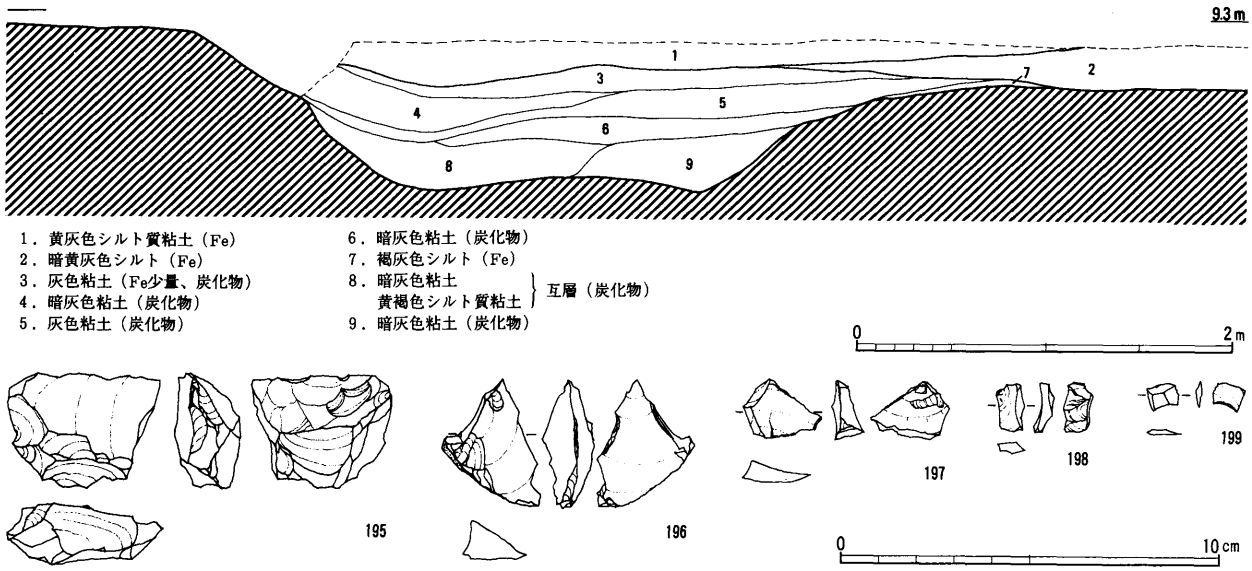
炭化した植物遺体が薄い層状に含まれる。埋土掘削中にチャート製の剝片（196）が出土したため、以後掘削した埋土をふるい掛けし、その結果５点の石器（195～199）が出土した。いずれも剝片であるが195は２次加工痕をもつ（写真19・39）。

ＳＫ39　Ｃ地区北東端でＳＤ９に接する形で検出された不整形の土坑である。埋土の堆積状況はＳＫ38に類似するが、ここでは植物遺体の層状堆積はみられず、人工遺物も全く出土していない。

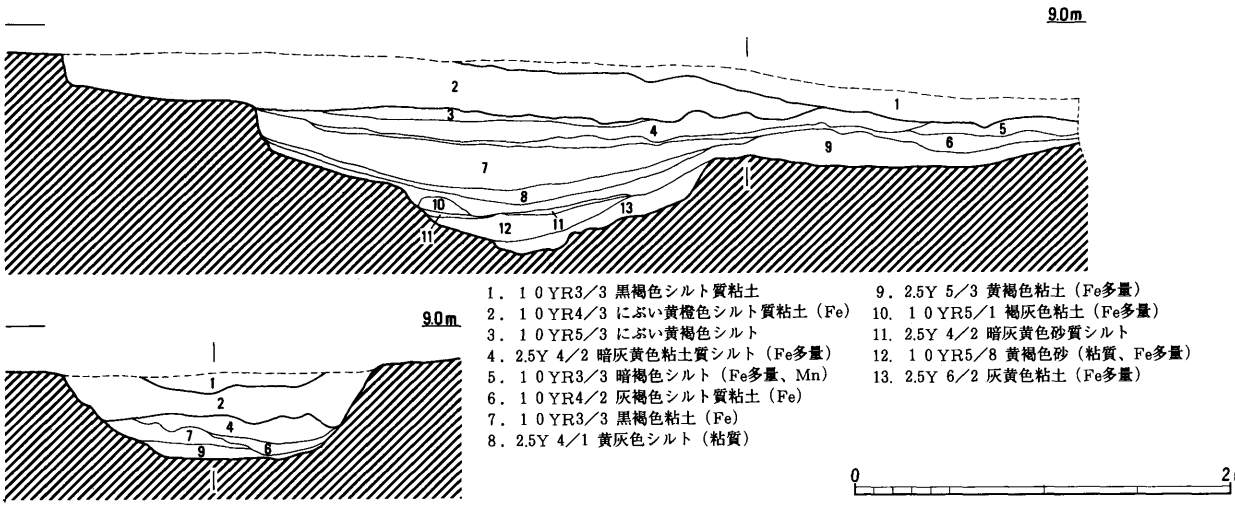
ＳＫ40　ＳＫ39の南東側に隣接するかたちで検出された不整形の土坑で、ＳＤ４とＳＤ９の両方に接する位置にある。また、ＳＫ40の北側部分はＳＤ９から南へ張り出す土坑状の窪みと重複しているが、切り合い関係からＳＫ40が新しいと確認された。出土遺物は土師器と須恵器である。

土師器（200～201）　200は小型の甕である。体部内面に強いヨコナデが施される。201は甕である。口縁端部が上方につまみ上げられるタイプで、内面にはヨコハケ調整が施される。

須恵器（202～205）　202・203は蓋杯である。202は口径13.8cmで、たちあがり部は薄手で端部内面に面をもつ。203は口径8.6cmでたちあがり部が厚く短い。内面は弯曲する。底部はヘラキリ未調整である。204・205は蓋である。204はかえりが口縁端部より



第52図　ＳＫ38土層断面図（１：40）.出土遺物実測図（１：２）

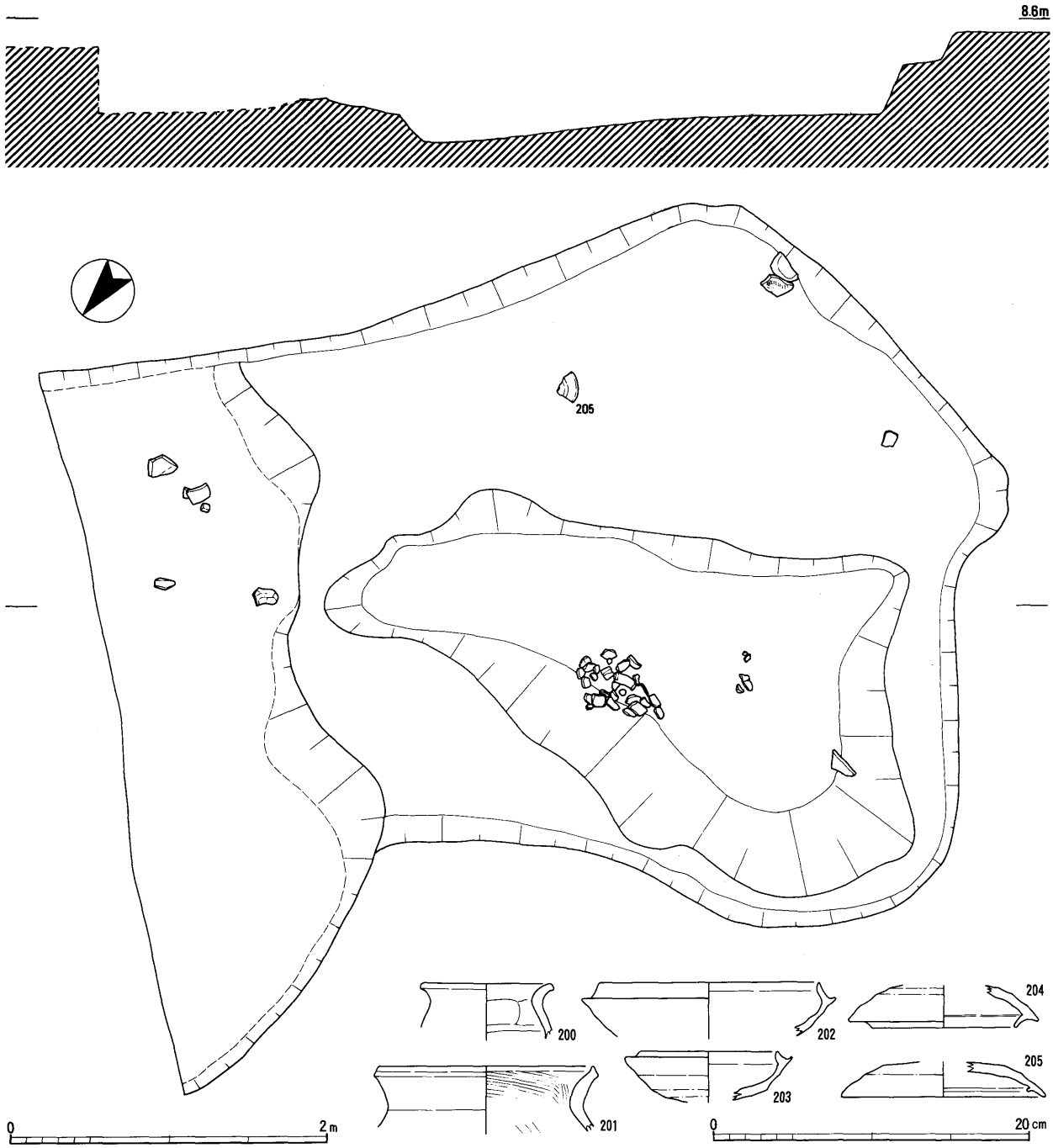


第53図　ＳＫ39土層断面図（１：40）

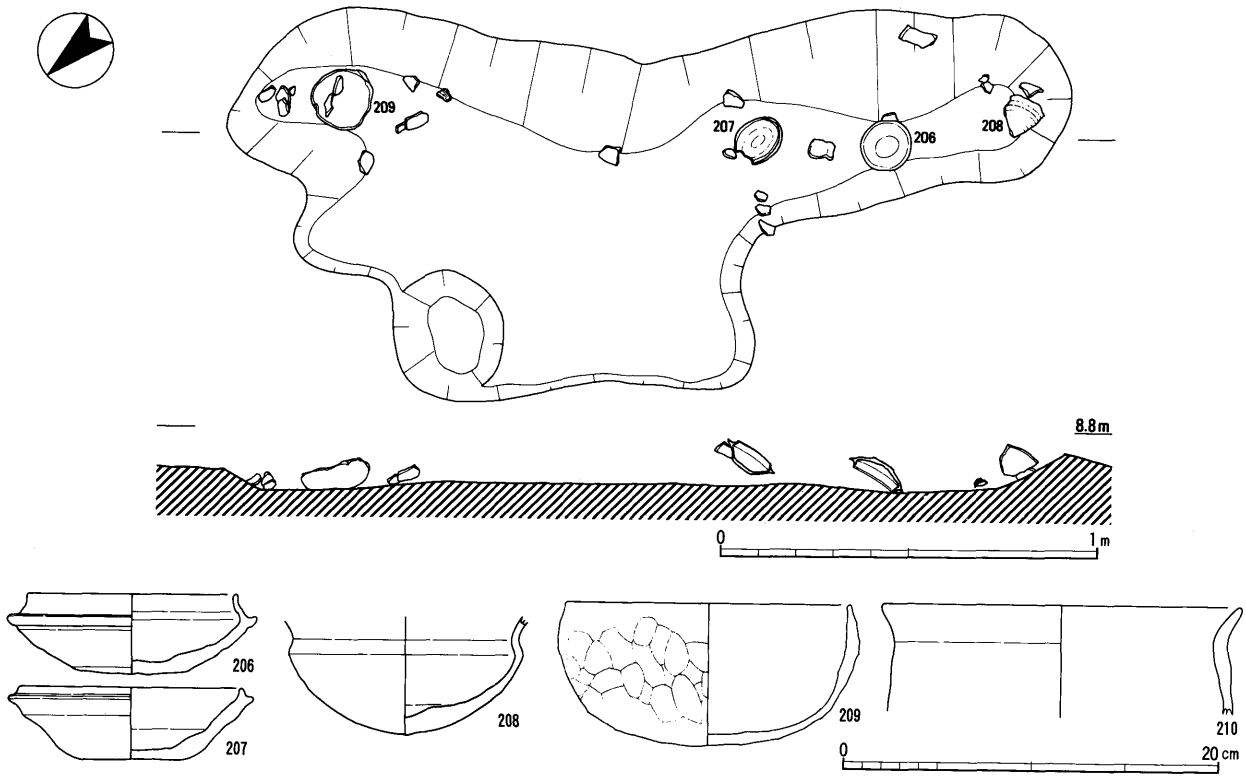
も下方へ伸びるもので、天井部の厚みはほぼ一定している。205はかえりが短く、口縁端部を結ぶ線にも満たないものである。天井部の厚みは口縁部に向かって薄くなる。

ＳＫ41　Ｂ地区南端部付近、ＳＤ９の北側で検出した不整形の土坑である。埋土は黄灰色砂の単層で、ＳＤ12と同様比較的短期間のうちに埋没したものと思われる。出土遺物は土師器と須恵器である。

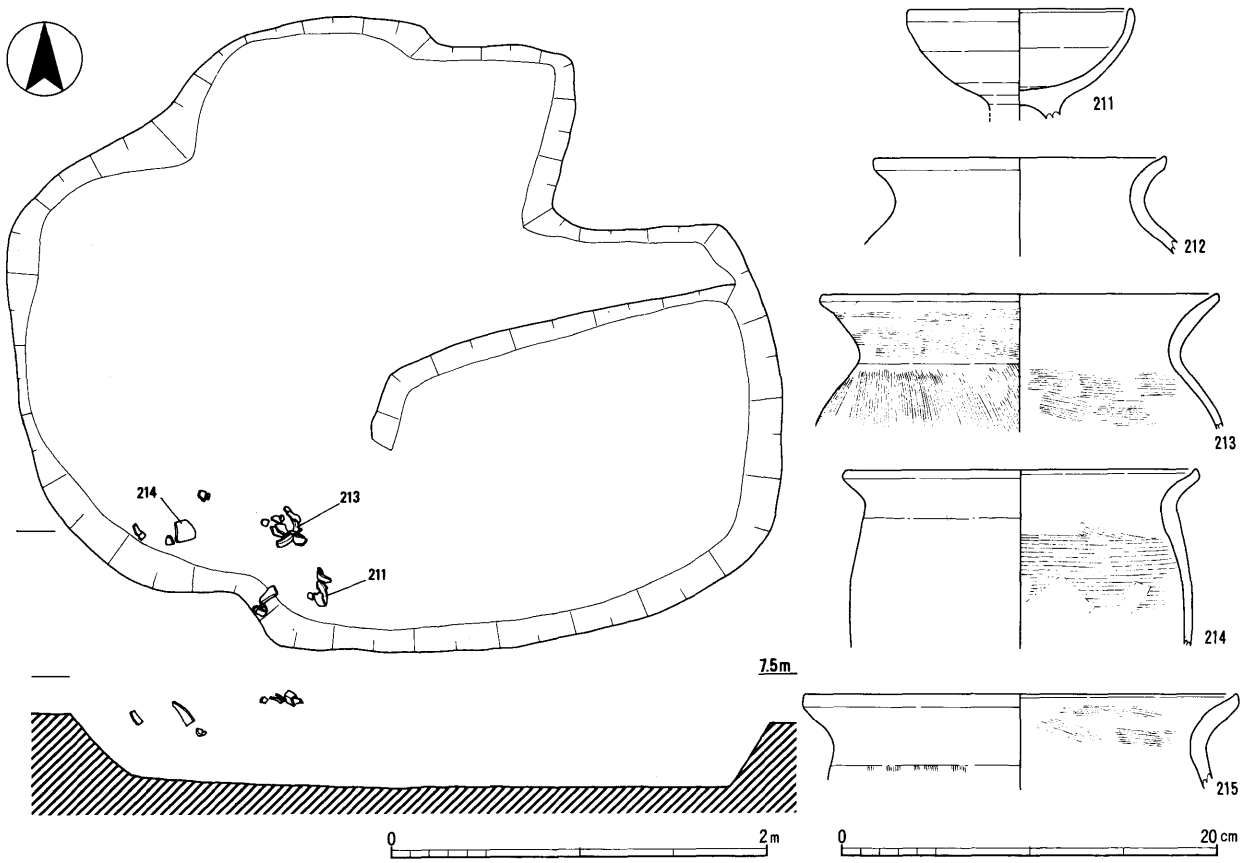
須恵器（206～208、写真37）　206～207は杯身である。206はたちあがり部が中程でくびれて直立し、口縁部内面が肥厚してやや特異な形態をとる。受け部直下には沈線状の窪みが巡る。底部ヘラ切り未調整。207は磨滅が甚だしく細部は不明であるが、受け部・たちあがり部共に短く、たちあがり部は直立気味である。体部上部１/３のところにヨコナデによる稜をもつ。底部・体部共に直線的で、206とは



第54図　ＳＫ40実測図（１：40）、出土遺物実測図（１：４）



第55図　ＳＫ41実測図（１：20)、出土遺物実測図（１：４）



第56図　ＳＫ42実測図（１：40)、出土遺物実測図（１：４）

全く異なった印象を受ける。208は鉢である。体部上部がＳ字状にくびれて、口縁部が開き気味に伸びる。

土師器（209・210、写真37）　209 は鉢である。成形は粗雑で、体部外面に不定方向のヘラケズリが施される。口縁部がやや内傾し、端部がやや薄くなる。210は甕である。体部上端部から口縁部にかけて肥厚し、口縁端部は丸く収まる。

ＳＫ42　Ｂ地区東端付近の第１遺構面で検出した不整形の土坑である。当初竪穴住居かと思われたが、完掘時の形状および柱穴がないことから土坑と判断した。埋土は黄褐色砂の単層で、埋土上部で数個体分の土師器片が出土した。いずれも磨滅・風化が甚だしい。

土師器（211～215、写真37）　211は高杯である。杯部は半球状を呈し、端部は丸く収まる。212～215は甕である。212 は口縁端部外面にわずかに外傾する面をもつ。体部上端部から口縁部にかけてわずかに肥厚する。213 は口縁端部外面にわずかに内傾する面をもつ。口縁部下部から中央部が肥厚し、端部はやや薄くなる。214 は口縁端部外面に内傾する面をもつ。端部内面かわずかに窪み、上端は尖る。口縁部全体が肥厚している。

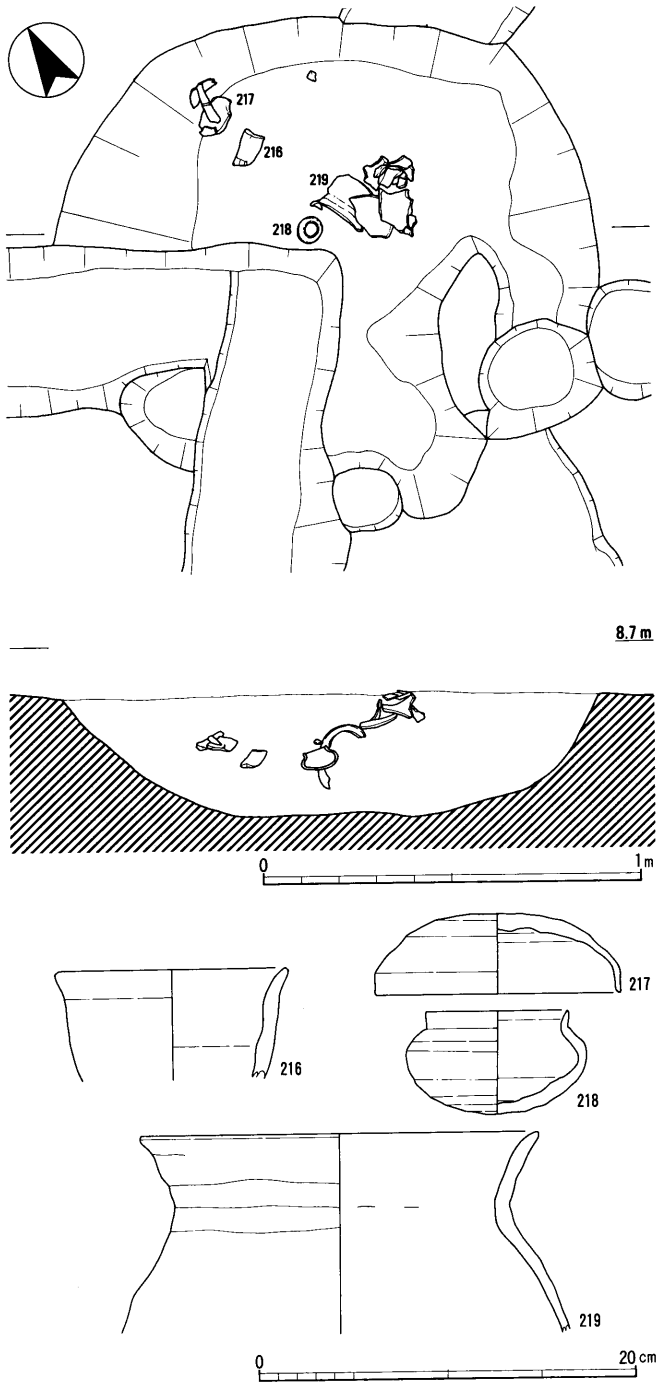
ＳＫ43　Ｂ地区中央部で検出した円形の土坑であるが後代の溝・ピットに切られており、全体の形状は不明瞭である。しかし他の遺構と重複していない部分の埋土は黄褐色砂の単層で安定しており、この埋土からの出土遺物は一括資料と認められる（写真18）。出土遺物は土師器と須恵器である。

土師器（216・219,写真38）　216 は小型の鉢とみられる。体部が開き気味にのびて口縁部はさらに外反する。内面にはヨコナデ調整痕がみられるが、つくりは粗雑である。219 は甕である。体部上端から口縁部にかけて肥厚し、口縁端部はやや尖り気味に収まる。つくりは粗雑であるが、体部上端部から口縁部にかけての調整は特に粗く、粘土の継ぎ目が明瞭に認められる。

須恵器（217・218、写真37）　217は杯蓋である。天井部はヘラキリ未調整。218は短頸壺である。体部最大径は上約１／３の位置にあり、下半部は回転ヘラケズリ調整される。頸部はわずかに外傾して直線的にたちあがる。口縁部内面は滑らかにヨコナデされ、端部は尖って断面三角形を呈する。

ＳＫ44　Ｂ地区南端東壁際で検出した不定形の土坑である。埋土は黄灰色砂の単層で土師器甕（220）が出土した。

220は口縁端部外面が内傾し、上端がつまみ上げられるため内面は窪む。口縁部は肥厚し、中央部が最大厚となる。



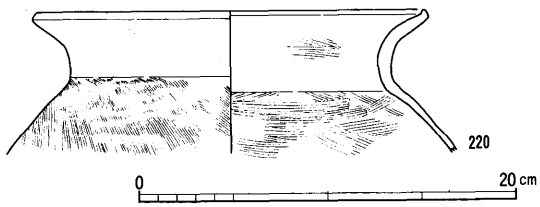
第57図　ＳＫ43実測図（１：20）、出土遺物実測図（１：４）

ＳＫ45　Ｂ地区中央部南西寄りで検出した円形の土坑である。北東側の壁面上部が焼土化しており土坑内で焼成が行われたことが判る。埋土は上下２層に分かれ、上層は多量の炭と焼土が混じる暗灰色土、下層が黒灰色粘質土と細かいブロック状の地山の混合土であり、上層と下層の間にはごく薄い木炭の層がみられる。出土遺物は木炭粒と焼土のみで、土器等は認められない。

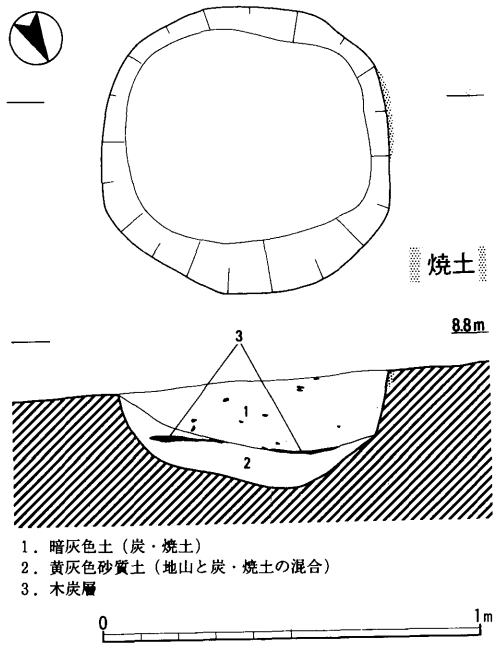
なお、ＳＫ45の検出地点は中世墓ＳＸ46～49に囲まれる位置にあり、これらの遺構の関連施設である可能性が考えられる。

（５）中世墓

今回の調査区内では、中世の墓と考えられる遺構が４基検出された。各遺構の平面位置はＢ地区中央部南西寄りに集中する。形態は４基のうち１基が円形、他の３基は長方形であり、円形の１基が他の３基とやや離れた位置にある。



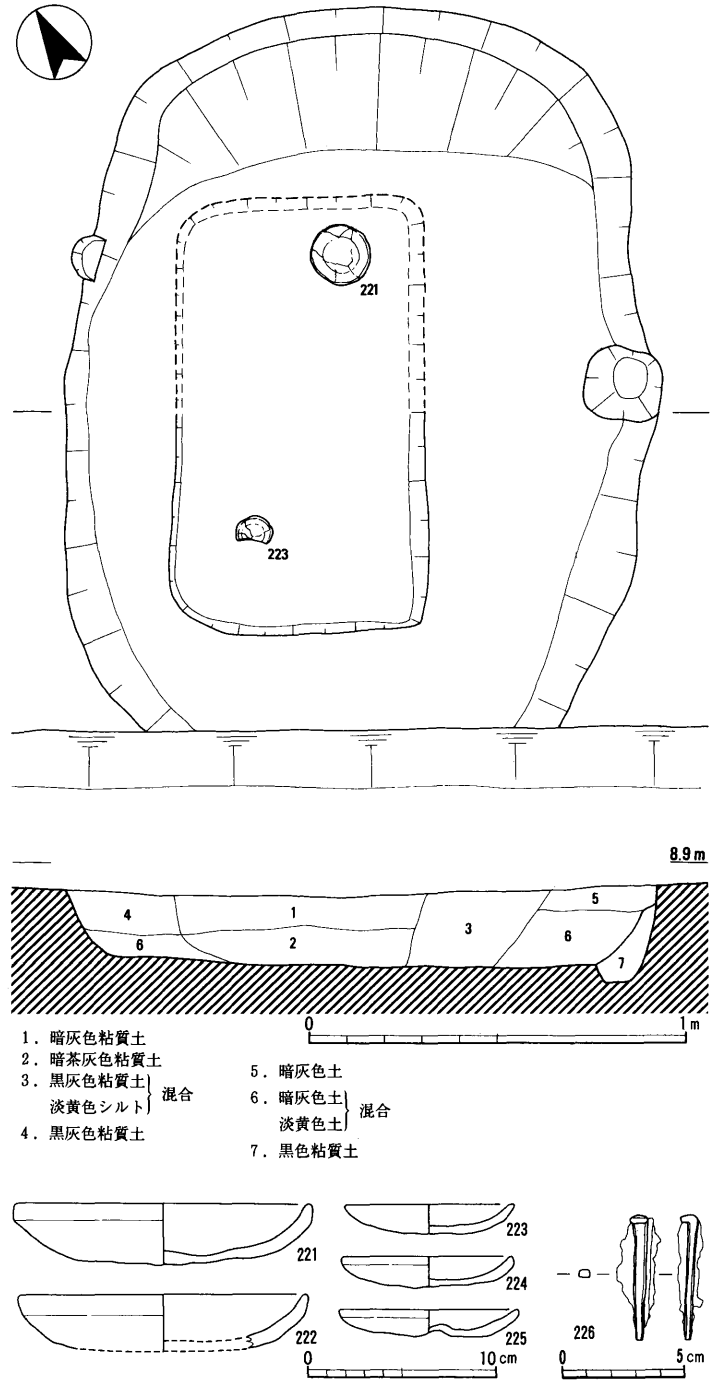
第58図　ＳＫ44出土遺実測図（１：４）



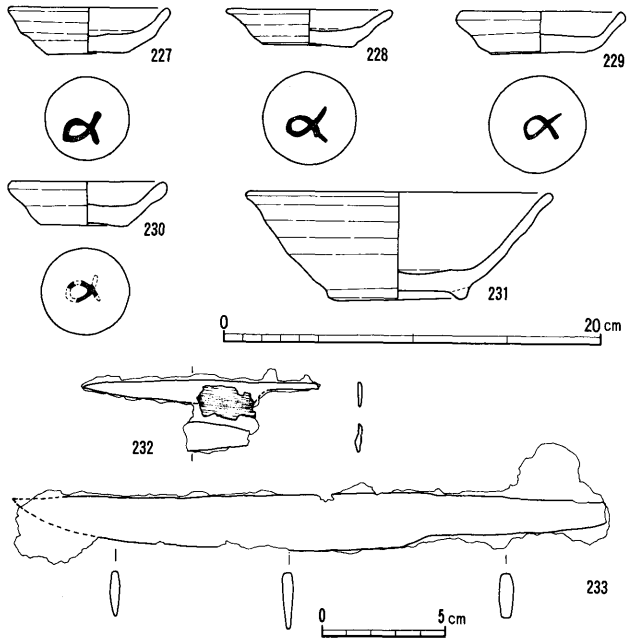
第59図　ＳＫ45実測図（１：20）

ＳＸ46（第58図、写真14）　南端部を失っているが、約２ｍ×1.5 ｍの隅丸長方形である。

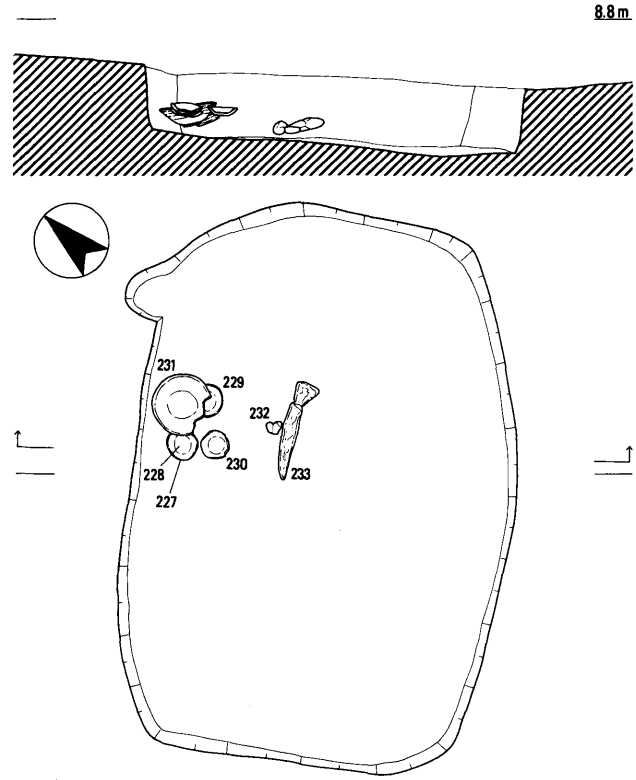
その中央部から、木棺の痕跡とみられる約１ｍ×0.65ｍの長方形の土坑を検出した。残存する深さは棺内棺外共に16～20㎝。埋土は棺内棺外共に上下２層に分層出来るが、棺痕跡東側に接する墓坑の埋土は分層出来ない。棺痕跡の埋土は細粒で粘性が強く、墓坑の埋土と明確に識別できる。棺痕跡の埋土上層

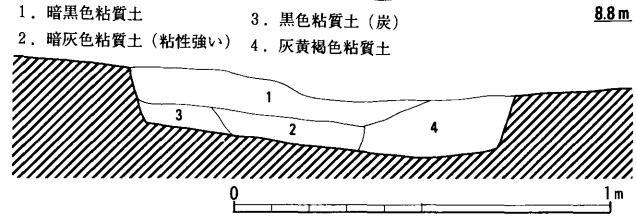


第60図　ＳＸ46実測図（１：20）、出土遺物実測図
（221～225は１：４、226は２：３）

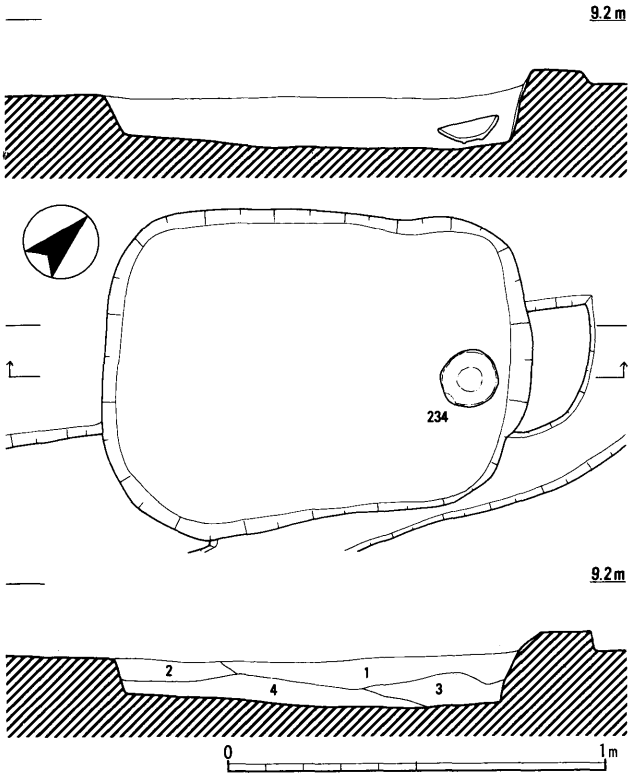


第61図　ＳＸ47出土遺物実測図（227～231は１：４、232～233は２：３）

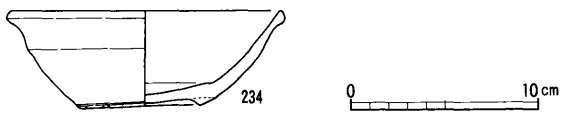




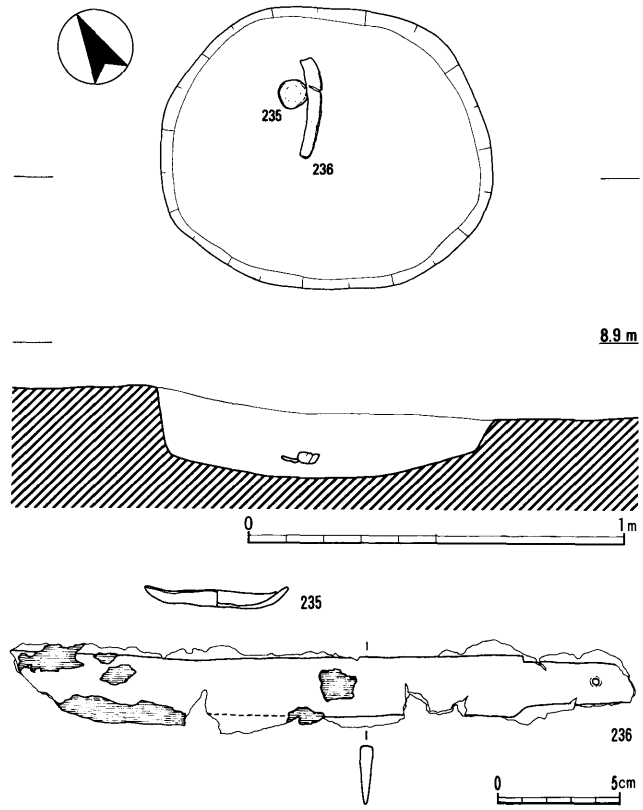
第62図　ＳＸ47実測図（１：20）



1．暗黄褐色粘質土（暗褐色粘土ブロック）
2．暗黄褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．灰褐色粘質土



第63図　ＳＸ48実測図（１：20）、出土遺物実測図（１：４）



第64図　ＳＸ49実測図（１：20）、出土遺物実測図（235は１：４、236は２：３）

から土師器皿２点（221・222）、土師器小皿３点（223～225）が出土した。このうち221 は北側短辺付近で、223は南西隅付近で共に正立状態で出土した。棺痕跡からは他に鉄釘（226）が出土している。また土坑中央部両側辺でピットが検出され、切り合いから墓坑埋没後であることが確認されたが、建物としては考え難く土坑墓との関係は不明である。主軸方向はN29.5°Eである。

土師器（221～225、写真38）　221・222は共に口縁端部外面にヨコナデによる、ほぼ直立する面をもつ。成形・調整共に粗いが、底部は平底状を呈する。223は丸底とみられ、口縁端部は面をもたずに丸く収まる。224・225は平底とみられ、共に口縁端部外面に面をもつ。また、225は底部中央部が上方に突出し、いわゆるヘソ皿状を呈する。

鉄製品（226）　頭部がＬ字状に曲がる釘である。断面形は長方形で、頭部は長辺側の一方に向かって折れ曲がっている。

ＳＸ47（第61・62図、写真15）　約1.5ｍ×１ｍの長方形である。残存する深さは15～20㎝。断面観察の結果、埋土下半部で棺痕跡とも考えられる土坑状の落ち込みを確認したが、平面的には確認できなかった。西側長辺際で山茶椀１点（231）・山皿４点（227～230）が正立状態で出土したほか、中央部やや北寄りで小刀１点（233）・鋏１点?が長軸に沿った状態で出土した。山皿には４点全ての底部外面に「α」形の墨書がみられる（写真39）。小刀と鋏には各１箇所に黄橙色の骨片が付着していたほか、木質の付着がみられた。骨はこれ以外には残存せず、墓坑内には炭・灰・焼土等はみられない。主軸方向はN45.5°Eである。

山皿（227～230、写真38）　227は体部中央部が突出して稜をなす。底部は厚く、口縁部も厚手である。228は口縁部が外反するもので、口径に比して器高が低く扁平な形態を呈する。底部はやや薄手である。229・230共に口縁部が肥厚するもので、底部も共に厚い。

山茶椀（231、写真38）　口縁端部はわずかに外反して丸く収まる。体部にはわずかに丸みが残り、底部には糸切り痕が残る。

鉄製品（232・233）　232 は２点の鉄製品が錆によって結合したものである。Ｘ線撮影を行ったが不明な点が多く、詳細を確認し得なかったが、おそらく握り鋏みとみられる。233は小刀であるが、Ｘ線撮影の結果切先と茎先が失われているものとみられ、刃区・棟区の形状も明瞭でない。また、目釘穴についても存在が確認されなかった。

ＳＸ48（第63図、写真16）　約1.1ｍ×0.8ｍの隅丸長方形である。残存する深さは10～13㎝。埋土は４層に分層出来るが、SX46・47で確認された様な土坑状の落ち込みは認められなかった。出土遺物は北側短辺際で山茶椀１点（234）が正立状態で出土したのみである。埋土中に炭・灰・焼土は混じらず、骨片・木質等も認められなかった。主軸方向はN45.3°Eである。

山茶椀（234、写真38）　口縁部が外反し、高台にはモミガラ痕がみられる。

ＳＸ49（第64図、写真17）　約0.9ｍ×0.75ｍの楕円形である。残存の深さは10～17㎝。中央やや北寄りで土師器小皿１点（235）、鉄製小刀１点（236 ）が出土した。土師器小皿は他と同様正立状態で出土し、小刀は土坑の長軸に直交する状況で出土した。埋土中に炭・灰・焼土・骨片・木質等は認められなかった。主軸方向は、小刀の方向を主軸と考えるならば、N29.2°Eである。

土師器（235、写真38）　器壁が１㎜前後と非常に薄く、器形の歪みも大きいものである。

鉄製小刀（236）　Ｘ線撮影の結果、切先・茎先は失われていることが確認された。棟区は直線的で明確であるが、刃区はゆるやかなカーブを描く。茎に目釘穴が１箇所残り、刀身部分に鞘の木質が少量残存している。

（６）その他

ＳＺ50（第63図）　Ｂ地区中央部南西寄りで検出した、一見井戸状の遺構である。直径約１ｍ、深さ約1.3ｍの円筒形であるが、さらに底面中央に直径約30㎝深さ約60㎝の穴がある（写真29）。埋土は検出面から約30㎝のところまで灰色及び灰黄褐色の粘質土がみられるが、その下は下部の穴を含めてすべて灰色粘質土１層で埋まっていた。

出土遺物は全くみられず、他の遺構との切り合い

も確認できないが、東京都多摩ニュータウン遺跡で多数検出されている陥し穴遺構と類似する[9]。また、大古曽遺跡の南南東約2kmに所在する上津部田城址[10]、嬉野町の馬ノ瀬遺跡[11]においても類似の遺構が検出されており、縄文時代の陥し穴遺構である可能性が考えられる。

道路および足跡　B地区北西部の長さ約38m・幅3～5mのテラス状の区域で検出された。テラスの北辺は現在の水田の区画に一致しており、南辺は旧区画と考えられる。またテラスの長軸に平行して多数の足跡が列を成していることから、テラスは旧水田区画に伴う道路遺構と考えられる。

足跡には牛とヒトの2種類が混在するとみられたが、時期と種別の確認のため三重県立博物館の冨田靖男館長に鑑定を依頼した。その結果、①動物の足跡は牛であること、②牛の足跡は現在の家畜種に比べ小型であり、品種改良前の小型種である可能性が考えられることが判明した。ヒトの足跡については残存状況が不良のため詳細不明である。

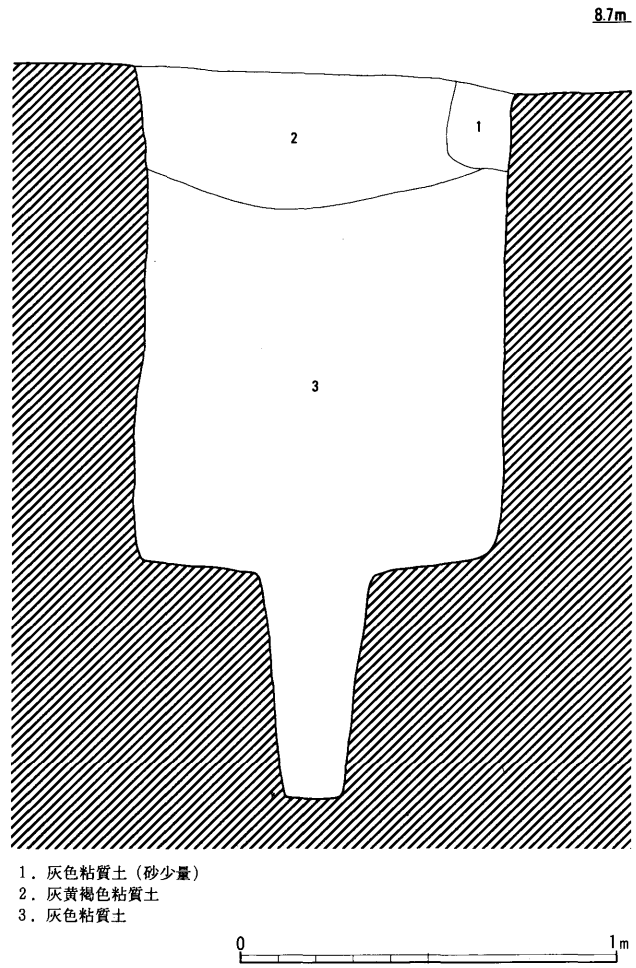
足跡からは遺物の出土はなく、他の遺構との前後関係も不明のため時期決定は困難であるが、道路遺構が旧水田区画に伴うこと、牛の足跡が現在はみられない小型のものであること、足跡の埋土が周辺に存在するピットと同様の黒褐色粘質土であることから、中世に遡る可能性は否定できないものの、近世の時期幅に収まる可能性が高いと考えられる。

ピット出土遺物　237は粗製の石匙である。整形のための剝離が周辺部に止まり、刃部の調整剝離も幅・長さが不揃いである。238は土師器甕である。口縁端部外面にわずかに内傾する面をもち、上端がつまみ上げられて尖り、内面が窪む。239は須恵器杯身である。器壁が薄く、体部は直線的に屈曲する。240は須恵器の頸部である。口縁部の沈線に切られるかたちで櫛描き波状文が施され、さらにその下に回転カキメ調整の痕跡がみられる。

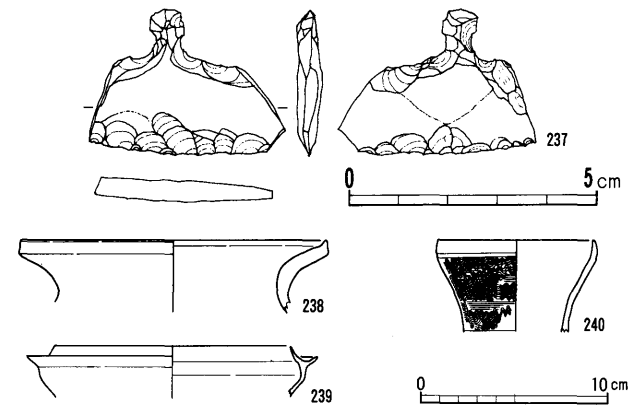
包含層出土遺物（241～350）

石器（241～247、写真40）　241・242は凹基の無茎鏃である。241はチャート製で厚さ5mm、242はサヌカイト製で厚さ2.5mmである。243は五角鏃である。サヌカイト製。244は凹基の三角鏃である。サヌカイト製。245 は石核である。チャート製。246・247は二次加工を有する剝片である。

土師器（248～271）　248～270は甕である。いずれも口縁部のみか体部上部を含む程度の破片であるた



第65図　ＳＺ50土層断面図（１：20）



第66図　ピット出土遺物実測図（237は２：３、238～240は１：４）

め、全体の形態・調整技法の特徴は不明である。そこで口径を基準としてみると、14.4～20.9cmのもの（248～264・266）、22.6～24.0cmのもの（265・267・268）、25.9～28.5cmのもの（269・270）に分けられ、順に小型・中型・大型と捉えられる。さらに口縁部形態による細分も可能である。271は甑の口縁部とみられる。端部が内傾し、上端がヨコナデされて面をなし、内面に突出する。

土錘（272～273）　ＳＤ１出土のものに比べやや小型のものである。つくりは比較的丁寧で、穿孔もほぼ中心を通っている。

須恵器（274～308、写真38・39）　274～282は杯蓋である。稜を有するものは１点のみ（274）である。280にはつまみが付く。275・276は口縁端部内面に稜をもち、275は特に顕著である。283～298は蓋杯である。283・284が古い特徴をもち、298が受け部消失後の新しいものである。299～304は高杯又は壺の脚部であり、形態のバリエーションは豊富である。305は瓶である。口径が体部最大径より小さく、口頸部には段のみで文様帯はみられない。306は短頸壺である。口縁部は直立し、端部は丸く収まる。307はいわゆるすり鉢形のもので、底部に管状工具による刺突が施され、周辺部はほぼ等間隔で上面まで貫通する。308は甕である。内面の同心円文は半スリケシ調整されている。

灰釉陶器（309）　瓶の底部である。高台は内面が直立し、外面がやや内傾するものである。

山茶椀（310～325）　法量にはバラツキがあるが、尾張編年第５～７型式のものが主体となっている。318には墨書がみられる。

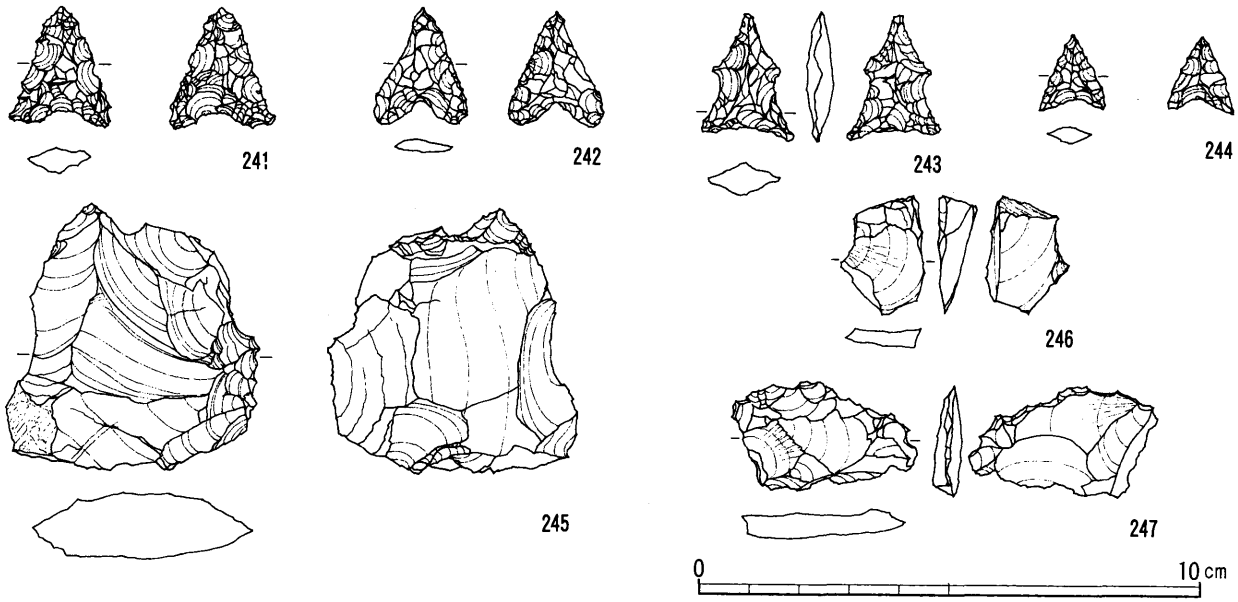
山皿（327、写真39）　厚い底部と短い口縁部をもつ。内面中央にナデ、底部に糸切り痕が残る。

捏鉢（328・329、写真38）　小型のもので、片口部分は失われている。

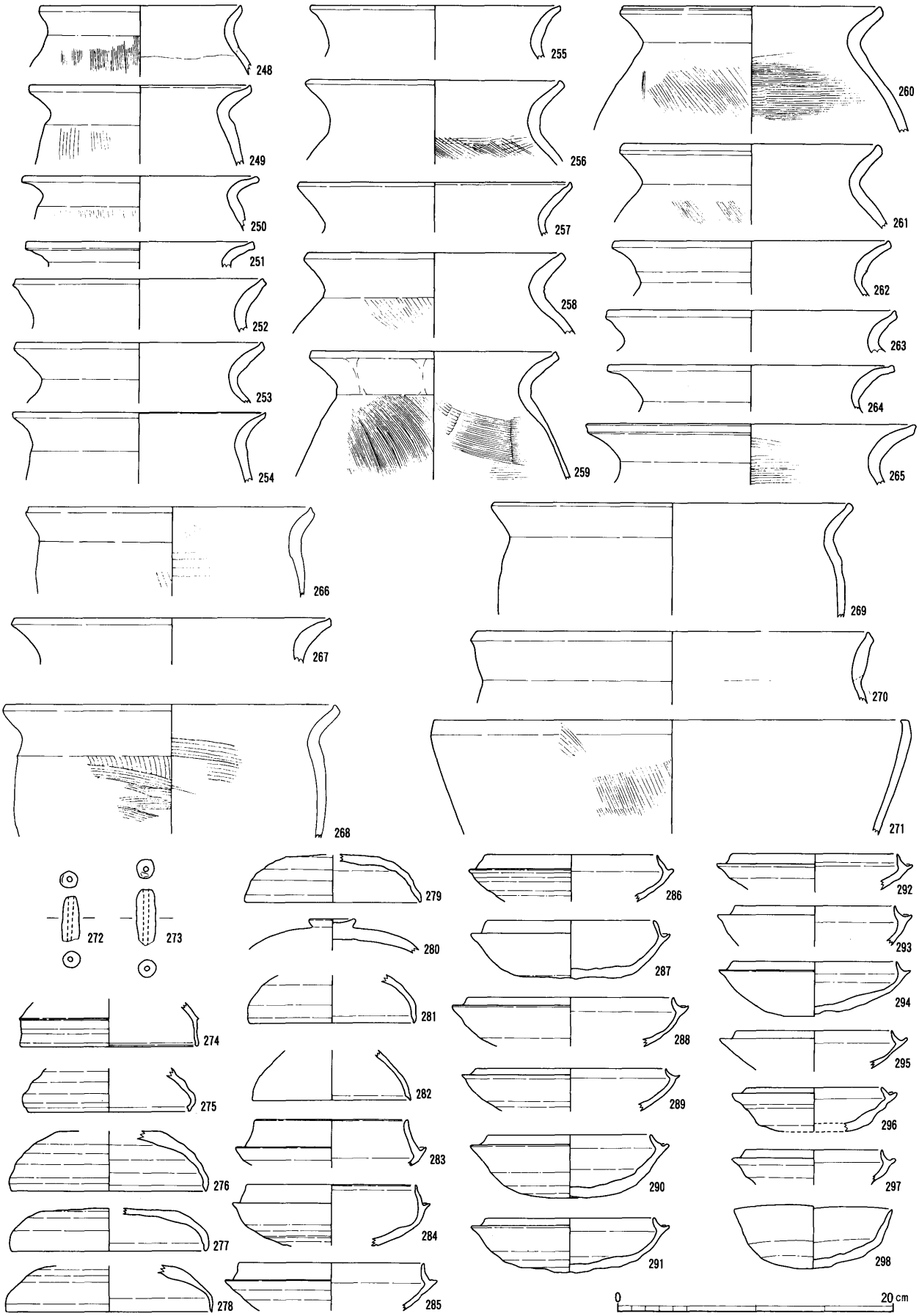
羽釜（332～335）　鍔が短くやや上方を向くもので、335 には口縁部の穿孔がみられる。

その他　おろし皿（341）、天目茶碗（348・349）、青磁碗（350）等がみられる。

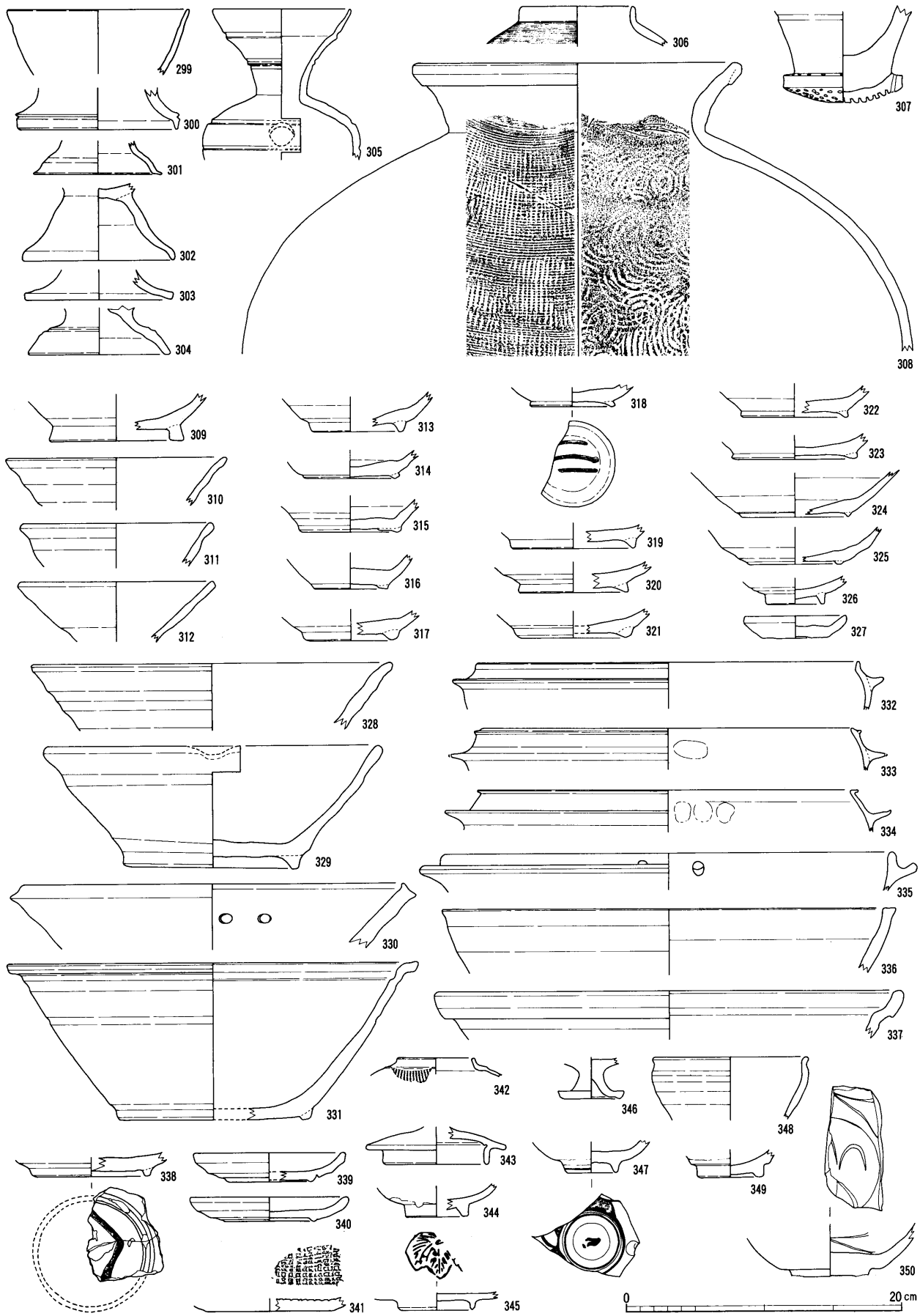
（山口　格）



第67図　包含層出土遺物実測図１（２：３）



第68図　包含層出土遺物実測図２（１：４）



第69図　包含層出土遺物実測図３（１：４）

6．結　語

（1）調査区内における遺構の変遷

Ｂ・Ｃ両地区で検出された遺構について時期別の検討を行い、調査区内における遺構の変遷について考察する。検討作業は、1．検出層位、2．切り合い関係、3．遺物の出土状況とその時期、に基づいて行った。なお、いずれの方法によっても決定し得えない場合は、平面形・他の遺構との位置関係・埋土の状況等から推定した。

検出層位と切り合い関係に基づく検討の結果は第1表の通りである。一連の作業の結果、5期9段階に区分された（第70・71図）。以下、各時期の状況について述べる。

Ⅰ期　西側の谷からの自然流水によってＳＤ2・3・11が形成される。当地域における段丘形成以後、縄文時代までに属する。3小期に細分される。

Ⅰ－1期　西側の谷からの自然流水によってＳＤ3が形成されている。人工遺物は認められない。

遅くとも8万年前とされる段丘形成[12]以後、人工遺物出現までの期間である。

Ⅱ－2期　自然流水路の位置がやや南に移り、ＳＤ3を切るかたちでＳＤ2が形成される。北方約20mの地点にＳＫ38があり、剝片が埋土中に包含される。

ナイフ形石器（1）出現以後、旧石器時代終末までに収まるものと推定される。

Ⅰ－3期　ＳＫ38埋没後、これを埋没せしめたＳＤ11・ＳＤ8が存続する時期である。

人工遺物が出土せず、Ⅰ－2期からⅡ期への過渡期と位置付けられる。時期幅の推定は困難である。

Ⅱ期　流水路は南へ屈曲するＳＤ5およびＳＤ6となり、ＳＤ5埋土中に有舌尖頭器・石鏃が包含される。北方約70mの地点に陥し穴ＳＺ50がみられる。

縄文時代に属するものである。

Ⅲ期　西側の谷からの流れ込みはＳＤ4となり、調査区中央部に開削されたＳＤ9に合流する。この時期から掘立柱建物が認められるが、分布状況がＳＤ9東側とＳＤ4南側に集中する（以下、前者をＡ群、後者をＢ群と呼称する）。

7世紀後半から8世紀前半に属し、3小期に細分される。

Ⅲ－1期　Ａ群にはＳＢ23・25があり、これを囲むかたちでＳＤ12・18が設けられる。一方Ｂ群にはＳＢ26・29・30・33がみられる。ＳＢ29がＳＢ30を切っていることと棟方向から、ＳＢ26・30とＳＢ29・33の2時期に細分できる。Ｂ群と南西側の山の間はＳＤ21によって区切られている。Ａ群が倉庫とみられる正方形プラン、Ｂ群が住居とみられる長方形プランで明確に区別される点が注目される。

7世紀後半頃と考えられる。

Ⅲ－2期　自然流水路・溝・掘立柱建物群の基本的な位置関係に変化はみられないが、各群中の建物方向や配置に変化が認められる。Ａ群はＳＢ24のみとなり、平面プランも長方形に変化する。但し、Ｂ群の建物に比べて柱間が狭く柱数も多い点から、依然として両者は明確に区別される。Ｂ群にはＳＢ31・32・34・35、ＳＡ37がみられるようになる。重複状況からみて2期以上に細分が可能である。またＳＡ37の配置から掘立柱建物群が東側へ拡がることがわかる。

Ⅲ－1期からⅢ－3期への過渡期と位置づけられるが、年代の細分は困難である。

Ⅲ－3期　ＳＤ4・ＳＤ9に変化はないが、新たにＳＤ10が設けられ、ＳＤ9に合流するかたちをとる。掘立柱建物群はＡ群が消滅し、Ｂ群は棟方向が変化してＳＢ27・28・36となる。

7世紀末から8世紀前半と考えられる。

Ⅳ期　西側の谷からの流れは方向を変えてＳＤ1となり、ＳＤ9はⅢ期からⅣ期にかけて一旦埋没したのちに再び掘り直されたと考えられる。建物は調査区北端付近に1棟みられるのみで、主体となるのはＳＤ9東側に設けられた墓群ＳＸ46～ＳＸ49である。

12世紀後半から13世紀にかけてのものと考えられる。

Ⅴ期　ＳＤ1・ＳＤ9は既に埋没しており、方形を基本とする水田区画が階段状に造成される。調査区北端付近には多数の足跡が列をなす道路遺構があり、水田の大区画ラインの存在が推定される。

近世以降の耕地拡大に伴うものであろう。

（２）遺跡の立地条件と遺構変遷過程の関係

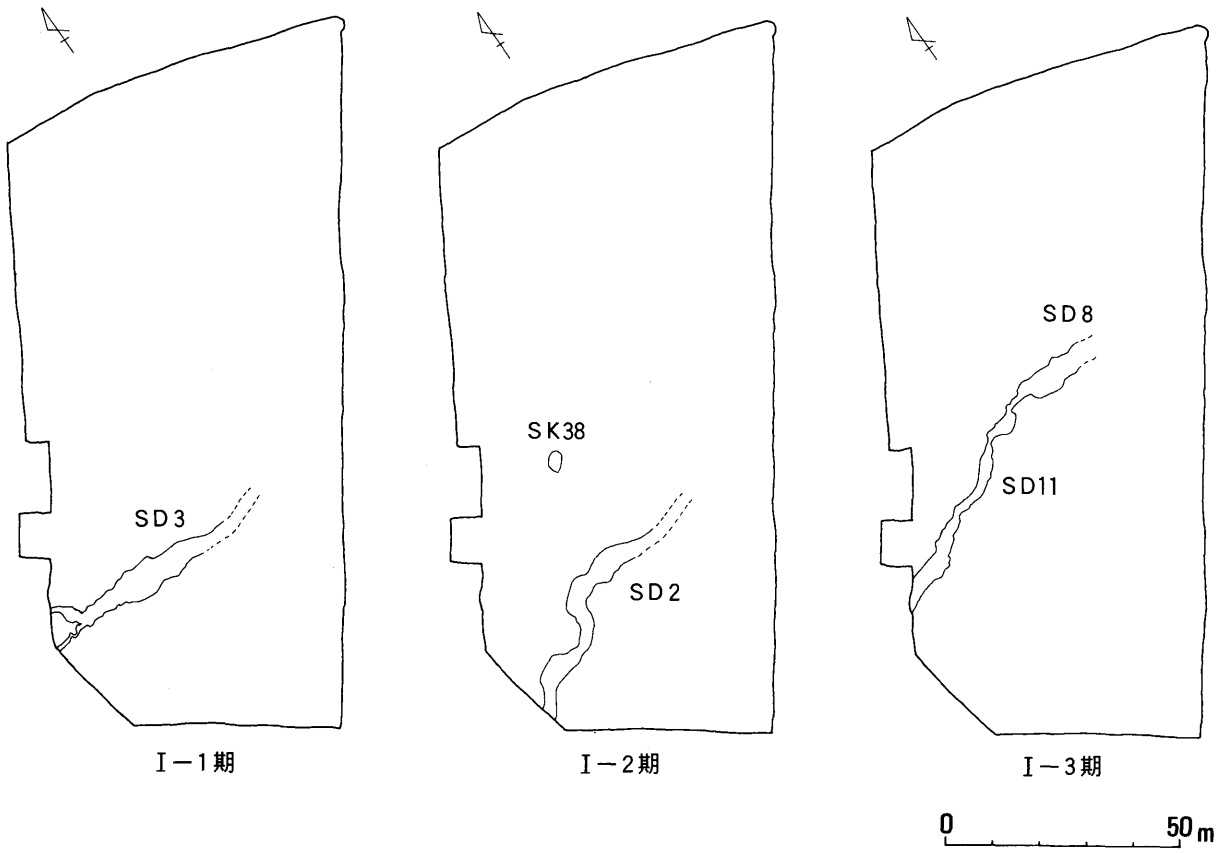
調査区内における遺構変遷過程の推定は上記のとおりであるが、この作業に伴って遺跡の立地条件と遺構群の変容の過程に興味深い関係が認められた。そこで、「遺跡の地理的条件と、これに適応するための土地への働きかけ」という視点で全体を捉えなおしてみたい。

その際、問題点をより明確にするために特定の視点を設定して観察を行うことにする。その視点とはＳＤ９である。この遺構を取り上げる理由は、

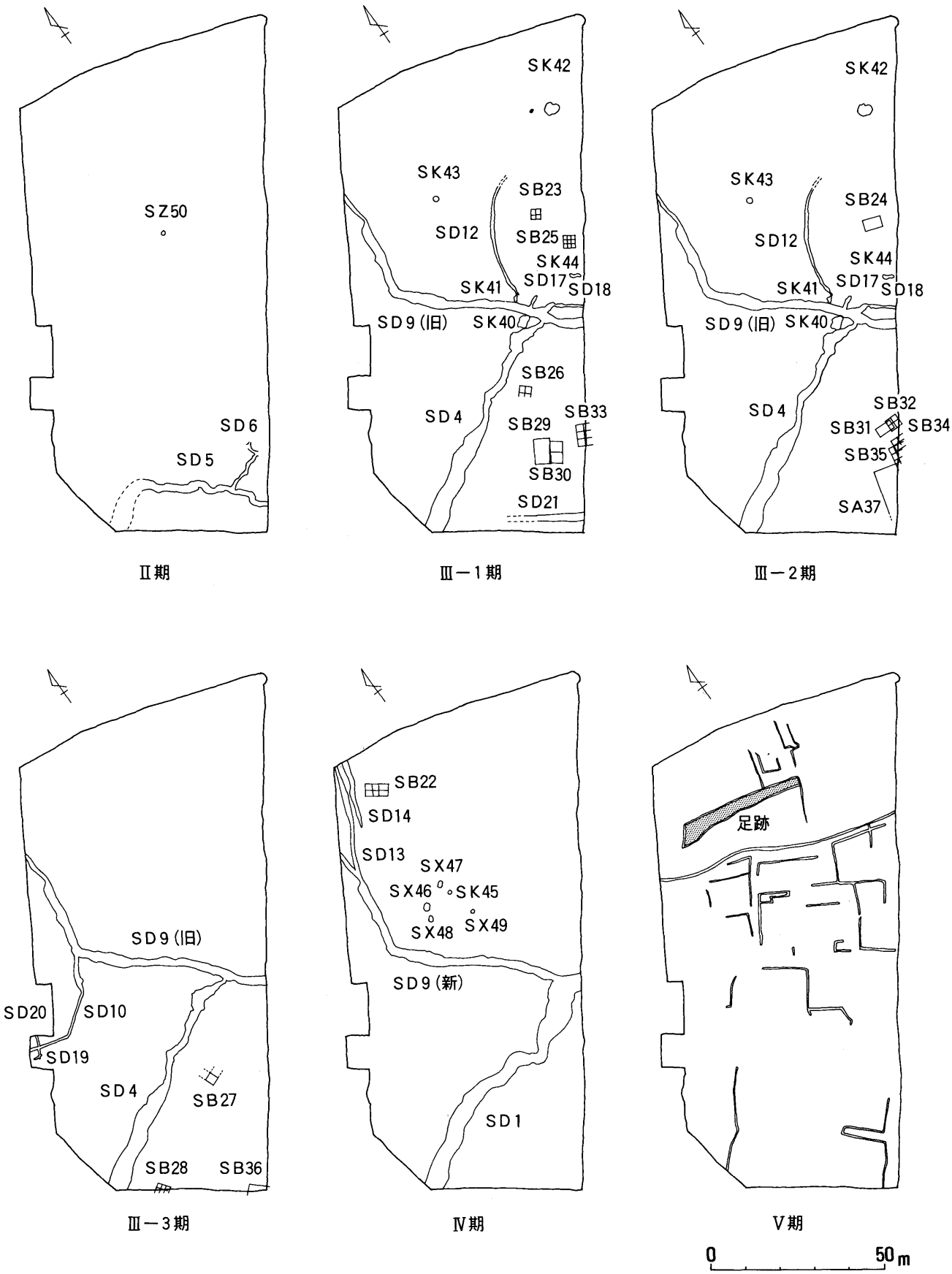
１．ＳＤ９は丘陵裾部に等高線に沿って掘削されて

時期区分			各遺構の関係 （ー は、直接的な切り合いによって新旧関係が確認されたことを示す。 …は、検出層位の違いによって新旧関係が確認されたことを示す。）
Ⅰ	1	8万年前～	SD3
	2	後期旧石器時代	SD2
	3	後期旧石器～縄文？	SK38 SD8・SD11
Ⅱ		縄文時代	SD5
Ⅲ	1	7C後半	SB26 SD4 SD21 SD9(旧) SD10 SD17 SD18 SK40 SD12 SB23 SB30 SB29
	2	7C後半～7C末？	SA37
	3	7C末～8C前半	SB27
Ⅳ		12C後半～13C	SD1 SD9(新)
Ⅴ		近世以降	水田区画(畦・溝)

第３表　検出層位と切り合い関係による遺構の新旧関係



第70図　大古曽遺跡遺構変遷図１（１：1,600）



第71図　大古曽遺跡遺構変遷図２（１：1,600）

おり、西側丘陵の扇状地斜面と平野側の平坦地を区画するものであること、

2．ＳＤ９は遺構変遷過程の中間期（Ⅲ・Ⅳ期）のみに存在し、しかもその前後の土地利用状況にきわめて大きな差異が認められること、

である。

前項においては全体を５期９段階に区分したが、ＳＤ９を視点としてみた場合には以下の３期に大別できる。すなわち、

1．ＳＤ９出現以前（Ⅰ・Ⅱ期）

2．ＳＤ９存続期（Ⅲ・Ⅳ期）

3．ＳＤ９消滅後（Ⅴ期）

である。なお、2．は前期（Ⅲ期）と後期（Ⅳ期）に細分できる。

1．ＳＤ９出現以前　ＳＤ９出現以前の状況は資料の不足により詳らかでないが、弥生・古墳時代の明確な遺構は認められず、６世紀代の磨滅した須恵器が少量みられる程度である。それ以前の時代は言うに及ばず、ＳＤ５にわずかな例外をみる他は扇状地の最大傾斜線に沿って自然流水路が走り、ＳＫ38などはこれによって埋没させられている。

土地の利用形態は地形条件に大きく規制されており、人工的に土地を改変して集落を構成するには至っていない段階である。

2．ＳＤ９存続期　ＳＤ９の出現によって様相は一変する。西の谷からの自然流水はＳＤ９によって南北へ排水され、Ａ群の建物や墓は水害等から守られることとなる。Ⅲ－１～２期においてはＳＤ12・18が設けられており、二重の溝で囲まれている。

なお、ＳＤ９より山側にもＢ群の建物が存在するが、これは本文中にも述べたとおり地形的に谷からの流水を避け得る位置に占地されており、西側の谷地形そのものを克服して居住域を形成するには至っていない。

自然的条件を克服するための人工的土地改変が開始された段階である。しかし改変規模は未だ小規模で、改変範囲は基本的に平坦地の範囲を出るものではない。また傾斜地に占地している場合でも自然的条件による規制を受けている。

3．ＳＤ９消滅後　ＳＤ９の消滅後、様相は再び一変する。かつて存在した扇状地斜面は階段状に造成され、方形を基本とする土地区画が全面に広がる。谷から流れ込んでいた自然流水路も既に消滅しており、山側からの自然流水は調査区西・南側の山裾に設けた水路へ取り込んで潅漑用水として利用したものと考えられる。

平坦地の範囲を超え、扇状地の斜面全域に人工的土地改変が及んだ段階である。

以上、大古曽遺跡における遺構群構成とその変容過程について、地理的条件との関係という視点から述べたが、これを金田章裕氏の言[13]を借りるならば、1．を工学的対応がなされず、自然的条件の規制を直接的に受ける段階、2．を微細微地形に対する工学的対応として、建物建設のための局部的な人工的平坦化と地形を画する溝の掘削が行われた段階、3．を基本微地形あるいは微地形群レベルの自然条件を克服すべく扇状地全面に対して工学的対応がなされた段階と捉えられようか。

なお、ＳＤ９の解釈について、７～８世紀に掘られ一旦埋没した溝が中世に掘り直されたとみるか、中世に開削されたとみるかで土地利用形態の画期の設定時期が変化することになるが、仮にＳＤ９を中世以降の開削としても、これによって「扇状地に立地する大古曽遺跡における集落が７世紀に至って溝に囲まれた掘立柱建物の小群集形態で始まり、その後様々な人工的土地改変を加えつつ集落域（耕地を含む）の変容・拡大がなされた」いう遺跡の景観変化の基本的な解釈が崩れることはないと考える。

（３）集落を溝で囲むことについて

大古曽遺跡と橋垣内遺跡においては、７～８世紀の掘立柱建物群が溝に囲まれて存在したと考えられる。この様な状況は毛無川を挟んで北側に位置する六大Ｂ遺跡にはみられない。また、大古曽遺跡においては中世においても丘陵部と平野部を区切る溝が存在するが、この場合は溝に近接して平野部側に墓域が形成されている。

集落を溝で囲むこと自体は７～８世紀に限らずその前後の時代を通じて多々みられることである。しかしその状況は必ずしも一定しておらず、溝の規模・形態も様々である。またその機能についても、外敵からの防禦、土地区画の表示、排水施設、精神的な

結界意識、など様々なものが考えられる。そこで上記の2例について、各時代の状況を基に考察を行う。

まず、7～8世紀における大古曽遺跡・橋垣内遺跡の溝であるが、いずれも建物を直接的に囲うものは幅1m、深さ50cmに満たないものがほとんどであり、防禦的な施設とは考え難いものである。むしろその立地条件から排水機能を第1に挙げるべきであろう。これについては谷の出口や河道に近接して立地する大古曽遺跡・橋垣内遺跡と違い、上位段丘上に位置する六大B遺跡には同時期であっても溝による囲いがみられないことが傍証となる。

また、大古曽遺跡で検出したSD9については、7～8世紀に存在したものとすれば同時期のSD12・21との規模の差が問題となるが、SD4をはじめとする谷からの流水を直接的に被る位置にあることから、排水機能の核となるものとして大規模に構築されたと考えることも可能であろう。

次に、中世における大古曽遺跡のSD9については、丘陵部と平野部の境を区切ること、幅・深さ共に大規模であること、溝の平野部側に近接して墓域が存在すること、周辺に居住施設がほとんど認められないこと等の状況から、防禦・排水・境界表示等の機能を兼ねたものと推定される。

このうち、溝の防禦的機能については水藤真氏が興味深い指摘を行っており[14]、これによればSD9は人害よりも獣害をより強く意識したものと考えられるが、当該時期の溝については城館以外の調査・研究は多くないようであり、類例の増加を待ちたい。

（4）掘立柱建物群の構成とその特質

大古曽遺跡における集落の初見は掘立柱建物のみによるものであり、これに先行する集落痕跡は認められない。時期は7世紀以降である。

この状況は、隣接する橋垣内遺跡においてもほぼ同様で、古墳時代の竪穴住居が数棟みられるのみであった段階から7世紀に至ると掘立柱建物のみによる大規模集落へと変化する[15]。

古代集落における竪穴住居と掘立柱建物の構成比が東日本では竪穴住居主体、西日本では掘立柱建物主体であり、畿内とその周辺地域においては7世紀に至ってこの状況が顕著に認められるようになることはすでに指摘されているが[16]、伊勢においては9世紀を境として徐々に移行する状況が一般的であり[17]、これに照らして橋垣内遺跡および大古曽遺跡は伊勢においては極めて先進的な傾向を示しているといえる。

またこの状況は、古墳時代において伊勢湾周辺部を中心に特徴的に分布したS字状口縁台付甕が6世紀末～7世紀初めに消滅するのに伴って、伊勢湾周辺地域が畿内周辺から西日本のほぼ全域を覆う「ハケ調整丸底甕圏[18]」に含まれていくという、土器様式の変化と表裏一体の関係にあると考えられる。

この様な、畿内を中心とした時代の変化に敏感に反応した当地域の状況は、六大B遺跡における和同銀銭の出土や平城宮出土木簡によって象徴的に認められる当地域と畿内との浅からぬ関係を、より鮮明に浮かび上がらせるものである。

また、いずれの遺跡においても掘立柱建物群を溝が不整形に取り囲むかたちで構成されており、この状況は8世紀に至ってもほとんど変わるところがない。大古曽遺跡については、当地域における条里制施行推定範囲から外れているが橋垣内遺跡は明らかに範囲内の位置にあり[19]、近年の条里制研究の成果から指摘されている条里制施行時期の地域的差異に[20]関わるものと考えられる。但し、この問題については上記の様な局部的な調査資料による検討だけでは不十分であるため、さらに対象範囲を拡げて検討を行いたい。

（5）毛無川中流域における集落構造の変遷

前項までの考察によって、大古曽遺跡および橋垣内遺跡においては7世紀に至って掘立柱建物のみによる不定形集落が出現し、8世紀においても大きな変化は認められないと考えられるに至った。しかしその後の状況については両遺跡の調査資料だけでは検討が困難であり、7～8世紀の状況もこれまで考えられてきた当地域における条里制研究の成果と矛盾することが明らかとなった。

そこで橋垣内遺跡北側に接する六大B遺跡の調査成果も加え、上記3遺跡が所在する毛無川中流域における集落構造について、その変遷状況を概観し上記の考察を検証すると共に、当該地域における条里

制の問題についても若干の検討を行いたい。

遺構の変遷状況　第72図は既に公表された調査概要の内容に基づいて各遺構を時期別にまとめたものである。以下、各時期毎に概観する。

Ⅰ期（古墳時代）

建物跡は橋垣内遺跡Ａ地区に限定される。掘立柱建物は認められず、数棟の竪穴住居のみで構成される。建物群を区画する施設は認められない。

Ⅱ期（飛鳥・奈良時代）

建物跡は大古曽遺跡、橋垣内遺跡、六大Ｂ遺跡Ｃ・Ｆ地区に群集する。竪穴住居は認められず、掘立柱建物のみで構成される。建物群が溝で囲まれ、周囲の空間から区画される。溝の平面形は不整形であり、方形土地区画の存在を窺わせる痕跡は認められない。但し、六大Ｂ遺跡Ｃ地区の建物の多くは条里推定方向とほぼ一致する。

また、各建物群は200～300ｍの距離をもってほぼ等間隔で占地する。

Ⅲ期（平安時代）

建物群は六大Ｂ遺跡Ｄ・Ｅ地区に集中する。橋垣内遺跡にも認められるが数棟散在するのみである。建物は全て掘立柱建物である。Ⅱ期でみられた様な建物群を囲む溝は認められないが、六大Ｂ遺跡Ｃ地区の建物から南へ約100ｍ離れた同遺跡Ｇ地区内の地点で条里推定方向にほぼ一致する溝が一条認められる。但し、現代の土地区画とは一致しない。

Ⅳ期（鎌倉・室町時代）

建物跡は六大Ｂ遺跡Ｃ地区および大古曽遺跡に認められるがⅡ・Ⅲ期に比べると建物数は激減し、わずかに数棟が散在するのみとなる。建物は全て掘立柱建物である。建物を囲む溝は認められないが、六大Ｂ遺跡Ｆ・Ｇ地区に条里推定方向にほぼ一致する方形土地区画が認められる。この方形区画の南北両辺をなす東西方向の二条の溝は、共に現代の土地区画と一致する。また、方形区画の北30ｍ及び南70ｍの地点にも同方向の溝が認められ、共に現代の土地区画と一致する。さらに、橋垣内遺跡Ｂ地区においても小規模ながら条里推定方向に一致する溝が認められる。

なお、大古曽遺跡においては未だ方形土地区画は認められず、自然地形に沿った溝ＳＤ９が設けられており、その平野部側に墓域が形成されている。

Ⅴ期（近世）

集落痕跡と考えられるものは、絵図[21]記載の「窪田出屋」に相当するとみられる六大Ｂ遺跡Ｇ地区の土坑群のみとなる。この土坑群列は現代の土地区画と一致する。橋垣内遺跡及び六大Ｂ遺跡周辺の土地区画を描いた絵図の内容は、ほとんど全てが現代の土地区画と一致する。また、大古曽遺跡においても方形規格による水田造成が行われ、現代の土地区画にほぼ一致する様になる。

集落構造の変遷　以上のことから、当地域においては以下の様な集落構造の変遷が推定できよう。

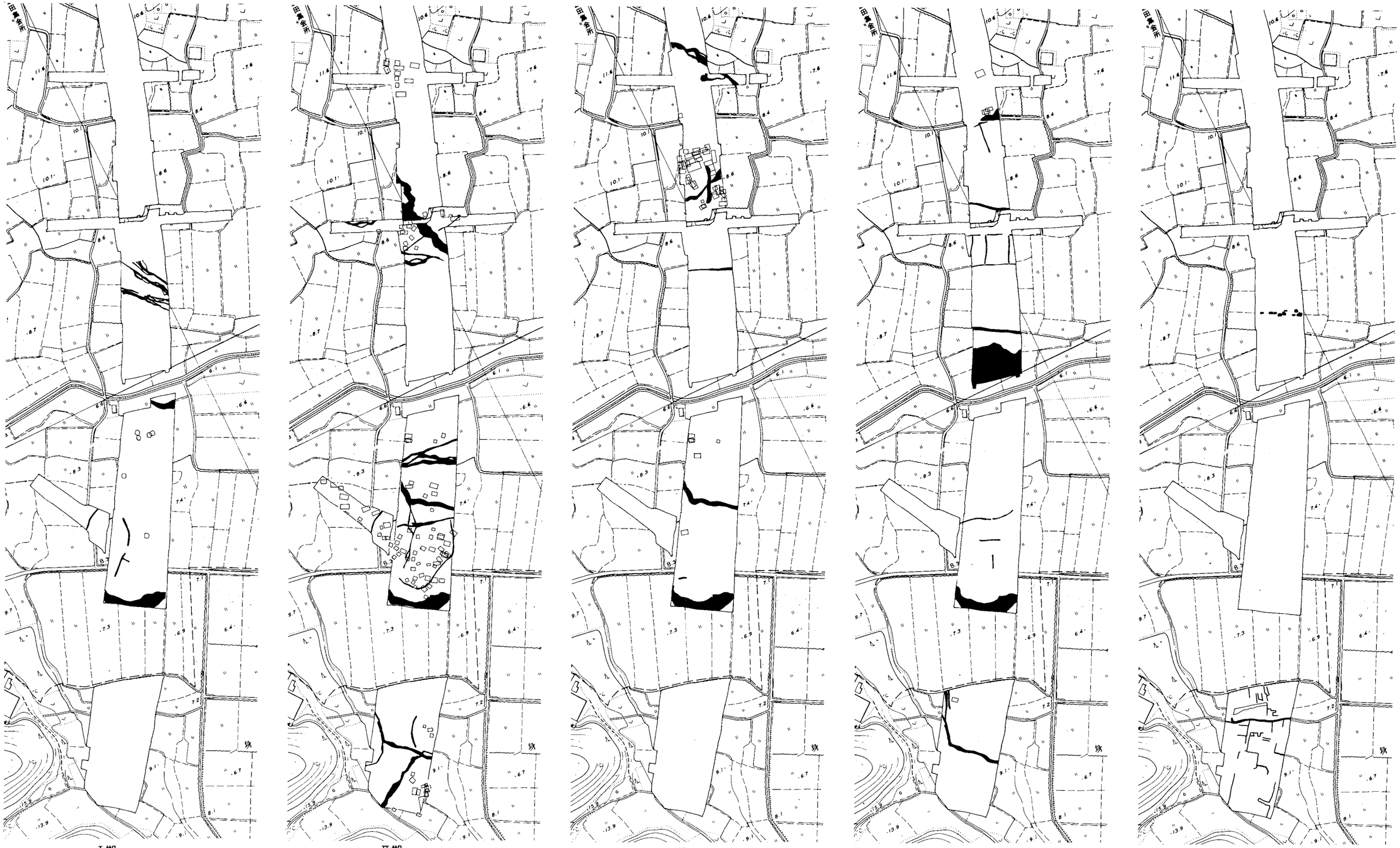
Ⅰ期段階では小規模であった集落がⅡ期に至って橋垣内遺跡を中心とする掘立柱建物のみによる大規模集落へと変化する。しかし、集落形態は各群が独立した形態をとる不定形集落であり、広範囲にわたる計画的土地利用の痕跡（いわゆる「条里地割」）は認められない。また建物方向は各群内においても各群間においても一致せずバラツキが多い。

Ⅲ期に至ると建物群の中心は六大Ｂ遺跡へと移動する。建物群の分布範囲は非常に限定的となり、ここに至って初めて条里推定方向に一致する溝が現れるが、現代に続く中世以後の土地区画に踏襲されることなく消滅する。

Ⅳ期に至ると当該地域には集落は形成されなくなってくる。これは鎌倉時代に至って北側の段丘上の伊勢別街道周辺に窪田荘が形成されたこと、そしてやや遅れて窪田御厨が伊勢別街道の北側に形成されていったと考えられる[22]こととも符合し、古代末から中世にかけて当地域の村落景観が大きく変化したと考えられるのである。

この様な状況は、Ⅴ期に至っても基本的に踏襲されて現在に至っている。但し、ここで注意すべきはⅣ期とⅤ期における土地区画の規模と形態である。Ⅳ期における方形土地区画は明確なものではあるが局部的であり、広範囲に連続して認められるものではない。これに対してⅤ期の土地区画は絵図に見る如く広大な区画が連続して現在に至っている。ここに中世から近世にかけての土地利用形態の変化の一端を窺うことができるのではないだろうか。

また、古代集落の変遷については、広瀬和雄氏が



Ⅰ期　Ⅱ期　Ⅲ期　Ⅳ期　Ⅴ期

第72図　大古曽遺跡・橋垣内遺跡・六大Ｂ遺跡遺構変遷図（１：4,000）

畿内を中心にまとめられている[23]。それによると、7～9世紀においては、「集落の長期性・「永続性（200年前後続く）」に対して、その内部構成の流動性・可塑性という一見矛盾するかのような二面性が…（略）…特徴である」とされている。

さらに古代集落（畿内農村）の変容の画期は7世紀初頭と10世紀末～11世紀初めの2度認められるとし、前者の内容は竪穴住居から掘立柱建物への急速な変化、後者の内容は、1.建物方向が条里地割に一致する（条里村落の出現）、2.単独の建物群が1つの集落を構成するようになる（散村の登場－14世紀まで続く）、3.集落の存続期間が短くなり（50年前後）、一方宅地は固定化する、とされる。

この状況は大古曽・橋垣内・六大Bの各遺跡にみられる状況とよく符合するものであり、前項で述べた上記3遺跡の伊勢における先進的特徴がより明確に捉えられよう。

（6）条里制の施行と方形土地区画の出現

上記の内容から明らかなように、発掘調査された範囲においては飛鳥・奈良時代（Ⅱ期）には条里地割は認められない。その後、平安時代（Ⅲ期）に至って条里推定方向に一致する溝が現れるが方形区画はみられず、中世にも踏襲されることなく消滅する。方形区画が明確に認められるのは中世（Ⅳ期）至ってのことであり、この区画は現在の土地区画に一致する。従って当該地域における実際的な土地利用形態としての条里制（つまり方形土地区画）の施行は古代（特に飛鳥・奈良時代）においては特定の範囲に限定されたものであった可能性が考えられ、広範囲に及ぶのは現状では中世以降とするのが穏当と思われる。

伊勢湾沿岸地域における条里制については、1979年の時点で弥永貞三・谷岡武雄両氏の編集による優れた研究成果[24]が発表されており、当該地域における条里制施行の概況については現在でも依るべき点が多い。しかしその細部においては、当時既に金田章裕氏によって条里線の齟齬が指摘されており、その理由として、1.開発施行時期の問題、2.施行単位の問題、3.後世の再編の問題、などが考えられてきた。

また根木修氏は、岡山県岡山市の南方釜田遺跡において、奈良時代に現れる坪状区画の畦畔が12～13世紀に一旦細分され、その後14～16世紀に至って再び区画が拡大して長地型を呈する様になって以後は近世以降まで踏襲される状況を示されている[25]。

これに類似した状況は、宮城県仙台市の富沢遺跡でも認められており[26]、これらのことから8世紀に認められる方形区画が後代に改変を受けたこと、そして中世以降はほぼ安定して後代に踏襲されることは比較的広範囲に認められる状況であると言えよう。

この様にみると、大古曽遺跡及び橋垣内遺跡・六大B遺跡にみられる状況は特殊なものではなく、むしろ近年の条里制研究・集落研究の成果に適合するものと考えられる。もちろん今回の検討範囲は当地域における条里施行推定範囲の一部分であり、これによって従来の推定プラン全体が早急に変更をせまられるものではないであろう。しかし、現在の土地利用状況や近代以後の地籍図等からの検討だけでは古代にまで遡ることは困難であり、条里地割の復元には考古学的な発掘調査成果を採り入れた慎重な検討が必要であろう。

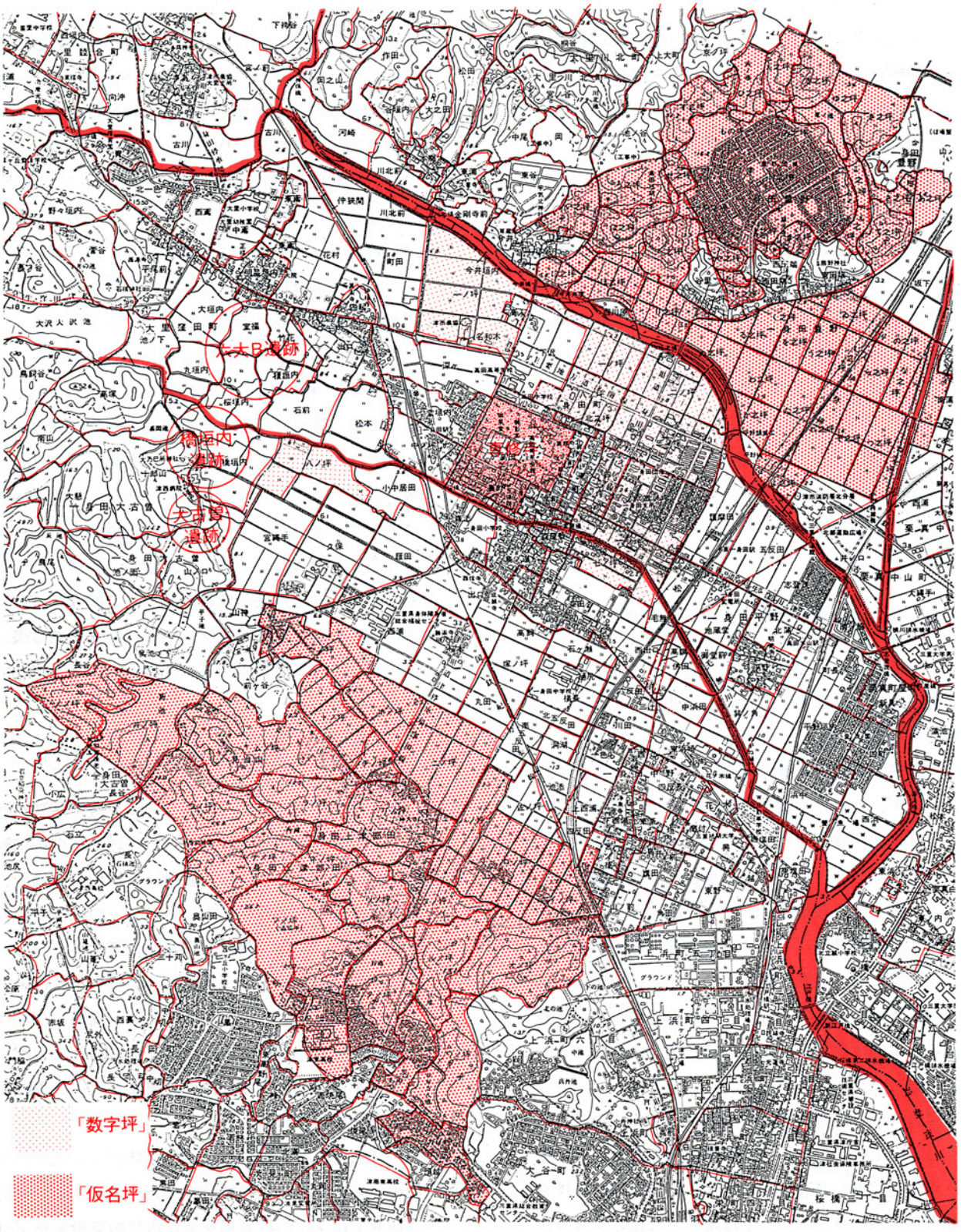
（7）地名から見た志登茂川流域の条里制

条里制研究においては「坪」の名を残す地名を利用することは周知の通りである。当該地域の条里制研究においても、この種の資料は積極的に評価されてきた。そこで今回の報告にあたって関係資料を検討した結果、非常に興味深い状況が観察された。

従来の研究成果[27]では当該地域の条里プランは平野部の全面に及んだと考えられており、遺構としては一身田町を中心とする東西・南北共に約3里の範囲に残存するとしている。橋垣内遺跡・六大B遺跡はその西端付近に含まれる。

一身田町とその周辺には「一之坪」「二之坪」などの字名が残り、字界線はほぼ方形を呈する。従来の研究では、この坪名称を基に古代の条里を推定している。また志登茂川を挟んだ対岸地域（左岸側）についても、坪名称が「いろは」に変わってはいるが、もとは条里が行われていたのではないか、とされている。

しかし、今回坪名称の残存状況を検討した結果、



第73図　志登茂川流域の「数字坪」、「仮名坪」分布図

数字による坪名称と仮名による坪名称（以下、前者を「数字坪」、後者を「仮名坪」と仮称する）は非常に特徴的な分布を示すことが明らかとなった。

「数字坪」と「仮名坪」　第73図はその分布状況を示したものである。「数字坪」は一身田町内だけに、「仮名坪」は一身田町から離れた南北両側の丘陵地とその付近のみに分布する。[28]

「数字坪」が条里制の名残を示すという考え方に

異論はない。問題は「仮名坪」である。「仮名坪」は山林・荒地にまで分布している、というよりむしろその様なところばかりに集中しているといっても過言ではない。その平面形は自然地形に規制されて全く不規則なものが大半を占める。また、方形を呈するものにも正方形のプランはみられず、面積も「数字坪」から推定される区画のものとは対応しないようである。この様な状況をどの様に解釈すべきであろうか。

まず一身田町内については、現在の専修寺境内を旧窪田村・旧一身田村の境界線にあたる坪界線が通ることが既に指摘されている。[29] このことから一身田町内における条里区画の設定は、専修寺が津藩からの寄進を受けて境内地が拡大する万治元（1658）年以前であることが明らかである。

次に「仮名坪」は一身田町の南方丘陵上に所在する中世城郭である峯治城・上津部田城の範囲にも及んでいるが、当該地域内に城に伴うと考えられる字名は存在しない。これに対し、同丘陵南側に所在する渋見城の場合は、現在も津市渋見町字城と呼ばれており、城の影響によって字名が形成された状況が存在するのである。また、城の存続中にその土地に坪名称を冠することはあり得ないことであるから、峯治城・上津部田城の場合は城の廃絶後に坪名称が与えられたと考えられる。

また、「仮名坪」の配列順序については原則として千鳥式とみられるが、実態としては非常に不規則なものである。さらに条里の設定の主目的が農地の合理的な管理と収穫物の効率的な収奪であるとするならば、山林・荒地に対して不規則な設定を行うことは無意味と考えられ、このような「仮名坪」の設定は字名を単なる土地管理機能として記号化したに過ぎないと考えられる。

さらに、「仮名坪」の分布範囲は一身田町の南北の丘陵に二分されており、一方を平仮名、もう一方を片仮名という異なった表記方法で坪名称を付しているが、この方法では一定範囲内に同一型式の坪名称を付すことは不可能である。そして、異なる２地域を２種の文字で区別して表記し、表記の原理と音（発音）そのものは全く同じであるという状況からは現地における実際上の管理よりも机上における文書上の管理機能を重視したことが考えられる。

つまり、この「仮名坪」は本来の条里制の機能が忘れ去られた段階において設定されたものと考えられるのである。またその位置が寺内町が形成された一身田町に最も近い丘陵部であり、その分布状況が集中的な一括管理体制を想起させる状況からは、例えば都市としての一身田寺内町に関連するかたちで、当該地域を掌握する者によって集中的な山林開発、あるいは木材資源の管理等を目的とした山林支配が行われたことなどが考えられよう。

（８）ＳＤ10出土の漆壺について

ＳＤ10（第39図、写真19）からは漆が膠着した壺（157）が出土した。ＳＤ10はＣ地区西壁付近で検出されたもので、溝の両端は調査区外へ延びるため全容を確認するには至らなかったが、八角形の一部の様な特徴的な平面形を呈するものである。

出土遺物は上記の須恵器のほか、須恵器短頸壺(156)・杯蓋（158）、土師器甕（159）および転用した磨製石斧（155）がある。157を含め、土器類はすべて南側のコーナー付近で出土した（写真27）。漆は壺の外面上半部と内面全体に膠着しており、この壺は漆の運搬あるいは保管に用いたものと考えられる。

このような小型の須恵器壺を漆容器として用いた例は、奈良県橿原市の藤原京右京十二条四坊の調査にみられる。この調査では溝１条・柵列１条・土坑３基・不明遺構１基が検出されており、このうちの土坑１基（長径2.2m、短径1.6m、深さ40cm）から漆壺・甕・篦３点が出土したほか、溝から飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の遺物と共に漆壺・甕・パレット類が出土している。この溝は藤原京十二条大路の北側溝にあたり、近接して検出された柵列内側の宅地については漆工房的な様相が窺えるとされている。

上記の藤原京出土資料のうち、土坑出土の漆壺を実見したところ、法量・形態共に157 と酷似しており、ほぼ同時期のものと思われる。大古曽遺跡からは藤原京にみられる様な篦・パレットの類は出土していないが、漆が膠着した須恵器はＳＤ１からも出土している。

遺物の出土状況から、大古曽遺跡においても漆の精製あるいはそれを用いた漆器の製作を行った施設

がＳＤ10付近に存在した可能性が考えられるが、調査区内からはこれに該当すると考えられる遺構は検出されておらず、現時点では工房の存在を推定するに止まるものである。それでは仮に、漆製品の消費という面からはどの様な考察が可能であろうか。

須恵器壺157の所属する年代は、藤原京出土資料の編年的位置付けから７世紀末から８世紀初め頃と推定できる。[31] 当時における金属器・漆器は貴重品であり、土器類等で構成される日常雑器とは異なる奢侈品であった。このことは『日本霊異記』の記載などからも窺われるところである。[32]

では、その様な高級食器の生産工房が存在したとすれば、そこで生産された品物は何処へ運ばれ、使用されたのであろうか。

大古曽遺跡においても数棟以下で構成される掘立建物群は検出されているが、高級食器の生産工房を掌握する集団規模とするには無理があろう。そこで当該期の遺構・遺物が確認されている遺跡を求めるならば、大古曽遺跡北側に隣接する橋垣内遺跡、および六大Ｂ遺跡、大垣内遺跡が挙げられる。いずれの遺跡からも７～８世紀の範疇に収まる掘立柱建物が多数検出されており、六大Ｂ遺跡では条里推定方向にほぼ一致する規則的な配置も認められる。[33] また大垣内遺跡では掘立柱建物群のほか瓦片・円面硯・墨書土器などが出土しており、一般の集落とは異なった性格をもつものと考えられる。[34] 大古曽遺跡周辺に限っても上記の様な遺跡が存在し、いずれも漆製品の供給先として想定は可能と思われるが、その他の遠隔地についても当然考慮しなければならず、現状では推定可能地を挙げるに止めるべきであろう。

（山口　格）

［註］

① 萱室康光・竹内英昭『津市遺跡地図』津市教育委員会　1988年
② 和気清章・油田秀紀「大古曽遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会　1989年
③ 駒田利治「Ⅱ．位置と歴史的環境」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター　1993年
④ 本書P97～P99
⑤ 石器については、奥　義次・秦　好利・久保勝正・長屋幸二の各氏に御教示を得た。
⑥ 山茶椀・山皿の編年的位置付けについては、藤澤良祐氏の御教示を得た。
⑦ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966年
⑧ 石黒立人ほか『朝日遺跡Ⅳ』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1993年
⑨ 東京都埋蔵文化センター「多摩ニュータウン遺跡」の一連の報告書で多数報告されている。
⑩ 池端清行・山口　挌『上津部田城址（第２次）発掘調査報告』津市教育委員会　1992年
⑪ 伊勢野久好「馬ノ背遺跡の調査」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年
⑫ 本書ｐ97～ｐ99
⑬ 金田章裕『微地形と中世村落』吉川弘文館　1993年
⑭ 水藤　真「村や町を囲うこと」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　1989年
⑮ 森川幸雄・油田秀紀「橋垣内遺跡－Ｂ地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1990年
⑯ 田代克己「西国の集落」『日本歴史考古学を学ぶ』（上）有斐閣　1983年
⑰ 山田　猛氏に御教示を得た。
⑱ 巽淳一郎・黒崎直「飛鳥・奈良時代－道具の組合せ」『図解・日本の人類遺跡』　東京大学出版会　1992年
⑲ 仲見秀雄「奄芸・安濃・一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』　東京堂出版　1979年
⑳ 金田章裕「条里地割はいつできたか」『新視点日本の歴史』第三巻　古代編Ⅱ　新人物往来社　1993年
㉑ 「安政元年窪田村地図」（国府尚直氏蔵）『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』Ｐ８に掲載。
㉒ 小林　秀氏の御教示による。
㉓ 広瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　1989年。同「考古学からみた古代の村落」『岩波講座日本通史』第３巻　古代２　1994年。
㉔ 弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』　東京堂出版　1979年
㉕ 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター「平成３年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修　水田遺跡調査過程」資料　1991年
㉖ 同前掲註㉕
㉗ 同前掲註㉔
㉘ 第71図の原図には資料の制約上、昭和61年津市役所発行の字切図を用いたが、津市役所一身田支所所蔵の明治８年及び明治９年の地籍図で確認した結果もほぼ同様であり、「仮名坪」の分布状況・形態に大きな変化は認められなかった。従って「仮名坪」設置の下限は遅くとも上記の年代におくことができる。
㉙ 同前掲註㉔
㉚ 竹田政敬「藤原京右京十二条四坊」『大和を掘る』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1993年
㉛ 古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』1992年
㉜ 原田敏明・高橋　貢訳『日本霊異記』東洋文庫97　平凡社　1967年
㉝ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　1991年
㉞ 三重県埋蔵文化財センター「大垣内遺跡」現地説明会資料　1993年

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
19	012-04	C	SD1 F－T8	須恵器 杯蓋	－	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	密1㎜程の石含む	小片	4区18～20層
20	007－02	C	SD1 F－T6	須恵器 杯蓋	13.3	－	内外面共にロクロナデ 口縁部内側に稜をもつ	灰白色 7.5Y8／1	並 1～2㎜の石	1／7	4区15・17層
21	008－02	C	SD1 F－T9	須恵器 杯蓋	13.8	－	内外面共にロクロナデ 天井部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ	灰色 N4／	密 黒斑粒多い	3／10	5区1～3層
22	011－03	C	SD1 F－T8	須恵器 杯蓋	14.4	－	口縁部ロクロナデ 天井部は不明	にぶい橙色 2.5YR	密 1㎜程の石含む	1／5	4区15・17層
23	003－01	C	SD1 F－U4	須恵器 杯蓋	12.7	－	口縁部ロクロナデ 天井部外面2／3以下の回転ヘラケズリ	灰 色 N6／	密1㎜程の石含む	1／2	つまみ剥離の痕跡あり 3区灰色砂礫
24	014－02	C	SD1 F－R15	須恵器 杯蓋	14.3	－	内外面共にロクロナデ 口縁部内面に段	灰白色 N7／2	並 2程の石含む	口縁部 1／6	天井部外面灰かぶり 7区－1～3
25	010－03	C	SD1 F－T6	須恵器 杯蓋	－	－	天井部外面1／3回転ヘラケズリ つまみハリツケ後ロクロナデ	灰色 N6／	並 1～3㎜の石	1／4	4区15・17層
26	012－01	C	SD1 F－S10	須恵器 杯蓋	14.0	－	天井部外面1／2回転ヘラケズリ 天井部内面に不定方向ナデ	灰色 N5／	密 黒斑粒含む	1／8	5区
27	003－02	C	SD1 F－U3	須恵器 杯蓋	14.6	－	天井部外面1／2以下の回転ヘラケズリ 天井部内面に不定方向のナデ	青灰色 5BG6／1	並1～2㎜の石	1／4	2トレンチ
28	012－05	C	SD1 F－T6	須恵器 杯蓋	11.2	3.5	口縁部内外面共にロクロナデ 天井部内面に不定方向ナデ 天井部外面ヘラ切り後粗いナデ	青灰色 5BG5／1	やや粗2㎜程の石	1／2	焼けひずみ大 4区18～20層
29	010－02	C	SD1 F－T8	須恵器 杯蓋	9.8	3.4	口縁部内外面共にロクロナデ 天井部内面に不定方向ナデ 天井部外面ヘラ切り未調整	灰白色 10YR7／1	並 砂粒多い	1／3	4区15・17層
30	007－05	C	SD1 F－T9	須恵器 杯蓋	10.3	－	口縁部内外面共にロクロナデ 天井部外面に回転ヘラケズリ	灰色 5Y5／1	並2㎜程の石含む	口縁部 1／10	5区1～3層
31	003－04	C	SD1 F－T5	須恵器 杯蓋	15.0 4.2	2.2	天井部外面全面回転ヘラケズリ 天井部内面に不定方向ナデ つまみハリツケ後ロクロナデ	灰白色 7.5Y7／1	並 1～2㎜の石	1／3	3トレンチ
32	007－04	C	SD1 F－T9	須恵器 杯身	14.2	－	内外面共にロクロナデ	灰色 7.5Y4／1	やや粗 粗砂多い	1／10	5区1～3層
33	004－02	C	SD1 F－T7	須恵器 杯身	14.0	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N5／	密 1～2㎜の石	口縁部 1／9	灰色土
34	004－03	C	SD1 F－S14	須恵器 杯身	14.0	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	やや粗 砂粒多い	1／9	7トレンチⅡ層
35	009－01	C	SD1 F－U2	須恵器 杯身	13.8	4.1	底部外面1／2回転ヘラケズリ	灰色 N6／	並 1～3㎜の石	3／4	外面1／2灰かぶり 2区 Ⅱ互層
36	008－03	C	SD1 F－U2	須恵器 杯身	13.0	－	内外面共にロクロナデ 受部に重ね焼き痕跡	灰白色 N7／	並 黒斑粒含む	1／7	外面灰かぶり 2区黄灰色砂
37	008－01	C	SD1 F－V2	須恵器 杯身	13.0	3.4	内外面共にロクロナデ 底部ヘラ切り未調整	灰白色 7.5Y7／1	密 1～2㎜の石	3／4	焼成不良 磨滅激しい 2区
38	011－01	C	SD1 F－U2	須恵器 杯身	11.1	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N8／	密 1㎜程の石	1／8	焼成不良 磨滅激しい 2区 互層
39	011－04	C	SD1 F－T6	須恵器 杯身	11.4	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	並 1～3㎜の石	1／8	底部外面灰かぶり 3トレンチ
40	003－03	C	SD1 F－T6	須恵器 杯身	10.7	4.6	内外面共にロクロナデ。底部ヘラ切り後一部ナデ 底部内面中央に不定方向ナデ	灰白色 N7／	並 1～2㎜の石	3／4	4区暗灰色
41	010－01	C	SD1 F－T12	須恵器 杯身	12.8	3.8	内外面共にロクロナデ 底部ヘラ切り未調整	灰白色 N7／	並 1～3㎜の石	1／5	焼けひずみ 6区最下層
42	012－03	C	SD1 F－T7	須恵器 杯身	13.3	3.8	内外面共にロクロナデ 底部ヘラ切り未調整	灰白色 10Y8／1	並 1～2㎜の石	2／5	焼成不良 磨滅激しい18～20層
43	006-05	C	SD1 F－S5	須恵器 杯身	13.2	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	並 1～3㎜の石	1／6	3区暗灰色砂
44	004－01	C	SD1 F－S14	須恵器 杯身	11.5	2.9	内外面共にロクロナデ 底部外面回転ヘラケズリ	赤灰色 2.5YR4／1	並 1～2㎜の石	1／4	7トレンチⅡ層
45	007－01	C	SD1 F－T6	須恵器 杯	－ 9.3	－	内外面共にロクロナデ 底部外面回転ヘラケズリ 高台部ハリツケのちナデ	白灰色 N7／0	並 1～2㎜の石	口縁部 1／9	外面に灰かぶり 4区15・16層
46	006－06	C	SD1 F－U2	須恵器	14.0	－	内外面共にロクロナデ	灰色 7.5Y6／1	並 1～3㎜の石	口縁部 1／8	2区
47	006－01	C	SD1 F－S14	須恵器 高杯	－ 13.2	－	三方透かし 外面回転カキメ 脚部中央に沈線2条	灰色 N6／0	並 3㎜程の石	脚部 1／5	4区
48	012－02	C	SD1 F－T6	須恵器 高杯	－ 10.2	－	内外面共にロクロナデ	青灰色 5B6／1	密	脚部 1／6	3トレンチ18～20
49	013－01	C	SD1 F－R15	須恵器 高杯	13.4 9.6	11.0	杯部底部外面1／2以下の回転ヘラケズリ 他は内外面共にロクロナデ	青灰色 5PB6／1	やや粗 粗砂多い	2／3	脚・杯部外面に灰 7区－1～3
50	002－04	C	SD1 F－Q16	須恵器 甕	18.0	－	口縁部内外面共にロクロナデ 肩部外面回転カキメ、内面同心円文半スリケシ	灰色 N6／0	やや粗 粗砂多い	口縁～頸部 1／10	排水溝
51	014－01	C	SD1 F－R15	須恵器 甕	33.0	－	内面ロクロナデ 外面回転カキメ後沈線・ヘラ描き	灰色 文N7／0	並 1～2㎜の石	口縁部 1／8	7区－1～3
52	003－06	C	SD1 F－T6	須恵器 鉢	27.8	－	内外面共にロクロナデ 口縁端部に沈線一条	黄灰色 2.5Y5／1	並 1～2㎜の石	口縁部小片	3トレンチ
53	016－01	C	SD1 F－T7	土師器 甕	15.0	－	口縁部ヨコナデ頸部外面タテハケ後ユビオサエ頸部内面ヨコハケ	にぶい黄橙 10YR7／2	並 1～2㎜の石	口縁～頸部1／6	内面に煤付着 4区18～20層
54	019－01	C	SD1 F－Q16	土師器 甕	18.6	－	内外面共にヨコナデ	灰白色 2.5Y8／2	粗 2～4㎜の石多	口縁～頸部1／4	磨滅 7区Ⅲ－8層
55	006－02	C	SD1 F－S14	土師器 甕	18.7	－		にぶい橙色 7.5YR7／3	並 1～3㎜の石	口縁部 1／8	磨滅 7トレンチⅡ層
56	002－02	C	SD1 F－V1	土師器 甕	13.0	－	外面ヨコナデ 口縁端部外面に沈線一条 内面ヨコハケ	にぶい黄橙 10YR6／3	並 1～2㎜程の石	口縁部 1／8	2区
57	002－01	C	SD1 F－V1	土師器 甕	14.3	－	外面タテハケ 内面ヨコハケ	灰黄色 2.5Y7／2	やや粗 粗砂多い	口縁部 1／6	磨滅 2区
58	001－01	C	SD1 F－U4	土師器 甕	－	－	体部外面タテハケ 他は不明	淡黄色 2.5Y8／3	並 1～2㎜程の石	体部 1／4	磨滅 3区
59	005－01	C	SD1 F－T6	土師器 杯	13.2	4.6	口縁部内面ヨコナデ 他は不明	淡黄色 2.5Y8／3	並 1～2㎜程の石	2／3	磨滅激しい 3トレンチ
60	019－02	C	SD1 F－Q15	土師器 長頸壺	9.2	15.7	底部外面に葉脈圧痕が残る	灰白色 10YR8／2	密 細砂含む	1／2	磨滅激しい 7区Ⅲ－8層

第4表　土器観察表1

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
61	015-01	C	SD1 F－R15	土製品 土錘	長さ6.1、径2.1、孔径0.4、重さ 22.2g 中央が太い。孔は中軸からはずれる			灰白色 2.5Y8／2	密	完形	8区
62	023-03	C	SD1 F－R14	土製品 土錘	長さ6.9、径1.6、孔径0.5、重さ 18.9g 粘土を転がし棒状にする。孔は中軸からはずれる			灰白色 10YR8／1	並 細砂含む	完形	7区Ⅲ－1層
63	016-02	C	SD1 F－T6	土師器 皿	14.3	2.1	内外面共にヨコナデ？	にぶい 橙色 7.5YR7／4	並	1／3	磨滅激しい 4区18～20層
64	053-01	C	SD1 F－S7	土師器 甕	28.0	－	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコハケ 体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	浅黄色 2.5Y7／3	並 1～2 mm程の石	1／8	内面に僅かに煤 磨滅4区19層
65	018－02	C	SD1 F－V2	陶器 山茶椀	－ 7.2	－	糸切り痕	淡灰色	並2～ 3mmの石	底部 1／2	尾張5 （灰色砂）
66	018－03	C	SD1 F－Q8	陶器 山茶椀	－ 6.9	－	糸切り痕ナデ消し	淡灰色	密	底部のみ	渥美5 トレンチ
67	002－03	C	SD1 F－Q16	陶器 山茶椀	－ 6.5	－	糸切り痕 内面中央部全体に仕上げナデ	灰白色 N8／	並 1～2 mmの石	底部のみ	排水溝
68	006－03	C	SD1 F－V2	陶器 山茶椀	14.8 6.8	－	糸切り痕 高台とれかけ・モミガラ痕（少ない）	淡灰色	並 2mm 程の石	ほぼ完形	尾張6内面に煤付 着暗灰色シルト質
69	017－02	C	SD1 F－P16	陶器 山茶椀	－ 6.3	－	内面中央ナデ	黄灰色	密 4 mm程の石	底部のみ	瀬戸8墨書あり 第Ⅰ層
70	017－01	C	SD1 F－Q16	陶器 山茶椀	－ 5.3	－	糸切り痕	黄灰色	密	底部 1／3	瀬戸8墨書あり 第Ⅰ層
71	003－05	C	SD1 F－T6	陶器 山茶椀	－ 5.4	－	糸切り痕 内面中央ナデ	灰白色 2.5Y8／2	やや粗 7 mm程の石	底部 2／3	3トレンチ
72	018－01	C	SD1 F－Q8	陶器 山皿	－ 3.1	－	糸切り痕 モミガラ痕（少ない）	灰色	密	底部 1／2	尾張4 トレンチ
80	030－02	C	SD4 F－R8	土師器 壺	－	－	不明	黄橙 10YR8／6	並 1mm 程の石	底部 1／3	磨滅激しい 1区8層
81	020－01	C	SD4 F－S8	土師器 甕	16.0	－	体部内面ヨコハケ 他は不明	淡橙色 7.5YR7／2	並 1mm 程の石多	口縁部 1／5	磨滅激しい
82	030－01	C	SD4 F－R8	土師器 甕	17.5	－	口縁部外面ヨコナデ・内面ヨコハケ	灰白 2.5YR8／2	並 0.5 mm程の石	口縁部 1／5	磨滅激しい
83	023－01	C	SD4 F－Q11	土師器 甕	－	－	体部内面ヨコハケ 他は不明	灰黄褐色 10YR7／2	並 2mm の石多い	口縁部 1／6	磨滅激しい
84	023－02	C	SD4 F－Q11	土師器 甕	21.0	－	体部内面ヨコハケ 他は不明	にぶい黄橙 2.5Y8／3	並 3mm mm程の石	口縁～頚 上部1／10	磨滅激しい 3区－4層
85	021－01	C	SD4 F－F13	土師器 甕	37.6	－	口縁部は、くの字に外反し、肥厚する 内面は4本／cm・外面は5本／cmのハケメ	淡黄 2.5Y8／3	やや粗 2 mm程の石	口縁～頚 上部1／10	磨滅激しい
86	025－01	C	SD4 F－P12	土師器 鉢	66.4	－	外面タテハケ 内面ナナメハケ	にぶい黄橙 10YR7／3	並 3～5 mm程の石	底部 1／8	磨滅激しい 3区－Ⅰ層
87	035－02	C	SD4 F－Q11	須恵器 杯 蓋	12.4	4.0	天井部外面2／3 回転ヘラケズリ 口縁端部内面の段は沈線状	灰色 N6／	並 砂粒 多く含む	口縁～天 井部1／7	陶邑編年－1～2 3区－4層
88	027－01	C	SD4 F－P13	須恵器 杯 蓋	14.4	4.1	口縁端部内面に明瞭な稜 回転ヘラ切り後繊維圧痕多数	灰白色 N7／	並 黒斑 紋多い	2／3	外面灰かぶり
89	035－01	C	SD4 F－R10	須恵器 杯 蓋	14.4	4.8	天井部外面1／2 以下の回転ヘラケズリ 口縁部内面に沈線 1条	灰色 N6／	並 2mm 程の石多	9／10	外面薄く灰かぶり 2区－21層
90	027－04	C	SD4 F－P12	須恵器 杯 蓋	15.0	4.5	天井部外面2／3 回転ヘラケズリ 口縁端部内面に段	灰白色 2.5Y8／1	やや粗 2 mm程の石	2／3	焼成不良
91	026－01	C	SD4 F－Q8	須恵器 杯 蓋	13.0	－	内外面共ロクロナデ	灰白 N7／	並 砂粒含む	口縁部 1／8	
92	027－03	C	SD4 F－P12	須恵器 杯 蓋	12.2	3.4	回転ヘラ切り後一定方向ナデ 天井部内面不定方向ナデ	青灰色 5B6／1	粗 1～ 3mmの石	1／2	
93	027－05	C	SD4 F－O14	須恵器 杯 蓋	10.8	3.5	回転ヘラ切り未調整 内面中央不定方向ナデ	灰白 5Y7／2	並 砂粒 多く含む	7／8	ヘラ記号
94	035－03	C	SD4 F－R9	須恵器 杯 蓋	9.6	3.2	回転ヘラ切り未調整 内面中央に強いナデ	青灰 10BG5／1	密 細砂 多く含む	ほぼ完形	ヘラ記号
95	027－02	C	SD4 F－P13	須恵器 杯 蓋	10.2	3.7	回転ヘラ切りのち粗いナデ 天井部内面中央ナデ（弱い）	灰白 2.5Y8／1	並 2mm程 の黒斑紋	完形	
96	032－04	C	SD4 F－P12	須恵器 杯 身	14.6	4.7	底部外面1／2 回転ヘラケズリ 内面中央不定方向ナデ	灰白 N8／	やや粗 1 mm程の石	1／4	受部に重ね焼痕
97	031－04	C	SD4 F－R8	須恵器 杯 身	13.8	－	底部1／2 回転ヘラケズリ	灰 7.5Y5／1	並 1mm 程の石	口縁～受 部1／10	2トレンチ 27層
98	032－05	C	SD4 F－P13	須恵器 杯 身	14.0	4.8	底部外面2／3 以下の回転ヘラケズリ 内面中央不定方向ナデ	灰白 N8／	粗1～2 mmの石多	1／4	摩滅激しい
99	020－02	C	SD4 F－R9	須恵器 杯 身	11.7	4.3	底部外面ヘラ切り後2／3 以下の粗い回転 ヘラケズリ	明青灰 5BG7／1	密2mm程 の黒斑紋	ほぼ完形	
100	020－03	C	SD4 F－Q11	須恵器 杯 身	12.0	－	底部外面2／3 以下の回転ヘラケズリ	灰白 N7／	密1mm程 の黒斑紋	受部～口 縁部 1／5	摩滅激しい
101	031－03	C	SD4 F－Q11	須恵器 杯 身	11.8	3.9	底部外面2／3 粗い回転ヘラケズリ	灰白 7.5Y8／1	やや粗 2 mm程の石	2／3	摩滅激しい
102	032－01	C	SD4 F－Q11	須恵器 杯 身	11.0	4.2	底部ヘラ切り未調整	灰白 N6／	密 細砂 含む	2／3	
103	032－02	C	SD4 F－P13	須恵器 杯 身	10.2	4.2	底部ヘラ切り未調整	灰白 N7／	密 細砂 多く含む	ほぼ完形	
104	032－03	C	SD4 F－P13	須恵器 杯 身	10.6	4.0	底部ヘラ切り未調整	青灰 5BG6／1	並1mm程 の石含む	1／3	
105	031－01	C	SD4 F－Q11	須恵器 杯 身	11.4	4.0	底部中央ヘラ切り未調整 底部端部に回転ヘラケズリ状の痕跡	オリーブ灰 2.5GY6／1	並 2mm 程の石	1／2	3区4層
106	033－01	C	SD4 F－Q11	須恵器 双耳壺	16.8	－	口縁部外面回転カキメ・内面ヨコナデ 体部外面平行タタキのち回転カキメ（粗い）体部内面同心円文スリケシ	オリーブ灰 2.5GY6／1	並 砂粒 含む	口縁～体 部1／3	2区1層
107	034－01	C	SD4 F－O14	須恵器 甕	38.2 ？	－	口縁端部外面に凸線頸部外面に沈線区 画のタテ方向ヘラ描き文	青灰 5PB6／1	やや粗 1 mm程の石	口縁部片	
108	028－01	C	SD4 F－P13	須恵器 高 杯	14.8	－	二段三方透かし 口縁部外面に沈線1条 二段の稜区画間に櫛描波状文 杯部底部	灰白 10YR8／1	密 3mm 程の石多	1／3	一部灰かぶり
109	022－01	C	SD4 F－Q11	須恵器 高 杯	14.0	－	脚部回転カキメ 脚部中央に沈線1条 二段三方透かし 脚部中央、裾に沈線各2条（粗い）	暗灰 N3／	密 2mm 程の石多	脚部 2／5	外面灰かぶり
110	026-02	C	SD4 F－Q8	須恵器 瓶？	体部 11.6	－	肩部に櫛状工具による施文 底部回転ヘラケズリ	灰 N5／	並 1mm 程の石多	小片	

第5表　土器観察表2

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
111	031－02	C	ＳＤ４ Ｆ－Ｒ９	須恵器 短頸壺	8.0	－	肩部内面・口縁部外面下部に接合痕？	灰白 10YR7／1	密　細砂含む	口縁～肩部　4／5	
112	034－02	C	ＳＤ４ Ｆ－Ｏ１４	須恵器 鉢？	7.6	－	体部中央沈線一条　下部に稜	青灰 5B6／1	並　1㎜程の石	口縁部 5／1	外面灰かぶり
113	029－01	C	ＳＤ４ Ｆ－Ｒ１０	須恵器 瓶	体部 8.7	－	口頸部タテ方向ヘラ描文・回転カキメを２条の沈線で区画、肩部回転カキメ 体部櫛状工具による列点文を沈線で区画 底部不定方向ナデ	青灰色 5PB6／1	密　2㎜程の石	口縁部のみ欠ける	磨滅 内外面灰かぶり
114	022－02,3 029－02	C	ＳＤ４ Ｆ－Ｑ１１	須恵器 瓶	12.4	15.8	口頸部回転カキメ後タテ方向ヘラ描文を沈線で区画　肩部回転カキメ後斜めヘラ描文を沈線で区画 体部～底部回転ヘラケズリ	灰 N6／～5／	密1㎜程の石	口頸部のみ4／5欠	３区－４層
127	028－02	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｊ１０	須恵器 長頸壺	7.3	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	並 砂粒多い	口頸部	頸部接合痕明瞭
128	008－02	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 長頸壺	－ 8.8	－	体部下1／2 回転ヘラケズリ 体部外面回転ヘラケズリ 肩端部に沈線一条　高台ハリツケ後ナデ 体部は肩までヘラケズリ後ナデ	灰白色 N7／	並 砂粒多い	体部 2／3	肩部に自然釉がかかる
129	015－02	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｉ９	陶　器 山茶椀	－ 7.6	－	モミガラ痕 糸きり痕	灰白色 N8／	並 砂粒含む	底部 2／3	藤澤編年５～６ 渥美・暗灰色粘質
130	008－01	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｉ９	陶　器 山茶椀	－ 6.2	－	モミガラ痕（少し）糸きり痕 内面中央ナデ	灰白色 N8／	並１～５㎜の石	底部のみ	藤澤編年６－尾張 暗灰色粘質土
131	015－01	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｉ９	陶　器 山茶椀	－ 7.4	－	底部内面の円周上に強いナデ モミガラ痕　糸きり痕　高台とれかけ	灰白色 N8／	並 砂粒多い	底部 1／2	藤澤編年６－尾張 暗灰色粘質土
132	015－03	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｉ９	陶　器 山茶椀	15.6 7.3	5.5	底部内面の円周上に強いナデモミガラ痕（少し）　糸きり痕　高台とれかけ	灰白色 N8／	やや粗 砂粒多い	2／5	藤澤編年６－尾張 暗灰色粘質土
133	015－04	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｉ９	青磁椀	15.0	－	内面に文様を施し内面全体と外面2／3 程に釉（明オリーブ灰5GY7／1）をかける	灰白色 N8／	密	口縁部片	太宰府編年Ⅱ－１ 暗灰色粘質土
134	039－07	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 杯	12.4	3.9	内外面共にヨコナデ	浅黄橙色 10YR8／3	並　3㎜程の石多	1／5	磨滅激しい 灰色砂層
135	040－03	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 杯	13.4	4.0	内外面共にヨコナデ？	灰白色 2.5Y8／2	並　2㎜程の石	1／8	磨滅激しい 灰色砂層
136	040－02	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 杯	13.3	3.8	不明	浅黄橙色 7.5YR8／3	並　1～2㎜程の石	1／2	磨滅激しい 灰色砂層
137	040－05	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 皿	14.4	2.8	不明	黄橙色 7.5YR8／8	やや粗 細砂含む	1／5	磨滅激しい 灰色砂層
138	040－04	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 皿	14.4	2.2	不明	橙色 5YR7／6	並　3㎜程の石多	1／6	磨滅激しい 灰色砂層
139	042－01	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 皿	8.4	1.7	不明		並　1～2㎜の石	1／9	磨滅激しい 灰色砂層
140	041－01	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｏ１６	土師器 甕	14.4	－	不明	浅黄橙色 10YR8／3	並　1～2㎜の石	口縁～頸部1／4	磨滅激しい
141	040－01	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｐ１６	土師器 甕	9.3	13.6	口縁部内面ヨコナデ　外面粗いタテハケ 体部内面ナナメハケ　体部外面上半部タテハケ　下半部ヘラケズリ	灰白色 2.5Y8／2	並1～2㎜の石	1／2	外面剝離 茶灰色砂互層
142	043－01	C	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１６	須恵器 杯身	11.2	4.3	底部ヘラ切り未調整	灰白色 N7／	並　2㎜程の石	4／7	
143	027－01	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ５	須恵器 杯身	10.8	3.1	内面中央不定方向ナデ 底部ヘラ切り未調整	灰白色 N8／	並 砂粒多い	3／5	
144	009－03	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 杯身	8.5	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	並 細砂含む	口縁～受部1／5	
145	007－06	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｈ８	須恵器 甕	20.4	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N8／	やや粗 2～3㎜の石	口縁部 1／7	
146	020－03	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	土師器 甕	18.8	－	口縁端部外面に沈線一条　体部内面ヨコハケ　外面タテハケのちヨコハケ？	灰白色 2.5Y8／2	密	口縁～体上部 1／5	磨滅激しい
147	008－03	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 蓋	12.5	－	天井部内面不定方向ナデ	灰色 N6／	並 細砂含む	1／8	陶邑編年Ⅱ－６
148	008－06	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 杯身	12.0	2.8	底部ヘラ切り未調整	明オリーブ灰 2.5GY7／1	やや粗 2㎜程石	1／7	
149	008－04	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 蓋	9.0	2.7	天井部１／２回転ヘラケズリ	明オリーブ灰 2.5GY7／1	並　2～5㎜の石	1／2	陶邑－Ⅱ6～Ⅲ－1
150	008－05	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 蓋	10.0	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	やや粗 2㎜程石	口縁～受部1／8	
151	020－02	B	ＳＤ９ Ｆ－Ｎ１５	須恵器 短頸壺	11.2	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	密 砂粒多い	口縁～体部2／7	
152	039－02	C	土器集中地点 Ｆ－Ｐ１５	土師器 甕	31.6	－	口縁部内面ヨコハケ　外面ヨコナデ 体部外面タテハケ	褐色 7.5YR4／6	並　1～3㎜の石	口縁～頸部1／9	磨滅激しい
153	039－01	C	土器集中地点 Ｆ－Ｎ１６	須恵器 甕	23.8	－	肩部外面平行タタキ 肩部内面同心円文	緑灰色 10GY5／1	並　1～3㎜の石	口縁部 2／3	陶邑編年Ⅳ ９Ｃ以降？
154	038－01	C	土器集中地点 Ｆ－Ｎ１７	須恵器 杯蓋	12.4	－	天井部外面1／2 回転ヘラケズリ	灰色 Ｎ６／	やや粗 砂粒多い	1／１０	陶邑編年Ⅱ－5,6
156	023－02	B	ＳＤ１０ Ｆ－Ｈ７	土師器 壺	－	－	体部下部回転ヘラケズリ 底部静止ヘラケズリ	明青灰色 5BG4／1	並　2㎜㎜程の石	体部 1／2	
157	044－02	C	ＳＤ１０ Ｆ－Ｌ４	須恵器 壺	5.6	8.4	体部下半回転ヘラケズリ 底部静止ヘラケズリ	緑灰色 10GY5／1	並　1～2㎜の石	ほぼ完形	内面に漆付着
158	044－01	C	ＳＤ１０ Ｆ－Ｌ４	須恵器 杯蓋	11.2	3.6	ヘラ切り未調整 内面中央ナデ	灰色 N5／	並　1㎜程の石	ほぼ完形	磨滅激しい
159	044－03	C	ＳＤ１０ Ｆ－Ｌ３	土師器 甕	15.6	－	口縁部内面ヨコハケ、外面ヨコナデ 体部内面ヨコハケ、外面タテハケ	褐灰色 10YR5／1	並 細砂含む	口縁～頸部1／3	
160	012－01	B	ＳＤ１２ Ｆ－Ｌ５	土師器 杯	12.1	5.4	内面粗いハケメ 外面不明	浅黄橙色 10YR8／3	並　2～4㎜の石	ほぼ完形	磨滅激しい
161	017－02	B	ＳＤ１２ Ｆ－Ｌ５	土師器 鉢	17.6	10.7	体部内面ユビオサエ 他は不明	にぶい 橙色 7.5YR7／4	並　1～2㎜の石	2／3	磨滅激しい底部中央に焼成後穿孔か
162	023－01	B	ＳＤ１２ Ｆ－Ｉ１５	土師器 甕	14.6	－	口縁部内面ヨコハケ 体部内面ヨコハケ	にぶい 橙色 7.5YR7／4	並　1～3㎜の石	口縁～体部1／4	磨滅激しい
163	019－01	B	ＳＤ１２ Ｆ－Ｋ１５	土師器 甕	33.0	－	口縁部内面ヨコハケ　外面ヨコナデ 体部内面上半ヨコハケ　下半ヘラケズリ 外面上半タテハケ　下半ヨコハケ？	灰白色 7.5YR8／1	並　1～3㎜の石		
164	017－01	B	ＳＤ１２ Ｆ－Ｌ１５	土師器 甕	18.8	－	口縁部不明 体部内面ヨコハケ　外面ナナメハケ	橙色 7.5YR7／6	並　1～3㎜の石	口縁～体上部 1／3	磨滅激しい

第６表　土器観察表３

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
165	013-01	B	SD12 F－L15	土師器 甕	17.7	－	口縁部外面ヨコナデ 体部内面ヨコハケ　外面タテハケ	にぶい 黄橙 10YR7／4	並　2～5㎜の石	体部上半～口縁	
166	026－04	B	SD12 F－L15	須恵器 杯　蓋	14.0	4.3	天井部ヘラ切り未調整	灰白色 N7／	粗　5㎜程の石	口縁部がやや欠ける	
167	034－03	B	SD12 F－M15	須恵器 杯　身	11.0	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N8／	やや粗2㎜程の石	受部～たちあがり1/4	
168	034－04	B	SD12 F－L15	須恵器 杯　身	10.3	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	密　2～3㎜の石	受部～たちあがり1/4	
169	009－04	B	SD12 F－G17	須恵器 杯　身	12.6	－	内外面共にロクロナデ	灰色 10Y6／1	粗　4㎜程の石	受部～たちあがり1/8	
170	026－03	B	SD12 F－J15	須恵器 杯　身	12.6	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 7.5Y7／1	並　1～3㎜の石	1／2	高杯か
171	009－08	B	SD12 F－F17	須恵器 甑	26.5	－	外面回転カキメ　内面ヨコナデ（粘土積み上げ痕残る）	灰色 10Y6／1	やや粗　4㎜程の石	口縁 1／8	
172	001－01	B	SD13 西排水溝	陶　器 山茶椀	15.4 6.0	5.8	糸切痕ナデ消し モミガラ痕	灰白色 N8／	密　1㎜程の石	4／5	藤澤編年5－尾張 墨書暗茶灰色粘質
173	024－01	B	SD13 西排水溝	陶　器 山茶椀	16.4 8.4	5.8	糸切痕ナデ消し(残る)高台とれかけ　口縁端部に沈線　底部内面の円周上に強いナデ	灰白色 N8／	密 砂粒混	3／4	藤澤編年6－尾張 墨書暗茶灰色粘質
174	011－02	B	SD13 C－V11	灰釉陶器 瓶	－ 12.6	－	体部下半ヘラケズリ　底部ハリツケ高台 内側に粘土接合痕残る。	灰白色 7.5Y8／1	密　黒斑文多い	底部と体部1／5?	
175	003－02	B	SD13 CT12	陶　器 山茶椀	－ 8.4	－	モミガラ痕（少し） 糸きり痕	灰白色 7.5Y8／1	並 砂粒混	底部 1／4	藤澤編年6－尾張
176	011－04	B	SD13 CT1	陶　器 山茶椀	－ 6.6	－	底部内面の円周上に弱いナデ 糸切り痕	灰白色 N8／	やや粗2㎜程の石	底部 1／2	藤澤編年6－尾張
177	011－01	B	SD13 CV12	陶　器 山茶椀	－ 7.0	－	モミガラ痕（少し）内面中央ナデ 糸切り痕　高台とれかけ	灰白色 N8／	粗　2～5㎜の石	底部のみ	藤澤編年6－尾張
178	031－01	B	SD13 北西隅排水溝	陶　器 捏　鉢	31.4 12.0	13.0	体部下1／3 回転ヘラケズリ 他はロクロナデ	灰白色 N8／	密 砂粒混	2／5	
179	011－03	B	SD14 C－T13	陶　器 山茶椀	－ 7.6	－	糸切り痕ナデ消し	灰白色 2.5Y8／1	並	底部 1／2	藤澤編年4？尾張
180	011－05	B	SD14 C－W12	陶　器 山茶椀	－ 9.2	－	糸切り痕ナデ消し（残る）	灰白色 7.5Y7／1	粗 砂粒多い	底部 1／3	藤澤編年4－尾張
181	028－04	B	SD15 F－C13	土師器 甕	15.3 －	－	口縁部内面ヨコハケ　外面ヨコナデ 体部内面ヨコハケ　外面タテハケ	灰白色 2.5Y8／2	並	口縁～頸部1／6	
182	009－02	B	SD15 F－D15	陶　器 山茶椀	－ 6.8	－	糸切り痕	灰白色 7.5Y7／1	密	底部 1／3	藤澤編年3－尾張
183	009－01	B	SD15 F－D15	陶　器 山茶椀		－	糸切り痕　内面中央ナデ モミガラ痕（少し）	灰白色 7.5Y7／	粗 砂粒	底部 1／3	藤澤編年6－渥美
184	037－01	B	SD16 E－F16	土師器 甕	17.8 －	－		灰白色 7.5Y8／2	やや粗2㎜程の石	口縁～頸部1／4	磨滅激しい
185	026－06	B	SD17 F－N15	須恵器 杯　蓋	－	－	天井部外面1／2回転ヘラケズリ	明青灰色 5B7／1	並　1～2㎜の石	天井部 1／2	天井部内面に円弧スタンプ
186	009－07	B	SD18 F－P18	須恵器 杯　蓋	13.4	－	天井部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ 口縁部内面の段は沈線状	青灰色 5B6／1	やや粗 砂粒多い	口縁部 1／3	
187	026－05	B	SD18 F－O17	須恵器 杯　蓋	14.0	4.3	天井部外面3／4 回転ヘラケズリ 口縁部内面の段は沈線状	明オリーブ灰 2.5GY7／1	やや粗 粗砂多い	1／2	
188	009－05	B	SD18 F－P18	須恵器 杯　身	12.0	－	内外面共にロクロナデ	緑灰色 5G6／1	密　1㎜程の石多	口縁部 1／5	
189	009－06	B	SD18 F－D18	須恵器 杯　身	13.6	－	内外面共にロクロナデ	青灰色 5BG6／1	並 砂粒含む	口縁部 1／8	
190	046－01	C	SD19 西側拡張部	須恵器 杯　蓋	16.0	－	内外面共にロクロナデ	オリーブ灰 2.5GY6／1	密 1～2㎜	口縁片	
191	047－01	C	SD20 西側拡張部	須恵器ミニチュア瓶？	－ 5.5	－	内外面共にロクロナデ 底部ヘラキリ未調整？	灰黄色 2.5Y7／2	並 1～2㎜	体部～底 1／3	
192	045－01	C	SD21 H－C8	須恵器 杯　蓋	13.6	4.7	天井部ヘラ切り未調整 口縁部内面に段	明青灰色 5B7／1	並　砂	ほぼ完形	外面一部灰かぶり
193	048－01	C	SB29 F－W10	須恵器 杯　身	13.4	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 10Y7／1	並 砂粒含む	口縁部片	P3
194	049－01	C	SB35 F－Y12	須恵器 杯　身	－	－	内外面共にロクロナデ 受け部のハリツケ痕明瞭	灰白色 N7／	並　1㎜程の石多	受部片	P3
200	036－02	C	SK40 F－O14	土師器 甕　？	8.0	－	口縁部内外ヨコナデ 体部内面ナデ	にぶい褐色 7.5YR5／3	並　1㎜程の石多	口縁～頸部1／4	内側に煤付着 3層
201	036－01	C	SK40 F－O14	土師器 甕	13.6	－	口縁部内面ヨコハケ　外面ヨコナデ 体部外面タテハケ	灰黄色 2.5Y7／2	並 砂粒多く含む	口縁 1／4	3層
202	037－03	C	SK40 F－O14	須恵器 杯　身	13.8	－	底部2／3 以下の回転ヘラケズリ？	赤灰色 10R5／1	密　1㎜程の石	口縁片	陶邑編年Ⅱ－5
203	037－01	C	SK40 F－O14	須恵器 杯　身	8.6	－	底部ヘラ切り未調整	灰白色 10YR7／1	並　細砂多く含む	1／4	外面剝離・2層 陶邑編年Ⅱ－5
204	037－04	C	SK40 F－O14	須恵器 杯　蓋	9.0	－	天井部2／3 回転ヘラケズリ	灰色 N6／	やや粗 砂粒多い	口縁片	陶邑編年Ⅱ－1 3層
205	037－02	C	SK40 F－O14	須恵器 杯　蓋	12.8	－	天井部2／3 回転ヘラケズリ	灰色 N5／	並　細砂多く含む	1／6	陶邑編年Ⅲ－3
206	026－02	B	SK41 F－M15	須恵器 杯　身	11.0	4.2	受部下面に凹線　底部ヘラ切り未調整	灰白色 N7／	並　1～3㎜の石	完形	
207	035－02	B	SK41 F－M15	須恵器 杯　身	－	－	底部外面粘土ヒモ巻上げ痕？ 底部内面粘土接合痕	灰白色 2.5Y8／1	並　2～3㎜の石	端部のみ欠ける	磨滅激しい 焼成不良
208	021－03	B	SK41 F－M15	須恵器 鉢	－	－	底部ヘラ切り未調整	明青灰色 5B7／1	密 細砂混	体部 1／4	
209	023－03	B	SK41 F－M15	土師器 鉢	15.0	7.5	内面ナデ　外面ユビオサエ 底部外面静止ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR7／3	並　2～4㎜の石	3／4	磨滅激しい
210	021－04	B	SK41 F－M15	土師器 甕	19.0	－	体部内面ナデ 他は不明	橙色 5YR6／6	並　1㎜程の石	口縁部 1／4	磨滅激しい
211	001－02	B	SK42 F－C25	土師器 高　杯	11.8	－		灰白色 10YR8／2	並　粗砂	杯部のみ	磨滅激しい

第7表　土器観察表4

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
212	029－02	B	SK42 F－C25	土師器 甕	15.4	－	口縁部外面ヨコナデ	浅黄橙色 10YR8／3	やや粗 1～2mm	口縁～頸部	磨滅激しい
213	024－02	B	SK42 F－C25	土師器 甕	21.0	－	体部内面ヨコハケ	浅黄橙色 10YR8／3	並 1～ 4mmの石	口縁～頸部	磨滅激しい
214	029－03	B	SK42 F－C25	土師器 甕	18.6	－	口縁部内外面共にヨコナデ 体部内面ヨコハケ　外面タテハケ	淡橙色 5YR8／4	並 1～ 3mmの石	口縁～体部	
215	029－01	B	SK42 F－C25	土師器 甕	23.0	－	口縁部内面ヨコハケ　外面ヨコナデ 体部内面不明　外面タテハケ	浅黄橙色 10YR8／3	並 1～ 2mmの石	口縁～頸部片	磨滅激しい
216	021－02	B	SK43 F－D14	土師器 鉢	12.0	－	体部内面横方向のナデ	にぶい橙色 7.5YR714	並 1～ 3mmの石	口縁 1／5	磨滅激しい
217	026－01	B	SK43 F－D14	須恵器 蓋	13.0	4.3	ヘラ切り未調整	灰白色 7.5Y7／1	密 2mm 程の石	2／3	
218	020－01	B	SK43 F－D14	須恵器 短頸壺	7.5	5.4	底部外面回転ヘラケズリ 内面中央ナデ一条	明青灰色 5B7／1	密細砂 多い	ほぼ完形	外面灰かぶり 重ね焼き痕
219	020－04	B	SK43 F－D14	土師器 甕	21.0	－	口縁部内面粗いナデ　外面粗いヨコナデ 体部内面横方向の粗いナデ 外面ヘラ状工具による不定方向の粗いナデ	にぶい黄橙 10YR7／3	並 2～ 4mmの石	口縁～体部上部	粘土接合痕明瞭
220	028－05	B	SK44 F－N19	土師器 甕	20.5 －	－	口縁部内面ヨコハケ　外面粗いヨコナデ 体部内面ヨコハケ　外面ナナメハケ	淡黄色 2.5Y8／4	粗 砂粒多い	口縁～頸部1／4	
221	014－01	B	SX46 F－F12	土師器 皿	15.8	3.3	口縁部ヨコナデ 他はナデ	灰白色 7.5YR8／1	密 2mm 程の石	ほぼ完形	
222	014－04	B	SX46 F－F12	土師器 皿	9.6	1.4	口縁部ヨコナデ 他はナデ	灰白色 7.5YR8／1	並	口縁部片	
224	014－05	B	SX46 F－F12	土師器 小 皿	9.0	1.5	口縁部ヨコナデ 他はナデ	灰白色 7.5YR8／1	密	3／5	
223	014－03	B	SX46 F－F12	土師器 小 皿	15.4	－	口縁部ヨコナデ 他はナデ	灰白色 7.5YR8／1	密	ほぼ完形	
225	014－02	B	SX46 F－F12	土師器 小 皿	8.9	1.6	口縁部ヨコナデ 他はナデ	灰白色 7.5YR8／1	密	ほぼ完形	
227	016－05	B	SX47 F－F13	陶 器 山 皿	8.3 4.3	2.4	糸きり痕ナデ消し 内面中央ナデ	灰白色 2.5Y8／1	並 細砂	完形	底部外面にα形の墨書
228	016－04	B	SX47 F－F13	陶 器 山 皿	8.6 4.6	1.8	糸きり痕ナデ消し	灰白色 N8／	並 2mm 程の石	ほぼ完形	底部外面にα形の墨書
229	016－03	B	SX47 F－F13	陶 器 山 皿	8.5 4.9	2.2	糸きり痕	灰白色 2.5Y8／1	並 粗砂	完形	底部外面にα形の墨書
230	016－06	B	SX47 F－F13	陶 器 山 皿	8.0 5.0	2.3	糸きり痕	灰白色 2.5Y8／1	並 2mm 程の石	完形	底部外面にα形の墨書
231	016－02	B	SX47 F－F13	陶 器 山茶椀	15.8 6.7	5.8	糸切り痕	灰白色 5Y8／1	並 2～ 4mmの石	口縁1／4 のみ欠け	
234	016－01	B	SX48 F－G11	陶 器 山茶椀	14.3 6.0	5.1	糸きり痕 底部内面の円周上にヨコナデ	灰白色 2.5Y8／1	並 粗砂多い	ほぼ完形	
235	019－02	B	SX49 F－I14	土師器 皿	7.4	1.2	口縁部内面ヨコナデ	灰白色 2.5Y8／2	密 1mm 程の石	完形	風化激しい
238	048－03	C	PIT F－Y10	土師器 甕	16.1	－	口縁部外面ヨコナデ 他は不明	浅黄橙色 10YR8／3	並 2mm 程の石	口縁 1／7	磨滅激しい P2
239	049－02	C	PIT F－Y12	須恵器 杯 身	12.6	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	密 細砂含む	口縁片	P1
240	048－02	C	PIT F－S12	須恵器 壺？	8.4	－	口頸部外面回転カキメのち櫛描波状文 口縁部外面に沈線一条	灰色 N5／	密 1mm 程の石	口縁 1／5	P1
248	029－07	B	包含層 F－F17	土師器 甕	14.4	－	口縁部外面ヨコナデ 体部外面タテハケ	淡黄色 2.5Y8／4	並 細砂含む	口縁～頸部1／7	
249	029－06	C	包含層 東トレンチ	土師器 甕	15.8	－		淡黄色 2.5Y8／4	密 細粒含む	口縁～頸部1／8	磨滅激しい
250	056－02	C	包含層 H－C9	土師器 甕	16.7	－	口縁部内外面共にヨコナデ 体部内面ヨコハケ　外面タテハケ	にぶい黄橙 10YR7／2	密 1mm程の石	口縁部片	
251	061－05	C	包含層 H－C9	土師器 甕	16.2	－	口縁部外面ヨコナデ	淡黄色 2.5Y8／4	並 細砂含む	口縁部 1／10	
252	061－04	C	包含層 N－C9	土師器 甕	17.7	－		灰白色 2.5Y8／2	並 1mm 程の石	口縁片	磨滅激しい
253	051－03	C	包含層 H－B9	土師器 甕	17.6	－		にぶい 黄橙 10YR8／2	並 2mm 程の砂	口縁部 1／4	磨滅激しい
254	029－04	B	包含層 F－M20	土師器 甕	16.2	－		浅黄色 2.5Y7／4	密 砂粒含む	口縁～頸部1／8	磨滅激しい
255	029－05	B	包含層 F－P18	土師器 甕	18.0	－		灰白色 7.5Y8／1	密 細砂含む	口縁部 1／7	磨滅激しい
256	035－03	B	包含層 東側排水溝	土師器 甕	18.0	－	口縁部外面ヨコナデ 体部内外面共にナナメハケ	灰白色 10YR8／2	並 砂粒含む	口縁～頸部1／4	
257	070－01	C	包含層 東トレンチ	土師器 甕	19.7	－	口縁部内面ヨコハケ	浅黄橙色 10YR8／3	やや粗 粗砂多い	口縁部 1／7	磨滅激しい
258	050－01	C	包含層 H－B9	土師器 甕	18.6	－	口縁部外面ヨコナデ 体部外面ナナメハケ	にぶい橙色 7.5YR7／3	並 2mm 程の石	口縁～頸部1／4	磨滅
259	057－01	C	包含層 H－B9	土師器 甕	17.8	－	口縁部外面ユビオサエ？ 体部内面ヨコハケ　外面ナナメハケ	灰白色 2.5Y8／2	並 2～ 5mmの石	口縁部 1／5	磨滅
260	051－05	C	包含層 H－B9	土師器 甕	18.6	－	口縁部内面ヨコハケ 体部内面ヨコハケ　外面ナナメハケ	にぶい橙色 7.5YR7／3	密 1～ 3mmの石	口縁～胴上部 2／5	磨滅
261	051－04	C	包含層 H－B9	土師器 甕	18.5	－	口縁部内面ヨコハケ 体部外面ナナメハケ	橙色 7.5YR7／6	密 1～ 4mmの石	口縁～頸部1／2	磨滅激しい
262	057－03	C	包含層 H－B9	土師器 甕	19.9	－		淡黄色 2.5Y8／3	並 2～ 3mmの石	口縁部 1／4	磨滅 風化
263	061－02	C	包含層 H－C9	土師器 甕	20.9	－	口縁部内面ヨコハケ 外面ヨコナデ	淡黄色 2.5Y8／3	密 細砂含む	口縁部 1／6	磨滅
264	051－01	C	包含層 H－B9	土師器 甕	20.6	－		淡黄色 2.5Y8／3	やや粗 細砂含む	口縁部 1／8	磨滅 風化
265	056－03	C	包含層 H－C9	土師器 甕	23.7	－	口縁部内面ヨコナデ 体部内面ヨコハケ	にぶい黄橙 10YR6／4	やや粗1～ 4mmの石	口縁部片	磨滅

第8表　土器観察表5

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
266	050-02	C	包含層 H－B 9	土師器 甕	20.8	－	口縁部内面ヨコハケ 体部内面横方向のヘラケズリ	にぶい 黄橙 10YR7／2	並 1～2㎜の石	口縁部片	磨滅激しい
267	051－02	C	包含層 H－B 9	土師器 甕	22.6	－		灰白色 2.5Y8／2	並 2㎜程の石	口縁部 1／8	磨滅
268	057－02	C	包含層 H－B 9	土師器 甕	24.0	－	口縁部外面ヨコナデ 体部内面上端ヨコハケ 下部横方向ヘラケズリ 外面上端タテハケ 下部ヨコハケ	にぶい 黄橙 10YR7／3	並2～4㎜の石	口縁～胴上部1／10	風化
269	056－04	C	包含層 H－C 9	土師器 甕	25.9	－		淡黄色 2.5Y8／3	並1～4㎜の石	口縁～体部片	磨滅激しい
270	061－03	C	包含層 H－C 9	土師器 甕	28.5	－		浅黄色 10YR8／3	粗 2㎜程の石多	口縁部 1／8	磨滅激しい
271	059－01	C	包含層 H－B 9	土師器 甑 ?	63.0	－	外面タテハケ	淡黄色 2.5Y8／3	並 1㎜程の石	口縁部片	磨滅激しい
272	036－04	B	包含層 C－T 1 6	土製品 土 錘	長さ3.3 、径1.3 、孔径0.3 、重さ5.2g 片側が欠損しているが、ていねいなつくり			明黄褐色 10YR6／6	密 細砂含む	約 2／3	
273	036－03	B	包含層 北側排水溝	土製品 土 錘	長さ4.0 、径1.4 、孔径0.3 、重さ8.3g 端部が欠損			灰白色 10YR8／2	密 細砂含む	ほぼ完形	
274	007－02	B	包含層 東トレンチ	須恵器 杯 蓋	12.7 －	－	天井部外面に螺旋形のナデ跡は認められるが、回転ヘラケズリ調整はみられない 口縁部内面の段は沈線状	灰色 N5／	密 砂粒含む	口縁～受部1／6	
275	069－01	C	包含層 F－Y 8	須恵器 杯 蓋	11.6	－	口縁部内面に稜	灰白色 N7／	密 細砂含む	1／8	陶邑編年Ⅱ－5～6
276	062－08	C	包含層 H－C 9	須恵器 杯 蓋	14.0	4.5	口縁部内面にゆるい稜 ヘラ切り未調整	灰白色 5Y8／1	並 3～5㎜の石	1／3	磨滅激しい
277	062－01	C	包含層 H－B 9	須恵器 杯 蓋	14.0	－	口縁内面に段 ヘラ切り未調整	黄灰色 2.5Y5／1	並 4㎜程の石多	1／4	
278	073－06	C	包含層 F－W 9	須恵器 杯 蓋	14.8	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	並 1～3㎜の石	口縁部 1／8	
279	036－02	B	包含層 F－N 1 7	須恵器 杯 蓋	12.6	3.5	ヘラ切り後粗いロクロナデ 天井部内面不定方向ナデ	灰白色 N7／	並 砂粒含む	1／4	
280	062－07	C	包含層 H－B 6	須恵器 杯 蓋	－	－		灰白色 10Y8／1	並 2～5㎜の石	天井部のみ	磨滅 焼成不良
281	062－03	C	包含層 H－C 8	須恵器 杯 蓋	11.9	－	口縁部内面に段	灰白色 N7／	密 細砂	口縁部 1／7	外面薄く灰かぶり
282	069－03	C	包含層 H－B 9	須恵器 杯 蓋	11.4	－	口縁部内面にゆるい段	灰白色 7.5Y7／1	並 細砂	口縁部 1／10	外面1／2 に灰かぶり
283	007－03	B	包含層 C－T 1 4	須恵器 杯 身	11.0	－	底部外面全面回転ヘラケズリ	灰白色 N7／	並 2㎜程の石	口縁～受部1／7	
284	068－01	C	包含層 H－C 9	須恵器 杯 身	12.2	－	口縁部内面に沈線状の段 底部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ	青灰色 5BG5／1	粗 2～4㎜の石	1／6	
285	072－02	C	包含層 H－B 9	須恵器 杯 身	13.3	－	底部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ	灰白色 N7／	密 1空4㎜の石	1／5	陶邑編年Ⅱ－4
286	073－05	C	包含層 H－W 1 1	須恵器 杯 身	12.4	－	底部外面2／3 以下の回転ヘラケズリ	灰色 N6／	並 細砂	口縁部 1／4	
287	067－02	C	包含層 F－P 1 5	須恵器 杯 身	12.0	4.2	底部ヘラ切り後粗いナデ	灰白色 N8／	並 1～3㎜の石	9／10	陶邑編年Ⅱ－5～6
288	072－01	C	包含層 H－B 6	須恵器 杯 身	14.8	－	内外面共にロクロナデ	明青灰色 10BG7／1	並 細粒	口縁部 1／10	
289	069－02	C	包含層 H－B 6	須恵器 杯 身	13.7	－	内外面共ロクロナデ	灰色 5Y6／1	並 細砂	口縁部 1／8	
290	062－02	C	包含層 H－B 7	須恵器 杯 身	11.8	4.6	底部外面2／3 回転ヘラケズリ 内面中央ナデ	灰色 N6／	並 1～4㎜の石	1／2	
291	062－04	C	包含層 H－B 6	須恵器 杯 身	12.1	4.0	内面中央ナデ 底部ヘラ切り未調整	灰色 N6／	並 2～4㎜の石	1／4	
292	062－05	C	包含層 H－A 5	須恵器 杯 身	12.0	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	密 細砂含む	口縁部 1／5	外面薄く灰かぶり
293	073－01	C	包含層 H	須恵器 杯 身	11.6	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	並 砂粒多い	口縁部 1／10	
294	072－03	C	包含層 H－B 6	須恵器 杯 身	11.8	4.0	ヘラ切り未調整 底部内面不定方向ナデ	灰白色 N7／	並 2～4㎜の石	4／5	
295	067－01	C	包含層 F－S 1 4	須恵器 杯 身	11.2	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N8／	やや粗 細砂多い	1／10	陶邑編年Ⅱ－5～6
296	034－02	B	包含層 F－H 1 6	須恵器 杯 身	9.7	－	底部ヘラ切り後粗いナデ？	灰白色 N7／	並 細砂	1／4	受け部の蓋の重ね焼痕
297	037－03	B	包含層 F－M 1 4	須恵器 杯 身	10.0	4.4	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	密 1～2㎜の石	口縁～受部1／6	
298	066－01	C	包含層 F－Q 1 5	須恵器 杯 身	11.4	4.4	底部ヘラ切り未調整	灰色 10Y7／1	やや粗 砂粒多い	4／5	
299	073－02	C	包含層 F－N 2	須恵器 高 杯	13.0	－	内外面共にロクロナデ	灰色 N6／	並 3㎜程の石	口縁部 1／8	
300	034－06	B	包含層 南側トレンチ	須恵器 高 杯	－ 11.2	－	脚端部の外側上部に一条の凹線がめぐる	灰白色 N8／	並 砂粒含む	裾部 1／4	外面灰かぶり
301	069－04	C	包含層 H－B 9	須恵器 高 杯	－ 9.1	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N7／	密 細砂含む	裾部 1／10	内面に灰かぶり
302	064－03	C	包含層 H－B 6	須恵器 高 杯	－ 10.6	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 5Y7／1	やや粗 粗砂多い	脚部 1／2	磨滅 焼成不良
303	073－04	C	包含層 F－X 6 攪乱	須恵器 高 杯	10.5	－	内外面共にロクロナデ	明オリーブ灰 2.5GY7／1	並 細砂含む	裾部 1／5	
304	064－01	C	包含層 H－B 6	須恵器 高 杯	－ 10.2	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 7.5Y7／1	並 細砂含む	脚部 1／3	杯部剥離痕残る
305	036－07	B	包含層 F－N 1 5	須恵器 甕	9.8	－	口縁部と体部に凹線が施される。	灰白色 N8／	並 砂粒含む	口縁～体上部 1／2	上部に薄く自然釉かかる
306	062－06	C	包含層 H－B 7	須恵器 短頸壺	8.0	－	肩部回転カキメ調整	灰白色 N7／	密 細砂含む	口縁～肩部1／8	
307	025－01	B	包含層 農道下黄色土	須恵器 鉢	－	－	体部下半に沈線が巡る 穿孔は一定方向から施す	灰色 N6／	並 細砂含む	体下半～底部3／5	底部の刺突は深さ3～4㎜で円形

第９表　土器観察表６

遺物番号	登録番号	地区	遺構（出土位置）	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
308	058－01	C	包含層 F－Q16	須恵器 甕	22.8	－	体部外面平行タタキのち回転カキメ 内面同心円文半スリケシ	灰色 N5／	並	口縁～胴上部 1／	
309	003－03	B	包含層 C－Y17	陶　器 灰釉瓶	－ 9.6	－	内外面共にロクロナデ	灰白色 N8／	並 細砂含む	底部 1／3	灰色土
310	035－05	B	包含層 CV14包含	陶　器 山茶椀	－ 7.5	－	口縁端部に自然釉	灰白色 7.5Y8／1	並2㎜程の石多い	口縁部片	藤澤編年7～8 瀬戸（灰褐色）
311	036－01	B	包含層 CW12包含	陶　器 山茶椀	－ 5.3	－	口縁端部外面に面をもつ 口縁端部に自然釉	灰白色 N8／	並 細砂含む	口縁部片	藤澤編年6～7 尾張（灰褐色）
312	055－02	C	包含層 F－T14	陶　器 山茶椀	13.7	－	口縁端部に面をもつ	灰白色 5Y8／1	密　4㎜程の石	口縁部 1／ 5	
313	003－05	B	包含層 CW19	陶　器 山茶椀	－ 7.6	－	糸切り痕	灰白色 N8／	並	底部 1／3	藤澤編年5渥美（灰褐色）
314	034－01	B	包含層 FJ10	陶　器 山茶椀	－ 6.4	－	糸切り痕　モミガラ痕 内面中央ナデ	灰白色 5Y8／2	やや粗 砂粒多い	底部のみ	藤澤編年6尾張
315	006－01	B	包含層 CW22	陶　器 山茶椀	－ 7.4	－	糸切り痕　モミガラ痕　高台とれかけ 内面中央ナデ	灰白色 N8／	密　3㎜程の石	底部 1／2	藤澤編年7尾張
316	004－01	B	包含層 CX19	陶　器 山茶椀	－ 5.4	－	糸切り痕　高台とれかけ モミガラ痕	灰白色 N8／	並 細砂含む	底部のみ	藤澤編年7尾張（灰褐色）
317	004－05	B	包含層 CY15	陶　器 山茶椀	－ 6.6	－	糸切り痕ナデ消し（残る） 高台に繊維痕　内面中央ナデ	灰白色 N8／	並 細砂含む	底部 1／2	藤澤編年5渥美（暗褐色）
318	022－01	B	包含層 FA21	陶　器 山茶椀	－ 5.8	－	糸切り痕　モミガラ痕 高台とれかけ	灰白色 N7／	並 細砂含む	底部 1／2	藤澤編年6尾張 暗灰色・底に墨書
319	003－04	B	包含層 CU21	陶　器 山茶椀	－ 9.0	－	糸切り痕 モミガラ痕（少し）	灰白色 5Y8／2	並 細砂含む	底部 1／3	藤澤編年5尾張（暗灰色）
320	007－07	B	包含層 FA21	陶　器 山茶椀	－ 7.8	－	糸切り痕ナデ消し（残る）	灰白色 N7／	並 砂粒含む	底部 1／4	藤澤編年4？渥美
321	004－04	B	包含層 CX19	陶　器 山茶椀	－ 7.8	－	糸切り痕 モミガラ痕	灰白色 N8／	並 細砂含む	底部 1／3	藤澤編年5尾張（灰褐色）
322	006－02	B	包含層 CW22	陶　器 山茶椀	－ 7.6	－	糸切り痕 モミガラ痕	灰白色 N8／	並 細砂含む	底部 1／4	藤澤編年5～6 尾張
323	003－06	B	包含層 CU18	陶　器 山茶椀	－ 9.2	－	糸切り痕ナデ消し モミガラ痕	灰白色 N8／	並 砂粒含む	底部 1／2	藤澤編年5尾張（灰色）
324	007－05	B	包含層 FA21	陶　器 山茶椀	－ 7.7	－	糸切り痕	灰白色 5Y8／2	粗 細砂多い	底部 1／3	藤澤編年6尾張 B1／B2 境の畦
325	036－06	B	包含層 CX20	陶　器 山茶椀	－ 6.8	－	糸切り痕 高台とれかけ　内面中央ナデ	灰白色 N8／	やや粗 砂粒含む	底部 1／5	藤澤編年6尾張（灰褐色）
326	007－01	B	包含層 C－X11	陶　器 湯呑み	－ 4.0	－	灰白色（10Y8／2）の釉が内面にかかる	灰白色 N7／	密	底部 3／4	美濃焼か？ 登窯7
327	054－01	C	包含層 F－Q16	陶　器 山　皿	7.4 4.8	1.6	糸切り痕 内面中央ナデ	灰白色 N8／	密	2／3	
328	034－10	B	包含層 西壁	陶　器 鉢	－	－	内外面共粗いロクロナデ	灰白色 N8／	並 細砂含む	口縁部片	渥美産
329	018－01	B	包含 F－H14	層陶器 こね鉢	25.0 12.0	8.8	内外面共にロクロナデ ハリツケ高台	灰色 5Y8／1	並　2～5㎜の石	口縁部 1／5 欠け	
330	064－04	C	包含層 E－S24	陶　器 鉢	27.5	－	内外面共にロクロナデ 内面に円形のスタンプ文	にぶい 赤褐 5YR4／3	並　2㎜程の石	口縁部 1／8	常滑焼・15世紀後半～16世紀前半
331	063－01	C	包含層 F－X6攪乱	陶　器 こね鉢	30.0 13.8	11.4	底部外面回転ヘラケズリ　底部外面中央以外の全面にオリーブ黄色の釉	灰色 N6／	密	1／9	美濃焼 登窯2
332	005－02	B	包含層 C－T13	土師器 羽　釜	27.8	－		浅黄橙色 7.5YR8／6	密 砂粒含む	口縁部片	磨滅 灰色土
333	005－01	B	包含層 C－Y20	土師器 羽　釜	28.0 ?	－	内外面共ロクロナデ	淡黄色 2.5Y8／3	密 細砂含む	口縁部片	磨滅 暗灰色土
334	006－05	B	包含層 F－B10	土師器 羽釜	27.4 ?	－	内外面共ロクロナデ	灰白色 2.5Y8／2	密	口縁部片	磨滅
335	022－03	B	包含層 B2	瓦　質 羽　釜	32.4 ?	－	内外面共ロクロナデ	黒 N2／	並 細砂含む	口縁部片	口縁部に内側から穿孔
336	006－04	B	包含層 C－W22	陶　器 鉢	?	－	内外面ヨコナデされ、口縁端部上面に面をもつ	灰色 7.5Y6／1	並 細砂含む	口縁部片	常滑焼・12世紀後半
337	035－07	B	包含層 C－Y11	陶器 すり鉢	?	－	内外面に明赤褐色（5YR5／6）の釉がかかる	灰白色 5Y8／1	並 細砂含む	口縁部片	登窯5
338	006－03	B	包含層 F－B10	陶　器 椀	－ 8.0	－	底部外面回転ヘラケズリ	灰白色 10YR8／1	並 黒斑紋	底部 1／3	登窯2 底部外面に墨書
339	035－04	B	包含層 C－X25	陶　器 皿	10.6 6.2	2.1	底部外面回転ヘラケズリ	灰白色 7.5Y8／1	並 砂粒含む	1／3	登窯5・志野焼 暗灰色土
340	004－06	B	包含層 C－X20	陶　器 皿	11.5 6.6	1.7	底部外面回転ヘラケズリ 他はヨコナデ後灰白色(2.5Y8／2）の釉を接地部以外の全面に施す	灰白色 7.5Y8／1	やや粗 細砂含む	1／5	登窯5・志野焼
341	022－02	B	包含層 C－U20	陶　器 おろし皿	－ 9.0	－	ヘラ状工具による格子目 底部に糸切り痕	灰白色 2.5Y8／2	やや粗 細砂含む	底部 1／8	登窯4 暗灰色土
342	055－01	C	包含層 F－S11	陶　器 短頸壺	5.4	－	口縁部内外共ロクロナデ 肩部外面に列点刺突状施文（回転施か）	灰白色 7.5Y7／1	密	口縁部 1／4	
343	065－01	C	包含層 F－X7	陶器（青土瓶）　蓋	－ 7.4	－	内外面共にロクロナデ　天井部全面にくすんだ緑色の釉がかかる	灰白色 2.5Y8／2	並	1／3	登窯8・信楽焼
344	030－02	B	包含層 F－O17	陶　器 丸　椀	－ 4.4	－	体部内外面に灰白色（7.5Y7／2 ）の灰釉がかかる。けずり出し高台	灰白色 2.5Y7／1	並 細砂含む	底部 1／3	登窯2
345	065－03	C	包含層 F－Y7	陶　器 皿	－ 5.2	－	底部外面回転ヘラケズリ　接地部以外は灰白色(10Y7／1)の灰釉を施す	灰白色 10Y8／1	密	高台 2／3	登窯6
346	065－02	C	包含層 F－M4	陶　器 仏　器	－ 4.0	－	内外面共にロクロナデ　外面に灰白色(10Y7／2)の灰釉を施す	灰白色 7.5Y8／1	並　黒斑紋含む	脚部 2／3	登窯8
347	060－01	C	包含層 F－Q3	磁　器 椀	－ 3.6	－	削り出し高台　接地部以外は全面に釉がかかる　模様の色は灰～オリーブ灰	灰白色 10Y8／1	密	高台完形	登窯7
348	030－01	B	包含 F－O17	層陶器 天目茶椀	11.0	－	口縁部の器壁はうすくなり外反する端部は丸くおさまる	灰白色 7.5Y8／1	並 細砂含む	口縁～体上半 1／8	登窯5
349	004－03	B	包含層 C－Y20	陶　器 天目茶椀	－ 4.8	－	けずり出し高台 鉄釉が内面と外面の体部にかかる	灰白色 2.5Y8／2	密 細砂含む	底部 1／3	登窯3
350	036-05	B	包含層 C－W11	青　磁 椀	－	－	体部外面ヘラケズリ　内面は花文を描いたあと、灰オリーブ色の釉がかかる	灰白色 N7／	密	底部 3／5	太宰府編年Ⅲ－1

第10表　土器観察表7

遺物番号	登録番号	地区	遺構（層）	出土位置	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	形態・技法・調整の特徴・備考
1	078-03	C	SD 1（2区）	F－T 2	ナイフ形石器	3.7	1.3	0.8	3.14	頁岩	両縁調整
2	078-02	C	SD 1（2区）	F－V 1	剥片	3.1	2.8	0.9	8.20	サヌカイト	バルブが発達
3	075-01	C	SD1(1トレンチ)	F－W 1	石核	2.6	3.1	1.3	16.89	チャート	
4	078-01	C	SD1(2区)	F－U 2	削器	3.4	1.0	0.6	2.24	サヌカイト	
5	077-03	C	SD1(2区)	F－V 1	剥片	2.2	1.0	0.5	1.51	チャート	
6	079-01	C	SD1(2区)	F－V 1	剥片	2.9	1.5	0.7	3.62	サヌカイト	
7	080-01	C	SD1(2区)	F－V 1	剥片	2.4	1.8	0.3	1.24	チャート	
8	077-01	C	SD1(1トレンチ)	F－V 1	剥片	2.5	2.0	0.4	1.95	チャート	
9	084-01	C	SD1(4区)	F－S 7	石核	3.5	1.4	1.7	5.08	チャート	
10	083-01	C	SD1(3区)	F－S 5	剥片	2.4	2.2	0.3	1.62	チャート	
11	079-03	C	SD1(2区)	F－V 1	剥片	2.7	2.4	0.8	3.70	チャート	
12	086-01	C	SD1(8区)	F－R15	剥片	2.8	2.2	1.0	8.11	チャート	原礫面を残す
13	081-01	C	SD1(2区)	F－V 1	剥片	1.3	0.9	0.2	0.23	チャート	
14	077-02	C	SD1(2区)	F－V 2	剥片	1.4	1.2	0.2	0.46	泥岩	
15	076-01	C	SD1(1トレンチ)	F－V 1	剥片	1.7	1.2	0.3	0.70	チャート	
16	079-02	C	SD1(2区)	F－V 1	剥片	1.7	0.9	0.2	0.30	サヌカイト	
17	082-01	C	SD1(2区)	F－U 1	剥片	4.1	2.7	0.7	7.75	チャート	
18	085-01	C	SD1(6区)	F－T12	剥片	4.0	3.8	1.3	16.64	チャート	
76	092-01	C	SD2(2区)	F－R 7	二次加工有剥片	2.0	1.7	0.3	0.70	サヌカイト	急斜度で浅い片面調整
77	093-01	C	SD2(2区)	F－Q 6	剥片	1.9	1.7	0.4	0.83	チャート	
78	091-01	C	SD2(1区)	F－R 5	ポイントチップ	1.2	1.6	0.3	0.53	サヌカイ	
79	024-01	C	SD4(3区1層)	F－Q11	砥石？	22.0	10.5	4.6	1160.0	砂岩	擦痕がみられる
116	088-03	C	SD5(2ベルト)	F－Y 7	有舌尖頭器	6.6	2.0	0.5	4.85	サヌカイト	縄文草創期
117	090-02	C	SD5(6区)	H－C 9	石鏃	2.2	1.1	0.3	0.79	サヌカイト	凹基無茎鏃
118	087-02	C	SD5(3区)	F－Y 7	石錐	2.8	1.7	0.6	2.10	サヌカイト	
119	087-01	C	SD5(2)	F－Y 7	抉入石器	2.8	3.0	0.5	4.77	チャート	抉り調整・急斜度調整
120	088-01	C	SD5(2区)	F－X 7	剥片	1.9	1.3	0.2	0.49	チャート	
121	089-02	C	SD5(3ベルト)	H－A 8	剥片	1.4	1.0	0.2	0.24	サヌカイト	
122	088-02	C	SD5(4区)	H－A 9	剥片	2.2	1.8	0.3	1.79	チャート	
123	090-01	C	SD5(6区)	H－C10	剥片	2.3	1.8	0.7	1.78	チャート	
124	089-01	C	SD5(5区)	H－B 9	剥片	3.3	2.5	0.7	5.81	チャート	
126	028-01	B	SD9(暗灰色粘土)	F－J10	磨石	12.7	8.9	2.2	420.0	砂岩	擦痕がみられる
155	044-04	C	SD10(H)	F－I 6	磨り石	7.5	7.5	3.1	330.0	砂岩	刃部と折れ口に擦痕
195	094-01	C	SK38	F－K 7	二次加工有剥片	3.0	4.0	1.6	19.24	チャート	
196	095-01	C	SK38	F－K 7	剥片	3.4	2.6	1.0	6.40	チャート	
197	095-04	C	SK38	F－K 8	剥片	2.1	1.6	0.6	1.32	頁岩	
198	095-03	C	SK38	F－K 7	剥片	1.3	0.8	0.3	0.28	頁岩	
199	095-02	C	SK38	F－K 7	剥片	0.7	0.9	0.2	0.07	粘板岩	
237	096-01	C	P 1	F－W12	石匙	3.0	3.9	0.4	4.83	サヌカイト	横型・縄文中期以前？
241	003-07	B	包含層	C－V22	石鏃	2.4	2.1	0.6	1.69	チャート	凹基無茎鏃
242	033-01	B	包含層	F	石鏃	2.3	1.9	0.3	1.73	サヌカイト	凹基無茎鏃
243	098-02	C	包含層	F－P15	石鏃	2.1	1.8	0.6	0.80	サヌカイト	五角形鏃
244	003-08	B	包含層	F－A10	石鏃	2.6	1.3	0.3	0.32	サヌカイト	凹基無茎鏃
245	003-01	B	包含層	F－E21	石核	5.3	5.0	1.8	45.88	チャート	
246	097-01	C	包含層	F－N 3	剥片	2.4	1.6	0.7	2.25	サヌカイト	
247	098-01	C	包含層	F－K 4	二次加工有剥片	3.7	2.2	0.5	5.22	サヌカイト	縁辺に二次加工

第11表　石器観察表

遺物番号	登録番号	地区	遺構	出土位置	名称	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	特徴・備考
226	002-01	B	SX46	F-F 12	釘状鉄製品	5.1	0.7	0.3	7.2	逆L字形を呈し断面は長方形である。先端は折れたものか？X線写真撮影済
232	032-02	B	SX47	F-F 13	鋏み？	9.6	1.4	0.3	11.4	骨が付着した状態で2点出土。
					鋏み？	3.0	1.0	0.2		1点は両側が折れている。　X線写真撮影済
233	032-01	B	SX47	F-F 13	小刀	21.5	2.3	0.6	112.5	茎部は途中で折れている。茎部に骨片付着。X線写真撮影済
236	032-03	B	SX49	F-I 14	小刀	25.0	2.2	0.6	156.5	目釘穴径5㎜・木質痕と刀の折れが所々に窺える・茎部は途中で折れる X線写真撮影済

第12表　鉄製品観察表　　※重量には錆も含む

遺物番号	登録番号	地区	遺構	出土位置	名称	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	特徴・備考
73	099-01	C	SD 1	F-T7	漕	28.7	13.7	2.5	不明	未鑑定	十能（又は漕）形
74	102-01	C	SD 1	F-S4	棒状木製品	53.9	1.8	1.3	辺材	未鑑定	一部に加工痕あり
75	100-01	C	SD 1	F-V1	棒状木製品	45.0	4.6	3.7	辺材	未鑑定	一部に加工痕あり
115	104-01	C	SD 4	F-R9	槽？木樋？	91.0	10.0	1.7	不明	未鑑定	
125	103-01	C	SD 7	F-V3	曲物底板	直径	12.6	0.7	不明	未鑑定	

第13表　木製品観察表

7．地理学的考察

(1) 津市、毛無川中流域の地形環境

青　木　哲　哉　（立命館大学非常勤講師）

1．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またこれを利用しながら生活してきた。なかでも、地形は人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活とは密接な関係にあると考えられる。人間は、居住や生産、埋葬などの生活目的に応じて、活動の場である地形を選定し、またときにはこれを改変することがあった。こうした地形環境は、地球上に人間が誕生してからも変化を続け、現在に至っている。人間は、時代とともに進展する自らの生活を、移り変わる地形環境に巧みに対応させ、よりよい生活を求めてきたのである。この点からみて、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期ごとの地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

このような地形環境は、従来の地形研究でなされてきた数1,000年オーダーでの考察だけでなく、人間生活に見合ったより細かいオーダーで究明されなければならない。このためには、遺跡の発掘地域における地形・地質学的な調査が有効な手段となる。発掘地域では、微地形や堆積物などが直接かつ詳細に観察できるため、細かいオーダーの地形環境を復原することが可能である。また、出土した遺物の編年を通じて、地層の堆積時期や微地形の形成時期が判明し、復原された地形環境がどの時期のものかを捉えられる。一方、遺跡の発掘では、遺構という人間生活の痕跡が検出されるため、これらの考古学的な分析によって、過去の人間生活が克明に明らかにされる。遺跡の発掘を通じて、過去の地形環境と人間生活の両者が明らかになり、これらの関り合いについても考察できるのである。

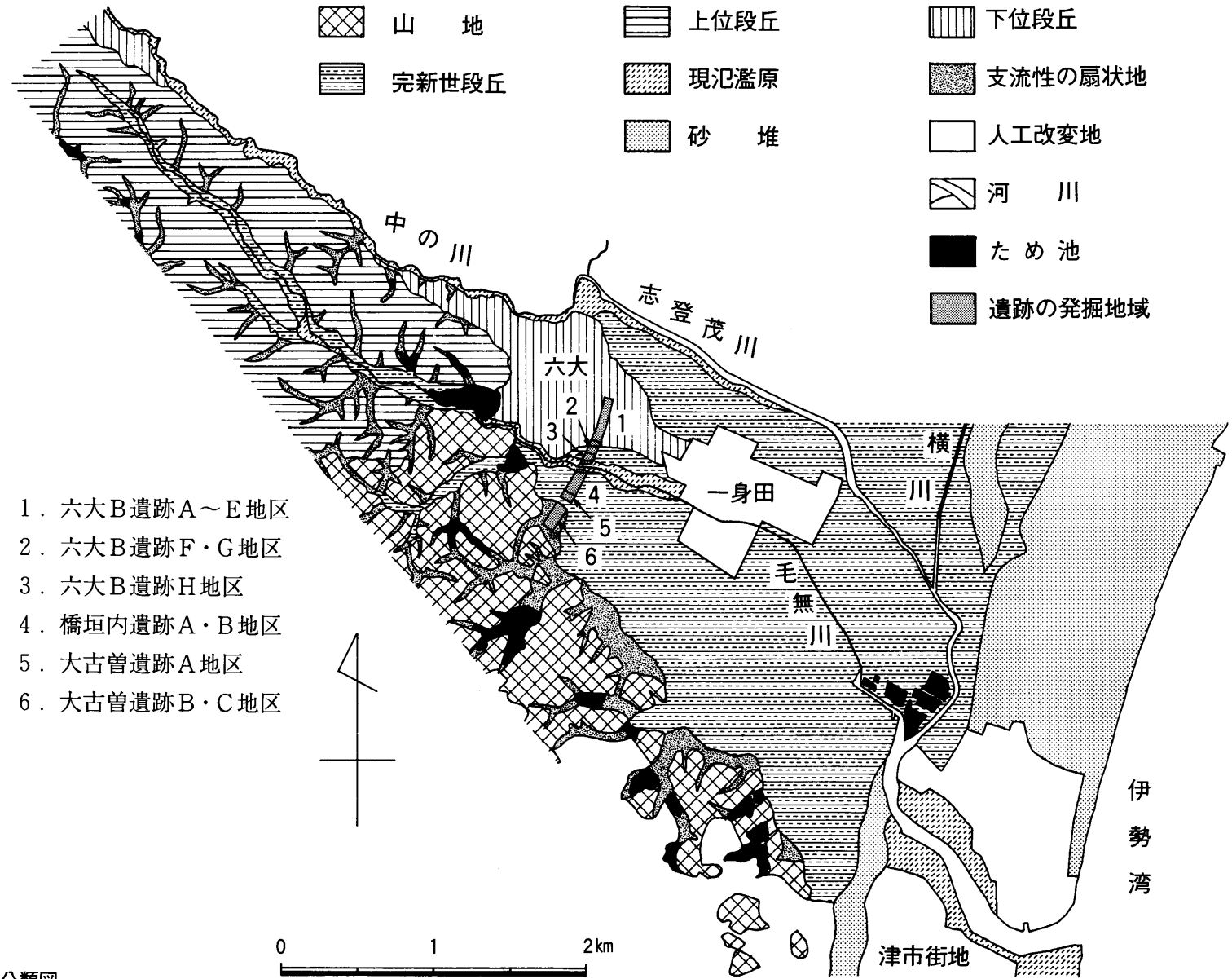
本稿では、六大Ｂ遺跡、橋垣内遺跡および大古曽遺跡における地形・地質学的な調査結果をもとに、毛無川中流域の地形環境を明らかにし、これと人間生活との関り合いについて考察したい。考察に際しては、(1)２万分の１空中写真の判読と現地観察を通じて、毛無川流域における地形の様相を明らかにし、(2)各遺跡の発掘地域における微地形と地質断面を詳細に観察することによって、細かいオーダーの地形環境を復原した。さらに、(3)各遺跡での考古学的な調査成果を踏まえて、人間生活が地形環境とどのように対応してきたかについて考察した。

2．地形の分布と遺跡の立地

毛無川は、志登茂川の一支流にあたる小規模な河川である。毛無川流域の北側には志登茂川、南側には安濃川が流れており、両河川流域の間には丘陵と更新世段丘が認められる。毛無川は、こうした段丘および丘陵を刻む谷中に源を発し、上流部では狭長な谷中を東南方へ流れる。中・下流部においては、比較的広い沖積平野が形成されており、毛無川はこの平野をほぼ東南東へ流下した後、志登茂川の下流部に合流する。

このような毛無川の流域には、丘陵、更新世段丘、沖積平野、および支流性の扇状地が認められ、沖積平野はさらに完新世段丘と現氾濫原に分けられる[①]（第74図）。丘陵は、第三紀層にあたる奄芸層群からなり、海抜高度が最大およそ53ｍを有する。ここには、谷が多数刻まれており、全体として比較的大きな起伏を呈している。近年、この丘陵では尾根を削って谷を埋め立てる人為的な改変がなされ、主に住宅地として利用されている。

更新世段丘は、毛無川流域に２面存在する。本稿では、これらを上位段丘ならびに下位段丘[②]と呼ぶことにする。上位段丘は、毛無川の上流部にみられ、段丘面は毛無川の現河床からおよそ10ｍ高い。この段丘は、基盤となる奄芸層群の上に堆積した薄い砂礫層によって構成されており、上面には黒ボクが分布することがある。一方、下位段丘は毛無川の中流部に広がる沖積平野の北側に認められる。この段丘も、上位段丘と同様に、奄芸層群の上に薄く堆積する砂礫層からなり、段丘面上には黒ボクがみられる。


山　地
完新世段丘
上位段丘
現氾濫原
砂　堆
下位段丘
支流性の扇状地
人工改変地
河　川
ため池
遺跡の発掘地域
中の川
志登茂川
六大
一身田
横川
毛無川
伊勢湾
津市街地
1．六大B遺跡A～E地区
2．六大B遺跡F・G地区
3．六大B遺跡H地区
4．橋垣内遺跡A・B地区
5．大古曽遺跡A地区
6．大古曽遺跡B・C地区
0
1
2km

第74図　地形分類図

下位段丘面は、六大より上流部においてほぼ平坦であり、これは現河床から５～６ｍの比高をもつ。これに対して、六大より東方および南方にかけては、段丘面が約12.1‰の傾斜で急激に高度を下げ、沖積平野下に埋没する。六大Ｂ遺跡Ａ～Ｅ地区は、このように下位段丘が急激に高度を減じるところに位置している。

沖積平野は、現毛無川の両岸に分布し、とくに中・下流部において広く発達している。この平野は、海岸部で志登茂川によって形成された沖積平野に連続する。毛無川が形成した沖積平野には、完新世段丘と現氾濫原が認められ、なかでも完新世段丘は大きい面積を占める。完新世段丘は、およそ80cmの比高をもつ崖で現氾濫原と境される。その上面はほぼ平坦になっており、下流に向かって約3.3‰の緩やかな傾斜で高度を減じる。ここには、微高地や旧河道などの微地形が埋没している。

これに対して、現氾濫原は毛無川の現流路に沿って認められる。その発達はあまり良くなく、とくに一身田の集落より下流側では、圃場整備によってその分布が不明瞭になっている。この地形は、毛無川流域において最も低平であり、毛無川の氾濫時には冠水する場所にあたる。六大Ｂ遺跡Ｆ・Ｇ地区、橋垣内遺跡Ａ・Ｂ地区、ならびに大古曽遺跡Ａ地区は、毛無川中流部の完新世段丘と現氾濫原を横断するように位置している。

丘陵に刻まれた谷の出口には、支流性の扇状地が認められる。これは小規模なもので、毛無川の右岸にみられる丘陵の麓に点々と分布している。上面は、谷の出口から周辺に向かって約40‰と比較的急な傾斜をなしており、この扇状地は背後の谷から堆積物が搬出された結果、形成されたと考えられる。大古曽遺跡Ｂ・Ｃ地区は、毛無川中流部に分布するこうした支流性の扇状地に立地している。

なお、毛無川と志登茂川の合流点よりさらに下流側の海岸部には、砂堆がみられる。この付近での砂堆は、現海岸線に沿って２列形成されている。内陸側の砂堆は幅およそ250ｍであり、志登茂川の最下流部では侵食されて現在認められない。他方、海側の砂堆は約１kmの幅をもつ大規模なもので、これは２列の砂堆が接して一つの砂堆にみえている可能性がある。志登茂川は、河口付近においてこの砂堆を切って伊勢湾に注いでいる。これらの２列の砂堆は、周辺より１～２ｍ高く、沿岸流などによって運ばれた砂が堆積して形成された微高地である。

３．遺跡付近の堆積物と微地形

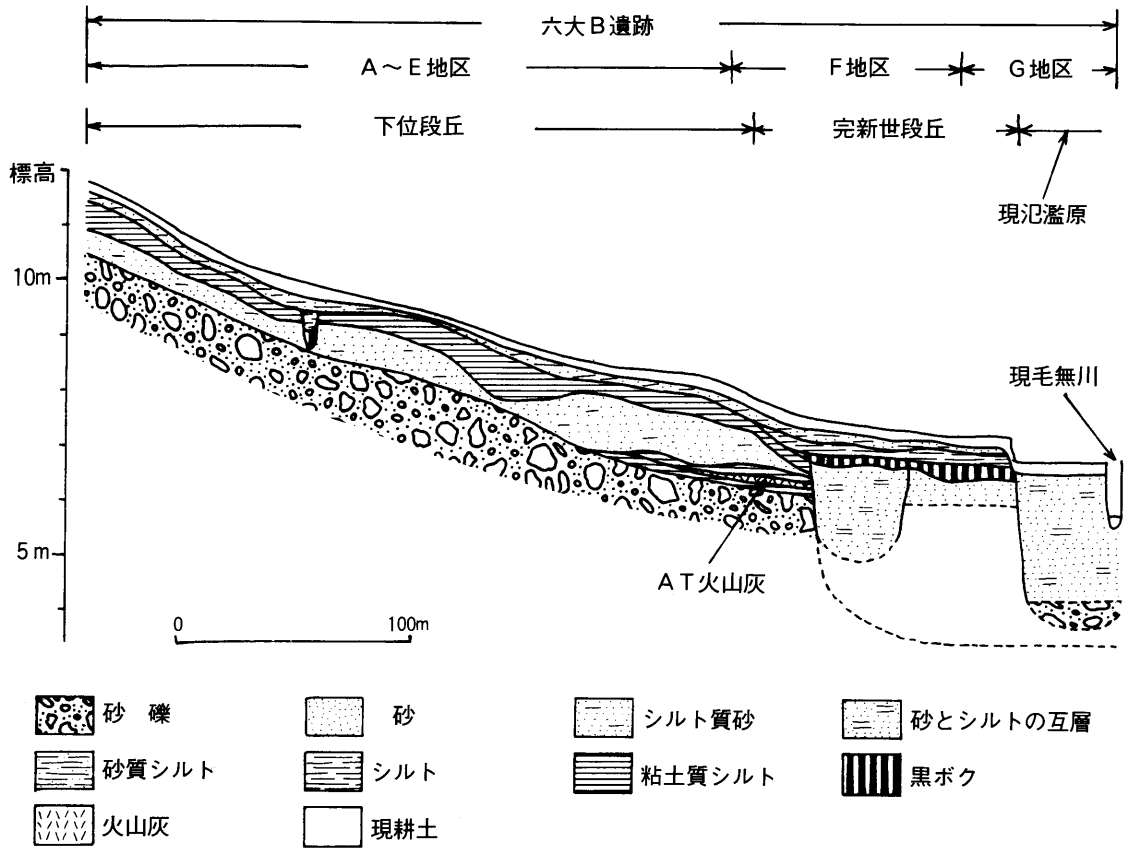
六大Ｂ遺跡、橋垣内遺跡ならびに大古曽遺跡は、毛無川中流部に位置し、これらの発掘地域は下位段丘、完新世段丘、現氾濫原、および支流性の扇状地にまたがる。ここでは、これらの各地形ごとに発掘地域で観察された堆積物と微地形について述べることにする。なお、発掘地域で検出された遺構と遺物に関するデータは、各遺跡の発掘調査担当者にご教示いただいたものである。

(1)　下位段丘

下位段丘には、六大Ｂ遺跡Ａ～Ｅ地区が位置し、これらの地区では下位段丘を構成する堆積物が観察される。確認できた下位段丘の堆積物は、下位から砂礫層、粘土質シルト層、シルト質砂層、粘土質シルト層、黒ボク、シルト層、砂質シルト層、および現耕土に分けられる（第75図・第14表）。

最下位の砂礫層は、基盤となる奄芸層群の上に堆積している。この層は、発掘地域の全域で広く認められ、厚さがおよそ1.5～２ｍと薄い。層中の礫は、径３～20cmの亜円礫を主体とし、古毛無川もしくはこの段丘の北側を流れていた古志登茂川によって、運搬されてきたと考えられる。この層は灰褐色を呈し、風化をあまり受けていない。このような砂礫層の中には、地下水が流れていたと考えられる。この地下水は、下位の奄芸層群が不透水層となり、その上を流れる自由地下水である。発掘地域で検出された井戸は、多くの場合砂礫層まで掘り抜かれており、この地下水を利用するためにつくられたと考えられる。

砂礫層の上位にみられる粘土質シルト層は灰白色を呈し、六大Ｂ遺跡Ｅ地区で認められる。この層には、姶良Tn火山灰（以下、ＡＴ火山灰と呼ぶ）が最大およそ10cmの厚さで挟まれており、同層はＡＴ火山灰の降灰期にあたる21,000～24,000年前頃に堆積したと考えられる。この層の上位にはシルト質砂層、さらにその上には粘土質シルト層が認められ、



第75図　毛無川中流域左岸の地質断面図

時代	六大B遺跡		
	A地区	F地区	G地区
	下位段丘	完新世段丘	現氾濫原
近現代	現耕土	現耕土	現耕土
江戸時代			
室町時代			褐灰色　砂とシルトの互層
鎌倉時代			灰褐色　砂礫層
平安時代			
奈良時代	（褐灰色　砂質シルト層）	（褐灰色　砂質シルト層）	
飛鳥時代	旧流路内堆積物		
古墳時代			
弥生時代			
縄文時代 晩期			
縄文時代 後期			
縄文時代 中期		暗灰色　シルト層	
縄文時代 前期	黒ボク層	黒ボク層	
縄文時代 早期		旧河道内堆積物	
縄文時代 草創期		淡黄灰色　砂層	
旧石器時代	黄灰色　粘土質シルト層 黄灰色　シルト質砂層 灰白色　粘土質シルト層 AT火山灰 灰白色　粘土質シルト層 灰褐色　砂礫層		

第14表　毛無川中流域左岸の層序　　（　）内の層は、旧表土である。

これらはともに黄灰色を呈する。

六大Ｂ遺跡では、黄灰色の粘土質シルト層を切る流路跡が数本検出された。流路跡は、いずれも幅が1.5～11ｍ、深さが１ｍ以下である。これらの多くは、下位段丘が段丘化した後に、小規模な水の流れによって形成されたものと考えられ、流路内堆積物の上部には飛鳥・奈良時代、平安時代もしくは鎌倉時代の遺物が混入している。なかでも、Ｂ～Ｃ地区とＥ～Ｆ地区には、10ｍ前後の幅をもつ比較的大規模な流路跡が１本ずつ認められる。ただし、これらは幅の割に浅いもので、下位段丘面が傾斜する方向と同じ北西から南東に向かって延びる。流路内には黒ボクが認められ、その上位に黒灰色のシルト層が堆積している。このシルト層中には、Ｂ～Ｃ地区の流路跡で平安時代前半の遺物が、またＥ～Ｆ地区のもので飛鳥・奈良時代の遺物が含まれている。

黄灰色を呈する粘土質シルト層の上位には、褐灰色の砂質シルト層が認められる。この層は、発掘地域のほぼ全域に分布しており、下位の粘土質シルト層を撹乱してできた旧表土と考えられる。層中には主に飛鳥・奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物が多数混入し、その下底からは同時代の遺構が検出される。遺構は、掘立柱建物を中心とする住居址、井戸、土坑、および溝などであり、とくに飛鳥・奈良時代の遺構は六大Ｂ遺跡Ｃ・Ｅ地区、平安時代のものはＤ・Ｅ地区、鎌倉時代のものはＣ・Ｄ地区で多く認められる。

以上のような下位段丘の堆積物は、段丘面の傾斜と同様に東南方へ高度を下げる。なかでも、下位段丘を構成する砂礫層、ＡＴ火山灰を挟む粘土質シルト層、およびその上位の洪水堆積物であるシルト質砂層と粘土質シルト層は、六大Ｂ遺跡Ｅ地区の南側で古毛無川によって侵食されている。このことから判断して、下位段丘はＡＴ火山灰の降灰後、洪水期を経て段丘化したと考えられ、その時期はＡＴ火山灰の降灰期を少し下った20,000年前頃と推定される。

(2) 完新世段丘

六大Ｂ遺跡Ｆ・Ｇ地区、橋垣内遺跡Ａ・Ｂ地区、および大古曽遺跡Ａ地区は、完新世段丘上に位置し、これらの遺跡の発掘地域では、完新世段丘を構成する堆積物が観察された（第75・76図・第14・15表）。完新世段丘の堆積物は、19以上の層に細分され、これらは下位段丘が古毛無川によって下刻されてできた谷の中に認められる。この谷は、六大Ｂ遺跡Ｆ地区から大古曽遺跡Ａ地区までの間で認められ、幅およそ400ｍを有する。谷の深さは４ｍ程度で、発掘地域付近では毛無川の現流路に沿ってほぼ東西に延びている。発掘は、六大Ｂ遺跡Ｆ・Ｇ地区が現毛無川の左岸で、また橋垣内遺跡Ａ・Ｂ地区と大古曽遺跡Ａ地区が右岸でなされ、これらの遺跡で観察された完新世段丘の堆積物は、右岸と左岸で様相を異にする。

現毛無川の左岸では、確認できた堆積物のうち淡黄灰色の砂層が最下位のものである。この砂層は、古毛無川の氾濫によって堆積したもので、現地表下およそ１ｍ以深に、厚さ1.2ｍ以上にわたって認められる。六大Ｂ遺跡Ｆ地区東部のトレンチ断面では、この層を切って２本の旧河道がみられる。これらは、10～22ｍの幅と１～1.5ｍの深さをもつ比較的大規模なものである。こうした規模と、現毛無川が小河川であることから判断して、これらの旧河道は古毛無川の本流が流れた跡と考えられる。２本の旧河道は、砂やシルト質砂、砂質シルトなどによって埋積されている。

旧河道内堆積物の上位には、黒ボク層と暗灰色のシルト層がみられ、さらにその上位には褐灰色の砂質シルト層が認められる。これらのうち、褐灰色の砂質シルト層は六大Ｂ遺跡のＢ～Ｅ地区から連続するもので、旧表土と考えられる。層中には、主に古墳時代から奈良・飛鳥時代にかけての遺物が混入し、その下底から同時代の遺構が検出される。六大Ｂ遺跡Ｆ地区では飛鳥・奈良時代の掘立柱建物、土坑、溝が、またＧ地区では古墳時代の溝と近世～近代の井戸、土坑がみられる。

一方、現毛無川の右岸では、現地表下およそ３ｍまでの堆積物が観察された。最下位で確認された堆積物は緑灰色の粘土質シルト層で、その上位には緑灰色の砂層と暗褐灰色の砂質シルト層がみられる。これらは、洪水にともなう堆積物であり、約２万年前以降しばらくの間、下位段丘が下刻されてできた谷の中では、古毛無川から氾濫を何度か繰り返していたと考えられる。

さらに上位には、下位から順に黒褐色の泥炭層、灰白色のシルト質細砂層、暗褐灰色の腐植質シルト層、灰白色の粘土質シルト層、および暗褐灰色の腐植質シルト層が認められる。これらは、いずれも細粒堆積物であり、なかでも泥炭層と腐植質シルト層は、湿地において生成・堆積したものである。このことから、当時橋垣内遺跡付近には湿地が広がり、そこにシルト質砂や粘土質シルトを運ぶ緩やかな洪水が、間欠的におよんだと考えられる。また、これらの各層のうち、最も上位に位置する腐植質シルト層からは、10,910±260年B.P. の^{14}C年代測定値が得られており、こうした環境は11,000年前頃まで続いてしたことが知られる。

湿地性堆積物の上位には、灰白色の粘土質シルト層と淡灰色の砂質シルト層が認められる。これらは、緩やかな洪水よってもたらされたものであり、両層は下位の腐植質シルト層を被覆している。すなわち、これらの層が堆積したため、湿地は消滅したと考えられる。この上位には、黒ボク層がおよそ20cmの厚さで認められる。橋垣内遺跡のA・B地区では、この層が発掘地域のほぼ全域に分布している。黒ボクは、ササ類などの植物が生育する荒地で生成されるといわれており、黒ボクの生成期には橋垣内遺跡とその周辺が、このような環境であったと考えられる。この黒ボク層は、5,110±90年B.P.（Gak-14890）の^{14}C年代測定値を示しており、また層中からは縄文時代早期の遺物が検出されている。このことから、黒ボク層は縄文時代前・中期頃に生成されたと考えられ、その生成の開始は縄文時代早期に溯る可能性がある。

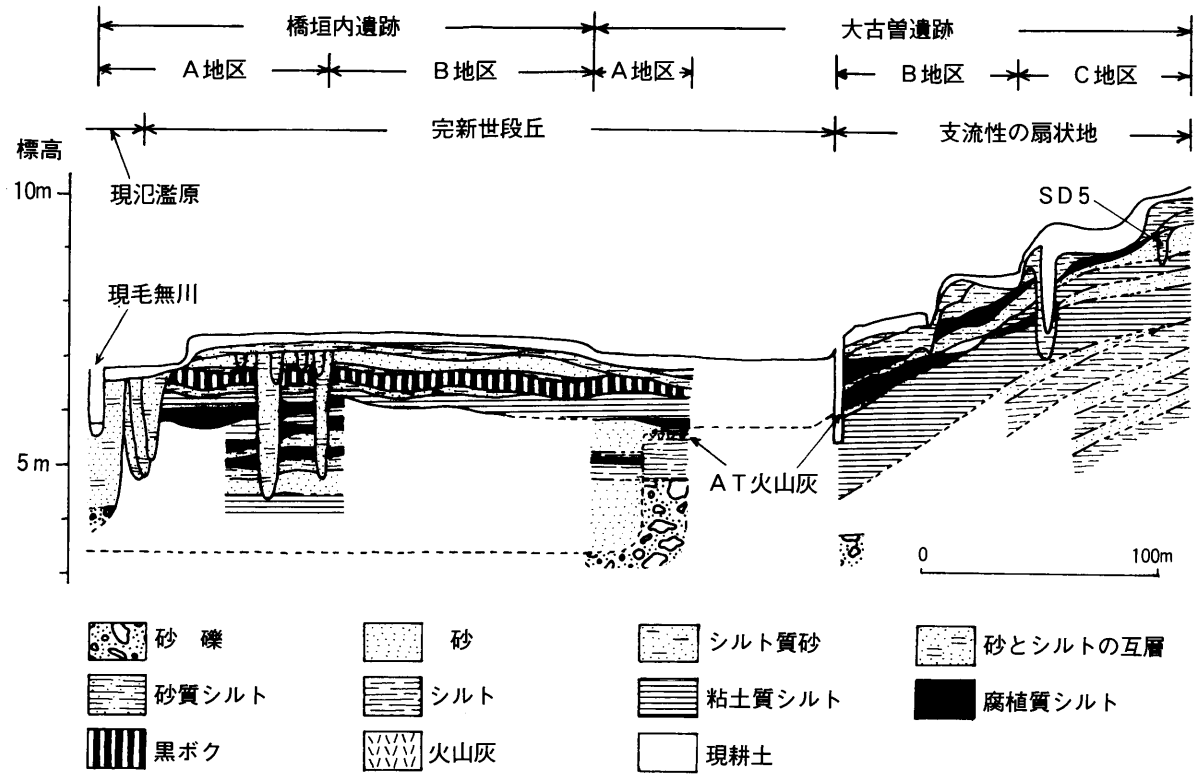
黒ボク層の上位には、灰色のシルト層が薄くみられ、その上に黄灰色を呈する砂層が認められる。この砂層は、厚さおよそ50cmで堆積しており、橋垣内遺跡のA・B地区にみられる微高地を構成している。この微高地は、比高60～70cmの小規模なもので、古毛無川の洪水によって形成されたと考えられる。なお、微高地の周辺にはこの砂層の上位に位置する黄灰色のシルト層が分布しており、この層が堆積した結果、微高地の比高は減じたと思われる。

橋垣内遺跡A地区では、微高地構成層の砂層を切る旧河道が4本検出されている。これらは、A地区の南部に1本、北端に3本分布している。なかでも、A地区南部のものは、微高地の北斜面に認められ、ほぼ東西方向に延びている。その幅は17～25m、深さは2～3mもあり、こうした規模からみて、この旧河道は古毛無川の本流跡である。微高地上に河道ができたのは、古毛無川の氾濫時に水流が微高地を勢いよく横切ったためであり、これを機会に古毛無川の本流がここに流路変更したと考えられる。旧河道内は粗砂やシルト、腐植質シルトなどによって埋積されており、これらの堆積物には縄文時代晩期から弥生時代後期の遺物が包含されている。

他方、橋垣内遺跡A地区の北端にみられる3本の旧河道は、幅がそれぞれ10m以上ある。旧河道内の底には、ともに砂礫がみられ、その上位には砂やシルト質砂、シルトなどの河成堆積物が堆積する。これらの堆積物中には、最も北端の旧河道で弥生時代後期、他の2本で古墳時代の遺物が含まれる。ただし、旧河道内の上部は比較的新しい時期に人為的に埋め立てられている。以上のことから、古毛無川は縄文時代晩期頃に橋垣内遺跡A地区の南部に流路を転じ、弥生時代後期頃にはA地区の南部と北端に分流し、その後古墳時代後期頃までA地区の北端を流下していたと考えられる。

さらに、橋垣内遺跡A地区の南部では、埋積された旧河道の上面から、小規模な旧河道が数本検出されている。これらは幅が2～3m、深さが0.5～1mであり、旧河道内には、 砂やシルトが認められる。こうした堆積物からは、弥生時代後期または飛鳥・奈良時代の遺物が出土することから、これらの各時期に古毛無川の小規模な分流、もしくは橋垣内遺跡西方の丘陵を刻む谷からの小河川が、この付近を流れたと考えられる。

毛無川右岸では、このような旧河道内堆積物およびその周辺にみられる黄灰色の砂層の上位に、褐灰色を呈する砂質シルト層とシルト層が認められる。これらは、黄灰色の砂層が堆積した際形成された微高地を覆うように分布する。なかでも、砂質シルト層には弥生時代中期から平安時代にかけての遺物が混入し、その下底からは同時代につくられた遺構が検出される。遺構の中心は、墓と住居址である。弥生時代の遺構としては、中期の方形周溝墓が1基と



第76図　毛無川中流域右岸の地質断面図

時代	橋垣内遺跡 A地区 現氾濫原	橋垣内遺跡 A地区 完新世段丘・埋没下位段丘	橋垣内遺跡 B地区	大古曽遺跡 A地区	大古曽遺跡 B・C地区 支流性の扇状地	¹⁴C年代値
近現代	現耕土	現耕土			現耕土	
江戸時代					灰色 砂質シルト層	
室町時代	褐灰色 砂とシルトの互層				褐灰色 シルト層	
鎌倉時代	灰褐色 砂礫層				黒褐色 腐植質シルト層	
平安時代		褐灰色 シルト層				
奈良時代		(褐灰色 砂質シルト層)				
飛鳥時代		旧流路内堆積物				
古墳時代		旧河道内堆積物				
弥生時代		旧河道内堆積物			褐色 シルト層	
縄文時代 晩期					褐色 砂質シルト層	
縄文時代 後期		黄灰色 砂層			黒褐色 腐植質シルト層	
縄文時代 中期		灰色 シルト層			褐色 砂質シルト層	
縄文時代 前期		黒ボク層 *		?	黄灰色 砂層	5. 110±90年B. P.
縄文時代 早期		淡灰色 砂質シルト層			褐色 粘土質シルト層	
縄文時代 草創期		灰白色 粘土質シルト層			黒灰色 腐植質シルト層 *	11.230±200年B. P.
		暗褐灰色 腐植質シルト層 *				10.910±260年B. P.
旧石器時代		灰白色 粘土質シルト層				
		暗褐灰色 腐植質シルト層				
		灰白色 シルト質砂層				
		黒褐色 泥炭層				
		暗褐灰色 砂質シルト層				
		緑灰色 砂層				
		緑灰色 粘土質シルト層				
		淡褐色 シルト層				
		AT火山灰			AT火山灰	
		青灰色 シルト層			褐灰色 シルト質砂層	
		黄灰色 砂礫層			灰白色 粘土質シルト層	
					灰色 シルト質砂層	
					灰色 シルト層	
					灰色 シルト質砂層	
					褐灰色 シルト層	
					青灰色 砂層	
					褐灰色 シルト層 *	31.320±1,000年B. P.

(　) 内の層は、旧表土である。〰〰 は、不整合を示す。＊を付けた層は、¹⁴C年代測定したものである。

第15表　毛無川中流域右岸の層序

土坑墓が10数基、後期の土坑墓が２基認められる。古墳時代では、その初頭と後半につくられた竪穴住居址が、それぞれ５棟および２棟みられ、また飛鳥・奈良時代では、約70棟にものぼる掘立柱建物跡のほかに、竪穴住居址１棟と井戸２基が検出されている。平安時代の遺構は少なく、掘立柱建物跡が数棟みられる。

(3) 現氾濫原

六大Ｂ遺跡Ｈ地区および橋垣内遺跡のＡ地区北端は、現氾濫原に位置する。現氾濫原は、毛無川の流路に沿って細長く分布しており、両遺跡付近ではその幅が80～100ｍと狭い。ここでは、最下位に砂礫層がみられるものの、現地表下およそ２ｍまでは砂とシルトの互層となっている（第75・76図・第14・15表）。毛無川の本流跡と考えられる旧河道が数本認められ、幅の狭い現氾濫原で毛無川が流路を変更していたことが伺える。発掘地域では、これらの堆積物から鎌倉・室町時代の遺物が出土し、またその最上位からは室町時代の溝が検出されている。このことから、完新世段丘が段丘化した後の鎌倉時代から室町時代にかけて、現氾濫原では堆積作用が盛んに行われたと考えられる。

(4) 支流性の扇状地

毛無川沖積平野の南側には、奄芸層群からなる丘陵が広がり、これを刻む谷の出口に小規模な扇状地が形成されている。大古曽遺跡のＢ・Ｃ地区は、毛無川中流域に分布するこうした支流性の扇状地上に位置する。大古曽遺跡Ｂ・Ｃ地区の発掘地域では、現地表下およそ４ｍまで主に細粒堆積物が観察される（第76・第15表）。一般に、扇状地は砂礫によって構成されていることからみて、大古曽遺跡が立地する扇状地は堆積物の様相が異なる。これは、この扇状地堆積物の供給源が、背後の丘陵を構成する奄芸層群の砂やシルトなどであることに起因していると考えられる。

大古曽遺跡で確認できた最も下位の堆積物は、褐灰色のシルト層である。この層には腐植物が比較的多く混入しており、その^{14}Ｃ年代測定値は31,320±1,000Ｂ.Ｐ.（Gak-17840）を示す。この上位には、砂層、シルト質砂層、シルト層、および粘土質シルト層が互層をなして堆積している。これらは大きく７層に分けられ、よく締まっている。これらのうち、砂層とシルト質砂層は灰～青灰色を呈し、20～50cmの厚さで４層みられる。大古曽遺跡のＢ地区では、こうした互層の上位にＡＴ火山灰が認められ、これらの各層は31,000年前からＡＴ火山灰の降灰期にあたる21,000～24,000年前頃までに堆積したことが知られる。

ＡＴ火山灰の上位には、黒灰～赤黒色を呈する腐植質シルト層が認められる。これは、主に扇状地の扇央から扇端にかけて位置するＢ地区にみられ、11,230±200年Ｂ.Ｐ.（Gak-17841）の^{14}Ｃ年代測定値が得られている。ＡＴ火山灰とこの層の間には堆積物が認められないことから、
この扇状地では21,000～24,000年前以降11,000年前頃まで、背後の丘陵から堆積物が供給されなかったと考えられる。

この層の上位には、下位から順に褐色の粘土質シルト層、黄灰色の砂層、褐色の砂質シルト層、黒褐色の腐植質シルト層、および褐色の砂質シルト層がみられる。これらは、それぞれ10～40cmの厚さをもち、なかでも最上位に位置する砂質シルト層上面からは遺構が検出される。ただし、大古曽遺跡Ｂ・Ｃ地区では、近世に階段状の水田がつくられた際、これらの６層の上部に位置する褐色の砂質シルト層が、人為的に削り取られて観察できないところがある。

大古曽遺跡Ｃ地区では、このような理由で本来の検出層位が不明確ながら、最上位の褐色砂質シルト層の上面から切り込まれたと考えられる流路跡が、東西方向に３～４本確認される。また、Ｃ地区の南部でも、近世に上部堆積物が削り取られたため、黒褐色のシルト層上面で溝（ＳＤ５）が検出されている。溝の中には灰黄褐色のシルトが堆積しており、その下部からは縄文時代の遺物が出土する。なお、流路と溝では流路の方が古い時期につくられたと推定されている。以上のことから、11,230±200年Ｂ.Ｐ.の年代値を示す腐植質シルト層以浅の５層は、約11,000年前以降に堆積し、その後縄文時代の間にまず流路ができ、次に溝がつくられたと考えられる。

約11,000年前以降に堆積した５層の上位には、褐色のシルト層がみられる。この層は大古曽遺跡Ｃ地区の南部でのみ観察され、その上面からは飛鳥～奈

良時代前半と平安時代末～室町時代前期の遺構が検出される。C地区南部以外の発掘地域では、上部の堆積物が近世に削り取られたため、この層の下位に位置する黒褐色シルト層、もしくはさらにその下位の褐色砂質シルト層の上面で、同時代の遺構が確認できる。遺構は、住居址のほか墓、溝などであり、住居址は飛鳥・奈良時代の掘立柱建物が10数棟と鎌倉時代のものが1棟みられる。また、墓は鎌倉時代を中心とするものが数基検出されている。

このような遺構検出面から現耕土までの間には、下位から黒褐色の腐植質シルト層、褐灰色のシルト層、および灰～黄灰色の砂質シルト層が認められる。これらのうち、黒褐色の腐植質シルト層上面では、近世の水田にともなう遺構が確認される。このことから、この扇状地では近世の水田造成後に洪水が発生し、シルトや砂質シルトが堆積したと考えられる。なお、大古曽遺跡B・C地区で認められた各層は、おおよそ西から東すなわち扇頂から扇端に向かって傾斜している。

4．地形環境の変遷

ここでは、これまでに述べてきた事柄に基づいて、毛無川中流域の沖積平野、下位段丘、および支流性の扇状地における地形環境を、14のステージに分けて復原する（第77・78・79図）。また、復原された地形環境と住居址を中心とした遺構との関係についても考察したい。

【ステージ1】　およそ20,000年前以前、毛無川中流域では古毛無川と古志登茂川によって運搬されてきた砂礫が、広範囲にわたって堆積した。その後、AT火山灰の降灰期前後には、この砂礫が粘土質シルトやシルト質砂によって被覆された。一方、毛無川右岸にみられる丘陵の麓では、丘陵を構成する奄芸層群の細粒堆積物が約31,000年前以前から搬出されてきた。これによって、丘陵を刻む谷の出口に支流性の小規模な扇状地が形成された。この扇状地では、およそ31,000年前以降AT火山灰の降灰期にかけて、丘陵を刻む谷中からの洪水がよく発生し、比較的厚くシルト質砂やシルトなどが堆積した。

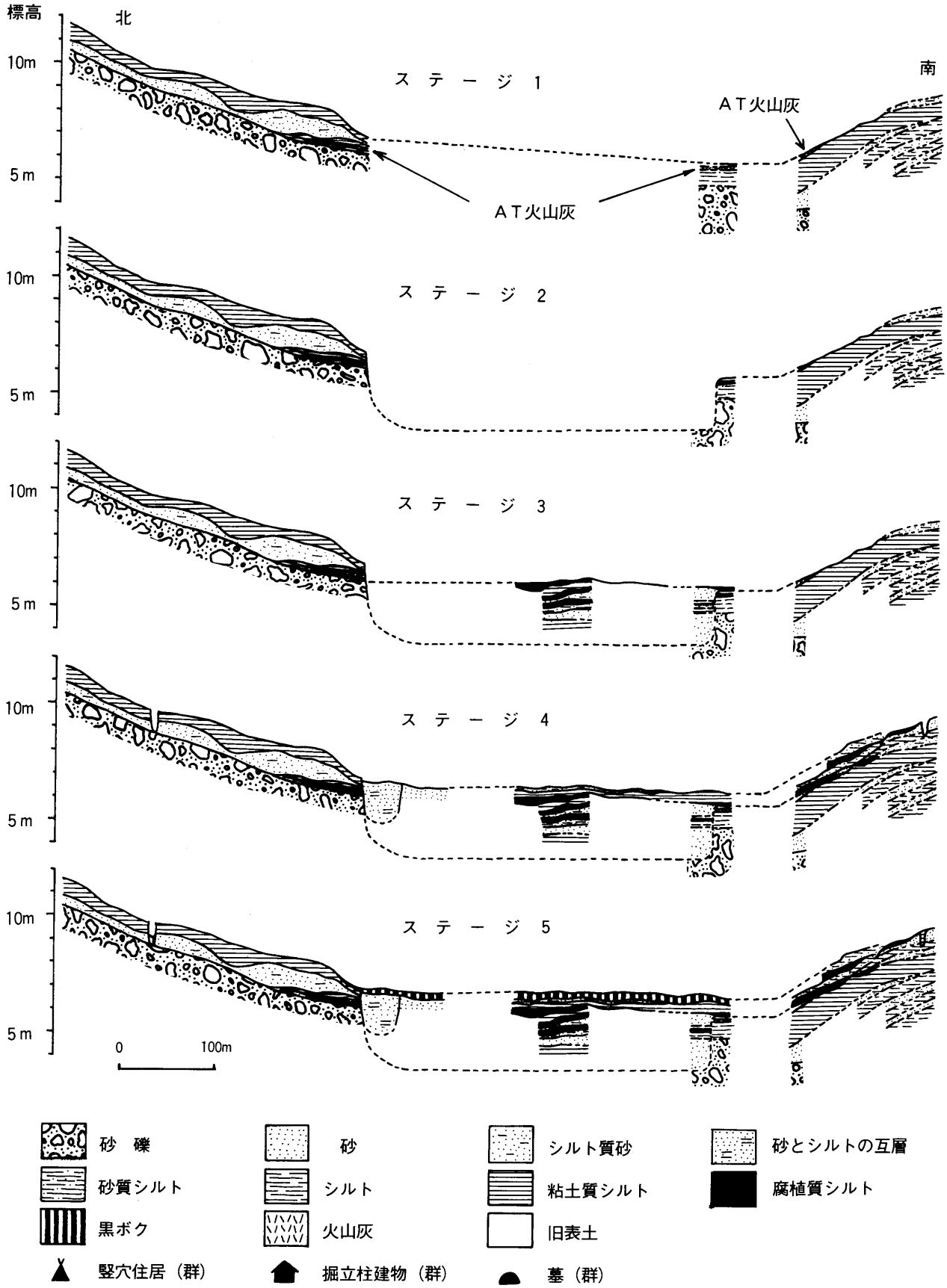
【ステージ2】　AT火山灰の降灰期を少し下った20,000年前頃、それまでに堆積した砂礫と粘土質シルト、シルト質砂が古毛無川によって下刻され、下位段丘が段丘化した。これにともなって、東西方向に延びる深さ約4mの谷が、六大B遺跡F地区から大古曽遺跡A地区にかけての幅およそ400mにわたって形成された。この谷は、毛無川の下流域へも延びていたと推定され、谷の形成後古毛無川はこの中を流下していた。なおAT火山灰の降灰期から下位段丘の段丘化した時期まで、支流性の扇状地上には丘陵から堆積物の供給がなかった。

【ステージ3】　およそ20,000年前以降11,000年前頃までの間、古毛無川がつくった谷の中では、まず砂や粘土質シルトなどが堆積し、次に湿地の形成と洪水による堆積とが交互に繰り返されるに至った。湿地は3回にわたって広がり、そこでは泥炭や腐植質シルトが生成された。こうした湿地には古毛無川の洪水がおよび、その度ごとに湿地は洪水堆積物によって覆われた。他方、支流性の扇状地では、この時期引き続き堆積物が供給されず、扇状地は発達しなかった。

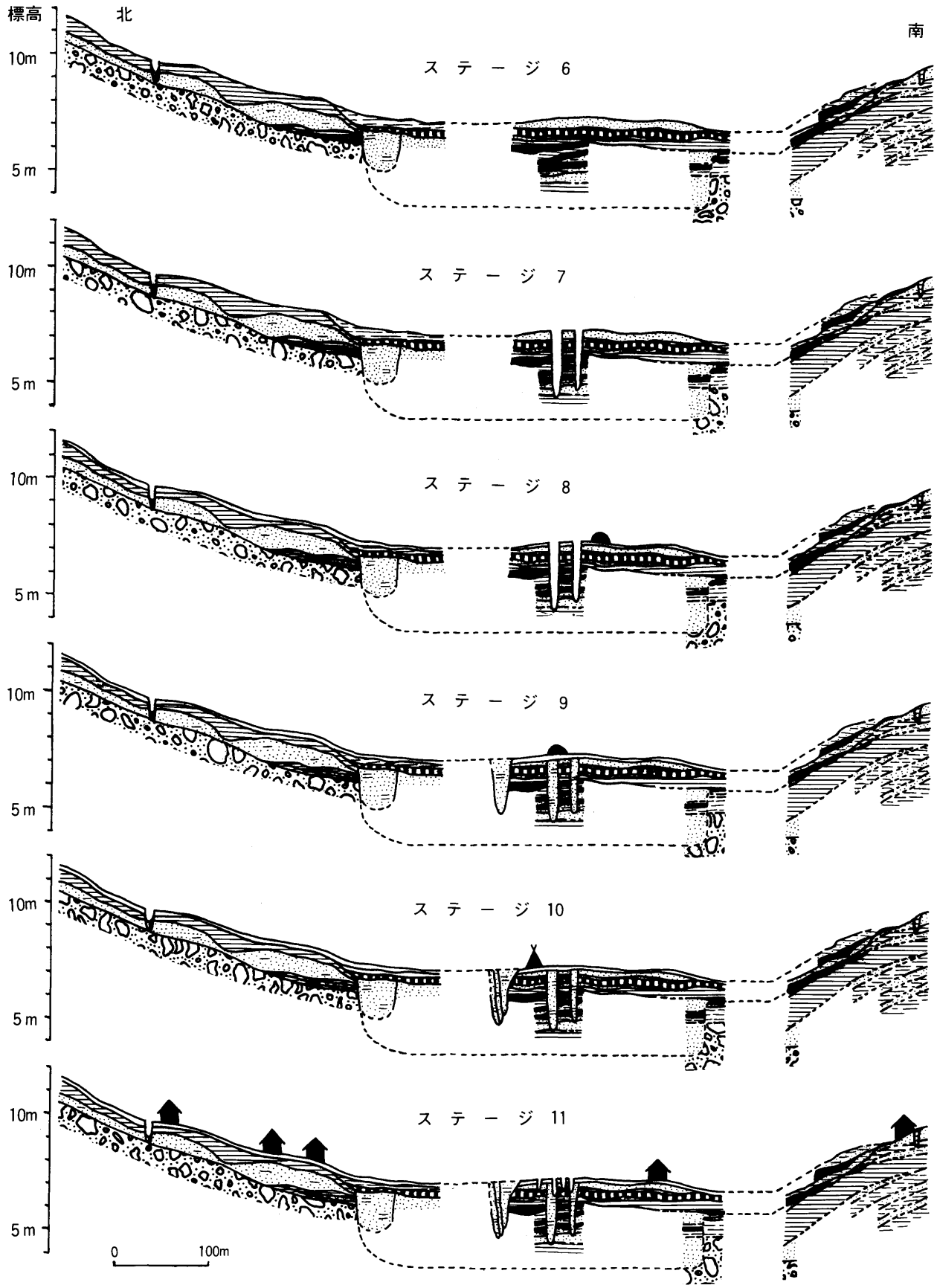
【ステージ4】　約11,000年前から10,000年前頃にかけて、古毛無川によって形成された谷中には、河川の氾濫にともなって現毛無川の左岸で砂、右岸で粘土質シルトと砂質シルトが堆積した。これによって、約20,000年前に形成された谷はほぼ埋積された。また、ほぼ同じ頃下位段丘上では、小規模な流路が数本北西から東南に向かって形成された。これに対して、支流性の扇状地ではおよそ11,000年前以降、背後にみられる谷からの洪水が何度もおこり、砂や砂質シルト、シルト、粘土質シルトが堆積した。ついで、こうした堆積期の終わり頃には、背後の谷から扇端方向への小規模な水流が、扇状地上を流れた。

【ステージ5】　およそ5,000年前になると、黒ボクが生成、堆積した。黒ボクの生成は、下位段丘上に形成された小規模な旧流路内と、支流性の扇状地を除く沖積平野のほぼ全域で行われた。黒ボク中には縄文時代早期の遺物が混入していることから、黒ボクの生成は同時期まで溯る可能性がある。

【ステージ6】　黒ボクの生成・堆積期以後、縄文時代後期までのある時期に、沖積平野では古毛無川の氾濫によってシルトと砂が堆積した。なかでも、砂の堆積にともなって、橋垣内遺跡付近には微高地が形成された。その後、微高地の周辺にシルトが堆



第77図　地形環境の変遷1



第78図　地形環境の変遷２　（凡例は、第77図と同じ）

積し、これによって微高地の比高は減じた。

【ステージ7】　縄文時代晩期に入ると、古毛無川の本流は流路を変え、橋垣内遺跡付近に形成された微高地の北部を横切って流下するようになった。流路の幅は比較的大きく、流路内では河川が分流していたため、中州がみられた。

【ステージ8】　古毛無川は、弥生時代中期になっても引き続き微高地北部を流れていた。微高地上には、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけて洪水がほとんどおよばず、比較的安定した環境であった。こうした環境下で、弥生時代中期後半には橋垣内遺跡付近の微高地上に方形周溝墓や土坑墓などが10数基つくられた。

【ステージ9】　縄文時代晩期から橋垣内遺跡付近を流れはじめた古毛無川の流路は、弥生時代後期までに砂やシルトによって埋積された。この流路が埋積された直後の弥生時代後期には、ここに数基の土坑墓がつくられた。また、弥生時代後期直前には、古毛無川の本流が橋垣内遺跡A地区の北端に流路変更したものの、この流路も弥生時代後期に埋積された。弥生時代後期には、こうした流路内における砂やシルトの堆積がみられるだけで、沖積平野上におよぶ河川の氾濫はなかった。

【ステージ10】　橋垣内遺跡付近の微高地上では、弥生時代後期と同様に古墳時代にも洪水がおよばなかった。このため、微高地上には、古墳時代初頭と後半に竪穴住居群がつくられた。また、この頃になると、橋垣内遺跡A地区の北端を再び古毛無川が流下した。この流路には、古墳時代を通じて古毛無川が流れ、流路内は古墳時代の終わり頃までに砂礫、砂、シルトによって埋積された。なお、支流性の扇状地では、弥生時代から古墳時代まで、背後の谷からの洪水がほとんど発生しなかった。

【ステージ11】　橋垣内遺跡付近では、飛鳥時代から平安時代にかけても、引き続き洪水がおよばない安定した環境が続いた。ただし、飛鳥・奈良時代に入ると微高地上に小規模な水流が流れた。このような安定した環境の下、掘立柱建物からなる集落が、沖積平野上の橋垣内遺跡、下位段丘上の六大B遺跡C～F地区、および支流性の扇状地上に位置する大古曽遺跡B・C地区に立地した。飛鳥・奈良時代には、橋垣内遺跡と六大B遺跡F地区、ならびに大古曽遺跡B・C地区で集落が形成され、奈良時代後期になると、六大B遺跡のF地区より海抜高度が高いC地区にも、掘立柱建物群がつくられた。平安時代には、橋垣内遺跡で飛鳥・奈良時代の集落とほぼ同じところに数棟の掘立柱建物群がみられたものの、他の集落は消滅し、新たに下位段丘上の六大B遺跡D・E地区に数10棟の掘立柱建物群が建てられた。

【ステージ12】　平安時代末頃になると、古毛無川が氾濫し、橋垣内遺跡付近にシルトが堆積した。つづいて、古毛無川による下刻がはじまり、毛無川に沿って谷がつくられた。これにともなって、これまで氾濫原であったところが段丘化し、完新世段丘が形成された。

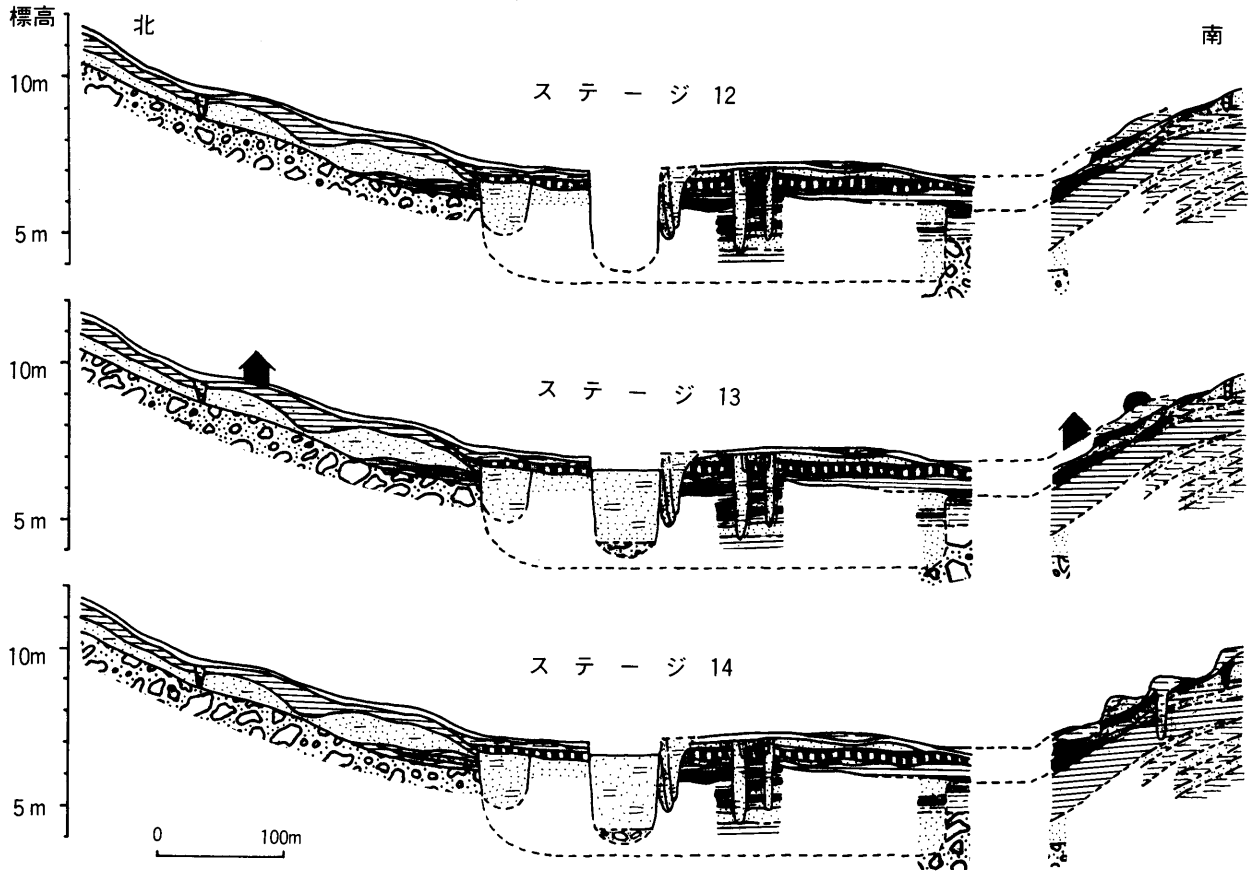
【ステージ13】　鎌倉・室町時代には、平安時代末に形成された谷中で古毛無川が氾濫を繰り返した。その結果、谷中には砂やシルトが次々と堆積していった。当時、古毛無川が氾濫してもこの谷中のみが冠水し、周辺の下位段丘上や完新世段丘上では洪水の危険性がなかった。このため、下位段丘上の六大B遺跡では、平安時代とほぼ同じC・D地区に掘立柱建物群が建てられた。他方、支流性の扇状地でも洪水は発生せず、大古曽遺跡B・C地区では鎌倉時代の掘立柱建物と墓がつくられた。

【ステージ14】　江戸時代に入ると、支流性の扇状地では階段上に水田が造成され、最上部にみられた堆積物の多くが人為的に削り取られた。その後、扇状地背後の谷から洪水が発生し、この水田上には砂質シルトやシルトが堆積した。なお、下位段丘、完新世段丘、ならびに現氾濫原では、この時期に地形環境の顕著な変化がみられなかった。

注

① 本稿では、青木哲哉「六大B遺跡および橋垣内遺跡付近の地形環境」,『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター) 所収,1991年で述べた下位段丘と低地を、それぞれ完新世段丘および現氾濫原としている。

② 本稿では、青木哲哉「六大B遺跡および橋垣内遺跡付近の地形環境」,『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター) 所収,1991年で述べた上位段丘を、下位段丘としている。



第79図　地形環境の変遷３（凡例は、第77図と同じ）

8．自然科学分析

(1)平成３年度一般国道23号埋蔵文化財発掘調査にかかる大古曽遺跡の火山灰同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大古曽遺跡は、伊勢平野中部に北西－南東方向に細長く延びる見当山丘陵北側の縁辺付近に位置する。本遺跡のＢ地区では、飛鳥・奈良時代の遺構や鎌倉時代の遺構などが検出され、土師器や須恵器、山茶椀などの遺物が多数出土した。さらに、遺構外からは、縄文時代の石鏃も検出された。

ところで、Ｂ地区東壁の土層断面中では、飛鳥時代～中世遺構検出面より約50cm下位に黄橙色の細砂～極細砂のブロックを交えた褐灰色土層が特徴的に認められた。三重県埋蔵文化財センター駒田氏は、このブロックを細粒の火山灰と考えている。これが噴出年代が明らかな火山灰であれば、今後本地域の時間的指標となり得ると期待された。したがって、駒田氏と協議のうえ、今回はこれが火山灰であることを確認し、その同定を行うことを目的として分析調査を行った。なお、火山噴出物の総称としてテフラという言葉があるが、本報告でもこの言葉を用いる。

１．試料

試料は、大古曽遺跡Ｂ地区東壁土層断面中に認められた、標高約６～6.5ｍに堆積する褐灰色土層より採取された（第74図）。採取された試料は、黄橙色の細砂ブロックのみ採取されたもの１点と褐灰色土層も含めて採取されたもの１点の計２点である。このうちテフラの同定には、細砂ブロックのみの試料を使用した。また、褐灰色土層は当初花粉などの微化石分析に適用し、三重県内では数少ない火山灰降灰前後の古植生に関する資料が得られるものと期待されたが、その岩質が砂に富むことから、花粉化石の保存が悪いと判断されたため、花粉分析を断念した。現在その堆積環境について、珪藻分析などにより検討をおこなっている。

２．分析方法

試料約10ｇに水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶などの産状を調べる。さらに、必要ならば火山ガラスの屈折率の測定を行う。これらの観察および測定結果より、試料としたテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、新井(1972)の浸液法に従い行った。

３．分析結果

試料は、ほとんど細砂～極細砂径の火山ガラスからなることから、細粒のガラス質テフラのブロックである。火山ガラスは、薄手平板状のいわゆるバブル型、気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型およびスポンジ状に発砲した軽石型の３形態が混在する。この中では、バブル型が多く、繊維束型と軽石型は少量であった。どの形態の火山ガラスも無色透明である。火山ガラスの屈折率は、nl.499～1.502であった。

４．テフラの同定

本試料のように細砂のバブル型火山ガラスを主体とするようなテフラは、大規模火砕流と同時に噴出した降下テフラである（町田・新井,1992）。また、同著では、このようなテフラの分布範囲は非常に広く、広域テフラと呼ばれているテフラの大部分はこのタイプのものであると述べており、日本列島とその周辺域における過去約30万年間の広域テフラのリストが作成されている。このリストにおける火山ガラスの形態と屈折率から、本試料のテフラは、姶良Tn火山灰(AT:町田・新井,1976）に同定される。ATは、鹿児島湾の一部となっている姶良カルデラを

給源とし、約2.2～2.5万年前に噴出したとされている（町田・新井,1992）。

5．AT確認の意義

試料が採取された大古曽遺跡B地区は、見当山丘陵の小支谷の出口に形成された小規模な扇状地状の段丘斜面上に位置する。発掘担当者側資料の2500分の1地形図によれば、B地区の載る斜面の傾斜は緩く、段丘と低地との境界は不明瞭であるが、遺跡の北側に広がる針葉樹林の載る段丘と低地との境界は比較的明瞭に読み取れる。遺跡の載る扇状地状の段丘とその北側の段丘を構成している地層は、おそらく一連のものと考えられる。また、その標高からこの段丘は、低地を挟んで北側にひろがる馬場、六大などの町を載せる段丘と同じ形成年代であると考えられる。馬場、六大を載せる段丘は、旧期中位段丘堆積物により構成されている（吉田,1987）ことから、大古曽遺跡の載る段丘もそれと同時期の堆積物により構成されていると考えてよい。旧期段丘堆積物は、濃尾平野の熱田層下部に対比されており、熱田層上部の基底には御岳第一テフラ（Pm-1）の降灰層準が確認されている（吉田ほか,1991）。したがって、Pm-1の降灰年代をおよそ8万年前（町田・新井,1992）とすれば、旧期段丘堆積物の堆積年代は、新しくとも8万年前以前と考えられる。つまり、大古曽遺跡の載る扇状地状の段丘は、8万年前以降には河川による洪水の影響をそれほど強く受ける場所ではなくなったと考えられるのである。この年代観に従えば、大古曽遺跡の特にC地区側は、旧石器時代の人々の活動の舞台となった可能性がある。同様に今後伊勢平野の段丘上で発掘調査が進められるとすれば、旧石器時代の遺物や以降が検出されるものと期待されるのである。

このような可能性がある中での本分析におけるATの確認は、非常に意義のあるものとして捉えることができる。一般に段丘化した後の地表面での砕屑物の堆積速度は遅いため、ATのような細粒テフラは降灰後長く地表にさらされて、地層中に保存されることは少ないと考えられる。したがって、段丘上で発掘される遺跡の遺構や遺物の直接の年代指標になるような場合は少ないと考えられる。しかし、段丘下の低地の堆積層中には今回のようにATが検出される可能性が高く、低地に遺物や遺構が検出された際には、その年代を推定する非常に重要な指標となる。さらに、ATの直下や直上の地層が泥炭層や粘土層であった場合には、その地層について花粉,珪藻,植物珪酸体等の微化石分析や、材,種子等の植物遺体の同定を行うことにより、AT降灰前後の段丘上も含めた古環境推定が可能となる。段丘上などで展開された旧石器時代人をとりまいた景観を考える上でも、今後AT層準は非常に重要な指標となるであろう。

文献

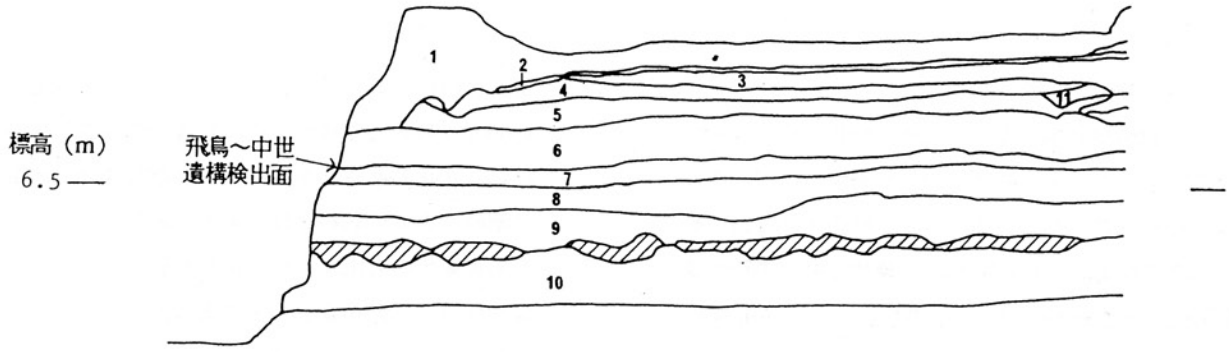
新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究－．第四紀研究，11，p.254－269.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義　－.科学,46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス－日本列島とその周辺－.276p.,東京大学出版会.

吉田史郎（1987）津東部地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1図幅）,72p.,地質調査所.

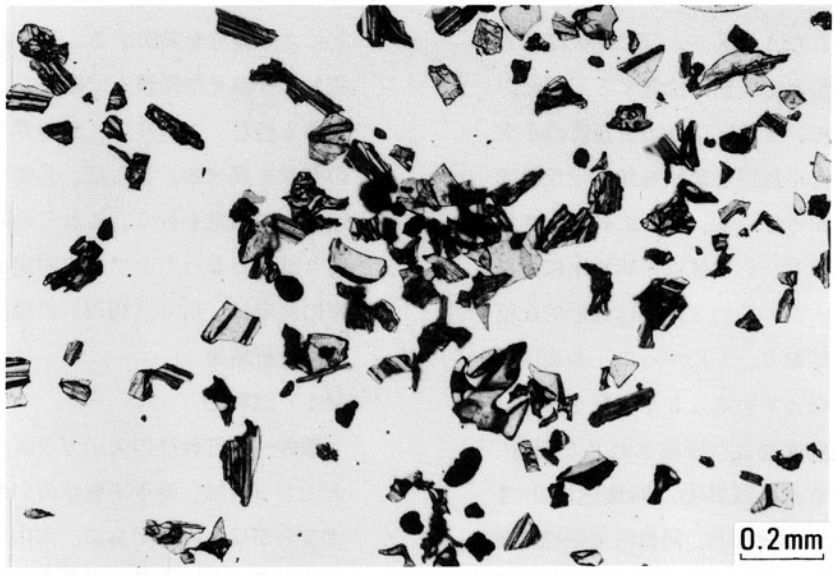
吉田史郎・栗本史雄・宮村　学（1991）桑名地域の地質.地域地質研究報告（5万分の1図幅）,154p.,地質調査所



1 耕土
2 床土
3 灰色土
4 暗灰色土
5 黄灰色粘質土
6 黒色粘質土
7 暗黄灰色粘質土
8 暗黒灰色粘質土
9 黒灰色粘質土
10 明褐灰色粘質シルト
11 褐灰色粘質土（カクラン）
▨ 火山灰と暗灰色粘質土の混合土層

第80図　試料採取層準模式土層断面図

PL 1



試料中の火山ガラスの顕微鏡写真　火山ガラス

(2)大古曽遺跡Ａ・Ｃ地区 自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

Ⅰ．はじめに

大古曽遺跡Ｂ地区では、当社の分析（平成３年度報告）により、飛鳥時代～中世の遺構検出面の下位約50cmに姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：町田・新井,1976）の堆積が確認された。これは、検出された遺構や遺物の年代を直接指示するような資料とはならなかったが、今後の発掘調査の展開によっては、周辺地域において旧石器時代の遺物や遺構が検出される可能性を示した点に意義がある。

Ｂ地区の調査に引き続いて行われたＡ地区とＣ地区での発掘調査でも、土層断面中にＢ地区のＡＴに類似した堆積物が確認されている。本報告は、これらの堆積物について、前回と同様の方法によりテフラであることの確認を行う。また、Ｃ地区で作成された土層断面の中には、他の箇所との対比が困難な層序も認められているので、これらの断面において適当と考えられた土層について、放射性炭素年代測定と花粉分析を行い、今後の層序対比の指標となり得るような資料の作成を行う。

Ⅱ．試料

今回試料が採取されたＡ地区およびＣ地区は、それぞれＢ地区の北東側と南西側に位置する。前回の報告でも述べたように、Ｂ地区は見当山丘陵の小支谷の出口に形成された小規模な扇状地状の段丘斜面から低地にかけて広がっている。これに対し、Ａ地区は全域低地部に位置し、Ｃ地区は扇状地上に位置している。すなわち、Ａ～Ｃの３地区は地形的な位置がそれぞれ異なっており、したがって、各地区とも堆積層の状況が異なっていることが予想される。

試料は、Ａ地区東壁南端より採取された試料⑤、Ｃ地区南壁より採取された試料①、同地区川Ⅱ-２トレンチより採取された試料②、同地区東側拡張部掘り下げ部分より採取ｘれた試料③、同地区同部東壁より採取された試料④の計５点である。

試料⑤は、地表より下位約1.3ｍ程の黄灰色火山灰層と記載された土層より採取された もので、浅黄橙色の粘土まじり細砂である。試料①は、地表下約80cm程の河道埋積層下部に40層と記載されているブロック状の堆積物から採取されたもので、淡黄色の細砂である。試料②は、地表下約60cmに認められた明黄褐色の火山灰ブロックかと記載された堆積物より採取された砂質シルトである。試料③は、縄文時代～中世にかけての遺構検出面より約３ｍ程下位に認められた腐植物の多量に混入した褐灰色シルト層より採取された。試料④は、地表下約1.2ｍ程の赤黒色シルト質粘土層と記載された層より採取された。

以上の試料のうち、試料①、②、⑤の３点についてテフラの確認を行い、試料③と④の２点について放射性炭素年代測定と花粉分析を行う。なお、テフラ分析試料のうち必要と考えられる試料については、屈折率の測定を行う。

Ⅲ．テフラ分析

１．分析方法

試料約10ｇに水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶などの産状を調べる。さらに、必要ならば火山ガラスの屈折率の測定を行う。これらの観察および測定結果より試料となったテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、新井（1972）の浸液法に従い行った。

２．分析結果

（１）試料①

細砂～極細砂径の火山ガラスが中量程度含まれる。火山ガラスは、薄手平板状のいわゆるバブル型火山ガラスがほとんどである。火山ガラスは無色透明のものが多いが、少量の褐色を呈するものも認められる。火山ガラスの屈折率は、ｎ1.510前後の値に集まる傾向を示す。

（２）試料②

無色透明のバブル型火山ガラスが少量含まれる程度で、細粒の石英や黒雲母片が多く含まれる。このような砂分の状況から、試料②が採取されたブロックは、テフラのブロックではないと考えられる。

（3）試料⑤

試料はほとんど細砂～極細砂径の火山ガラスからなることから、試料が採取された土層は、ガラス質テフラ層とみてよい。火山ガラスは、ほとんど無色透明のバブル型からなり、少量の気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型やスポンジ状に発泡した軽石型も混在する。火山ガラスの屈折率は、n1.499～1.502であった。

3．テフラの同定

試料①中に含まれている火山ガラスは、産出層位、形態と色調および屈折率から鬼界－アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井,1978）に由来する。火山ガラスの産状から、試料①の採取されたブロック状の40層は、K-Ahの純層とはいえないが、K-Ahの降下堆積物が後の攪乱作用等を受けた結果形成されたものと考えられる。したがって、40層の堆積層準は、およそK-Ahの降灰層準に近いと考えられる。K-Ahの噴出年代は約6300年前とされていることから、40層より上位の堆積層は、それ以降の堆積年代であると考えて良い。40層は、河道埋積層下部から出土する遺物などの年代指標ともなる。

試料②の中に含まれている火山ガラスは、B地区で認められたATの火山ガラスや後述する試料⑤の火山ガラスとの比較から、おそらくATに由来するものと考えられる。しかし、上述のように試料②の採取されたブロックは、テフラの降下堆積物である可能性は低いことから、層序対比の指標にはならない。

試料⑤の採取されたテフラ層は、その層位と火山ガラスの特徴がB地区とほぼ同様の結果であることから、ATの降下堆積層であると考えられる。したがって、A地区東壁南端の黄灰色火山灰層は、土層断面における非常に有効な対比指標となる。

Ⅳ．試料③および④採取層の対比

1．放射性炭素年代測定

（1）測定方法

測定は、学習院大学年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出にはLIBBYの半減期5,570年を使用した。

（2）測定結果

測定結果は、試料③が31,320±1000yB.P.（Gak-17840）、試料④が11,230±200yB.P.（Gak-17841）であった。

2．花粉分析

（1）分析方法

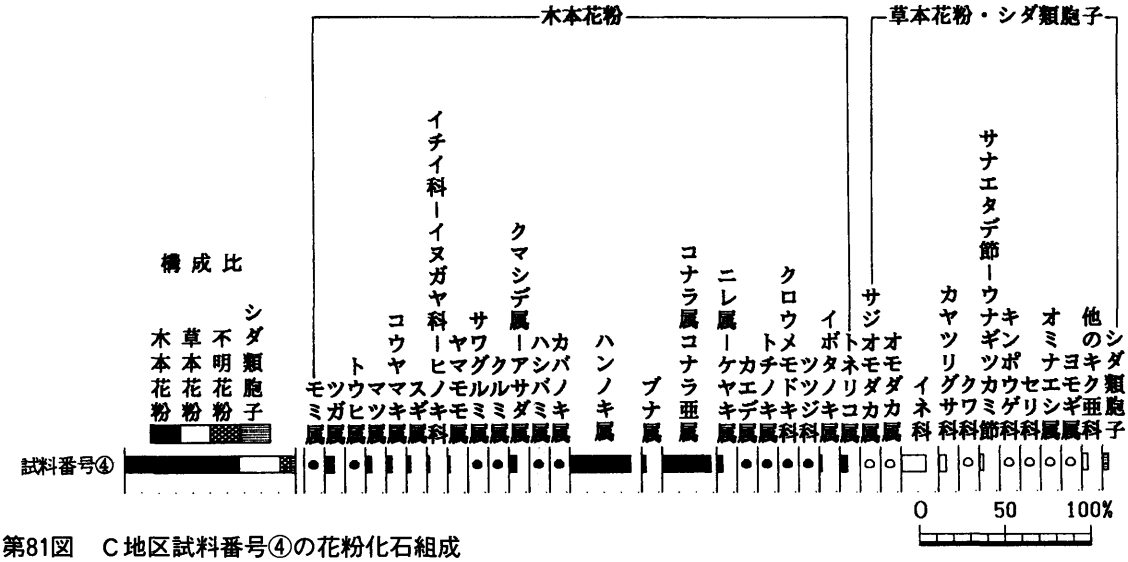
湿重約10ｇの試料について、水酸化カリウム処理（10%KOH）処理、重液分離（ZnBr2：比重2.2、HF）処理の順に物理・化学処理を施して花粉・胞子化石を分離濃集する。得られた残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類の同定・計数を行う。

結果は、同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の分布図として示す。出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子から不明花粉を除く数を基数として百分率で算出する。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは種類間の区別が現時点で困難なものである。

種類（Taxa）	試料番号④
木本花粉	
モミ属	2
ツガ属	13
トウヒ属	2
マツ属	10
コウヤマキ属	10
スギ属	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	3
ヤマモモ属	4
サワグルミ属	1
クルミ属	2
クマシデ属－アサダ属	12
ハシバミ属	1
カバノキ属	2
ハンノキ属	101
ブナ属	7
コナラ属コナラ亜属	81
ニレ属－ケヤキ属	10
カエデ属	2
トチノキ属	1
クロウメモドキ科	1
ツツジ科	1
イボタノキ属	4
トネリコ属	11
草本花粉	
サジオモダカ属	1
オモダカ属	1
イネ科	57
カヤツリグサ科	15
クワ科	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	10
キンポウゲ科	1
セリ科	4
オミナエシ属	1
ヨモギ属	3
他のキク亜科	12
不明花粉	28
シダ類胞子	
シダ類胞子	13
合計	
木本花粉	286
草本花粉	106
不明花粉	28
シダ類胞子	13
総花粉・胞子	433

※C地区試料番号③は、花粉が全く検出されなかった。

第16表　C地区試料番号④の花粉分析結果



第81図　C地区試料番号④の花粉化石組成

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満の出現率を示す。

（２）分析結果

結果を第15表、第75図に示す。以下に試料別に化石の産状について述べる。

試料番号③：花粉化石は全く検出されない。

試料番号④：花粉化石は多産するが保存状態はあまり良くない。花粉化石群集は、構成比では木本花粉が高率を占める。その中ではハンノキ属・コナラ亜属が多産し、ツガ属、クマシデ属ーアサダ属、トネリコ属などを伴う。草本花粉は低率であり、イネ科、カヤツリグサ科、水生植物のサジオモダカ属・オモダカ属などが出現する。

３．考察

試料③の採取された褐灰色シルト層は、花粉がほとんど検出されなかったことから、堆積年代を考える手がかりとなるのは、放射性炭素年代だけである。ただし、試料③についてテフラ分析による概査をおこなった結果、中量程度の無色透明のバブル型火山ガラスが認められた。Ｂ地区や上述のＡ地区の状況などから、この火山ガラスもおそらくＡＴに由来する可能性が高い。したがって、約３万年前という放射性炭素年代とも考え合わせると、この褐灰色シルト層の堆積年代は、ＡＴの降灰前後である可能性が高い。この場合、放射性炭素年代は、測定試料が由来の不明な土壌中の炭素分であることを考慮している。

一方、試料④の採取された赤黒色シルト質粘土層では、花粉化石群集はコナラ亜属やハンノキ属といった落葉広葉樹の種類が卓越することが特徴であり、当時の植生としてナラ類などを主とした落葉広葉樹林が推定される。このような花粉化石群集および植生が、いつ頃の植生を反映しているかは、本地域では最終氷期以降の花粉化石群集の変遷に関する情報が乏しいため特定できない。ただし、本地域の潜在自然植生がカナメモチーコジイ群集の常緑広葉樹林であること、完新世以降の近畿地方低地帯（大阪平野,奈良盆地など）の植生変遷が大きくみて、前半の落葉広葉樹林時代と、後半の照葉樹林時代に区分される（前田,1984）ことから、照葉樹が分布域を拡大するまでのある時期の植生を反映しているのかもしれない。このことを考慮すれば、測定された放射性炭素年代の値である約1.1万年前頃という年代を層序対比の目安と考えてよい。ただし、測定された試料が試料③と同様に由来の不明な土壌中の炭素分であることから、今後の発掘調査の進展によっては再検討しなければならない。

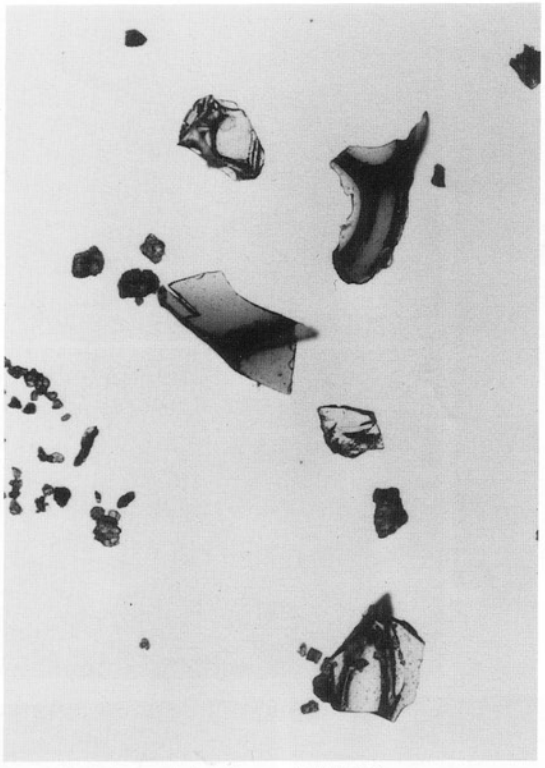
引用文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究ー.第四紀研究, 11, p.254ー269.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰ー姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義　ー.科学,46, p.339-347.

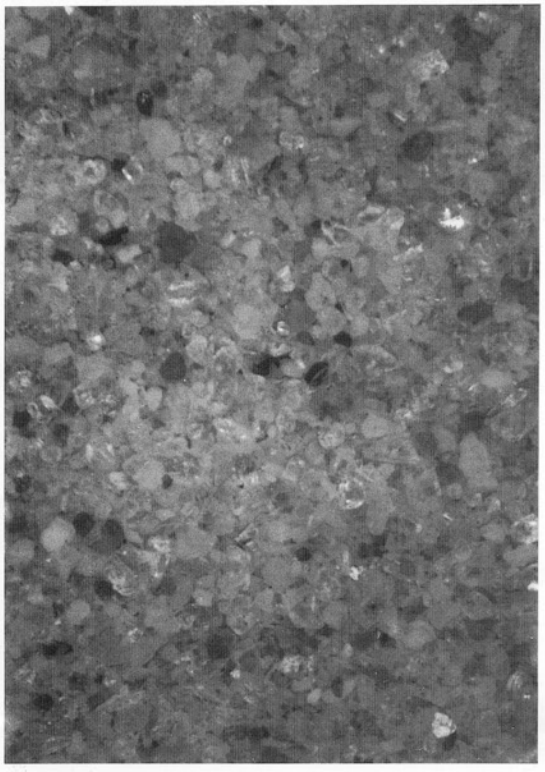
町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰.第四紀研究,17, p.143-163

前田保夫（1989）２.花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷.日本植生誌近畿,宮脇　昭編著,至文堂, p.87-100

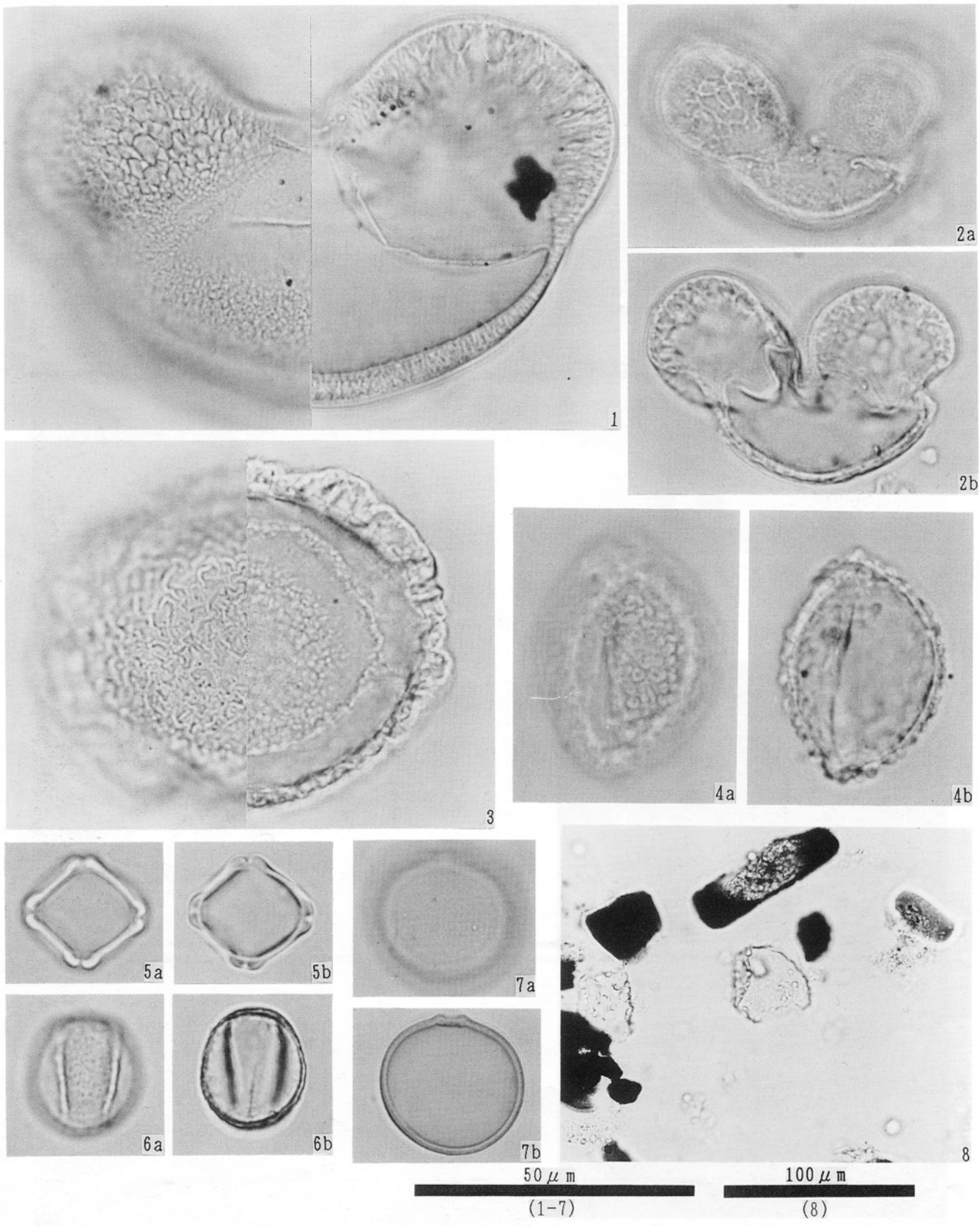


１．Ｋ－Ａhの火山ガラス（試料①）

２．ＡＴの火山ガラス（試料⑤）



１．砂分の状況（試料②）



花粉の顕微鏡写真　1．トウヒ属（試料番号④）　2．マツ属（試料番号④）　3．ツガ属（試料番号④）
4．コウヤマ属（試料番号④）　5．ハンノキ属（試料番号④）　6．コナラ属コナラ亜属（試料番号④）
7．イネ科（試料番号④）　8．状況写真（試料番号④）

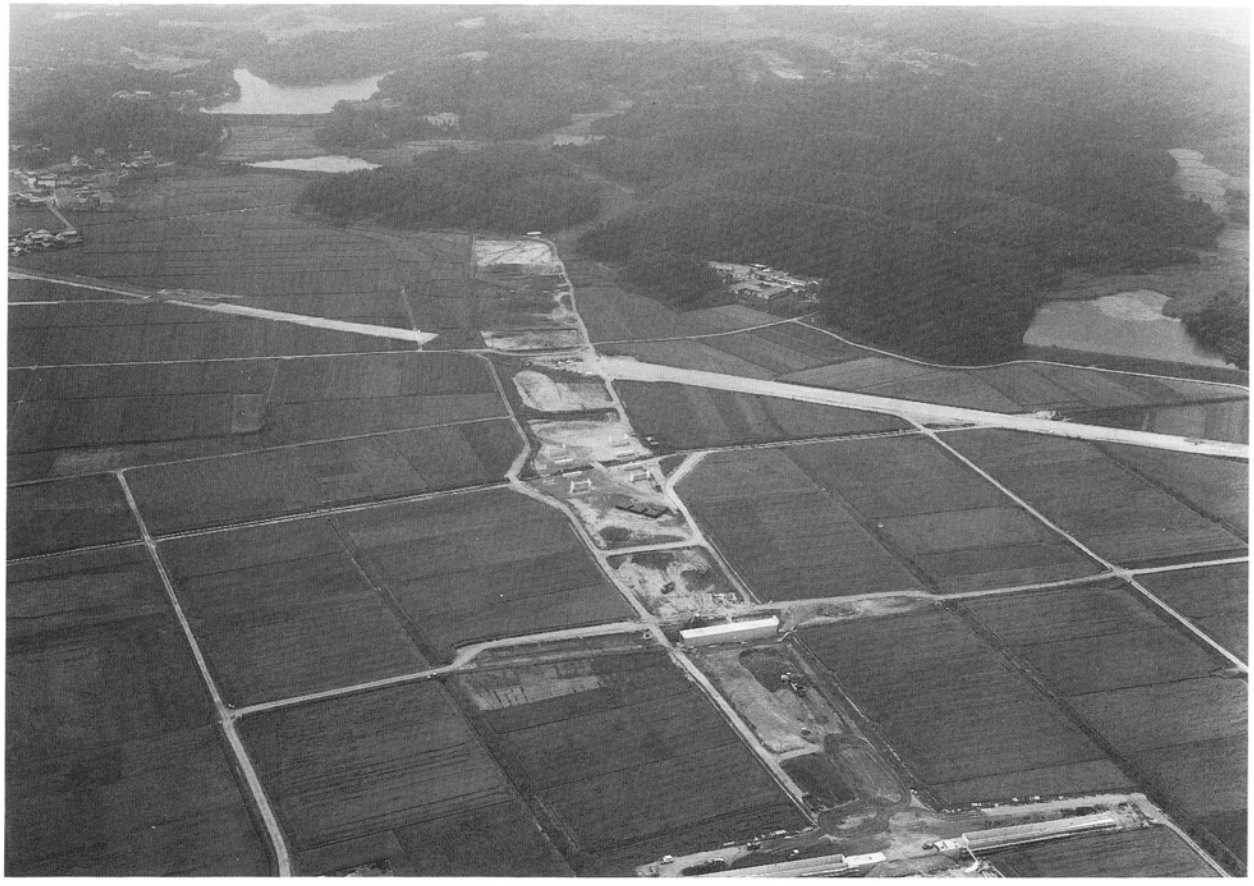


写真１　調査区遠景（調査終了後　北東から）

写真２　Ｃ地区東側階段状水田面（北から）

写真３　Ｂ地区全景（北西から）

写真４　Ｃ地区全景（北東から）

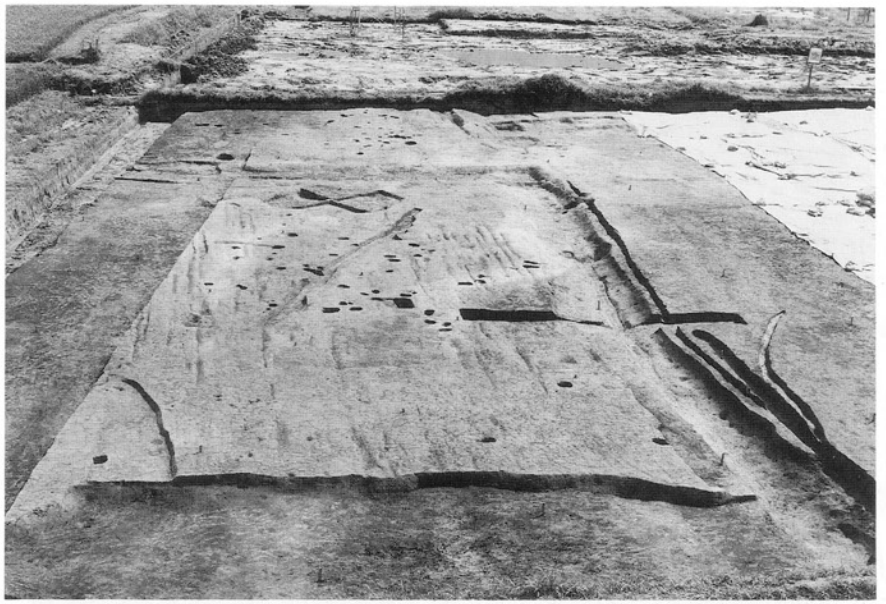


写真５　Ｂ地区第１遺構面(北東から)

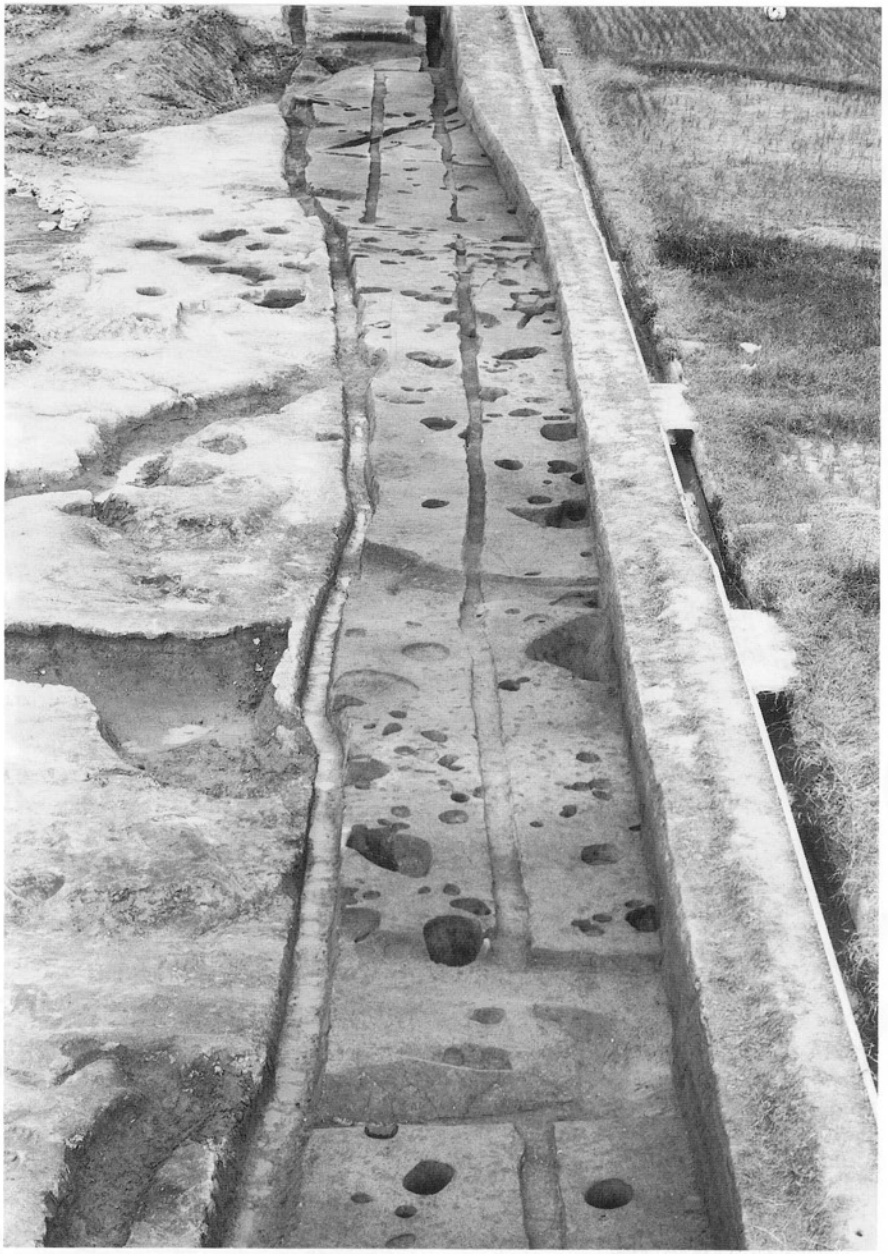


写真７　Ｃ地区東側拡張区（南西から）

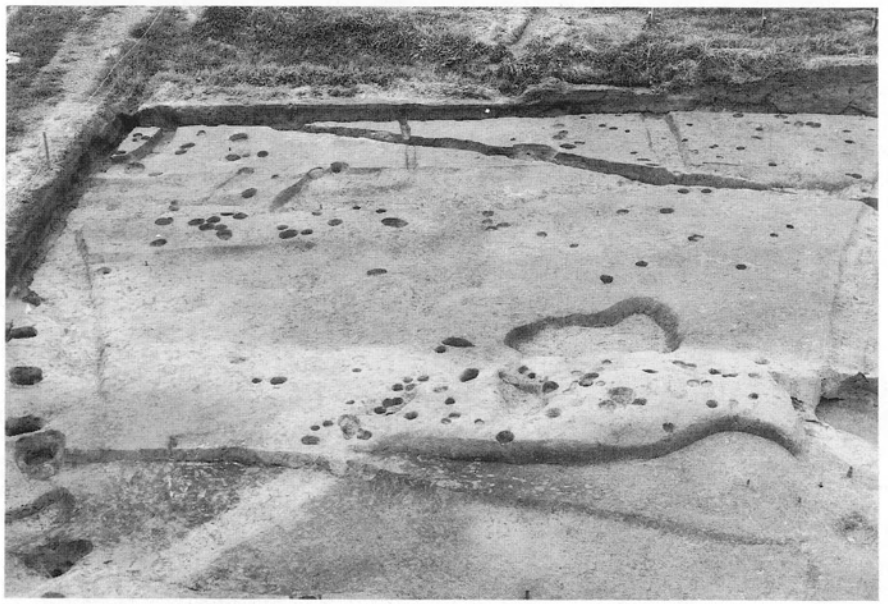


写真６　Ｃ地区第１遺構面(北東から)

写真８　ＳＢ29（右）・30（左）（北東から）

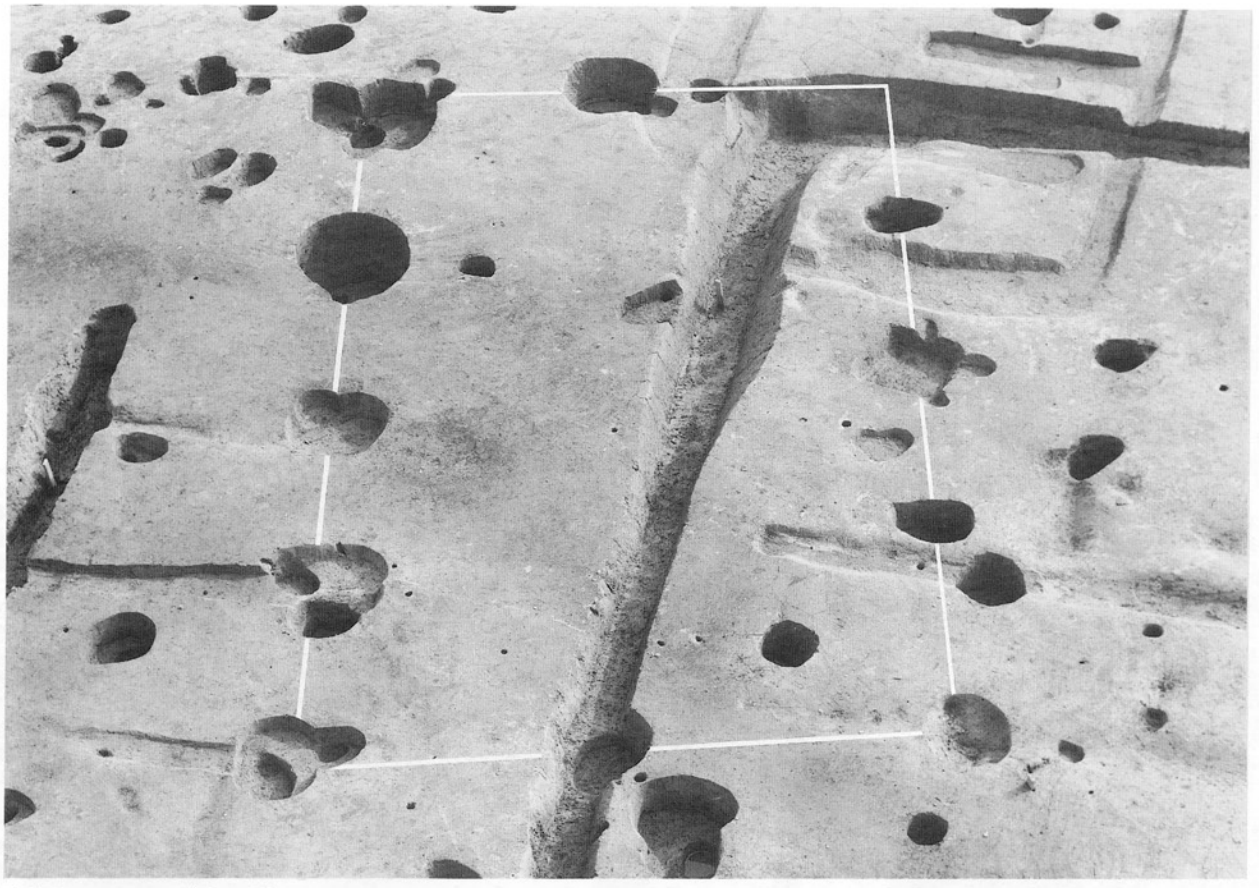


写真９　ＳＢ24（西から）

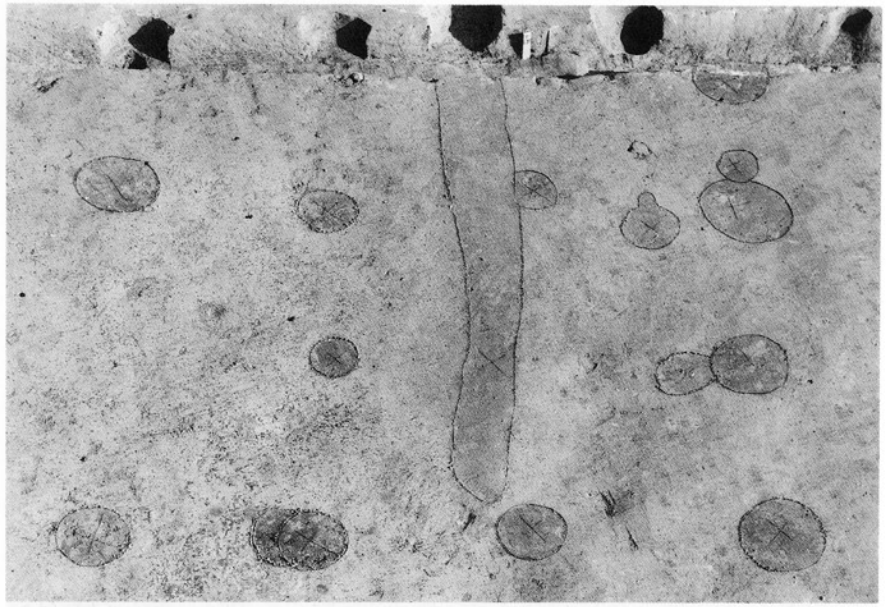


写真12　ＳＢ25検出状況（南西から）

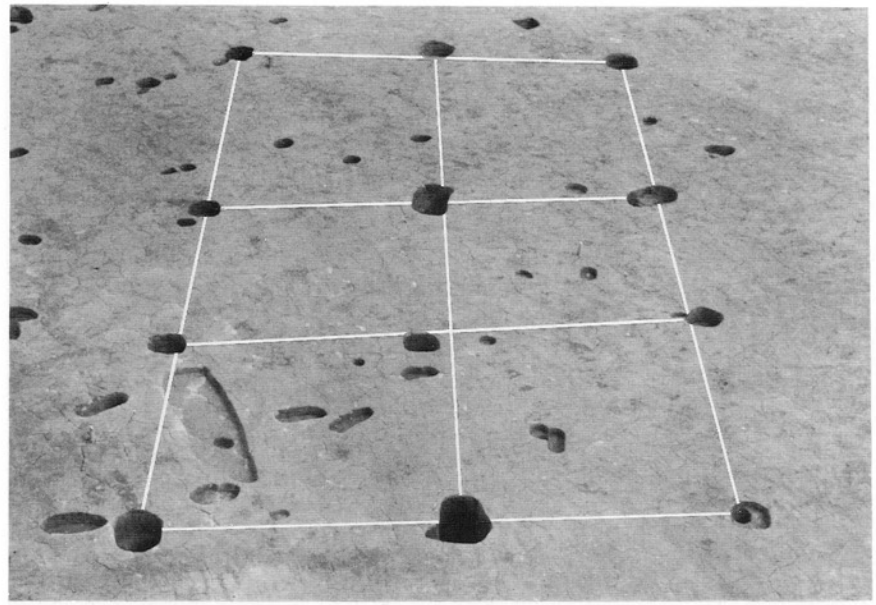


写真10　ＳＢ22（北西から）

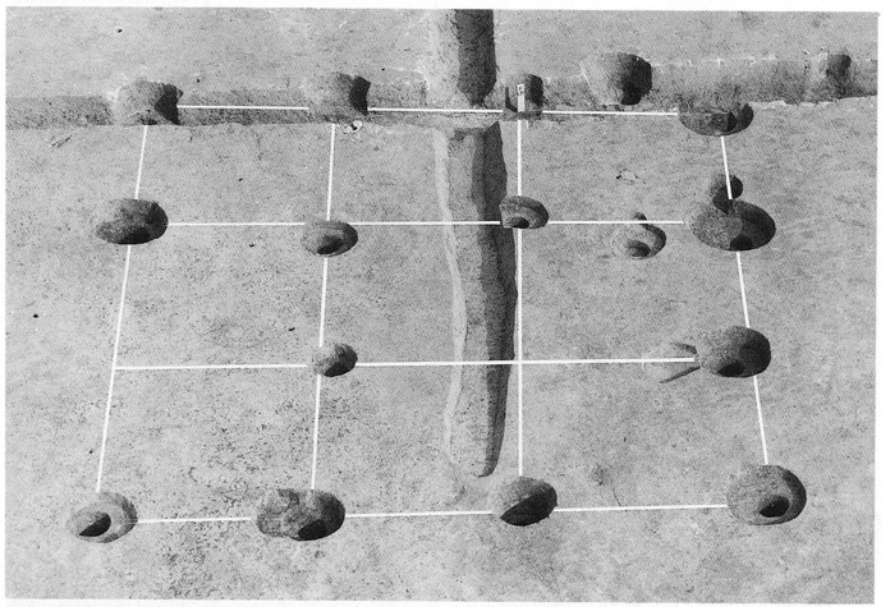


写真13　ＳＢ25（南西から）

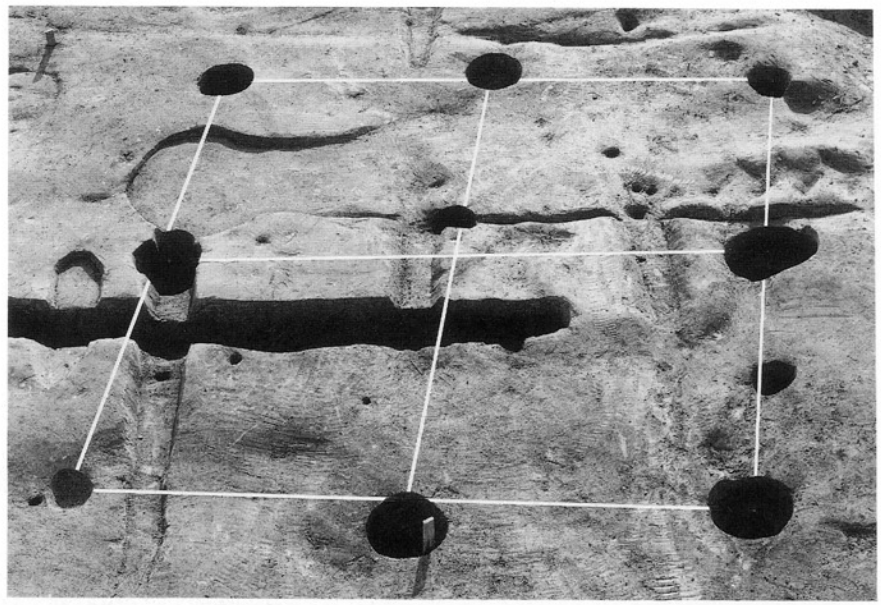


写真11　ＳＢ23（北東から）

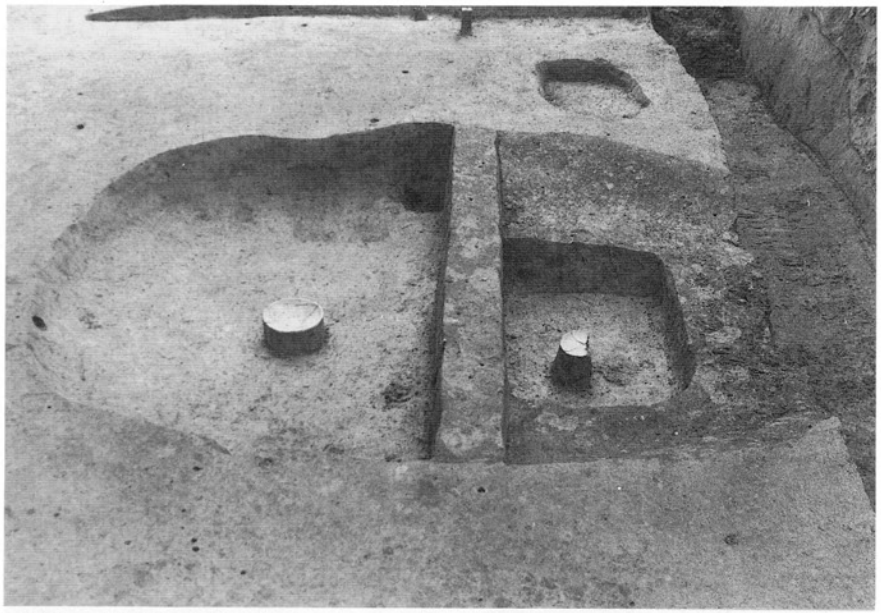


写真14　ＳＸ46（北西から）

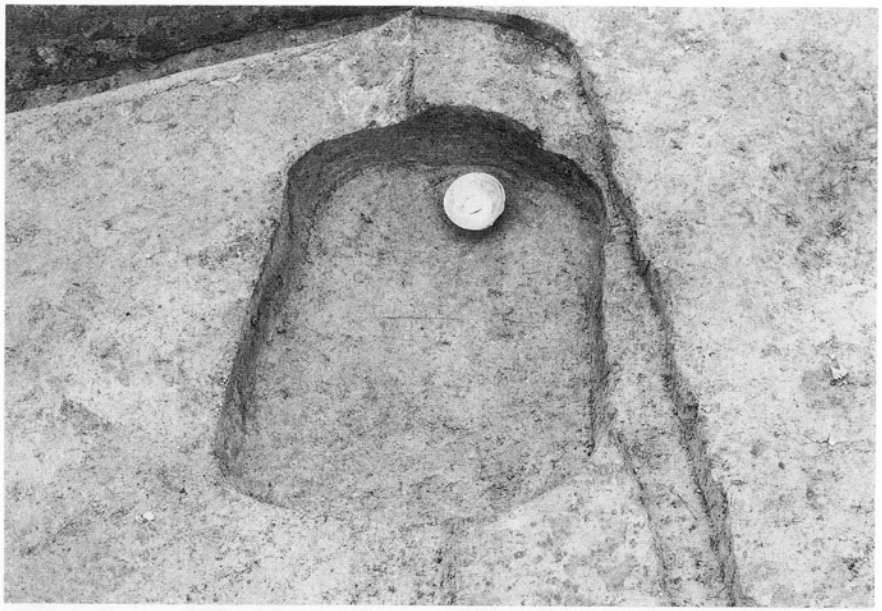


写真16　ＳＸ48（南西から）

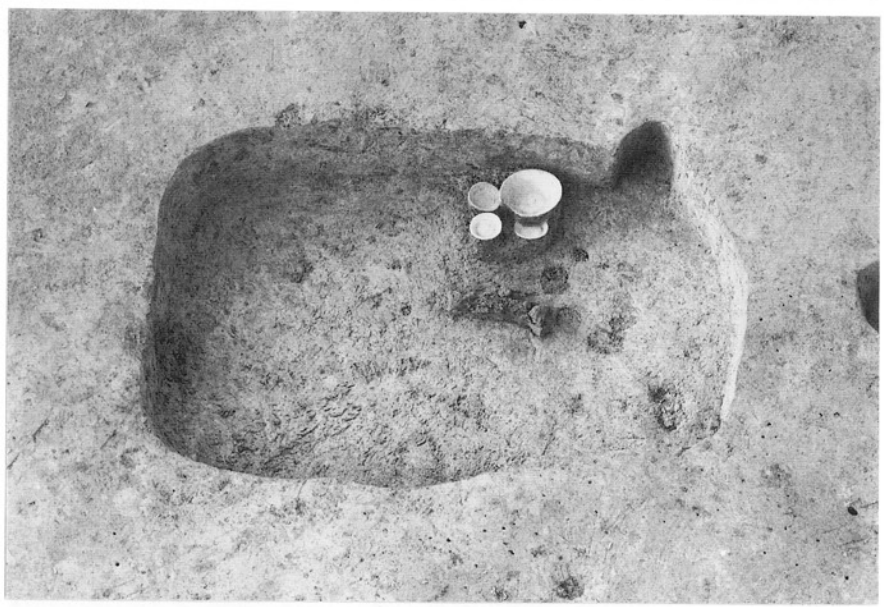


写真15　ＳＸ47（南東から）

写真17　ＳＸ49（南東から）

写真18　ＳＫ43（北西から）

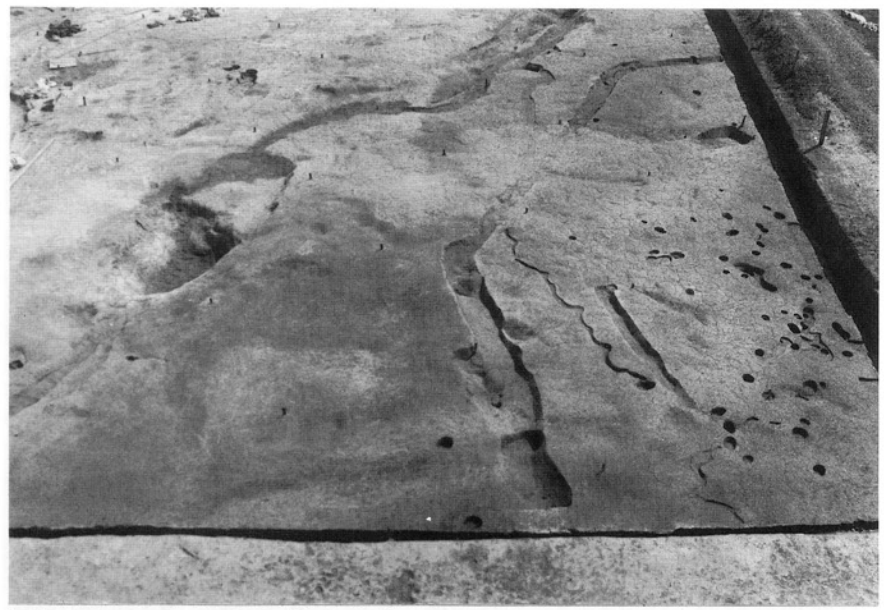


写真19　ＳＫ38・ＳＤ10（北東から）

写真20　足跡検出状況（東から）

写真23　ＳＤ４遺物出土状況（北から）

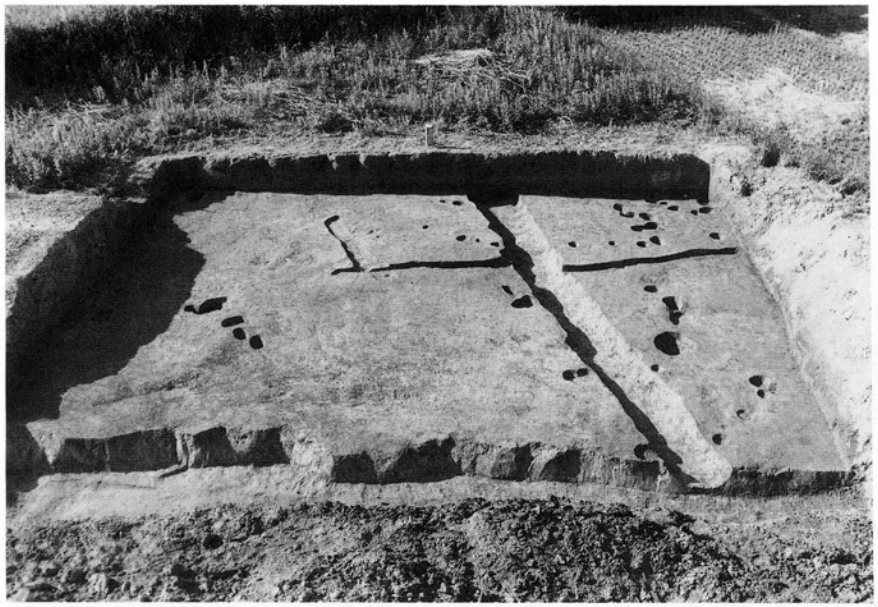


写真21　Ｃ地区西側拡張区（南東から）

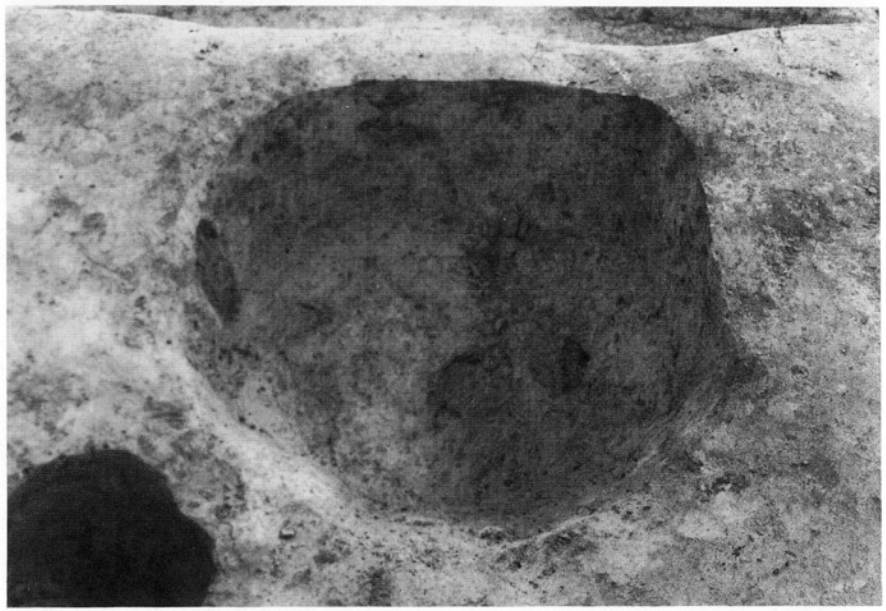


写真24　ＳＫ45（北から）

写真22　ＳＤ９埋土堆積状況（土層図24）

写真25　ＳＤ５遺物出土状況

写真26　ＳＤ９中層遺物出土状況

写真27　ＳＤ10遺物出土状況

写真28　ＳＤ12遺物出土状況

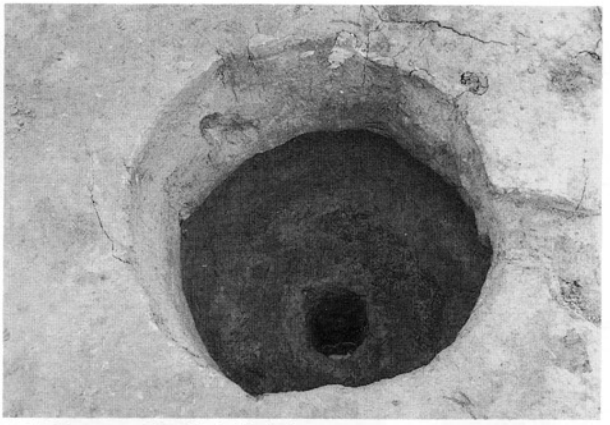


写真29　ＳＺ50（南西から）

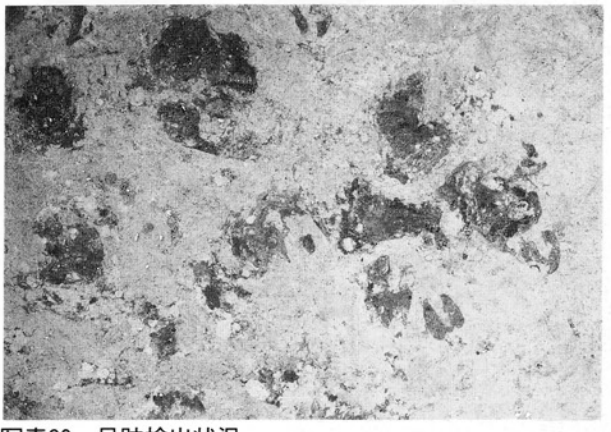


写真30　足跡検出状況

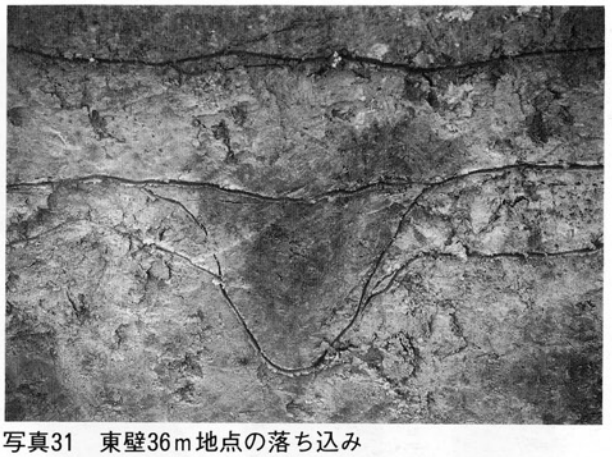


写真31　東壁36ｍ地点の落ち込み

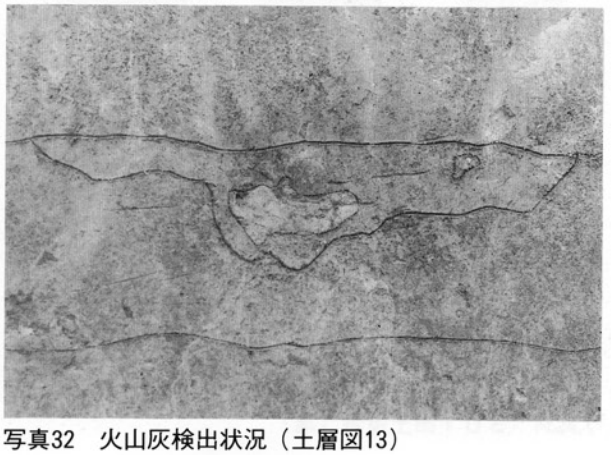


写真32　火山灰検出状況（土層図13）

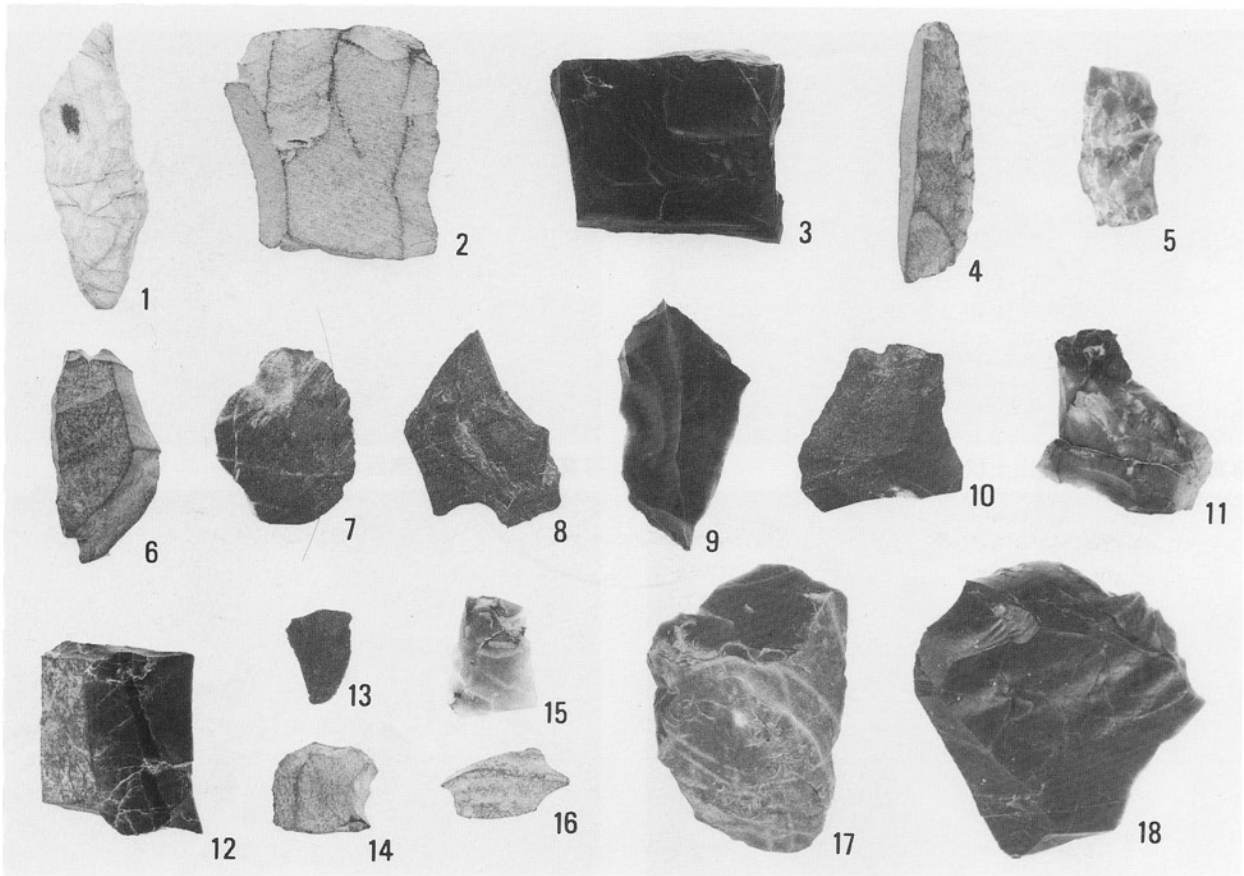


写真33　ＳＤ１出土遺物（表）

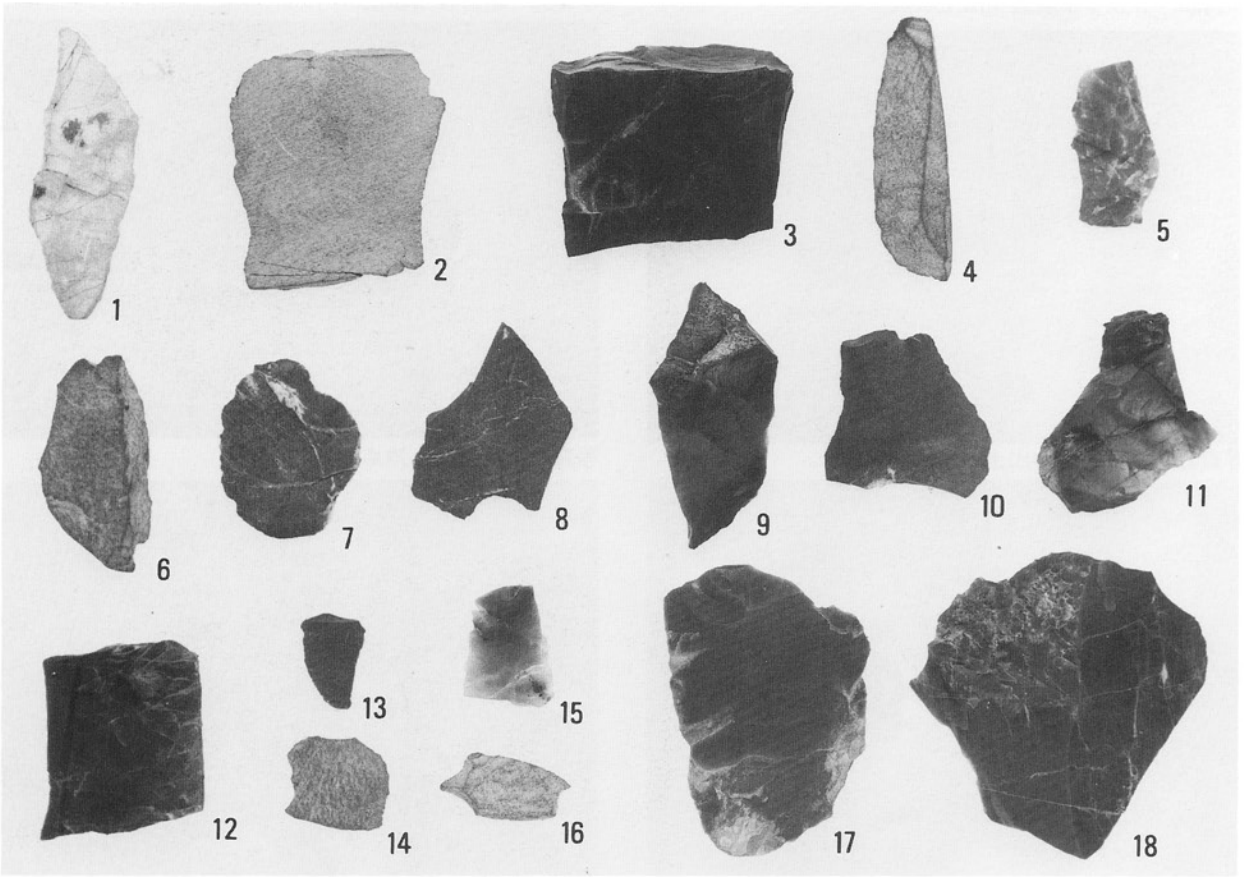


写真34　ＳＤ１出土遺物（裏）

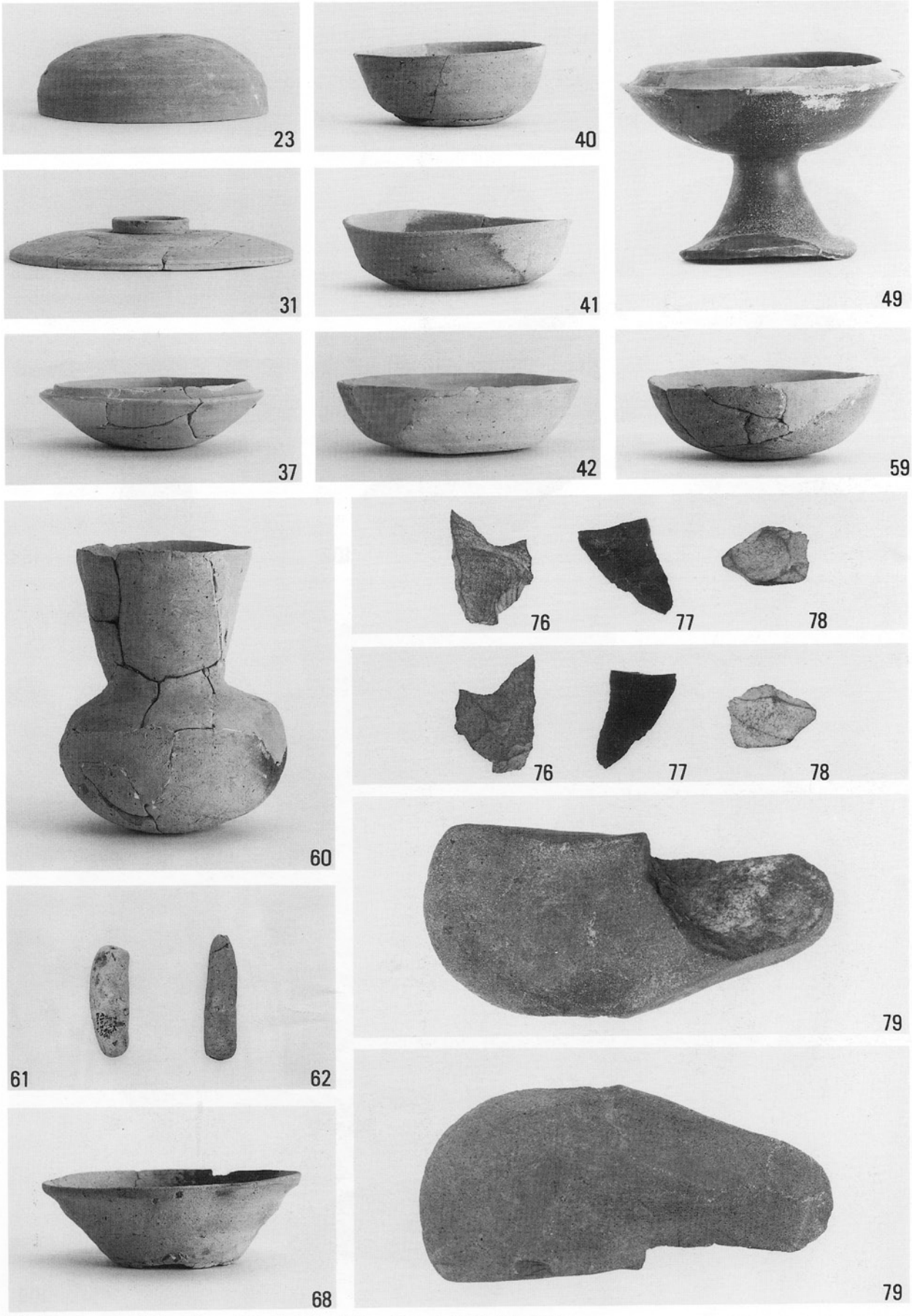
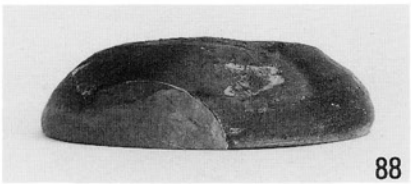
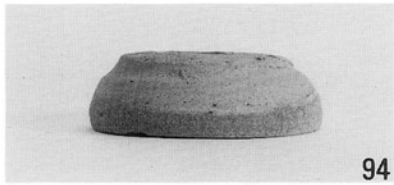
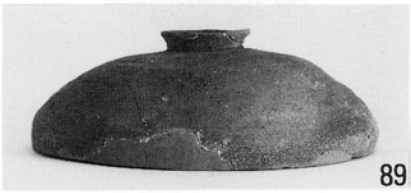
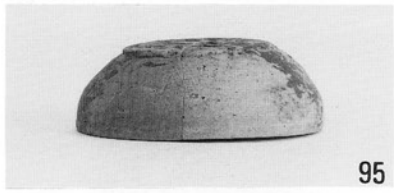


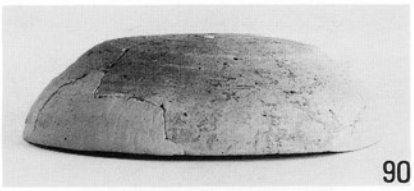
写真35　ＳＤ１（23～68）・ＳＤ２（76～78）・ＳＤ４（79）出土遺物











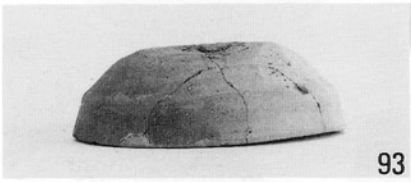
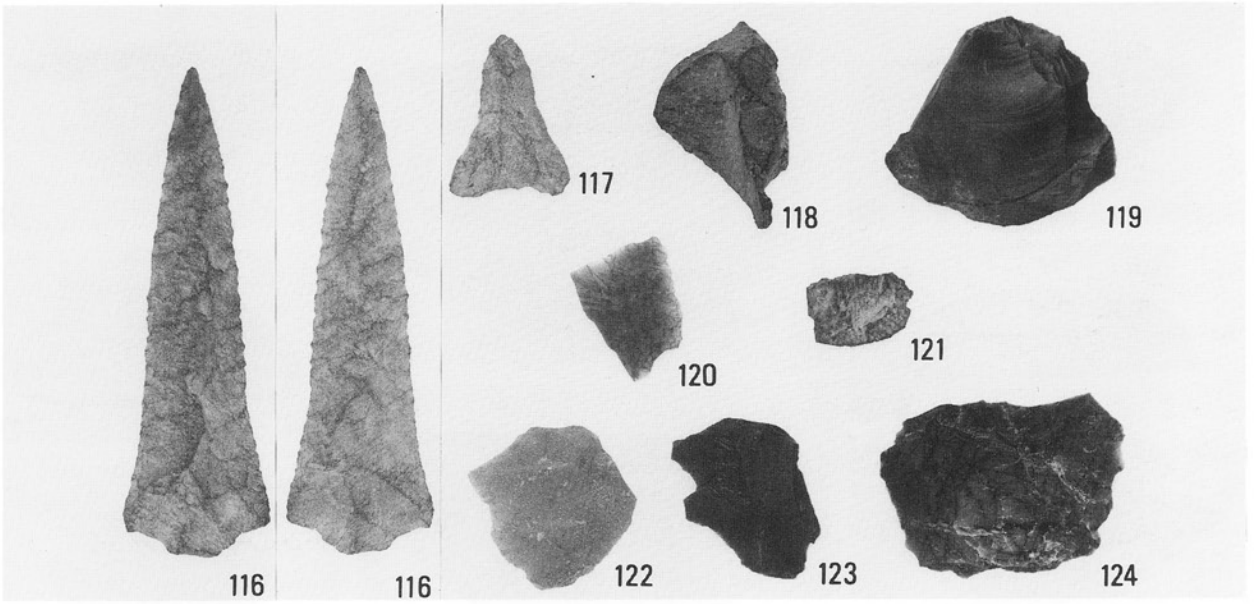


写真36　ＳＤ４出土遺物



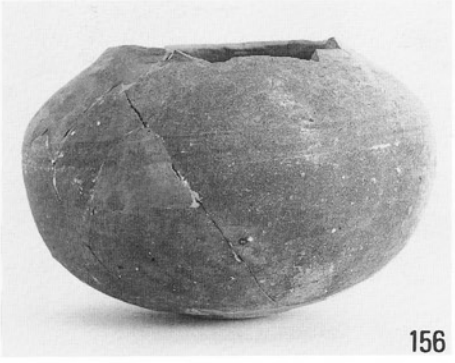
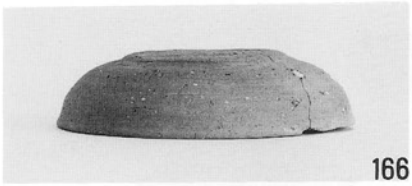
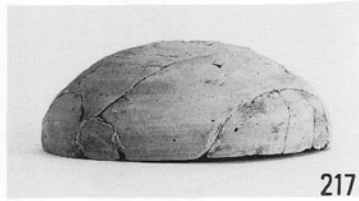
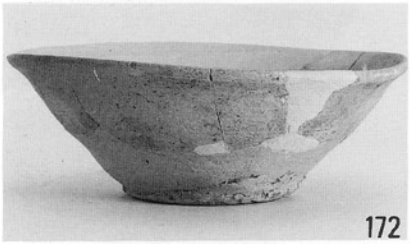
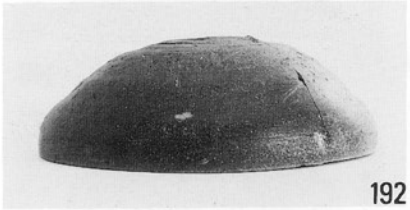


写真37　ＳＤ４（109～114）・ＳＤ５（116～124）・ＳＤ９（128～149）・ＳＤ10（156～158）出土遺物









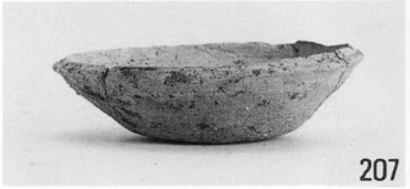
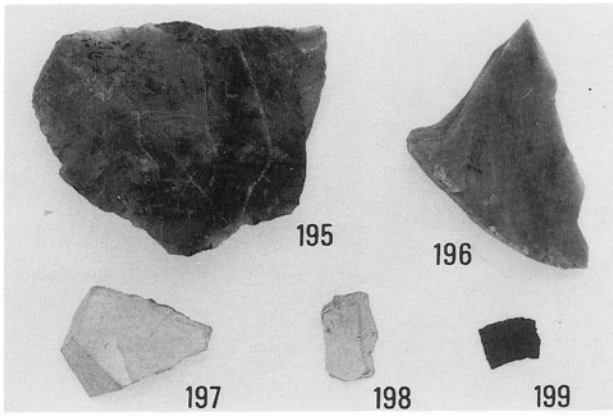
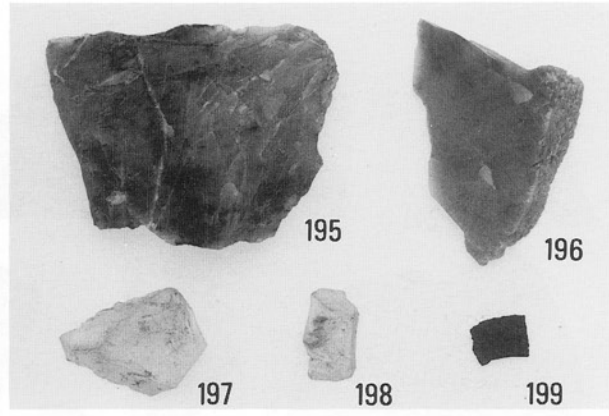
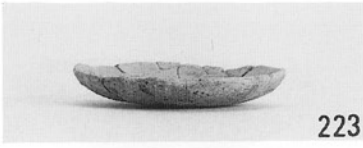
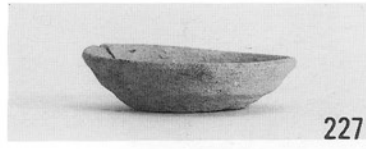


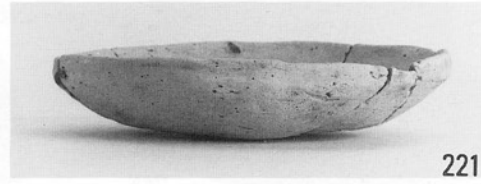
写真38　ＳＤ12（160～170）・ＳＤ13（172～178）・ＳＤ21（192）・ＳＫ41（206～209）・ＳＫ42（211）・
ＳＫ43（217～218）出土遺物

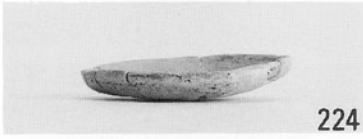


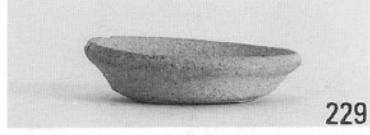


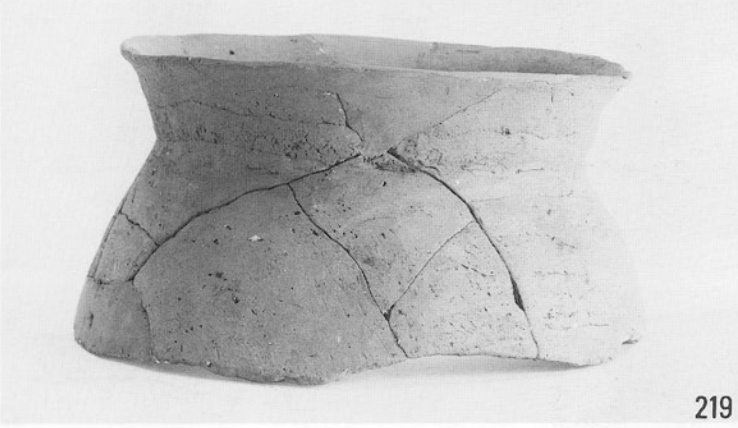












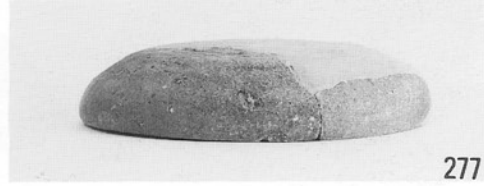
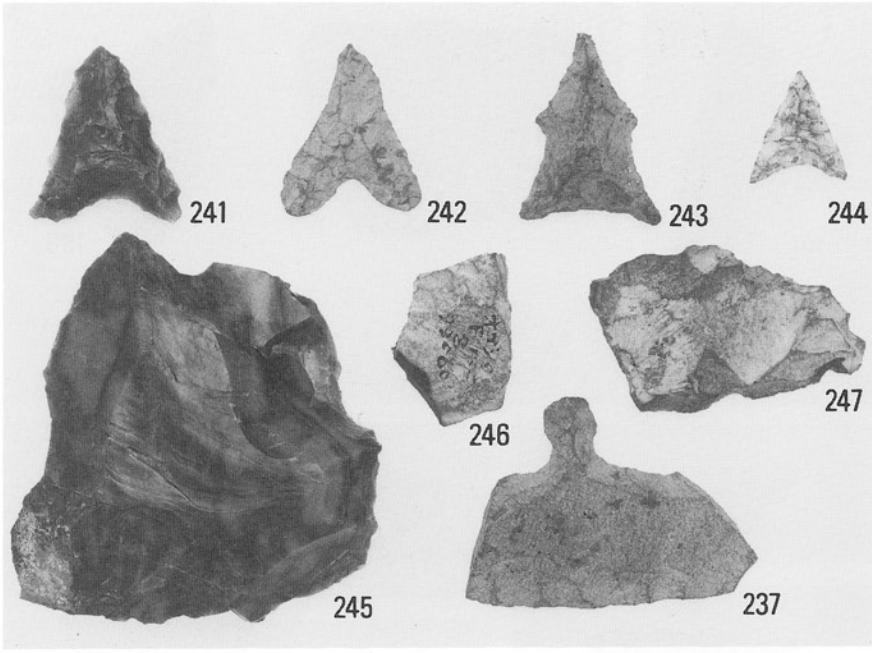
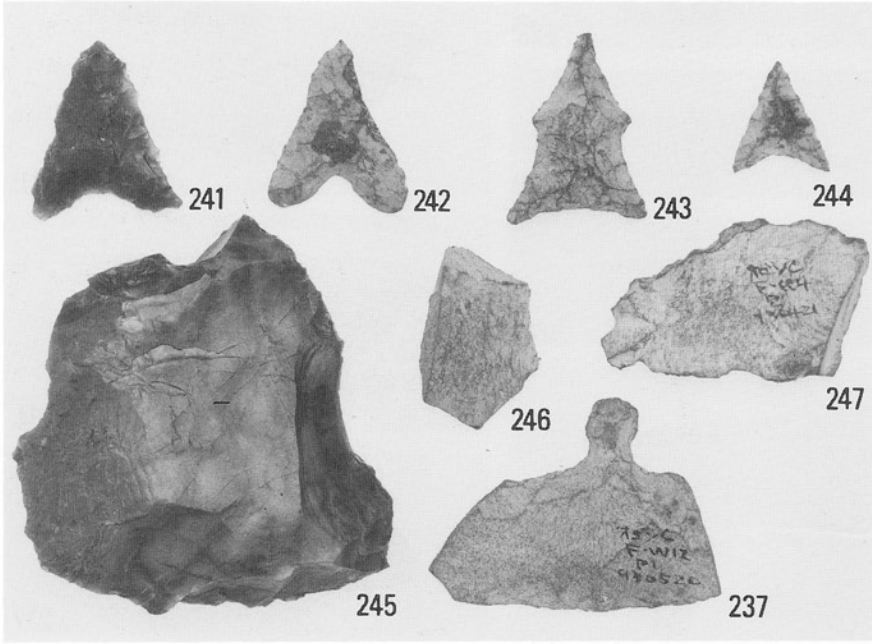
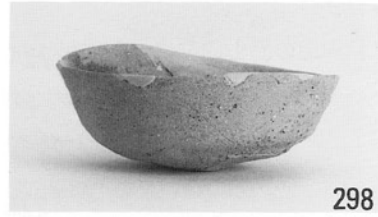


写真39　ＳＫ38（195～199）・ＳＫ43（219）・ＳＸ46（221～225）・ＳＸ47（227～231）・ＳＸ48（234）・ＳＸ49（235）・包含層（277～329）出土遺物







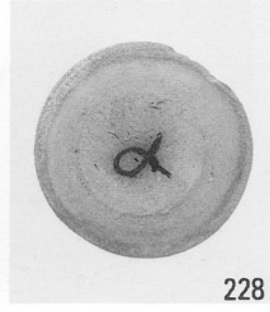


写真40　ＳＸ47（228）・包含層（241～327）出土遺物

Ⅲ．津市河辺町　山籠遺跡

1．はじめに

（1）遺跡の立地と周辺の状況

山籠遺跡の立地する丘陵は、南北をそれぞれ東流する安濃川と志登茂川に挟まれ、津市の北西に隣接する芸濃町から津駅西側まで舌状にのびる低丘陵で、地質的には鮮新世第3紀の奄芸層群と呼ばれる層によって形成されている。山籠遺跡は巨視的に見れば丘陵上と捉えられるが、周辺の地形は、南や西から複雑に谷水田が入り込む形となっている。遺跡は北西側から入り込む谷水田の最奥部からやや入った丘陵の北斜面で、標高約16m～20mの地点に位置する。

（2）周辺の歴史的環境（弥生時代）

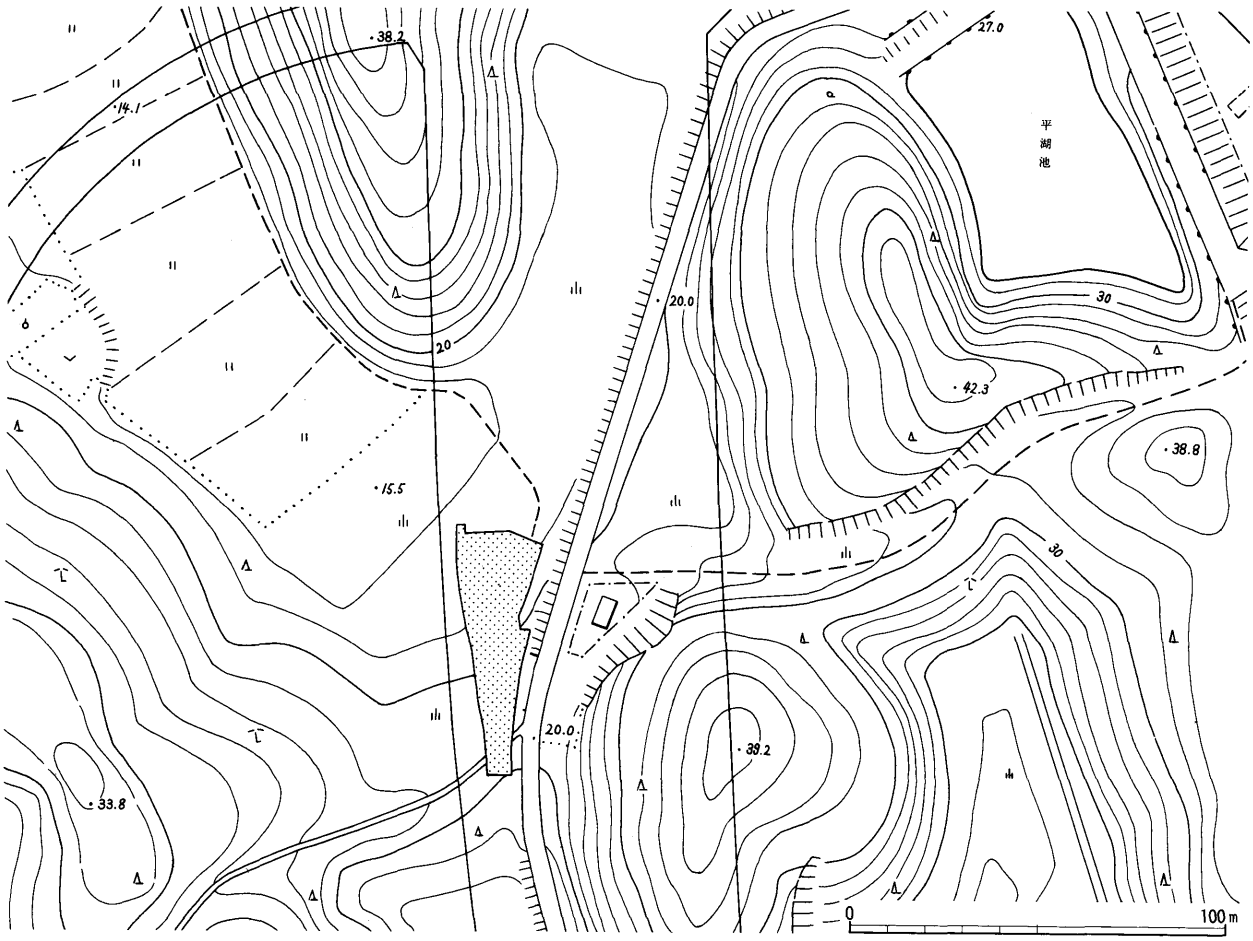
安濃川流域に絞って周辺の状況を見ると、まず第一に挙げなければならないのは納所遺跡[1]であろう。安濃川の中下流域で現在大きく蛇行している地点の左岸のやや微高地となる自然堤防上に位置し、前期から後期までの弥生全期間を通して営まれた大集落である。雲出川流域の中ノ庄遺跡[2]や鈴鹿川下流域の上箕田遺跡[3]と並んで県内で弥生時代を代表する拠点的集落のひとつに数えられる。現在のところ、安濃川流域に所在する当該時期の集落は、この納所遺跡を母村として、そこからの分村という形で成立したと考えられている。弥生前期に属する周辺の遺跡を挙げれば、納所遺跡のほかに、安濃川右岸半田丘陵の上村遺跡[4]で前期以降の遺物が出土し、また、後期

第82図　山籠遺跡周辺地形図（1：5,000）

と考えられる水田遺構を検出した森山東遺跡[5]では、その土壌基盤層から遠賀川系の壺が出土しているがまだまだその遺跡数は少ない。明確な遺構は納所遺跡以外では未確認であり、その増加が窺えるようになるのは中期以降のことである。本遺跡周辺地域では、中期になると中流域の丘陵裾部において沖積平野部に松ノ木遺跡[6]、そして丘陵裾部近くに亀井遺跡[7]や辻の内遺跡[8]が出現する。松ノ木遺跡では中期前半の方形周溝墓が4基確認されている。亀井遺跡においては小規模な調査ながら土坑2基を検出し、Ⅳ様式に相当する良好な一括資料を提供している。住居址の検出された当該時期の遺跡としては本遺跡に隣接する長遺跡がある。中期後葉に属する竪穴住居址13基を検出し[9]、その平面プランは方形に加えて長方形のプランを持つものが認められ、特徴的なものと捉えられよう。これは後述する本遺跡の竪穴住居のあり方とも非常に密接な関係にあり中期後葉の住居形態の時期的あるいは地域的特徴とよべるものかもしれない。後期になると、流域の遺跡数は飛躍的に増加する。特に右岸の低丘陵部（野田・半田丘陵）と左岸丘陵南裾部を東流する美濃屋川沿いに遺跡が散在する傾向が認められる。住居址は宮ノ前遺跡（本報告書所収）で確認されたに過ぎないが、河川の氾濫を避け丘陵裾部や自然堤防上等の微高地にその居住域を求める選地が行われたとみてよいであろう。また右岸でも高松C遺跡[10]のような比較的大きな集落が出現する。沖積平野部を生産域とした経済基盤の確立と協業の必要性が流域の人口増加と大規模な集落形成をもたらしたものと考えられよう。森山東遺跡の水田跡の確認にそうした一端が窺えそうである。

弥生時代に特徴的な祭祀具である銅鐸は、現在市内で3個体確認[11]されており、そのうち神戸・野田両地出土の2個体は、巨視的に見れば安濃川右岸域と捉えられる場所での出土である。左岸地域では銅鐸の出土こそないものの、太田遺跡で銅鐸形土製品が出土し[12]、流域の農耕祭祀を考える上で注目される。

当該時期の墓制としては、丘陵上に墳丘墓が構築



第83図　山籠遺跡調査区位置図（1：2,000）

されはじめる。高松弥生墳墓[13]、大ケ瀬弥生墳墓[14]、安濃町の前田遺跡[15]等で古墳時代への予兆を感じさせる墓制の発生が見られるようになるのである。

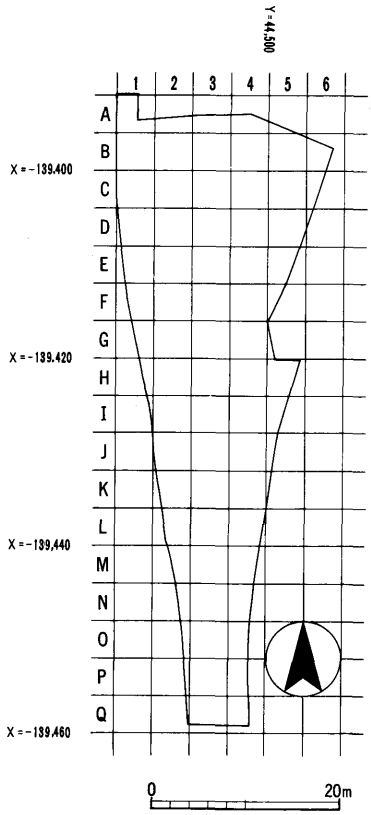
（3）調査の方法

調査区は、中勢道路本線部分の約 1,100㎡である。

調査区内の地区割りは、国土座標（第Ⅵ座標系）に沿った設定を行い、4m毎に南北方向にアルファベットを、東西方向に数字を付して4m×4mを1小地区として北西隅にポイント名を与えている（下図参照）。遺物の取り上げ等はこの地区名を基準として行った。

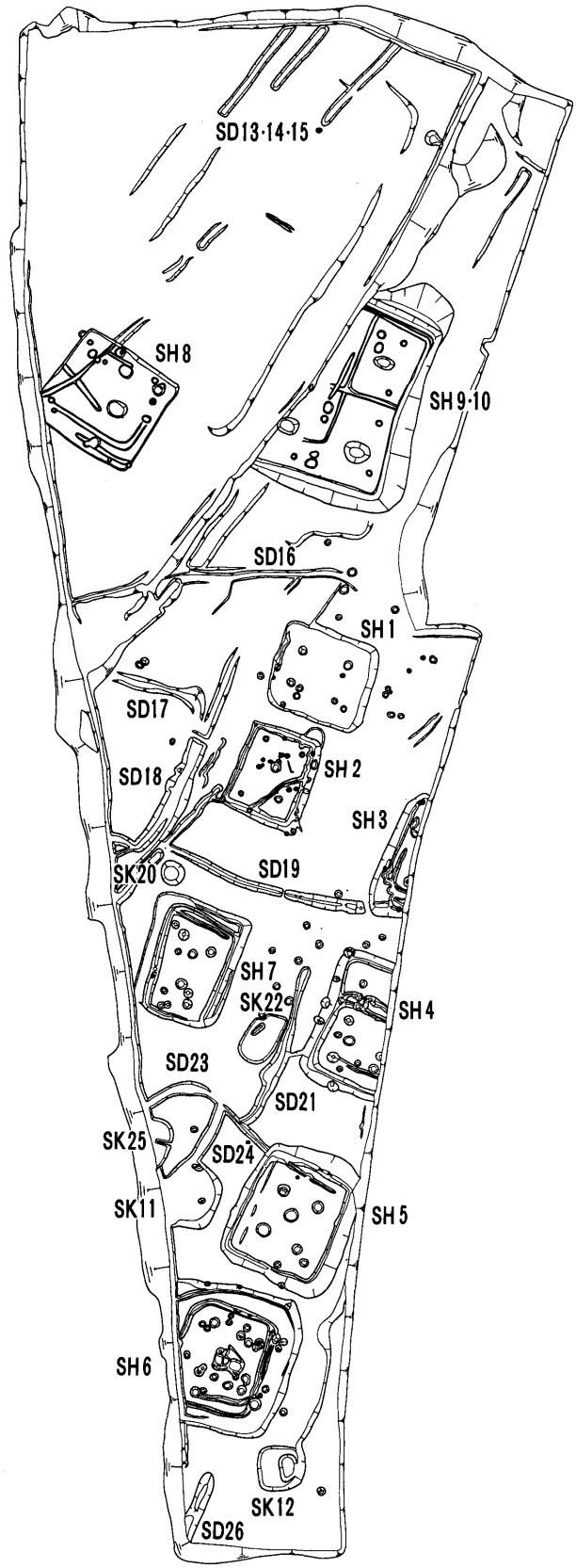
（4）記録・整理の方法

山籠遺跡の調査記録は、遺構全体に関しては航空写真測量を用いた。また、各遺構及び断面図等に関しては、適宜実測図を作成した。遺物に関しては、実測した図面のそれぞれの頭に「R」をを付した登録番号を与えている。例えば、実測図1枚目の3番目の遺物の場合、「R001－03」となる。これらの図面はファイルに収納し、報告書番号、出土地区、遺構、層位等を記入したノートを作成している。これらはマイクロ撮影を行い、別途保管している。



第84図　調査区小地区割り図（1：800）

写真は、遺構写真にはスライド・モノクロ（35㎜、6×9㎝、4×5インチ）、遺物写真には6×9㎝のモノクロ、他には適宜35㎜カラーネガを使用した。



第85図　遺構配置図（1：300）

2．調査の成果　－層序と遺構－

（1）基本層序

遺跡が丘陵裾部に近い斜面に立地するため、遺構検出面に至るまでにはかなりの厚い土の堆積があった。調査区西壁の観察から、堆積土はまず表土下に黄褐色砂質土が厚く（最も厚い部分で約 1.5m）堆積する。この層には撹乱の様子もなく比較的一様な黄褐色を呈することから、人為的な客土とは考えにくく、恐らくは南西側の丘陵部からの流入による堆積であると考えられよう。その下には20cm内外の厚さで幾層か堆積する。北西部には現状からも推定できるように、表土下に耕作に伴う床土が確認できる。これらは、狭い谷地形を巧みに利用した水田の痕跡と捉えられよう。遺跡の立地が丘陵斜面であることを反映してか、水平堆積や一定の層序を示す場所は皆無であると言わざるをえないが、調査区域内での最も平均的な層序を示すと考えられる地点の土層を示せば、次のようになる。

第１層　表土・撹乱土
第２層　黄褐色砂質土
第３層　灰褐色土（旧表土）
第４層　茶褐色土
第５層　灰褐色土
第６層　暗褐灰色土
第７層　黒色腐蝕土
第８層　黄褐色粘質土（地山）

場所によっては後世の削平等により黄褐色砂質土の欠如する所があったり、現表土下50cm程度で遺構検出面である黄褐色粘質土になる所があったりするが、全体的に見れば、沖積地ではない立地からして堆積層は厚いものと認定できよう。

遺構検出面は前述のとおり黄褐色粘質土（地山）である。現況の傾斜を反映するように、遺構検出面も北及び西に緩く傾斜する。

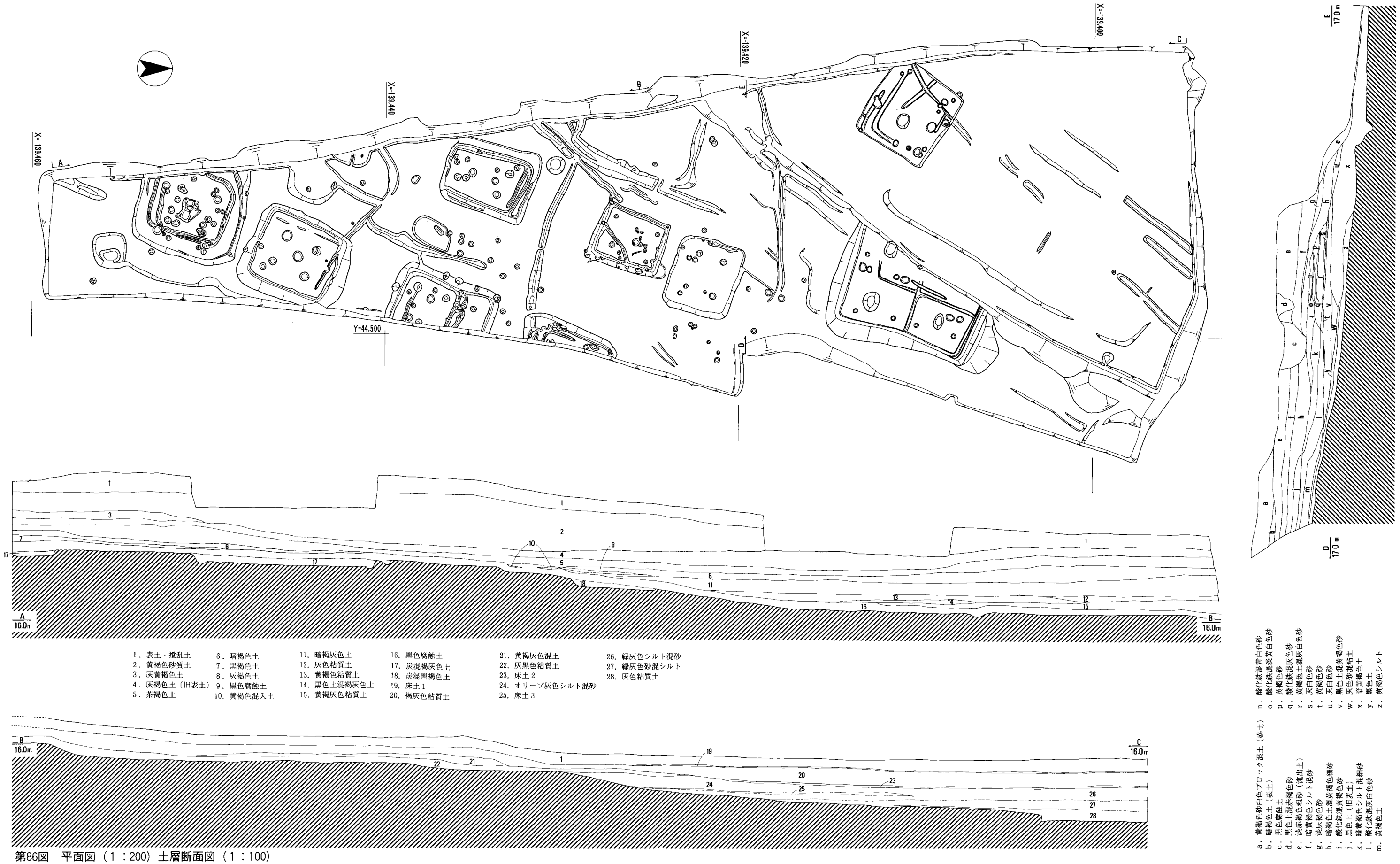
（2）遺構の概要

検出された主な遺構は、竪穴住居10棟（建て替え等を未考慮）、土坑５基、溝11条等である。一部に中世のものや現代の水田に伴う耕作溝を除き、弥生時代中期後葉に属するものが大部分である。主要遺構外で若干のピットが検出されたが、掘立柱建物としてまとまるものはない。これらピットからの出土遺物も皆無であり遺構としてのピットと認定できるものはなく、中には根の痕跡であるものもあろう。

竪穴住居は、10棟のうち現谷水田域でＳＨ８が検出されたが検出面からの深さは浅く、残りはよくない。水田耕作による破壊を受けたものと考えられるが、これ以外の９棟の住居は、調査区内では標高が比較的高い地点での検出であり、厚い堆積土に保護された形で遺存状況も良好である。調査区の南東部に位置するＳＨ３・４・５・６や、ＳＨ１・２・７はそれぞれの建物方向が一辺をそろえている状況が窺われ、あたかも同時存在を思わせるものとなっている。ＳＨ９・10は、一部北西側が破壊により未確認ながら、一部を重複しての隣地への建て替えと考えられよう。他の竪穴住居とは異なり、同一場所での拡張ではない唯一の例である。

土坑は、５基のうちＳＫ11と12でまとまった遺物が出土したほかは遺物の出土量も皆無に等しい。いずれの土坑も検出面からの深さは浅く、残存状況は良くない。ただ、これら４基の土坑はいずれも竪穴住居に近接する地点に位置しており、そうした住居との位置関係にも検討の余地が残る。

溝は、弥生時代のものと認定したなかで大きく三種に分けられる。一つは明確に竪穴住居の排水溝と認められるもので、等高線に対して直角あるいはそれに近い角度になるもの（ＳＤ19・23）、一つは竪穴住居と平行ないしそれに近く、等高線とほぼ平行に走るもの（ＳＤ18・21・24・26）、そしてもう一つは前二種には属さないもの、竪穴住居の排水溝である可能性を残すものの三種である。この他には現谷水田域で耕作溝が数条（ＳＤ13～15）検出された。



第86図　平面図（1：200）土層断面図（1：100）

（3）各　説

ＳＨ１　調査区のほぼ中央部で検出し、南北3.75ｍ×南北3.85ｍの方形プランをもつ。四辺に床面からの深さが10㎝程度の周溝が全周し、拡張や建て替えの切り合いは認められない。主柱穴は４本である。床面中央部には僅かに焼土が確認でき、屋内炉の痕跡であろうと思われる。遺物は、検出された竪穴住居のなかで最も多く、土器は図示しえただけでも18個体にのぼり、石器も破片２個体が出土している。

ＳＨ２　ＳＨ１の南隣に近接した場所で検出された。竪穴住居10棟の中では最も規模の小さいものである。南北3.70ｍ×東西3.05ｍの長方形プランをもち、ＳＨ１と同様、四辺に床面からの深さが10㎝程度の周溝が全周し、拡張や建て替えはない。壁面に柱穴がある。中央やや北寄りに焼土が認められ、炉の痕跡であろうと考えられる。遺物では壺や甕の土器のほか、石鏃・石斧等の石器が出土している。

ＳＨ３　調査区東壁際で検出された。北西部の一部を確認したのみで平面プランは不明であるが、南北4.95ｍ×東西 1.6ｍ以上の規模をもつ。周溝は二重に認められ、拡張に伴うものと考えられる。南西隅から排水溝（ＳＤ19）が暗渠となって西にのびる。検出した部分の面積に比例してか、出土遺物で土器は少なく図示できるものはない。石器は石鏃や二次加工のある剝片等が出土した。

ＳＨ４　ＳＨ３の南側に隣接して検出された。東半分が調査区外になるため、全体の規模とプランは不明であるが、南北5.30ｍ×東西 3.2ｍ以上になる。周溝の遺存状況から２回の拡張が考えられる。おそらく４本となる主柱穴があり、西及び南側の壁面にも柱穴が認められる。遺物は壺、甕、高杯の土器のみの出土で、石器の出土はなかった。

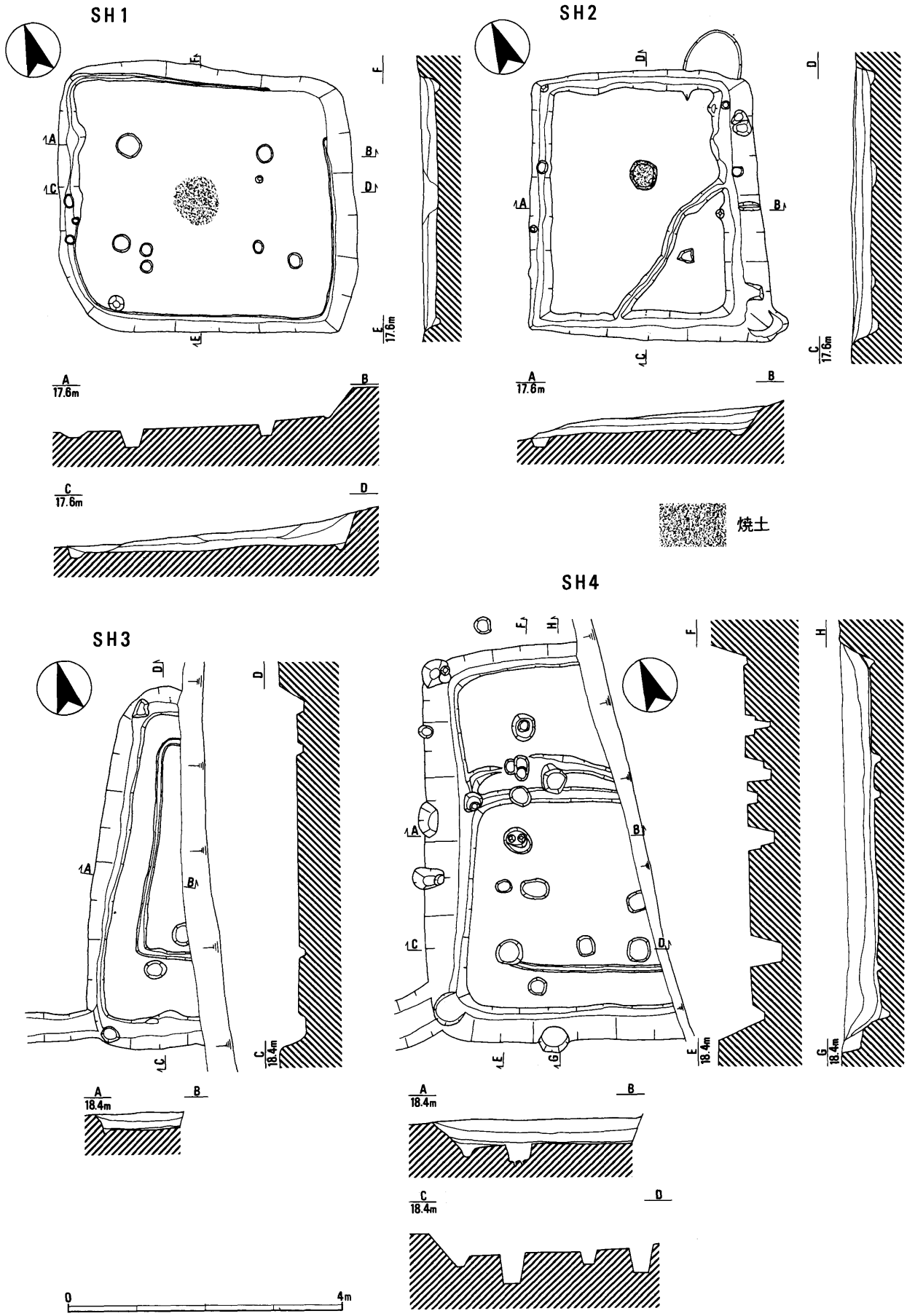
ＳＨ５　ＳＨ３・４・６と同列に属する位置で、ＳＨ４からは約 2.5ｍ南側である。規模は南北4.95ｍ×東西4.10ｍの長方形プランとなる。主柱穴は４本で、中央部では焼土が確認された。周溝は全周し内側にもう一つ周溝が認められる。一回の拡張に伴う残存のものと考えられる。遺物は壺、甕、鉢の土器と、石鏃・石包丁・大形石包丁のほか、フレイクチップや棒状石等の石器類が出土している。

ＳＨ６　ＳＨ５の南側に位置し、調査区内では最も高所にあたる。床面の標高は約17.7ｍである。南西側の一部が調査区外となるために完全な規模は算定できないが、南北5.85ｍ×東西5.35ｍのほぼ方形のプランとなろう。同一場所での２回の拡張が周溝の遺存状況からわかるが、検出時の周溝の切り合い関係からみて、住居プランは方形→長方形→方形という変遷が窺える。主柱穴は４本である。遺物は、壺、甕、高杯の土器のほか、石鏃・砥石・フレイクチップ等の石器類が出土している。

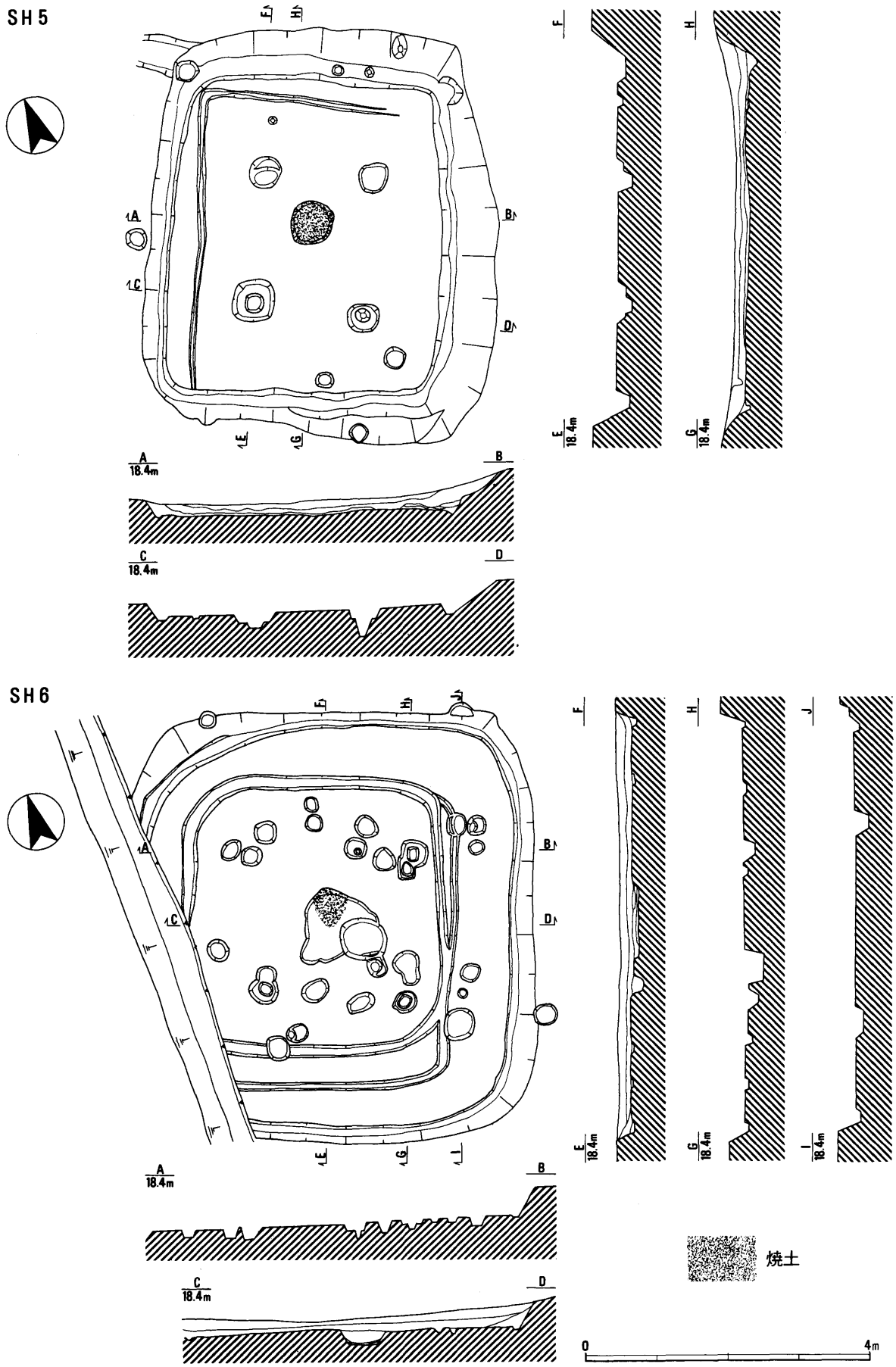
ＳＨ７　ＳＨ１・２の南側に位置するもので、南北4.80ｍ×東西3.75ｍの長方形プランをもつ住居である。近在のＳＨ２やＳＨ４とはほぼ等距離にあり、４ｍ程の距離を置く。前述のＳＨ１～６の住居が、２棟の住居が近接して存在する状況を示しているのとは対照的に、近隣に竪穴住居は見当たらない。西及び南側が調査区外となることもあり、住居の有無は未確認であるため断言できないが、おそらく単独に近い形で存在するものであろう。周溝の遺存状況から２回の拡張が認められる。床面中央部やや北寄りに焼土部分が２ヶ所認められた。これも炉の痕跡と考えられよう。遺物は壺、甕の土器ほか、石鏃・石剣・砥石等の石器が出土している。

ＳＨ８　現谷水田域で検出された、一辺約 4.6ｍの方形プランをもつ住居である。耕作による破壊と思われるが、残存状況は良くない。検出面からの深さも10㎝程度である。周溝は住居の壁沿いに掘削されるものはなく、住居内の溝も遺存状況から判断して住居址に伴う明らかな周溝とは認め難い。よって住居の拡張の有無は不明である。遺物は遺構の遺存状況を反映してか少量で、甕、高杯の土器のほか、磨製石器の剝片断片が出土したのみである。

ＳＨ９・10　調査区北端部近くで検出されたもので、北西部分は水田耕作で破壊を受け残っていない。一部を重複しての南側への建て替えと考えられ、周溝の切り合い関係から９が10に先行する。ＳＨ９は南北 4.0ｍ×東西 4.0ｍ以上である。ＳＨ10は南北5.0ｍ以上であるが西側部分で周溝がまわる痕跡が認められなくもないため、東西方向の一辺は５ｍ余りとなって、方形プランの竪穴住居となる可能性がある。北西部は耕作による破壊によって、住居の規



第87図　遺構平面・断面図４（１：80）



第88図　遺構平面・断面図２（１：80）

模は不明と言わざるをえない。また、床面で南北方向に走る溝は、ＳＨ９・10に先行する竪穴住居の周溝の痕跡とも考えられる。ＳＨ９・10では、遺物の取り上げを区別なく行ったため、いずれの住居に伴うものか不明であるが、土器で壺・甕・鉢が出土している。

ＳＫ11　ＳＨ５の西側で検出された不定形の浅い土坑である。壺、甕の破片が埋土から出土した。

ＳＫ12　調査区の最南端のＳＨ５の南側で検出された一辺約２ｍの方形の土坑である。ＳＫ11と同様浅いもので、深さは10cm程である。遺物は、遺構の規模のわりには多く、壺、甕の土器のほか石鏃、石包丁等の石器が出土している。

ＳＫ20　ＳＨ７の北側に位置し、径１ｍ弱の円形の土坑である。他の土坑と比べて深さは浅い。

ＳＫ22　ＳＨ４とＳＨ７の間で検出されたもので隅丸長方形を呈する。深さは浅い。

ＳＫ25　ＳＫ11の北西、調査区西壁際で確認された。調査区外に延びるため全容は不明である。

ＳＤ19　ＳＨ３の排水溝である。等高線に対して直角に走る。ＳＨ３とは暗渠となってつながる。出土遺物には壺、甕の破片がある。

ＳＤ23　ＳＨ５の排水溝である。これも等高線に対して直角に走る。調査区西壁際で南に曲がる。

ＳＤ18　ＳＨ２の西側を、等高線と平行に走る。最大部で約１ｍの幅を持つ。甕、高杯、鉢が出土している。

ＳＤ21　ＳＨ４の西側を、等高線と平行に走る。深さは最深部で30cm程度である。

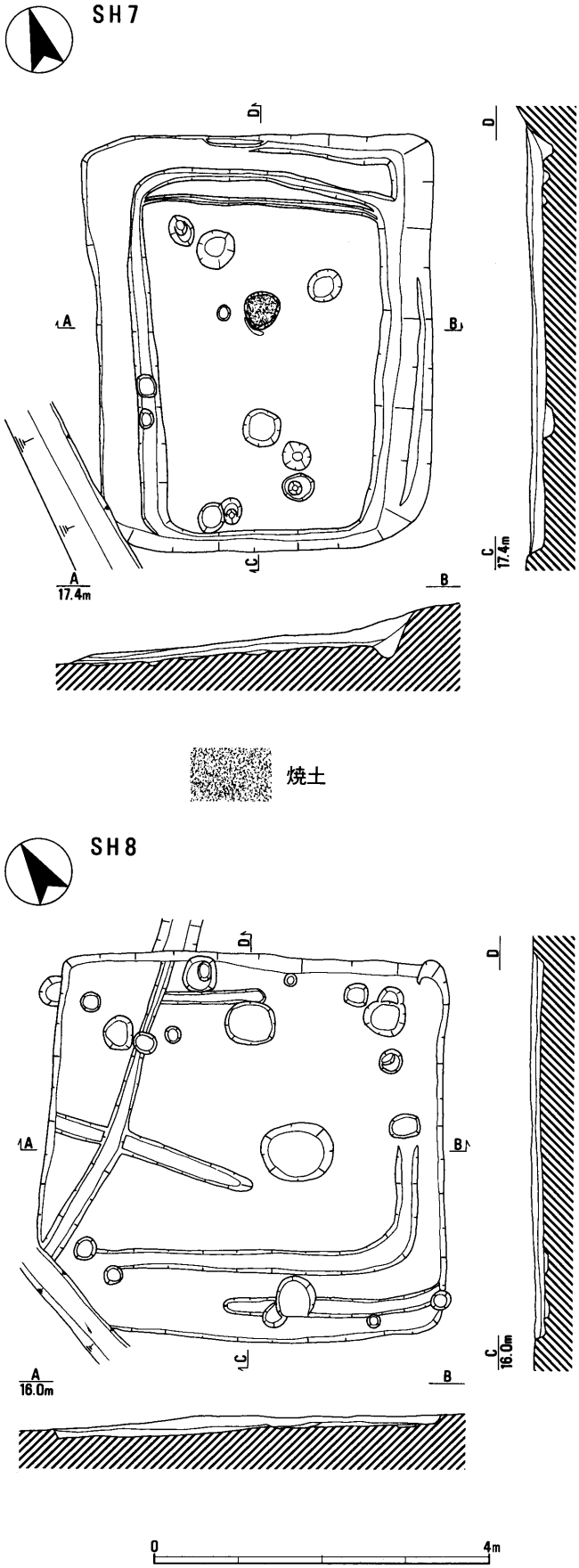
ＳＤ24　ＳＫ11の北側で検出されたもので、残存長はわずかである。

ＳＤ26　調査区南西隅で一部を検出した。これも等高線に水平に走るものであろう。

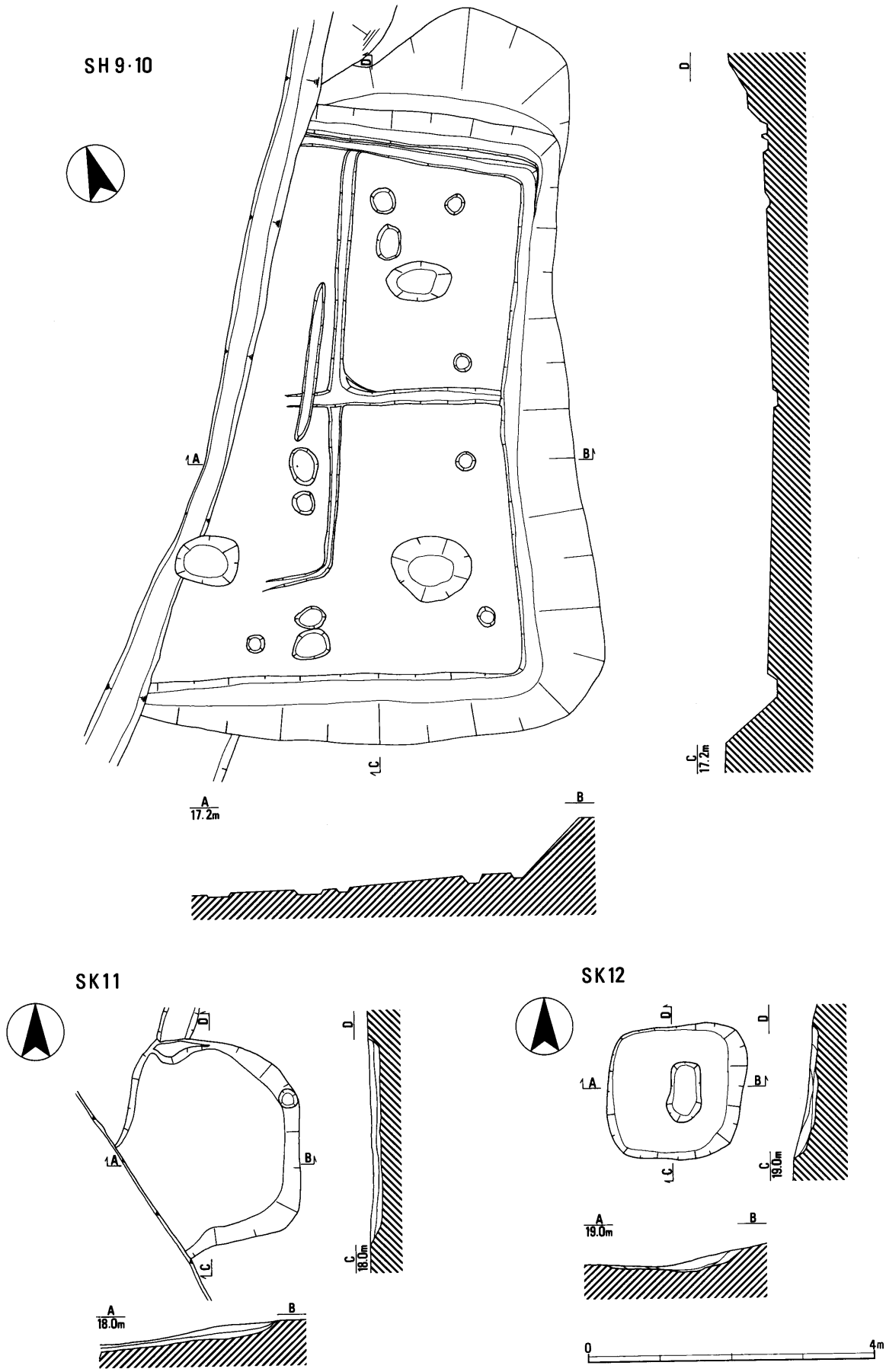
ＳＤ16　ＳＨ１とＳＨ９・10の間を、等高線に直角に近い角度で走る溝である。調査区外東側に住居が存在すれば、その排水溝となる可能性はある。

ＳＤ17　ＳＤ18と角度的には直行する溝であるが接続しない。埋土から壺、甕が出土している。

ＳＤ13・14・15　調査区北部の谷水田域で検出された耕作溝である。南側にある同方向に走る窪みも、耕作時のものと考えられる。



第89図　遺構平面・断面図３（１：80）



第90図　遺構平面・断面図 4 （1：80）

3．調査の成果 ――遺　物――

出土した遺物は、整理箱にして約35箱である。

内容的には、竪穴住居からの出土遺物がその中心を占める。土器と石器が竪穴住居単位で捉えられるという点では、時期の判るものとして今後に良好な資料を提供したと考えられる。土器は、土壌の関係か残存状況は悪く、表面が剝離等によってかなり荒れている。出土品の多くが破片で完形品もしくはそれに近い残存を示すものはない。石器類は、製品類を中心に30点程度が出土している。

出土遺物の記述にあたっては、以下、土器と石器を分けて報告することとする。遺物図版に関しても両者を区別して掲載する。図版及び観察表にそれぞれの出土位置を注記したため、両者対照の際は参照されたい。また、個々の遺物の法量・調整等については遺物観察表に詳細を明記した。

（1）土器

土器は、遺構内・遺構外を問わず弥生時代中期後葉のものがほとんどで、若干量の中世陶器（山茶椀）が包含層から出土した。

弥生土器に関してはまず各器種ごとに分類を行う。分類案は既に概報Ⅱで提示されているが、本報告ではその分類を踏襲しつつも口縁部の形状に主眼を置いて再度分類を行い、それに従って遺構別に記述することとする。出土した土器の器種は壺、甕、高杯、鉢等であるが、遺存状況が良くないため大まかな分類を行った。以下、その分類基準を列記する。

壺A1　細頸壺で、口縁部外面に凹線文を施し、口縁部形態は受口状に、体部は算盤玉状になる。

壺A2　壺A1 と形態的には同様であるが、口縁部外面への凹線文は施されない。

壺B　本遺跡出土例の中では大型の部類に入るもので、口縁部は大きく開いて端部が垂下し、頸部に廉状文を施す。

壺C　口縁端部が肥厚し、外面に明瞭な面をもつものを一括する。

壺D1　口縁端部が薄くなって若干垂下する。

壺D2　端部外面に刺突による刻み目が施される。

壺E　小型の壺である。

甕A1　頸部からやや肥厚して口縁部が開き、内面はヨコハケ調整がなされる。端部に刻み目を施す。

甕A2　形態的にはA1 と共通するが、端部に刻み目は施されない。

甕B　屈曲した頸部から口縁が開き、端部が肥厚して外面に明瞭な面を持つ。

甕C　口縁部は短く外反し端部に刻み目を施す。

甕D　薄手の器壁で頸部が屈曲し、口縁端部外面に面をもつ。

甕E　頸部から口縁が直線的に伸び、端部にかけて薄くなる。

甕F　口縁部が受口状を呈する。

高杯　口縁端部に面をもち、外面に凹線文を施す。

鉢A1　口縁部にかけて直線的にのび、端部外面に刻み目を施す。

鉢A2　口縁端部がわずかに外反し、端部外面に刻み目を施す。

鉢B　口縁部が内傾して受口状になる。

鉢C　直線的に内傾する口縁で、端部がやや肥厚し、上端は明瞭な面をもつ。

鉢D　口縁部が短く外反する。

壺底部　平坦な底部から体部にむかって緩やかに拡がるものを一括する。

甕底部A　平底であるが、壺底部に比べ立ち上がりの角度の大きいものを一括する。

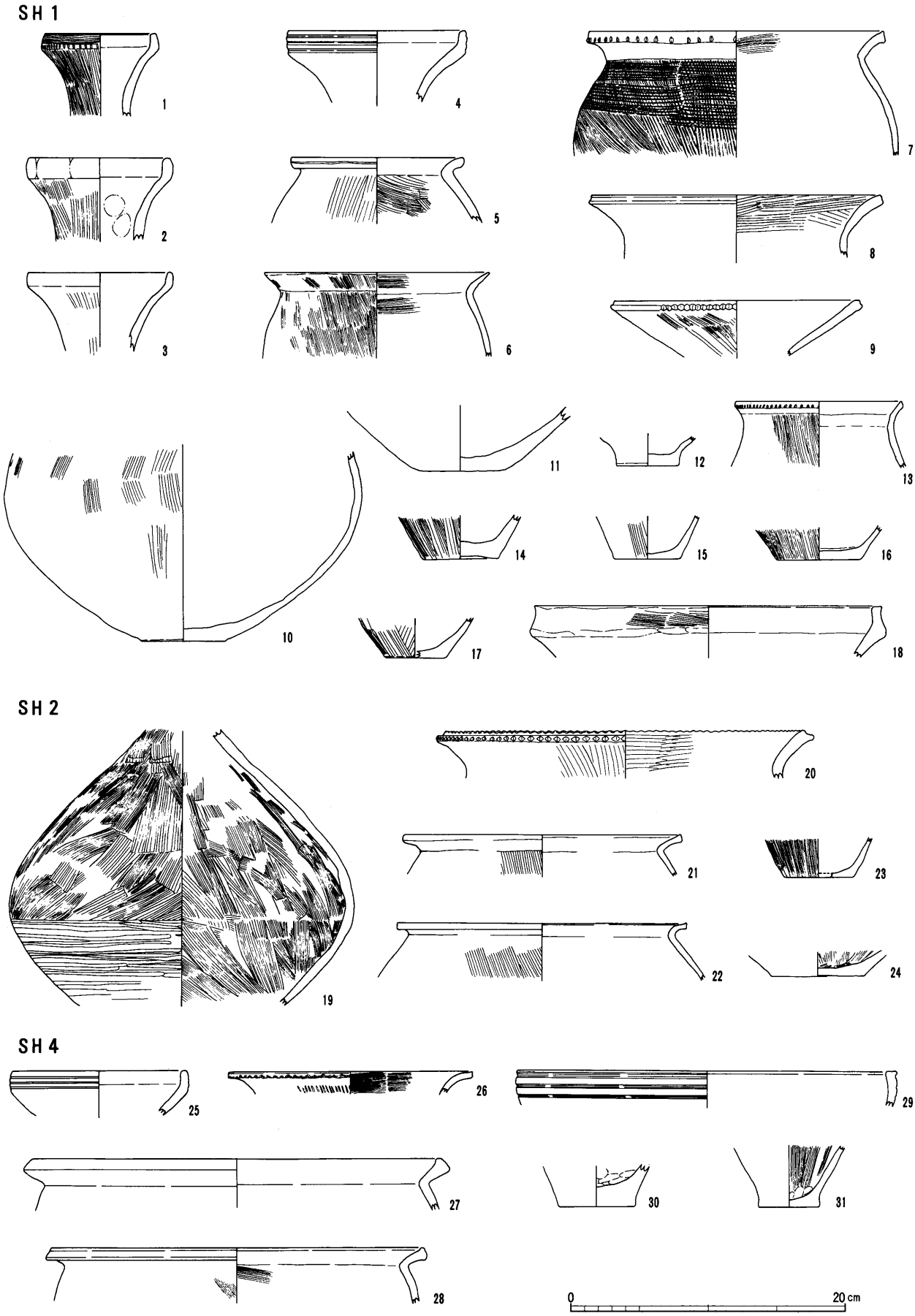
甕底部B　底部が平坦でなく、やや上げ底状になるものを一括する。

甕底部C　台付甕の脚台部である。

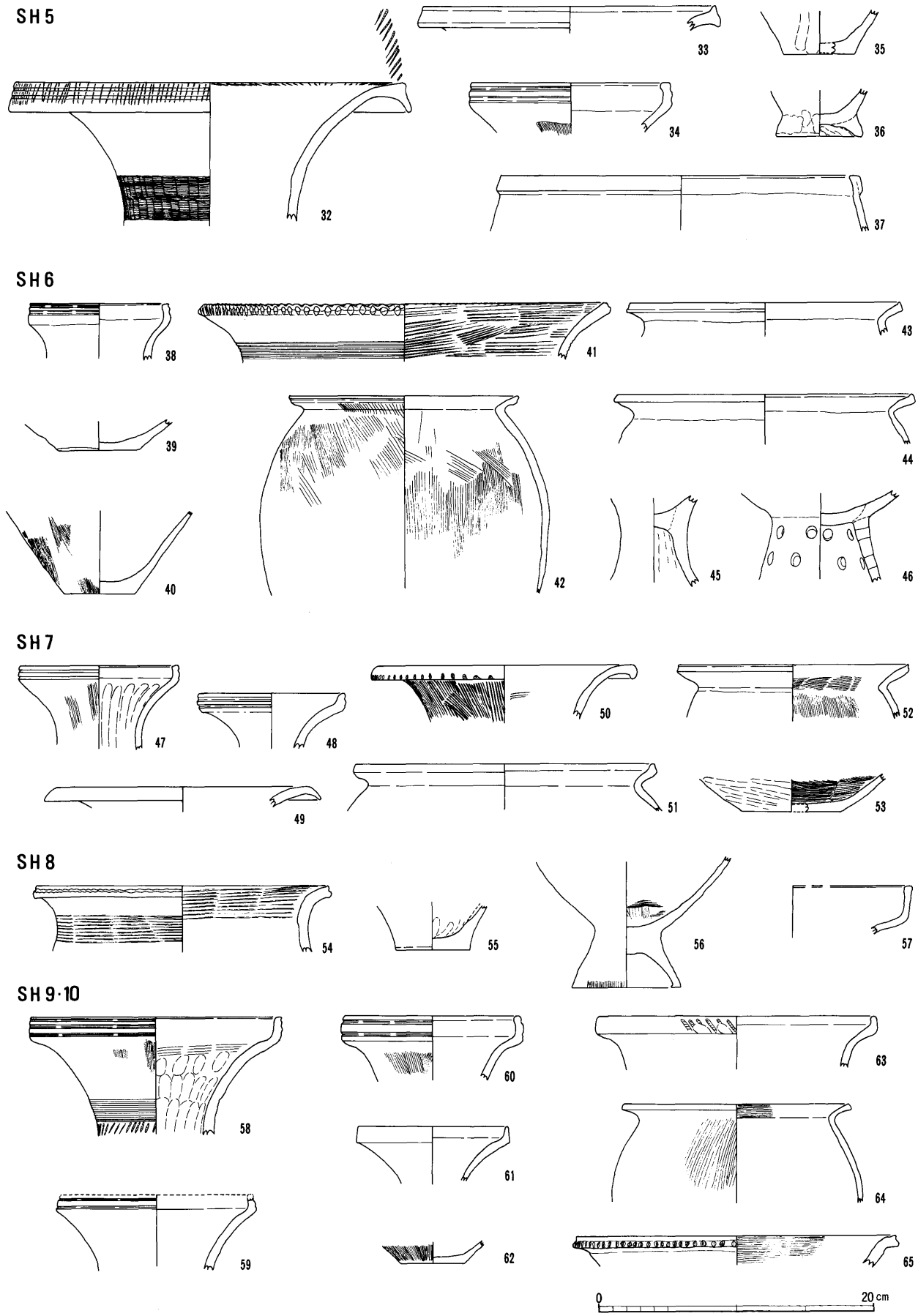
高杯脚A　細く緩やかに弯曲する脚部をもつ。

高杯脚B　太い脚部に多くの円孔を施す。

ＳＨ１　壺A1（４）、A2（１～３）、甕A1（13）、A2（８）、B（７）、E（５・６）、鉢A1（９）、B（18）、壺底部（10・11）、甕底部A（12・15～17）、B（14）が認められる。１～３



第91図　土器実測図１（ＳＨ１～ＳＨ４）（１：４）



第92図　土器実測図２（ＳＨ５～ＳＨ10）（１：４）

には頸部外面にタテハケが施される。4には外面に3条の凹線が施される。口縁端部にかけて直線的に薄くなる甕E類は、6が唯一の出土である。

SH2 壺A1（19）、甕A1（20）、甕D（21・22）、壺底部（24）、甕底部A（23）が出土している。19は口縁部が不明であるが、恐らく受口状で外面に凹線が施されるものと思われる。21・22の甕D類は、SH4出土の甕B類と形状は似るが、器壁が薄いこと、口縁端部の肥厚の度合いが低いことが相違点として指摘しうる。24は底部から体部が緩やかに開く角度から壺の底部と判断した。

SH4 壺A1（25）、甕B（27・28）、D（26）高杯（29）、甕底部A（30・31）が出土している。25は外面に3条の凹線を施す。26は口縁端部下端に刻み目を施す。頸部が不明であり、器壁が口縁端部で肥厚しないため甕D類に分類したが、調整等は甕A1類に共通する。甕底部は底の厚いもの（30）と薄いもの（31）の2者がある。

SH5 壺A1（34）、B（32）、C（33）、鉢C（37）、甕底部A（35）、B（36）が出土した。32は太い頸部から口縁部が大きく開き、端部は大きく垂下して外面に面を持つ。外面には3条の凹線のあと、櫛状具による刺突文が連続的に施される。内面にも同様の刺突文が見られる。また、頸部には簾状文が施される。34の口縁端部外面には太い凹線が施される。36の甕底部は、やや上げ底気味になる脚台部を粘土の貼付によって作りだしている。37は口縁部で粘土が折り返されて肥厚する。

SH6 壺A1（38）、甕A1（41）、B（42～44）、壺底部（39）、甕底部A（40）、高杯脚A（45）、B（46）が認められる。38の口縁部外面には2条の凹線が施される。頸部はさほど細くならない。41は口縁端部に刻み目、頸部に櫛横線が施される。甕B類に分類したものは、口縁端部外面がやや窪み体部内外面がタテハケ調整されるもの（42）と、口縁端部が上方にややつまみ上げられたような形状のもの（43・44）がある。高杯は、比較的細い脚柱部をもつもの（45）と、太い脚柱部に円孔を多く穿つもの（46）の2者がある。

SH7 壺A1（47・48）、D1（49）、D2（50）、甕B（51）、D（52）、壺底部（53）が出土した。47・48はいずれも口縁部外面に2条の凹線が施されるものである。50の壺口縁部は口縁端部が垂下する点でD類に分類したが、D1類とは調整の点で大きく異なり頸部外面には粗いタテハケが施され、口縁端部には刻み目が認められる。53は、体部への立ち上がり角度と内外面の調整から壺の底部と判断した。

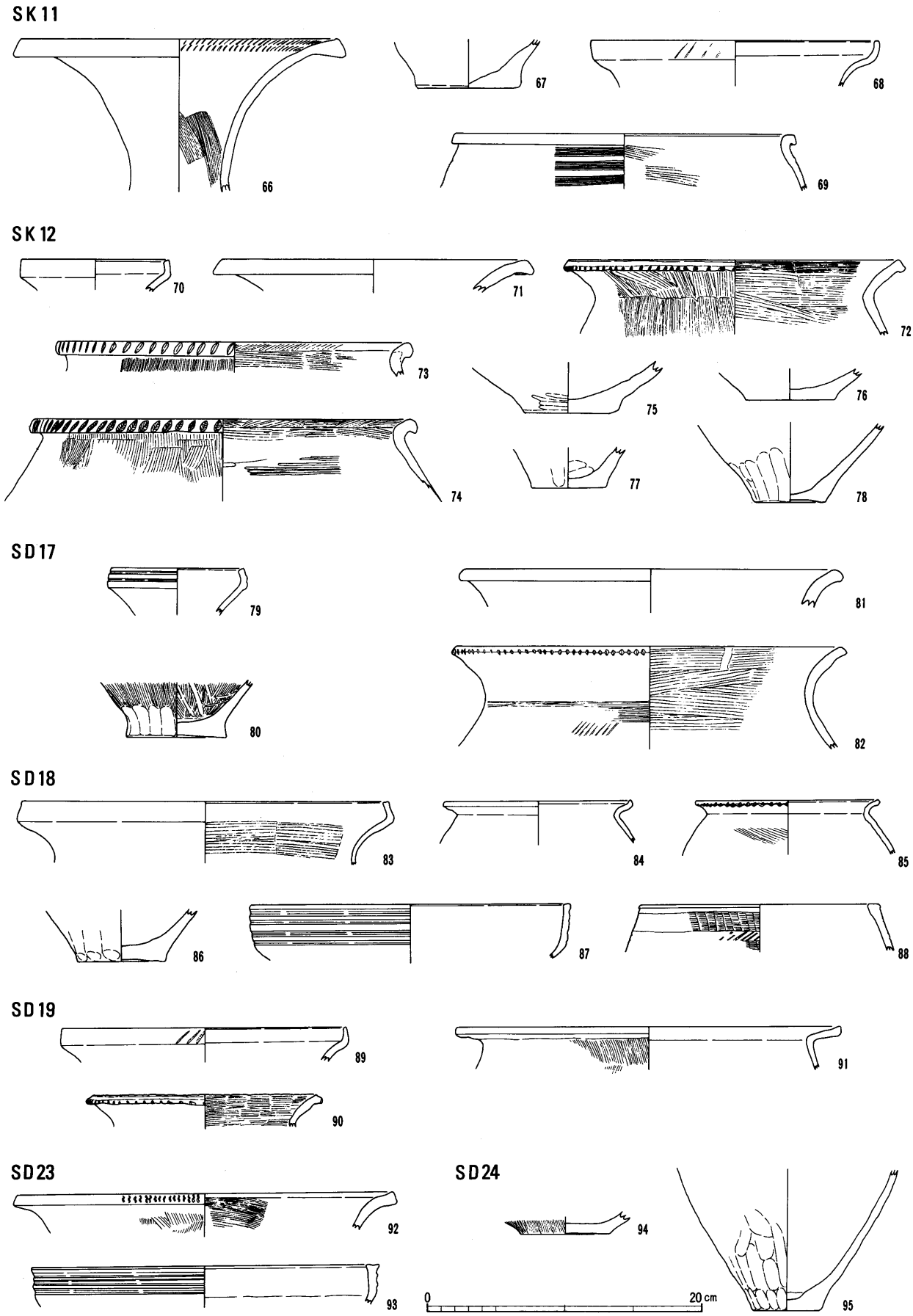
SH8 甕A2（54）、F（57）、甕底部A（55）C（56）が出土している。54は口縁端部外面に波状に凹線が巡る。56は明確な台付甕の形態を示すものとして唯一の資料である。接地面は平坦な面をもつ。57は受口状の甕の口縁部であるが、細片のため口径は不詳である。

SH9・10 建て替えによる2基の竪穴住居の一部重複と考えられるため、当該遺物がいずれの遺構に伴うかは明確でない。よってここでは、両者を一括して報告する。壺A1（58～60）、A2（61）、甕B（64）、F（63）、鉢A2（65）、甕底部A（62）が出土している。58～60の壺の口縁部は、58には3条の、59・60に2条の凹線が施される。63の口縁部外面には櫛状具による連続刺突文が認められる。65の鉢は口縁端部外面に刻み目を施す点で9と共通するが、口縁部が若干外反する。

SK11 壺C（66）、甕F（68）、鉢D（69）、甕底部A（67）が出土している。66は緩やかに口縁部にむかって開き、端部で肥厚する。内面には2段のハケ状具による連続刺突文が施される。69は口縁部が短く外反する。残存部では頸部に穿孔は認められない。

SK12 壺A2（70）、C（71）、甕A1（72）、C（73・74）、壺底部（75・76）、甕底部A（77・78）が認められる。73・74は口縁部が短く外反し、端部に刻み目が施される。残存が僅かなため一応甕として分類したが、大型の鉢の可能性もある。78は僅かに上げ底気味になるが、平底の範疇として認識した。

SD17 壺A1（79）、甕A1（82）、A2（81）甕底部A（80）が出土している。79には口縁部外面に2条の凹線が施される。80の底近くは、タテハケの後に明瞭なユビオサエがみられる。82の口縁端部の刻み目は細かい。



第93図　土器実測図３（ＳＫ11～ＳＤ24）（１：４）

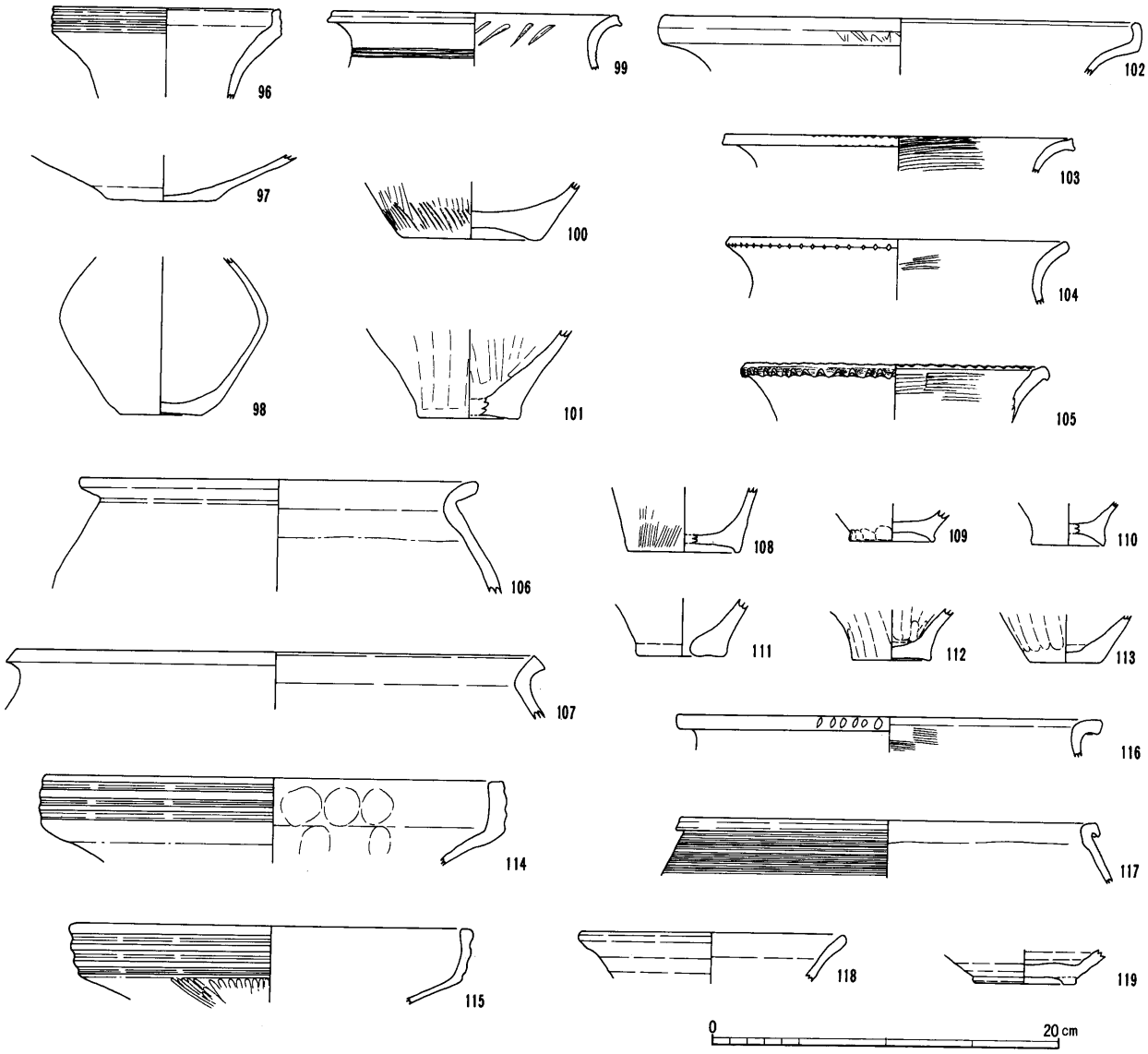
ＳＤ18　甕Ｄ（84・85）、Ｆ（83）、高杯（87）、鉢Ｃ（88）、甕底部Ａ（86）が出土している。84・85は比較的小型の部類に入るものか。87は口縁部外面に４条（２条単位？）の凹線が施される。88の鉢は、内面が肥厚する点で37とは異なる。

ＳＤ19　甕Ａ1（90）、Ｂ（91）、Ｆ（89）が出土している。89は口縁部外面に櫛状具による刺突文を施す。90は小型の範疇に入るもので、口縁端部の刻み目は細かい。91は口縁部が頸部から水平方向に屈曲する。端部が若干肥厚し面をもつ。

ＳＤ23　甕Ａ2（92）、高杯（93）、甕底部Ａ（94・95）が出土している。92の口縁端部外面には、縦方向に短い波状の連続刺突文が施される。93には口縁部外面に３条の凹線が施され、端部はやや窪む面をもつ。甕の底部は94が外面ハケ調整であるのに対し、95には明瞭なユビナデ、ユビオサエが認められる。

包含層　遺物包含層出土遺物に加え、表土及び耕作土出土遺物も一括して報告する。遺物は、壺Ａ1（96）、Ｅ（98）、甕Ａ1（103～105）、Ａ2（99）、Ｂ（106・107）、Ｃ（116）、Ｆ（102）、高杯（114・115）、鉢Ｄ（117）、壺底部（97）、甕底部Ａ（101・111～113）、Ｂ（100・108～110）、山茶椀（118・119）が出土している。98は小型の壺としては唯一の出土であるが、明確な所属時期は不明と言わざるを得ない。11は甕底部として分類したが、焼成前に底部に穿孔される。山茶椀は鎌倉時代前半の所産であろう。

（中村光司）



第94図　土器実測図４（包含層）（１：４）

（2）石器

山籠遺跡からは、竪穴住居跡を中心として若干量の石器が出土している。フレイク・チップ類も存在するが、明確な未製品は認められない。ここでは、それらを遺構別に概観することとする。[16]

ＳＨ１出土石器（120・121）

120は輝緑片岩製で、厚みやカーブといった刃部形態から、石庖丁と判断される破片である。121は輝緑岩製の磨製石器であるが、小破片のため器種の特定は困難である。

ＳＨ２出土石器（122～126）

製品としては、石鏃３点(122～124)・扁平片刃石斧１点(125)・太型蛤刃石斧１点(126)があり、その他、径２㎝以下のサヌカイト[17]製フレイク３点、長径４㎝の絹雲母片岩製のフレイク１点が存在する。

石鏃はいずれも打製のサヌカイト製で、それぞれが形態を異にしている。122は有茎式で、全長が5.2㎝と細長く、側縁が内湾するもので、伊勢湾沿岸に特徴的とされるものである。12は平基式であるがやや大振りな印象を受けるもので、片面は全面を調整するが、もう片面は側縁部のみの調整で自然面を残している。124は小形の凸基式である。

扁平片刃石斧は砂岩製で、基部が欠損していて全長及び全体形は不明であるが、幅は4.6㎝、厚さ0.6㎝で、右側縁に面をもつが、左側縁はもたない。

太型蛤刃石斧は輝緑岩製で、基部がかなり欠損していて全体形は不明である。刃部は残存していることからそれをもとに基部の厚さを復元すると、４㎝程度になるものと思われる。

ＳＨ３出土石器（127～129）

製品としては石鏃１点（127)が存在するのみであるが、これ以外に二次加工有剝片２点(128・129)と径２㎝以下のサヌカイト製のフレイク・チップ類２点が存在する。

石鏃は、鏃身のうち先端と基部を欠損しており全体形は不明であるが、残存した身部からは細身で細長い形態であったことを窺わせており、ＳＨ２出土の 122と同様の形態であったものと思われる。

二次加工有剝片のうち、128は、一応両側縁に打撃を加えており、あるいは錐を作ろうとしたものであるのかもしれない。129 は片面の一側縁のみに打撃を加えたものである。

ＳＨ４出土石器

製品はなく、サヌカイト製のフレイク・チップ（径２㎝以上２点・以下５点）と輝緑片岩の小破片２点が存在するのみである。

ＳＨ５出土石器

製品として、石鏃１点（130)・石庖丁１点（131)大形石庖丁１点（133)があり、これ以外にスクレイパーの可能性もある二次加工有剝片１点（132)と台石の可能性のある棒状の石（134)、径２㎝以上のフレイク２点が存在する。

石鏃は、サヌカイト製で有茎式のものであるが、122とは異なり平面形は平らで、大きさも小振りである。

石庖丁は小破片のため細かい内容は不明であるが、石材は輝緑片岩製である。

大形石庖丁は絹雲母片岩製で、刃部が外湾し、背部中央に抉りを入れたような形態を呈し、池上遺跡分類[18]の「Ａ－３タイプ」に類似する。

二次加工有剝片は、小さな二等辺三角形で、一応側縁部を二次加工している。このうち最も丁寧な加工は二等辺三角形の底辺に当たる辺で、両側から加工を加えている。小さなスクレイパーである可能性も捨て切れない。

棒状石は、棒状の川原石様の石である。自然石とも思われるが、山籠遺跡は丘陵部の遺跡であることを考慮した場合、こういった石は基本的には持ち込まれたものと思われる。そうした場合、なんらかの台石としての用途があった可能性がある。

ＳＨ６出土石器（135～137）

製品として、石鏃２点(135・136)・砥石１点(137)があり、その他、サヌカイト製のフレイク・チップが３点（径２㎝程度）がある。

石鏃は、いずれもサヌカイト製の平基式で、側縁加工を施したものである。135 は基部が外開きになる形態で、136 は平面形が二等辺三角形のやや凹基気味のものである。

砥石は、狭い面を擦面としたものである。

ＳＨ７出土石器（138～140）

製品として、石鏃１点（138)・石剣１点（139)・

砥石１点（140)があり、その他、サヌカイト製のフレイク・チップ３点（２cm以上１点・以下２点）・安山岩質のフレイク２点（２cm以上）・赤色チャート製の小石核１点（長径3.2cm）とフレイク１点が存在する。

石鏃は、サヌカイト製の凸基式のもので、鏃身が径2.2 cmと小形で、狩猟用のものと思われる。

石剣は、サヌカイト製の打製のもので、両端部は欠損している。断面菱形で、刃潰しは認められず、尖頭部のように幅を先細りしてもいないことから、比較的基部に近い部分であろう。

砥石は、平面・断面ともに長方形を呈する。石材は、ＳＨ６出土の 137と比べても極めてキメの粗い風化したような砂岩で、荒磨きに使用したものと推定される。一部凹んだ部分があるが、当時のものかどうかは不明である。

ＳＨ８出土石器（141）

器種不明の磨製石器の剝片断片が出土したのみである。材質は粘板岩製である。

ＳＫ12出土石器　（142・143）

製品として、石鏃１点（142)と石庖丁１点（143)があって、その他、長径３cmの凝灰質砂岩のフレイク１点が存在する。

石鏃は、サヌカイト製の打製のもので、基部を欠損するが全体に細長く丁寧な作りである。そのまま凸基式の基部となるか、ＳＨ２出土の122のようにもう一度膨らんで有茎式になるか、のどちらかの基部形態をとるものであろう。

石庖丁は絹雲母片岩製で、当初は背部であった部分も刃部として使用したため最終的に平面が三角形状となったもので、刃部は内湾している。最終使用時に刃部であった辺は、内湾部の最も奥、すなわち凹部中央のみが刃部となっており、その他の側縁部は丸く鈍いものになっている。

ＳＫ22出土石器（144）

小形の凸基式の石鏃の可能性もあるが、先端部の稜線が磨滅し、断面もやや厚手であることから、石錐の可能性が高いものと思われる。

Ｍ２～Ｍ３剝片集中区出土石器（145）

包含層および遺構検出時に遺構外から出土した遺物で取り上げられたものはさほど多くないが、大型の製品が目立つ包含層出土遺物にあって、この地区のみは剝片類の出土が目立った。埋土フルイ掛けも行っておらず、石器製作に関わるかどうかなどは資料が僅少すぎて判断できないが、今後の類例に注意を喚起する意味もこめて、いわゆる包含層とは独立して扱う。

図示しうるものとしてはサヌカイト製の二次加工有剝片１点（145)があるのみである。主に主要剝離面側のみに調整を加えている。

これ以外には、サヌカイト製のフレイク・チップ３点（２cm以上１点・以下２点）・チャート製剝片２点（うち大きい方が長径4.4cmの赤色チャート）輝緑片岩小片１点がある。

包含層出土石器　（146～150）

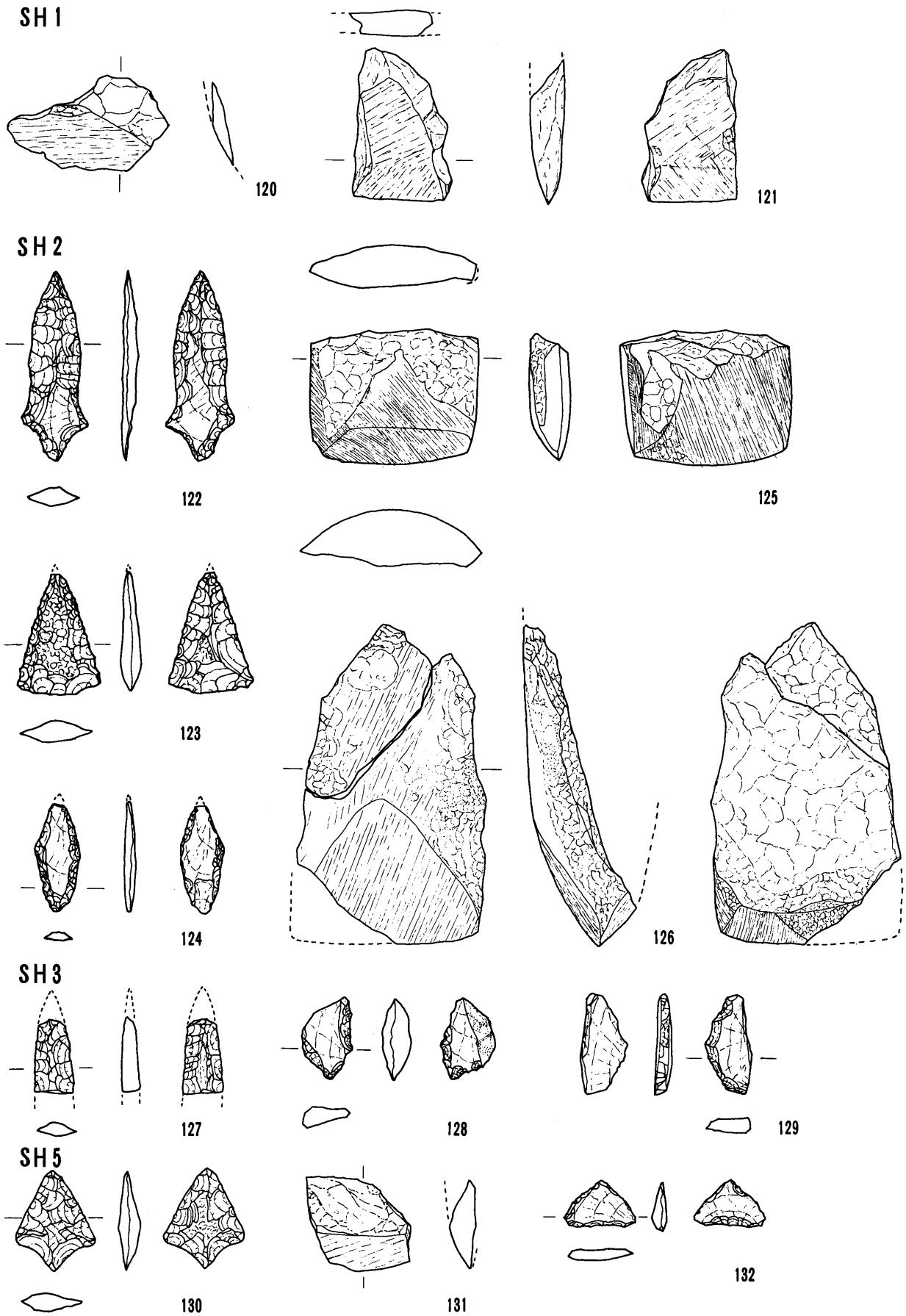
製品としては、太型蛤刃石斧３点（146～148）・石鏃１点（149）・扁平片刃石斧１点（150)があり、この他、サヌカイト製のフレイク２点（ともに径２cm以上）が存在する。

太型蛤刃石斧は、いずれも使用石材が異なっており、146が砂岩製、147が輝岩製、148が凝灰角礫岩製である。いずれも欠損しているが、比較的刃部の残りの良い148は幅6.1cmである。

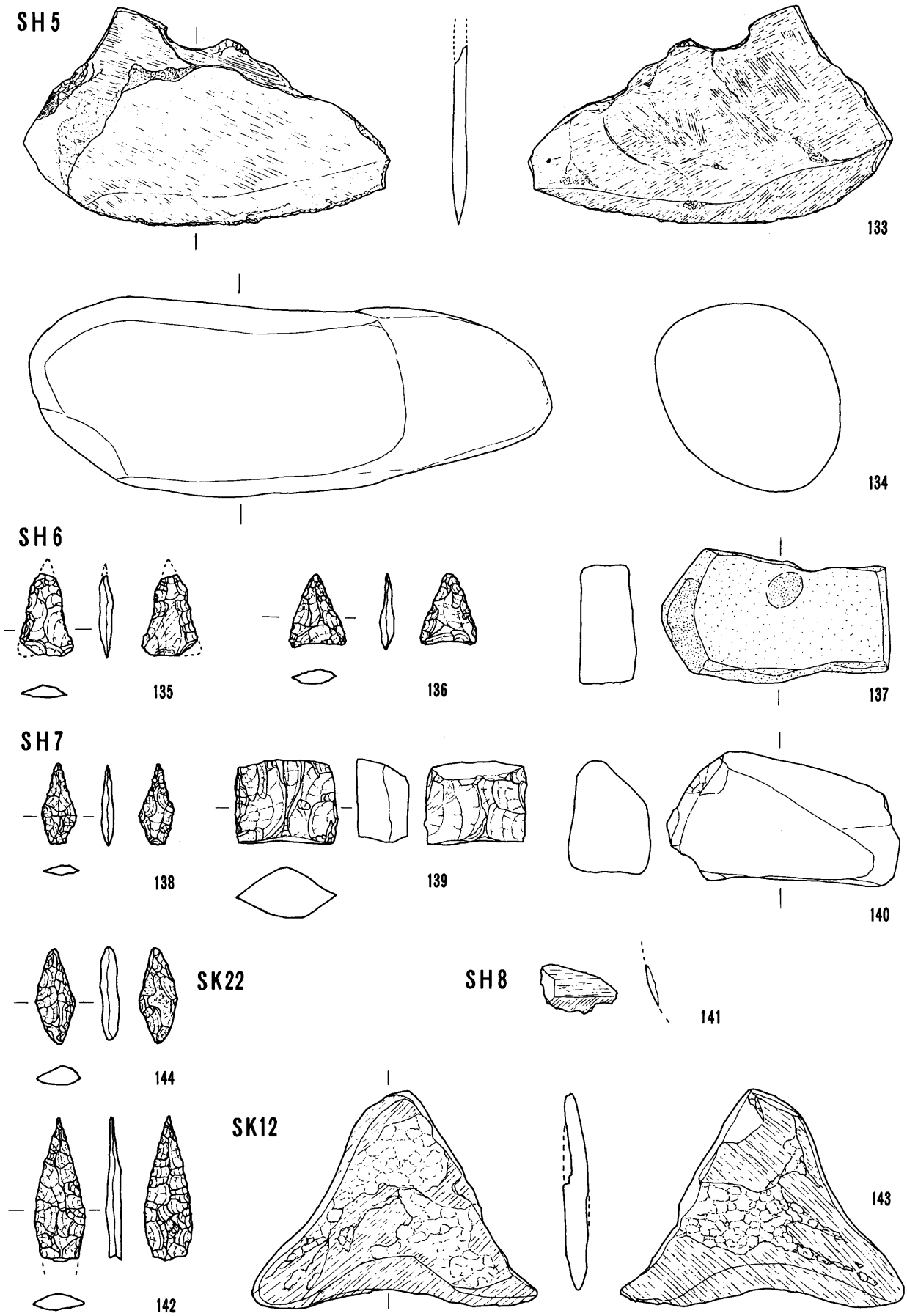
石鏃は、サヌカイト製の打製で、平基式で小形のものである。側縁調整のみの粗い作りで、一応石鏃としての機能はあるものと思われるが、片側側縁部の調整が不十分で、未製品もしくは製作途中での失敗品の可能性も残るものである。

扁平片刃石斧は、プロピライト製で、平面形は基部よりも刃部の幅が広い台形状を呈する。刃部は向かって右に行くに従って減っており、使用に際しての力がより右方向へ流れたものと思われる。

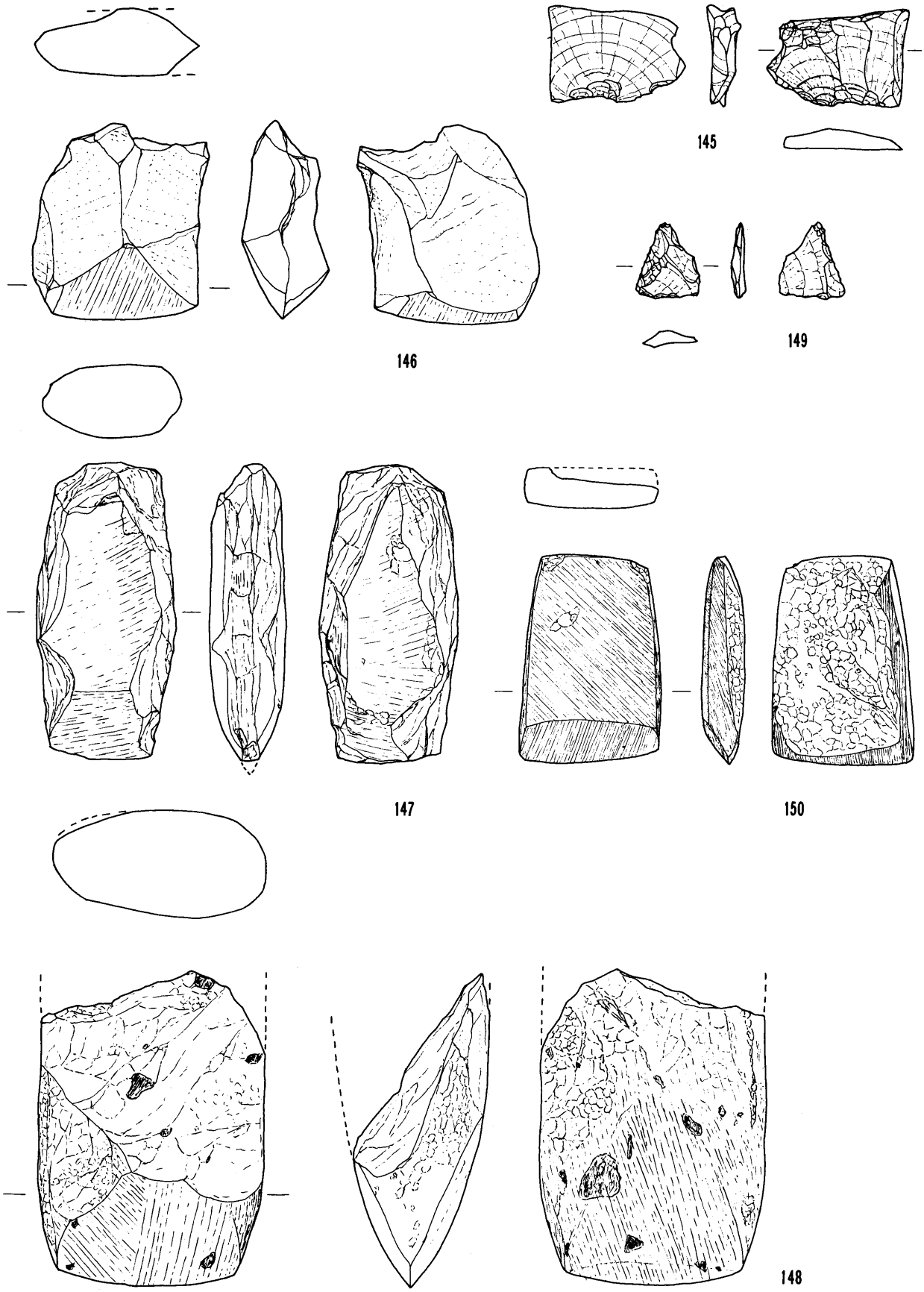
（穂積裕昌）



第95図　石器実測図１（ＳＨ１～ＳＨ５）（２：３）



第96図　石器実測図２（ＳＨ５～ＳＫ22）（２：３、133，134，137，140は１：３）



第97図　石器実測図３（包含層）（２：３）

図版番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)［推定値］	調製技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
1	007－04	ＳＨ1	壺Ａ2	口径［ 8.0］	屈曲部に刻目。頸部タテハケ（単位不明）	——	橙 7.5YR7／6	並（～２㎜の石英・長石多含）	口縁～頸部 1／5	内外面剝離
2	035－04	〃	壺Ａ2	口径［10.1］	——	外：頸部タテハケ 内：ナデ	橙 7.5YR7／6	密	口縁～頸部 1／3	内外面剝離 激しい
3	034－01	〃	壺Ａ1	口径［10.4］	——	外：頸部タテハケ	橙 7.5YR7／6	密	口縁～頸部 1／4	内外面剝離 激しい
4	035－06	〃	壺Ａ1	口径［12.6］	外面に３条の凹線	——	にぶい褐 7.5YR5／4	並（～1㎜の長石含）	口縁～頸部 1／5	
5	034－04	〃	甕Ｅ	口径［12.4］	内外：ヨコナデ	——	にぶい黄橙 10YR6／4	並（～２㎜の石英・長石含）	口頸部 1／8	
6	007－02	〃	甕Ｅ	口径［16.4］	外：タテハケ 内：ナデ	外：タテハケ（単位不明8本／cm）内：ナデ	浅黄橙 10YR8／4	並（～1㎜の石英・長石含）	口頸部 1／2	内外面剝離 激しい
7	006－01	〃	甕Ｂ	口径［21.4］	外：端部に刻み目 内：ナデ	外：タテハケ後ヨコハケ	浅黄橙 10YR8／4	並（～1㎜の石英・長石含）	口縁～体上部 1／3	内面剝離 激しい
8	035－01	〃	甕Ａ2	口径［21.0］	外：ナデ 内：粗いヨコハケ	——	橙 7.5YR6／6	並（～3㎜の石英・長石多含）	口　縁 1／4	外面剝離
9	035－02	〃	鉢Ａ1	口径［17.8］	外：端部に刻み目。直下にハケ8本／。内：ナデ	——	にぶい黄橙 10YR7／4	並（～２㎜の長石含）	口　縁 1／2	
10	006－03	〃	壺底部	底径　6.0	——	外：上部にハケ（3～4本／cm）内：ナデ	浅黄橙 10YR8／4	並（～3㎜の石英・長石少含）	体部～底部 1／2	内外面剝離 激しい
11	034－03	〃	壺底部	底径　6.0	——	内：底部にユビオサエ	黄橙 10YR8／6	並（～1㎜の石英・長石少含）	底部完存	内外面剝離 激しい
12	006－05	〃	甕底部Ａ	底径　4.6	——	内：底部にナデ	淡黄 2.5Y8／3	並（～1㎜の石英・長石少含）	底部完存	内外面剝離 激しい
13	007－01	〃	甕Ａ1	口径［12.0］	外：端部に刻み目 内：ナデ	外：タテハケ 内：ナデ	橙 5YR8／3	密	口縁 1／8	
14	006－02	〃	甕底部Ｂ	底径　5.5	——	外：粗いタテハケ（3～4本／cm）内：ユビオサエ	にぶい黄橙 10YR7／2	やや粗（～5㎜の石英・長石多含	底部完存	
15	006－04	〃	甕底部Ａ	底径　4.8	——	外：タテハケ。焼成後に底部穿孔。	にぶい黄橙 10YR7／4	やや粗（～5㎜の石英・長石多含	底部完存	内外面剝離 激しい
16	007－05	〃	甕底部Ａ	底径　6.0	——	外：タテハケ	にぶい黄橙 10YR6／4	やや粗（～5㎜の石英・長石多含	底部 ほぼ完存	内外面剝離 激しい
17	034－02	〃	甕底部Ａ	底径［ 4.2］	——	外：タテハケ（7～8本／cm）	橙 7.5YR6／6	密	底部 1／2	内外面剝離 激しい
18	007－06	〃	鉢Ｂ	底径［25.4］	外：ヨコハケ 内：ヨコナデ	——	浅黄橙 10YR8／4	並（～2㎜の石英・長石含）	口　縁 1／10	内外面剝離 激しい
19	036－02	ＳＨ2	壺Ａ1	体部最大径 25.0	——	外：ナナメハケ、ミガキ 内：タテ・ナナメハケ	にぶい黄橙 10YR7／4	並（～3㎜の石英・長石含）	体　部 1／2	
20	008－03	〃	甕Ａ1	口径［26.0］	外：ヨコハケ 内：ヨコナデ	——	にぶい黄橙 10YR7／3	やや粗（～4㎜ 石英・長石多含	口　縁 1／10	
21	008－01	〃	甕Ｄ	口径［20.0］	内外：ヨコナデ	——	にぶい黄橙 10YR7／4	やや密（～1㎜ 石英・長石多含	口頸部 1／4	
22	008－02	〃	甕Ｄ	口径［21.0］	内外：ヨコナデ	外：ナナメハケ（6～7本／cm）内：ナデ	橙 5YR6／6	やや密（～1㎜ 石英長石雲母含	口　頸 1／8	
23	008－05	〃	甕底部Ａ	底径［ 5.0］	——	外：細かいタテハケ 内：ナデ・ユビオサエ	浅黄橙 10YR8／3	やや密（～1㎜ 石英長石雲母含	底　部 1／3	
24	008－04	〃	壺底部	底径［ 6.8］	——	外：ナデ 内：粗いハケ	浅黄橙 10YR8／3	密	底　部 1／3	
25	010－06	ＳＨ4 南東主柱穴	壺Ａ1	口径［13.0］	内外：ヨコナデ	——	にぶい橙 7.5YR7／4	緻密	口　縁 1／10	
26	010－07	ＳＨ4	甕Ｄ	口径［17.8］	外：端部に刻目、タテハケ 内：ヨコハケ	——	にぶい黄橙 10YR6／4	緻密	口　縁 1／10	
27	010－04	〃	甕Ｂ	口径［29.0］	内外：ナデ	——	橙 5YR7／6	緻密	口　縁 1／10	内面剝離 激しい
28	010－05	〃	甕Ｂ	口径［27.0］	内外：ナデ	——	橙 7.5YR7／6	緻密	口　縁 1／10	内外面剝離 激しい
29	010－01	〃	高杯	口径［27.4］	外：3条の凹線 内：ヨコナデ	——	灰褐 7.5YR4／2	やや粗（～3㎜ 石英・長石含）	口　縁 1／10	
30	010－02	〃	甕底部Ａ	底径　5.6	——	外：ナデ 内：ユビオサエ	浅黄橙 7.5YR8／6	密	底　部 完　存	
31	010－03	〃	甕底部Ａ	底径［ 4.4］	——	外：ナデ 内：タテハケ	橙 2.5YR6／6	密（～2㎜の長石含）	底　部 1／2	内外面剝離
32	037－02	ＳＨ5	壺Ｂ	口径　26.8	外：3条の凹線のちハケ連続刺突。内：ハケ連続刺突	外：頸部に簾状文。内：頸部にナデ、ユビオサエ	橙 2.5YR6／8	密（～4㎜の長石含）	口　頸 2／3	
33	011－08	〃	壺Ｃ	口径［21.6］	内外：ヨコナデ	——	橙 2.5YR6／8	緻密	口縁部 破　片	
34	012－01	〃	壺Ａ1	口径［14.4］	外：二条の太い凹線 内：ヨコナデ	外：頸部にかけタテハケ	にぶい褐 7.5YR5／3	緻密	口　縁 1／8	
35	011－05	〃	甕底部Ａ	底径［ 5.2］	——	——	橙 5YR6／6	密	底　部 1／3	内外面剝離 激しい
36	011－01	〃	甕底部Ｂ	底径［ 6.1］	——	内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR6／4	並	底部 1／2	内外面剝離
37	011－07	〃	鉢Ｃ	底径［26.0］	内外：ナデ	——	にぶい黄橙 10YR7／4	密	口　縁 破　片	内外面剝離
38	013－01	ＳＨ6	壺Ａ1	口径［10.0］	外：二条の凹線 内：ナデ	——	にぶい橙 7.5YR6／4	密（～1㎜の石英・長石含）	口　縁 1／10	
39	013－02	〃	壺底部	底径［ 6.0］	——	——	橙 7.5YR7／6	やや祖（～3㎜ 石英・長石多含	底　部 1／2	内外面剝離 激しい
40	035－05	〃	甕底部Ａ	底径　4.9	——	外：タテ方向ハケメ（単位不明）内：ナデ	にぶい橙 7.5YR7／4	密	底　部 完　存	内外面剝離 激しい

第17表　土器観察表１

図版番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)［推定値］	調製技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
41	013－06	ＳＨ6	甕Ａ1	口径［29.2］	外：端部に刻み目 内：粗いヨコハケ	外：ハケ状具による横線	にぶい褐 7.5YR5／3	やや粗（～3mm 石英・長石多含	口縁 1／8	
42	035－03	〃	甕Ｂ	口径［16.4］	外：体部に連続するヨコハケ　内：粗いヨコハケ	外：上半タテハケ 内：タテハケ	明黄褐 10YR7／6	密	口縁～体部 1／4	
43	013－07	〃	甕Ｂ	口径［19.6］	内外：ヨコナデ	——	橙 5YR7／8	密	口縁 1／8	
44	013－04	〃	甕Ｂ	口径［21.4］	内外：ヨコナデ	——	にぶい黄橙 10YR7／4	密（～1mmの長石含）	口　縁 1／8	
45	013－05	〃	高杯脚Ａ	——	——	——	浅黄橙 10YR8／4	やや粗（～5mm 石英・長石多含	脚柱部 完　存	内外面剝離激しい
46	013－03	〃	高杯脚Ｂ	——	——	2段に透穴	橙 2.5YR7／8	密	脚　部 2／3	内外面剝離激しい
47	014－05	ＳＨ7	壺Ａ1	口径［11.4］	外：2条の凹線 内：ナデ	外：タテハケ 内：タテ方向ナデ	浅黄橙 7.5YR8／6	密	口　頸 1／4	内外面剝離激しい
48	034－07	〃	壺Ａ1	口径［10.4］	外：2条の凹線 内：ナデ	外：ナデ 内：タテ方向ナデ	黄橙 7.5YR8／8	密	口　頸 1／6	内外面剝離激しい
49	014－01	〃	壺Ｄ1	口径［18.8］	——	——	黄橙 10YR8／6	密	口　縁 破　片	内外面剝離激しい
50	014－02	〃	壺Ｄ2	口径［21.6］	外：端部に刻み目 内：ナデ	外：頸部タテハケ 内：ナデ	橙 7.5YR7／6	密	口頸 1／6	
51	034－06	〃	甕Ｂ	口径［21.6］	内外：ナデ	——	橙 7.5YR7／6	並（～2mmの石英・長石含）	口　頸 1／10	内面剝離
52	014－04	〃	甕Ｄ	口径［16.8］	外：ナデ 内：タテハケ	外：ナデ 内：タテハケ	にぶい黄橙 10YR7／4	緻密	口縁～体部 1／8	
53	014－03	〃	壺底部	底径［ 6.2］	——	外：ナデ 内：ヨコハケ（8本／cm）	橙 5YR7／6	緻密	底　部 1／3	
54	015－01	ＳＨ8	甕Ａ2	口径［21.2］	外：端部に波状凹線内：粗いヨコハケ（3本／cm）	外：ナデ　内：粗いヨコハケ（3本／cm）	橙 7.5YR7／6	並（～2mmの石英・長石含）	口　縁 1／4	
55	015－02	〃	甕底部Ａ	底径［ 5.4］	——	ナデ	淡黄 2.5Y8／3	緻密	底部 破片	内外面剝離激しい
56	032－01	〃	甕底部Ｃ	底径［ 7.4］	——	体部内面：ハケ	橙 5YR7／6	並	体部下半～脚台 完存	内外面剝離激しい
57	015－03	〃	甕Ｆ	——	——	——	灰白 2.5Y8／2	やや粗（～2mm 石英・長石含）	口　縁 破　片	内外面剝離激しい
58	016－05	ＳＨ9・10	壺Ａ1	口径　18.0	外：3条の凹線 内：ヨコナデ	外：頸部ハケ横線連続刺突 内：タテ方向ナデ	にぶい黄橙 10YR7／2	密	口頸部 ほぼ完存	
59	016－01	〃	壺Ａ1	口径［14.0］	外：2条の凹線	——	橙 7.5YR7／6	密	口　縁 1／3	内外面剝離激しい
60	018－02	〃	壺Ａ1	口径［12.6］	外：2条の凹線 内：ヨコナデ	外：頸部にかけタテハケ 内：タテ方向ナデ	橙 5YR7／6	緻密	口　縁 1／6	
61	017－02	〃	壺Ａ2	口径［10.8］	——	——	にぶい黄橙 10YR7／4	やや粗（～2mm 石英・長石多含	口　縁 破　片	内外面剝離激しい
62	016－04	〃	甕底部Ａ	底径［ 4.1］	——	外：タテハケ 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR7／4	やや粗（～2mm 石英・長石多含	底　部 完　存	
63	018－01	〃	甕Ｆ	口径［20.0］	外：ハケ状具による連続刺突文	——	褐灰 10YR4／1	粗（～3mmの石英・長石多含）	口　縁 1／8	内外面剝離激しい
64	016－02	〃	甕Ｂ	口径［16.2］	外：ナデ 内：ヨコハケ	外：粗いタテハケ（4本／cm）内：ナデ	にぶい黄橙 10YR7／4	並（～2mmの石英・長石含）	口縁～体部 1／8	
65	016－03	〃	鉢Ａ2	口径［23.2］	外：端部に刻み目 内：粗いヨコナデ	——	にぶい橙 7.5YR7／4	並（～2mmの石英・長石含）	口　縁 1／10	
66	019－01	ＳＫ11	壺Ｃ	口径［22.8］	内：2段のハケ、連続刺突文	内：頸部にナナメハケ	橙 7.5YR6／6	並（～2mmの石英・長石含）	口　頸 1／5	
67	022－01	〃	甕底部Ａ	底径［ 7.4］	——	内外：ナデ	橙 5YR6／8	並（～4mmの石英・長石含）	底　部 完　存	外面に黒斑有
68	019－02	〃	甕Ｆ	口径［20.8］	——	——	淡黄 2.5Y8／3	やや粗（～2mm 石英・長石多含	口縁 破　片	内外面剝離激しい
69	019－03	〃	鉢Ｄ	口径［24.6］	内外：ヨコナデ	外：ハケ状具による横線3本	にぶい橙 7.5YR7／4	密	口　縁 破片	
70	020－09	ＳＫ12	壺Ａ2	口径［10.6］	内外：ヨコナデ	——	にぶい橙 7.5YR6／4	並（～2mmの石英・長石含）	口　縁 破　片	
71	021－01	〃	壺Ｃ	口径［22.0］	——	——	浅黄橙 10YR8／4	密	口　縁 破　片	
72	020－05	〃	甕Ａ1	口径［24.0］	外：端部刻み目、タテナナメハケ　内：粗いヨコハケ	外：タテハケ内：頸部ヨコハケ、以下ユビオサエ	橙 2.5YR6／8	並（～2mmの石英・長石含）	口　頸 1／5	
73	020－02	〃	甕Ｃ	口径［25.6］	外：端部に刻み目 内：ナナメハケ	外：端部タテハケ 内：ヨコハケ	褐灰 7.5YR5／1	並（～2mmの石英・長石含）	口　頸 1／8	
74	036－01	〃	甕Ｃ	口径［27.4］	外：端部に刻み目 内：ヨコハケ、ナナメハケ	外：タテハケ 内：ヨコハケ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7／4	並（～2mmの石英・長石含）	口縁～体部 1／4	
75	020－01	〃	壺底部	底径　6.4	——	——	にぶい黄橙 10YR7／4	やや密（～1mm 石英・長石含）	底　部 完存	内外面剝離激しい
76	020－08	〃	壺底部	底径　6.4	——	——	にぶい黄橙 10YR6／4	粗（～4mmの石英・長石多含）	底　部 完　存	内外面剝離激しい
77	020－07	〃	甕底部Ａ	底径［ 5.6］	——	内外：ナデ	淡黄 2.5Y8／3	密	底　部 1／2	
78	020－06	〃	甕底部Ａ	底径［ 5.3］	——	内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR7／3	並（～3mmの石英・長石含）	体部下半～底部 1／2	
79	025－01	ＳＤ17	壺Ａ1	口径［ 9.6］	外：2条の凹線	——	浅黄橙 10YR8／3	やや密	口　縁 破　片	
80	025－03	〃	甕底部Ａ	底径　7.2	——	外：ハケ、タテ方向ナデ 内：ハケ、ヘラ調整	橙 5YR7／8	密	底　部 完　存	外面に黒斑有

第18表　土器観察表 2

図版番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量(cm)［推定値］	調製技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
81	025－02	ＳＤ17	甕Ａ2	口径［26.8］	内外：ナデ	——	橙 7.5YR7／6	並（～3mmの石英・長石含）	口　縁 破　片	内外面剝離
82	025－04	〃	甕Ａ1	口径［28.0］	外：端部に刻み目　内：粗いヨコハケ（3本／cm）	外：頸部にハケ横線内：粗いヨコハケ、以下ナデ	にぶい橙 7.5YR7／4	並（～3mmの石英・長石含）	口　縁 1／5	
83	023－01	ＳＤ18	甕Ｆ	口径［26.4］	——	——	浅黄橙 10YR8／4	やや粗（～2mm石英・長石多含	口　縁 1／4	内外面剝離激しい
84	026－02	〃	甕Ｄ	口径［13.4］	内外：ヨコナデ	——	橙 5YR7／8	密	口　縁 破　片	
85	026－01	〃	甕Ｄ	口径［13.2］	外：端部に刻み目	外：ナナメハケ	にぶい橙 7.5YR7／4	やや密（～1mm石英長石雲母含	口　頸 1／8	内面剝離激しい
86	023－02	〃	甕底部Ａ	底径［ 6.2］	——	外：ハケ、タテ方向ナデ 内：ナデ、ユビオサエ	橙 5YR7／6	密	底　部 1／2	
87	026－03	〃	高杯	口径［23.0］	外：4状の凹線	——	浅黄橙 10YR8／3	密	口　縁 1／5	
88	023－03	〃	鉢Ｃ	口径［17.2］	内外：ヨコナデ	外：ハケによる簾状文と斜刺突文	橙 5YR7／8	密	口　縁 破　片	
89	009－01	ＳＤ19	甕Ａ1	口径［20.6］	外：ハケ刺突連続文	——	淡黄 2.5Y8／3	並	口　縁 破　片	
90	009－03	〃	甕Ｂ	口径［17.0］	外：端部に刻み目　内：粗いヨコハケ（3本／cm）	——	にぶい橙 7.5YR6／4	並	口　縁 1／8	
91	009－04	〃	甕Ｂ	口径［27.8］	内外：ヨコナデ	外：タテハケ（7本／cm）	黄橙 7.5YR7／8	緻密	口　縁 1／8	
92	026－04	ＳＤ23	甕Ａ2	口径［27.2］	内外：ヨコナデ	外：タテハケ　内：ヨコ・ナナメハケ（8本／cm）	にぶい黄橙 10YR7／2	緻密	口　縁 1／10	
93	022－04	〃	高杯	口径［25.2］	外：3状の凹線	——	橙 7.5YR6／6	密	口　縁 破　片	
94	022－02	ＳＤ24	甕底部Ａ	底径［ 6.4］	——	外：タテハケ 内：ナデ、オサエ	浅黄橙 7.5YR8／6	密	底　部 1／2	
95	024－01	〃	甕底部Ａ	底径［ 4.6］	——	外：ナデ	にぶい黄橙 10YR7／4	やや粗（～3mm石英・長石含）	体部下半～底部 完　存	内外面剝離
96	031－02	包含層	壺Ａ1	口径［12.9］	外：3状の凹線	——	にぶい橙 7.5YR6／4	密	口　頸 1／4	
97	033－05	〃	壺底部	底径　6.2	——	——	浅黄橙 10YR8／3	並（～3mmの石英・長石含）	底　部 完　存	
98	031－05	〃	壺Ｅ	底径　4.5	——	内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR7／3	やや密	体部1／2 底部完存	内面剝離激しい
99	033－01	〃	甕Ａ2	口径［16.4］	内外：ヨコナデ 内：爪型刺突文	外：頸部にハケ横線	にぶい橙 7.5YR7／4	並	口　縁 1／4	
100	033－02	〃	甕底部Ｂ	底径［ 8.0］	——	外：粗いタテハケ	浅黄橙 10YR8／3	密	底　部 1／2	
101	027－05	〃	甕底部Ａ	底径［ 5.6］	——	——	黄橙 7.5YR7／8	やや密	底　部 1／3	内外面剝離
102	033－06	〃	甕Ｆ	口径［28.0］	外：端部に波状文（？）	——	灰黄褐 10YR6／2	粗（～3mmの石英・長石多含）	口　縁内 1／5	外面剝離激しい
103	027－08	〃	甕Ａ1	口径［20.0］	外：端部上下に刻み目 内：粗いヨコハケ		灰黄褐 10YR6／2	並	口　縁 破　片	
104	029－02	〃	甕Ａ1	口径［19.4］	外：端部に刻み目 内：ヨコハケ	——	にぶい黄橙 10YR7／4	並	口　縁 破　片	
105	032－05	〃	甕Ａ1	口径［17.2］	外：端部に刻み目 内：ヨコハケ（5本／cm）	——	浅黄橙 10YR8／4	やや密	口　縁 1／8	
106	031－03	〃	甕Ｂ	口径［22.4］	内外：ナデ	内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR7／3	並	口縁～体部上半 1／5	
107	031－01	〃	甕Ｂ	口径［29.8］	内外：ヨコナデ	——	橙 5YR7／8	密	口　頸 1／8	
108	027－06	〃	甕底部Ｂ	底径［ 6.4］	——	内外：ナデ	にぶい褐 7.5YR6／3	やや密	底　部 1／2	
109	027－01	〃	甕底部Ｂ	底径　4.4	——	内外：ナデ	橙 2.5YR7／8	並（～3mmの石英・長石含）	底　部 完　存	
110	027－03	〃	甕底部Ｂ	底径［ 4.2］	——	内外：ナデ	橙 2.5YR6／8	並（～3mmの石英・長石含）	底　部 1／2	
111	031－04	〃	甕底部Ａ	底径　4.9	——	内外：ナデ 焼成前に底部に穿孔	浅黄橙 10YR8／4	やや密	底　部 完　存	
112	027－04	〃	甕底部Ａ	底径　4.4	——	内外：タテ方向ナデ	黄橙 7.5YR7／8	密	底　部 完　存	
113	027－02	〃	甕底部Ａ	底径　4.2	——	外：ナデ 内：タテ方向ナデ	橙 5YR7／6	密	底　部 完　存	
114	032－04	〃	高杯	口径［26.2］	外：3条の太い凹線 内：ナデ、ユビオサエ	——	浅黄橙 7.5YR8／4	密	口　縁 1／8	
115	032－03	〃	高杯	口径［22.8］	外：3条の太い凹線 内：ナデ	外：タテ方向ミガキ	黒褐 10YR3／1	やや密	口　縁 1／8	内外面剝離激しい
116	029－03	〃	甕Ｃ	口径［24.4］	外：端部に刻み目	——	にぶい橙 7.5YR7／4	並（～2mmの石英・長石含）	口　縁 破　片	
117	029－01	〃	鉢Ｄ	口径［24.2］	内外：ヨコナデ	外：ハケ状具による横線文	にぶい黄橙 10YR7／3	密	口　縁 破　片	
118	028－03	〃	山茶椀	口径［15.0］	内外：ロクロヨコナデ	——	灰白 5Y8／1	密	口　縁 破　片	
119	028－01	〃	山茶椀	高台径 6.4	——	内外：ロクロヨナデ 高台部ハリツケ	灰白 5Y8／1	密	高台部 完　存	

第19表　土器観察表３

図版番号	登録番号	遺構（出土位置）	種類	石材	法量（残存値）				備考
					長cm	幅cm	厚cm	重量g	
120	038－07	ＳＨ1	不明	輝緑岩	－	－	－	(6.2)	
121	001－05	〃	石庖丁	輝緑片岩	－	－	0.9	(13.4)	
122	001－04	ＳＨ2	石鏃	サヌカイト	5.1	1.8	0.4	3.8	
123	001－07	〃	石鏃	サヌカイト	(3.3)	2.2	0.5	(3.2)	
124	001－06	〃	石鏃	サヌカイト	(2.9)	1.2	0.3	(1.3)	
125	001－01	〃	扁平片刃石斧	砂岩	－	4.6	1.1	(32.4)	
126	001－02	〃	太型蛤刃石斧	輝緑岩	－	－	－	(98.7)	
127	001－09	ＳＨ3	石鏃	サヌカイト	－	1.0	0.4	(1.2)	
128	042－03	〃	2次加工有剥片	サヌカイト	2.2	1.5	0.8	1.9	石錐の未製品か
129	042－02	〃	2次加工有剥片	サヌカイト	2.5	1.2	0.4	1.9	
130	002－04	ＳＨ5	石鏃	サヌカイト	2.7	2.1	0.6	2.5	
131	004－04	〃	石庖丁	輝緑片岩	－	－	－	(6.6)	
132	038－04	〃	2次加工有剥片	サヌカイト	1.9	1.3	0.4	0.6	
133	003－01	〃	大形石庖丁	絹雲母片岩	19.8	11.7	0.75	265.2	
134	040－01	〃	台石？	（未鑑定）	28.5	10.9	10.2	4.8	重量の単位はkg
135	001－08	ＳＨ6	石鏃	サヌカイト	(2.3)	(1.5)	0.4	(1.1)	
136	038－03	〃	石鏃	サヌカイト	1.9	1.5	0.4	0.9	
137	039－01	〃	砥石	砂岩	12.5	7.2	3.0	354.2	
138	042－01	ＳＨ7	石鏃	サヌカイト	2.1	0.9	0.3	0.6	
139	002－01	〃	打製石剣	サヌカイト	－	2.8	1.4	11.9	
140	039－02	〃	砥石	砂岩	12.7	6.9	2.3	563.5	
141	002－08	ＳＨ8	不明	粘板岩	－	－	－	(0.6)	
142	038－01	ＳＫ12	石鏃	サヌカイト	－	1.4	0.4	(1.9)	
143	038－06	〃	石庖丁	絹雲母片岩	7.8	6.0	0.7	29.9	
144	038－05	ＳＫ22	石錐？	サヌカイト	2.6	1.0	0.4	1.4	
145	041－01	剥片集中区	2次加工有剥片	サヌカイト	3.8	2.6	－	(7.5)	
146	002－07	包含層	太型蛤刃石斧	砂岩	－	－	－	(56.7)	
147	002－03	〃	太型蛤刃石斧	輝岩	－	－	－	(98.7)	
148	002－06	〃	太型蛤刃石斧	凝灰角礫岩	－	6.1	－	(207.7)	
149	038－02	〃	石鏃	サヌカイト	2.0	1.8	0.3	1.1	
150	005－03	〃	扁平片刃石斧	プロピライト	5.6	3.8	1.1	36.2	

第20表　石器観察表

4．調査のまとめ

発掘調査の結果、山籠遺跡では弥生時代中期後葉の竪穴住居10棟が確認され、周辺地域での当該時期の住居址の確認例としては隣接する長遺跡[19]につぐものとなった。また遺物では土器と石器が住居址単位で捉えられる点で好資料を提供したものと思われる。

以下、調査資料の若干の検討を試み、また今後に資するものとして、調査上の課題（問題点）を自ら指摘し、まとめにかえたいと思う。

（1）遺構（竪穴住居）について

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居10棟、土坑5基、溝11条などである。調査面積に比して遺構は密に分布しており、特に竪穴住居は平面プランとその配置状況がよくわかり、住居間を通るようにして配された排水溝からも計画的なムラづくりの状況が看取できる。また、本遺跡に特徴的なものとして、住居の平面プランの形態の差異が指摘できる。平面形態が正方形となるものと長方形となるものの混在は、納所遺跡や長遺跡で確認されており、当該地域の弥生時代中期に顕著な住居プランといえよう。

以下、他遺跡との比較を通じて、本遺跡の特徴を捉えてみたい。

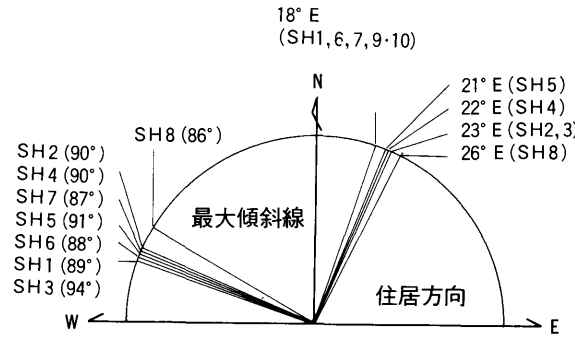
まず、調査によって確認された竪穴住居の規模とその構造を確認しておく。第20表に示したように、10棟の竪穴住居のうちその全容が把握できるのは6棟である。

周溝は、遺存状況の良くないＳＨ８を除くと、いずれの住居址でも床面端に巡る。

主柱穴は、明確に4本と確認できるのは4基にとどまるが、拡張・建て替えに伴うと考えられる柱穴も検出されいる。ＳＨ４では直線上に3カ所の柱穴が並ぶが、これは長遺跡で検出された長方形住居（ＳＢ11ほか[20]）のように、当初から長方形を意識したものではなく、拡張に伴うものと考えられる。

炉の痕跡は、床面の中央部及びその周辺に焼土として捉えられた程度である。5棟の住居址で焼土を確認したが、これらはいずれも住居址自体の遺存状況が良いか、もしくはその全容が把握できたものであって、調査区外にかかる住居址などでも、未確認ながら同様の施設が存在したものと考えられる。

建物方向は、第21表に示すようにほぼ同じである。また、緩斜面に占地する住居で地形的な制約を受けるためか、第98図に示すまでもなく、住居の軸方向と最大傾斜線とはほぼ直交する。長方形プランをもつ住居址はすべて長辺が等高線の走る方向に沿っており、斜面での住居設営にあたっての床面積の確保と平面プランとの関係は、極めて自然選択的であったと推定できる。その上でのＳＨ１・２・７の住居



第98図　竪穴住居の方向と最大傾斜線との関係

番号	平面プラン	規模（m）	比率	概床面積(m²)	棟方向	周溝	主柱穴	炉	備　考
ＳＨ１	方　形	3.85×3.75	: 1.03	14.44	N18° E	○	④	○	
ＳＨ２	長方形	3.70×3.05	: 1.21	11.29	N23° E	○		○	壁面柱穴有
ＳＨ３	－	4.95×1.6以上	－	－	N23° E	○			拡張1回　暗渠排水
ＳＨ４	－	5.30×3.2以上	－	－	N22° E	○	○		拡張2回　壁面柱穴有
ＳＨ５	長方形	4.95×4.10	: 1.21	20.30	N21° E	○	④	○	拡張1回　暗渠排水
ＳＨ６	方　形	5.85×5.35	: 1.09	31.30	N18° E	○	④	○	拡張2回
ＳＨ７	長方形	4.80×3.75	: 1.28	18.00	N18° E	○	○	○	拡張2回
ＳＨ８	方　形	4.55×4.65	: 1.02	21.16	N26° E				
ＳＨ９	－	4.0×4.0以上	－	－	N18° E	○	○		ＳＨ10に先行
ＳＨ10	－	4.5×－	－	－	N18° E	○	④		方形プランの可能性有

第21表　竪穴住居一覧表

群（西群）とＳＨ３～６の住居群（東群）を平行配置するような位置関係は、より規制の強い計画性と機能性を考慮した結果の反映とみることができよう。また、概報段階での正方形、長方形プランの住居が２棟一対になるという指摘[21]は、前述の西群と東群の住居配置の計画性に還元されうるもので、２棟単位でのグルーピングは、その可能性を指摘できる程度にとどめておきたい。

調査区内で確認された住居址の中で、その規模が格段に大きなものはない。ＳＨ９・10を同一住居とみなせば、それに相当する可能性もあるが、長遺跡第２次調査区で確認されたような一辺が10mを越えるような規模の住居址は認められない。調査が限定された範囲で行われたことにも起因するが、住居の規模の点では、長遺跡第１次調査区での竪穴住居址とほぼ同程度といえる。相違点としては、建て替え・拡張の有無及び計画的住居配置の有無であろう。丘陵上の平坦地に立地する長遺跡第１次調査区では、建て替え・拡張は顕著でなく、全体的な住居群としての建物配置に方向性の統一も捉えがたい。傾斜地に立地する本遺跡では、その地形的な制約を受けて同一地での建て替え・拡張が行われつつも、建物の一辺を揃えるという計画性が窺われる。

最後に、時期的な点に一言触れると、出土遺物からも判るように、竪穴住居は中期後葉の範疇に収まるものと考えられる。周辺地域の当該時期の住居平面プランについては、すでにいくつかの指摘がなされており[22]、今回の結果は、それらを追証するものになったと思われる。近年の調査例の増加から、周辺地域では、弥生時代後期後半の住居平面プランはおおよそ方形（正方形）に統一されていくことが明らかになってきた[23]。おそらく長方形プランの住居は、中期前半（円形）から後期後半（正方形）に統一されてゆくその過渡期に出現する形態として捉えられ、この形態を呈するものは、時期的には中期中頃から後期前半に限定されるといってもよいであろう。

（２）出土土器について

出土した土器は、図示しえた個体数はあるものの、残存率及び器面の状況がよくないため、詳細な検討には資料不足と言わざるをえない。当該時期の好資料である亀井遺跡ＳＫ１・２出土土器[24]や、既に報告がなされている長遺跡第１次調査区出土土器と比較した場合に、本遺跡では器種組成の点で前二遺跡では認められていない凹線文を施す高杯（台付鉢）が一定量存在することを、ここでは指摘するにとどめたい。また、凹線文が施されない壺（壺A2 に分類）もあり、同じ形態をとる壺A1 との比較から時期的な点を考える上での資料となろう。　（中村光司）

（３）出土石器について

これまで三重県下の遺跡で弥生時代の石器が報告された例は、津市納所遺跡など若干数存在するが、時期の特定できる遺構に伴って出土した例はほとんどない。今回報告した山籠遺跡例についてみると、量的にはさほど多いとはいえず、近畿や瀬戸内地域等の諸遺跡の例と比較するとむしろ全く量的には比ぶべくもないのであるが、まだまだ資料の蓄積が全くない伊勢地域の石器の資料としては一応竪穴住居単位で器種組成の知りうる資料として極めて貴重なものであるといえよう。石器の所属時期も、出土した土器の存続幅から考えれば、包含層出土のものも含めて中期後葉の極めて限定された時期の資料と思われる。量的には少ない資料ではあるが、個々の器種の詳細や石材に関しては、興味深い事実も見受けられる。そこで山籠遺跡出土の弥生時代石器について、事実確認を中心に若干の考察を加えてみたい。

①　石器器種と使用石材

打製系の石器には、製品でみた場合、石鏃・石剣のほかスクレイパーと石錐になる可能性のあるものが存在するが、石材はすべてサヌカイト製である。ただしフレイク・チップ類にはチャート製のものも存在するため、チャート製の打製石器が存在していた可能性も残るが、もし存在していたとしてもその割合は極めて低いものであろう。

これに対し、磨製系の石器石材は比較的豊富で、絹雲母片岩・輝岩・輝緑岩・輝緑片岩・凝灰角礫岩・砂岩・プロピライトが存在する。このうち、大形石庖丁には絹雲母片岩が、石庖丁には絹雲母片岩と輝緑片岩といういずれも片岩系の石材が使用されている。太型蛤刃石斧には砂岩と輝岩と輝緑岩と凝灰角礫岩が、扁平片刃石斧には砂岩と安山岩の一種であ

るプロピライトが使用されている。

これら磨製石器の石材は、砂岩が一志郡一志町を中心とする一志層群にみられ、同一層準の地層が他地域でも伊勢平野沿いの山地や丘陵地の各所で認められるのをはじめ、輝緑岩系の石材が鈴鹿山系を中心とする伊勢北部の山岳地帯に広く分布しているものである。[25] 絹雲母片岩や凝灰角礫岩、プロピライトも基本的に県内に存在する石材である。

従って、打製石器の石材が、微量の存在の可能性があるチャートを除くと地元では産出しないサヌカイトであるのに対し、磨製石器の石材は基本的には地元近くで求めようと思えば入手可能な石材であったといえよう。

② 納所遺跡出土石器との対比

いうまでもなく、納所遺跡は弥生時代中期にその盛期を迎える伊勢を代表する弥生時代遺跡で、山籠遺跡からは直線にして2㎞南東に所在する。納所遺跡は、当地域における拠点的集落と考えられる遺跡で、石器も未製品を含め膨大な数が出土している。

納所遺跡での石器組成の内訳は、弥生中期のもの[26]に限った場合、石斧30.7%・石鏃26.4%・砥石14.3%・叩石及び凹石10.9%・石鏃と打製石斧以外の打製石器9.6 %・石庖丁5.9 %という比率となる。さらに納所遺跡では、カウントした遺物以外にも、各種の片岩、礫等の小石核も存在しており、集落内での石器製作が想定されている。[27]

これに対し、山籠遺跡の石器組成をみてみると、石鏃37.0%・石斧22.2%・石庖丁14.8%・砥石7.4%という数値がでる。もちろん山籠遺跡の場合、石器の百分率を出すには資料の絶対量が不足しているが、おおよその傾向は知ることができよう。

以上の2遺跡を比べると、納所遺跡では石斧とともに砥石や叩石・凹石といった石器製作に関わる遺物の割合が高いことが注目されるのに対し、山籠遺跡では圧倒的に石鏃の割合が高いことと、資料数は少ないものの石庖丁の占める割合が相対的に高くなっていることが注目される。このことは、納所遺跡が工房こそ確認されていないものの石器製作（とくに磨製石器類）を行った遺跡であることと関連しているものと推定される。

また、石材[28]についてみてみると、打製石器ではほとんど全てがサヌカイト製であることは両遺跡が共通する。若干の差異を上げるとすれば、磨製石斧をみた場合に納所遺跡では砂岩製のものが圧倒的に多いのに対して、山籠遺跡では砂岩よりもむしろ輝緑岩系石材が目立ったものとなっていることと、石庖丁の石材に関して納所遺跡では雲母片岩製のものが1点しか存在しないのに対し、山籠遺跡では2点（絹雲母片岩）出土していること等があげられる。山籠遺跡の資料数が少ないため、このことが何らかの意味をもつかどうかは現時点では不明であるが、あえて理由を求めるならば、納所遺跡の発掘が遺跡全体のごく一部であるためそれら石材の発掘数がたまたま少ないのではないかということと、使用石材に山籠遺跡の存続時期である中期後葉では若干の変化がみられるのではないか、という指摘に止めておこう。

山籠遺跡では、打製・磨製を含め確実な石器の未製品や石核類は存在しない。しかし、打製石器については、サヌカイト製と極く微量のチャート製のフレイク・チップ類が出土していることから、簡単な石鏃や石錐等は山籠遺跡内で製作されたものも存在すると思われる。同様の例は、山籠遺跡とは谷筋を同じくし、山籠遺跡の東北300 mに所在する長遺跡（中期後半）においても、サヌカイト製の大型剝片の存在から集落内に原石を持ち込んで石鏃等を製作したことが想定されている。このほか、山籠遺跡では、極く少量ではあるが絹雲母片岩・輝緑片岩といった片岩系の石材の小破片も出土している。これらはいずれも石庖丁に使用される石材である。このことは、石庖丁製作まではいえないにしても、破損品の再使用例の多い石庖丁については、遺跡内で修復程度はされていた可能性を示しているものと思われる。扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧といった磨製石斧については、原石はおろか石器の製作工程を示す遺物も出土していないことから、他遺跡で製作されたものが製品として本遺跡へもたらされたものと考えることができる。その場合、山籠遺跡にとって、納所遺跡が最も近くに位置する拠点的集落であり、両者の間には石器や石器石材の入手・獲得において、なんらかのかたちでの供給・需要関係があったものと思われる。（穂積裕昌）

（4）調査の課題

埋蔵文化財、特に古墳など地面に表出したものを視覚的に確認できるものは別にして、そのほとんどは「掘ってみなければ判らない」ものであることは自明である。今年度、津市教育委員会によって調査された長遺跡も、当初はそれほど大規模な集落が存在するとは予想だにできなかったし、地形改変が進んでいる現代においては、現水田下から古墳の痕跡が認められるということもままあることである。

山籠遺跡の調査は、バイパス予定地にかかる部分の記録保存を目的としている。調査面積は約1,100㎡に及び、前述したように調査面積に比して遺構の密度は高いものであった。全景写真からも判るように、調査区東側には日常の生活道路が走っているが、遺構の配置からみれば、竪穴住居群はこの下にも延びてゆくことは明らかである。現在の生活と遺跡の調査のどちらを優先するのかという、二項対立的な立場にたたずとも文化財を保護する立場にある我々の責務は、破壊される遺跡の範囲の確認であろう。現道の東側での調査前の試掘結果では遺構・遺物とも認められず、本調査範囲から除外したところであるが、本調査中の状況から想定できる範囲での再度の確認（だめおし）の必要性を痛感させられた。遺構の存在の有無に関わらず、その結果自体が意味をもつ調査資料として、記録保存の責を果たすものと考えらる。

また、前節までに本遺跡の調査結果は記してきた。目次及び前言などからもわかるように、近年の開発とそれに伴う発掘調査は大規模かつ長期にわたるものであり、「調査担当者＝報告者」という原則的な構図は崩れつつあり、むしろ今日の体制の中では、「調査担当≠報告者」とういう図式が一般的になった感さえある。調査後の速やかな報告書作成が本来であろうが、それが不可能であることが多々ある。ここで問題となるのは、調査の正確な報告がなされるかどうかであろう。それ自体の情報量の減少の少ない遺物の報告では、報告者の情報の抽出力が課題となるが、遺構の場合、調査担当者にしか把握できなかった情報の伝達は不可能に近い。実際に目にしたことのない遺跡の図面と写真をもとに、経験不足の担当者が遺構の報告をする事の何と危ういことか。月日の経過と、複数の担当者のフィルターを通過したあとに、本来の情報のどれほどが残っているであろうか。その責を果たし得たのかには疑問が残る。

以上、「調査のまとめ」のひとつとして若干の私見を述べた。ともすれば、「天にむかって吐唾する」ことにもなろう。「報告書はどこまで信用できるのか」[㉙]という視点を、「いかに信用に堪えうる報告書を作成するか」という観点に置き換えて考えてみる時期に来ているのではなかろうか。自ら肝に銘じなければならない問題でもある。　（中村光司）

〔註〕

① 伊藤久嗣『納所遺跡－遺構と遺物－』三重県教育委員会 1980年

② 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972年

③ 仲見秀雄ほか『鈴鹿市上箕田遺跡』三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ 1961年
真田幸成・大場範久・仲見秀雄『上箕田　弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会 1970年

④ 吉村利男『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1972年

⑤ 倉田直純ほか「森山東遺跡」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993年

⑥ 竹内英昭「松ノ木遺跡」『同前掲書⑤』1993年

⑦ 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1973年

⑧ 伊藤克幸・下村登良男『安芸郡安濃村・辻の内遺跡』安濃村遺跡調査会・安濃村教育委員会 1975年

⑨ 萱室康光ほか『長遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1989年

⑩ 長谷川博「高松Ｃ遺跡発掘調査中間報告」『津市民文化』第３号 津市教育委員会 1976年

⑪ 『津市の文化財』津市教育委員会 1989年

⑫ 浅生悦生ほか「太田遺跡」『同前掲書⑤』1993年

⑬ 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会 1970年

⑭ 伊藤久嗣「大ケ瀬遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1973年

⑮ 山田　猛「安芸郡安濃町前田遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年

⑯ 石器の記述に関しては、下記の文献を参考にした。
平井　勝『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社 1991年

⑰ 石材鑑定（肉眼）では、讃岐岩（安山岩）と教示を受けたが、考古学での一般的理解に従って、以下、同類の石材は「サヌカイト」と呼称する。

⑱ 石神幸子ほか『池上遺跡』第３分冊の１（石器編）㈶大阪文化財センター 1978年

⑲ 同前掲書⑨及び『長遺跡現地説明会資料』津市教育委員会 1995年
平成６年度の津市教育委員会による第２次調査では、100基を越える中期後半の住居址が確認されている。

⑳ 同前掲書⑨

㉑ 増田安生ほか「Ⅲ.山籠遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990年

㉒ 同前掲書⑨　及び　田村陽一「花ノ木（山崎）遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第１分冊１』三重県教育委員会 1989年

㉓ 多気郡明和町に所在する北野遺跡や、津市高茶屋小森町に所在する四ツ野Ｂ遺跡では、後期前半頃まで長方形プランの住居が存在するという。斎宮歴史博物館上村安生氏のご教示による。

㉔ 同前掲書⑦

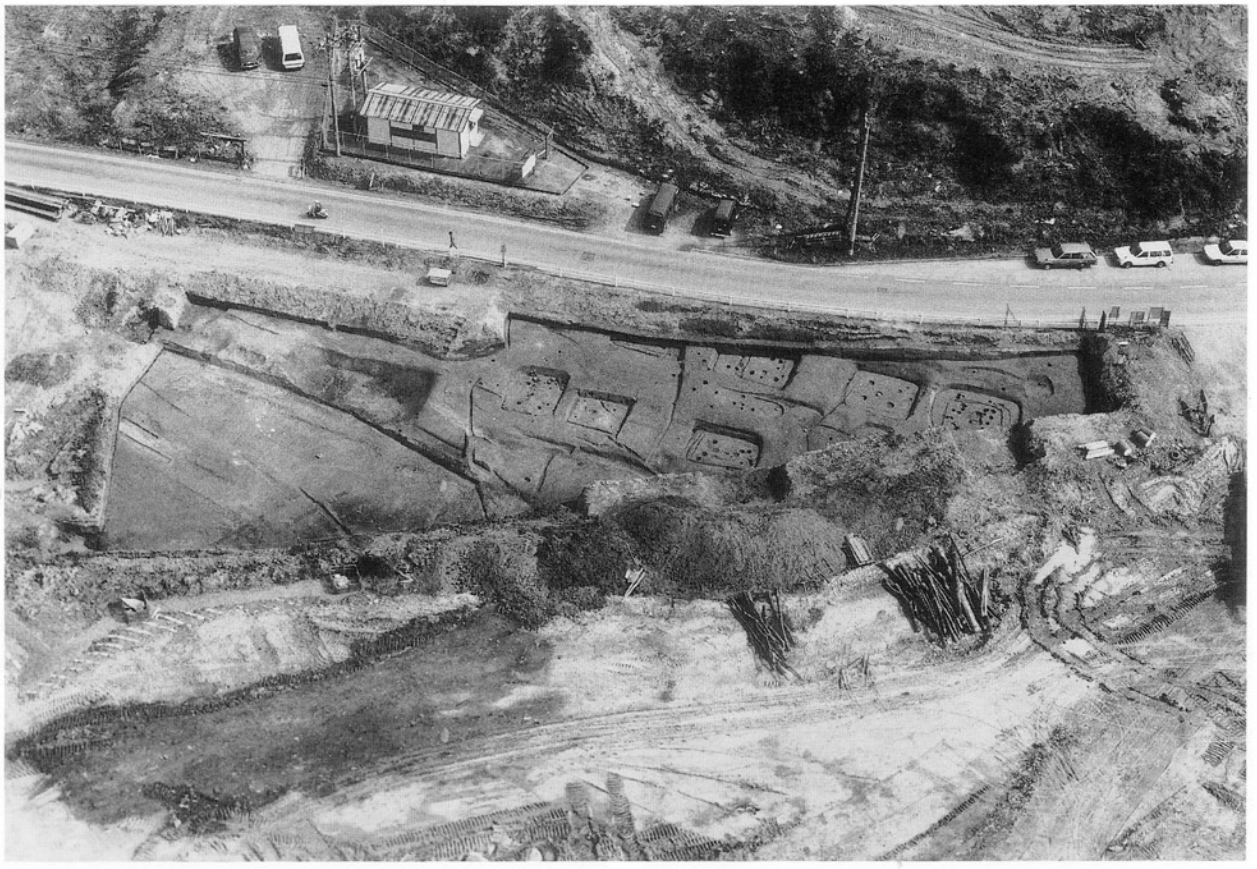
㉕ 秦　好利氏の御教示及び、磯部　克編著『三重　自然の歴史』コロナ社 1991年

㉖ 前掲書①所収の「石器遺物出土地区別一覧表」から弥生時代前期のものと古墳時代のもの（玉類）を除いて算出した。なお、弥生時代後期のものが含まれている可能性も残るが、納所遺跡においては当該時期は遺構もほとんどなくなる衰退期であるため、もし存在していたとしてもその割合は極めて低いものと考えてよかろう。

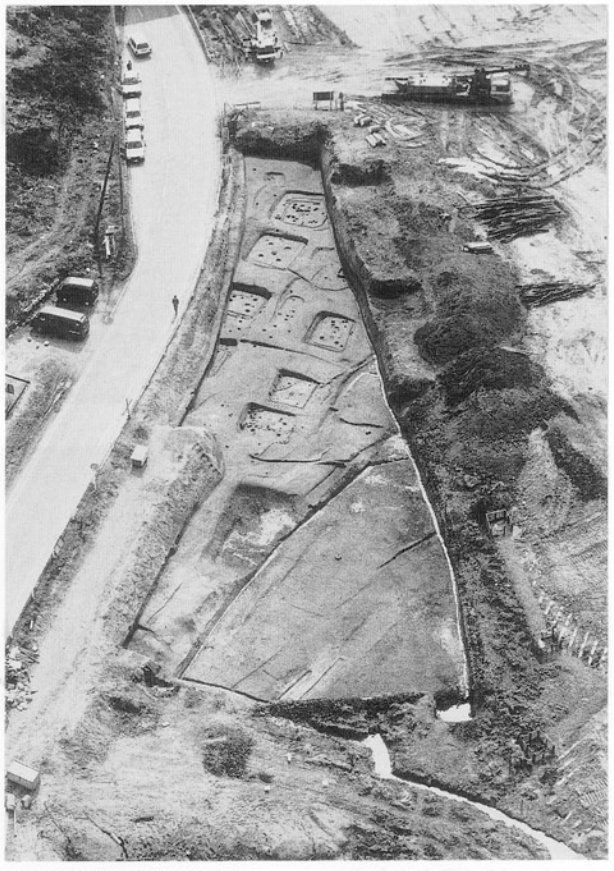
㉗ 前掲書①文献で推定されている。

㉘ 以下、納所遺跡の石器石材は、荒木慶雄・北村治郎「納所遺跡から出土した石器類の材質」『納所遺跡－その自然環境と自然遺物－』三重県教育委員会 1979年

㉙ 中西常雄「報告書はどこまで信用できるのか」『考古学研究』第34巻１号 1987年



調査区全景（西から）

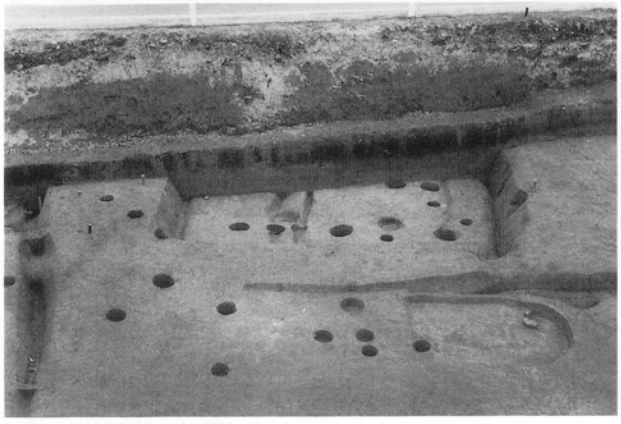


調査区全景（北から）

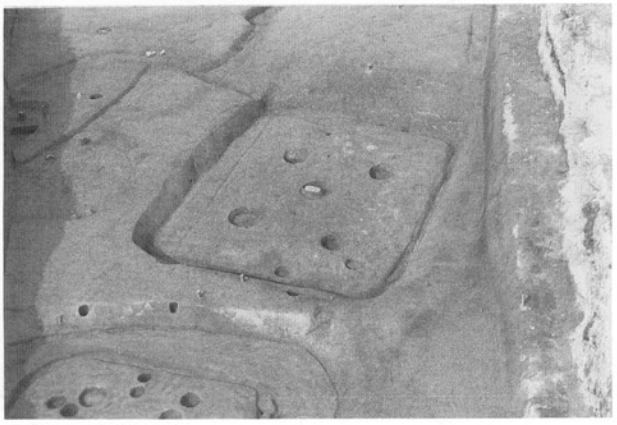
調査区全景（南から）

調査区南部竪穴住居（北東から）

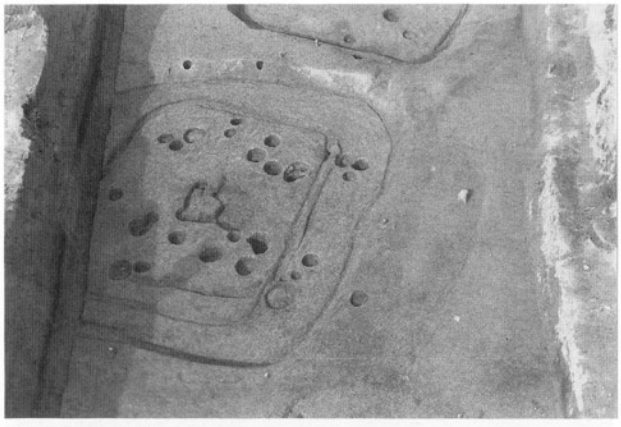
ＳＨ１・２（東から）



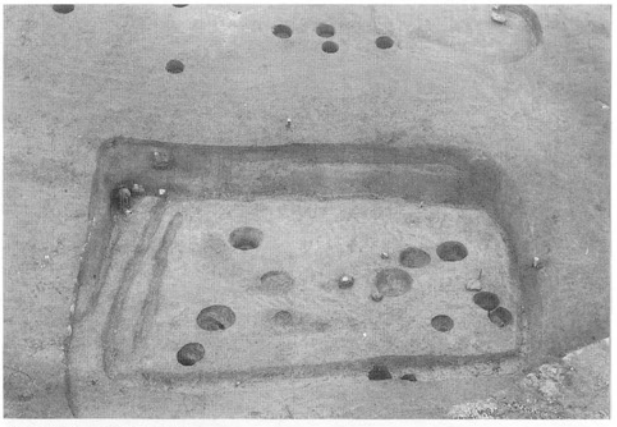
ＳＨ４（西から）



ＳＨ５（南から）

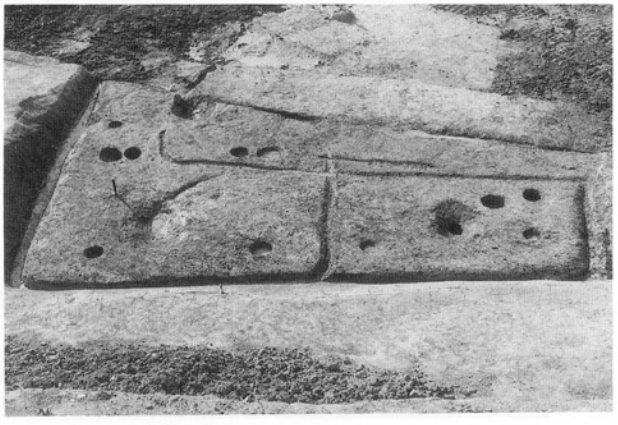


ＳＨ６（南から）

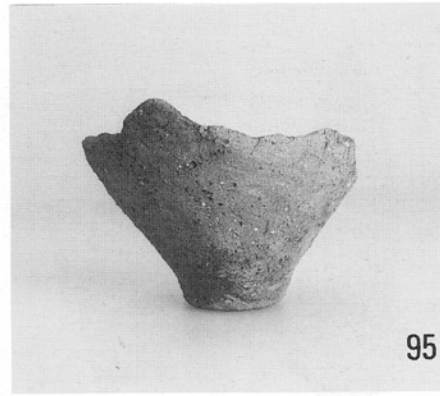


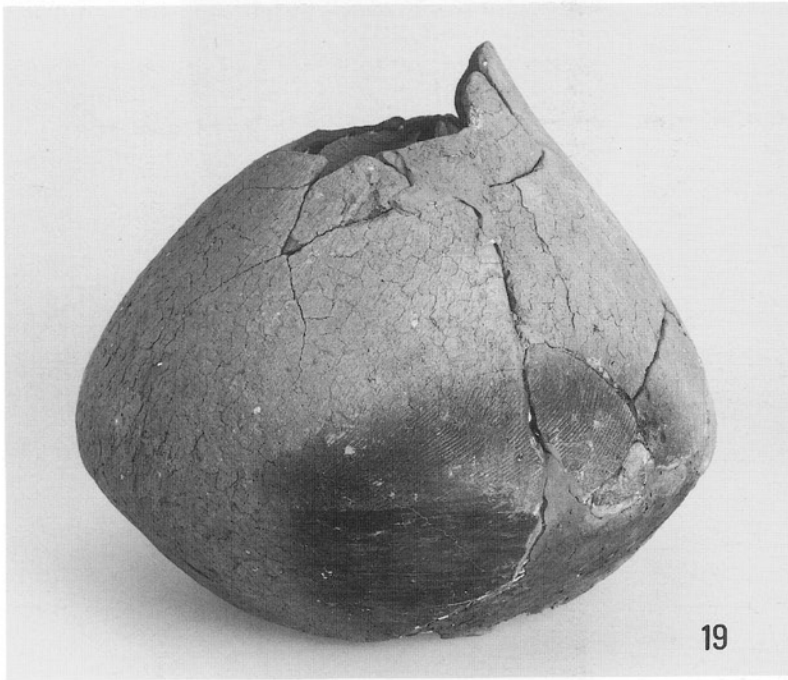
ＳＨ７（西から）

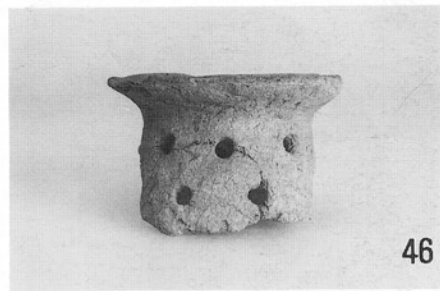
ＳＨ８（北から）

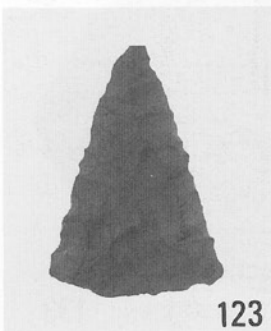


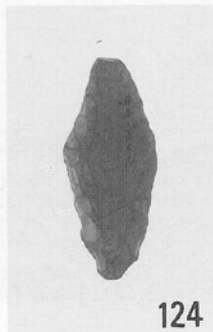
ＳＨ９・10（東から）

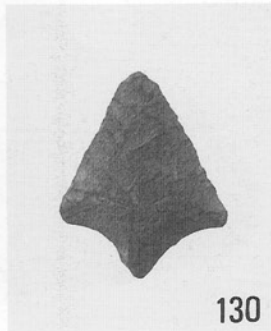


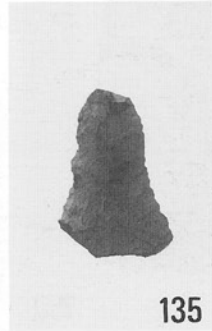


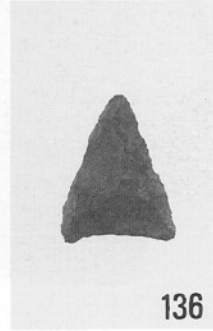




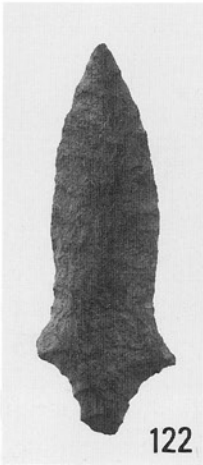


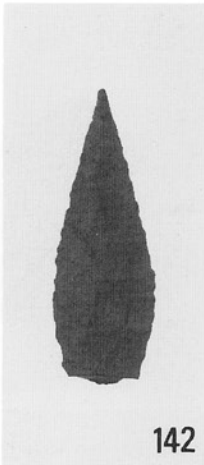


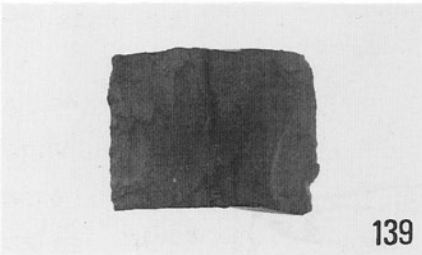


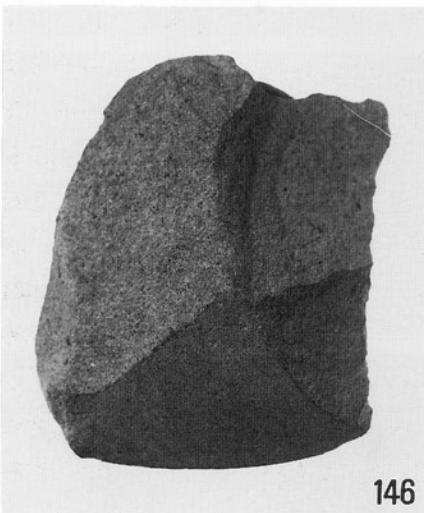


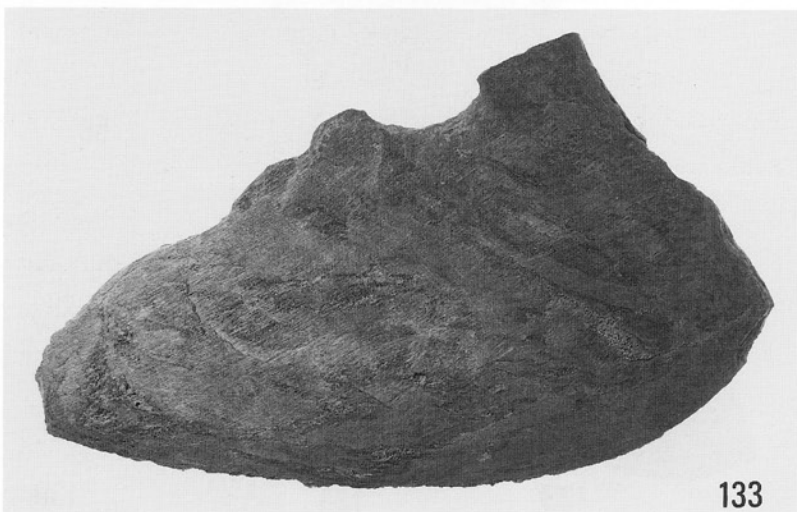
出土遺物（土器：1：3、石器：1：1）











出土遺物（１：１、133は１：２）

Ⅳ. 津市長岡町　宮ノ前遺跡

1. 位置と環境

宮ノ前遺跡(1)は、津市の中・北部を東流する志登茂川と安濃川の間にある「見当山丘陵」南斜面に立地している。

丘陵北側の志登茂川流域では、左岸に徳居古窯跡群の南西部分にあたる山室古窯跡群(2)がある。同古窯跡群の操業年代にあたる飛鳥・奈良時代の遺跡としては、奈良時代の竪穴住居や「和同開珎」などの見つかった大里西沖遺跡(3)、古墳時代後期（以後）の掘立柱建物が発掘された川北遺跡(4)などがある。右岸では六大Ｂ遺跡(5)、安養院跡(8)、大垣内遺跡(9)が、段丘が南に向かって緩やかに下がっていく部分に立地しており、飛鳥～平安時代の掘立柱建物群が見つかっている。下がりきったところには志登茂川支流の毛無川が流れ、対岸に橋垣内遺跡(6)大古曽遺跡(7)がある。この毛無川上流の安濃町から津市にかけての地域には、内多窯跡（10）（安濃町）のほか未発見の須恵器窯が存在する可能性があると思われる。

宮ノ前遺跡のある見当山丘陵は芸濃町から安濃町を経て津市鳥居町付近に達する。同丘陵は安濃川左岸としてとらえられることが多いが、７世紀代の竪穴住居や奈良時代以降の掘立柱建物の見つかった内多馬場遺跡(11)や宮ノ裏Ａ・Ｂ遺跡（12）（13）（いずれも安濃町）は、毛無川上流域にあたり橋垣内遺跡など志登茂川右岸の遺跡群との関連が考えられる。

安濃川左岸では弥生時代の遺跡として、中期後葉の竪穴住居が100棟以上見つかった長遺跡(14)、その南西に同時期の山籠遺跡(15)がある。いずれも安濃川の沖積平野からは800～1,000ｍほど距離をおいた丘陵上に立地している。安濃川の沖積平野にはこの地域の弥生時代の拠点的集落納所遺跡(16)があり周辺にはその分村と考えられる中小の集落が点在する。竹川(17)、森山(19)、桐山(20)、亀井(21)（以上津市）、清水（22）、清水西（23）（以上安濃町）などの遺跡は見当山丘陵の裾に点在する。宮ノ前遺跡もこのうちのひとつである。弥生時代の水田のみつかった森山東遺跡(18)は、宮ノ前遺跡の南にある。また、大城遺跡群（24）（安濃町）では、３世紀後半の竪穴住居と３世紀末～４世紀初頭の方形台状墓、のほか５世紀後半から６世紀末の古墳、中世墓が見つかっている。

見当山丘陵の古墳は、丘陵頂部に単基ないし２基程度が築かれることが多い。安濃川右岸の古墳群が数基～数十基も連続して造られるのとは異なるだけでなく数の上でも規模でも右岸の古墳群の比ではない。古墳を造営した集団の質的な差異に加え、左岸では谷が複雑に入り組み、連続して古墳を築けるような舌状の丘陵が少ないという地形的な制約もあると思われる。調査された古墳をみると、副葬品がないか少ない、埴輪を持つ、自然地形を成形して墳丘を造り盛土が少ないなどの共通点もみられるが、横穴式木芯室から多くの副葬品が出土した君ケ口古墳(25)や丘陵東端にあり横穴式石室に家形石棺の納められた鳥居古墳(26)など多様性もみられる。

安濃川流域の飛鳥時代の遺跡は長谷山周辺の古墳群の中に７世紀代まで下るものがあるものの集落跡としては宮ノ前遺跡の竪穴住居は数少ない例である。

安濃川沿いは、鈴鹿関で東海道と分れ椋本辺から安濃川の平野に下り南下する古代の交通路であった。途中の市村駅は安濃川右岸の津市殿村付近とする説が有力である[①]。安濃川沿いで奈良・平安時代の遺跡をみると、椋本南方、松山、赤坂(27)（芸濃町、安濃川左岸）、北浦(28)、浄土寺南・浄土寺米買(29)（安濃町、安濃川右岸）の各遺跡がある。古道との関連の研究が今後の課題である。

第99図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院　1：25,000　椋本・白子・津西部・津東部）

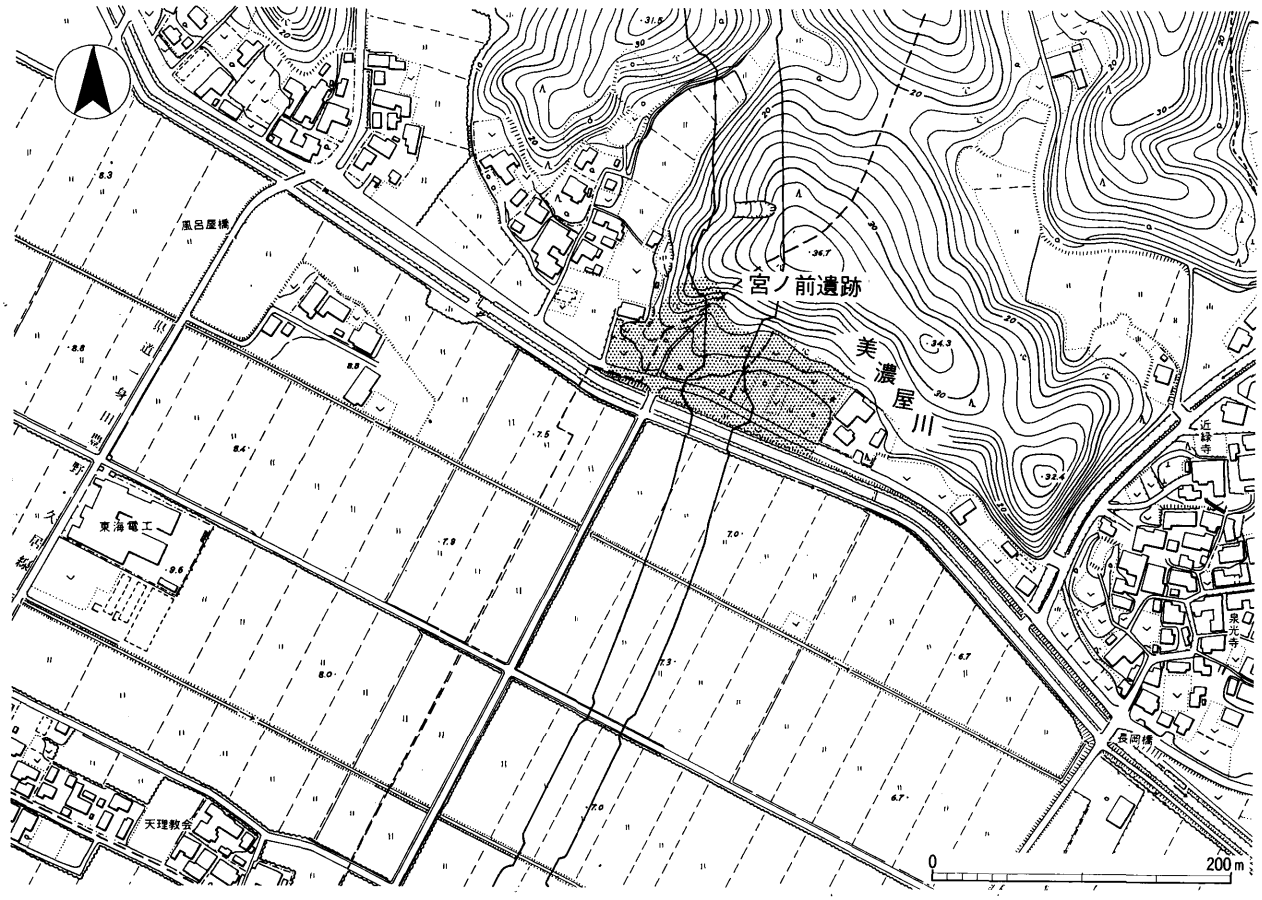
2．調査経過の概要

昭和63年度の試掘調査結果では、斜面下部においては斜面を流れ下った土砂が厚く堆積しており、遺構検出面が多面にわたることが確認されていた。

平成元年度の発掘調査は、調査区をA、B、Cの3地区に分けて行われた。A地区は、丘陵裾部の斜面地約2,500㎡。斜面上部の標高は14.2m、下部で8.5mである。B地区は、A地区の南、市道と美濃屋川の間で、調査面積は河川保全区域の関係上、約130㎡。標高は8.5m前後。C地区は、丘陵中腹の平坦部にある旧祠跡で調査面積は約150㎡。標高は26～30mである。

調査は、4月にB地区の表土除去から開始した。厚い堆積土や攪乱層に苦労したが、5月下旬には遺り方測量を実施しB地区を終了した。A地区は、5月下旬に表土除去を実施。10月初旬には第1遺構面の調査を終了し下層に移った。予想以上に堆積土があり、遺構面も第2～第5面にわたることが分かり調査は容易でなかった。遺物も多量で、遺構も縄文時代から室町時代にいたる各時代のものが複合して検出された。このため調査期間を延長し、終了したのは3月中旬であった。航空測量は、第1遺構面（9月29日）、第3遺構面（12月21日）、第4遺構面（2月9日）の計3回実施し調査の円滑化と正確を期した。なお第2遺構面は調査区の南東部のみであり、遺構も近世の耕作溝のみであったので平板測量によった。第5遺構面は調査区の中央部約600㎡であり、遺り方測量によった。C地区の調査は、平成元年10月に行った。

平成5年度には、用地買収の関係で後になっていた、A地区の南東方向にあたる部分約100㎡をD地区として4月に調査を行った。標高は8.6mである。堆積土は厚かったが主要な遺構はなく南東に向かって緩やかに下がっていく地形がみられた。実測は平板測量によった。



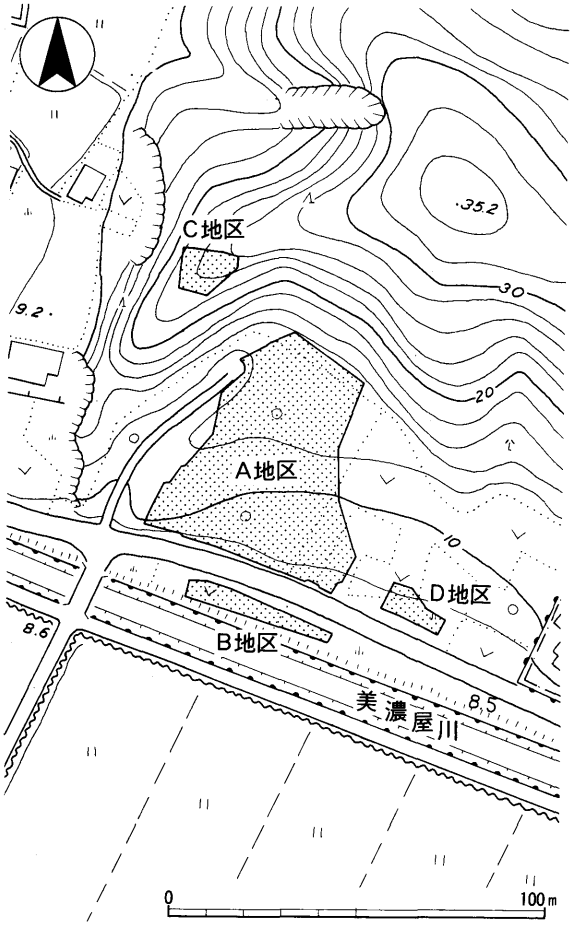
第100図　遺跡地形図（1：5,000）

3．A地区の調査

（1）基本層序と遺構検出面

遺跡が丘陵斜面に立地しており、A地区では掘削前の標高が、調査区の北端で約14.2m、南端では約8.5m。南北約62.5m間の比高差は 5.7mであった。このため、調査区の北半では表土から遺構検出面まで比較的浅く、北半部で平安時代以後の遺構が検出されなかったり、北端で遺構が全く検出されなかったりするのは、上層部分が流失したものであろう。一方、南半部分では、流れてきた土砂が厚く堆積している。遺構検出も多いところで第5面まで行ったが、流失、堆積を繰り返したようで、検出面と時代順は必ずしも一致していない。

基本層序は、北半では、最初は表土（Ⅰ層目）、にぶい黄橙砂質土（Ⅱ層目）、褐色砂質土(Ⅲ層目)、黄褐色砂質土（第1遺構検出面）、橙色シルト（地山）であるが、南に行くに従って、白色ブロック混橙色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色土が順に入ってくる。ちょうど傾斜が緩やかになる直前であり、斜面を流れ下った土砂が順に堆積していった様子がうかがえる。



第101図　調査区位置図（1：2,000）
〔A～C地区：平成元年度調査、D地区：平成5年度調査〕

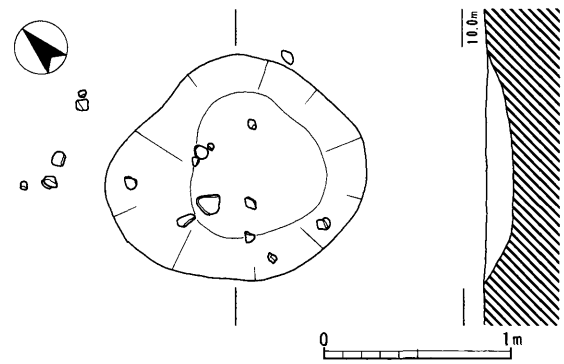
調査区南半では、複雑な堆積状況に加え、開墾等による攪乱も受けている。表土は一部では削平されてにぶい黄橙砂質土に代わってⅡ層目となる明黄褐色砂が露出する。褐色砂質土は南半でもⅢ層目になるが、開墾による攪乱を受けた後消失し、代わって小石混灰黄褐色土がⅢ層目になる。さらにその下には、にぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色土、暗灰黄褐色砂質土が、明黄褐色土、黄褐色土等をはさんで、複雑な層を形成する。

また、調査区北端からやや下ったところからは、第1遺構検出面と地山との間に褐色砂質土（第3遺構検出面）、黒色泥炭土（第4遺構検出面）があり、調査区南半になると、さらにその下に淡緑灰砂混シルト（第5遺構検出面）がある。なお、調査区南東部では第1遺構検出面と第3遺構検出面の間に灰黄褐色シルト混砂があり、これを第2遺構検出面とした。

（2）遺構

A．縄文時代の遺構

土坑　SK1　第5遺構面で検出した。プランはほぼ円形で、直径1.3m。底部は船底状で、検出面からの深さは中央部分で13cmである。縄文中期末葉の深鉢が出土している。

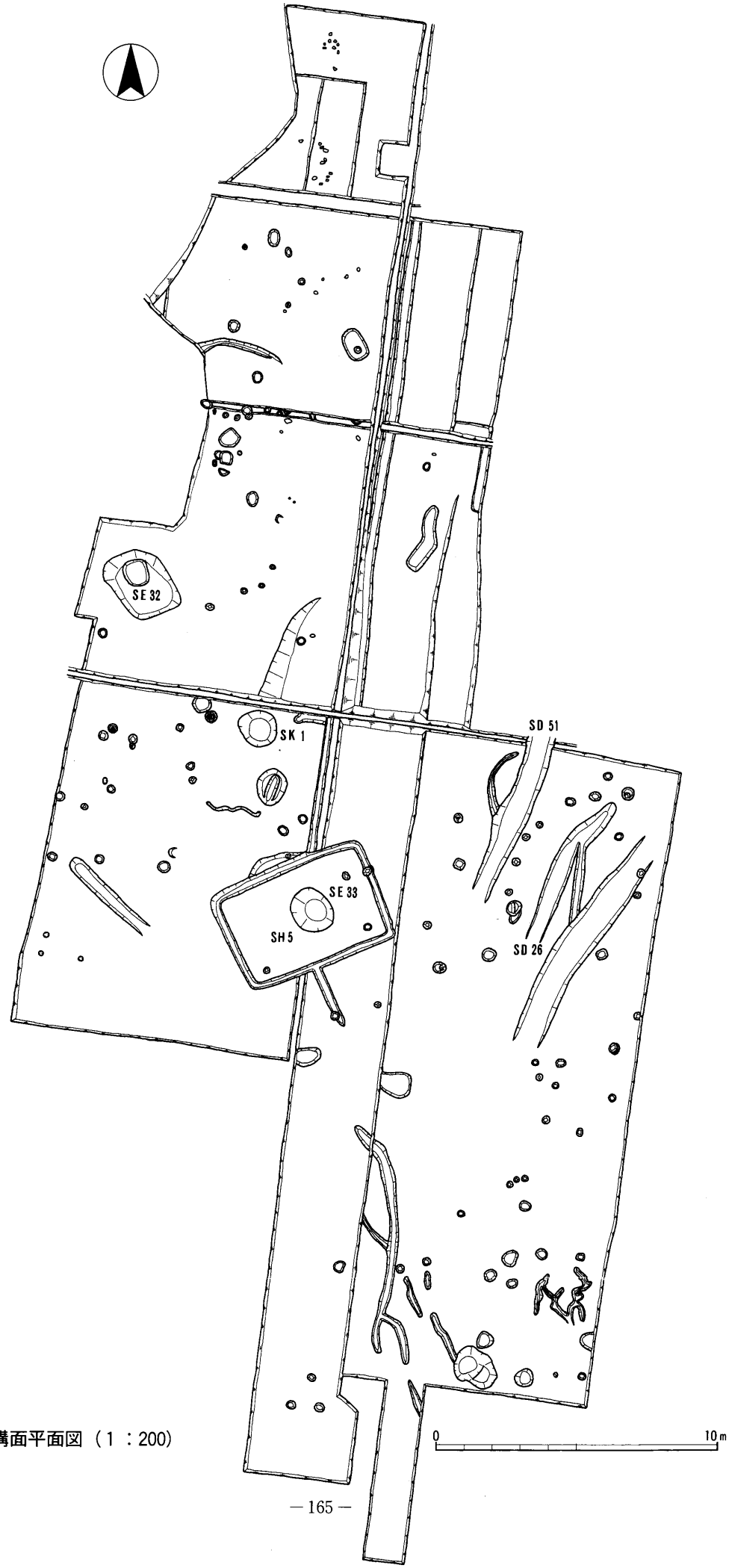


第102図　SK1実測図（1：40）

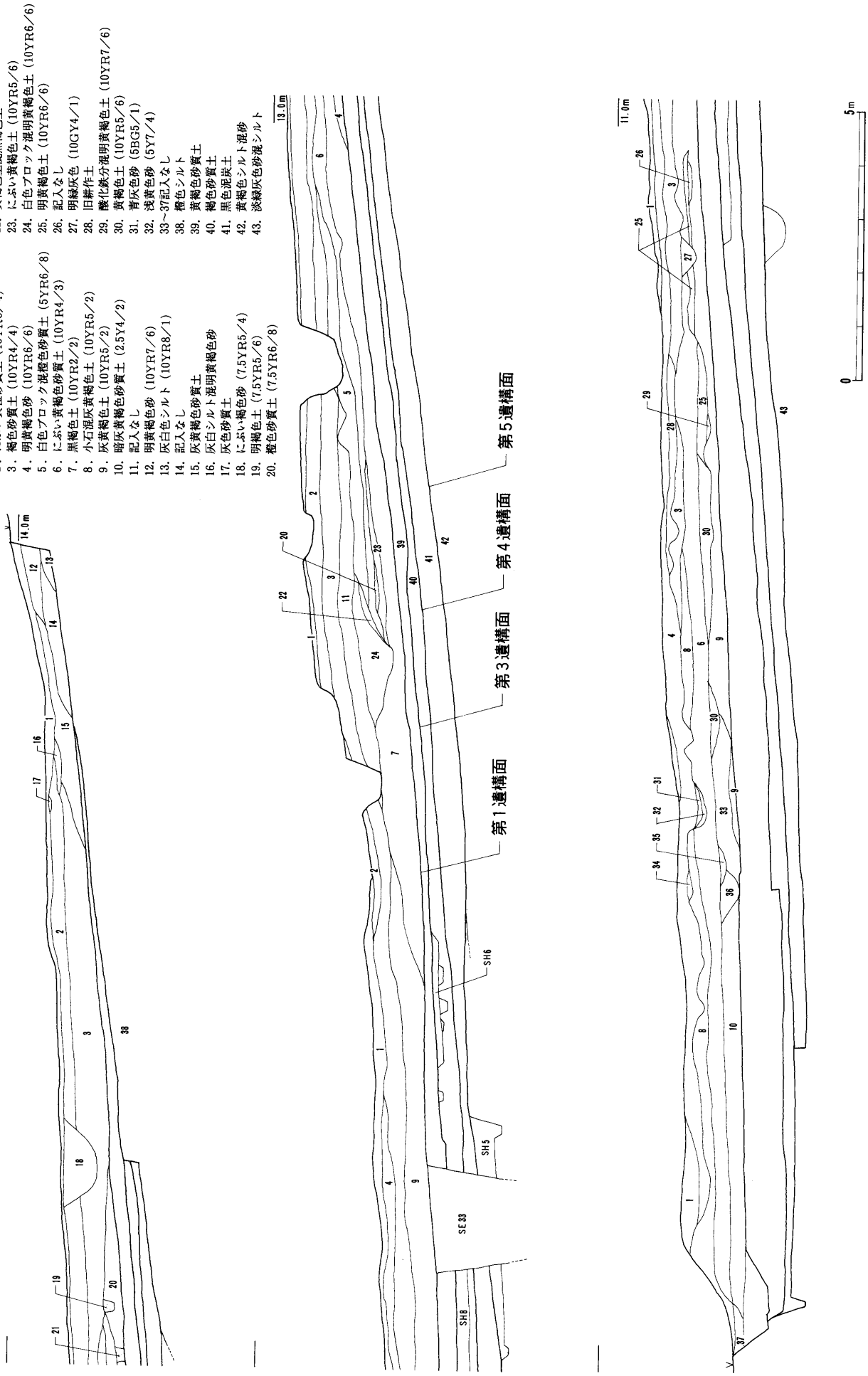
第103図　第１遺構面平面図（1：200）

第104図　第３遺構面平面図（1：100）〔小字の遺構は第１遺構面で検出〕

第105図　第４遺構面平面図　（１：200）〔小字の遺構は第１・第３遺構面で検出〕



第106図　第５遺構面平面図（１：200）



第107図　A地区中央部南北土層断面図（1：100）

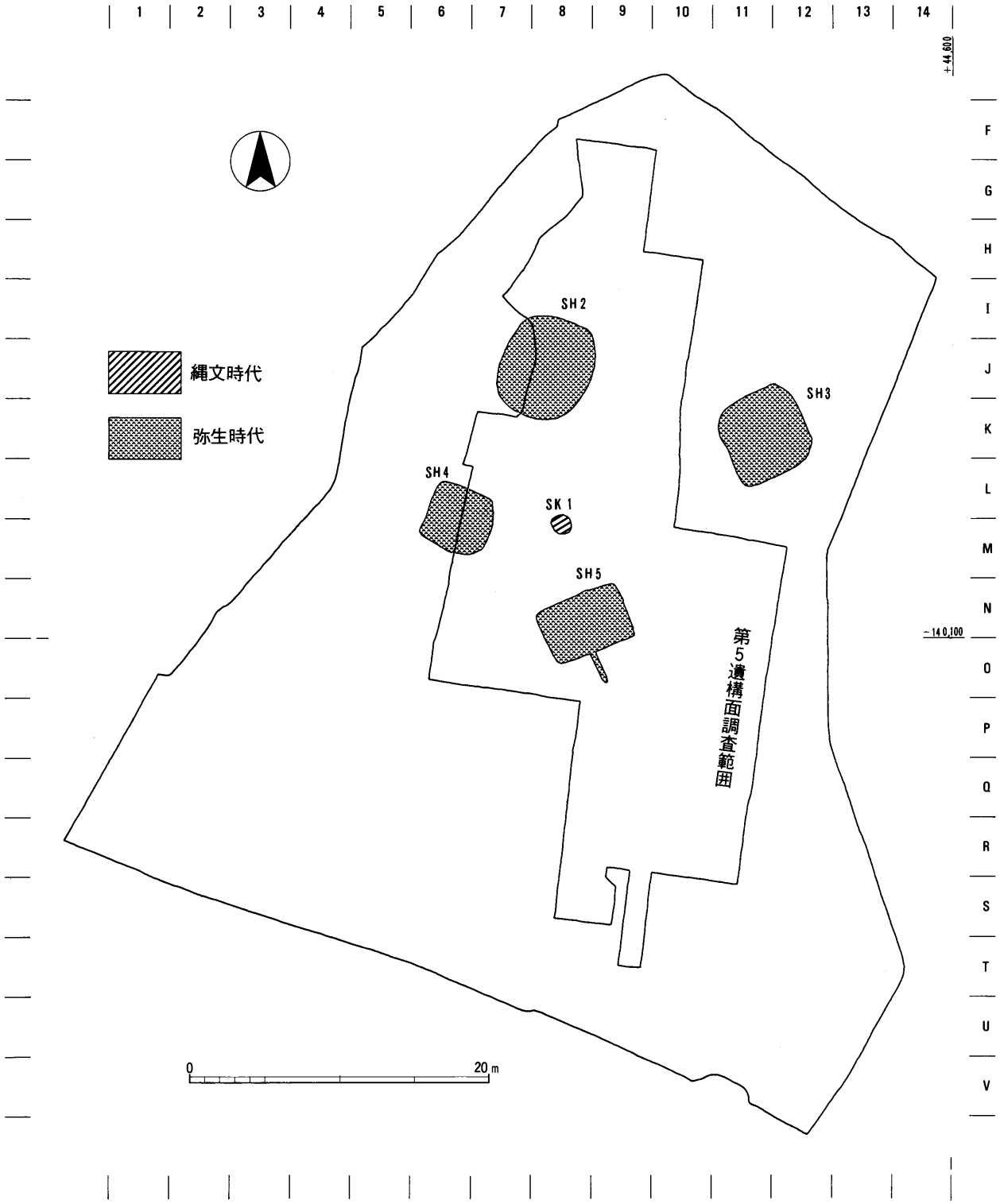
B．弥生時代の遺構

この時期の遺構はすべて竪穴住居で４棟ある（ＳＨ２～５）。ＳＨ４を第１遺構面、ＳＨ２・３を第３遺構面、ＳＨ５を第５遺構面で検出した。

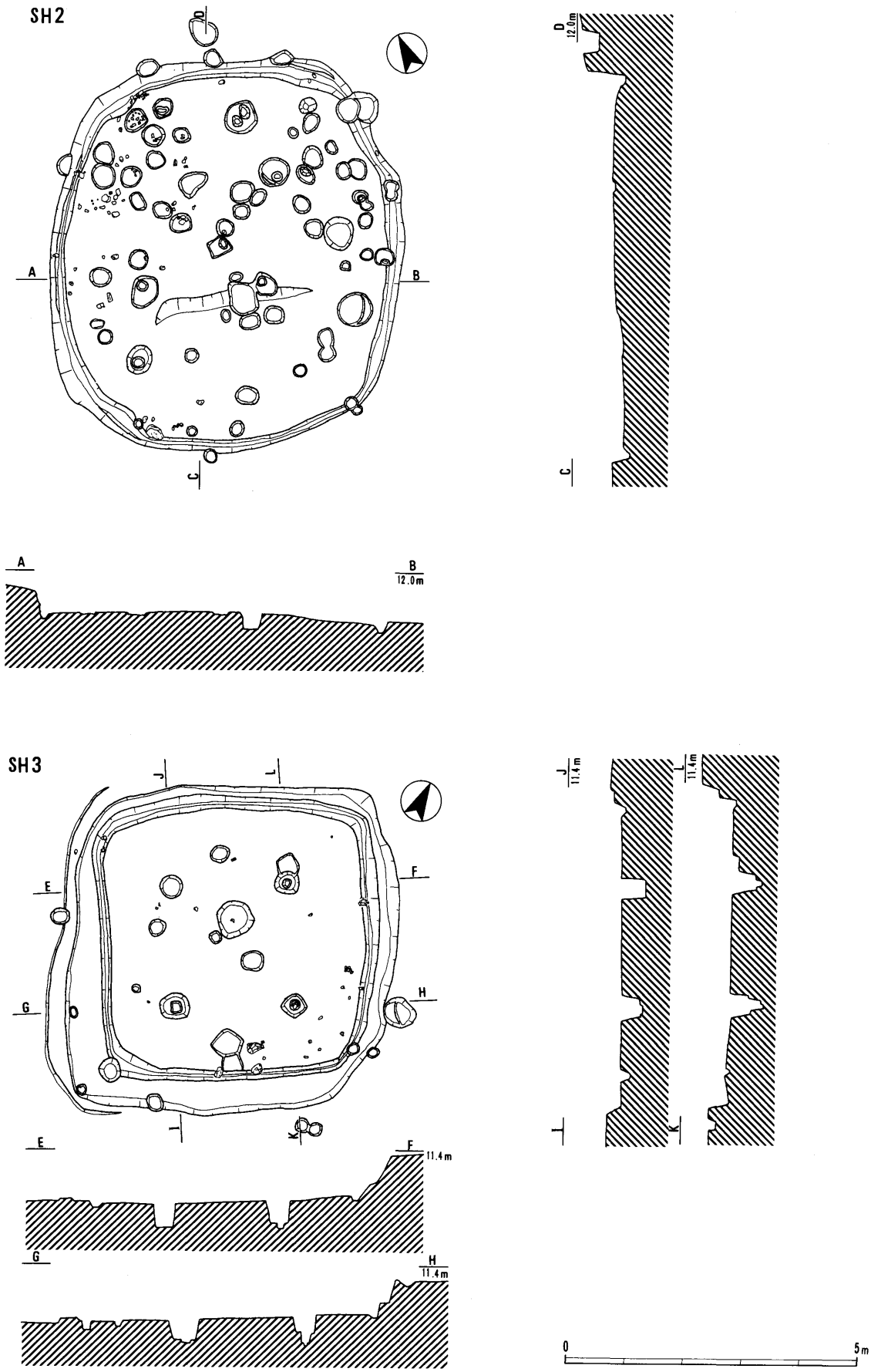
ＳＨ２　調査区の北半西寄りで検出した。楕円形のプランで、東西6.0ｍ×南北6.8ｍの規模は飛鳥時代のものも含めた竪穴住居中最大である。周囲を幅25㎝、床面からの深さ10㎝の周溝がめぐる。主柱穴は明らかでなかった。

弥生後期前半の壺、甕、高杯が出土している。

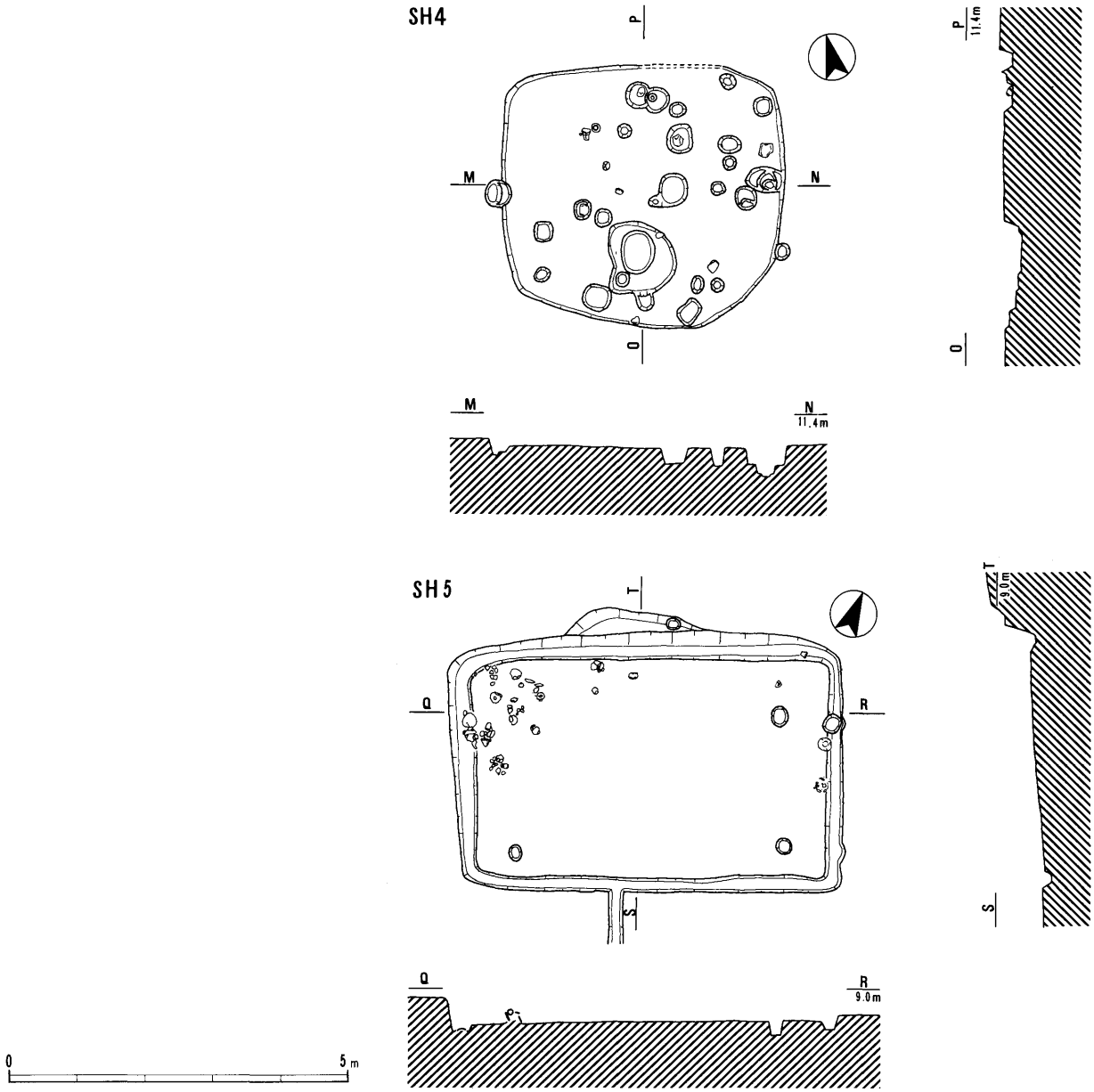
ＳＨ３　調査区の北半東寄りで検出した。隅丸方形のプランで、一回の拡張が認められる。



第108図　縄文・弥生時代遺構配置図（１：400）



第109図　ＳＨ２・３実測図（１：100）



第110図　ＳＨ４・５実測図（１：100）

拡張前は北西－南東4.9ｍ×北東－南西4.8ｍで、四辺に幅20cm床面からの深さ６cmの周溝がめぐる。主柱穴は４カ所確認できる。拡張後は、北西－南東5.7ｍ×北東～南西5.5ｍ。主として南東と南西に拡張しいている。平面形はややくずれた印象を受ける。周溝は四辺にめぐる。幅30～50cm、床面からの深さは20～30cmである。

弥生後期後半の遺物が出土している。出土遺物には、重複する飛鳥時代のＳＢ13（第１遺構面検出）のものも混入していると考えられる。

ＳＨ４　調査区の中央西寄りで検出した。南北3.9ｍ×東西4.1ｍでほぼ方形のプランをもつ。土砂の流失によりかなり削平を受けているものと思われ、検出面と床面の差はわずか５cmで、周溝、主柱穴ともに明らかでなかった。

弥生後期後半の小形壺、高杯が出土している。

ＳＨ５　調査区のほぼ中央部で検出した。隅丸長方形のプランをもち、規模は短辺（北西－南東）3.9ｍ×長辺（北東－南西）5.8ｍである。周溝は、幅20～40cm、床面からの深さは10cmで四辺にめぐる。さ

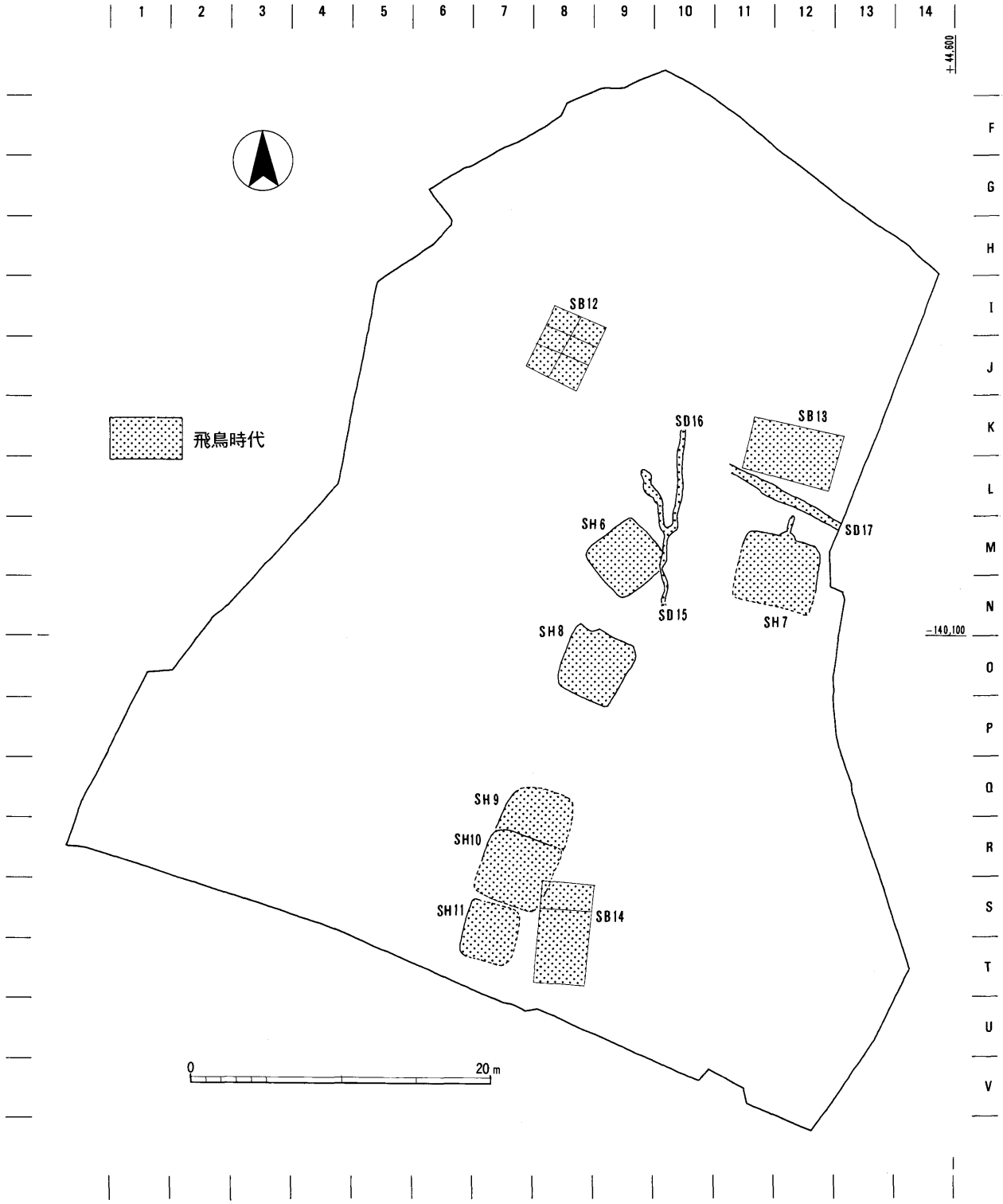
らに南東辺の中央からは排水溝が南東方向に2.4m延びる。主柱穴は3カ所確認できた。

弥生後期前半の壺、甕、高杯、土錐等が出土している。

C．飛鳥時代の遺構

7世紀代の遺構・遺物をここでは飛鳥時代として報告する。

同時代の遺構としては、竪穴住居6棟（SH6～11）、掘立柱建物3棟（SB12～14）、溝3条（SD15～17）がある。SB12・13とSD17を第1遺構面、SH6・8とSD15・16を第3遺構面、SH7・9～11とSB14を第4遺構面で検出した。



第111図　飛鳥時代遺構配置図（1：400）

a．竪穴住居

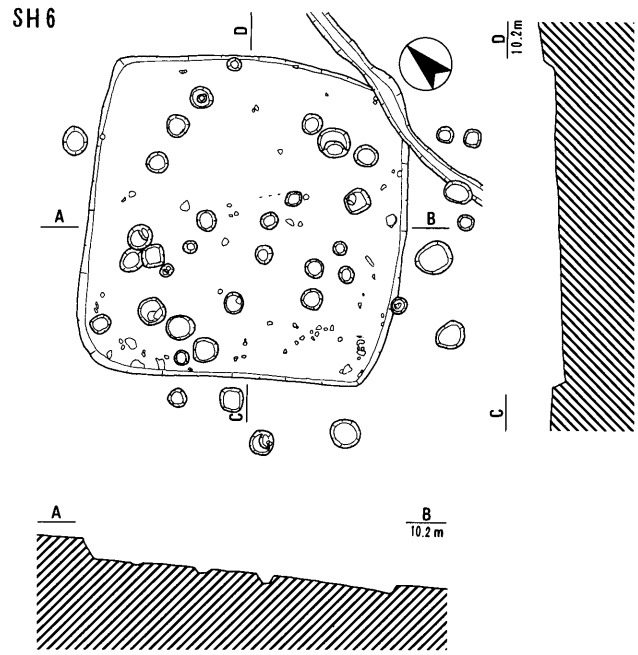
ＳＨ６　調査区のほぼ中央部で検出した。隅丸方形のプランをもち、北西－南東4.2ｍ×北東－南西4.3ｍの規模である。周溝は検出されず、主柱穴は３カ所まで確認できた。東角をＳＤ15によって切られる。

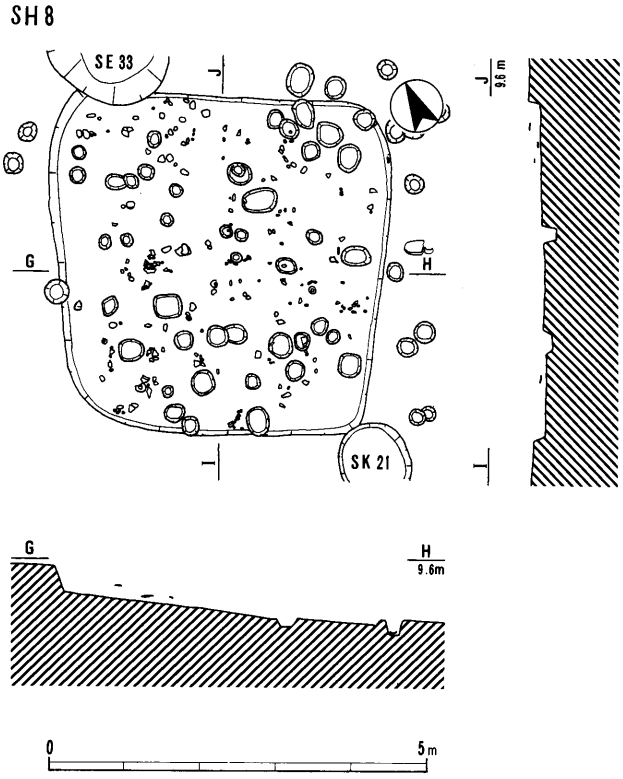
７世紀代の土師器甕、須恵器杯蓋・杯身等が出土している。遺物量は、竪穴住居中最も多い。

ＳＨ７　調査区中央東寄りで、竪穴住居の北壁全部と東・西壁の一部を検出した。南半分以上は流失したと考えられる。規模は北辺部分で東西5.1 ｍ。隅丸方形のプランであったと思われる。北壁中央で竈が検出された。竈からは煙道が北に延びる。また、東辺では周溝が検出されたが、他の辺での周溝の有無は不明である。なお、検出時の状況から１回の建て替え、または拡張の可能性がある。

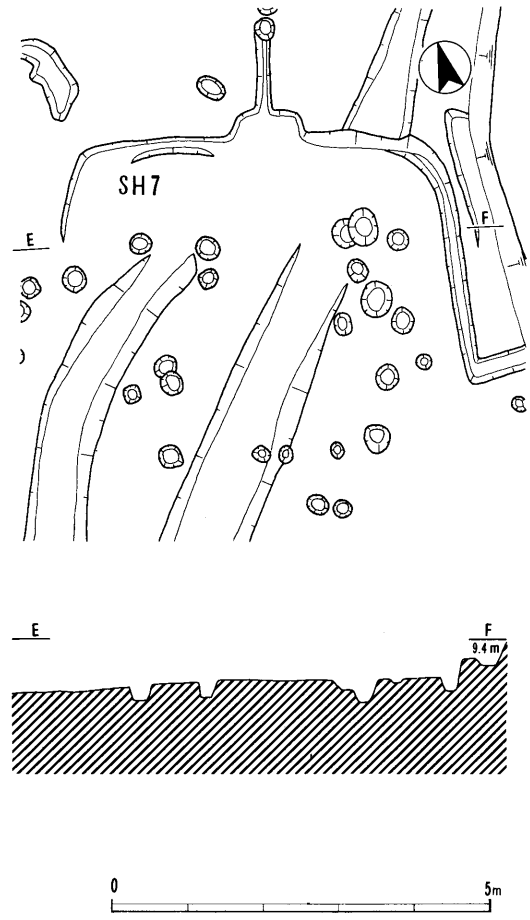
７世紀前葉～中葉の須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器甕等が出土しているが、図化できるものはなかった。

ＳＨ８　調査区の中央部、ＳＨ６の南で検出した。北西角をＳＥ33によって、南西角をＳＫ21によって切られている。南北4.5ｍ、東西は北壁で4.5ｍ南壁で4.0ｍの規模で、ややいびつではあるが、基本的

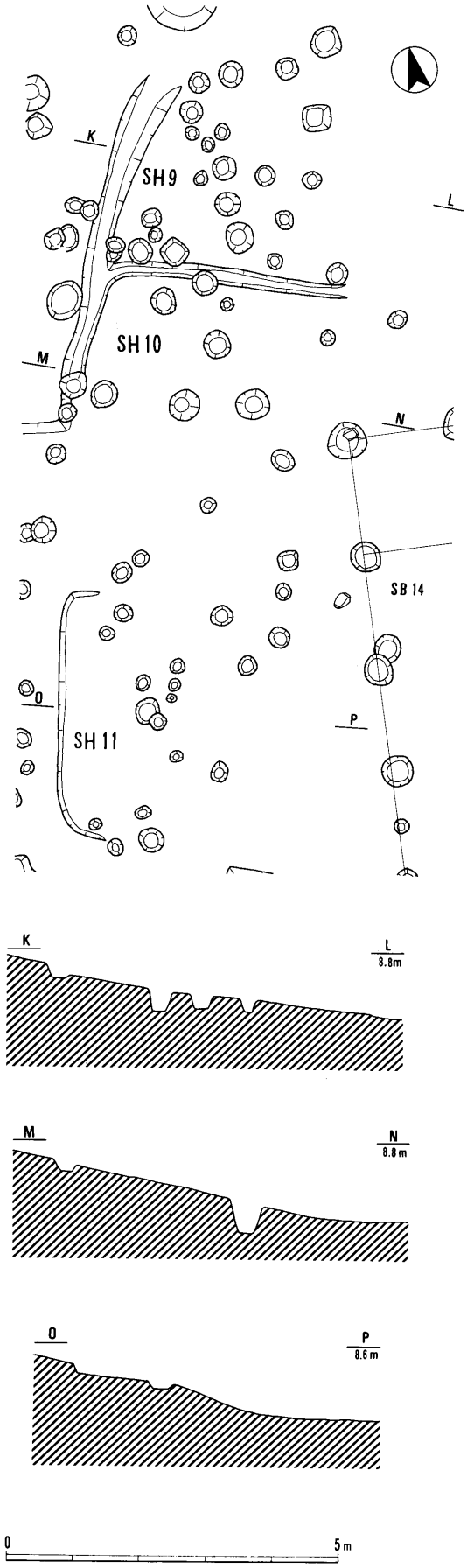




第112図　ＳＨ８実測図（１：100）



第113図　ＳＨ６・７実測図（１：100）



第114図　ＳＨ９～11実測図（１：100）

には隅丸方形のプランをもつ。検出面から床面までの深さは10～30cmである。周溝は検出されず、主柱穴は特定できなかった。

７世紀中葉の須恵器杯身のほか、須恵器高杯、土師器甕、鉄鏃が出土している。

ＳＨ９～11　調査区南壁の中央に近いところで、南北にならんだ形で３棟検出した。検出したのはＳＨ９の西側周溝の一部、ＳＨ10の西側・北側の周溝の一部、ＳＨ11の西壁であり、他の部分は土砂の流失により削り取られていると思われる。プラン及び規模については、ＳＨ10・11が隅丸方形、ＳＨ11の南北が3.8ｍという以外は不明である。なお、ＳＨ10がＳＨ９を切る関係にある。

出土遺物は、ＳＨ９・10から７世紀代の須恵器杯身・高杯が、ＳＨ11から須恵器杯蓋・土師器甕の他図化できなかったが須恵器台付壺が出土している。

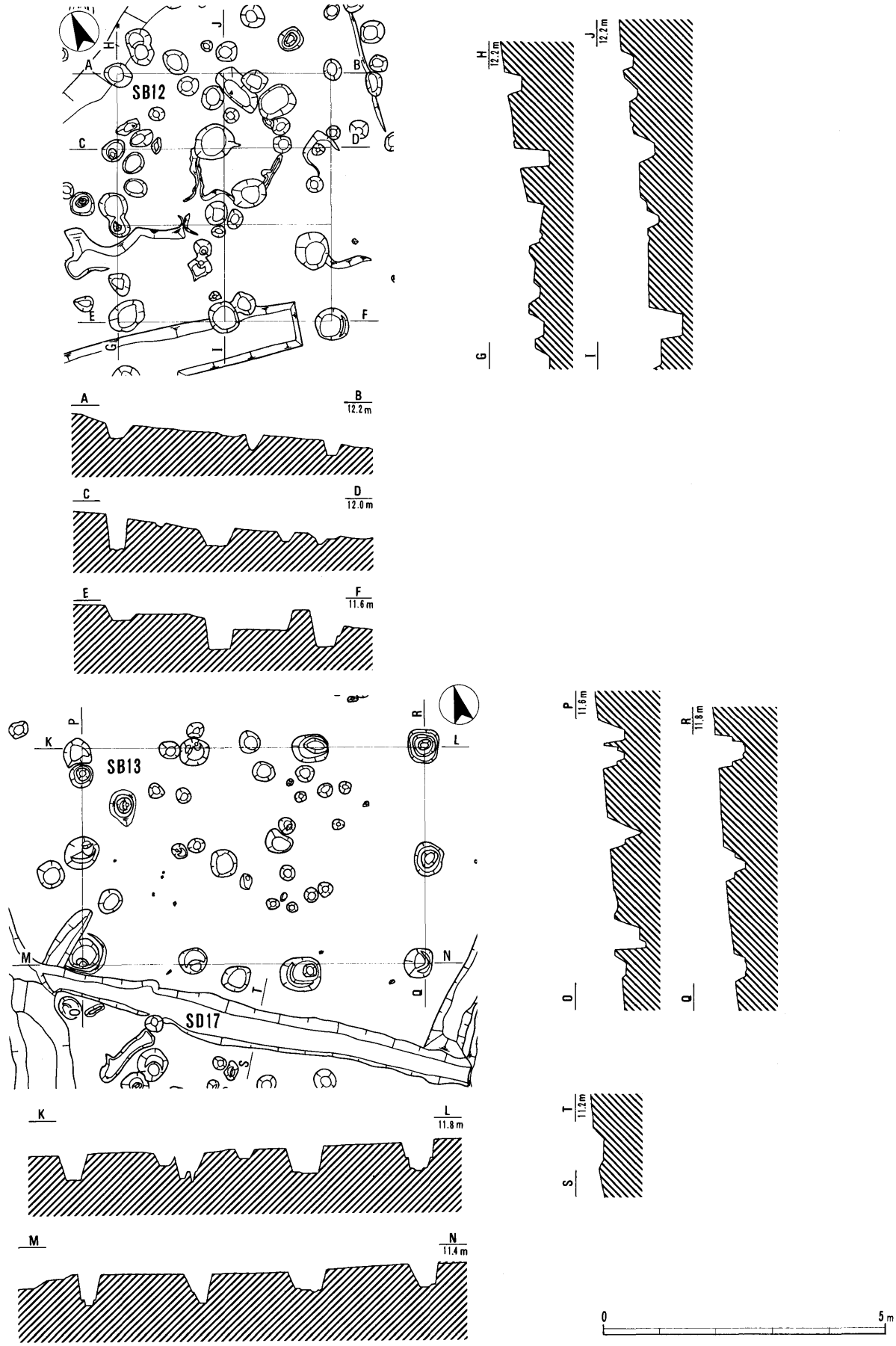
ｂ．掘立柱建物

ＳＢ12　調査区の北西で検出した。桁行３間（4.5ｍ）×梁行２間（3.8ｍ）、棟方向Ｎ26°Ｅの総柱建物である。柱間は、桁行が北から1.4＋1.4＋1.7ｍ、梁行は1.9ｍの等間である。柱掘形は円形で検出されているが、方形であったと思われるものもある。柱掘形の直径は40cm～70cm。

ＳＢ13　調査区の北東で検出した。桁行３間（6.0ｍ）×梁行２間（4.0ｍ）、棟方向はＮ74°Ｗである。柱間は、桁行・梁行とも等間で2.0ｍである。柱掘形は隅丸方形と思われるが、円形に近い状態で検出されたものもある。北西角のピットを除いて柱痕跡が検出されている。柱掘形の大きさは、一辺（直径）50～70cmである。

ＳＢ12とＳＢ13とは、棟方向のずれ等から、関連はうすいと思われる。しかし、ＳＢ13の南にあるＳＤ17とＳＢ12とは、ＳＢ12の梁方向（Ｎ64°Ｗ）とＳＤ17の方向（Ｎ62°Ｗ）がほぼ同じであること、ＳＢ12の南の梁を東に延長した位置にＳＤ17があることから何らかの関連があると考えられる。

ＳＢ14　調査区南辺の中央部付近で検出した。ＳＨ10・11のすぐ東側にあたる。桁行４間（6.75ｍ）×梁行２間（3.3ｍ）で、Ｎ７°Ｅの南北棟になる。柱間は桁行が北から1.8＋1.65＋1.65＋1.65ｍ、梁行が1.65ｍの等間である。土砂の流失・堆積の関係で



第115図　ＳＢ12・13，ＳＤ17実測図（１：100）

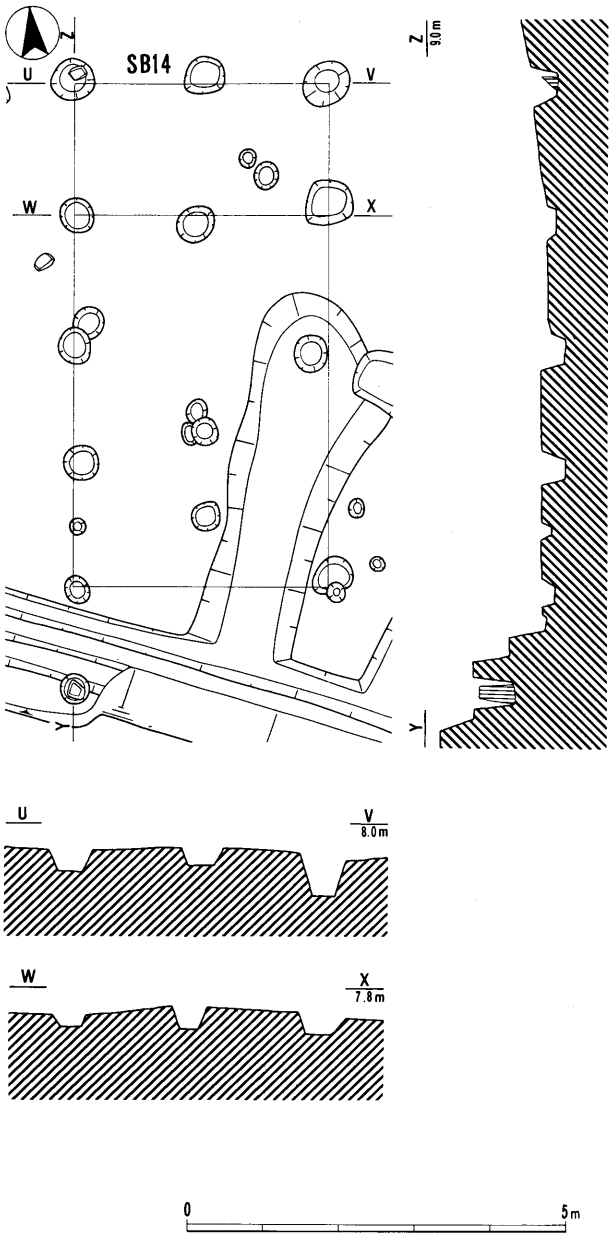
南半分特に南東部のピットが全部は検出されず、総柱建物か否か確定できない。また、3間×2間の建物に、北に1間ずれた形でもう1棟が重複していた可能性も捨てきれない。柱掘形は円形で、直径は35～55cm。北西角の柱穴には柱根が残る。

c．溝

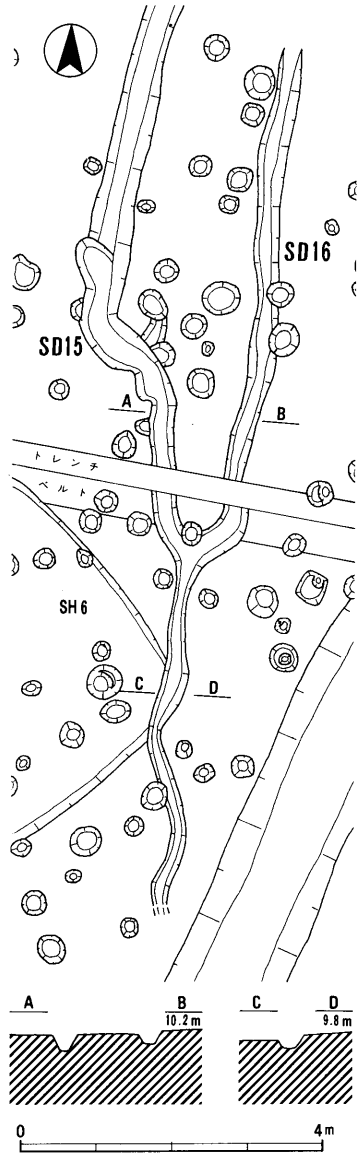
ＳＤ15・16　調査区の中央付近で検出した。2つの溝はほぼ平行して北から南に流れ、ＳＨ6の東で合流し、その2ｍ南でＳＨ6の東角を切って、蛇行しながらさらに南に続き、やがて検出できなくなる。合流部での切り合い関係は不明である。また、ＳＤ15の北に延びる溝は近世以降の耕作に伴う排水溝と思われ、ＳＤ15とは別のものである。ＳＤ16も北の方では検出されなかった。ＳＤ15・16とも幅は20～80cm、検出面からの深さは15～20cmである。

遺物は、ＳＤ15から須恵器杯蓋・身、土師器甕、鉄鎌片が出土しているが、図化できるものはなかった。

ＳＤ17　調査区の北西部で検出した。等高線に平行する形の溝だが、強いて言えば西に向かって流れると思われる。西の端はＳＤ51に切られており、検出した長さは7.8ｍ、幅50～70cm。検出面と溝の底との差は北側（斜面上）で20cm、南側（斜面下）で4cmである。前述のようにＳＢ12との関連が考えられるほか斜面を流れてくる雨水を受け止める働きをし



第116図　ＳＢ14実測図（1：100）



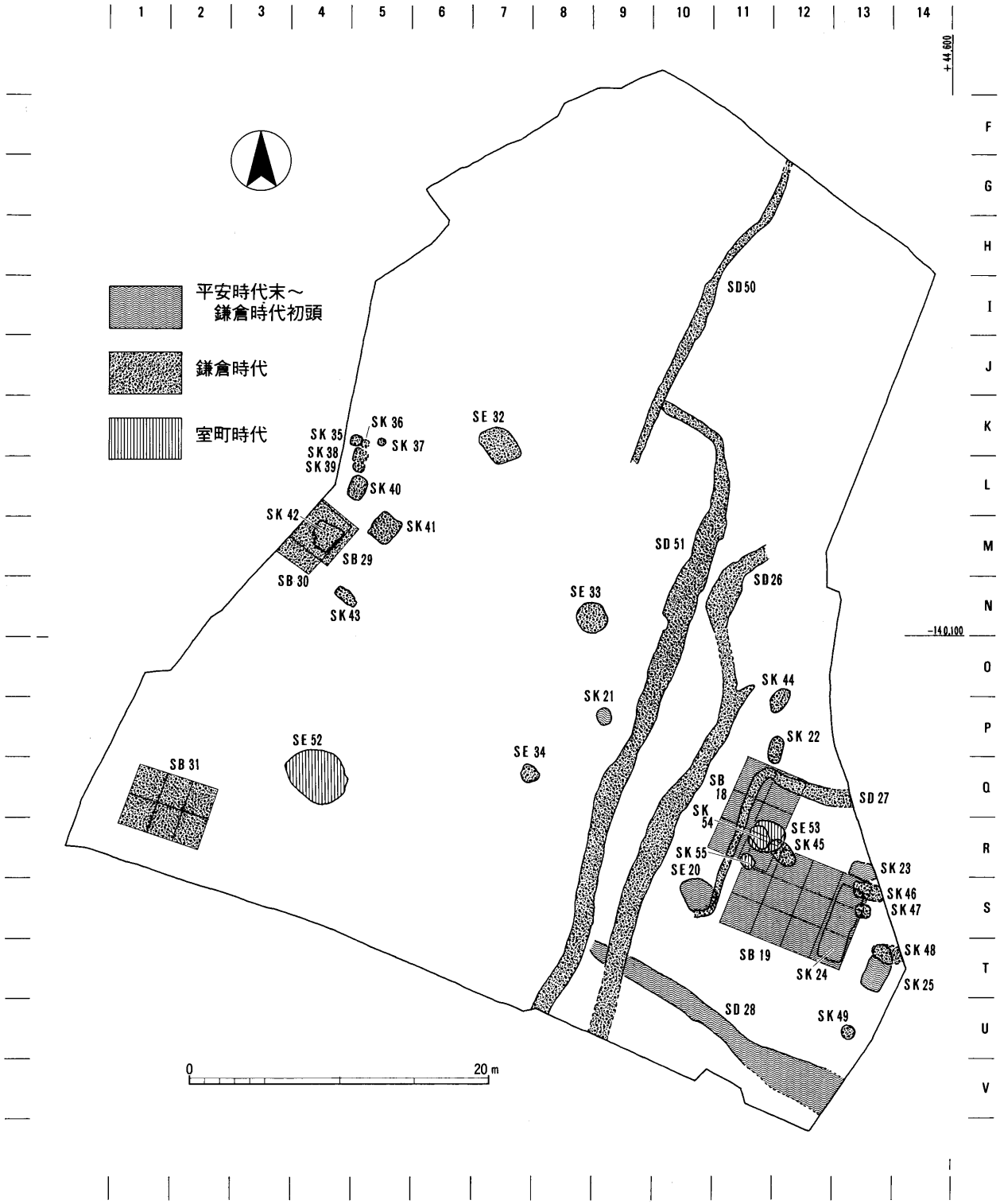
第117図　ＳＤ15・16実測図（1：100）

ていたと考えられる。

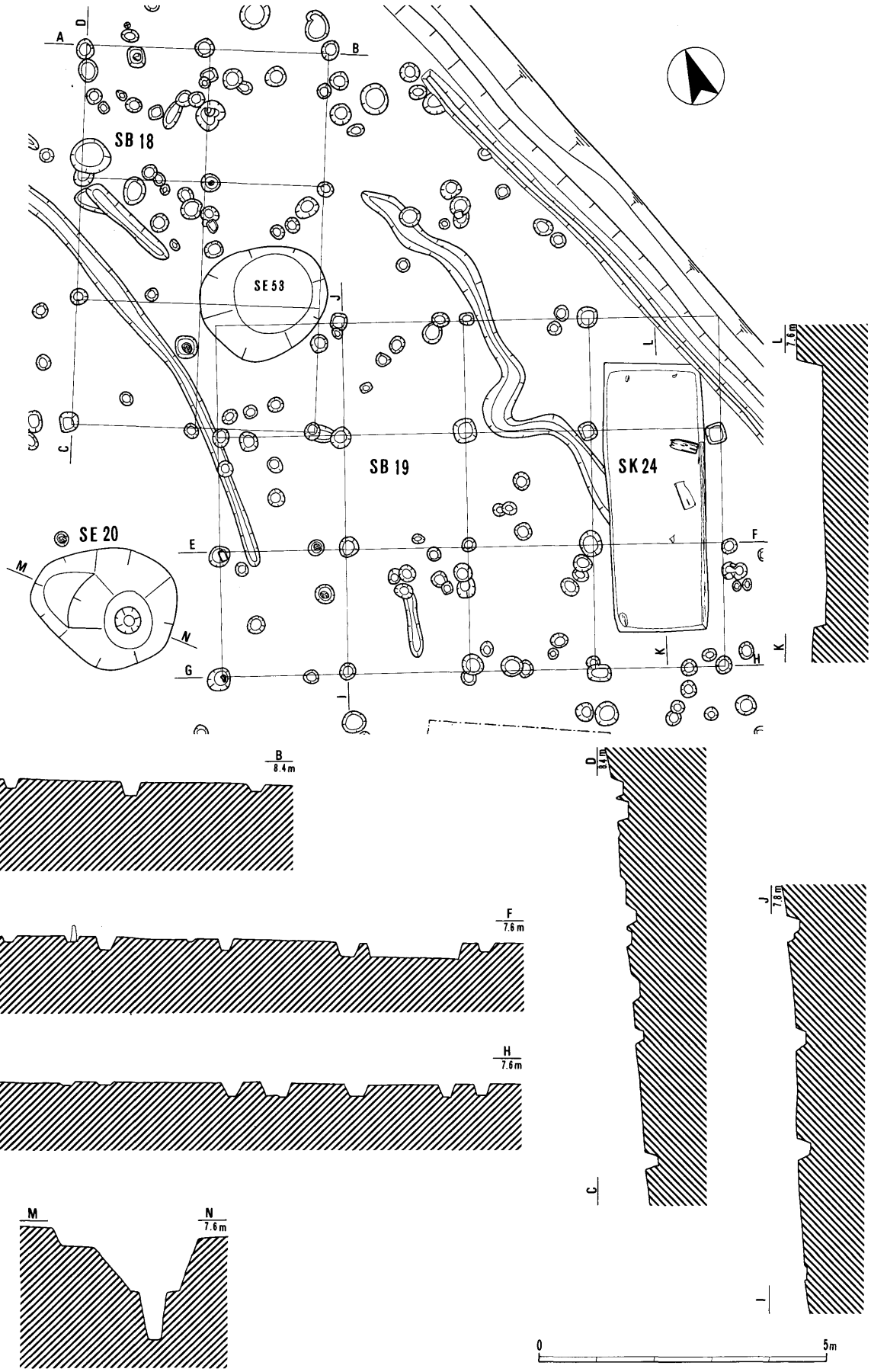
D．平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構

主として12世紀末～13世紀初頭の遺構・遺物をここでは平安時代末～鎌倉時代初頭として報告する。ただし、一部には12世紀中葉～13世紀中葉の範囲のものも含んでいる。

この時代の遺構としては、掘立柱建物２棟（ＳＢ18・19）、井戸１基（ＳＥ20）、土坑４基（ＳＫ21・23～25）、溝１条（ＳＤ28）がある。ＳＫ23を第１遺構面、ＳＫ21・24～25とＳＤ28を第３遺構面、ＳＢ18・19とＳＥ20を第４遺構面で検出した。



第118図　中世遺構配置図（１：400）

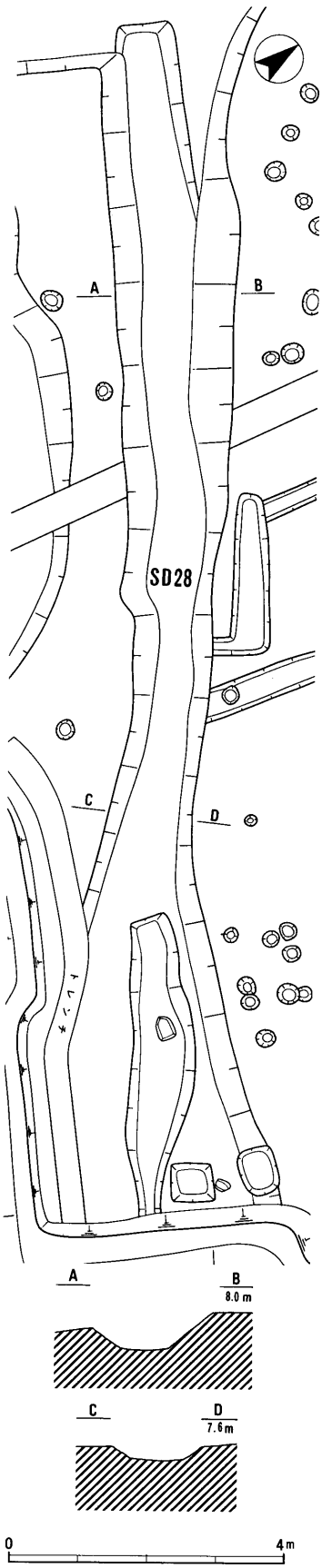


第119図　ＳＢ18・19、ＳＥ20、ＳＫ24実測図（１：100）

a．掘立柱建物

ＳＢ18　調査区の南東で検出した。桁行３間（6.6ｍ）×梁行２間（4.2ｍ）の総柱建物で、N23°Ｅのほぼ南北棟になる。柱間は、桁行が北から2.4＋2.1＋2.1ｍ、梁行は等間で2.1ｍである。柱掘形のプランは円形で、直径30cm内外である。

ＳＢ19　調査区の南東で、一部ＳＢ18に重複する形で検出した。桁行４間（8.7ｍ）×梁行３間（6.1ｍ）の総柱建物で、N70°Wのほぼ東西棟になる。柱間は、桁行が東から2.25＋2.15＋2.15＋2.15ｍ、梁行が北から1.95＋1.95＋2.2ｍである。柱掘形のプランは円形・方形両様あるが、いずれも直径または一辺20～40cmのものである。一部柱根の残るピットもある。



第120図　ＳＤ28実測図（１：100）

なお、ＳＫ24はＳＢ19に伴うもので、最東部の桁行１間分と梁行３間分を占める。そのため桁行最東部の柱間は若干広くなっている。

b．井戸

ＳＥ20　調査区の南東、ＳＢ19のすぐ西側で検出した。素掘りの井戸で、長径2.5ｍ×短径1.4ｍのたまご形のプランを持つ。深さは2.0ｍである。

出土遺物には、７世紀後半～８世紀前半の須恵器や土師器が見られるが、これらは土砂の流入時に混入したものと思われる。井戸の時期としては、山茶椀（図化できるものはなかったが、藤澤編年[2]で第４型式の段階のものがみられる。中心は第５・第６型式である。（以下山茶椀・山皿の編年については同氏のものを使用する。）、山皿（第６型式）、ロクロ土師器等から、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

c．土坑

ＳＫ21・23～25　ＳＫ21は調査区の中央付近でＳＨ８の南東角を切るようなかたちで、ＳＫ23～25は調査区の南東部で検出した。ＳＫ21からは、土師器皿（直径９cm、器高1.8cm前後）、土師器鍋、山茶椀が出土しており、時期的には12世紀後葉～末のものである。ＳＫ24は第３遺構面で検出されているが、掘り下げた結果第４遺構面検出のＳＢ19の東部分を占めていることが分かった。このためＳＢ19に伴う土坑で貯蔵庫のようなものであったと考えられる。東側の壁面には長さ3.2ｍ幅40cmの板材が残っていた。土師器皿、山茶椀（第５型式）、白磁椀が出土している。ＳＫ25（第３遺構面検出）の上層にはＳＫ48（第１遺構面検出）があるが、これらが検出された調査区南東部では間に第２遺構面があり、ＳＫ25と48は別のものである。ＳＫ25・48ともに図化できる遺物はなかったが、ＳＫ25出土の山茶椀が第５型式であり、ＳＫ48出土のものは第６型式である。

なお、各土坑の詳細については、土坑一覧表（第22表）を参照されたい。

d．溝

ＳＤ28　調査区の南東端で検出した。北西から南東に流れる溝で、検出した長さは17.6ｍ。さらに南東調査区外に延びる。幅は1.2ｍだが、南東部ではしだいに広くなる。検出面からの深さは20～30cmであ

る。

図化できる遺物はなかったが、土師器皿、山茶椀（第５型式）等が出土している。

Ｅ．鎌倉時代の遺構

13世紀前葉から14世紀前葉の遺構・遺物をここでは鎌倉時代として報告する。全体としては13世紀代のものがほとんどである。

この時期の遺構としては、掘立柱建物３棟（ＳＢ29～31）、井戸３基（ＳＥ32～34）、土坑16基（ＳＫ22・35～49）、溝４条（ＳＤ26・27・50・51）がある。ＳＫ49とＳＤ27を第３遺構面、ＳＥ32を第４遺構面で検出した以外はすべて第１遺構面での検出である。

ａ．掘立柱建物

ＳＢ29　調査区の西壁中央付近で検出した。２間以上×２間（3.1ｍ）の建物である。棟方向は不明だが、仮に２間以上の方を桁行とするとＮ53°Ｅになる。柱間は２間以上の方が2.1ｍ、２間の方が1.55ｍである。柱掘形は、他のピットなどとの重複で形のくずれたものもあるが、基本的には円形で直径は30cm前後である。

ＳＢ30　調査区の西壁中央付近でＳＢ29と重複するように検出した。検出されたのが３間（4.35ｍ）×２間以上である。棟方向は不明だが、仮に３間を桁行とすると、Ｎ40°Ｅになる。柱間は３間の方が1.45ｍ、２間以上の方が1.4ｍである。柱掘形はＳＢ29同様くずれたものもあるが、直径30cm程の円形である。

ＳＢ31　調査区の南西部で検出した。桁行３間（5.5ｍ）×梁行２間（4.2ｍ）で、Ｎ72°Ｗのほぼ東西棟である。柱間は桁行が西から2.0＋1.75＋1.75ｍ、梁行が2.1ｍの等間である。柱掘形は基本的には円形で、直径は30～50cmである。

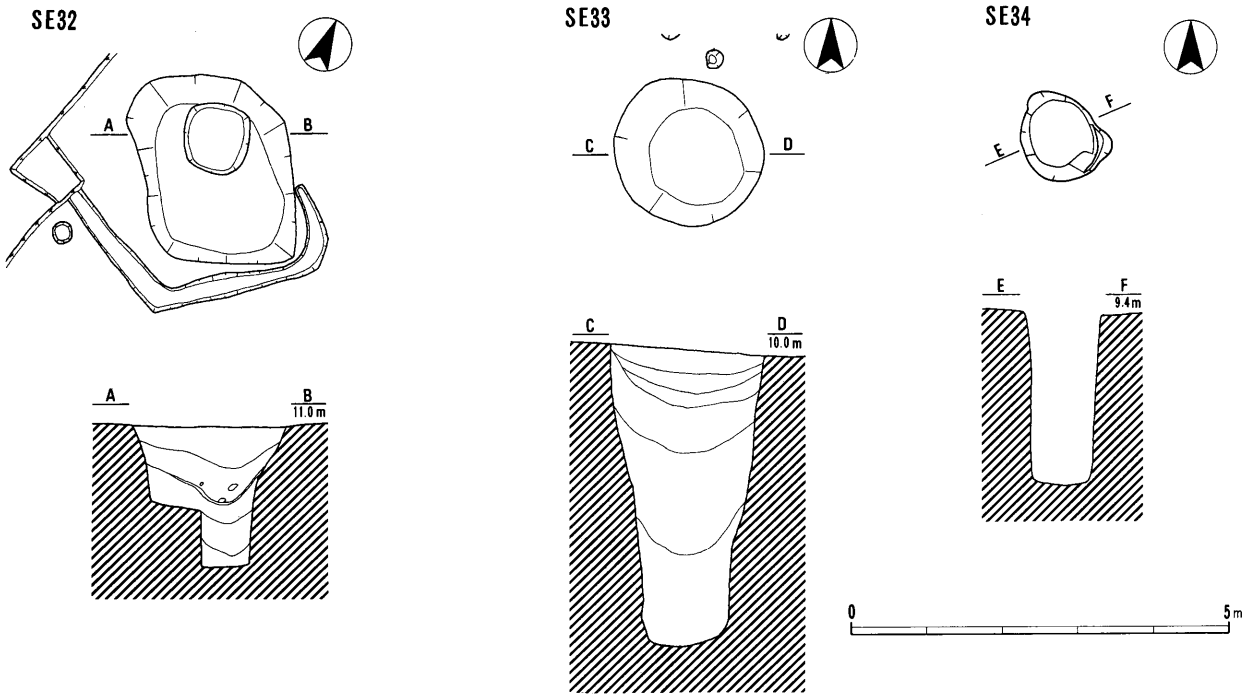
ｂ．井戸

ＳＥ32　第５遺構面の西端で検出したが、これは調査区全体では中央やや北西寄りになる。掘形は長辺2.5ｍ×短辺2.0ｍのほぼ隅丸長方形である。検出面から深さ1.1ｍでその北西部をさらに掘りくぼめる（直径0.8ｍ）。全体の深さは1.8ｍである。

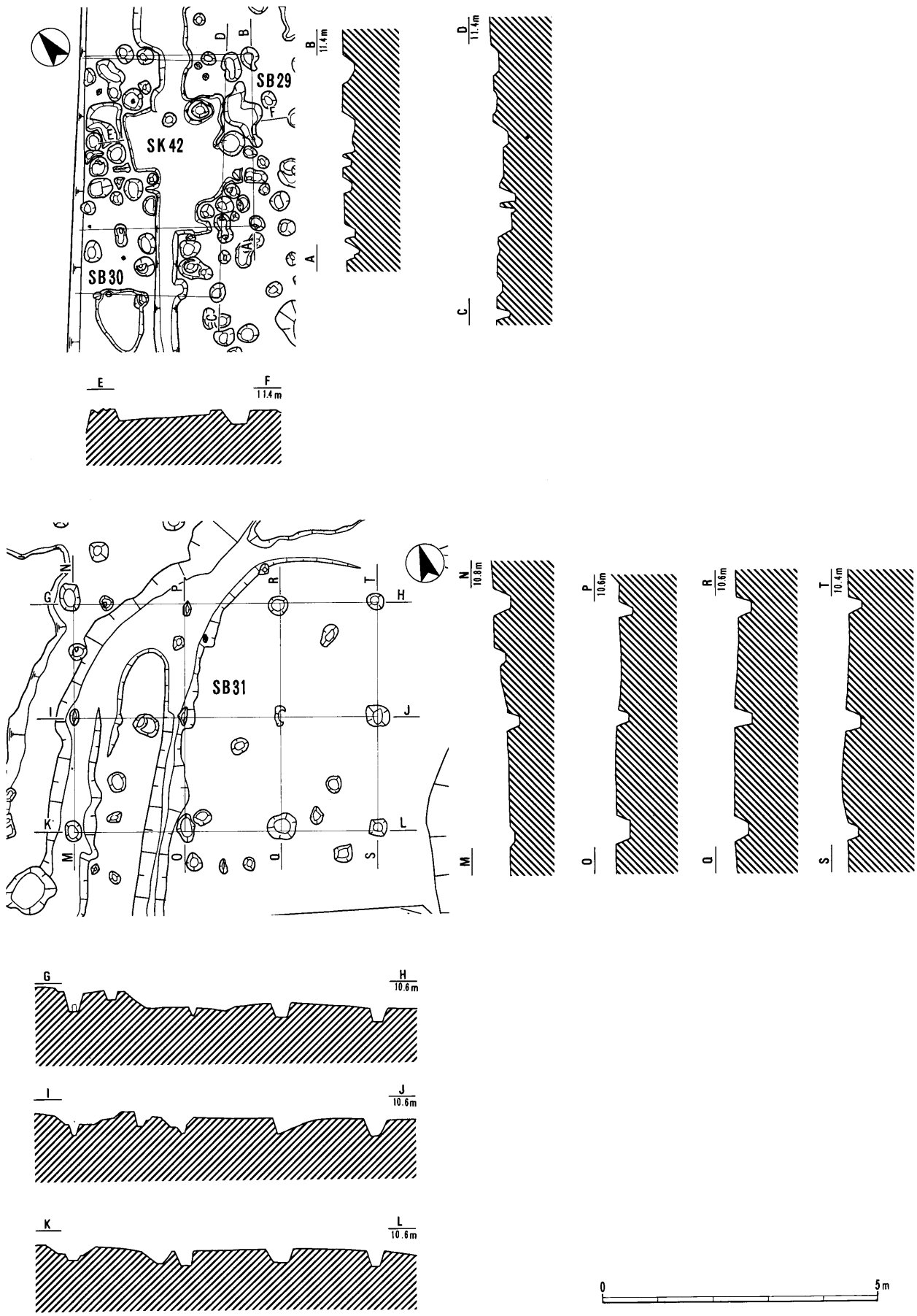
遺物は特に上層の部分から多く出土しており、土師器皿・鍋・羽釜、山茶椀、瀬戸美濃おろし皿、常滑甕等がみられる。

ＳＥ33　調査区の中央部で検出した。プランは円形で直径2.2ｍ、深さ4.0ｍの素掘りの井戸である。

出土遺物のうち須恵器杯身・杯蓋、土師器甕は混入品であろう。（混入元としてはＳＨ８及びＳＨ６が考えられる。）鎌倉時代の出土遺物としては羽釜の他、図化できなかったが山茶椀（第７型式）があ



第121図　ＳＥ32～34実測図（１：100）



第122図　ＳＢ29～31、ＳＫ42実測図（１：100）

る。

ＳＥ34　調査区中央部やや南寄りで検出した。プランはややくずれてはいるがほぼ円形で直径1.0ｍ、深さ2.2ｍの素掘りの井戸である。

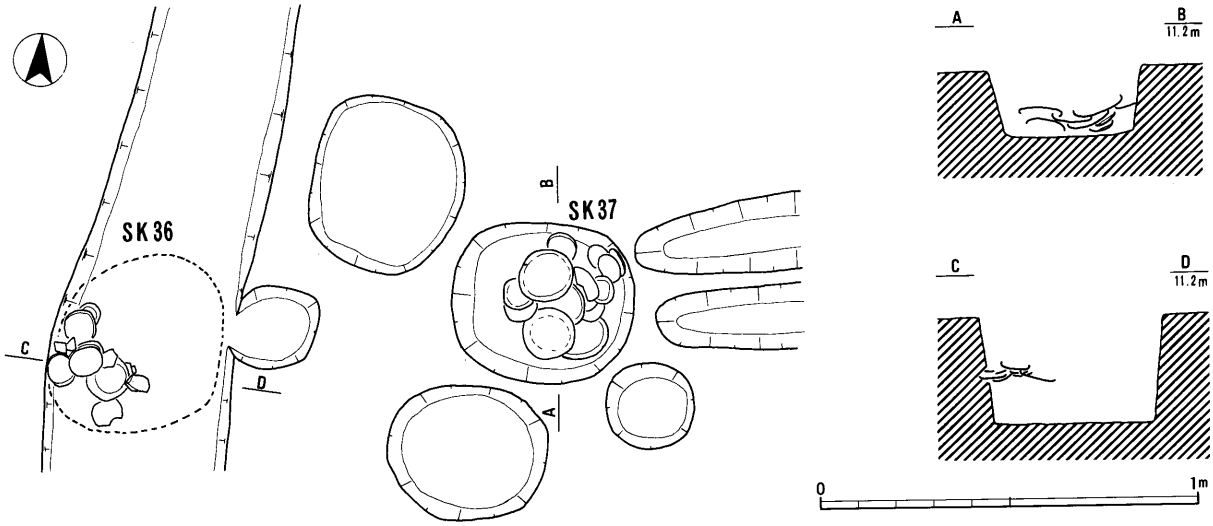
出土遺物は、底部外面に「西」と読める墨書のある山茶椀（第６型式）がある。

ｃ．土坑

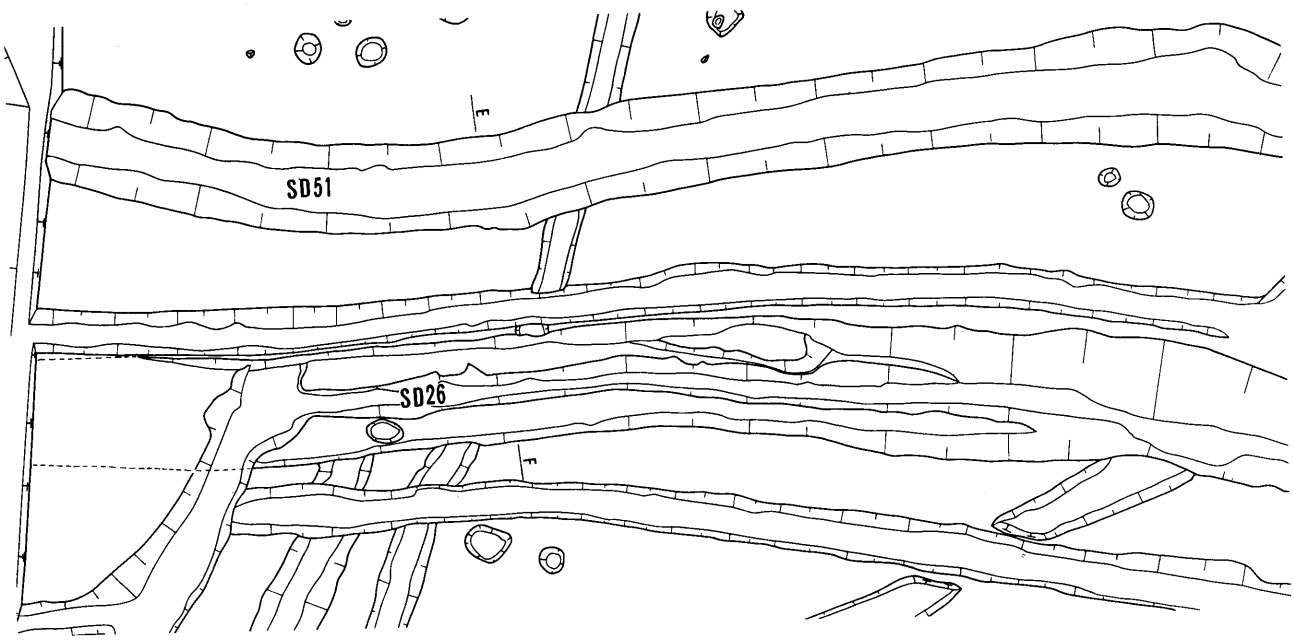
ここでは特徴的なもののみを述べる。各土坑の詳細については土坑一覧表（第22表）を参照。

ＳＫ35～40　調査区の西壁中央部分で検出した。トレンチによって切られているが、ＳＫ36・37を除いてほぼ南北に連なる。ＳＫ35～38を中心に土師器の皿が多量に出土している。土師器皿は、直径８㎝・器高１㎝程度のものと、直径13～14㎝・器高３㎝程度のものの２つに大別できる。ＳＫ35・38では山皿（いずれも第７型式）が伴出している。

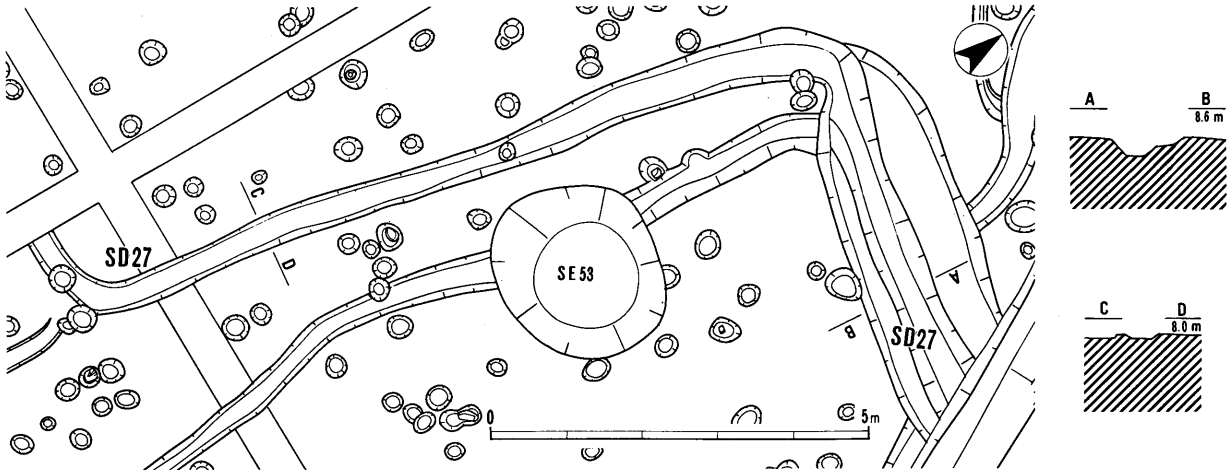
ＳＫ41・42　ＳＫ40の南でほぼ東西にならぶように検出された。ＳＫ41は長方形の土坑である。ＳＫ42



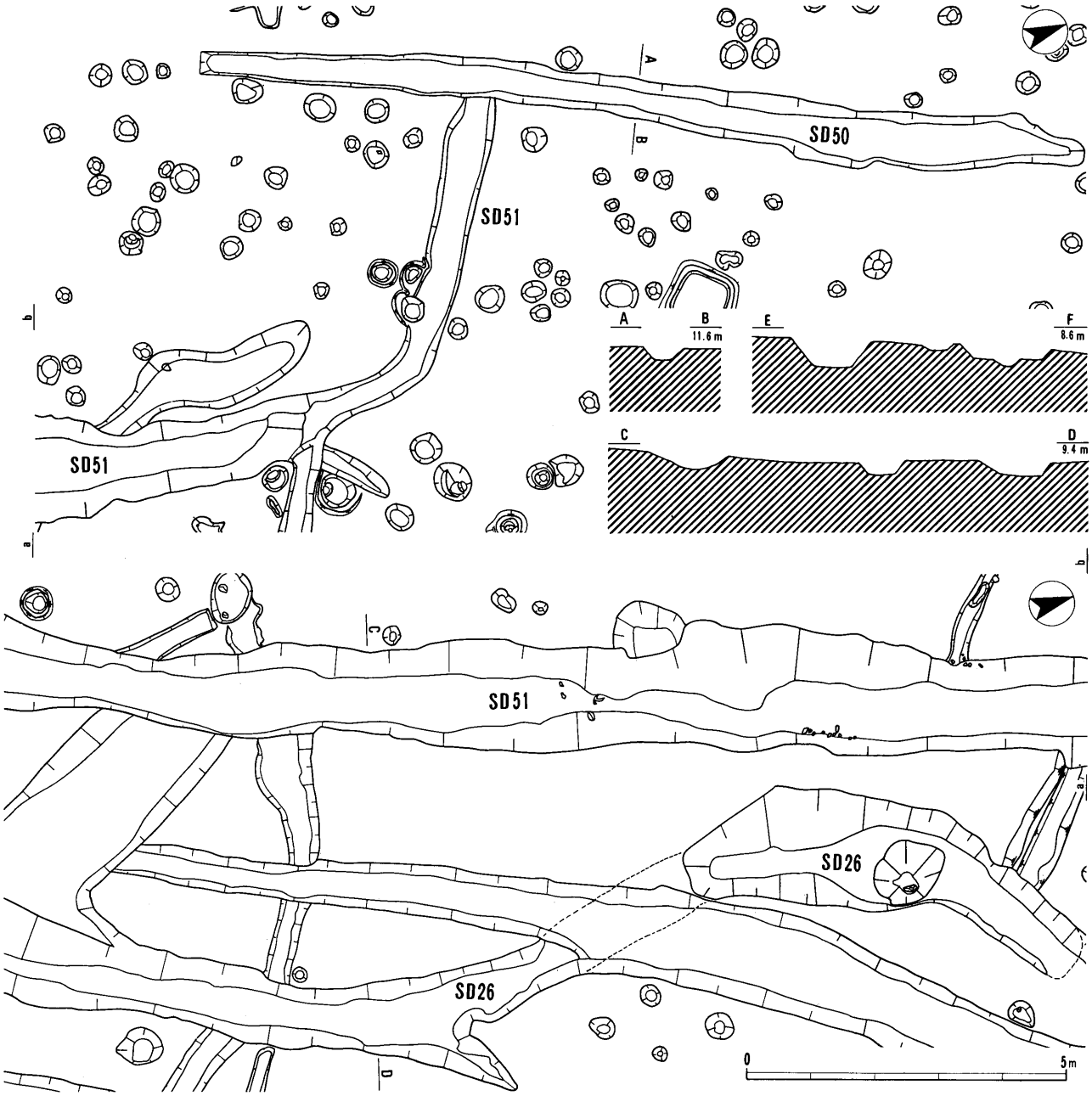
第123図　ＳＫ36・37遺物出土状況図（１：20）



第124図　ＳＤ26・50・51実測図（１：100）



第125図　ＳＤ27実測図（１：100）



もピットやトレンチなどで形がくずれているが、同様の形であったと思われる。ＳＫ42はＳＢ29・30いずれかの掘立柱建物に伴う土坑であろう。

なお、調査区の南東部では主として第１遺構面において隅丸長方形ないし楕円形の土坑が集中する感がある。

ｄ．溝

ＳＤ26　調査区の東方を北から南に流れる。検出した長さは34.3ｍ、幅1.1～1.5ｍ、検出面からの深さ30㎝である。13世紀前半代を中心とした多量の山茶椀・山皿、土師器皿、鍋（伊藤編年１段階ｂ[③]以下土師器鍋――南伊勢系の鍋――の編年については同氏のものを使用）、白磁皿、常滑産（？）壺・甕等が出土している。なお、ＳＤ26はＢ地区へ延びない。

ＳＤ27　調査区の南東部で検出した。初め西流、次いで南へ、更に再び西に流れる。検出した長さは16.3ｍ、幅0.4～1.0ｍ、検出面からの深さ10～30㎝で、山茶椀・山皿（第６型式）、土師器鍋（１段階ｂ）等が出土している。

ＳＤ50　調査区の北部で検出した南流する溝である。南方がとぎれたようになっているのは、土砂の流出で削られたためであろう。検出した長さは13.8ｍ、幅0.7ｍ、検出面からの深さ20㎝。山茶椀（第６型式）が出土している。

ＳＤ51　初め東流するがすぐに南に向きを変え、調査区の中央よりやや東寄りを南北に縦貫する。上端部はＳＤ50に切られる。検出した長さは44.0ｍ、幅0.6～1.5ｍ、検出面からの深さ30～50㎝で、下流に行くに従い広く深くなる傾向にある。土師器の皿・鍋（１段階ｂ）・羽釜、多量の山茶椀・山皿（第６～７型式が中心）、常滑産甕等が出土している。

Ｆ．室町時代の遺構

この時期になると遺構・遺物ともに少なくなる。遺構としては井戸２基（ＳＥ52・53）および土坑２基（ＳＫ54・55）がある。ＳＥ52とＳＫ54・55を第１遺構面、ＳＥ53を第３遺構面で検出した。

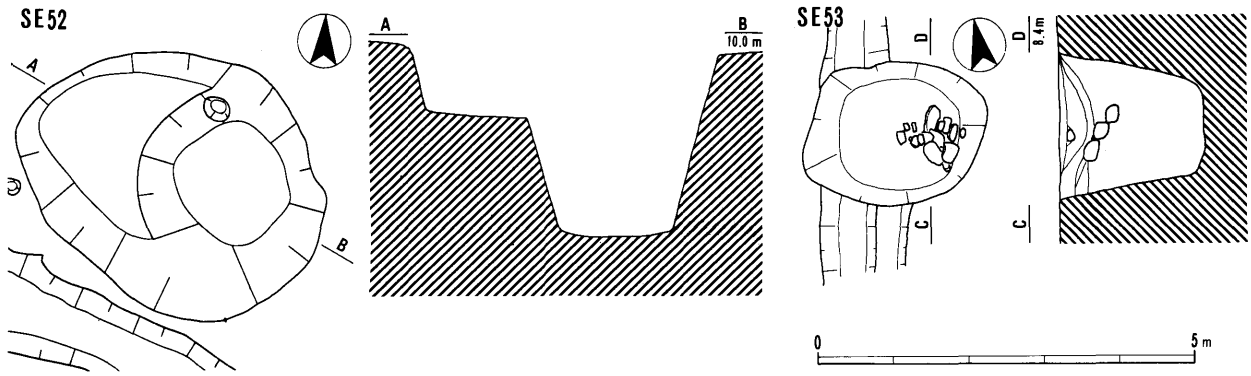
ａ．井戸

ＳＥ52　調査区南西部で検出した。掘形のプランはたまご形で、長径4.3ｍ×短径3.3ｍである。検出面から0.9ｍで岩盤となるため、直径2.6ｍでさらに掘り下げている。全体の深さは2.6ｍになる。埋土上層から土師器皿・鍋（３段階ａ～ｂ）、常滑産甕等が多量に出土している。

ＳＥ53　調査区の南東部で検出した。プランはほぼ円形で、直径2.0ｍ検出面からの深さ1.9ｍの素掘り井戸である。出土遺物には室町時代の五輪塔空風輪や図化できなかったが15世紀末～16世紀初の常滑産鉢があり、井戸の時期としてはこれらの方であろう。図化した山皿（12世紀中葉～後葉）は混入品と考えられる。

ＳＫ54・55　いずれも調査区南東部で検出した。詳細は土坑一覧表（第22表）を参照されたい。

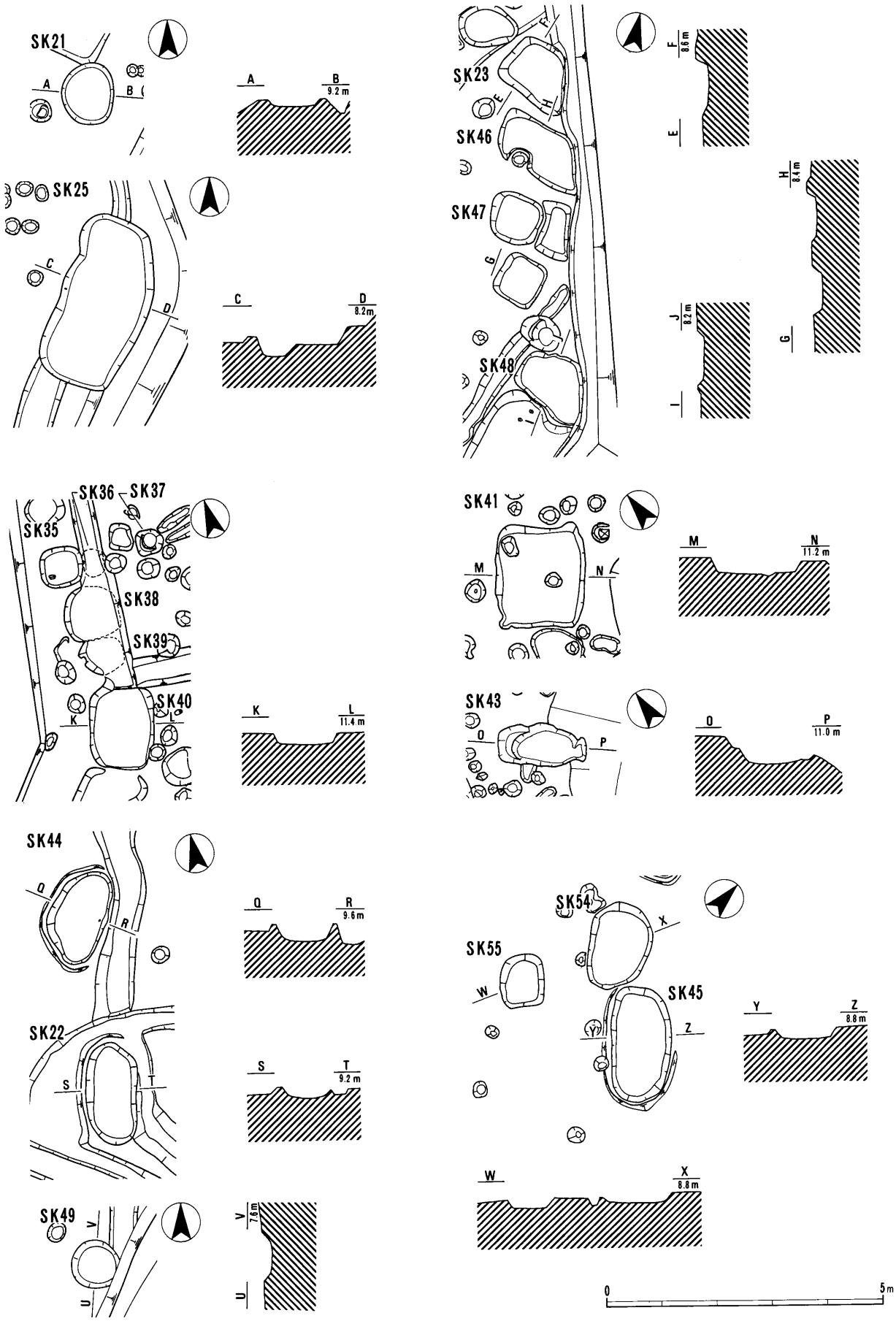
（本堂弘之）



第126図　ＳＥ52・53実測図（１：100）

遺構番号(SK)	時　期	検出面	平面形	規　模(m)	検出面からの深さ(cm)	出土遺物	図版番号	備　考
1	縄文中期末	5	円　形	直径1.3	13	深鉢	102	
21	12後葉～末	3	円　形	直径1.0	10	土師器小皿・鍋、山茶椀	127	
23	12C末～13C初	1	長方形？	短辺1.0	15～20	土師器鍋、ロクロ土師器、山茶椀	〃	
24	〃	3～4	長方形	短辺1.7×長辺4.7	20～40	土師器皿、ロクロ土師器、山茶椀、白磁椀	119	SB19伴う
25	〃	3	隅丸方形？	〃 1.6×〃 3.2	15	山茶椀	127	
22	13C前半	1	楕円形	短径0.9×長径1.8	20	山茶椀	〃	
35	13C前葉～中葉	1	隅丸方形	一辺0.8	20	土師器小皿、山皿	〃	
36	13C中葉	1	円形？	直径0.5	不明	土師器小皿、山皿	123・127	
37	13C前葉～中葉	1	隅丸方形	一辺0.5	20	土師器小皿・皿	〃	
38	〃	1	隅丸方形？	〃 1.0	25	土師器小皿、山皿	127	
39	〃	1	円形？	直径0.8	30	土師器皿、山茶椀・山皿、片口鉢、常滑甕	〃	
40	〃	1	隅丸長方形	短辺1.1×長辺1.5	20	土師器小皿・皿、山茶椀	〃	
41	13C中葉～後葉	1	長方形	〃 1.6×〃 1.8	30	土師器皿・鍋、山茶椀・山皿、常滑甕	〃	
42	鎌倉後半	1	長方形？	短辺1.0	10～20		122	SB29または30に伴う？
43	13C中葉～後葉	1	楕円形？	短径0.8×長径1.6	50	山皿、常滑壺（甕？）	127	
44	鎌倉	1	楕円形	〃 1.0×〃 1.8	35		〃	
45	13C前葉～中葉	1	〃	〃 1.1×〃 2.1	20	土師器鍋、山茶椀、五輪塔(空輪、風輪)	〃	
46	13C前葉	1	長方形？	短辺1.0	15	山茶椀	〃	
47	13C前半	1	隅丸方形	一辺0.9	20		〃	
48	〃	1	隅丸長方形？	短辺0.8～1.0	10	山茶椀	〃	
49	13C前葉	3	円　形	直径0.9	15	山茶椀、白磁皿	〃	
54	室町	1	楕円形？	短径1.1×長径1.6	15	土師器鍋	〃	
55	〃	1	隅丸長方形？	短辺0.8×長辺1.0	20		〃	

第22表　土坑一覧表



第127図　土坑実測図（1：100）

（3） 遺 物

出土遺物は、A地区でテンバコ215 箱、B地区で2箱、D地区で1箱の総数218 箱があり、大半がA地区からのものである。このうち、遺構に伴う遺物は90箱で、その内訳は縄文・弥生時代の遺物が14箱、飛鳥時代の遺物が22箱、平安時代末～室町時代の遺物が54箱である。なかでも鎌倉時代前半期の遺物が多く、遺物包含層出土のものも合わせると陶器椀（山茶椀）・陶器皿（山皿）の出土量が他を凌駕している。

ここでは、時期別に個別遺構出土の遺物を中心に概述することとし、個々の遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

A．縄文時代の遺物（1～7）

(a) 土器（1）

図示しうるものとしては、縄文時代の土坑ＳＫ１から出土した1のみである。ＳＫ１からは他に口縁部に隆帯をもつらしい深鉢細片等も出土している。いずれの土器も激しいローリングを受けているため詳細不明であるが、中期末に属するものであろう。

1は、底部破片である。器面風化による剝落が著しいが、辛ろうじて底部外面に網代の痕跡を見ることができる。

(b) 石器（2～7）

いずれの遺物も包含層もしくは時期の異なる遺構から混入した状態で出土したものであり、一括して報告する。

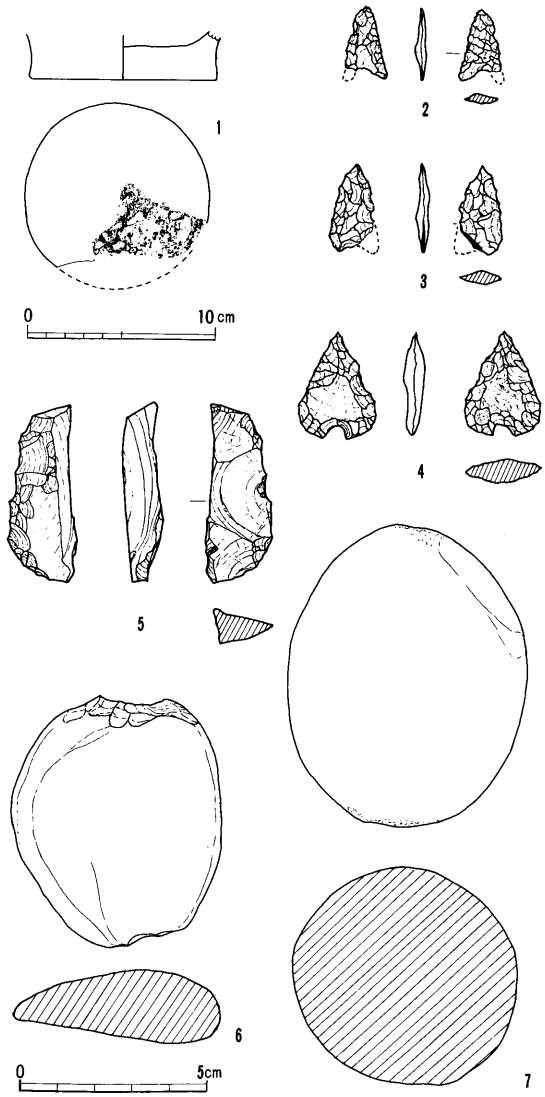
2～4は、サヌカイト製の石鏃である。いずれも凹基無茎鏃である。2～3がやや細長いのに対し、4は扁平で、中央部には自然面を残す。全体に風化が著しい。

5は、黒曜石製の二次加工有剝片である。製品とすればスクレーパーの可能性もあろうが、その場合には、刃部に二次加工を受けていることになる。この個体以外に、黒曜石製のものとして石核1点が存在する。縄文時代黒曜石の三重県下への搬入は、無いことはないが極めて珍しい。

6は、打ち欠き石錘である。上下端を打ち欠いただけの簡単な作りで、同様のものはあと1点出土している。石材は片岩系のものであろう。

7は、砂岩製の敲石である。長径部両端がやや潰れており、使用した痕跡であろう。

（穂積裕昌）



第128図 縄文時代の遺物（1のみ1：4、他は1：3）

B．弥生時代の遺物（8～31）

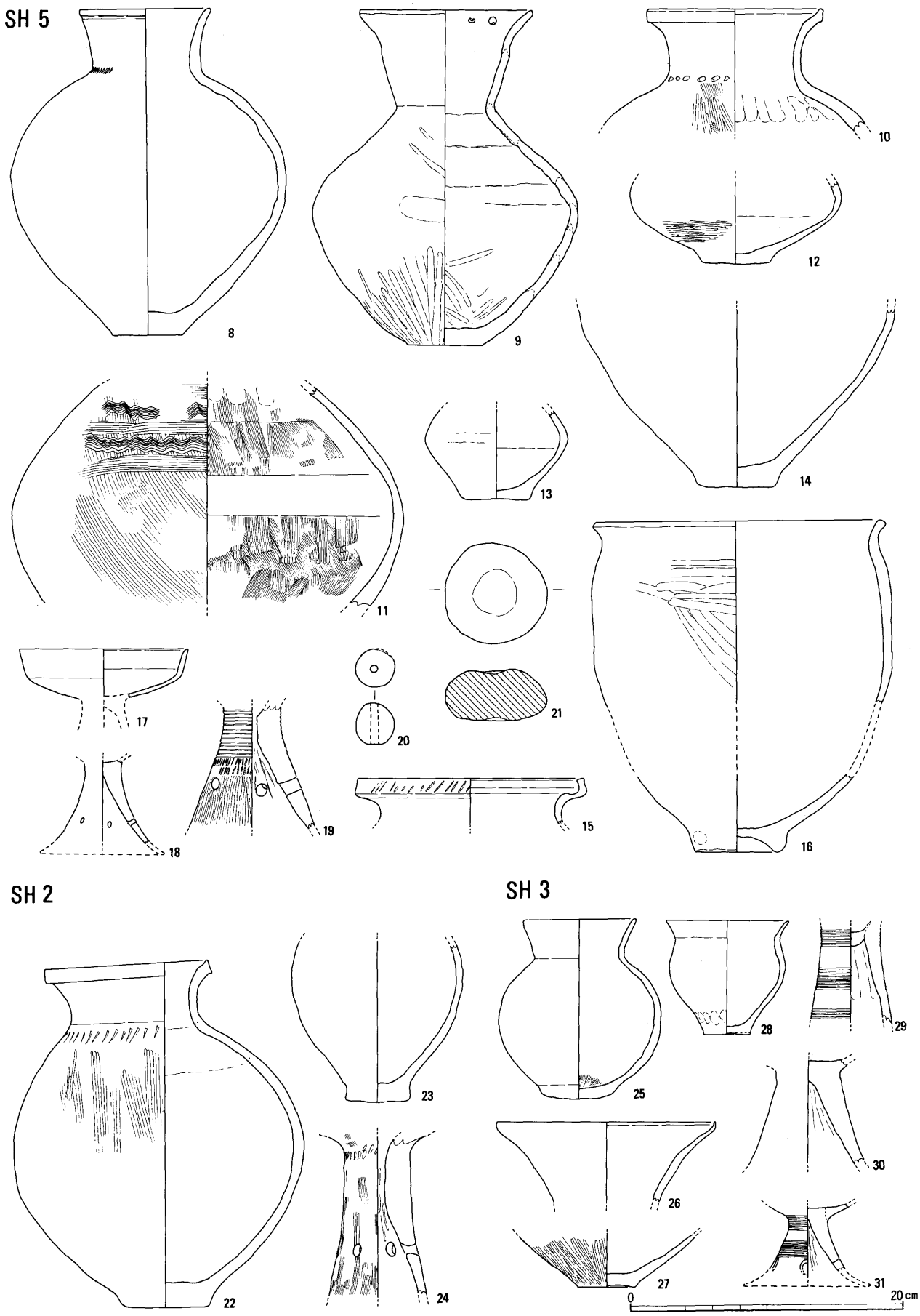
竪穴住居ＳＨ５・ＳＨ２・ＳＨ３から出土の後期初頭から前半にかけての一括遺物がある。

(a) ＳＨ５出土遺物（8～21）

壺、甕、高杯、土錘、叩石等がある。土器類は全体的に器面の磨耗が著しく、調整不明なものが多い。また全形を窺えるのは、壺8・9のみである。

壺類には大形品（11・14）、中形品（8・9・10・12）小形品（13）がある。

中形の広口壺8・9・10は、頸部から口縁部にかけて外反するもので、体部最大径は、体部の中程に



第129図　竪穴住居出土遺物実測図１（１：４）

あり、底部は平底である。口縁端部を丸く仕上げ、直下に一条の沈線を巡らすもの（８）、口縁端部に面を作るもの（10）、頸部をやや長く作るもの（９）が認められる。８・10の頸部と肩部の境には、ヘラまたは細い棒状工具による刺突文が施される。器面の調整は縦ないしは斜め方向のミガキと思われる。

11は大形の壺の体部片である。外面はハケ調整ののち、体部上部に雑な横線文、波状文を交互に施す。内面は細かいハケ調整ののち、中央部を横方向になでる。

12は体部最大径が下位にある壺底部で、横方向のミガキの痕跡がわずかに認められた。

甕には、口縁部が受口状のもの（15）と口縁部の屈曲が弱く、あまり肩の張らない胴長のもの（16）がある。後者の底部は上底の擬高台を呈する。

高杯は、杯部あるいは脚部の破片しかないが、17によれば、杯部は浅く、口縁部は直線的に弱く外傾する。器壁は比較的薄い。この杯部には18のような脚部が付くのであろうか。19の脚部は、脚柱上部に幅の広い櫛描横線文、その下に刺突文を施し、透孔は５方に穿孔される。

（ｂ）ＳＨ２出土遺物（22～24）

壺、高杯のほか、図示しなかったが受口状口縁の甕がある。

口縁部が大きく傾く広口壺22は、ＳＨ５の10と同様、口縁端部の面がシャープで、頸部と肩部の境に刺突文を巡らす。底部は厚く、若干突出する。器面の調整は磨耗が著しいため不明瞭であるが、体部上半で縦のミガキ痕が認められた。小形の壺23も底部が突出する。

高杯24は脚柱部のみの破片である。脚柱部は細長く、杯部との境に刺突文を巡らす。外面は細かいハケメで調整。透孔は６個穿たれる。

（c）ＳＨ３出土遺物（25～31）

壺、甕、高杯等がある。いずれも器面の保存が悪く、調整は不明瞭であるが、壺類はミガキと思われる。

高杯には、脚柱部に櫛描横線文を多用し、円盤充填技法が認められるもの（29）や、脚が短くて、裾部が大きく開き、下位に４個の透孔を有するもの（31）がみられる。31は台付椀もしくは台付壺と呼ばれる脚部かもしれない。

壺27の底部内面には有機物の付着が認められた。

（倉田直純）

Ｃ．古墳時代の遺物（32～33）

６世紀末～７世紀初頭に所属するものは飛鳥時代の遺物として後述するため、ここではそれより前のものについて報告する。当該時期の出土遺物はいずれも包含層からの出土であるが、石製品１点と初期須恵器１点があり、量は少ないものの注目される遺物である。

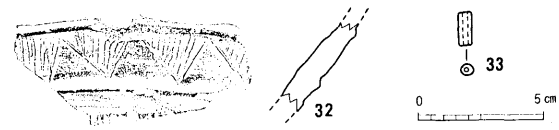
（a）土器（32）

32は、須恵器高杯形器台である。小破片ながら、外面には横方向の突線間に鋸歯状の文様をヘラ描きしているのが明瞭であり、いわゆる「初期須恵器」の範疇に入るものであることがよくわかる。器壁のカーブの具合から、高杯部でもかなり下の方の部位と思われる。文様は、低い山形の突線によって区画されている。

（b）石製品（33）

33は、碧石製と思われる管玉である。

（穂積裕昌）



第130図　古墳時代の遺物〔包含層出土〕（１：３）

Ｄ．飛鳥・奈良時代の遺物（34～143）

遺構に伴う遺物には、７世紀代のものを中心に竪穴住居ＳＨ６、ＳＨ８、ＳＨ９・10、ＳＨ11出土のものがある。但し、ＳＨ６を除いては量的に乏しく、ＳＨ６出土の遺物も須恵器を見る限り、田辺編年[4]のＴＫ209 型式の併行のものとこれより１型式以上新しいと思われる一群が混在しており、必ずしも良好な一括遺物とは言い難い。また遺構としては確認されなかったが、遺物包含層からも６世紀末葉から８世紀前葉にかけてのものが多く出土している。

なお、ＴＫ209 型式併行の須恵器は、後期古墳から出土の場合、古墳時代の遺物として取り上げることが多いが、ここでは政治史的に次の奈良時代への

継続性がより強いと考えられることから、ここでは広義の意味の飛鳥時代に含めることにした。

(a) ＳＨ６出土遺物（34～67）

須恵器では、古墳時代の伝統的様式を残す須恵器杯Ｈ、律令的土器様式とされる杯Ｇのほか、広口短頸壺、台付長頸壺、甕、平瓶があり、土師器では、甕、鍋、高杯、小形壺等がある。

（須恵器）

杯Ｈ(41～44）は、口径11.4～14.4cmで、受部の立ち上がりは短く内傾する。底部外面はヘラ切りのまま、もしくはヘラ切り後、弱くなでるものである。杯Ｈの蓋(34～40）は口径13.2～15.8cmで、天井部は高くて丸く、口縁部との境が不明瞭なものが多い。なお、34のみ境に沈線を巡らす。天井部はロクロケズリを施すが、ヘラ切り後なでるもの(38)や不調整のもの(40)もみられる。

有蓋高杯(46)は杯Ｈに脚を付けたもので、45のような蓋とセットになる。

杯Ｇ(49)は、丸みのある厚手の平底、薄く仕上げられた直線的に開く口縁部から成り、底部外面はヘラ切り後、雑なナデが施される。

杯Ｇの蓋(47)は、返りを有するもので、返りの先端は下方に突出する。天井部は非常に平坦である。

返りのない蓋(48)も１点ではあるが混在する。

広口短頸壺（50・51）は、あまり外へ開かない短い口縁部にやや張りのある肩部、丸底の底部から成る。底部外面はロクロケズリが施される。体部中央とその上方にそれぞれ２条、１条の沈線を巡らす52も同様のものであろう。

平瓶(54)は、口縁部のみの破片であるが、口縁部に特徴があり、口縁直下に先端の尖った突帯が１条巡る。また肩部にも沈線がみられる。

甕（55・56）は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部は丸く肥厚した口縁帯を形成する。体部は内外面ともタタキメ調整が施される。

（土師器）

甕・鍋類の出土量が最も多い。口径12cmの小形甕(57)、口径14.9～16.1cmの長胴甕(59・61～64）、肩部の張りや口縁部の屈曲が弱く、体部外面を横方向に板ナデする甕(58)がある。57以外はいずれも口縁部の破片のみで器面の残りも悪く、調整の不明瞭なものが多いが、大半は体部をハケ調整するものであろう。口縁端部は丸くおさめるものも若干認められるが、端部外側に意図的に端面を作り出すものが主体を占める。60・65は器高の浅い鍋と思われる。

高杯(66)は、脚部が八の字形に大きく開くものである。杯部は欠損のため不明。

小形壺(67)は、平底で扁平な体部を呈するものである。

(b) ＳＨ８出土遺物（68・69）

須恵器杯Ｈ(68)は口径10.4cmで、ＳＨ６の杯Ｈよりも一回り小さく、受部立ち上がりの内傾度も強い。鉄鏃(69)は長三角形を呈する扁平な刃部と断面が長方形の茎部からなる。刃部の長さは推定で５cm程で、その最大幅は2.1cmを測る。

(c) ＳＨ９・10出土遺物（70・71）

調査区南部で周溝の一部のみを確認した重複する２棟の竪穴住居からの出土遺物である。須恵器杯身(70）と高杯（71）があるが、いずれの竪穴住居に伴うものか特定できなかった。

(d) ＳＨ11出土遺物（72～74）

ＳＨ９・10の南で、西壁のみ確認できた竪穴住居に伴う遺物である。

須恵器杯蓋（72）は、天井部が丸く、口縁端部は内側に若干屈曲する。天井部はヘラ切りのままである。

須恵器台付盌（73）の脚部は、大きく外側に開き、端部は屈曲して、内側に内傾する面をつくる。したがって外端で接地する。体部は深くて半球状を呈すし、外面に１条の沈線が認められる。

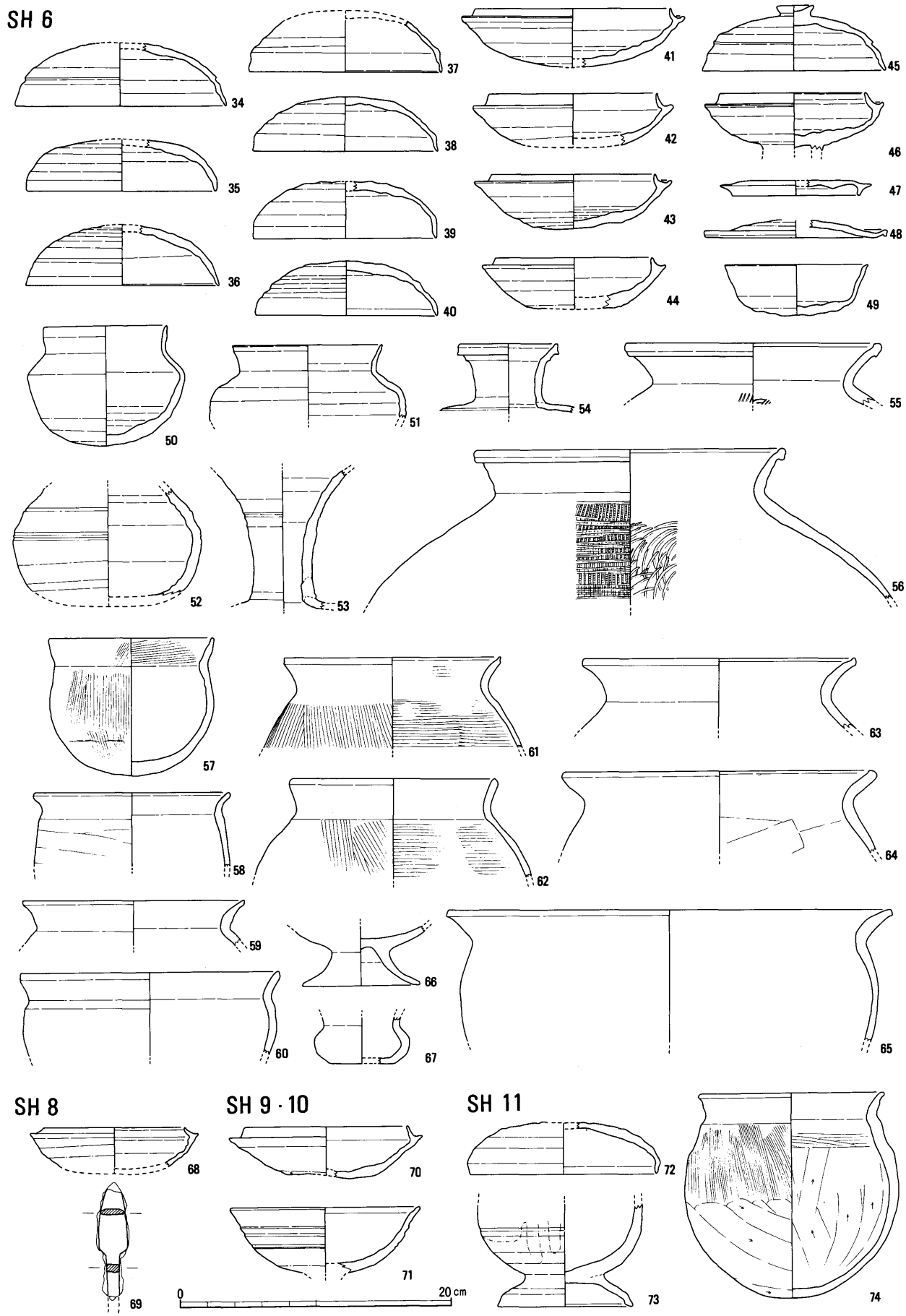
土師器甕（74）は、体部が球状で、口縁部は短く外傾度の弱いものである。体部下半と内面の大半をヘラケズリする。

(e) 包含層出土遺物（75～143）

７世紀前後のものから８世紀前葉のものまで各期のものが見られる。土師器は器面の残りが悪く、図示できたものが少ないせいもあるが、全体的に須恵器の占める割合が高い。特殊なものでは、獣脚、円面硯などがある。

（須恵器）

杯Ｈの蓋には、天井部が丸くて高いもの（75～83）と、天井頂部が比較的平坦なもの（84・85）がある。



第131図　竪穴住居出土遺物実測図２（１：４）

口縁端部はいずれも内側に段をなさず、細く尖るように終わる。

前者には、口径が13cm前後～14cmのもの（75～77）11cm～12cmのもの(78～80）、10cm前後のもの（81～83）が認められる。また天井部と口縁部との境に沈線を施すもの（83）も１点ある。94・95は前者、後者それぞれのタイプに扁平な鈕が付くものである。

この他、天井部が丸くて高く、口縁部が外反気味に下方へ延びるもの（96・97）もある。特に97は天井部と口縁部との境に明瞭な段を有し、口径が16.2cmを測る大形品で、あまり例を見ないものである。天井部の調整は、ロクロケズリを行うものが多いがヘラ切りのまま（82）やその後粗く撫でるもの（77・81）、板状圧痕をとどめるものも認められた。

杯Ｈの身は、受部の立ち上がりが短く内傾するもので、口径は8.9cm～12.6cmで、平均11cm前後である。底部の調整は、ロクロケズリを行うものが大半であるが未調整のもの（93）や板ナデするもの(90)もある。

以上の須恵器杯類は、陶邑編年[5]に照らせば、概ねＴＫ209型式からＴＫ217型式に併行するものと考えられる。

短頸壺(98)は、楕円形の体部に短く立ち上がる口縁部からなり、端部は細く尖るように終わる。体部中程にカキメが施される。体部上部に１条の沈線を施し、口縁部がかなりすぼまった(99)も小形の短頸壺と思われる。98は６世紀後半代まで遡るものか。このほか、体部が扁平で肩がほとんど張らない広口の小形鉢（100)もある。

杯Ｇ(101～106)は無台杯身で、113～115のような鈕とかえりを有する蓋を伴うものである。口径は９cm～11cmで、特に101～104は口径に対して杯部が深いものである。底部は平坦でヘラ切り無調整ないしはその後粗くなでるものが多い。これらは、猿投窯編年[6]の岩崎17号窯式から岩崎41号窯式に相当するものと思われ、実年代では７世紀後半～８世紀初頭とされている。

無台杯身（107～109)および有台杯身(110～112）は杯蓋のかえりが消失後のものと思われ、一般には蓋を伴わない前者を杯Ａ、紐が扁平でかえりを有しない蓋を伴う後者を杯Ｂと呼称されているものである。これらは、概ね８世紀前葉に位置づけられている高蔵寺２号窯式に相当するものと思われる。

すり鉢(116・117)は、いずれも口縁部を欠くが、底部の円盤が大きく外側へ張り出した安定感のあるものである。116は焼成が土師質で、底部外面には棒状工具により斜め方向に刺突された痕跡が随所にみられる。117の底部外面は平滑である。

高杯は、口縁部が外反し浅い皿状を呈する小形のもの(118）と杯部が大形で椀状を呈するもの（119・120)がある。猿投窯の編年に照らせば前者は７世紀前葉～半ばの東山50号窯式に、後者は７世紀半ば～７世紀後葉の岩崎17号窯式に相当しよう。

平瓶は体部片のみであるが、肩部と体部の境の稜がなだらかなもの（121)とシャープなもの(122）がある。

台付長頸瓶(123）は体部以下を欠く。口縁端部は丸くおさめ、頸部にはしぼり目がよく残る。

甕は口頸部が長く外反する大形のもの甕Ａ（125)と口頸部が短い甕Ｂ(124・126)がある。125は頸部を３条の沈線で区画しその間に刺突列点文を施し、口縁端部は外傾する端面をつくる。124は口縁下に１条の突帯を巡らせる。126は口縁部を半分ほど欠くが以下は完形である。口縁端部は上方に折れ、若干肥厚した丸みのある口縁帯を形成する。体部は同心円状のあて具と平行タタキメにより器面を締める。いずれも７世紀代の甕であろう。

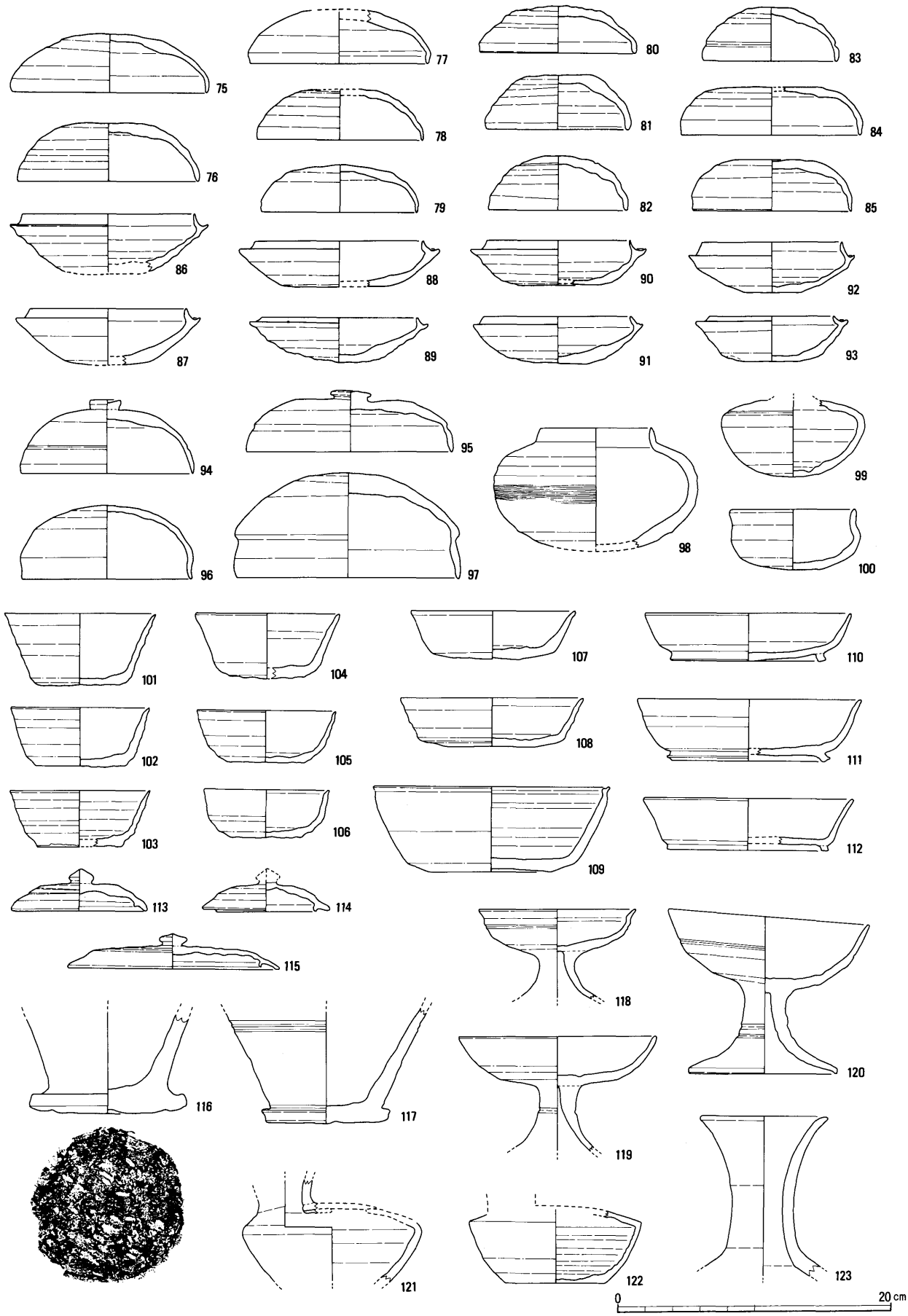
横瓶は口縁部の形態により２種のものが認められた。一つは丸く肥厚した口縁帯をつくるもの(127）、もう一つは甕(124）と同様に口縁下に突帯を巡らせるもの（128)である。後者は内面のあて具痕をなで消すもので古い様相を呈する。

（土師器）

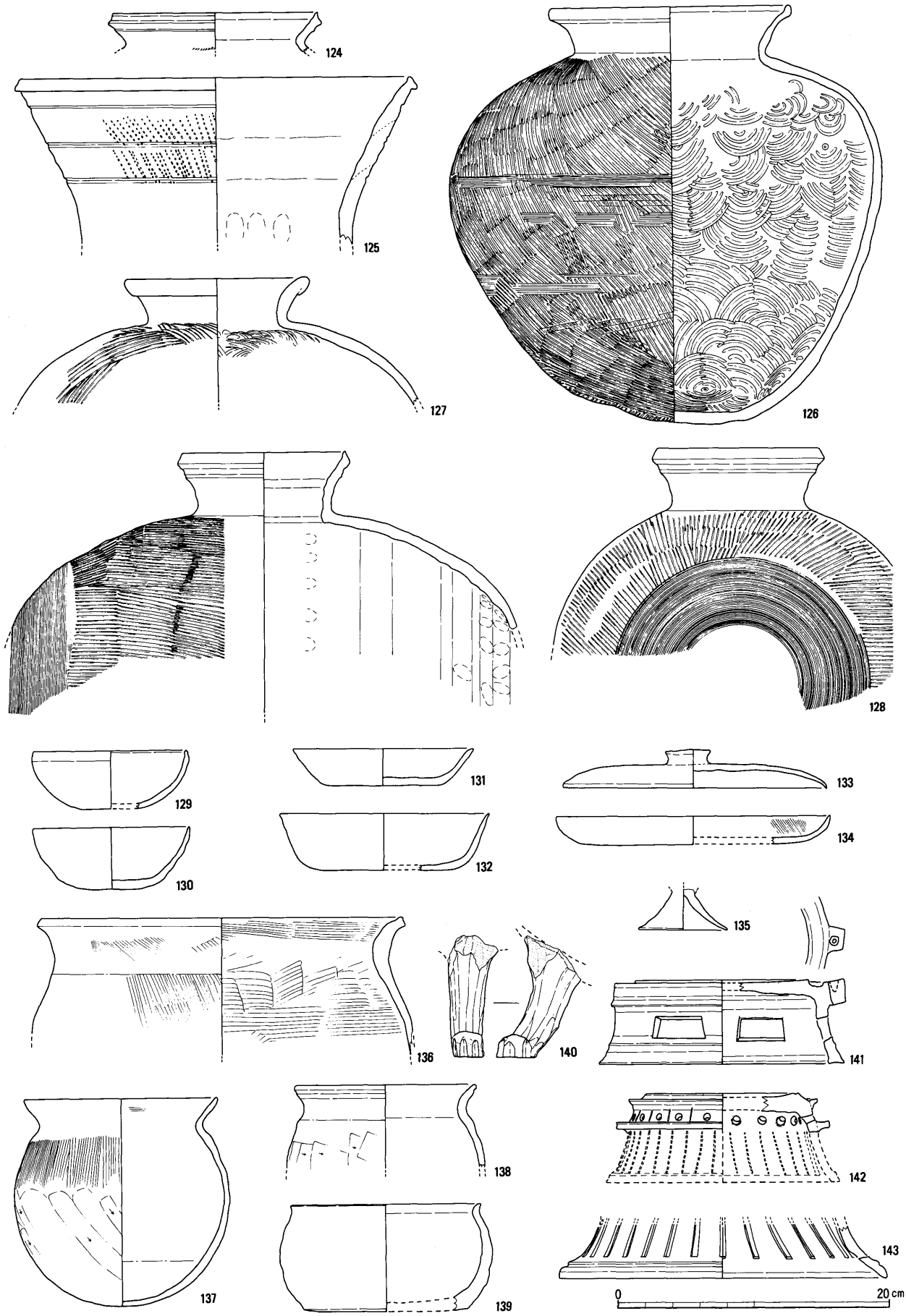
椀(129～130)は、底部から口縁にかけて内弯しながら長く立ち上がるもので、飛鳥地域で杯Ｇと呼ばれているものである。口径は11cm強で７世紀前半代におさまるものと思われる。

杯(131・132)、杯蓋（133)、皿（134)は、いずれも器面の保存が悪く調整が不明確であるが、134のみ僅かながら外面のミガキ、内面の細かな暗文が認められた。これらは奈良時代に属するものであろう。

甕は図示したもの以外に、体部の長い長胴甕や体



第132図　包含層出土遺物実測図１（１：４）



第133図　包含層出土遺物実測図２（１：４）

部が球形を呈する大小様々な甕がある。口縁端部の仕上げは外傾もしくは直立する平坦面を作りだすものが多く認められる。体部から底部にかけての調整は基本的にハケメやヘラケズリで調整するが、138のように外面を横方向にケズルものもある。

鉢（139)は、外側へ張り出した扁平な体部に短く立ち上がる口縁部からなる。底部は平底に近い。器壁が厚く粗製の鉢である。

ミニチュアの高杯(135）は、脚部が八の字に大きく開くもの。杯部は欠損のため不明。

（特殊品）

獣脚(140）は、比較的脚部が細くて長いもので、先端はヘラで刻みを入れリアルな表現がなされている。おそらく獣足壺の脚部であろう。

円面硯(141～143)は、いずれも破片のみである。141は、復元実測によれば、硯面部は径12.8cmで外堤との高さの差はほとんどない。脚部には長方形の透孔を施され、外堤帯の一部には筆差しと思われる上面から円孔の開けられた突起が付く。形態的には亀山市田茂遺跡出土のものに類似する。142は硯面部の高さが外堤帯より高いもので、外堤帯と脚部上方に設けた突帯との間を径5cm程の透孔で飾る。脚部にはヘラ先で刻まれた線状の透孔が等間隔にあけられる。143は脚端部片である。細長い縦位の透孔が等間隔にあく。

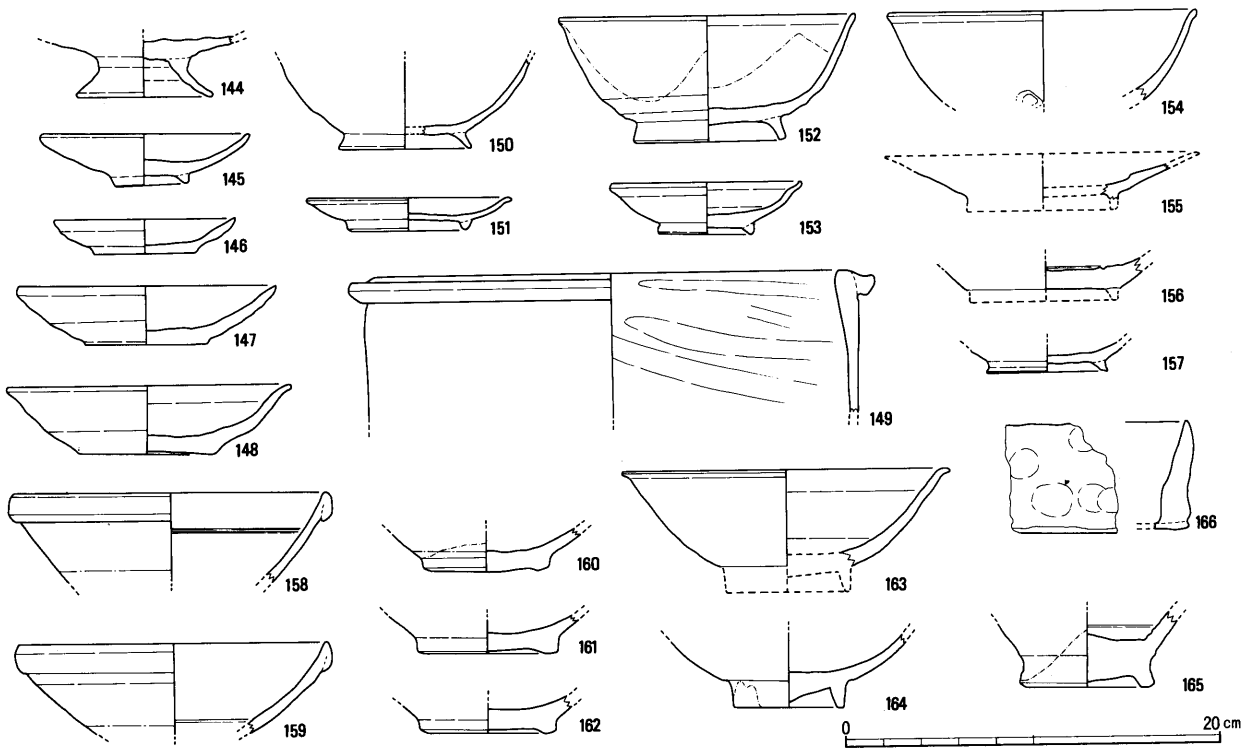
E．平安時代の遺物(144～166)

この時代の明確な遺構は確認されていないが、遺物包含層や建物としてまとまらないPitからわずかながらこの時代の遺物が出土している。おもなものに、土師器皿・甕、灰釉陶器椀・皿、緑釉陶器・段皿、黒色土器椀、白磁、製塩土器等があり、その多くは平安時代中期後半から後期のものである。

土師器皿類にはロクロ製と非ロクロ製があり、ここでは八の字に開く高い高台をもつ(144）が非ロクロ製で、145～148はロクロ製である。ロクロ製皿には口径10cm前後の小皿と14cm～15cmの大皿があり、当初から大小2種の皿として製作されていたものである。145は小皿に低い高台の付くもの。

土師器甕(149）は「清郷型」甕とも呼ばれ、口縁部外周に短い鍔状の突帯を巡らすものである。体部外面の調整は不明であるが、内面は横方向に板ナデする。鍔径は約28cmを測る。他に2個体分の口縁部片がある。

黒色土器椀(150）は内面黒色の椀A類で、深い椀



第134図　包含層出土遺物実測図3（1：4）

部と外側に開いた二等辺三角形の高台からなる。体部外面は磨滅著しいが、ヘラケズリ後ヘラミガキと思われる。

灰釉陶器椀(152) は所謂深椀タイプのもので、猿投編年の東山72号窯式に[7]相当しよう。顕著な釉の痕跡を認めることができないが、皿(151) もほぼ同時期のものと思われる。無釉の小椀(153) はこれらより時期が下り、猿投窯第Ⅶ期第1形式に[8]相当するものと思われる。

緑釉陶器はいずれも小さな破片であるが、椀(154・156・157)と段皿(155) がある。 154・156は濃緑色の釉が施釉され東濃系の可能性が高い。段皿は9世紀後半代、他は10世紀後半以降と思われる。

白磁には、太宰府編年[9]の椀Ⅳ－1類(158～162)と椀Ⅴ－4類(163～162)のほか、四耳壺の底部片(165)がある。したがって白磁椀類は11世紀中葉から12世紀初頭に、四耳壺は、佐野分類[10]の第2類に相当するので12世紀中葉から後葉が考えられる。

製塩土器(166) は、口縁部が細く尖るように終わるもの。外面に指頭圧痕がよく残る。

F．中世の遺物(167～351)

ここで取り上げる中世の遺物とは、鎌倉・室町時代のほか、平安時代末期のものもこれに含めた。遺物の中心は鎌倉時代で、井戸、土坑、溝からまとまって出土している。特に土坑からは、土師器皿が何枚も重なって出土するなど特殊な出土状況を示す。

一方溝からは陶器椀（以下、山茶椀と呼ぶ）の出土が目立った。

(a)　ＳＥ20出土遺物（167～169）

土師器皿・甕、陶器皿（以下山皿と呼ぶ）がある。土師器甕(169) は12世紀前半に、山皿は藤澤編年[11]の第6型式；13世紀第2四半にあたり、かなり時期幅が認められる。このほか飛鳥・奈良時代の須恵器、土師器が混在する。

(b)　ＳＥ34出土遺物（170）

図示できたのは、第6型式の山茶椀1点のみである。外底に「西」の墨書がある。

(c)　ＳＥ33出土遺物（171）

羽釜(171) は、井戸埋土上層から出土したものである。内弯する扁平な体部からそのまま緩やかに口縁部に至る。鍔は短く口縁部近くに付く。このほか深さ約3ｍの地点で尾張型[12]山茶椀第7型式が確認されており、井戸の存続年代の一端を示すものと考えられる。

(d)　ＳＥ32出土遺物（172～182）

土師器皿は口径11.5cm前後のもの（173～176）と7.4cmの小皿(172) がある。前者は口縁部が内弯して立ち上がるもので、口縁端部はユビオサエにより細く尖るように終わる。これらは土師器甕(177) と共に玉城町蚊山遺跡の第Ⅲ期[13]、ＳＫ103 の一群に相当する。第8型式の山茶椀(179) もこれらに伴うものであろう。

このほか時期は異なるが15世紀代と思われる瀬戸美濃産のおろし皿(180) や壺(181) 、12世紀代の石鍋(182) がある。この石鍋は木戸雅寿による型式分類[14]のⅢ-a-2にあたり、12世紀から爆発的に全国に流通したものである。

(e)　ＳＫ21出土遺物（183～189）

土師器小皿(183～188)はすべて口径9cm前後で、口縁端部のヨコナデ痕が明瞭なもの。

ほかに土師器甕(189) や山茶椀の口縁部片が出土しているが、細片のため小皿に伴うものか否かは不確定である。但し口縁部の形態から推して時期的に12世紀後葉と思われ、小皿の年代観とほぼ合致する。

(f)　ＳＫ24出土遺物（190・191）

ＳＫ24は掘立柱建物ＳＢ19に伴う方形土坑である。土坑の大きさの割りに出土遺物に乏しく、図示できたのは土師器小皿(190) と白磁椀(191) のみである。土師器小皿は口縁部が上方に立ち上がるもので、12世紀後葉から13世紀前葉にかけて中勢地域以北で多く見られるタイプである。

(g)　ＳＫ22出土遺物（192）

渥美産と思われる山茶椀1点がある。藤澤編年の第6型式に相当する。

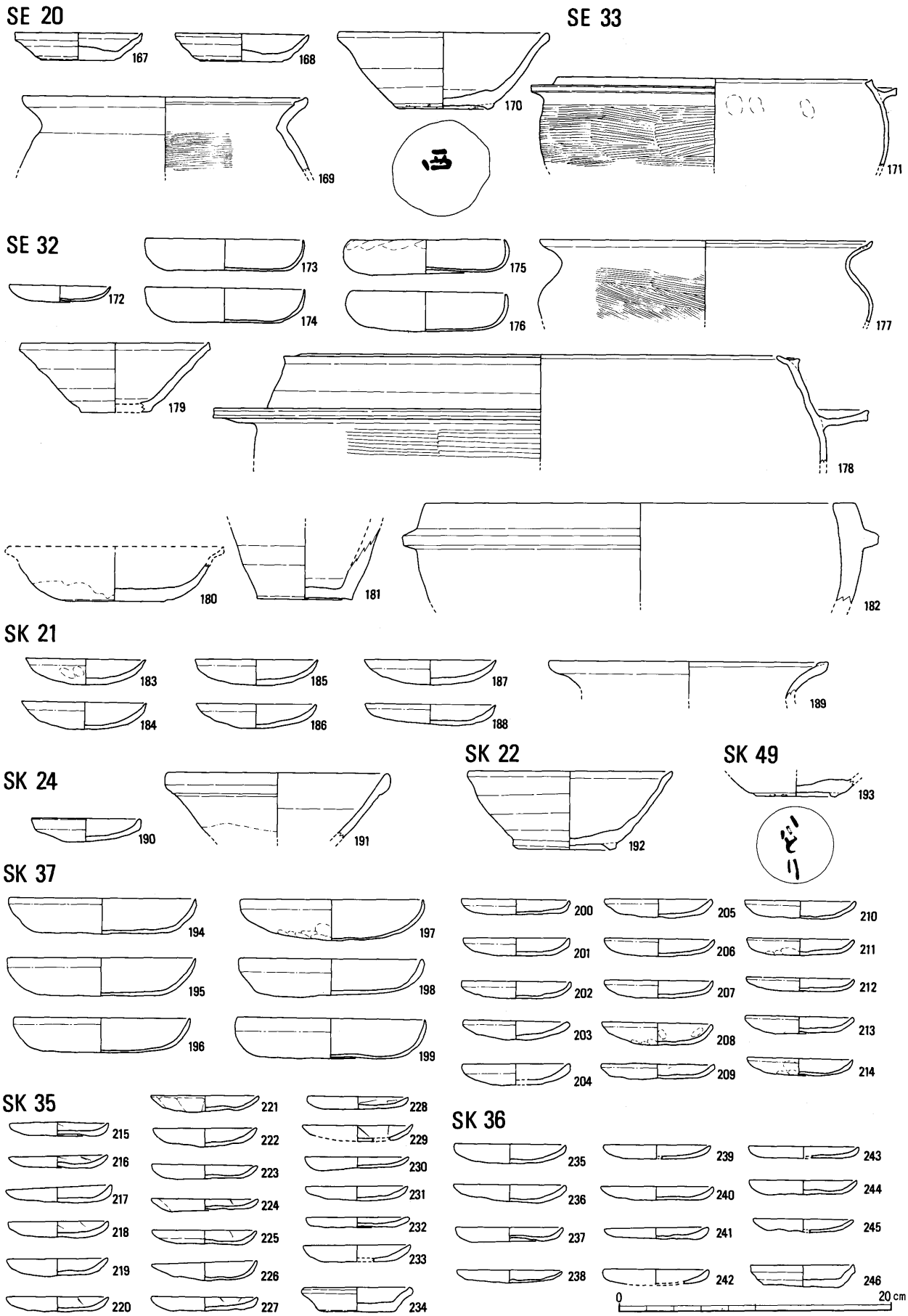
(h)　ＳＫ49出土遺物（193）

底部外面に墨書のある山茶椀である。墨書はひらがなであろうか。

(i)　ＳＫ37出土遺物(194～214)

土師器皿と小皿のみが多量に出土している。

土師器皿(194～199)は口径13cm～14cmで、口縁部の歪なものが多い。器面の調整は保存状態が悪く不明であるが、おそらく口縁端部をヨコナデするもので



第135図　井戸・土坑出土遺物実測図（1：4）

あろう。色調は明るい茶褐色を呈する。

土師器小皿(200～214)は口径8㎝前後で、皿と同様、口縁部の歪なものが多い。底部はユビオサエを行い、口縁端部はヨコナデを行うものが主流である。明るい茶褐色を呈し、器壁は全体的に厚い。

以上の土師器皿類は、口径や口縁部の調整法から蚊山遺跡ＳＥ172 の皿類に近く、13世紀前葉から中葉にかけての一群と考えられる。

（ｊ）ＳＫ35出土遺物(215～234)

土師器小皿19点とこれに伴う山皿１点がある。土師器小皿(215～233)は口径７㎝～８㎝で、器高もＳＫ37の小皿に比べ若干浅い。外面には手の平と思われるオサエの痕跡が明瞭な指紋として良く残っており、内面に工具による調整痕を止めるものも認められた。色調は淡褐色から白褐色を呈し、胎土は良好で器面は平滑である。

共伴する山皿(234) は尾張型第７型式に相当し、13世紀中葉頃のものとされている。

（ｋ）ＳＫ36出土遺物(235～246)

ＳＫ35出土遺物と同様、多くの土師器小皿と山皿１点がある。

土師器小皿は口径、胎土、色調、調整等、ＳＫ35の小皿とよく似ており、共伴する山皿(246) も尾張型第７型式であるので両土坑出土の一群はほぼ同時期と言えよう。

（Ｉ）ＳＤ26出土遺物(247～280)

山茶椀、山皿、陶器甕、土師器皿・鍋（南伊勢系）白磁皿等がある。この内、山茶椀の出土量が最も多く、完形品も多い。

山茶椀を肉眼的観察により産地別に分類し、型式分類を藤澤編年に従えば、247・249は渥美型第５型式に、249・251は尾張型第５型式に、250は北部系均質手山茶椀（第５型式相当）に、252～257・264は尾張型第６型式に、262・263は渥美型第６型式に、258～260は尾張型第７型式に、261は尾張型第８型式に分類できる。すべての山茶椀を図示したわけではないが、およその産地別動向を窺うことができよう。時期的には13世紀前葉から中葉が中心となる。

山皿は尾張型第５型式(265～268)・６型式(270)と渥美型第６型式(269) がみられる。

山茶椀の体部や底部、山皿の底部に墨書の認められたものもいくつかあり、判読できたものとして「大」(262・268)、「二」(264) のほか、一部平仮名と思われる文字(263) もある。

陶器甕(272・273)は知多窯産で、従来常滑甕と呼ばれていたものである。Ｎ字状口縁部が未発達の段階にある(273) は大砂古窯跡群[15]の出土資料の中に類例があり、Ｎ字状口縁部が発達し、端部が上下に延びて幅広い口縁帯を形成する(272) は、小森古窯跡群Ｂ－１号窯[16]や亀塚池古窯跡群第５号窯[17]の出土資料の中に類例が求められる。それぞれの産地では、前者で山茶椀６型式が、後者で７型式が併焼されていることから、これらの甕は13世紀前葉から中葉にかけてのものと思われる。

土師器皿(274～276)は口径12㎝弱で、口縁端部に明瞭な外傾する面をもつもの(276) と端部の面が意識されていないもの(274・275)がある。前者は淡褐色、後者は白褐色を呈する。土師器小皿(277) は口径８㎝程で口縁部が歪んだ器高の浅いものである。

土師器鍋(278～280)は、所謂「南伊勢系鍋」と称せられているもので、頸部を意識して長く作り、口縁部が強いヨコナデにより若干立ち上がり受口状となる、伊藤分類[18]の１段階ｂ型式に相当する。口径は24㎝～26㎝を測る中形の鍋。

白磁皿(271) は内面に沈線状の段を有し、口縁部は屈曲して内弯気味に立ち上がるもので、内面見込みに草花文を施す。太宰府分類の白磁皿Ⅷ-1類とされているものである。

（ｍ）ＳＤ51出土遺物(281～309)

量的に多い山茶椀をはじめ、山皿、土師器皿・鍋・羽釜、陶器甕・鉢がある。

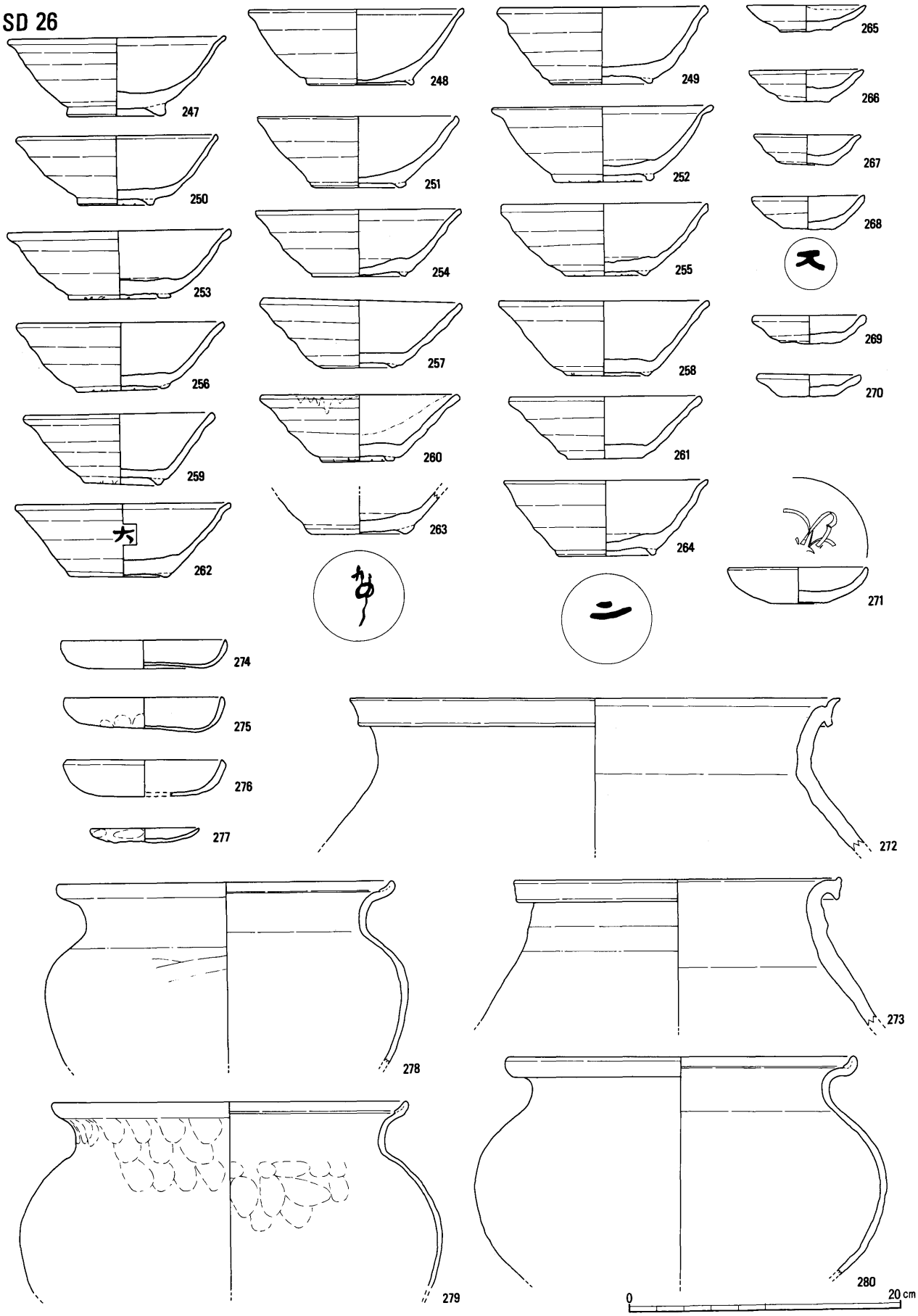
山茶椀は尾張型６型式(284～291・297・299)が最も多く、次に尾張型７型式(292～296・298)が続く。渥美型は少なく、５型式(281) と６型式(282・283)がわずかに認められたに過ぎない。

山茶椀の外底部に「西」(297) 、「上」(298・299)と墨書されたものもある。

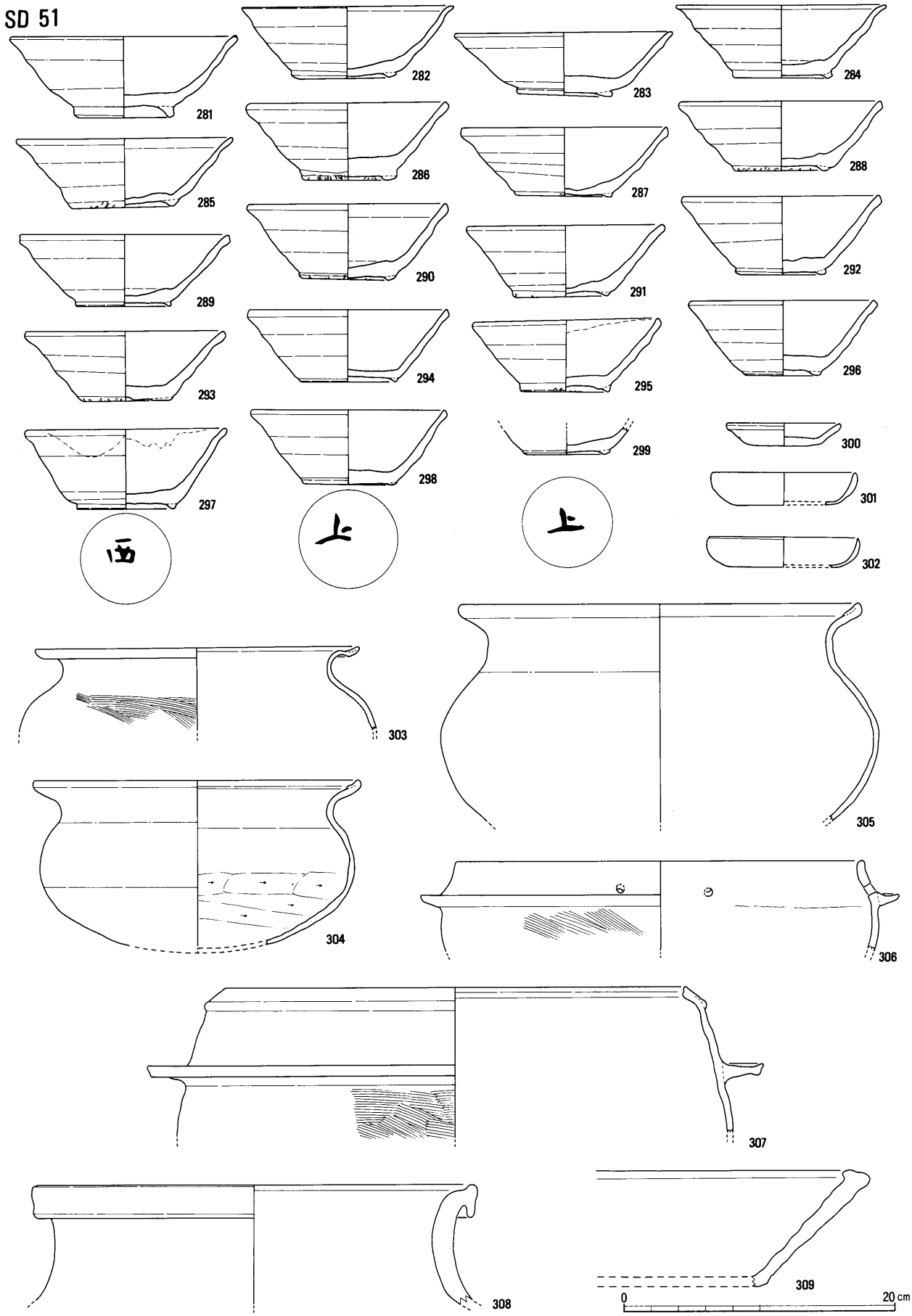
山皿(300) は渥美型６型式と思われる。

土師器皿(301・302)は1／３しか残存していないため口径に不安があるが、推定11㎝前後のものである。

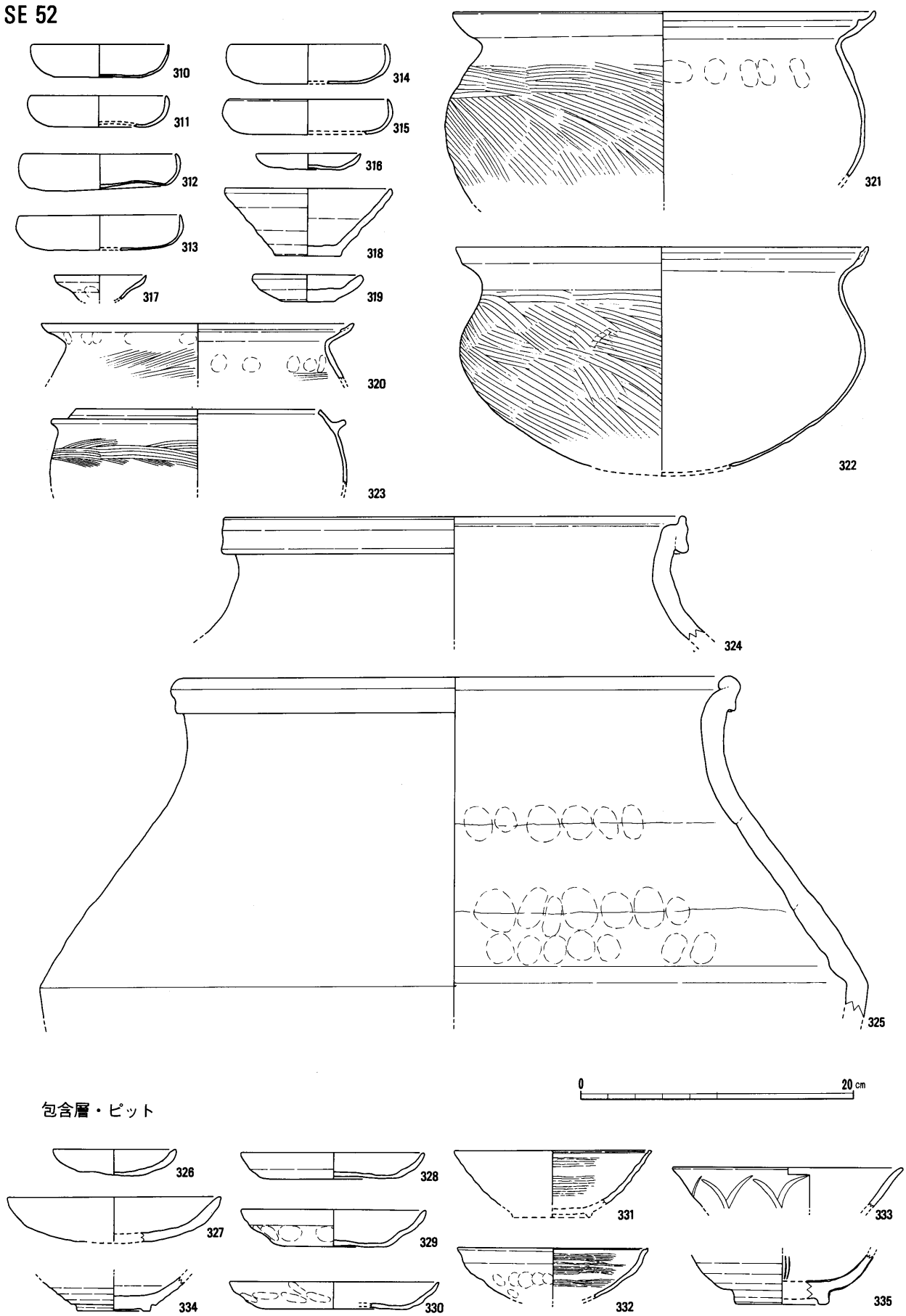
土師器鍋(303～305)は口径24㎝前後の中形品と30



第136図　溝出土遺物実測図１（１：４）



第137図　溝出土遺物実測図 2（1：4）



第138図　井戸・包含層・ピット出土遺物実測図（1：4）

cm弱の大形品がある。このうち 304・305は伊藤分類の1段階a型式に、303は1段階b型式にあたろう。303の体部外面には細かなハケメが施される。

土師器羽釜は、口縁部の形態により2種のものが認められる。一つは口縁部が外反気味に立ち上がり、端部が丸くおさまるもの(306)、もう一つは口縁部が内側に屈曲して肥厚した口縁帯をつくるもの(307)である。後者は口径約34cmの大形品。

陶器甕(308)は口縁部の形態がSD26出土の273に類似しており、時期的に近いものであろう。

陶器鉢(309)は底部から口縁部にかけ直線的に大きく開くもので、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口径は不明であるが、復元すると口径に比して器高の浅い盤のような器形が考えられる。器面にロクロナデと思われる痕跡をとどめるものの、焼成はあまく土師質である。

(n) SE52出土遺物(310～325)

土師器皿は、口径10cmのもの(310・311)とこれより一回り大きい11cm～11.6cmのもの(312 ～315)がある。いずれも白色を呈し、口縁部の内弯が顕著なもので、外面にユビオサエによる指紋の痕跡をよくとどめる。器壁は非常に薄い。316は土師器小皿、317はへそ皿と呼ばれているものである。

土師器鍋は伊藤分類の3段階a型式(322)と同b型式(320・321)に相当するものがある。大形品は口径が30cm～30.8cm、小形品は22.8cmを測る。

土師器羽釜(323)は口縁部が大きく内弯するもので、口縁部の近くに短い鍔が付く。

山茶椀(318)は尾張型8型式に、山皿(319)は5型式に相当する。

陶器甕(324～325)はN字状口縁部が頸部に密着した段階のもので、加世端古窯跡群第1号窯[19]出土の甕に最も近い。この内、N字状口縁部上端が丸く肥厚した 325はあまり例がなく、型式的には特殊なものである。

(o) 包含層・Pit出土遺物(326～352)

平安時代末期から室町時代にかけて各期、各種のものがある。

土師器皿(327)は、器壁が比較的厚くて胎土に砂粒を多く含み、口縁端部は強くヨコナデされて尖るようにおわるもの。326 はこれに伴う小皿でいずれも平安時代末期のものと考えられる。

土師器皿(328～330)は器壁が薄く、器面は平滑で口縁部は強いヨコナデにより、屈曲して内側に弱い稜をもつもの。主として中勢以北において15世紀後半から16世紀初頭にみられる。

瓦器椀は2片あるがいずれも口縁部の小さな破片である。内面のみ粗いミガキを施すもので、体部から口縁部にかけて直線的にひらくもの(331)と口縁部が屈曲するもの(332)が認められる。口径は14cm前後であり、山田編年[20]の3段階1型式に相当するものと思われる。

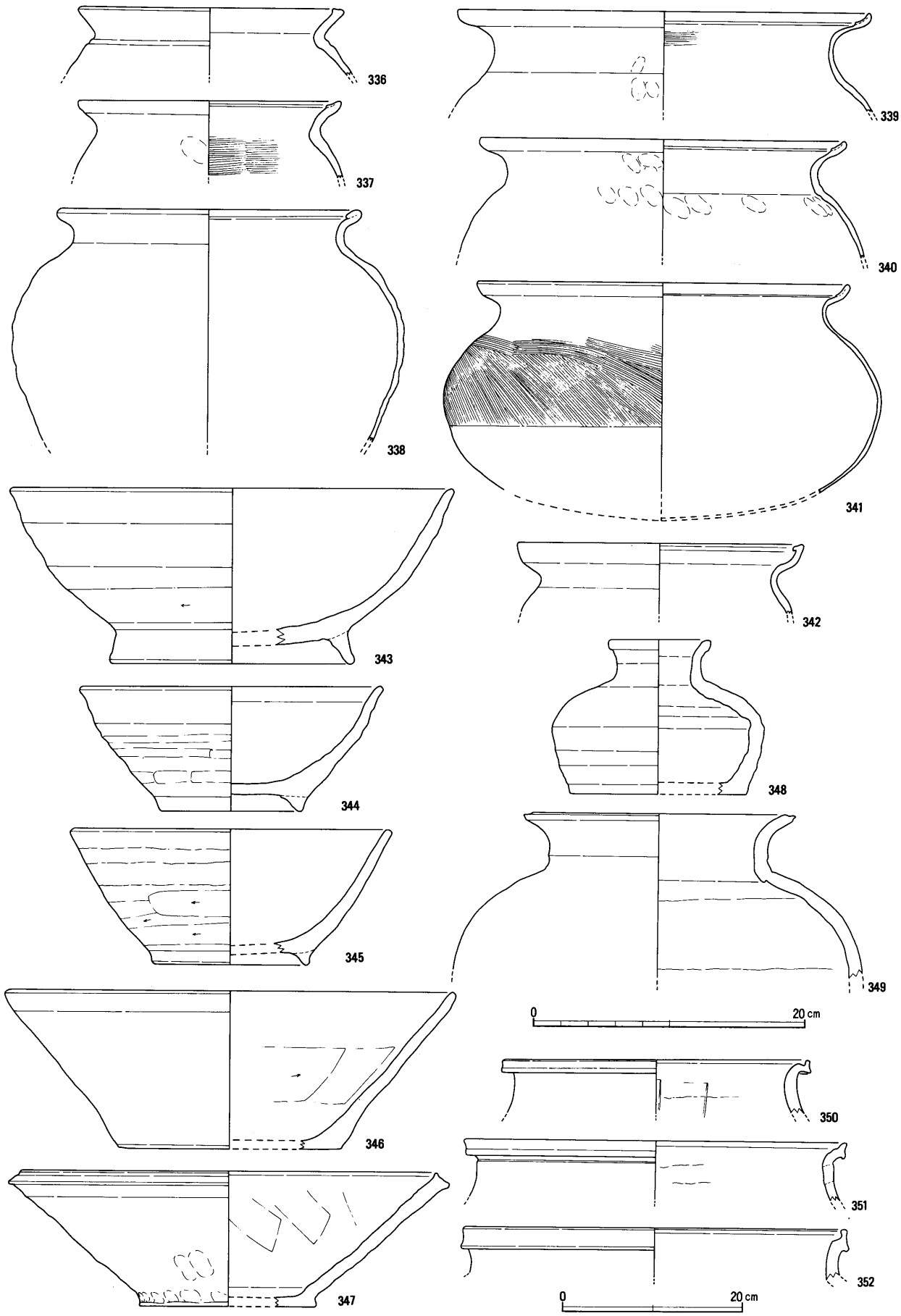
陶器平椀(333)は底部のみであるが、藤澤編[21]年の古瀬戸後Ⅳ期、15世紀中葉に相当しよう。

青磁椀(334・335)は、体部外面に蓮弁文を施す334が太宰府分類のⅠ-5類に、体部内面に2本の沈線による分割文が認められる 335がⅠ-4類にあたる。

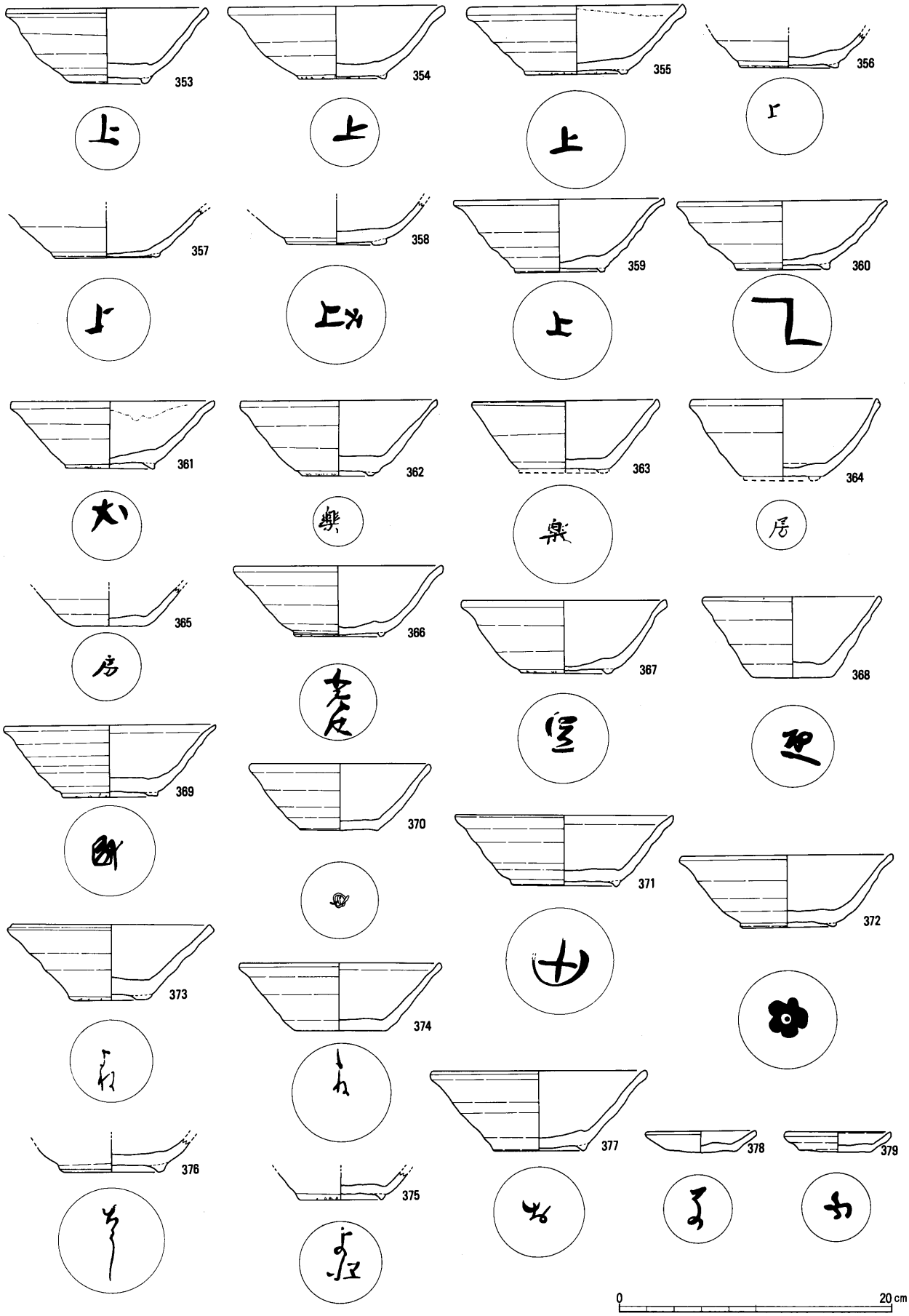
土師器甕(336～338)は球形の体部に外反する短い口縁部が付き、口縁端部は内側に折り返されて肥厚し、内傾する面を持つ。体部の調整はなでて仕上げるが、内面にヨコハケを施すものも認められる。体部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲するもの(336・338)と頸部を意識して丸みをもってつながるもの(338)がある。後者は「南伊勢系鍋」の祖形となるもので12世紀後半から末に位置付けられるもの。前者はこれよりも型式的に遡るものと思われ、12世紀前半代のものと考えておきたい。

土師器鍋は頸部を意識してこれを長く立ち上げるもの(339・340)とこれらより頸部の意識が薄れ、体部の扁平化が進み、外面に細かいハケメが施されるもの(341)がある。この他、口縁部が受口状に立ち上がり、口縁端部に内傾する面を有するもの(342)もある。以上の鍋は13世紀前半から同第3四半期に位置付けられよう。

陶器鉢(343～347)は片口部が欠けているため図示していないが、すべて片口鉢と思われる。これらは主として胎土の違いから山茶椀系工人によるもの(343・344)と壺・甕系工人によるもの(345～347)が認められる。この内、343は口径約32cmの大形品で底部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、体部下半をロクロケズリし、高い高台が付くもので、



第139図　包含層・ピット 出土遺物実測図（1：4、351～353は1：6）



第140図　墨書土器実測図（1：4）

型式的に最も古い様相を呈する。344は三角形の低い高台が付き、体部はロクロナデ後、部分的に雑なヘラケズリが施される。前者は12世紀後半代、後者は13世紀前半代に位置付けられよう。

345は直線的に開く体部、低い高台、丸みのある口縁端部からなり、片口鉢Ⅱ類[22]の出現期段階のものである。高台は付かないが口縁端部の仕上げが類似する346も近接した時期のものと思われる。これらは青木編年の1型式から2型式に相当するものと思われ、13世紀第2四半期頃とされているものである。上芳池古窯跡群第1～3号窯灰原出土遺物[23]のなかに類例が求められる。347は口縁端部が内外に発達して延びる段階のもので6型式に位置付けられているものである。

陶器壺(348)は底部が大きく、体部が横に広がった安定感のあるもの。肩部以下をロクロケズリする。陶器広口壺(349)は、口縁部が大きく外反し、端部上面に凹みがあるもの。外面に濃緑色の釉が厚くかかった12世紀中頃の知多窯（常滑）製品。

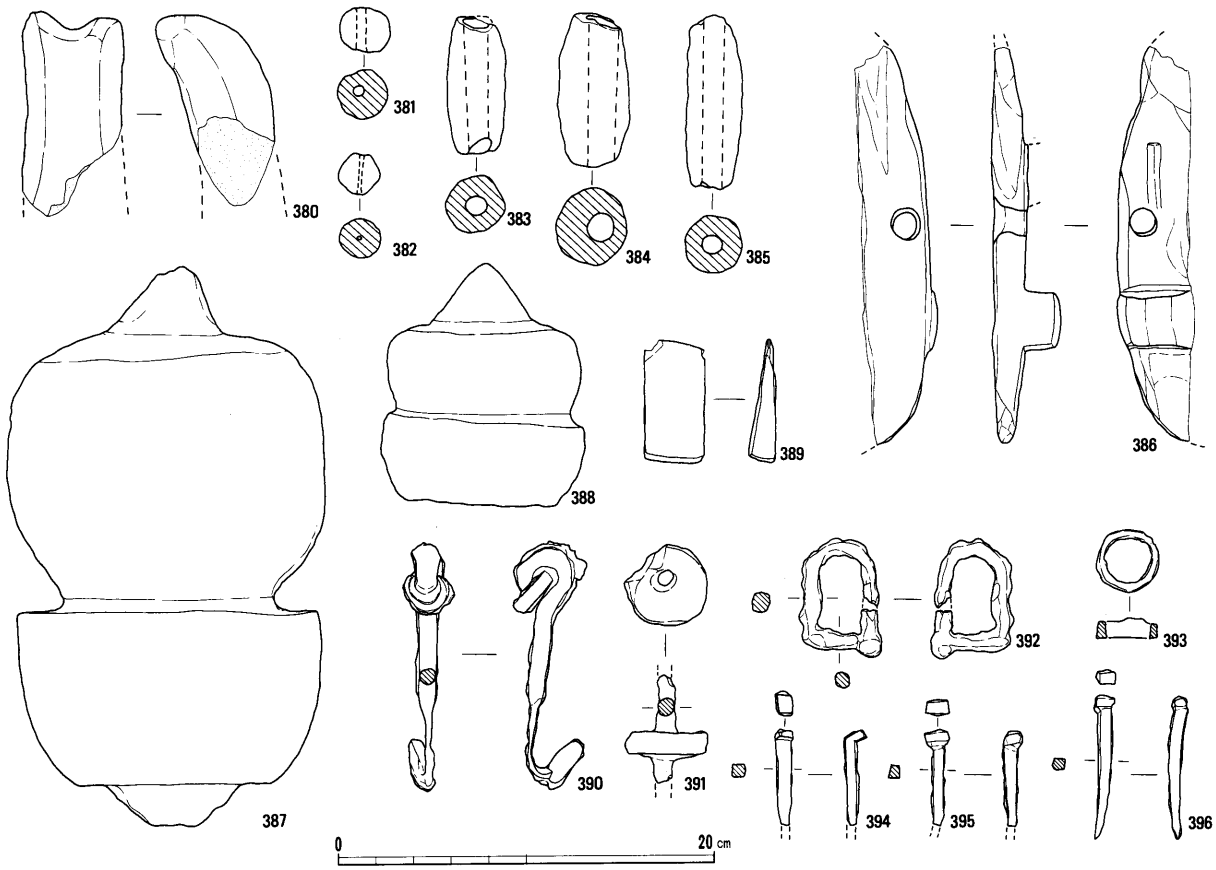
陶器甕もすべて知多窯（常滑）製品である。口縁部がL字状を呈するもの(350)、L字状口縁の下端が若干下方へ延びるもの(351)、さらに頸部に近づくもの(352)がある。これらは13世紀前葉から中葉にかけて型式学的に順次追えそうである。

G．その他の遺物(353～398)

(a) 墨書土器(353～379)

山茶椀あるいは山皿の底部外面に墨書が認められたものが遺構から6点、遺物包含層から27点の合わせて33点が出土している。

漢字一字を記すものが最も多く、「上」「上□」(353～359)、「大」もしくは「犬」(361)、「楽」(362・363)、「房」(364～365)のほか、判読不明なもの(367・368)、花押のようなもの(369)がある。記号を記すものでは、鍵型(360)、十を丸で囲むもの(371)、略卍状のもの(379)、梅花文状のもの(372)、不明なもの(370)がある。梅花文状のものは亀山市山城遺跡[24]で11例が確認されているが、これと当遺跡のものとを比較してみると、山城例では周囲の5個の花弁がそれぞれ独立した点で描かれるのに対して、当遺跡例では互いにつながったものとなっ



第141図　土製品・木製品・石製品・鉄製品実測図（1：4）

ている。

この他、ひらがなを記すものもあり、「よね」、「よ祢」(373～375)、「お」(377)、判読不明なもの(376～378)が認められた。「よね」は松阪市曲遺跡[25]G地区出土の山皿に同様の墨書例がある。

墨書の記される山茶椀や山皿は、藤澤編年の尾張型6型式～7型式に相当するものが大半を占め、墨書のないものと同様の出土傾向を示す。これ以外では渥美型6型式が2点(354・376)、尾張型8型式が2点(368・370)、尾張型9型式が1点(365)あるのみである。「上」や「房」の墨書は山茶椀の産地を問わず同様の筆跡で書かれているところから、消費地である当地で書かれたものと理解される。

(b) 土製品(380～385)

土製支脚(380)は上端部のみ残り、裾部を欠く。胴部は丸く、上端部両端が若干盛り上がる。側面からみると裾部から内弯して上端に至るものである。

土玉(381・382)はそれぞれ径2.6cmと2.0cmを測る。

土錘(383～385)は、385のみ完存で長さ9.2cm、径3cmを測る。他の2点も端部を欠くが大形の部類に属する。

(c) 木製品(386)

下駄(386)は現存長21cm、脚高は2cmを測る。

(d) 石製品(387～389)

五輪塔と砥石がある。

五輪塔(387・388)は空輪と風輪が一体に成形されたもので、387は土坑SK45の上面で、388は室町時代の井戸SE53から出土している。

砥石(389)は現存長6.4cm、幅3.2cm、厚さ1.4cmの長方形を呈する。片面が剝落しているが、残る片面はよく使用されている。側面は全周にわたり擦り切った痕跡が認められるが、一部使用痕も確認された。

(e) 鉄製品(390～396)

紡錘車(391)、釘(394～396)、リング(393)、不明品(390・392)等がある。

釘は断面が方形で、上端部が片側に曲げられたり、方形に肥厚したものである。唯一完存の396は長さ7.6cmで、上端部は6cm×10cmの方形を呈する。

(倉田直純)

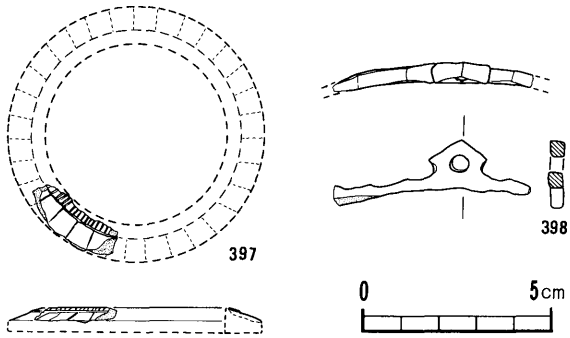
(f) 青銅製品(397～398)

青銅製かと思われる細工金属製品が包含層から2点出土している。

397は、一見すると古墳時代の「石釧」様のものであるが、径が小さく、なおかつ極めて薄い。内側に間隔の狭い刻みを、一段下がって外側に広い刻みを車輪状に入れている。外側の刻みは、もしこの遺物が円形に復元できるのであれば、32本前後施されている。用途の特定は難しいが、「釘隠し」的な装飾品である可能性がある。

398は、細長い文鎮状の形をしたものであるが、用途等はわからない。

(穂積裕昌)



第142図 時期不明遺物〔包含層出土〕(1:2)

4．Ｂ地区の調査

（1）遺　構

Ｂ地区はＡ地区から市道をはさんで南側、市道と美濃屋川とにはさまれた地区である。東西40ｍ、南北は最大で6.4ｍと東西に細長い調査区である。市道改修工事の際の攪乱が著しく基本的な層序は明らかでない。

ピットや溝の検出された面はおおむねＡ地区の第１遺構面に対応する。その下層、地表下約1.8ｍにある黒褐色粘質土がＡ地区南半の第４遺構面に、その下の灰色シルトが同第５遺構面に対応する。灰色シルトの下が見当山累層の明黄褐色シルトである。なお、黒褐色粘質土は、森山東遺跡のⅪ層（黒灰色シルト（泥炭土））に対応する。

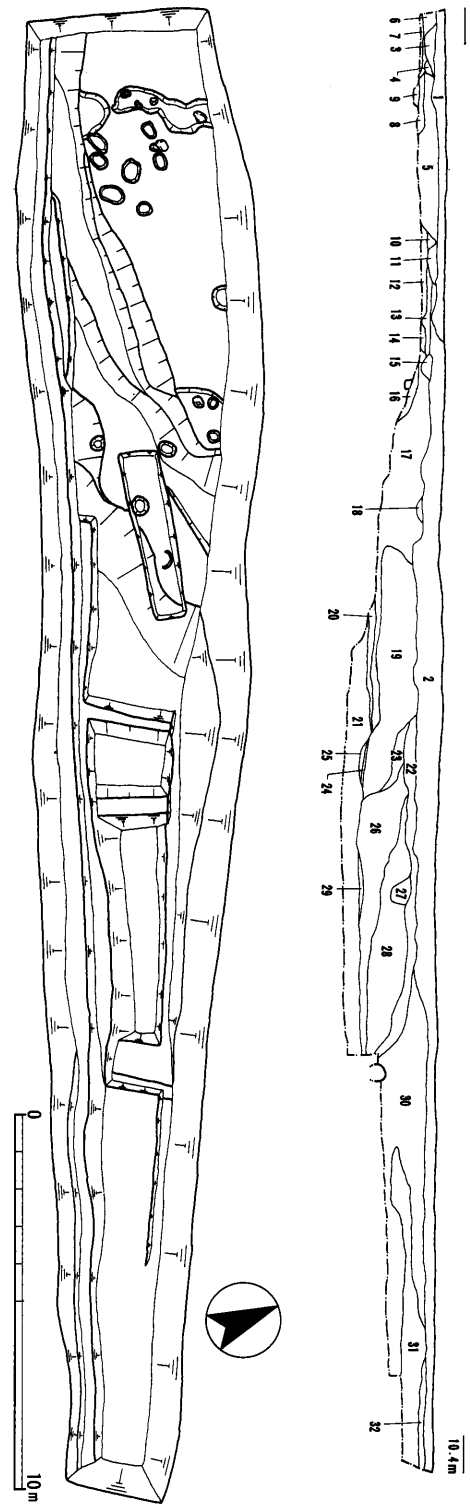
溝　ＳＤ26　Ａ地区で検出したＳＤ26の延長にあたる。Ｂ地区中央を南に延びる。検出した長さは2.2ｍ、幅1.8ｍ、検出面からの深さ40㎝である。山茶椀が出土している。

ピット　調査区の西端で検出した。中に根石を持つものもあるが建物にはまとまらなかった。

（2）遺　物

図化したものはすべて包含層出土の遺物である。399・400は土師器の鍋である。口縁端部が内側に曲げられて丸くおさめられるもの（400）と、折り曲

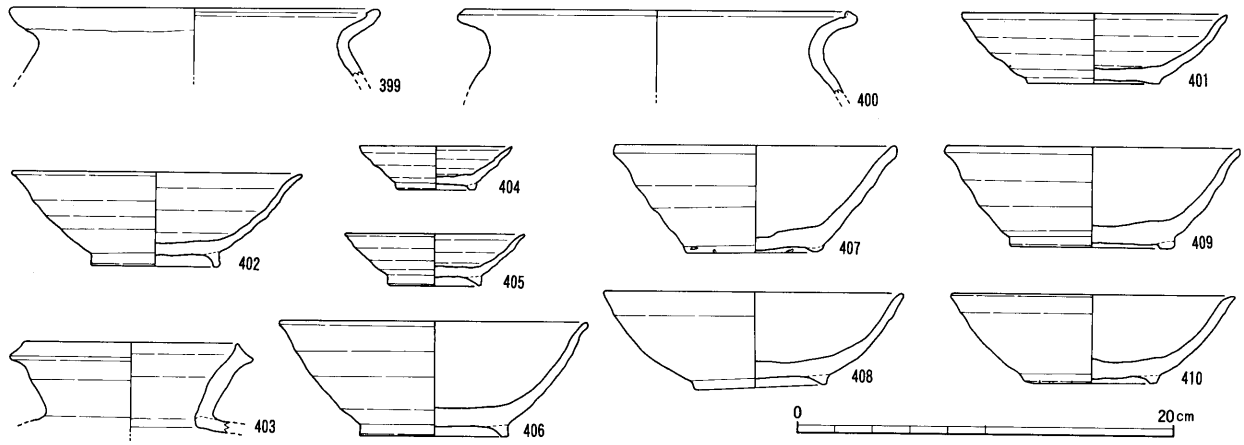
1．黄褐色土（置土）
2．黒褐色土（置土）
3．暗褐色攪乱土
4．黄褐色ブロック混土
5．オリーブ褐攪乱土
6～10　記入なし
11. 暗褐色攪土
12. オリーブ褐ブロック混じり
13. 記入なし
14. 褐色（YR4／6）
15. 暗褐色（10YR3／3）
16. 黒褐色（7.5YR3／2）ブロック混じり
17. 黒褐色（7.5YR3／2）包含層
18. 灰褐色土
19. にぶい黄褐色砂質土（10YR5／4）
20. 黒褐色粘質土（10YR3／1）包含層
21. 灰色シルト
22. アリーブ褐砂質土（2.5YR4／4）
23. オリーブ褐（2.5Y4／6）
24. 黄褐色ブロック混砂（10YR5／8）
25 オリーブ黄（5Y6／3）
26. 暗褐色砂質土（10YR3／4）包含層
27. 褐色（10YR4／4）
28. 褐色ブロック混砂質土（10YR4／6）
29. 黒褐色粘質土（10YR3／1）
30. 黒褐色攪乱土
31・32　攪乱土
地山　明黄褐色岩盤（10YR6／8）



第143図　Ｂ地区平面図・土層断面図（１：200）

げられたあと内側に面をつくるもの（399）がある。399が伊藤編年Ⅰ段階ａ型式の時期のもので、12世紀中頃、400はその少し後で12世紀中～後葉のものである。401は土師質焼成の陶器椀である。ロクロ成形によるもので、体部は内弯しながらゆるやかに立ち上がる。外面は底部と体部の境が明瞭である。

402は灰釉椀で、猿投編年、百代寺窯式[26]のもの、403は陶器の甕の口縁部である。404・405の山皿はともに尾張産のもので藤澤編年第４型式である。406～410の山茶椀のうち407と410が尾張産、406・408・409が渥美産である。時期的には406が藤澤編年第５型式、そのほかのものは第６型式にあたる。



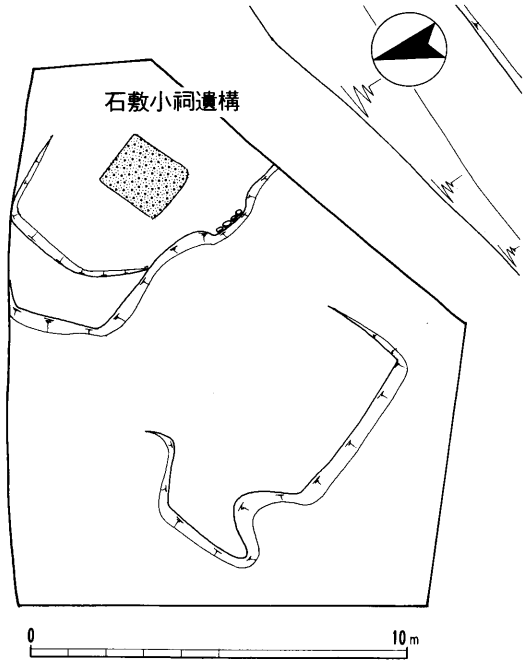
第144図　Ｂ地区出土遺物実測図（１：４）

５．Ｃ地区の調査

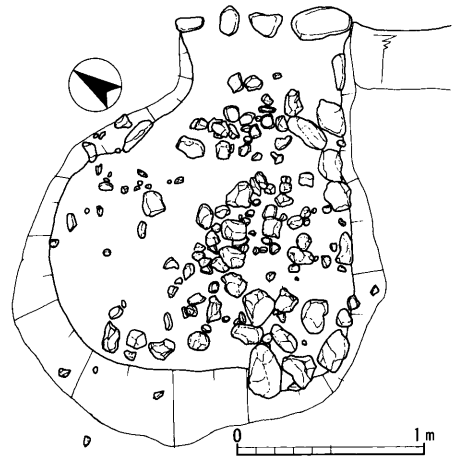
Ａ地区の北側、丘陵中腹の平坦部で試掘時にコウゼンジとした地区である。基盤層は第三紀層である黒田累層で、その上に赤色シルトや部分的に黄褐色砂が50～70cm堆積している。

遺構としては近世以降の神社の小祠跡と境内を確認した。境内は東西９ｍ×南北12ｍの範囲である。境内の北半４～５ｍが一段高くなっており、その中央付近から小祠跡が検出された。また、一段高くなった部分の南辺では４個の河原石が一列に並べられており、階段の一部と考えられる。さらにその南に続く幅1.8ｍの緩斜面は参道であろうか。

小祠跡は東西1.75ｍ×南北1.8ｍの範囲で石敷きである。縁石にやや大きい石を用い、区画内は拳大の石が敷かれている。なお、出土遺物はなかった。



第145図　Ｃ地区平面図（１：200）



第146図　石敷小祠遺構実測図（１：40）

6．D地区の調査

（1）遺　構

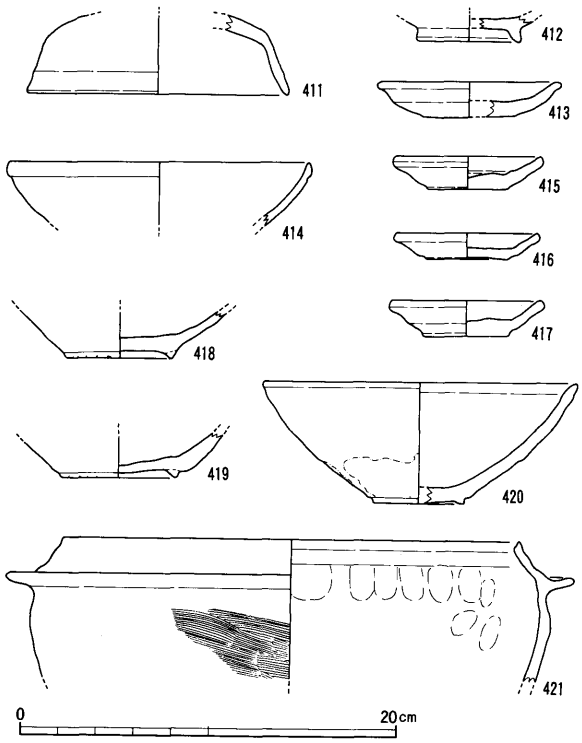
D地区は、A地区の南東部から水路をはさんだ東側、丘陵斜面とその南の市道との間の狭い平地部分である。丘陵裾にあたるため斜面を流れ下った土砂が厚く堆積していた。遺構検出を行ったのは地表面から約1.4m下、標高7.2m前後の面で、A地区の第4遺構面に対応する。また、調査区の東半分は地表面下1mまで攪乱を受けていた。

遺構としては、ピットや不定形の土坑を検出した。どれも検出面からの深さが2～3cmと浅く、土砂の流出によって削られたものと思われる。調査区南半は、南へ緩やかに落ち込んでいく地形である。そのまま森山東遺跡のある水田に向かって下がっていくものと思われる。

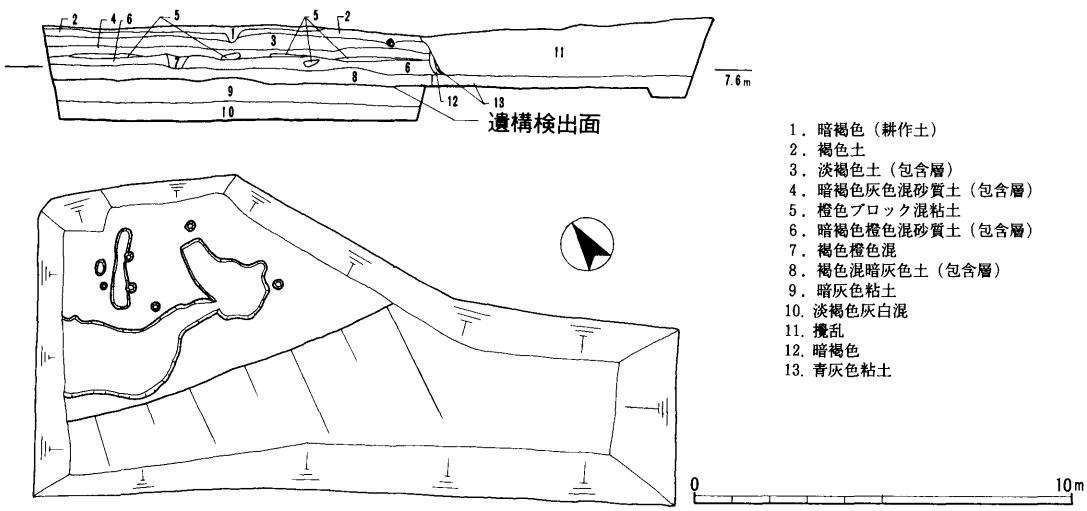
（2）遺　物

遺物には包含層出土のもの(411・413・420・421)と南落ち込み出土のものがある。

411は須恵器の杯蓋で奈良時代のものである。外面には自然釉のかかった痕がみられる。412は緑釉陶器で、素地から近江産と考えられる。11世紀前葉のものである。413はロクロ土師器で12世紀中～後葉のものである。414は白磁椀である。口縁のみの小片だが、外面に低い玉縁がめぐる。11世紀中葉～12世紀初めのものである。415～417は山皿、418・419は山茶椀である。5点の中では415がやや古く、藤澤編年第5型式、416～419は第6型式である。いずれも底部は糸切りである。420は灰釉平椀である。内面全体と外面の上部1/3に灰緑色の釉が施される。15世紀中葉のものである。421は土師器の羽釜で、15世紀後半～16世紀前半のものであろう。



第147図　D地区出土遺物実測図（1：4）



第148図　D地区平面図・土層断面図（1：200）

7．結　語

（1）遺構について

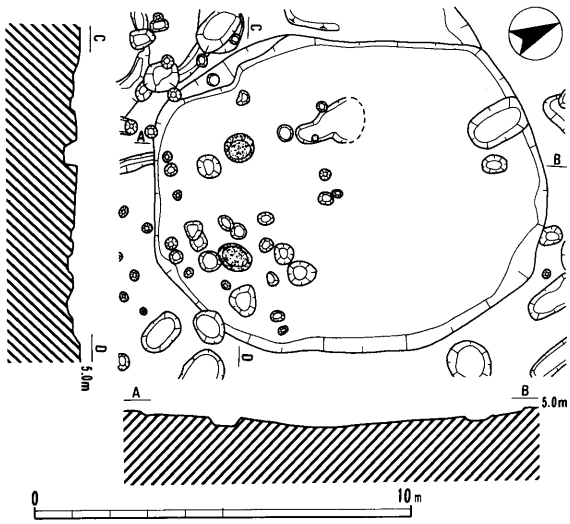
A．弥生時代の竪穴住居について

後期前半および後半の竪穴住居を各2棟ずつ計4棟検出している。ＳＨ2及びＳＨ5が後期前半の竪穴住居である。

ＳＨ2は隅丸長方形といえなくもないが、4辺とも外側にふくらみを持っており楕円形とした。同時期の尺目遺跡[27]・柳谷遺跡[28]・大ケ瀬遺跡[29]・平栄遺跡[30]では方形ないし隅丸方形の竪穴住居が検出されているのに比べるとやや特異である。類似のプランは、納所遺跡で検出されている[31]。ＳＢ6がそれで、時期は中期後半で、8.4ｍ×11.0ｍと大型のものである。宮ノ前ＳＨ2は（規模は納所ＳＢ6に劣るが検出された中では最大である。）古い様相を残しており、後期後半になるとＳＨ3・4のように隅丸正方形に変わっていくと考えられる。

ＳＨ5については短辺／長辺が約0.67であり、同程度の比率を持つ長方形プランの竪穴住居も多くない。後期前半では柳谷遺跡の4号住居址（比率約0.71）がある。中期では、納所遺跡ＳＢ9（比率約0.71）と同ＳＢ1（0.75～0.93）が近いほうである。

宮ノ前遺跡南の低地にある森山東遺跡では弥生時代の水田遺構が検出されいる[32]。宮ノ前遺跡の竪穴住居に居住した人びとが水田を営んでいたであろう。



第149図　納所遺跡ＳＢ6実測図（1：200）

さらに、水田が周辺の低湿地全体に広がることを考えたとき、宮ノ前遺跡だけでなく桐山遺跡、森山遺跡等周辺の同時期の遺跡に分散している集団が協力して耕作していたと考えられる。

B．飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物について

竪穴住居はＳＨ6～11の6棟が検出されている。いずれも検出面と床面との段差が少なかったり、半分以上が流失してしまったりしていることから、本来もっと多くの竪穴住居があったと考えられる。掘立柱建物はＳＢ12～14の3棟あるが、同じ理由からより多く存在していた可能性がある。

7世紀代の竪穴住居と掘立柱建物は、安濃川流域では初の検出例である。宮ノ前遺跡ではこの時期に両方の居住形態がみられるわけである。一方、志登茂川流域（宮ノ前遺跡の立地する丘陵の北側）にある橋垣内遺跡では、7世紀代にはすでに掘立柱建物に移行しており、竪穴住居はみられない[33]。安濃川流域での今後の調査例を待たなければならないが、両河川の流域では、竪穴住居から掘立柱建物への移行時期に差がみられるようである。

C．平安時代末～鎌倉時代初頭・鎌倉時代の掘立柱建物について

平安時代末～鎌倉時代は遺物量も多く、この遺跡において人びとの活動が活発であった時期である。平安末～鎌倉初頭の掘立柱建物は2棟検出された。このうちＳＢ19は東にＳＫ24を伴っており、いわゆる南東隅土坑を持つ掘立柱建物である。ＳＫ24の東壁には板材がはられており南東隅土坑の構造を考える上でひとつの資料となった。なお、周辺には柱根を持つピットが多数あり、他にも掘立柱建物が存在していたと思われる。

鎌倉時代の掘立柱建物は調査区の西方で3棟検出されている。平安時代末～鎌倉時代初頭には調査区南東部にあった住居区域が西へ移っていったようである。ＳＢ29・30の北に土師器皿の集中する土坑がいくつかあることは、掘立柱建物の性格を考える上で興味深い。ＳＤ26・50・51は当時の居住区域の区画を示す溝であろうと考えられる。

（本堂弘之）

（２）遺物について

宮ノ前遺跡から出土した遺物には、縄文時代中期以降、弥生時代後期、飛鳥・奈良時代、平安時代～室町時代前期に至るまで多少中断期間はあるものの長期間にわたる各時代、各種の遺物が認められた。

ここでは特にまとまって出土している弥生時代後期、飛鳥～奈良時代、平安時代末期～鎌倉時代の遺物について簡単に触れまとめとしたい。

Ａ．弥生時代後期の土器

従来、三重県における弥生時代後期の土器編年は伊賀地域に限れば、その地理的な位置から文化史的にも政治史的にも畿内との関係が深く、「畿内第Ｖ様式」の範疇で捉えられてきた。一方、伊勢湾西岸部では、東海西部地方との結びつきが強く、伊賀地域とは異なる独自の文化圏を形成していたため、東海西部の地域小様式である「山中式」あるいは「寄道式」という呼称をそのまま伊勢湾西岸部でも援用することが多かった。また資料的に整理する必要があるが、これも県内の地域小様式である「上箕田Ⅳ式～Ｖ式」の呼称を用いたり、凡日本史的立場に立ち「畿内第Ｖ様式」、あるいは「伊勢湾第Ｖ様式」という呼称を用いることもあった。

谷本鋭次は西ケ広遺跡の報告[34]の中で、山中式と欠山式との中間に位置する土器群を抽出して伊勢湾西岸における弥生後期の土器編年を「上箕田Ⅳ式」→「西ケ広」→「高松・中楽山」（欠山）という流れで捉えられた。そして草山遺跡の調査で層位的にこの変遷を追認することとなり、名称の問題は別として広義の土器様式の流れは確固たるものとなっている。一方、山田猛は山城遺跡の報告[35]のなかで、編年の名称の問題に触れるとともに、主として高杯の杯部と脚部の変遷に着目して「伊勢湾第Ｖ様式古段階」→「伊勢湾第Ｖ様式新段階」の編年を示した。これにより谷本の言う「西ケ広」の大半がＶ様式新段階に位置付けられることになった。また型式的にＶ様式からの変化が辿れる「欠山式」については、東海西部一円に斉一性をもつ「伊勢湾第Ⅵ様式」とも呼ぶべきものとして広義の「欠山様式」を新たに設定し直し、これを古・中・新の三段階に分類している。なお、最近の研究では「欠山式」を小形壺、器台、鉢の小形三種精製土器が揃う典型的な古式土師器の普及以前の土器様式として古墳時代に含める考え方が定着しつつあるが、筆者も「欠山式」は土器様式としては「Ｖ様式」を継承しつつも時代史的には凡日本史的な立場に立ち、古墳時代に含めて考えている。

さて、今回報告した竪穴住居ＳＨ５及びＳＨ２出土の土器類について見てみると、高杯は小形で口縁部の立ち上がりが直立に近いもので（例；18）、高杯の透孔位置は中位以下で５～６穴が多く（例；18・19・24）、脚部と杯部の接合は円盤充填技法によるもので、「伊勢湾第Ｖ様式古段階」の典型的な高杯より古い様相を呈している。また甕は、受口状口縁や上げ底風の擬高台を呈するもの(16)もみられる。従ってこれらの一群はⅣ様式からＶ様式への過渡的な段階として「伊勢湾第Ｖ様式古段階」より一時期古いＶ様式の初期段階に位置付けできそうである。そしてＳＨ３出土土器がこれに続く「伊勢湾第Ｖ様式古段階」に相当するものと思われる。

Ｂ．飛鳥～奈良時代の土器

竪穴住居ならびに遺物包含層から出土の須恵器は概ね猿投窯編年の第Ⅲ期[36]（７世紀前葉～８世紀前葉）に属するものである。第Ⅲ期はさらに東山50号窯式、岩崎17号窯式、岩崎41号窯式、高蔵寺２号窯式の４期に細分されているが、岩崎17号窯式相当のものを中心に一応各期のものが認められた。但し、古墳時代の土器様式の延長上にある杯Ｈは、田辺編年[37]のTK209型式～TK217型式に相当するもので、TK217型式と併行関係にあるとされる東山50号窯式に相当するものは確認できなかった。したがって６世紀末から７世紀前葉にかけての須恵器杯Ｈに限っては、猿投窯の編年をそのまま用いるのは問題があろう。あるいはこの時期、発掘調査例がないため、その実態を十分把握できていないが、鈴鹿市南部から安芸郡河芸町・津市北部にまたがる県下最大級の古窯跡、徳居古窯跡群が最盛期を迎えており、本古窯からの供給も考慮しておく必要があろう。

なお、当遺跡からは日常の供膳具のほかに円面硯や獣足壺と思われる脚部などの特殊品も出土しており、宮ノ前遺跡の歴史的性格を考える上で重要である。

C．平安時代末期～鎌倉時代の土器

従来、中勢地域におけるこの時期の土器相については、南勢地域に比べ発掘調査例の少ないこともあり、その実態は不明な点が多かったが、今回、土坑、溝、井戸等から山茶椀、土師器鍋・皿（南伊勢系）、陶器甕（知多窯産）がまとまって出土し、それぞれの共伴関係からある程度土器の流れが明らかとなってきたので、簡単に触れておきたい。

土師器皿類の法量と口縁部の調整の変化を中心に各遺構出土の主な遺物を列記すると以下のようにまとめられる。なお、共伴する山茶椀は藤澤編年[38]、陶器甕は青木編年[39]、土師器鍋は伊藤編年[40]を参考 とした。

ＳＫ21

小皿　口径９㎝前後。口縁端部のヨコナデ明瞭。

ＳＫ24

小皿　口径８㎝。口縁部直立。

ＳＫ37

皿　　口径13㎝～14㎝。（蚊山遺跡ＳＥ172 相当）

小皿　口径８㎝前後。口縁端部のヨコナデ主流。

ＳＤ26

皿　　口径12㎝弱。口縁端面を意識するもの有。

小皿　口径８㎝。

鍋　　第１段階ｂ型式。

山茶椀　５型式新段階～７型式（中心は６型式）。

陶器甕　大砂古窯跡群～小森古窯跡群Ｂ－１号。

ＳＤ51

皿　　口径11㎝前後。

鍋　　第１段階ａ型式・ｂ型式。

山茶椀　６型式～７型式。

陶器甕　大砂古窯跡群。

ＳＫ35

小皿　口径７㎝～８㎝。外面指オサエ。

外面指オサエ、内面ナデ又は工具ナデ。

山皿　７型式。

ＳＥ52

皿　　口径10㎝と11.5㎝前後。口縁部の内弯強い。

小皿　口径7.5㎝。

鍋　　第３段階ａ型式・ｂ型式。

（蚊山遺跡ＳＥ157 相当）

山茶椀　８型式。

陶器甕　加世端古窯跡群第１号窯。

溝、井戸の出土遺物は厳密な意味での一括性に欠けるものの、上記にあげた各遺構出土の土器群は、皿に伴う遺物のそれぞれの年代観から、ほぼ古いものから順に編年的に並らぶものと考えられる。皿は年代の経過と共に、確実に法量の縮小化、調整手法の省略化、器壁の減少化が進むことがわかる。

およその実年代は、ＳＫ21が12世紀後葉、ＳＫ24が12世紀末～13世紀前葉、S.K37が13世紀前葉、ＳＤ26・ＳＤ51が13世紀第２四半期～第３四半期、ＳＫ35が13世紀中葉～第３四半期、ＳＥ52が13世紀第４四半期～14世紀第１四半期に当てられよう。

さて、以上の年代観で、前川嘉宏が提示した蚊山遺跡の編年案[41]とを比較してみると、蚊山ＳＥ172が四半世紀、蚊山ＳＥ157 が半世紀ほど遡ることになる。前川がＩ期新段階としたＳＥ56には山茶椀の５型式～６型式が、Ⅱ期古段階のＳＥ172 には６型式が伴うとされており、土師器皿類の型式差も考慮の上、前者を13世紀第１四半期に、後者を13世紀第２四半期に位置付けされたが、共伴する土師器鍋は明確な型式差を認めることができず、またＳＥ56出土の土師器皿は厚手で器面がザラメのもので、むしろこの皿は12世紀後半代に入るものと思われ、混入品の可能性もある。したがってＩ期新段階とⅡ期古段階との間には期を設定するほどの大きな時期差はないものと思われ、山茶椀の編年観より両期とも13世紀前半代におさまるものと考えた方が良いのではないかと思われる。Ｉ期新段階の皿は、型式的にＳＥ172 の皿に近いものであろう。

一方、前川がⅣ期、14世紀中葉以降とされたＳＥ157出土の一群と宮ノ前ＳＥ52出土遺物は、土師器皿・鍋とも型式的にほぼ同時期と考えられるので、これも、ＳＥ52の山茶椀や陶器甕の年代観から、今回示した年代観の方がより妥当性のあるものと思われる。

D．山茶椀の型式別産地傾向

多量に出土した山茶椀について、型式分類ならびに産地分類（肉眼的観察による）を行った[42]ので、下表にまとめ、中勢地域における山茶椀の流通傾向について簡単に触れておきたい。

型　式	尾張型	渥美型	東濃型
3型式	1（100%）		
4型式	23（77%）	7（23%）	
5型式	32（68%）	14（30%）	1（ 2%）
6型式	123（86%）	20（14%）	
7型式	34（100%）		
8型式	6（100%）		
9型式	2（100%）		

この表より、尾張型は操業されていた全期間の製品が搬入され、常に渥美型に対し優位に立っていたことがまず指摘できる。特に4型式以降、搬入が増加し始め、6型式に至り、そのピークを迎えている。これは、4型式以降、猿投窯に加え、生産が拡大されつつあった知多窯が6型式に至り最盛期を迎えることと一致しており、生産地の動向をよく反映している。また7型式の山茶椀は、主として瀬戸窯産と思われ、8・9型式のものはすべて瀬戸窯産であることから、全型式を通じ、尾張型山茶椀の生産地の動向と一致している。

山茶椀の搬入経路については、藤澤氏が指摘されているように、知多半島の主要な港から、対岸の伊勢湾西岸の主要な港へ直接海路を使って運ばれたものと思われる。

（倉田直純）

（註）

① 岡田　登「伊勢国市村駅家所在地考」『高學館論叢第十三巻第六号』皇學館大學　1980
② 藤澤良祐「山茶碗研究の現状」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター　1994
③ 伊藤裕偉「中世南伊勢の土師器に関する一試論」『Miehistory vol.1』三重歴史文化研究会　1990
④ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
⑤ 註④に同じ
⑥ 齊藤孝正「猿投窯第Ⅲ期杯類の型式編年」『名古屋大学総合資料館報告4』1988
⑦ 齊藤孝正「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3施釉陶器－』古代の土器研究会　1994
⑧ 註⑦に同じ
⑨ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
⑩ 佐野　元「白磁四耳壷の型式と画期」『研究紀要第2輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1994
⑪ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター1994
以下、山茶椀の型式分類と編年はこの文献による。
⑫ 尾張地方の猿投窯、瀬戸窯、知多窯と三河地方の藤岡窯、足助窯を一括して尾張型と呼称する。
⑬ 前川嘉宏「蚊山遺跡左郡地区」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1993
⑭ 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会　1993
⑮ 立松宏・福岡猛志・中村信幸『大砂古窯跡群』阿久比町教育委員会　1993
⑯ 磯部幸男・中野晴久『小森古窯址群』常滑市教育委員会　1990
⑰ 山下勝年・中野晴久『亀塚池古窯址群発掘調査報告書』常滑市教育委員会　1993
⑱ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会　1990
⑲ 芳賀陽「加世端古窯址」『梶廻間古窯址』愛知県知多町八幡公民館　1962
⑳ 山田　猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会　1986
㉑ 藤澤良祐「瀬戸古窯址郡Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館　1991
㉒ 青木　修「続片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『研究紀要第2輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1994
㉓ 立松宏・福岡猛志『上芳池古窯址群』阿久比町教育委員会　1990
㉔ 山田　猛・岸田早苗「山城遺跡・北瀬古遺跡」『三重県埋蔵文化財発掘調査報告100-4』三重県埋蔵文化財センター　1994
㉕ 前川嘉宏「曲遺跡」『県道丹生寺一志線及び県道合ケ野松阪線道路改良工事敷地内　埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1989
㉖ 註⑦に同じ
㉗ 萱室康光『尺目遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1975
㉘ 浅生悦生『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974
㉙ 註㉘に同じ
㉚ 伊藤久嗣「Ⅴ　平栄遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告－山口遺跡・大ケ瀬遺跡・平栄遺跡－』三重県教育委員会　1973
㉛ 伊藤久嗣『納所遺跡－遺構と遺物－』三重県教育委員会　1980
㉜ 倉田直純「Ⅳ. 森山東遺跡」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993
㉝ 『一般国道23号中瀬道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ・Ⅲ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1990・1991
㉞ 谷本鋭次ほか「西ケ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財連盟　1970
㉟ 山田　猛・岸田早苗「山城遺跡・北瀬古遺跡」『三重県埋蔵文化財発掘調査報告100-4』三重県埋蔵文化財センター　1994
㊱ 齊藤孝正「猿投窯第Ⅲ期杯類の型式編年」『名古屋大学総合資料館報告4』1988
㊲ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
㊳ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター　1994
㊴ 青木　修「続片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『研究紀要第2輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1994
この文献の中で中世陶器甕の編年についても若干触れられている。
㊵ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会　1990
㊶ 前川嘉宏「蚊山遺跡左郡地区」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1993
㊷ 藤澤良祐氏、前川嘉宏氏、倉田の三者で分類。三重県における山茶椀の産地別出土傾向については、下記の文献に詳しく述べられている。前川嘉宏「三重県における山茶椀の出土状況」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター　1994

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
1	005 -01	A地区 SK1	縄文土器 深鉢	—	—	調整不明。	褐	砂粒を含む	底部小片	底部外面に網代跡
2	130 -11	A地区 包含層	石製品 石鏃	径 1.9×1.2	厚 0.2	打製	灰	————	一部欠損	サヌカイト製
3	003 -01	A地区 Pit	石製品 石鏃	径 2.4×1.2	厚 0.3	打製	灰	————	一部欠損	サヌカイト製
4	004 -03	A地区 包含層	石製品 石鏃	径 2.5×2.0	厚 0.6	打製	灰	————	完形	サヌカイト製
5	114 -06	A地区 包含層	二次加工 有剥片	径 4.9×1.8	厚 1.8	打製	黒	————	完形	黒曜石製
6	131 -01	A地区 包含層	打ち欠き 石錘	径 6.8×6.5	厚 1.2	両端を打ち欠き	灰	————	完形	
7	004 -02	A地区 包含層	敲石	径 8.1×6.3	厚 5.7		灰	————	完形	
8	054 -01	A地区 SH5	弥生土器 壺	9.6	24.0	頸部に刺突文。口縁部に沈線。	濃褐	並。 石英・長石を含む	ほぼ完	
9	055 -01	A地区 SH5	弥生土器 壺	12.6	24.5	体部下半にヘラミガキ。	暗褐	石英・長石を含む	1／3	黒斑
10	119 -05	A地区 SH5	弥生土器 壺	(13.0)	—	頸部に刺突文。口縁部ヨコナデ。体部はハケ後ミガキ。	浅黄	長石・雲母を含む	口縁部～体部	黒斑
11	101 -01	A地区 SH5	弥生土器 壺	—	—	体部は外面ハケ後横線文・波状文。内面ハケ後一部にナデ。	灰白	砂粒を含む	体部の一部	
12	129 -02	A地区 SH5	弥生土器 壺	—	—	体部下半にヘラミガキ。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	下半	黒斑
13	128 -06	A地区 SH5	弥生土器 壺	—	—	調整不明。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	1／3	
14	129 -04	A地区 SH5	弥生土器 壺	—	—	ヘラミガキか。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	胴部下半	
15	115 -01	A地区 SH5	弥生土器 壺	(16.6)	—	口縁端部に刺突文。	灰白	石英・長石を含む	口縁部1／3	
16	138 -01	A地区 SH5	弥生土器 甕	(20.6)	(24)	外面上半ミガキ。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	底部完、上半1／8	黒斑
17	055 -03	A地区 SH5	弥生土器 高杯	(12.3)	—	調整不明。	褐	良	杯部1／6	
18	055 -02	A地区 SH5	弥生土器 高杯	—	—	透孔5方向。	褐	良	脚部3／4	
19	129 -01	A地区 SH5	弥生土器 高杯	—	—	横線13本。刺突2段。ハケ後ミガキ透孔5方向。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	脚部1／2	
20	066 -04	A地区 SH5	土製品 土錘	長さ 3.1	径 2.9		灰黄橙	石英・長石を含む	3／4	
21	066 -03	A地区 SH5	石製品	径 7.4	厚さ 3.7	両面に使用痕あり。		————	完形	
22	095 -01	A地区 SH2	弥生土器 壺	(11.8)	25	頸部に刺突文。胴部にミガキが残る。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	1／2	
23	128 -04	A地区 SH2	弥生土器 壺	—	—	調整不明。	灰褐	石英・長石を含む	下半	
24	093 -01	A地区 SH2	弥生土器 高杯	—	—	透孔6方向。刺突。ハケメ。	にぶい黄橙。	雲母を含む	1／6	
25	007 -02	A地区 SH3	弥生土器 壺	8.0	13.2	内面底部ハケメ。他は調整不明。	灰白	やや密	ほぼ完	
26	007 -05	A地区 SH3	弥生土器 壺	16.0	—	ヨコナデ。	橙褐	良	1／4	
27	006 -01	A地区 SH3	弥生土器 壺	—	—	ミガキ。	橙褐	良	底部のみ	底部内面に有機物付着
28	007 -01	A地区 SH3	弥生土器 壺	8.4	9.0	ナデ後ミガキか？。	淡褐	良	2／3	
29	114 -05	A地区 SH3	弥生土器 高杯	—	—	横線8本3条。	明黄褐	石英・長石を含む	脚部1／2	
30	007 -06	A地区 SH3	弥生土器 高杯	—	—	調整不明。	橙褐	良	脚部1／3	
31	007 -03	A地区 SH3	弥生土器 高杯	—	—	透孔、横線。	赤褐	良	脚部1／4	
32	035 -01	A地区 包含層	須恵器 器台	—	—	鋸歯文。	灰	良	高杯部小片	初期須恵器
33	131 -02	A地区 Pit	石製品 管玉	1.4 × 0.5	—		暗緑灰	————	完形	
34	092 -07	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(15.8)	(4.6)	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。沈線。	灰	石英・長石を含む	1／4	
35	092 -01	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(13.8)	(3.9)	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰白	密	1／5	
36	012 -01	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(14.1)	(4.5)	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。ロクロ回転右回り。	暗灰	密 砂粒を含む	1／8	
37	012 -02	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(14.0)	(4.5)	ロクロナデ。	青灰	密 砂粒を含む	1／8	
38	092 -08	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	13.5	4.0	ロクロナデ。天井部ヘラ切り後ナデ。	灰	石英・長石を含む	2／3	
39	011 -01	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(13.6)	(4.2)	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。ロクロ回転右回り。	黄灰	密 砂粒を含む	2／5	
40	012 -03	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(13.2)	4.1	ロクロナデ。天井部未調整。	灰	密 砂粒を含む	1／4	

第23表　出土遺物観察表1

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm）口径	法量（cm）器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
41	008-02	A地区 SH6	須恵器 杯身	(14.4)	(4.3)	ロクロナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	青灰	密 砂粒を含む	1/5	
42	010-03	A地区 SH6	須恵器 杯身	(12.4)	(4.0)	ロクロナデ。底部ヘラ切り未調整。	黄褐灰	密 砂粒をやや含む	1/4	
43	130-07	A地区 SH6	須恵器 杯身	12.2	4.0	ロクロナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	灰白	石英・長石を含む	1/2	
44	010-04	A地区 SH6	須恵器 杯身	(11.4)	(3.7)	ロクロナデ。底部ヘラ切り未調整。	青灰	やや粗 砂粒を含む	2/5	
45	092-09	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	13.4	4.8	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰	石英・長石を含む	3/4	
46	008-01	A地区 SH6	須恵器 高杯	10.7	—	有蓋高杯。ロクロナデ。杯底部ロクロケズリ。	褐灰	密 砂粒を含む	杯部5/6	
47	139-02	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(9.5)	—	ロクロナデ。	明灰	やや粗	1/4	
48	139-01	A地区 SH6	須恵器 杯蓋	(13.4)	—	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰	密	1/4	歪みあり
49	092-04	A地区 SH6	須恵器 杯身	(10.6)	3.7	ロクロナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	灰白	密	1/3	
50	128-01	A地区 SH6	須恵器 短頸壺	8.8	8.8	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。ロクロ回転左回り。	灰白	砂粒を含む	底部完 上半	焼き脹れ
51	012-06	A地区 SH6	須恵器 短頸壺	(10.8)	—	ロクロナデ。ロクロ回転左回り。	暗灰	密 砂粒を含む	2/5	
52	012-05	A地区 SH6	須恵器 壺	—	—	ロクロナデ。下半ロクロケズリ。沈線3条。	灰褐	密 砂粒を含む	胴部1/6	
53	011-03	A地区 SH6	須恵器 長頸壺	—	—	ロクロナデ。沈線。	暗灰	やや粗 砂粒を含む	頸部のみ	
54	010-02	A地区 SH6	須恵器 平瓶	7.0	—	ロクロナデ。突帯。沈線。	黄灰	やや粗 砂粒を含む	口頸部1/2	
55	093-02	A地区 SH6	須恵器 甕	(18.8)	—	口縁部ロクロナデ。体部タタキ。	オリーブ灰	密	口縁部1/4	
56	117-03	A地区 SH6	須恵器 甕	(22.4)	—	口縁部ヨコナデ。体部タタキ。	灰	石英・長石を含む	上半1/3	
57	010-05	A地区 SH6	土師器 甕	(11.9)	10.1	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ。口縁部内面ハケメ。	明褐灰	やや密	1/2	黒斑
58	012-07	A地区 SH6	土師器 甕	(14.1)	—	口縁部ナデ。体部外面板ナデ。	黄褐白	密 砂粒を含む	上半1/8	
59	012-04	A地区 SH6	土師器 甕	(16.1)	—	調整不明。	黄褐白	密 砂粒を含む	1/5	
60	009-02	A地区 SH6	土師器 甕	(18.8)	—	調整不明。	黄褐白	粗 砂粒を含む	1/10	
61	093-03	A地区 SH6	土師器 甕	(15.8)	—	口縁部ヨコナデ。体部内外面ハケメ。	灰白	長石を含む	上半1/4	
62	009-01	A地区 SH6	土師器 甕	(14.9)	—	口縁部ヨコナデ。体部内外面ハケメ。	黄褐白	やや粗 長石を含む	小片	
63	117-02	A地区 SH6	土師器 甕	(19.9)	—	調整不明。	淡黄	石英・長石を含む	口縁部1/4	
64	066-02	A地区 SH6	土師器 甕	(23.2)	—	内面ナデ。	浅黄橙	長石を含む	口縁部1/4	
65	066-01	A地区 SH6	土師器 甕	(32.8)	—	調整不明。	灰白	石英・長石を含む	口縁部1/12	
66	009-03	A地区 SH6	土師器 高杯	—	—	ナデ。	褐	やや粗 砂粒を含む	脚部ほぼ完	
67	092-06	A地区 SH6	土師器 手づくね	—	—	調整不明。	にぶい黄褐	砂粒を含む	1/3	
68	010-01	A地区 SH8	須恵器 杯身	(10.4)	—	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	青灰	密	1/3	
69	136-06	A地区 SH8	鉄製品 鉄鏃	最大幅 2.1	—	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	暗灰	密 砂粒を含む	7.9cm 残存	
70	117-01	A地区 SH9,10	須恵器 杯身	(11.9)	3.8	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	暗灰	砂粒を含む	1/2	
71	092-03	A地区 SH9,10	須恵器 高杯	(13.8)	—	ロクロナデ。沈線4条。	灰	並	杯部1/4	
72	115-03	A地区 SH11	須恵器 杯蓋	(13.7)	—	ロクロナデ。天井部ヘラ切り未調整。ロクロ回転右回り。	灰	石英・長石を含む	1/4	
73	139-03	A地区 SH11	須恵器 台付盌	—	—	沈線。体部下半ロクロケズリ。	灰黄	密 砂粒を含む	脚部1/4 体部小片	歪み大
74	121-01	A地区 SH11	土師器 甕	(13.8)	15.0	口縁部ヨコナデ。外面胴部上半ハケメ、下半ヘラケズリ。内面ハケメ、ヘラケズリ。	浅黄	長石を含む	1/4	
75	113-03	A地区 包含層	須恵器 杯蓋	(14.1)	4.3	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰	砂粒を含む	天井部完 口縁1/9	
76	107-01	A地区 包含層	須恵器 杯蓋	(13.0)	4.3	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ後一部にナデ。	灰白	密	1/2	
77	079-05	A地区 包含層	須恵器 杯蓋	(12.7)	—	ロクロナデ。天井部ヘラ切り後ナデ	灰	砂粒を含む	2/5	
78	036-04	A地区 包含層	須恵器 杯蓋	(12.0)	—	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ後ナデ。	明灰白	良 砂粒を含む	1/2	
79	079-09	A地区 包含層	須恵器 杯蓋	(11.2)	3.4	ロクロナデ。天井部ヘラ切り後粗いナデ。	灰白	密	1/4	
80	106-01	A地区 包含層	須恵器 杯蓋	(11.2)	3.4	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	暗灰	砂粒を含む	1/3	

第24表　出土遺物観察表2

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
81	064-09	A地区包含層	須恵器 杯蓋	(10.7)	4.0	ロクロナデ。天井部ヘラ切り後ナデ。	灰	密	1／2	
82	067-01	A地区包含層	須恵器 杯蓋	10～11	－	ロクロナデ。天井部ヘラ切り未調整。	灰	長石を含む	5／6	歪み大
83	106-03	A地区包含層	須恵器 杯蓋	(9.6)	3.9	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ後ナデ。沈線。	灰	密 砂粒を含む	1／3	
84	079-08	A地区包含層	須恵器 杯蓋	(13.0)	3.6	ロクロナデ。天井部ヘラ切り後粗いナデ。	灰	密 石英を含む	2／5	
85	079-07	A地区包含層	須恵器 杯蓋	11.6	3.8	ロクロナデ。天井部ヘラ切り未調整と粗いヘラケズリ。	灰	密 砂粒を含む	1／2	
86	041-03	A地区包含層	須恵器 杯身	(12.6)	－	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	褐灰	良	1／4	
87	106-08	A地区包含層	須恵器 杯身	(11.2)	－	ロクロナデ。底部ヘラ切り後ロクロケズリ。	灰白	密 砂粒を含む	1／4	
88	079-04	A地区包含層	須恵器 杯身	(12.2)	3.4	ロクロナデ。底部未調整一部ロクロケズリ。	灰白	砂粒を含む	1／4	
89	106-02	A地区包含層	須恵器 杯身	(11.3)	3.3	ロクロナデ。底部雑なロクロケズリ。	灰	砂粒を含む	2／3	
90	041-01	A地区包含層	須恵器 杯身	10.4	－	ロクロナデ。底部板ナデ。	青灰	良	1／4	
91	106-07	A地区包含層	須恵器 杯身	10.8	3.5	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。ナデ。	灰白	砂粒を含む	ほぼ完形	
92	086-06	A地区包含層	須恵器 杯身	(10.2)	3.5	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。ロクロ回転左廻り。	灰白	密 砂粒を含む	1／3	
93	115-06	A地区包含層	須恵器 杯身	8.9	3.3	ロクロナデ。底部未調整。	灰	並	ほぼ完形	
94	106-06	A地区包含層	須恵器 杯蓋	(12.4)	5.4	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰白	砂粒を含む	1／3	
95	116-04	A地区包含層	須恵器 杯蓋	15.0	4.5	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰	砂粒を含む	2／3	
96	042-03	A地区包含層	須恵器 杯蓋	12.4	5.4	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	青灰	良	1／3	
97	063-04	A地区包含層	須恵器 杯蓋	16.2	7.7	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	暗青灰	長石を含む	3／5	歪み大
98	093-05	A地区包含層	須恵器 短頸壺	(8.0)	－	ロクロナデ。カキメ。	灰	密	1／4	焼き脹れ
99	128-02	A地区包含層	須恵器 短頸壺	－	－	ロクロナデ。体部下半ロクロケズリ。ロクロ回転右廻り。沈線。	灰白	石英・長石を含む	体部1／4	
100	063-08	A地区包含層	須恵器 鉢	9.3	4.5	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	灰	長石を含む	1／2	歪みあり
101	036-03	A地区包含層	須恵器 杯	10.8	5.2	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。ロクロ回転右廻り。	明灰	良	1／4	
102	031-05	A地区包含層	須恵器 杯	10.0	4.4	ロクロナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	明灰	良	1／2	
103	036-02	A地区包含層	須恵器 杯	10.2	4.1	ロクロナデ。底部ヘラ切り未調整。	明灰	良	1／4	
104	069-07	A地区包含層	須恵器 杯	(10.4)	5.3	ロクロナデ。底部ヘラ切り未調整。	灰白	密	1／6	
105	036-05	A地区包含層	須恵器 杯	(10.0)	5.6	ロクロナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	灰白	密	1／2	
106	044-01	A地区包含層	須恵器 杯	(9.0)	5.0	ロクロナデ。底部ヘラ切り未調整。	暗青灰	良	1／2	
107	073-02	A地区包含層	須恵器 杯	11.9	3.5	ロクロナデ。底部ヘラ切り後粗いナデ。	黄灰	長石を含む	5／6	
108	087-04	A地区包含層	須恵器 杯	(13.2)	3.6	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	灰白	砂粒を含む	1／3	
109	071-03	A地区包含層	須恵器 杯	(17.2)	6.2	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。ロクロ回転右回り。	灰白	砂粒を含む	1／5	歪みあり
110	100-02	A地区包含層	須恵器 杯	(15.0)	3.5	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	淡灰	密	1／3	
111	042-04	A地区包含層	須恵器 杯	(16.4)	4.6	ロクロナデ。底部ロクロケズリ。	青灰	良	1／4	
112	079-03	A地区包含層	須恵器 杯	(15.4)	3.8	ロクロナデ。	褐灰	砂粒を含む	1／8	
113	114-03	A地区包含層	須恵器 杯蓋	9.8	3.1	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰白	並	完形	
114	064-06	A地区包含層	須恵器 杯蓋	7.2	－	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	灰白	砂粒を含む	つまみ部欠損。	
115	041-04	A地区包含層	須恵器 杯蓋	15.6	2.6	ロクロナデ。天井部ロクロケズリ。	明白	良	1／2	
116	061-03	A地区包含層	須恵器 すり鉢	－	－	ナデ。底部刺突。	橙	石英・長石を含む	下半3／4	
117	110-04	A地区包含層	須恵器 すり鉢	－	－	ロクロナデ。沈線。底部手持ちヘラケズリ。	灰白	砂粒を含む	下半のみ	
118	116-02	A地区包含層	須恵器 高杯	(11.3)	－	ロクロナデ。杯部に沈線。杯部底ロクロケズリ。	灰	砂粒を含む	1／2	
119	110-05	A地区包含層	須恵器 高杯	(14.2)	－	ロクロナデ。脚部に沈線。杯部底ロクロケズリ。	灰白	長石を含む	脚部を欠損	
120	094-01	A地区包含層	須恵器 高杯	(14.6)	(11.4)	ロクロナデ。杯部底ロクロケズリ。杯部・脚部に沈線。	灰白	石英・長石・雲母を含む	脚部完形 杯部1／3	

第25表　出土遺物観察表 3

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
121	130 -08	A地区 包含層	須恵器 平瓶	—	—	ロクロナデ。	灰白	砂粒を含む	体部1／4	
122	081 -05	A地区 包含層	須恵器 平瓶	—	—	ロクロナデ。下半ロクロケズリ。	青灰	砂粒を含む	体部2／5	
123	123 -03	A地区 包含層	須恵器 長頸壺	(9.3)	—	ロクロナデ。	灰白	石英・長石を含む	口縁～頸部 1／2	
124	044 -05	A地区 包含層	須恵器 長頸壺	(14.8)	—	ロクロナデ。	灰	良	口縁1／6	
125	090 -01	A地区 包含層	須恵器 甕	(28.4)	—	沈線3条。櫛刺突。	灰白	密 砂粒を含む	口縁1／2	
126	096 -01	A地区 包含層	須恵器 甕	(17.5)	30.6	口縁部ヨコナデ。体部カキメ、叩き。内面青海波文。	灰	密	口縁1／2 体部ほぼ完	
127	078 -02	A地区 包含層	須恵器 横瓶	(13.6)	—	体部叩き。内面青海波文。	灰	密	上半1／4	
128	091 -01	A地区 包含層	須恵器 横瓶	(11.8)	—	体部叩き、カキメ。	灰白	砂粒を含む	口縁1／3 体部上半	自然釉
129	109 -05	A地区 包含層	土師器 椀	(11.2)	4.2	口縁部ヨコナデ。	橙	良	1／3	
130	041 -05	A地区 包含層	土師器 椀	12.2	5.6	調整不明。	濃褐	良	1／2	
131	109 -04	A地区 包含層	土師器 杯	(13.2)	2.7	調整不明。	浅黄橙	密	1／3	
132	051 -04	A地区 包含層	土師器 杯	(15.4)	4.1	調整不明。	橙褐	良	1／8	
133	051 -01	A地区 包含層	土師器 蓋	19.4	2.9	調整不明。	橙褐	精良	ほぼ完	
134	044 -03	A地区 包含層	土師器 皿	(20.0)	(2.1)	内面に暗文。外面ヘラミガキ。	橙褐	良	1／8	
135	031 -04	A地区 包含層	土師器 高杯	—	—	ナデ。	橙褐	良	脚部2／3	
136	063 -03	A地区 包含層	土師器 甕	(26.7)		口縁部ヨコナデ。内外面ともハケメ。	浅黄橙	密	上半1／6	
137	129 -03	A地区 包含層	土師器 甕	(14.2)	15.2	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ヘラケズリ。	浅黄橙	石英・長石を含む	1／2	
138	122 -03	A地区 包含層	土師器 甕	(13.4)	—	口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ。	灰黄	石英・長石を含む	上半1／2	
139	069 -01	A地区 包含層	土師器 鉢	(13.9)	(8.0)	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙	石英・長石を含む	1／4	
140	051 -02	A地区 包含層	獣脚	—	—	ケズリ。ヘラによる刻み。	紫灰	良	脚のみ	
141	045 -01	A地区 包含層	円面硯	硯面部 (12.8)	6.2	長方形の透孔4～5孔。筆差し部。	褐灰	良	1／4	
142	045 -02	A地区 包含層	円面硯	硯面部 (11.2)	—	円形の透孔と線状の透孔。	灰	良	1／4	
143	051 -03	A地区 包含層	円面硯	—	—	細長い透孔。	褐灰	良	小片	
144	039 -05	A地区 包含層	土師器 皿	—	—	非ロクロ製品。貼り付け高台。	橙褐	良	高台部1／2	
145	074 -01	A地区 Pit	土師器 皿	11.2	2.8	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼り付け高台。	灰白	密	3／5	
146	041 -06	A地区 Pit	土師器 皿	(9.6)	1.9	ロクロナデ。底部糸切り痕。	橙褐	良	1／2	
147	042 -01	A地区 Pit	土師器 皿	(13.8)	3.1	ロクロナデ。底部糸切り痕。	淡褐	良	1／2	
148	119 -02	A地区 Pit	土師器 皿	15.1	3.7	ロクロナデ。底部糸切り痕。	橙	密	完形	
149	090 -02	A地区 Pit	土師器 甕	(24.0)	—	清郷型。内面板ナデ。	明赤褐	石英・長石を含む	上半3／4	
150	052 -01	A地区 Pit	黒色土器 椀	—	—	内面黒色（A類）。貼り付け高台。ヘラケズリ後ヘラミガキ。	橙褐	良	1／4	
151	074 -03	A地区 Pit	灰釉陶器 皿	(11.0)	1.8	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼り付け高台。	灰白	密 砂粒を含む	2／5	
152	094 -03	A地区 包含層	灰釉陶器 椀	15.6	7.7	ロクロナデ。底部糸切り後ナデ。貼り付け高台。釉漬け掛け。	灰白	密 長石を含む	ほぼ完形	
153	064 -04	A地区 包含層	灰釉陶器 小椀	10.3	2.8	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼り付け高台。	灰白	密	4／5	
154	074 -08	A地区 Pit	緑釉陶器 椀	(16.5)	—	ロクロナデ。		密	上半1／8	
155	074 -07	A地区 Pit	緑釉陶器 段皿	—	—	ロクロナデ。内面に段。		密	小片	
156	090 -03	A地区 包含層	緑釉陶器 椀	—	—	内面に沈線。	浅黄橙	密	底部5／6	
157	015 -01	A地区 包含層	緑釉陶器 椀	—	—	貼り付け高台。	黄褐	良	底部1／2	
158	063 -05	A地区 包含層	白磁 椀	(16.4)	—	ロクロナデ。内面に沈線2条。	灰白	砂粒を含む	上半1／8	
159	074 -10	A地区 Pit	白磁 椀	(16.3)	—	ロクロナデ。内面に沈線。	灰白	密	口縁部小片	
160	107 -02	A地区 包含層	白磁 椀	—	—	ロクロナデ。ケズリ出し高台。	灰白	密	底部のみ	

第26表　出土遺物観察表4

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
161	107 -03	A地区 包含層	白磁 椀	—	—	ロクロナデ。高台部ケズリ出し。	灰	密	底部1／2	
162	074 -11	A地区 Pit	白磁 椀	—	—	ロクロナデ。高台部ケズリ出し。	灰白	密	底部2／5	
163	097 -06	A地区 SD	白磁 椀	(17.4)	—	ロクロナデ。内面に沈線。	灰白	密	体部1／5	
164	070 -06	A地区 SD	白磁 椀	—	—	ロクロナデ。高台部ケズリ出し。	灰白	密	下半1／5	
165	100 -04	A地区 包含層	白磁 四耳壺	—	—	ロクロナデ。高台部ケズリ出し。	灰白	密	底部のみ	
166	110 -02	A地区 包含層	製塩土器	—	5.7	外面ユビオサエ。	橙	長石を含む	小片	
167	015 -02	A地区 SE20	土師器 小皿	9.2	2.0	ロクロナデ。底部糸切り痕。	橙褐	良	2／3	
168	015 -03	A地区 SE20	土師器 小皿	(9.8)	2.0	ロクロナデ。	淡黄褐	良	1／2	
169	015 -04	A地区 SE20	土師器 甕	(20.6)	—	口縁部ヨコナデ。体部内面ハケメ。	灰褐	良	口縁部小片	
170	109 -03	A地区 SE34	山茶椀	15.2	5.6	ロクロナデ。貼り付け高台。底部糸切り痕。籾殻痕。	灰白	密 石英・長石を含む	3／4	墨書「西」
171	014 -01	A地区 SE33	土師器 羽釜	(23.0)	—	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ。	褐	良	上半1／4	
172	016 -02	A地区 SE32	土師器 小皿	(7.4)	1.2	外面ユビオサエ。内面ナデ。	淡褐	良 砂粒を含む	1／4	
173	016 -03	A地区 SE32	土師器 皿	(11.8)	2.2	外面ユビオサエ。内面ナデ。	淡乳白	良	1／2	
174	016 -04	A地区 SE32	土師器 皿	12.0	2.6	外面ユビオサエ。内面ナデ。	淡乳白	良	1／3	
175	131 -04	A地区 SE32	土師器 皿	11.3	2.6	外面ユビオサエ。内面ナデ。	灰白	砂粒を含む	ほぼ完形	
176	131 -06	A地区 SE32	土師器 皿	11.8	3.0	外面ユビオサエ。内面ナデ。	灰白	並	2／3	
177	018 -02	A地区 SE32	土師器 鍋	(24.4)	—	口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	褐	砂粒を含む	上半1／3	スス付着
178	023 -02	A地区 SE32	土師器 羽釜	(38.0)	—	胴部外面ハケメ。	褐	粗 砂粒を含む	口縁部1／7	
179	016 -07	A地区 SE32	山茶椀	(13.8)	5.1	ロクロナデ。底部糸切り痕。	灰	粗 砂粒を含む	1／4	
180	016 -06	A地区 SE32	陶器 おろし皿	—	—	底部糸切り痕。	灰	良	底部1／2	
181	023 -03	A地区 SE32	陶器 灰釉壺	—	—	調整不明。	灰	良	1／4	
182	023 -01	A地区 SE32	石製品 石鍋	(31.4)	—	ケズリ。	黄灰	———	上半1／4	
183	025 -07	A地区 SK21	土師器 小皿	(8.8)	1.9	口縁部ヨコナデ。ユビオサエ。	淡褐	良	1／2	
184	025 -05	A地区 SK21	土師器 小皿	9.2	2.0	口縁部ヨコナデ。ユビオサエ。	橙褐	良	3／4	
185	025 -08	A地区 SK21	土師器 小皿	9.0	1.9	口縁部ヨコナデ。ユビオサエ。	褐	良	ほぼ完形	
186	025 -06	A地区 SK21	土師器 小皿	(8.8)	1.9	口縁部ヨコナデ。	淡褐	砂粒を含む	1／2	
187	025 -03	A地区 SK21	土師器 小皿	9.6	1.9	口縁部ヨコナデ。	褐	砂粒を含む	ほぼ完形	
188	025 -04	A地区 SK21	土師器 小皿	9.6	2.0	口縁部ヨコナデ。	淡褐	砂粒を含む	完形	
189	025 -09	A地区 SK21	土師器 鍋	(26.0)	—	口縁部ヨコナデ。	淡橙褐	良	口縁部1／10	
190	099 -03	A地区 SK24	土師器 小皿	8.0	1.8	口縁部ヨコナデ。ユビオサエ。	灰白	密	完形	
191	099 -04	A地区 SK24	白磁 椀	(15.8)	—	口縁部玉縁状。ロクロナデ。	灰白	密	口縁部1／7	
192	118 -01	A地区 SK22	山茶椀	15～16	5.7	ロクロナデ。貼り付け高台。底部糸切り痕。	灰白	長石を含む	完形	口縁部歪み大
193	099 -01	A地区 SK49	山茶椀	—	—	ロクロナデ。貼り付け高台。底部糸切り痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	底部のみ	墨書、ひらがなか？
194	019 -01	A地区 SK37	土師器 皿	13.8	2.6	口縁部ヨコナデ。	橙褐	良	完形	
195	020 -02	A地区 SK37	土師器 皿	13.8	2.8	口縁部ヨコナデ。	橙褐	良	完形	
196	019-03 022-02	A地区 SK37	土師器 皿	13.0	2.6	口縁部ヨコナデ。	橙褐	良	完形	
197	019 -04	A地区 SK37	土師器 皿	13.4	3.0	口縁部ヨコナデ。	橙褐	良	完形	
198	022 -01	A地区 SK37	土師器 皿	12.8	2.8	口縁部ヨコナデ。	橙褐	小石を含む	ほぼ完形	
199	019 -02	A地区 SK37	土師器 皿	12.7	2.5	口縁部ヨコナデ。	橙褐	密	ほぼ完形	
200	020 -05	A地区 SK37	土師器 小皿	7.9	1.1	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	橙褐	良	完形	

第27表　出土遺物観察表5

遺物番号	登録番号	遺構(出土位置)	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
201	134-02	A地区 SK37	土師器 小皿	7.9	1.3	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	浅黄橙	石英を含む	完形	
202	019-08	A地区 SK37	土師器 小皿	(7.8)	1.3	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	淡橙褐	良	1/2	
203	134-03	A地区 SK37	土師器 小皿	7.9	1.4	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	浅黄橙	石英・長石を含む	ほぼ完形	
204	134-05	A地区 SK37	土師器 小皿	(7.8)	1.6	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	にぶい黄橙	長石を含む	1/3	
205	084-01	A地区 SK37	土師器 小皿	7.7	1.4	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	にぶい橙	密 石英を含む	完形	
206	019-06	A地区 SK37	土師器 小皿	8.2	1.3	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	橙褐	良	完形	
207	020-01	A地区 SK37	土師器 小皿	8.0	1.3	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	橙褐	良	完形	
208	020-04	A地区 SK37	土師器 小皿	8.1	1.6	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	橙褐	良	完形	
209	084-07	A地区 SK37	土師器 小皿	8.3	1.1	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	浅黄橙	密	ほぼ完形	
210	019-05	A地区 SK37	土師器 小皿	8.2	1.3	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	褐	良	完形	
211	020-03	A地区 SK37	土師器 小皿	7.8	1.2	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	橙褐	良	完形	
212	019-09	A地区 SK37	土師器 小皿	7.9	1.0	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	淡橙褐	良	完形	
213	084-03	A地区 SK37	土師器 小皿	7.8	1.4	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	褐	密	完形	
214	019-07	A地区 SK37	土師器 小皿	7.8	1.2	口縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	赤褐	良	4/5	
215	133-01	A地区 SK35	土師器 小皿	7.3	1.0	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	浅黄橙	石英・長石を含む	ほぼ完形	
216	133-02	A地区 SK35	土師器 小皿	7.3	1.0	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	浅黄橙	石英・長石を含む	ほぼ完形	
217	133-03	A地区 SK35	土師器 小皿	7.8	1.2	外面テノヒラオサエ。	明黄褐	石英を含む	ほぼ完形	
218	133-04	A地区 SK35	土師器 小皿	7.2～7.8	1.2	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	明黄褐	石英・長石を含む	完形	口縁部歪み大
219	133-05	A地区 SK35	土師器 小皿	7.4	1.3	外面テノヒラオサエ。	明黄褐	密	完形	
220	133-06	A地区 SK35	土師器 小皿	7.5	1.1	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	にぶい黄橙	石英を含む	ほぼ完形	
221	133-07	A地区 SK35	土師器 小皿	8.0	1.3	外面テノヒラオサエ。	浅黄橙	石英を含む	完形	
222	133-08	A地区 SK35	土師器 小皿	7.4～8.0	1.3	外面テノヒラオサエ。	浅黄橙	石英を含む	完形	口縁部歪み大
223	133-09	A地区 SK35	土師器 小皿	7.8	1.1	外面テノヒラオサエ。	にぶい黄橙	石英を含む	完形	
224	133-10	A地区 SK35	土師器 小皿	7.6	0.9	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	にぶい黄橙	石英を含む	ほぼ完形	
225	133-11	A地区 SK35	土師器 小皿	7.8～8.2	1.1	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	浅黄橙	石英を含む	3/4	口縁部歪み大
226	133-12	A地区 SK35	土師器 小皿	7.8	1.4	外面テノヒラオサエ。	浅黄橙	石英を含む	4/5	
227	133-13	A地区 SK35	土師器 小皿	7.4～7.8	1.0	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	浅黄橙	石英を含む	2/3	口縁部歪み大
228	133-14	A地区 SK35	土師器 小皿	7.0～7.5	1.0	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	浅黄橙	密	2/3	口縁部歪み大
229	133-15	A地区 SK35	土師器 小皿	8.1	1.1	外面テノヒラオサエ。内面工具による調整痕。	浅黄橙	石英を含む	2/3	
230	133-16	A地区 SK35	土師器 小皿	7.7	1.1	外面テノヒラオサエ。	浅黄橙	石英を含む	2/3	
231	133-18	A地区 SK35	土師器 小皿	7.6	1.1	外面テノヒラオサエ。	淡黄	石英を含む	2/3	
232	133-17	A地区 SK35	土師器 小皿	7.6	0.7	外面テノヒラオサエ。	浅黄橙	石英を含む	4/5	
233	134-01	A地区 SK35	土師器 小皿	(8.0)	1.2	外面テノヒラオサエ。	浅黄橙	密	1/3	
234	083-06	A地区 SK35	山皿	8.2	1.8	ロクロナデ。底部糸切り痕。	にぶい黄橙	小石を含む	ほぼ完形	
235	084-06	A地区 SK36	土師器 小皿	(8.1)	1.4	ユビオサエ後ナデ。	淡黄	密	1/3	
236	084-13	A地区 SK36	土師器 小皿	8.1	1.2	ユビオサエ。	淡黄	良	完形	口縁部歪み大
237	084-12	A地区 SK36	土師器 小皿	7.8	0.8	ユビオサエ後ナデ。	浅黄橙	密	ほ完形	
238	084-11	A地区 SK36	土師器 小皿	(7.7)	1.0	調整不明。	浅黄橙	密	1/2	
239	084-05	A地区 SK36	土師器 小皿	(7.8)	1.0	ユビオサエ後ナデ。	灰白	密	1/3	
240	084-09	A地区 SK36	土師器 小皿	8.2	1.0	ユビオサエ。	淡橙	密	2/3	

第28表　出土観察遺物表 6

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
241	084 -14	A地区 SK36	土師器 小皿	7.7	0.8	ユビオサエ。内面に工具痕。	にぶい黄橙	砂粒を含む	ほぼ完形	
242	084 -02	A地区 SK36	土師器 小皿	(7.6)	1.2	調整不明。	浅黄橙	密	1／5	
243	084 -04	A地区 SK36	土師器 小皿	(8.0)	0.9	調整不明。	灰白	石英を含む	1／5	
244	084 -08	A地区 SK36	土師器 小皿	7.9	1.1	ユビオサエ後ナデ。	浅黄橙	密	ほぼ完形	
245	084 -10	A地区 SK36	土師器 小皿	7.3 ～8.5	1.0	ユビオサエ。	浅黄橙	密	ほぼ完形	口縁部歪み大
246	100 -05	A地区 SK36	山皿	(7.8)	1.0	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	密	ほぼ完形	
247	082 -05	A地区 SD26	山茶椀	(15.7)	5.7	ロクロナデ。貼付高台。底部ナデ。	灰白	長石を含む	2／5	
248	102 -05	A地区 SD26	山茶椀	15.6 ～16.4	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	砂粒を含む	1／5	
249	059 -03	A地区 SD26	山茶椀	15.6	5.7	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	良	ほぼ完形	
250	098 -02	A地区 SD26	山茶椀	(14.4)	5.1	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	密	2／5	
251	060 -01	A地区 SD26	山茶椀	14.9	5.2	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰	石英・長石を含む	ほぼ完形	
252	102 -04	A地区 SD26	山茶椀	(16.0)	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	石英・長石を含む	2／5	
253	098 -01	A地区 SD26	山茶椀	15.6 ～16.0	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	石英・長石を含む	完形	
254	033 -01	A地区 SD26	山茶椀	15.0	4.9	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	長石を含む	ほぼ完形	
255	097 -01	A地区 SD26	山茶椀	15.2	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	石英・長石を含む	完形	
256	112 -01	A地区 SD26	山茶椀	15.0	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	石英・長石を含む	ほぼ完形	
257	085 -02	A地区 SD26	山茶椀	14.4	4.9	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	長石を含む	完形	
258	111 -06	A地区 SD26	山茶椀	(15.3)	5.4	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰	砂粒を含む	1／2	
259	063 -01	A地区 SD26	山茶椀	(14.1)	5.2	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	砂粒を含む	1／2	
260	085 -01	A地区 SD26	山茶椀	14.4	4.9	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	完形	
261	085 -05	A地区 SD26	山茶椀	13.8	4.6	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	石英・長石を含む	2／3	
262	097 -04	A地区 SD26	山茶椀	15.4	5.4	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	黄灰	砂粒を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書「大」
263	058 -06	A地区 SD26	山茶椀	—	—	ロクロナデ。貼付高台。底部ナデ。	灰白	石英・長石を含む	下半2／3	底部外面に墨書「九のこ」?
264	033 -02	A地区 SD26	山茶椀	(15.0)	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰	良	1／2	底部外面に墨書「二」
265	102 -06	A地区 SD26	山皿	8.6	1.9	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	砂粒を含む	2／3	
266	098 -07	A地区 SD26	山皿	8.3 ～ 9.0	2.3	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	長石を含む	ほぼ完形	口縁部歪み大
267	063 -07	A地区 SD26	山皿	7.9	2.2	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	長石を含む	完形	
268	058 -07	A地区 SD26	山皿	8.3	2.4	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰	長石を含む	ほぼ完形	墨書「大」
269	058 -04	A地区 SD26	山皿	8.4	2.1	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰	石英・長石を含む	ほぼ完形	
270	098 -06	A地区 SD26	山皿	7.4	1.7	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	石英・長石を含む	完形	
271	065 -06	A地区 SD26	白磁 皿	(10.6)	2.6	ロクロナデ。内面に沈線状の段。草花文。	灰白	密	1／6	
272	034 -01	A地区 SD26	陶器 甕	(36.0)	—	N字状口縁。	褐	良	口縁部1／4	
273	070 -07	A地区 SD26	陶器 甕	(24.0)	—	N字状口縁が未発達。	灰	砂粒を含む	口縁部1／10	
274	098 -04	A地区 SD26	土師器 皿	11.9	2.1	内面ナデ。ユビオサエ後ナデ。	淡黄	石英を含む	ほぼ完形	
275	098 -05	A地区 SD26	土師器 皿	11.4	2.2	ユビオサエ後ナデ。	淡黄	砂粒を含む	ほぼ完形	
276	076 -05	A地区 SD26	土師器 皿	(12.0)	2.6	口縁部ヨコナデ。ナデ。	にぶい橙	良	1／3	
277	111 -09	A地区 SD26	土師器 小皿	8.0	1.1	ユビオサエ後ナデ。	淡黄	並	2／3	口縁部歪み大
278	125 -01	A地区 SD26	土師器 鍋	(24.2)	—	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	上半	
279	075 -03	A地区 SD26	土師器 鍋	(26.1)	—	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。	淡赤橙	石英・長石を含む	上半1／4	
280	126 -01	A地区 SD26	土師器 鍋	(26.0)	—	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	上半1／4	スス付着

第29表　出土遺物観察表 7

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
281	075 -04	A地区 SD51	山茶椀	(16.8)	5.9	ロクロナデ。貼付高台。底部ナデ。	灰白	砂粒を含む	1／2	
282	075 -02	A地区 SD51	山茶椀	15.6 ～16.2	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	密	ほぼ完形	
283	103 -01	A地区 SD51	山茶椀	(16.0)	4.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	並	2／3	墨書が底部にわずかに残る
284	026 -02	A地区 SD51	山茶椀	(15.7)	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	暗灰	砂粒を含む	1／2	
285	026 -04	A地区 SD51	山茶椀	15.6	5.1	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	粗	完形	
286	026 -05	A地区 SD51	山茶椀	14.3	5.7	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	密	完形	
287	109 -02	A地区 SD51	山茶椀	(15.0)	5.1	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	1／2	
288	097 -02	A地区 SD51	山茶椀	14.8 ～15.4	5.1	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	完形	口縁部歪み大
289	097 -03	A地区 SD51	山茶椀	15.0	5.2	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	3／4	
290	112 -02	A地区 SD51	山茶椀	14.4	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	完形	
291	080 -01	A地区 SD51	山茶椀	14.6	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕	灰白	砂粒を含む	完形	
292	076 -04	A地区 SD51	山茶椀	14.8	5.8	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	石英・長石を含む	ほぼ完形	
293	086 -04	A地区 SD51	山茶椀	14.4	5.2	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	密 砂粒を含む	完形	
294	109 -01	A地区 SD51	山茶椀	14.2	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	密 石英・長石を含む	2／3	
295	058 -01	A地区 SD51	山茶椀	14.0	5.4	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	暗青灰	石英・長石を含む	ほぼ完形	
296	077 -01	A地区 SD51	山茶椀	12.4 ～14.4	5.4	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	砂粒を含む	3／5	口縁部歪み大
297	111 -03	A地区 SD51	山茶椀	14.5	5.8	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	2／3	底部に墨書「西」
298	076 -03	A地 SD51	山茶椀	区14.4 ～15.2	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	石英・長石を含む	ほぼ完形	底部に墨書「上」
299	076 -06	A地区 SD51	山茶椀	－	－	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	石英を含む	底部のみ	底部に墨書「上」
300	102 -07	A地区 SD51	山皿	8.2	1.7	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	石英を含む	2／3	
301	080 -05	A地区 SD51	土師器 皿	(10.8)	2.3	ユビオサエ後ナデ。	淡黄橙	石英を含む	1／3	
302	080 -04	A地区 SD51	土師器 皿	(11.0)	2.2	ユビオサエ後ナデ。	淡黄橙	石英を含む	1／3	
303	072 -02	A地区 SD51	土師器 鍋	(23.7)	－	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ。	浅黄橙	石英・長石を含む	上半1／4	外面にスス付着
304	125 -02	A地区 SD51	土師器 鍋	(24.0)	－	口縁部ヨコナデ。体部内外面とも上半ナデ、下半ヘラケズリ。	にぶい黄橙	石英・長石を含む	1／4	外面にスス付着
305	127 -02	A地区 SD51	土師器 鍋	(29.6)	－	口縁部ヨコナデ。体部内外面とも上半ナデ。	にぶい黄橙	粗 石英を含む	1／4	外面にスス付着
306	113 -01	A地区 SD51	土師器 羽釜	(30)	－	口縁部に円孔。外面ハケメ。	灰白	砂粒を含む	口縁部1／7	外面にスス付着
307	112 -05	A地区 SD51	土師器 羽釜	(33.8)	－	外面ハケメ。	浅黄橙	石英・長石を含む	上半1／9	
308	103 -04	A地 SD51	陶器 甕	(31.2)	－	N字状口縁が未発達。	赤褐	粗	1／5	
309	078 -01	A地区 SD51	陶器 鉢	8.5	－	ロクロナデ。	浅黄橙	良	小片	
310	024 -02	A地区 SE52	土師器 皿	10.0	2.4	ユビオサエ。	乳白	良	1／3	
311	088 -03	A地区 SE52	土師器 皿	(10)	2.3	ユビオサエ。	灰白	密	1／4	歪みあり
312	070 -01	A地区 SE52	土師器 皿	11.1	2.5	ユビオサエ。	灰白	密	ほぼ完形	
313	070 -04	A地区 SE52	土師器 皿	(11.6)	2.6	ユビオサエ。	灰白	密	2／5	
314	131 -05	A地区 SE52	土師器 皿	(11.2)	2.9	調整不明。	灰白	並	1／3	
315	070 -03	A地区 SE52	土師器 皿	11.6	2.6	ユビオサエ。	灰白	並	3／5	
316	070 -05	A地区 SE52	土師器 小皿	7.6	1.2	ユビオサエ。	灰白	密	完形	
317	024 -03	A地区 SE52	土師器 へそ皿	(6.7)	2.0	口縁部ヨコナデ。	乳白	良	1／4	
318	024 -01	A地区 SE52	山茶椀	12.2	4.9	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	粗	1／3	
319	070 -02	A地区 SE52	山皿	7.8	0.2	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	石英を含む	完形	
320	088 -05	A地区 SE52	土師器 鍋	(22.8)	－	口縁部ヨコナデ。頸部内外面ともユビオサエ。外面ハケメ。	浅黄橙	密 砂粒を含む	口頸部 1／4	

第30表　出土遺物観察表 8

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
321	120 -02	A地区 SE52	土師器 鍋	30.8	−	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、内面ユビオサエ。ナデ。	淡黄	密 石英・長石を含む	上半2／3	胴部外面にスス付着
322	057 -01	A地区 SE52	土師器 鍋	30.2	−	口縁部ヨコナデ。体部外面ハケメ、底部ヘラケズリ。	浅黄橙	石英・長石を含む	ほぼ完形	外面にスス付着
323	057 -02	A地区 SE52	土師器 羽釜	(17.8)	−	体部外面ハケメ。	浅黄橙	石英・長石を含む	上半1／8	外面にスス付着
324	070 -08	A地区 SE52	陶器 甕	(33.8)	−	N字状口縁。	褐灰	長石を含む	口縁部1／8	
325	105 -01	A地区 SE52	陶器 甕	(40)	−	粘土板接合痕。	灰褐	砂粒を含む	上半1／8	
326	074 -12	A地区 Pit	土師器 皿	9.0	1.9	調整不明。	淡橙	石英・長石を含む	2／3	
327	122 -02	A地区 Pit	土師器 皿	(15.)	−	口縁部ヨコナデ。	淡黄	粗 石英・長石を含む	1／3	
328	087 -03	A地区 包含層	土師器 皿	13.4	2.0	口縁部ヨコナデ。	淡黄	密	1／2	
329	128 -05	A地区 包含層	土師器 皿	(13.6)	2.7	口縁部ヨコナデ。ユビオサエ後ナデ。	浅黄橙	石英・長石を含む	1／4	
330	088 -02	A地区 包含層	土師器 皿	(15.2)	2.0	ナデ。ユビオサエ。	灰白	密	1／5	
331	050 -03	A地区 包含層	瓦器 椀	(14.4)	−	内面ミガキ。口縁部内面に沈線。	灰	良	1／8	
332	116 -05	A地区 包含層	瓦器 椀	(14.0)	−	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ミガキ。	灰白	石英を含む	1／2	
333	100 -09	A地区 包含層	陶器 平椀	−	−	削り出し高台。	灰白	砂粒を含む	底部1／2	
334	050 -04	A地区 包含層	青磁 椀	(16.8)	−	蓮弁。	灰白	密	口縁部小片	
335	050 -01	A地区 包含層	青磁 椀	−	−	内面に分割文。削り出し高台。	灰	良	下半1／3	釉
336	099 -05	A地区 SK1	土師器 甕	(18.8)	−	口縁部ヨコナデ。	淡黄	石英・長石を含む	口縁部1／4	
337	013 -04	A地区 SB	土師器 甕	(16.1)	−	口縁部ヨコナデ。	黄褐	砂粒を含む	口縁部1／5	
338	059 -04	A地区 SD	土師器 甕	22.4	−	口縁部ヨコナデ。	灰白	石英を含む	口縁部4／5 胴部部1／3	焦げた痕
339	053 -02	A地区 Pit	土師器 鍋	(30.5)	−	口縁部ヨコナデ。	褐	良	口縁部1／4	
340	039 -03	A地区 包含層	土師器 鍋	(26.4)	−	口縁部ヨコナデ。	淡褐	良	上半1／2	外面にスス付着
341	124 -01	A地区 Pit	土師器 鍋	(27.4)	−	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ハケメ、下半ケズリ。体部内面ナデ。	浅黄	砂粒を含む	上半	
342	110 -03	A地区 包含層	土師器 鍋	(20.2)	−	口縁部ヨコナデ。オサエ。	黄褐	石英・長石を含む	口縁部1／5	
343	113 -02	A地区 Pit	陶器 片口鉢？	(32)	12.9	ロクロナデ。下半ロクロケズリ。貼付高台	灰白	石英・長石を含む	1／4	
344	123 -02	A地区 包含層	陶器 片口鉢？	(22.3)	9.1	ロクロナデ。下半ヘラケズリ。貼付高台。ロクロ回転左回り。	灰白	石英・長石を含む	1／4	
345	067 -03	A地区 包含層	陶器 片口鉢？	(23.5)	10.0	ロクロナデ。下半ロクロケズリ。貼付高台。	褐灰	砂粒を含む	1／4	
346	072 -01	A地区 包含層	陶器 片口鉢？	(33.0)	11.6	内面ヘラナデ。	赤褐	長石を含む	1／5	
347	047 -01	A地区 包含層	陶器 片口鉢？	(30.4)	10.0	板ナデ。	暗褐	良	1／6	
348	029 -03	A地区 包含層	陶器 壺	7.6	11.3	ロクロナデ。肩部以下ロクロケズリ。	褐	良	1／2	
349	071 -02	A地区 包含層	陶器 壺	(19.4)	−	ナデ。	オリーブ黄	砂粒を含む	上半1／3	
350	104 -01	A地区 不明	陶器 甕	(32.8)	−	ヨコナデ。口縁部L字状。	にぶい赤褐	砂粒を含む	口縁部1／16	
351	104 -02	A地区 包含層	陶器 甕	(41.4)	−	ヨコナデ。口縁部L字状。	灰褐	砂粒を含む	口縁部1／16	
352	089 -01	A地区 包含層	陶器 甕	(41.4)	−	ヨコナデ。	にぶい黄褐	石英・長石を含む	口縁部1／10	
353	081 -02	A地区 包含層	山茶椀	14.8	5.6	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書「上」
354	086 -02	A地区 包含層	山茶椀	15.5	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書「上」
355	107 -05	A地区 包含層	山茶椀	15.4 ～18	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	1／3	底部外面に墨書「上」 口縁部歪み大
356	130 -03	A地区 包含層	山茶椀	−	−	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	底部のみ	底部外面に墨書「上」
357	082 -02	A地区 包含層	山茶椀	−	−	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	1／4	底部外面に墨書「上」
358	067 -02	A地区 包含層	山茶椀	−	−	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	密	底部完形	底部外面に墨書「上□」
359	031 -02	A地区 SD	山茶椀	15.4	5.8	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	黄灰	粗	1／4	底部外面に墨書「上」
360	031 -03	A地区 SD	山茶椀	15.4	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	黄灰	粗	ほぼ完形	底部外面に墨書「」

第31表　出土遺物観察表 9

遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
361	118-04	A地区包含層	山茶椀	14.5	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書「犬」または「丈」
362	119-04	A地区包含層	山茶椀	14.4	5.6	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書「楽」
363	081-01	A地区包含層	山茶椀	13.8	—	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	石英・長石を含む	高台を欠損	底部外面に墨書「楽」
364	119-03	A地区包含層	山茶椀	13.8	5.6	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	石英を含む	高台を欠損	底部外面に墨書「居」か?
365	130-04	A地区包含層	山茶椀	—	—	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	石英・長石を含む	下半2／3	底部外面に墨書「房」
366	080-06	A地区包含層	山茶椀	15.3	5.2	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	石英・長石を含む	完形	底部外面に墨書「少□反」
367	109-06	A地区包含層	山茶椀	14.4～15.4	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	完形	底部外面に墨書
368	073-05	A地区包含層	山茶椀	13.2	6.0	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	砂粒を含む	1／2	底部外面に墨書
369	049-02	A地区	山茶椀	15.4	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	明灰	良	ほぼ完形	底部外面に墨書、花押か?
370	080-07	A地区包含層	山茶椀	12.3	4.8	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	石英を含む	1／4	底部外面に墨書
371	048-02	A地区包含層	山茶椀	16.1	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	乳灰	砂粒を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書「　」
372	068-06	A地区包含層	山茶椀	15.8	5.3	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	密	4／5	底部外面に墨書梅花文
373	081-03	A地区包含層	山茶椀	15.1	5.5	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	2／3	底部外面に墨書「よね」
374	097-05	A地区包含層	山茶椀	14.4	5.0	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	砂粒を含む	1／5	底部外面に墨書「よね」
375	111-02	A地区包含層	山茶椀	—	—	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	底部のみ	底部外面に墨書「よ祢」
376	069-02	A地区包含層	山茶椀	—	—	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。	灰白	密	底部のみ	底部外面に墨書
377	063-02	A地区包含層	山茶椀	16.0	5.8	ロクロナデ。貼付高台。底部糸切痕。籾殻痕。	灰白	長石を含む	口縁部1／5 底部完形	底部外面に墨書「お」
378	064-08	A地区包含層	山皿	8.1	1.6	ロクロナデ。底部糸切痕。	灰白	良	2／3	底部外面に墨書
379	048-03	A地区包含層	山皿	7.9	1.5	ロクロナデ。底部糸切痕。	青灰	砂粒を含む	ほぼ完形	底部外面に墨書
380	073-06	A地区包含層	土製支脚	—	幅 5.0		淡橙	砂粒を含む	残存長10.9cm	
381	130-09	A地区包含層	土玉	径2.6	円孔径0.6	球形。	にぶい黄橙	長石を含む	完形	
382	044-02	A地区包含層	土玉	径2.0	円孔径0.2	球形。	濃褐	良	完形	
383	064-07	A地区包含層	土錘	長7.2 径3.1	円孔径1.2		灰白	粗	ほぼ完形	
384	069-08	A地区包含層	土錘	径3.8	円孔径1.5		褐灰	砂粒を含む	端部欠損	
385	087-10	A地区包含層	土錘	長9.2 径3.0	円孔径1.1		浅黄橙	粗。砂粒を含む	完形	
386	003-01木	A地区	木製品下駄	現存長21	脚高2				1／2	
387	002-01	A地区SK45上面	石製品五輪塔	空部幅 風部幅	16.7 16.0	空風輪。	灰	砂岩	ほぼ完形	
388	001-01	A地区SE53	石製品五輪塔	空部幅10.3 風部幅11.0	高さ12	空風輪。	灰		完形	
389	130-10	A地区包含層	石製品砥石	幅3.2	厚1.4	使用痕跡が明瞭に残る。	オリーブ黄		端部欠損 残存長6.4cm	
390	137-05	A地区包含層	鉄製品	長 13.0 輪径2.6	幅 0.3～1.6					
391	136-07	A地区包含層	鉄製品紡錘車	紡輪径 4.4 紡軸径 0.9	紡輪厚1.2				紡輪部とその付近	
392	137-03	A地区SB	鉄製品	長さ6.3 幅 4.5	厚0.7～1.2					
393	137-04	A地区包含層	鉄製品リング	径 3.3 高さ1.0						
394	137-01	A地区包含層	鉄製品釘	—	—	断面長方形。			残存長5.0cm	
395	137-02	A地区包含層	鉄製品釘	—	—	断面長方形。			残存長5.0cm	
396	136-01	A地区包含層	鉄製品釘	長さ 7.6	—	断面四角形。				
397	136-05	A地区包含層	銅製品不明	—	—	キザミ有り。	淡緑		小片	
398	136-04	A地区包含層	銅製品不明	—	—		淡緑		小片	
399	043-06	B地区包含層	土師器鍋	(19.4)	—	口縁部ヨコナデ。	淡褐	良	口縁1／6	
400	043-07	B地区包含層	土師器鍋	(20.8)	—	口縁部ヨコナデ。	暗褐	良	口縁1／6	

第32表　出土遺物観察表10

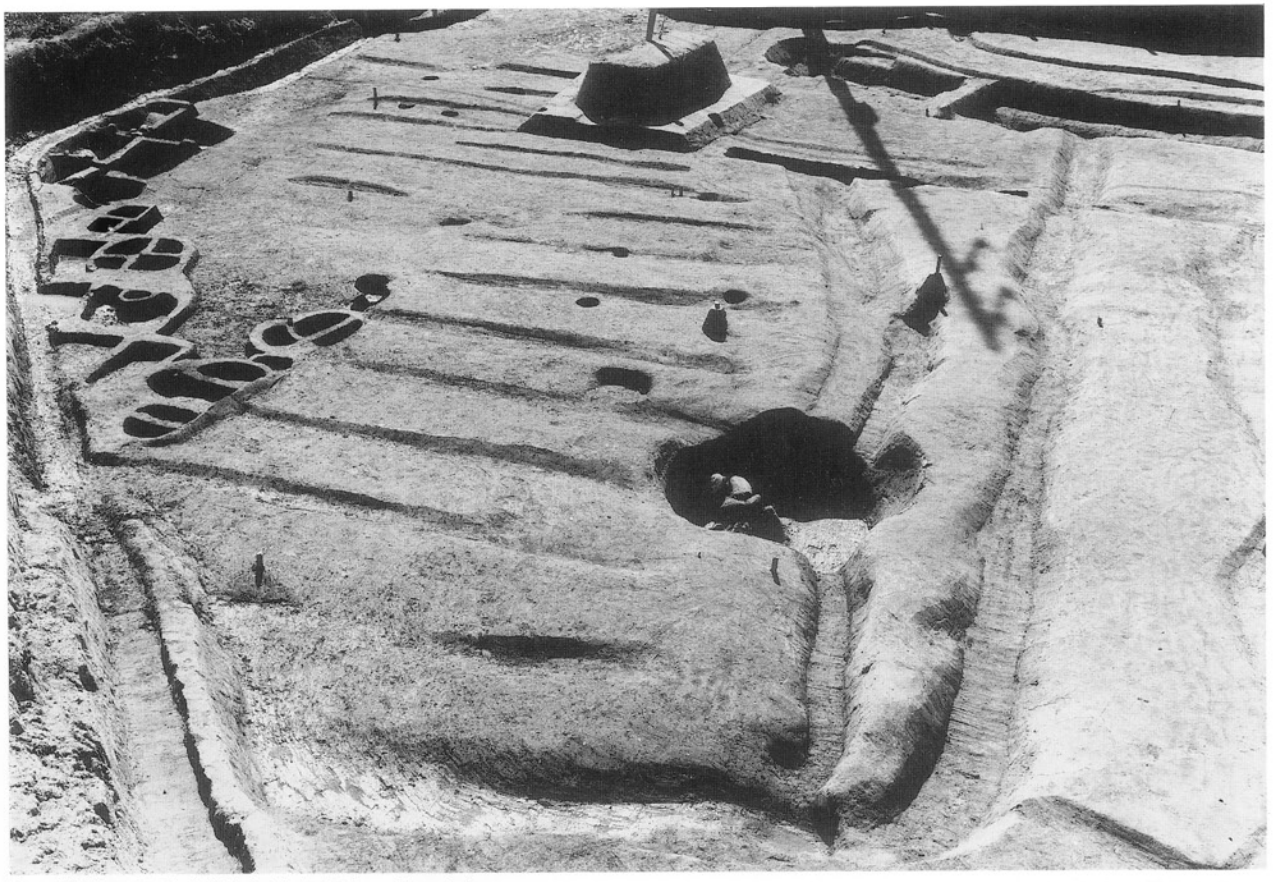
遺物番号	登録番号	遺構（出土位置）	器種	法量（cm） 口径	器高	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
401	043 -01	B地区 包含層	土師器 皿	14.2	7.2	ロクロナデ。	淡橙褐	良	2／3	
402	037 -01	B地区 包含層	灰釉陶器 椀	15.4	5.0	ロクロナデ。底部糸切り後ナデ消し。貼付高台。	暗灰	良	1／2	
403	046 -06	B地区 包含層	陶器 甕	11.4		ロクロナデ。	灰	並	口頸部 1／4	
404	036 -09	B地区 包含層	山皿	8.0	2.4	ロクロナデ。底部糸切り後ナデ消し。	灰	良	3／4	
405	037 -03	B地区 包含層	山皿	9.5	2.8	ロクロナデ。底部糸切り後ナデ消し。貼付高台。	灰	良	2／3	
406	037 -06	B地区 包含層	山茶椀	16.6	6.1	ロクロナデ。貼付高台。籾殻痕。	灰	砂粒を含む	1／2	
407	085 -06	B地区 包含層	山茶椀	14.8	5.7	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼付高台。籾殻痕。	灰白	密 砂粒を含む	完形	
408	081 -04	B地区 包含層	山茶椀	16.0	5.1	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼付高台。	灰白	密 砂粒を含む	3／5	重ね焼き痕。
409	043 -02	B地区 包含層	山茶椀	15.8	5.4	ロクロナデ。底部糸切り後ナデ消し。貼付高台。	灰	良	2／3	
410	132 -06	B地区 包含層	山茶椀	(15.2)	4.7	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼付高台。籾殻痕。	灰白	密	1／2	
411	134 -07	D地区 包含層	須恵器 蓋	(13.9)	—	ロクロナデ。	灰	密	1／8	
412	135 -08	D地区 南落込	緑釉陶器	—	—	ロクロナデ。	灰白	密	底部1／4	
413	135 -02	D地区 包含層	土師器 皿	(9.9)	1.9	ロクロナデ。	灰白	密	3／8	
414	135 -09	D地区 南落込	白磁 椀	(16.0)	—	玉縁状口縁。ロクロナデ。	灰白	密	口縁部小片	施釉
415	135 -04	D地区 南落込	山皿	(7.8)	1.8	ロクロナデ。底部糸切り痕。	灰白	砂粒を含む	3／8	
416	135 -05	D地区 南落込	山皿	(7.6)	1.4	ロクロナデ。底部糸切り痕。	灰白	砂粒を含む	1／5	
417	135 -03	D地区 南落込	山皿	(8.1)	1.9	ロクロナデ。底部糸切り痕。	灰白	石英・長石を含む	1／4	
418	135 -07	D地区 南落込	山茶椀	—	—	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼付高台。籾殻痕。	灰白	砂粒を含む	下半のみ	
419	135 -06	D地区 南落込	山茶椀	—	—	ロクロナデ。底部糸切り痕。貼付高台。籾殻痕。	灰白	砂粒を含む	底部のみ	
420	135 -01	D地区 包含層	陶器 灰釉平椀	(16.7)	6.4	内面と外面口縁部ロクロナデ。外面体部ロクロケズリ。底部糸切り痕。削り出し高台。	灰白	砂粒を含む	1／3	灰緑色の施釉
421	135 -10	D地区 包含層	土師器 羽釜	(24.2)		口縁部ヨコナデ。体部内面ユビオサエ、外面ハケメ。	灰白	石英・長石を含む	上半1／5	

第33表　出土遺物観察表11

調査前全景（南東から）

遺跡遠景（南東から）

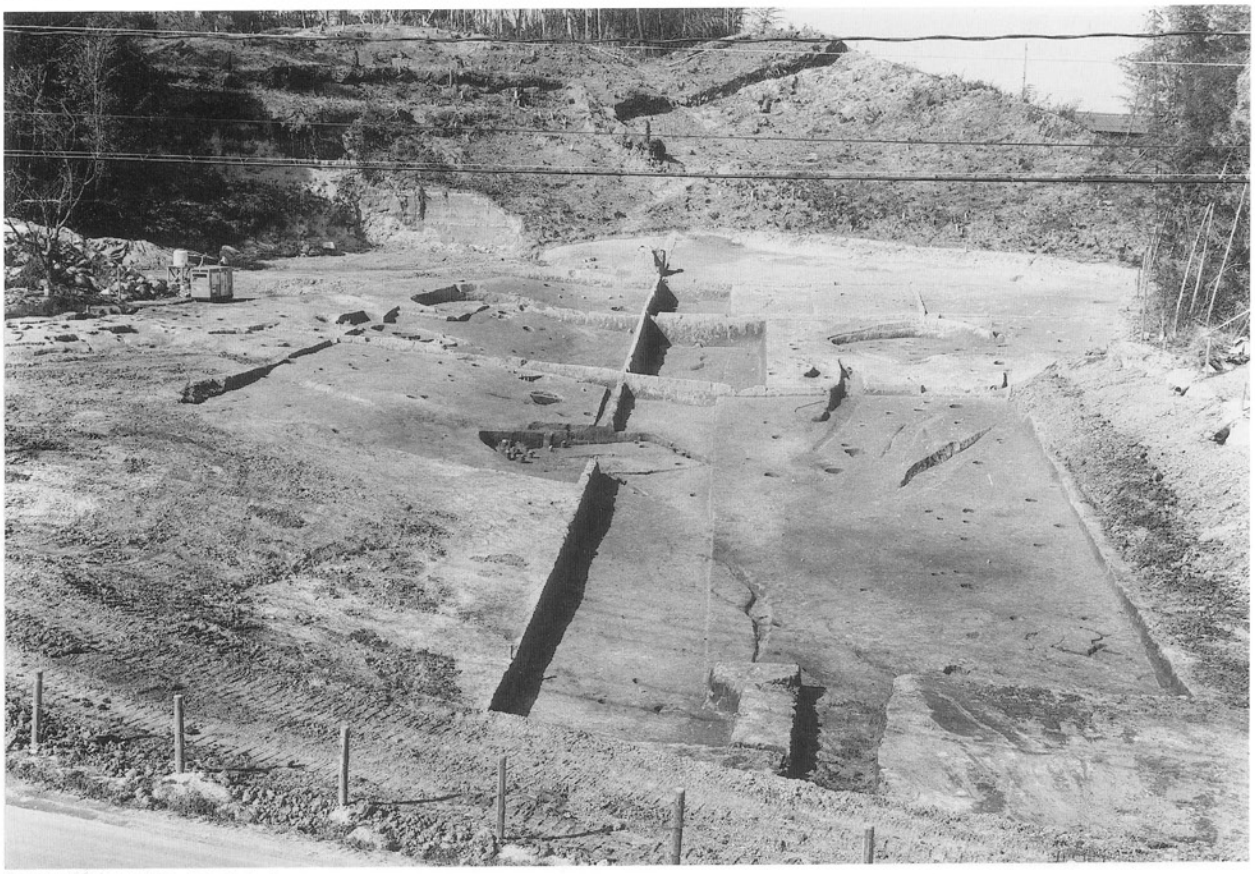
第１遺構面全景（南西から）



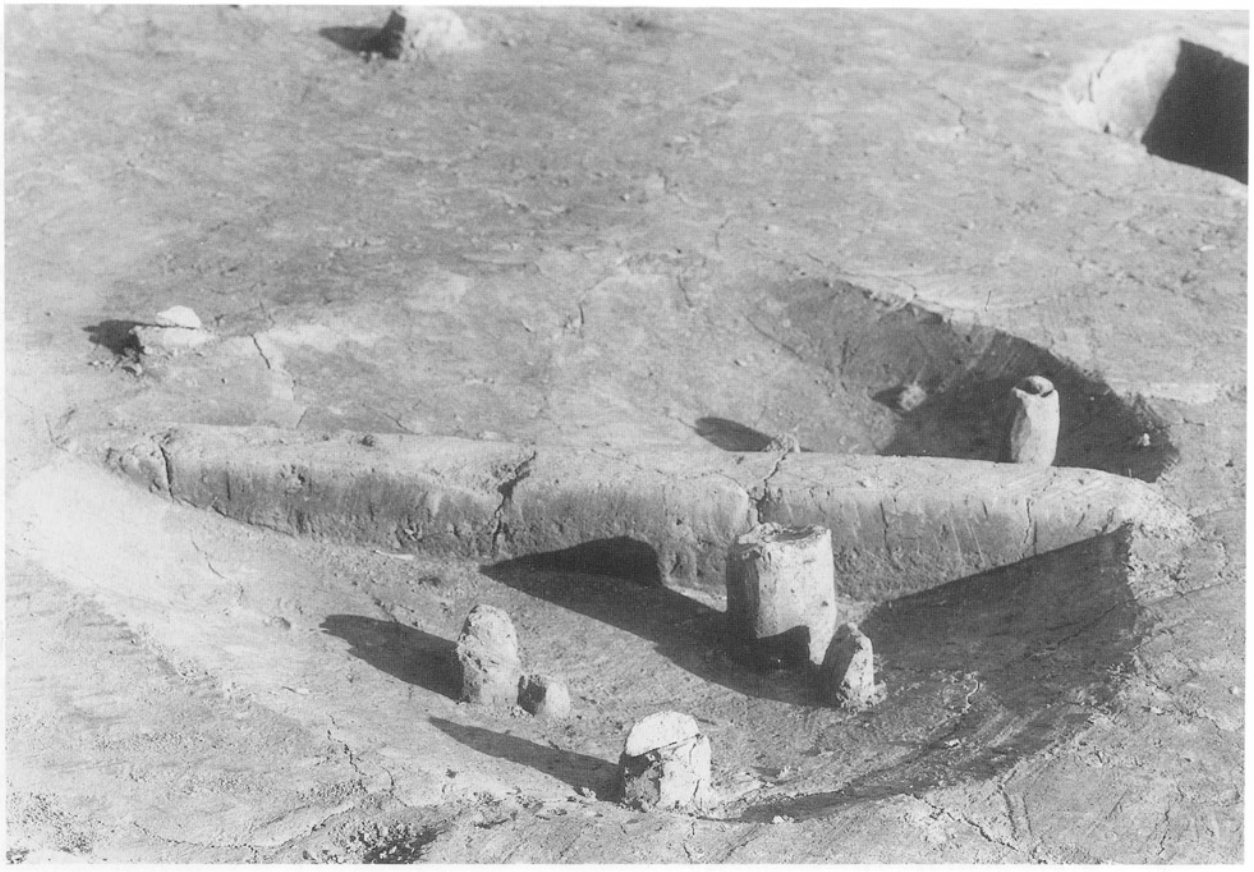
第２遺構面全景（調査区南東部分　北から）

第３遺構面・Ｃ地区(左下）全景（垂直写真・上が東）

第４遺構面全景（南西から）



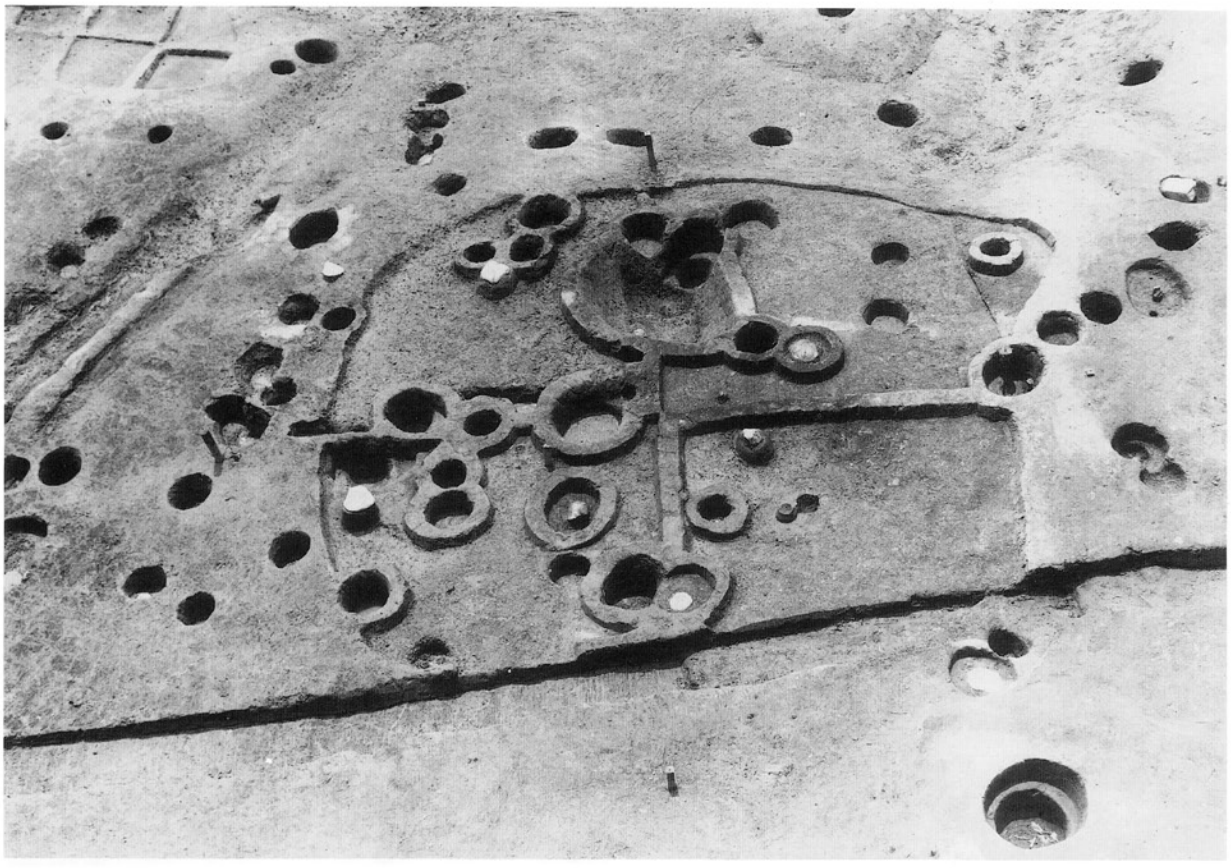
第５遺構面全景（南から）



ＳＫＩ（北西から）

ＳＨ２（東から）

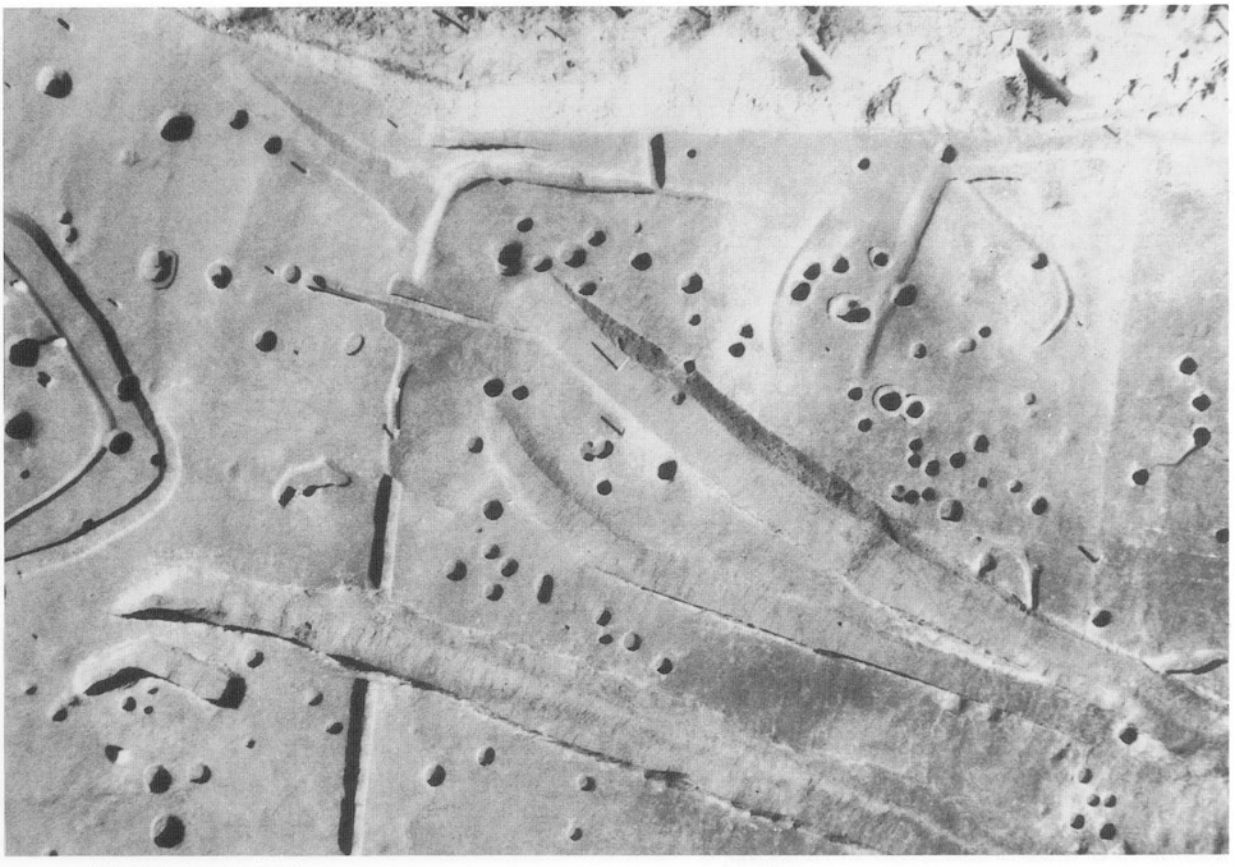
ＳＨ３（拡張後）（西から）



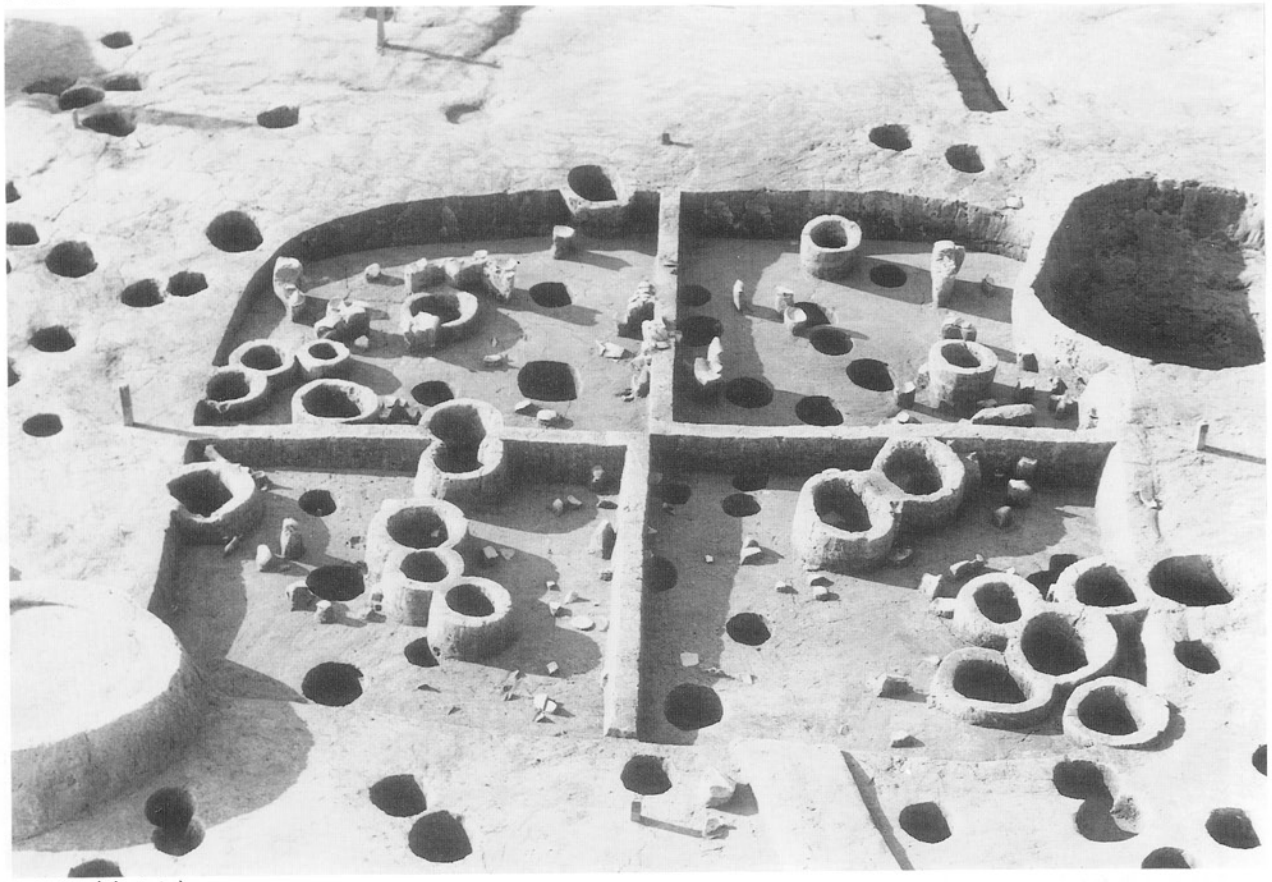
ＳＨ４（北から）

ＳＨ５（南から）

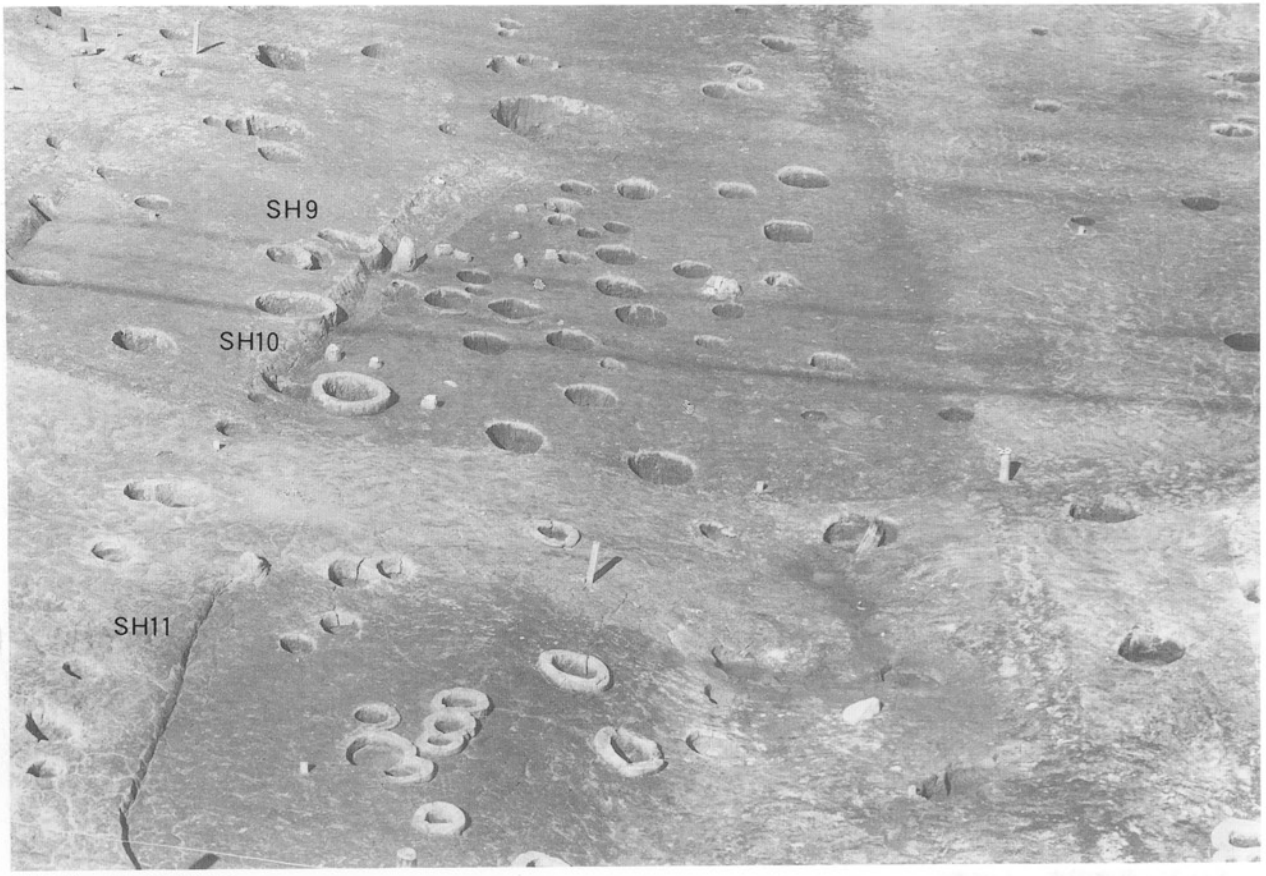
ＳＨ６（東から）



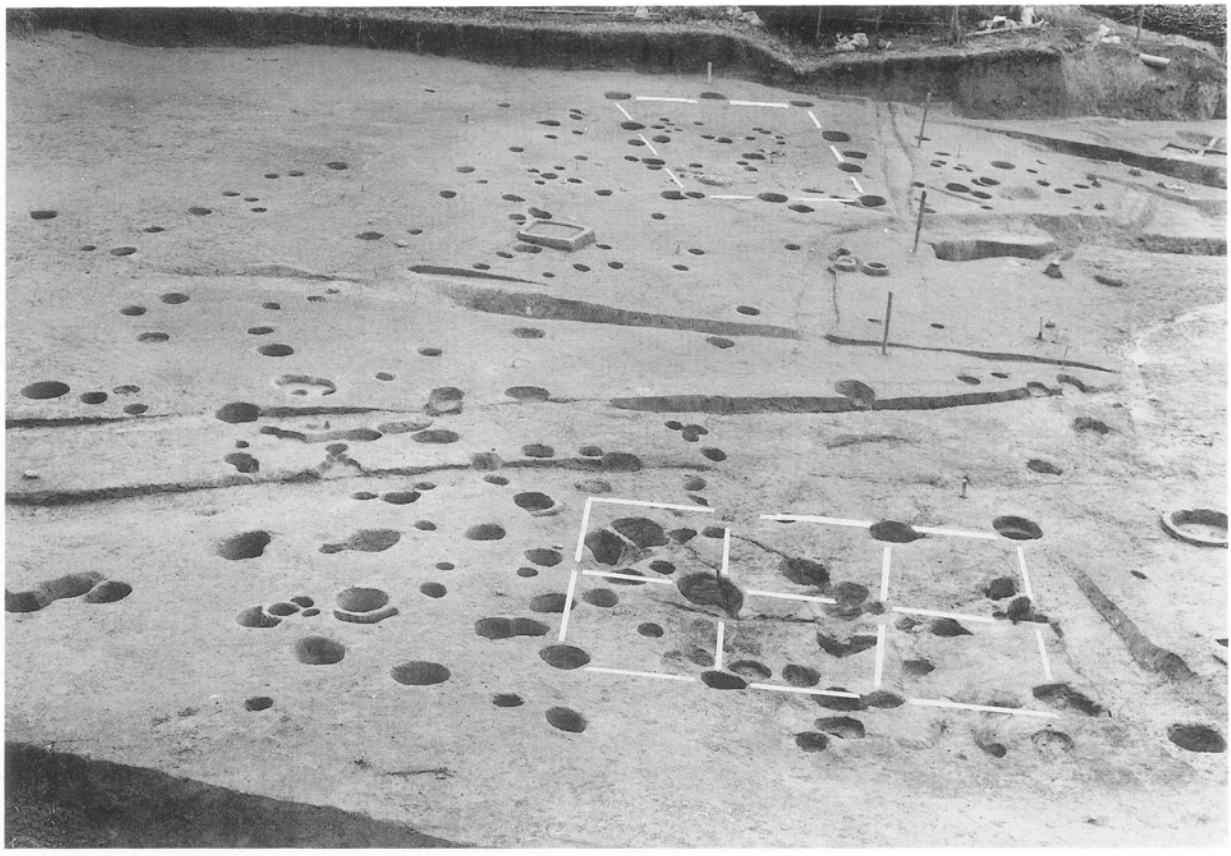
ＳＨ７（垂直写真・上が東）



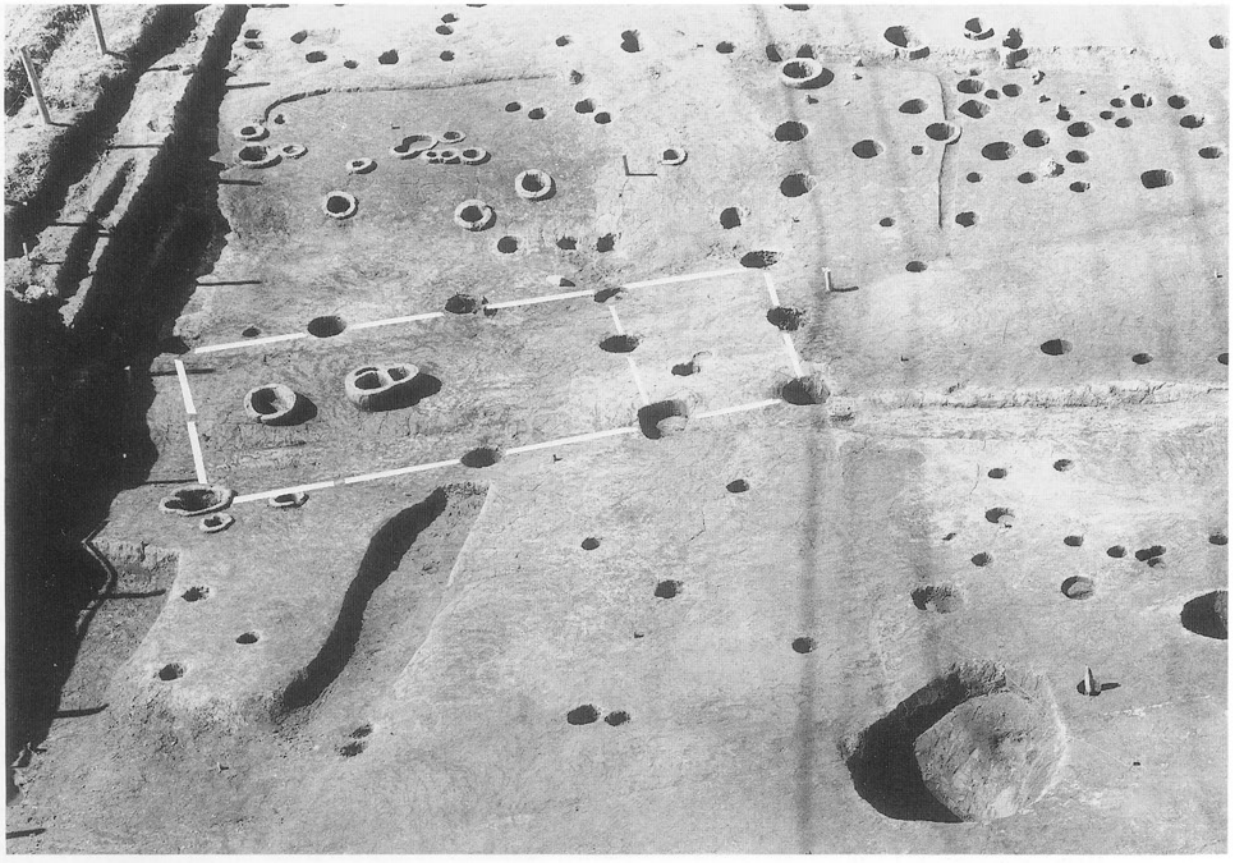
ＳＨ８（東から）



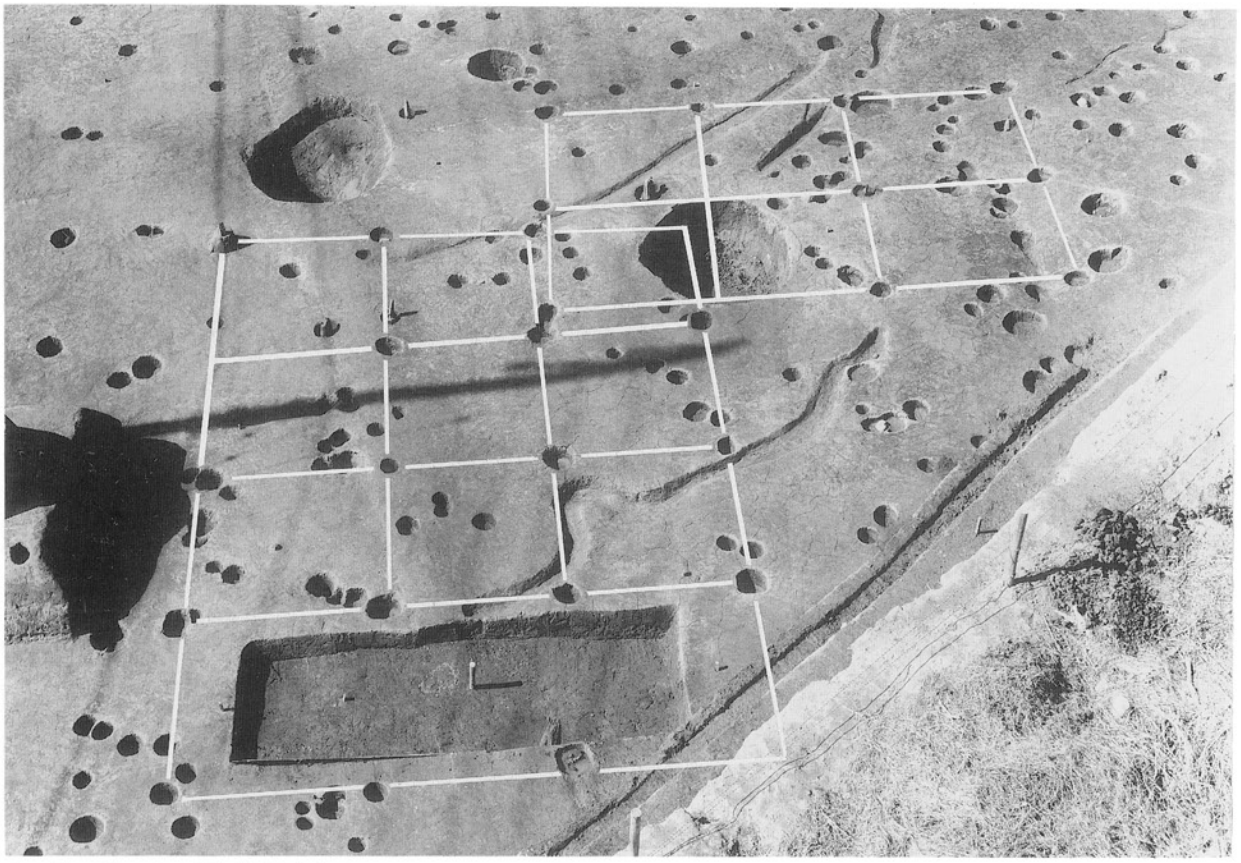
ＳＨ９～11（南から）



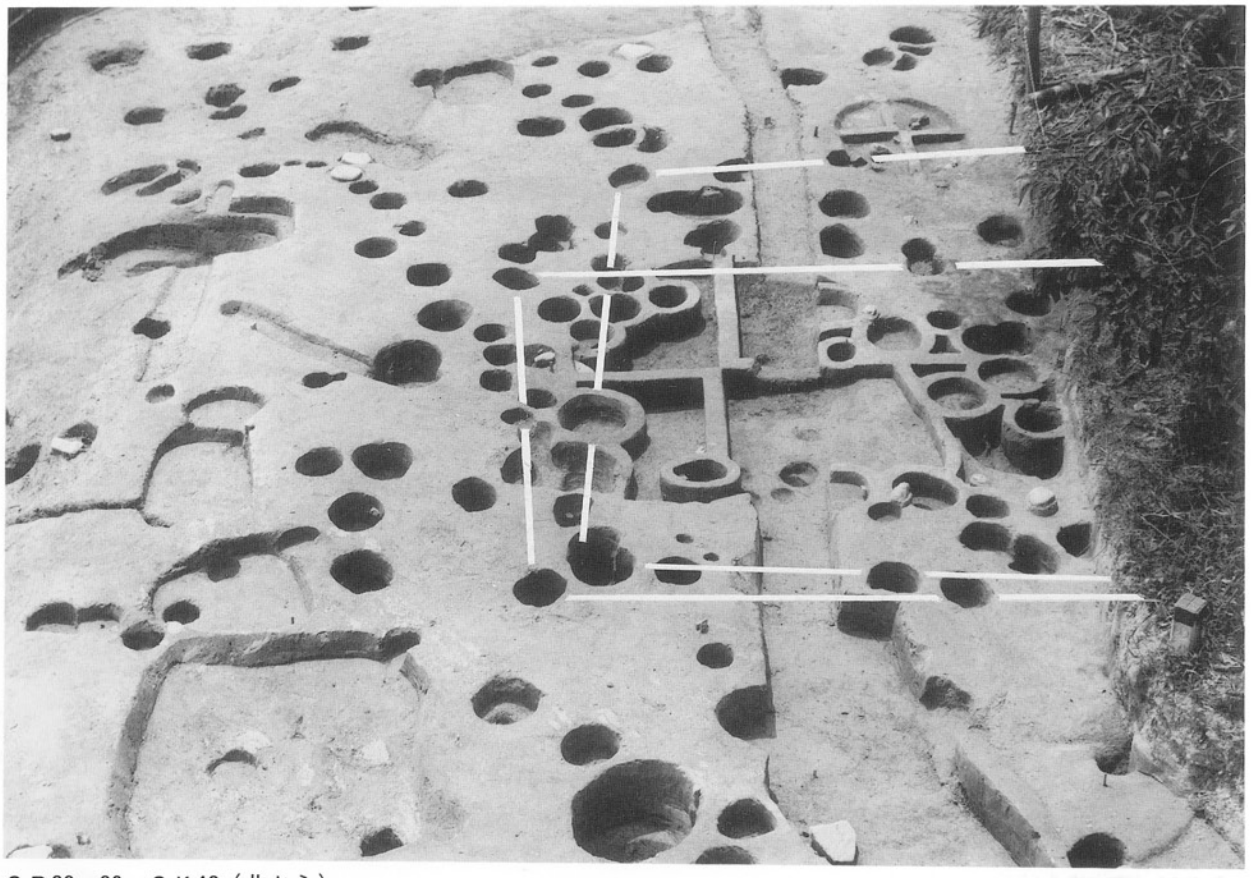
ＳＢ12（下）・13（上）（西から）



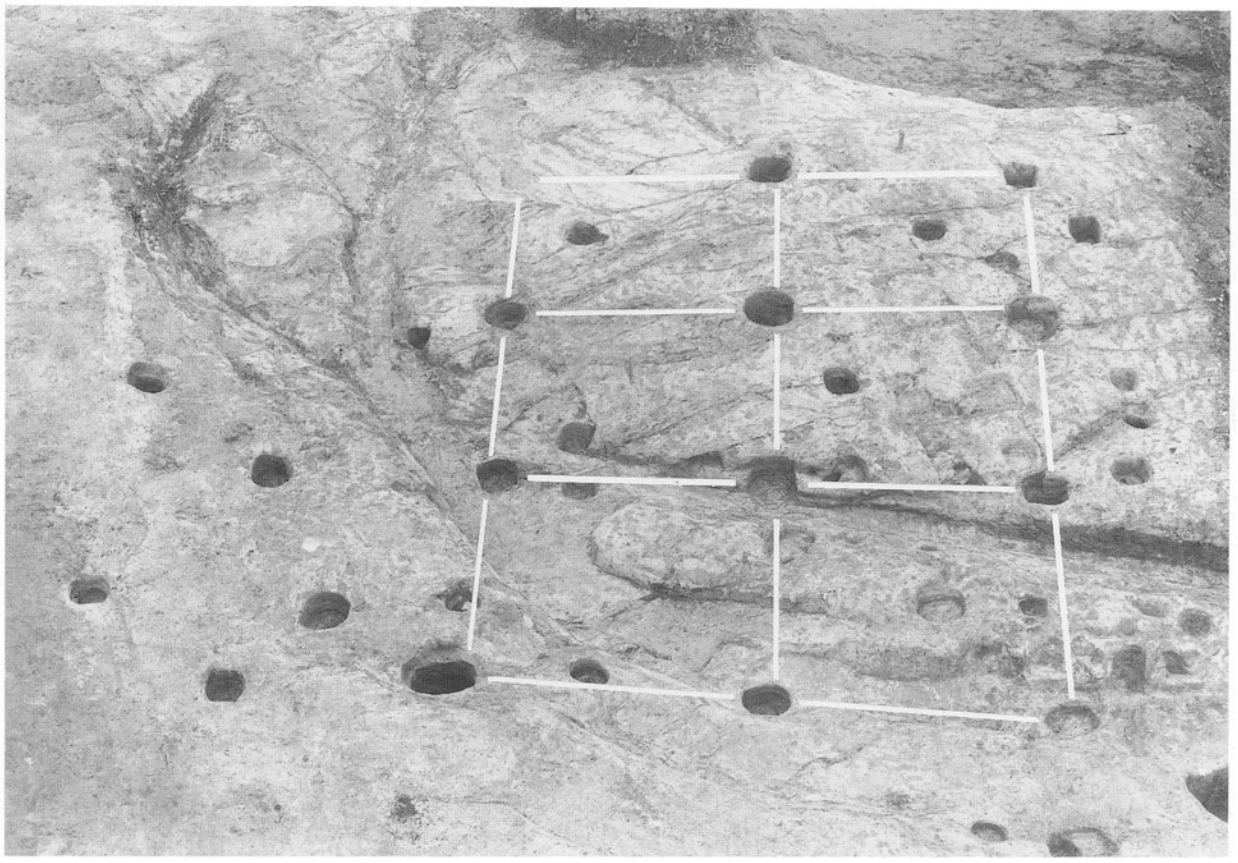
ＳＢ14（東から）



ＳＢ18・19、ＳＫ24（東から）



ＳＢ29・30、ＳＫ42（北から）



ＳＢ31（西から）

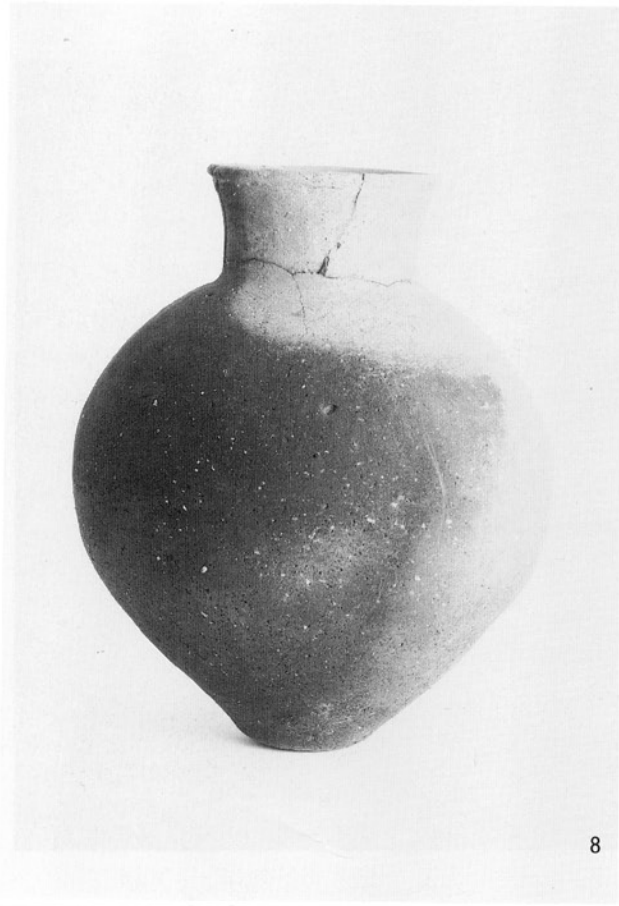
ＳＫ36　遺物出土状況（東から）

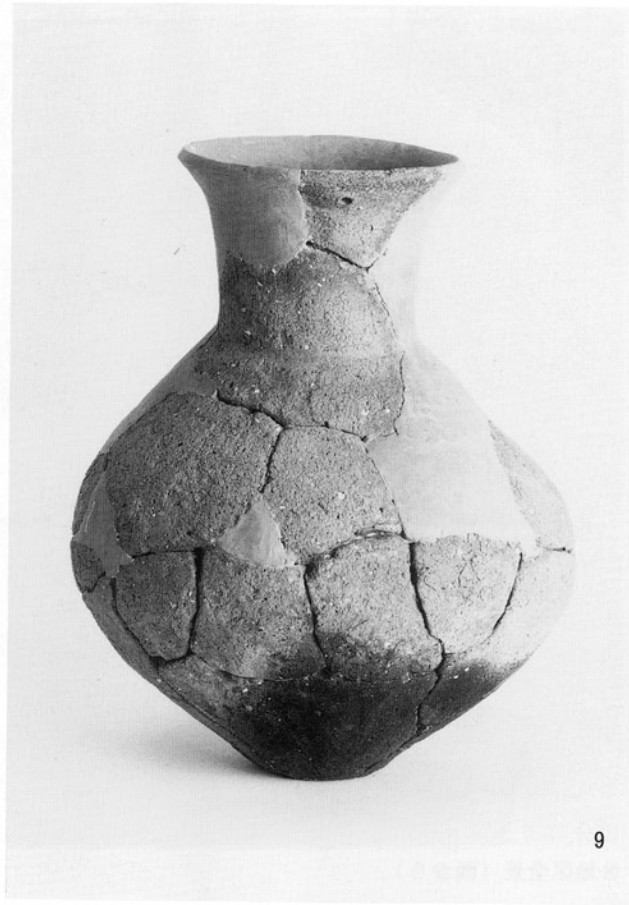
ＳＫ37　遺物出土状況（北から）

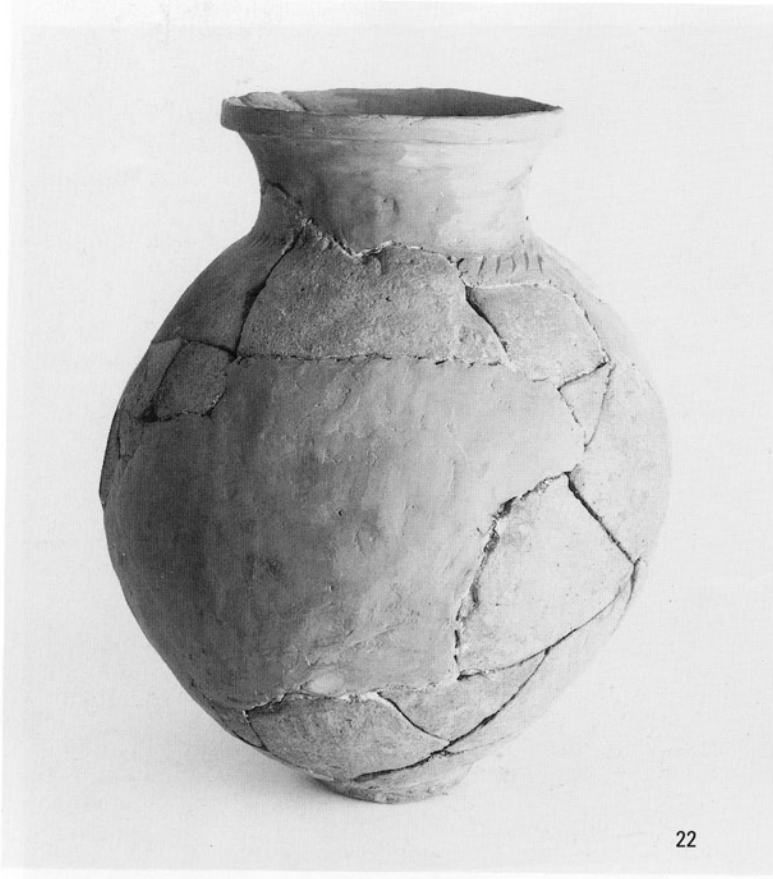
ＳＤ51　遺物出土状況（南東から）

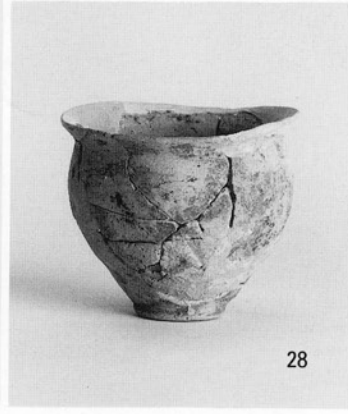
Ｂ地区全景（西から）

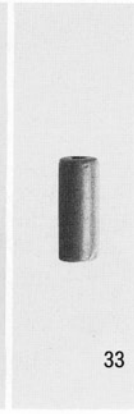
Ｄ地区全景（西から）



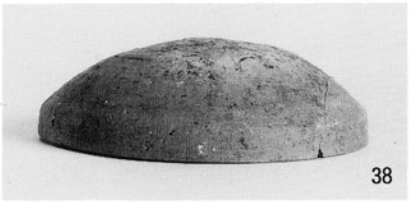


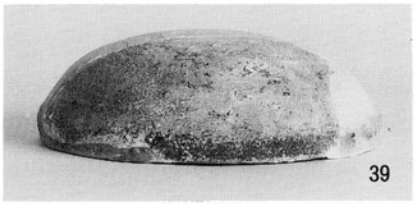




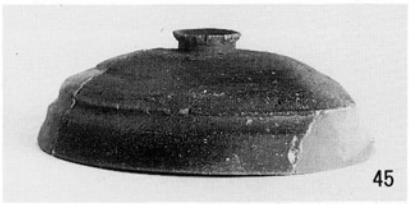


出土遺物（１：３、ただし33は１：１）


38


39

43


45

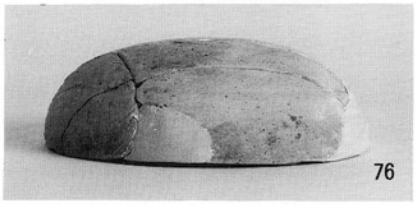
46

57

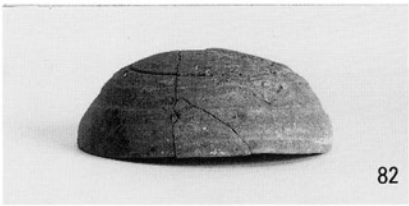
70

72

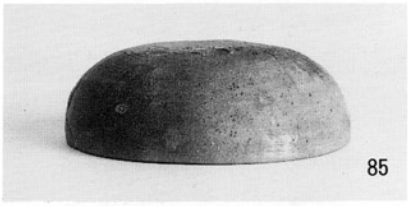
75


76

77


82

84

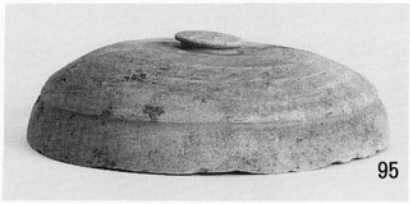

85

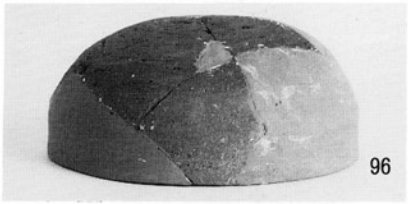
88

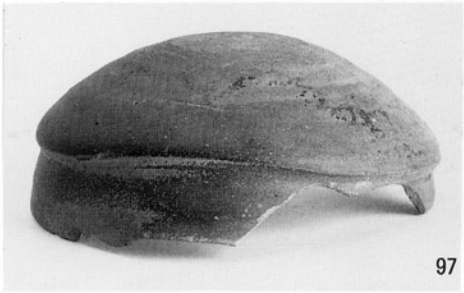
89

91

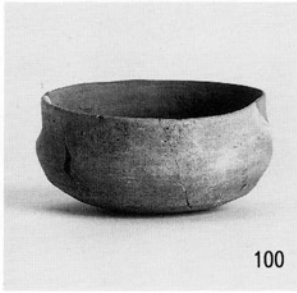
93


95

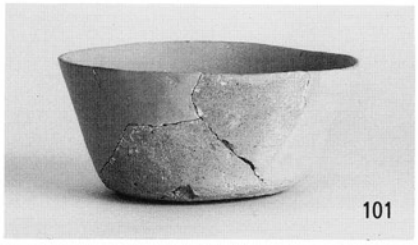

96


97

98


100

出土遺物（１：３）


101

102

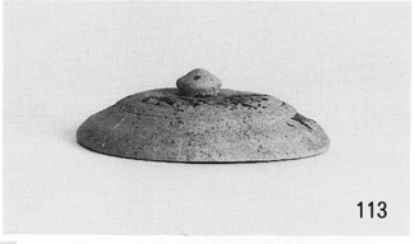
103

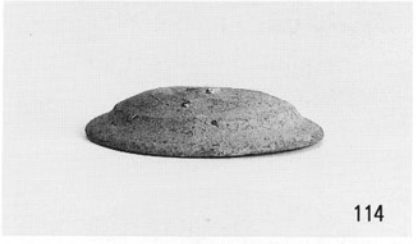
105

107

108

110

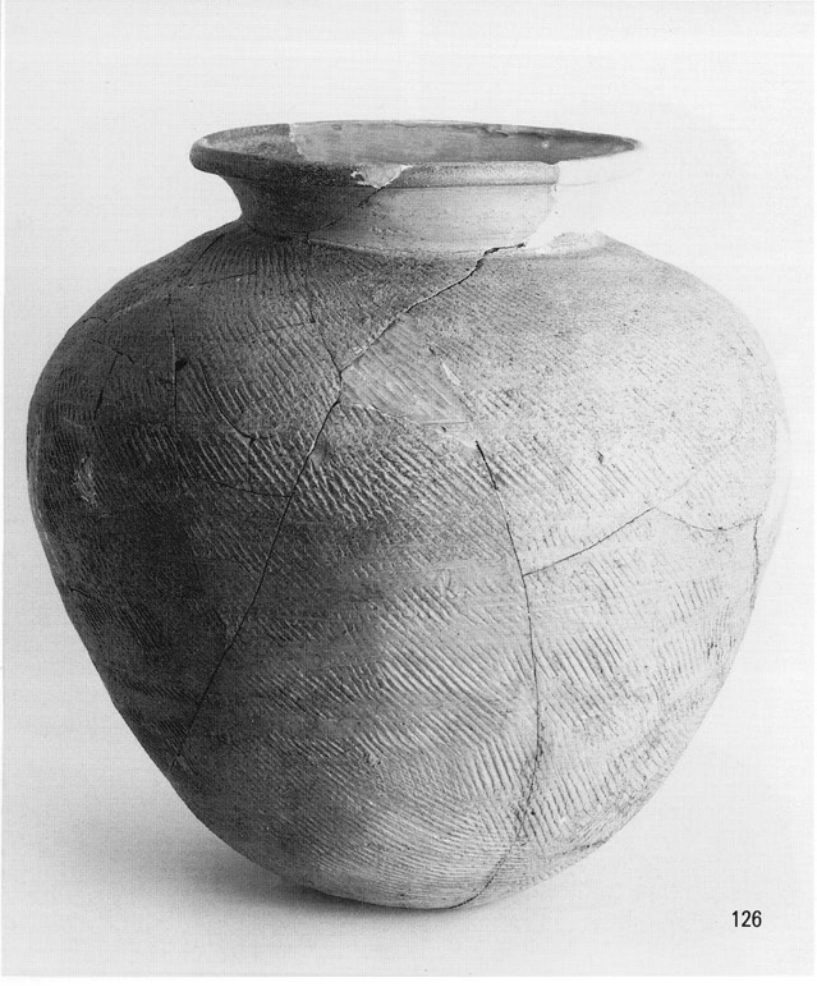

113


114

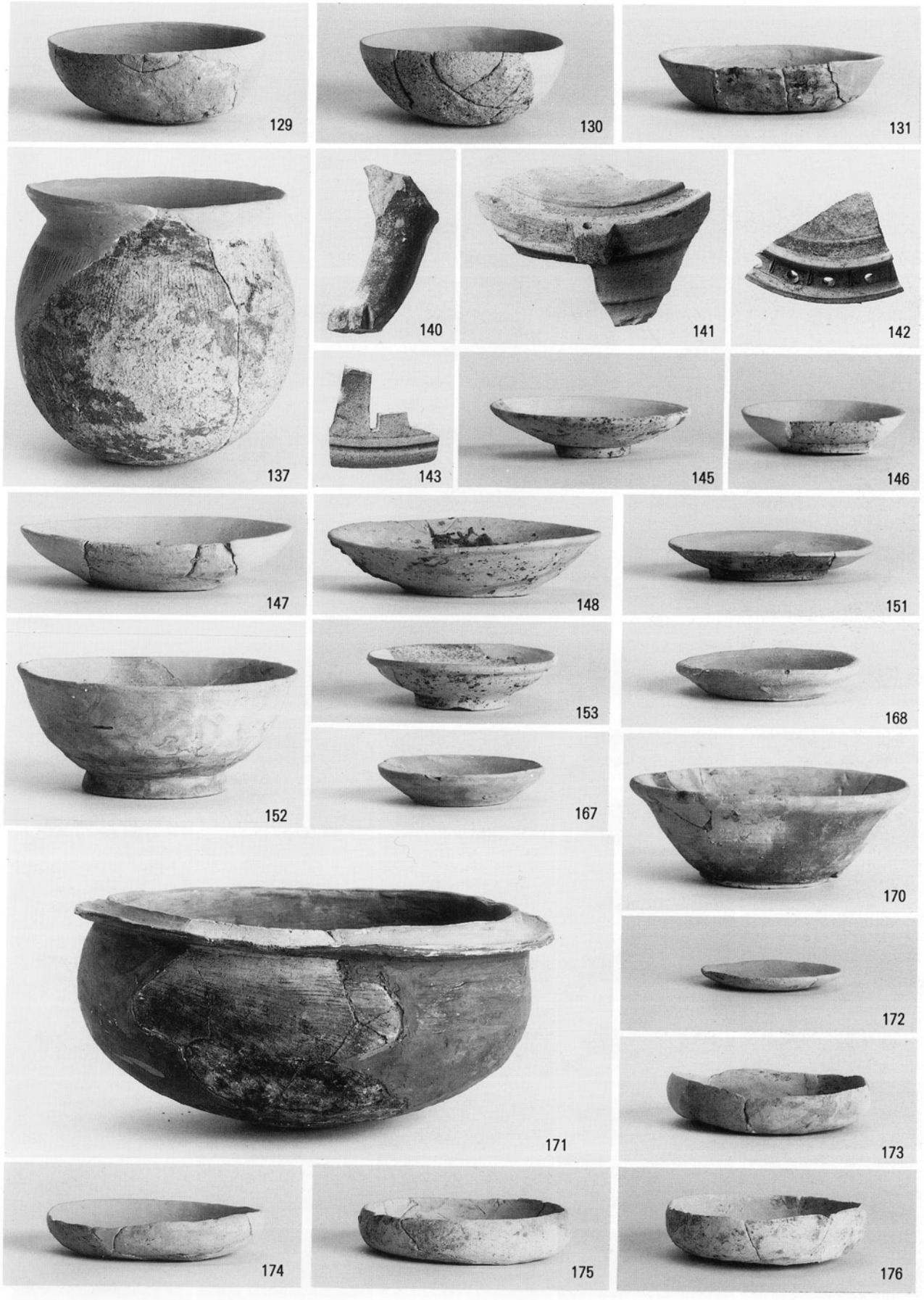
115

118

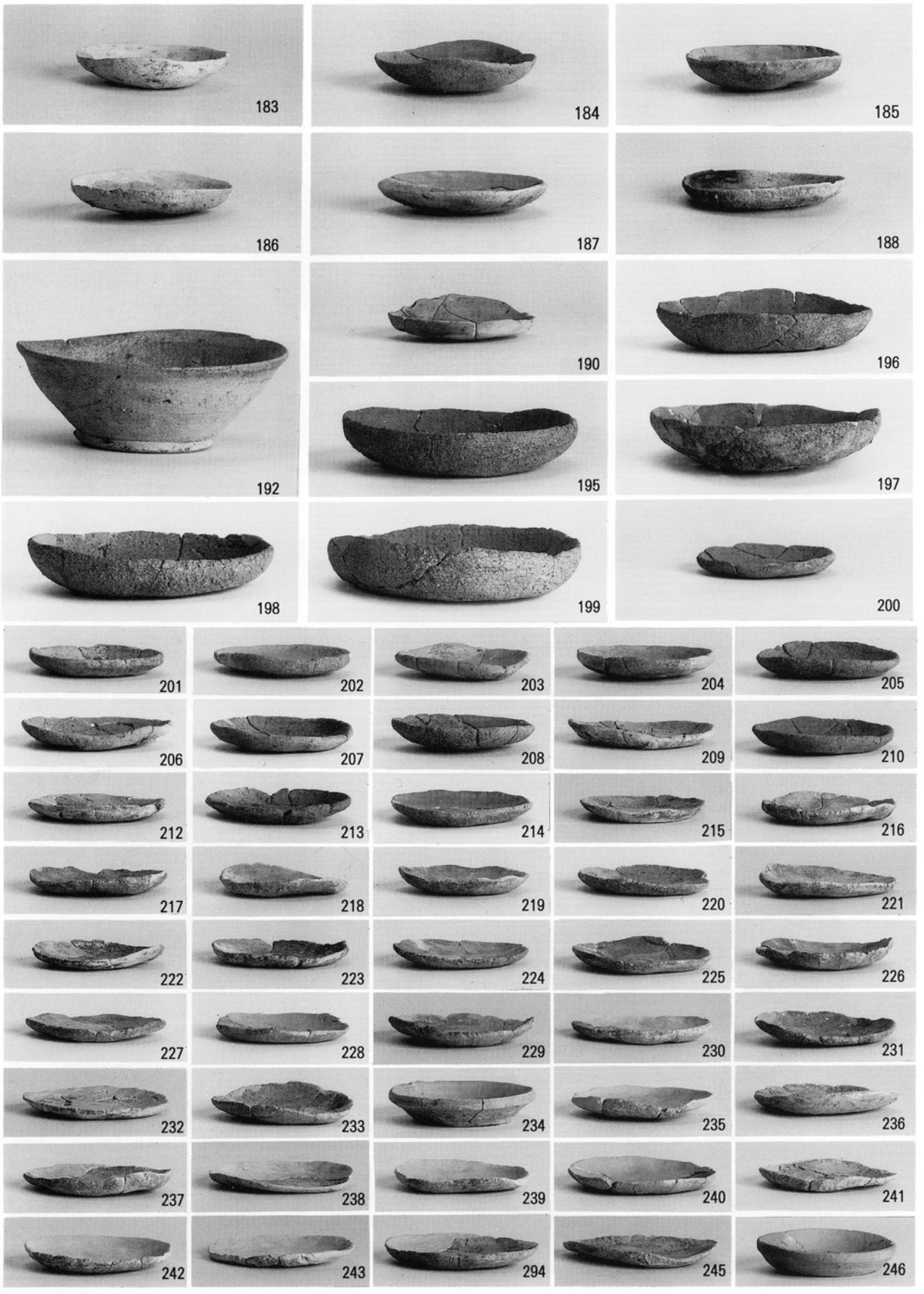
120


126

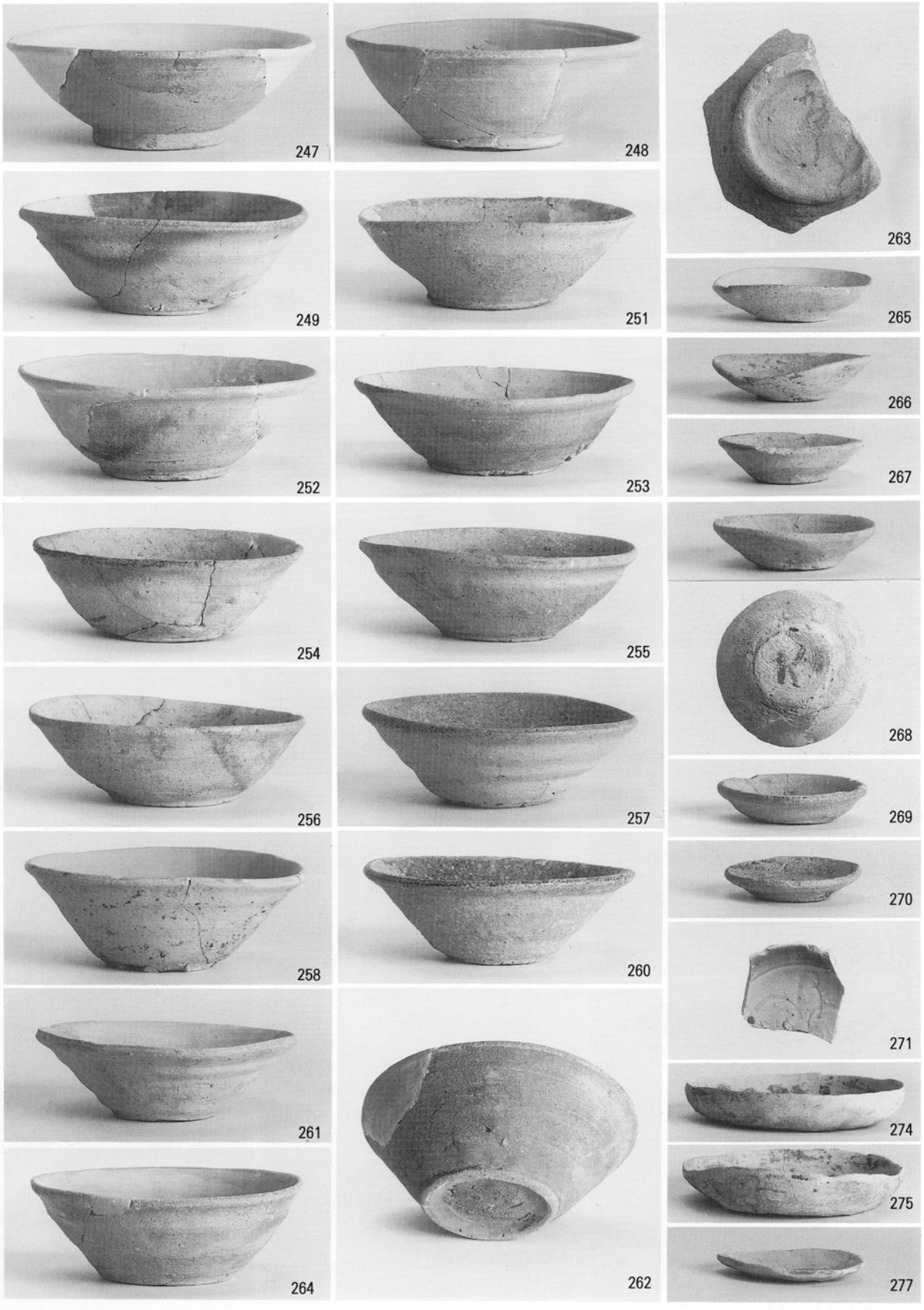
出土遺物（１：３）


129
130
131
137
140
141
142
143
145
146
147
148
151
152
153
168
167
170
171
172
173
174
175
176

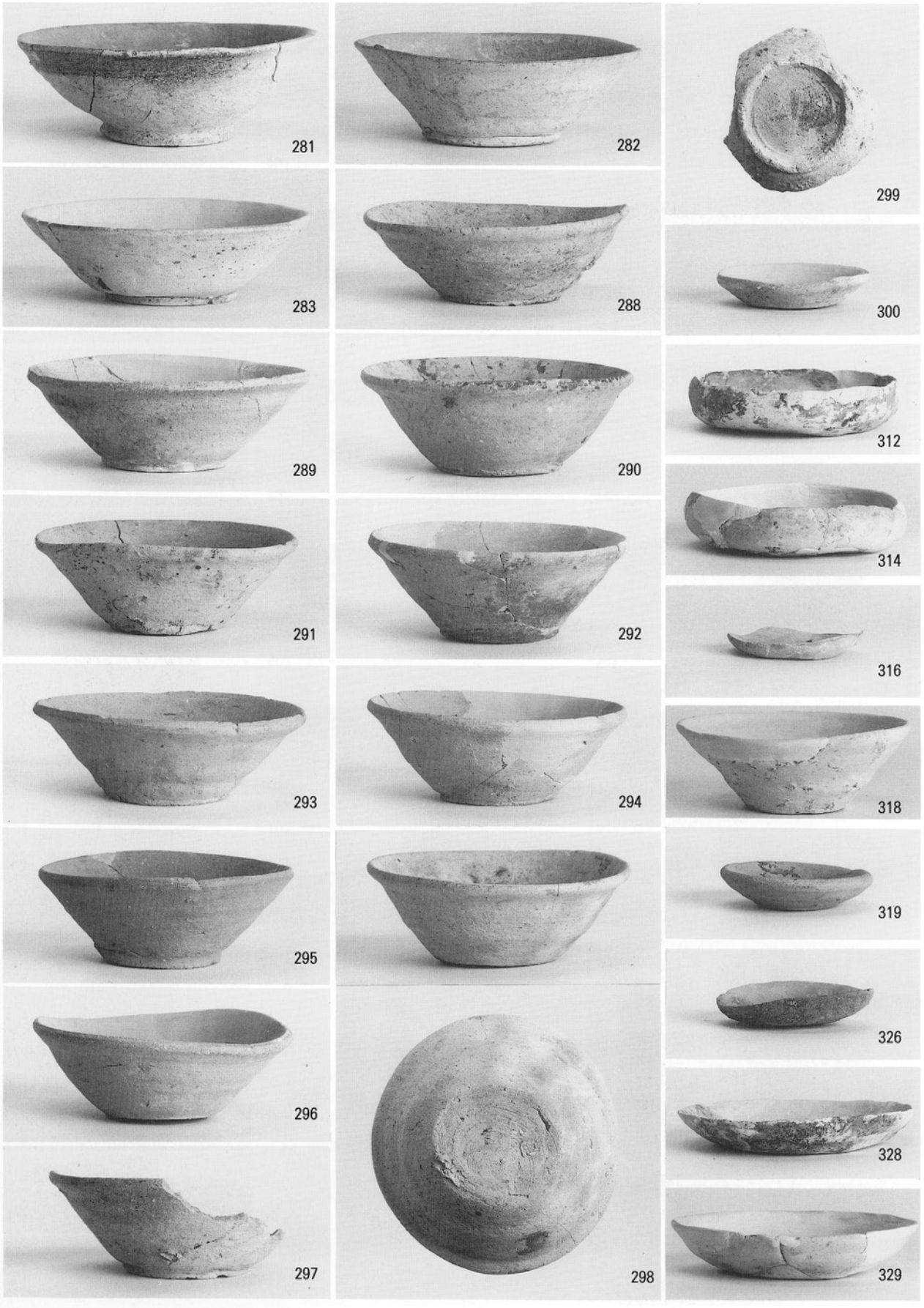
出土遺物（1：3）


183
184
185
186
187
188
192
190
196
195
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
294
245
246

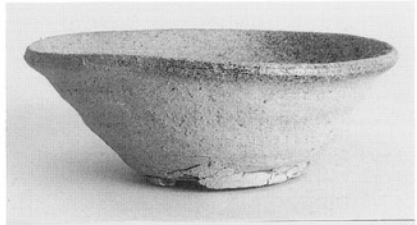
出土遺物（１：３）

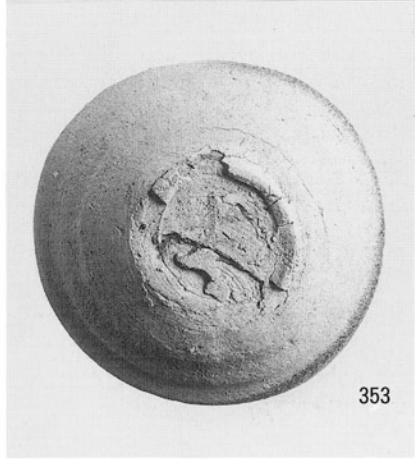

247
248
263
249
251
265
252
253
266
267
254
255
268
256
257
269
258
260
270
271
261
274
275
264
262
277

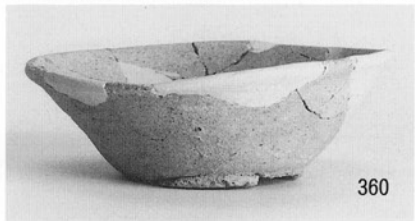
出土遺物（１：３）


281
282
299
283
288
300
289
290
312
291
292
314
293
294
316
295
318
319
296
326
297
298
328
329

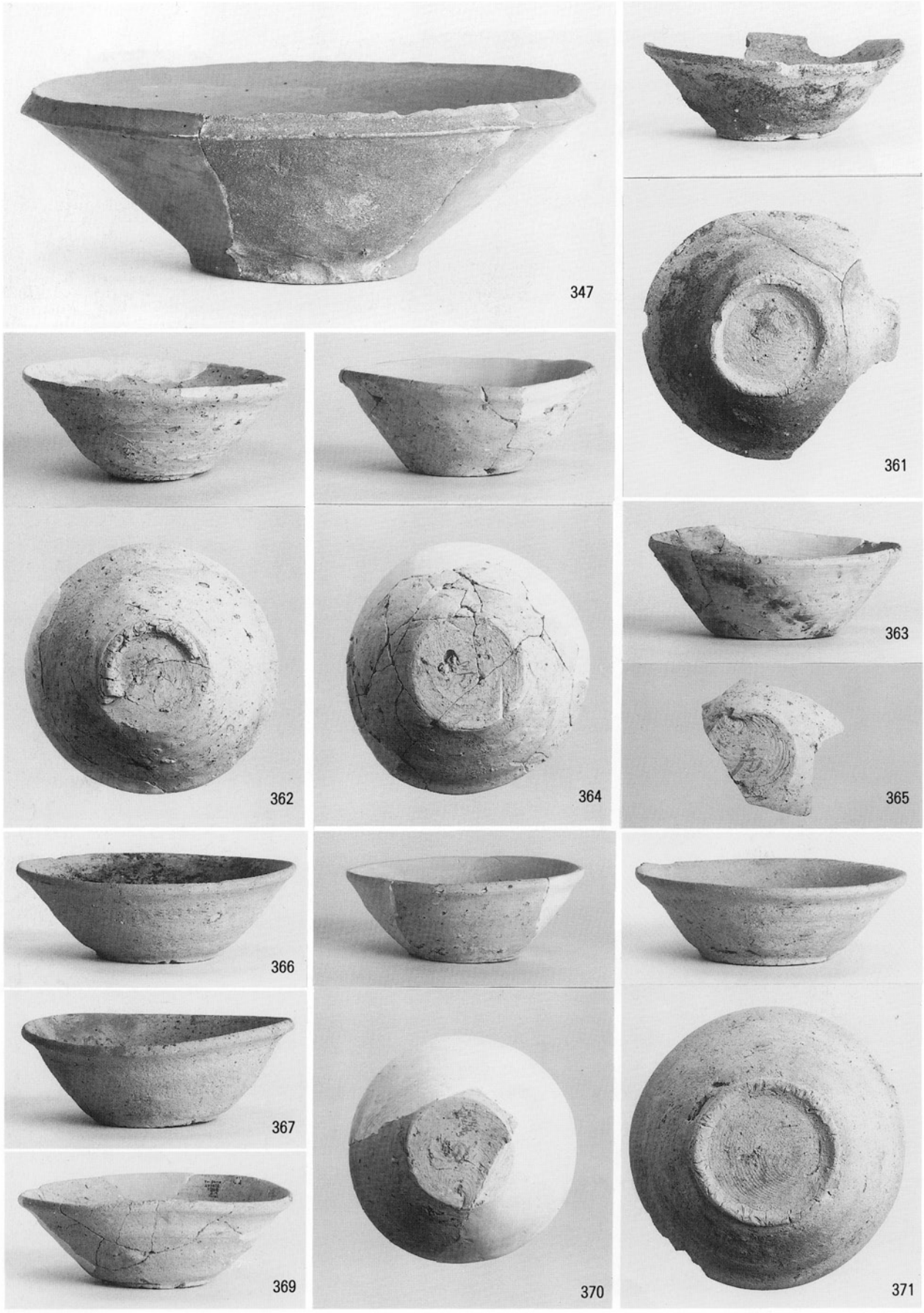
出土遺物（１：３）



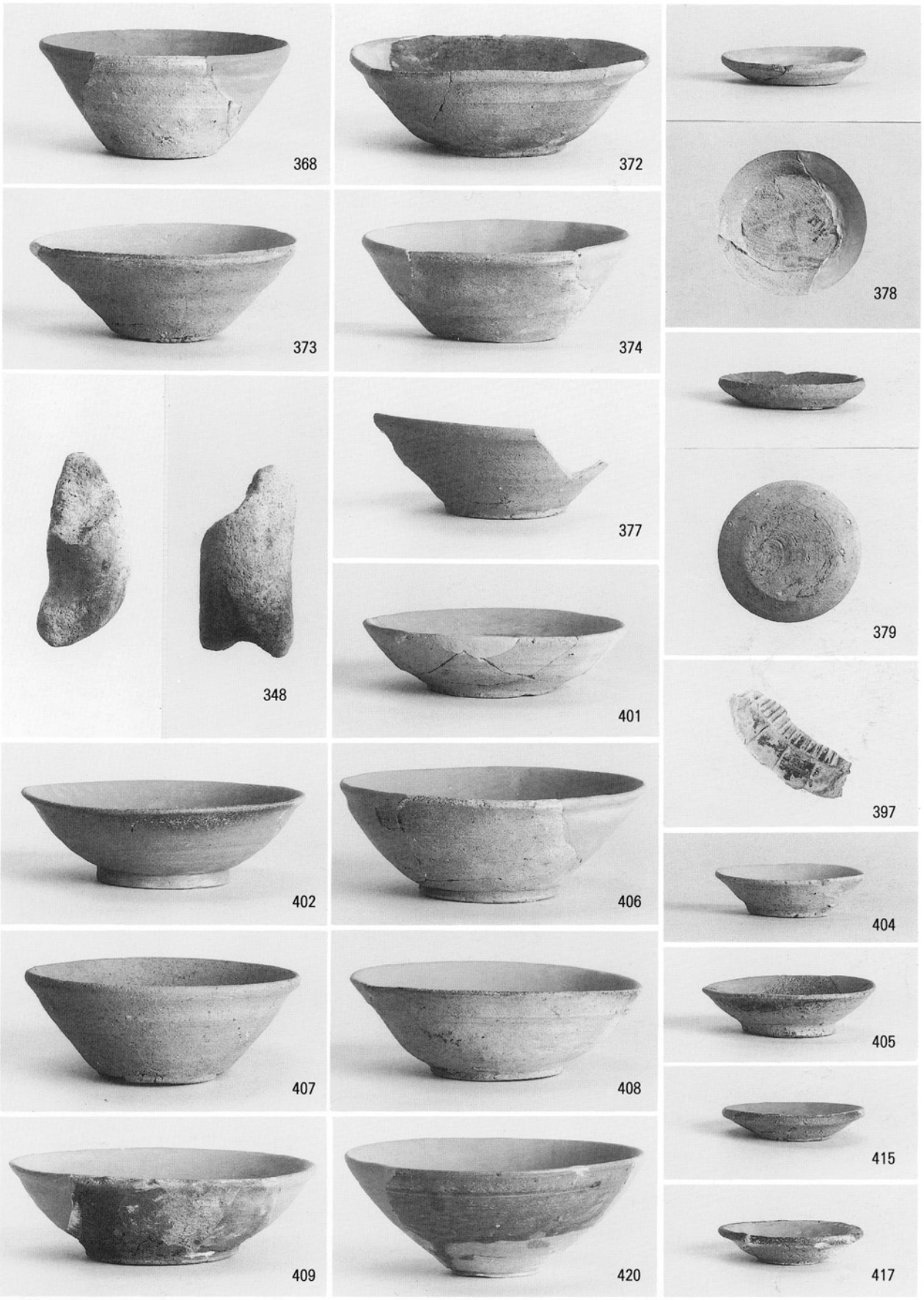




出土遺物（１：３）



出土遺物（１：３）



出土遺物（1：3，397は1：1）

（付）森山東遺跡出土の漆器椀について

森山東遺跡は津市長岡町に所在し、昭和63年度から平成元年度にかけて、中勢道路建設事業に伴って発掘調査が実施された遺跡である。

森山東遺跡についての報告書は既に刊行されている[①]が（註１）、漆器椀２点が未掲載なのでここで報告することにする。

遺物はＡ地区の旧美濃屋川以北の砂堆積層である自然流水路から出土した漆器椀２点である。

自然流水路の遺構時期については弥生～江戸時代までの幅広い時期の遺物が出土しているため明確な時期は決定しがたいが室町時代以降における氾濫によるものと考えられている。

椀（１）　Ｆ－15地区から出土したもので、口縁部及び底部の一部を欠損する。高台径5.0㎝で器壁は、底部で1.7㎝、体部で0.5～1.8㎝である。

成形は横木どりによって成されており、削り出し高台を持つ。体部は湾曲しながら立ち上がり、高台部はハの字に開く。体部内外面及び高台部内外面に黒漆が塗られ、体部内面には朱漆が残る。体部外面３方に二重輪の中に木葉をあしらった家紋らしき文様が施されている。

椀（２）　Ｆ－16地区から出土したもので、椀（１）より大ぶりの椀で口縁部及び底部一部を欠損する。高台径6.5㎝器壁は底部で1.35㎝、体部で0.35～0.65㎝である。

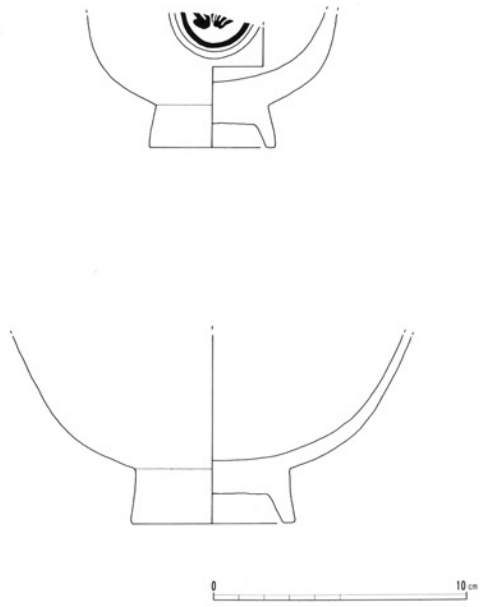
成形・形態とも椀（1）と同じく横木どりで、体部は湾曲しながら立ち上がり、高台部は削り出しによりハの字に開く。体部内外面及び高台部内外面に黒漆が塗られ、体部内面には朱漆が全面に塗られていたと思われる。

なお森山東遺跡からは上記の２点の漆器椀が出土したが、三重県内でも赤堀城跡・神ノ木館跡・木津氏遺跡等で出土しているが管見にふれたもののみ第34～37表にした。

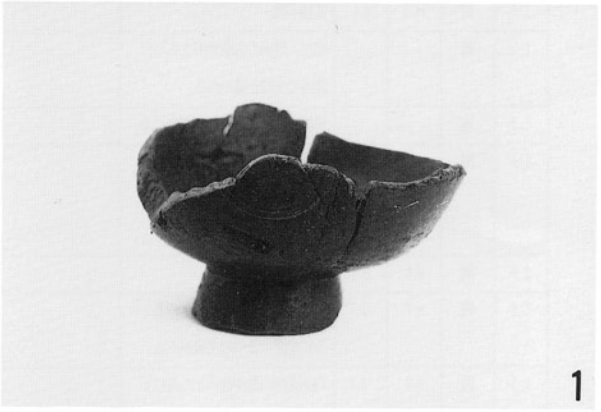
（筒井　昭仁）

〔註〕

① 小菅文裕ほか「森山東遺跡」『一般国道中勢道路（９工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化センター　1993年



第150図　出土遺物実測図（１：３）



出土遺物

番号	器種	口径	器高	文様及び特徴	時期	遺跡名	遺構	所在地	文献	備考
1	椀			見込みに「興」の朱字が記される。	中世	南小山廃寺		桑名郡多度町小山	1	文献内遺物番号45
2	椀	14.5	7.5	前面黒漆。見込みおよび体部外面に一部赤漆。		丹生川上城跡	Ⅶ郭３８Ｄ区	員弁郡大安町大字丹生川上字正法寺	2	文献内遺物番号285
3	椀	推定13.4	推定9.8	八字状に開く高い高台から湾曲しながら立ち上がる口縁を持つ深い椀。内外面ともに黒漆塗りで一部に朱漆で文様が描かれる。		茂福城跡	Ｅ地区堀　灰黒色粘土層	四日市市茂福町字里ノ内	3	文献内遺物番号13
4	椀		8.6	八字状に開く高い高台から湾曲しながら立ち上がる口縁を持つ深い椀。内外面ともに黒漆塗りで文様はない。		茂福城跡		四日市市茂福町字里ノ内		四日市市教育委員会調査。詳細は四日市市教育委員会の御教示による。
5	椀	不明	不明		鎌倉後半～室町前半	小判田遺跡	Ｂ地区ＳＫ０３	四日市久保田一丁目	4	詳細は四日市市教育委員会の御教示による。
6	椀	不明	不明		鎌倉後半～室町前半	小判田遺跡	Ｂ地区ＳＫ０３	四日市久保田一丁目	4	詳細は四日市市教育委員会の御教示による。
7	椀	9.0	2.5	文様なし。完形。内外朱漆塗り、高台のみ黒漆塗り。		赤堀城跡	NO.１０地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号1
8	椀	8.6	2.9	高台の黒漆のところに朱漆で「井」の文様あり。		赤堀城跡	NO.１０地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号2
9	椀	5.7	1.4	文様不明。		赤堀城跡	NO.１１地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号3
１０	椀	9.2	2.0	痕跡あるが文様不明。		赤堀城跡	NO.１２地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号4
１１	椀	14.3	4.4	文様不明。		赤堀城跡	NO.１２地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号5
１２	椀			破片。外面の朱漆地のところに黒漆で文様が描かれる。		赤堀城跡	NO.７地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号6
１３	椀			朱漆で「鳥」の文様が描かれる。		赤堀城跡	NO.１０地	四日市市城東町	5	文献内遺物番号7
１４	椀	10.5	2.8	内面底部の黒漆のところに朱漆で「O」の文様があるが半分破片であるため不明。		赤堀城跡	NO.１２地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号8
１５	椀	9.4	2.3	文様なし。		赤堀城跡	NO.１２地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号9
１６	椀	9.7	2.7	完形。内面底部の黒漆地のところに朱漆で２つの文様がある。		赤堀城跡	NO.１０地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号10
１７	椀	9.7	2.7	内面底部の黒漆地のところに２つの同様な文様がある。		赤堀城跡	NO.１２地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号11
１８	椀	12.0	2.9	文様不明。		赤堀城跡	NO.１１地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号12
１９	椀	7.0	6.2	12の漆器と同じ大型の椀であるが文様は不明。		赤堀城跡	NO.１２地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号13
２０	椀			破片。内面朱漆塗り、外面黒漆塗りで外面の黒漆地のところに「三重円」の文様が描かれる。		赤堀城跡	NO.３０地区	四日市市城東町	5	文献内遺物番号14
２１	椀			底部片。内外面黒漆塗りで、底部内面に朱漆により文様を描く。		赤堀城跡	灰褐砂礫	四日市市城東町	6	文献内遺物番号79

第34表　三重県内出土の漆器一覧表（1）

番号	器種	口径	器高	文様及び特徴	時期	遺跡名	遺構	所在地	文献	備考
22	椀			底部片体部内外面及び底部内面は朱漆塗りで、底部外面は黒漆塗りで朱漆により「但？」の文字を書く。		赤堀城跡	E－4,灰色粘質土	四日市市城東町	6	文献内遺物番号80
23	椀			口径からの体部片内面朱漆塗り外面黒漆塗りで、朱漆で鳥の文様を描く。		赤堀城跡	E－1、撹乱溝	四日市市城東町	6	文献内遺物番号81
24	椀	不明	不明	内外面黒漆塗りで、外面に朱漆でつるが描かれている。		米田遺跡	B－6青灰シルト	四日市小古曽三丁目	7	詳細は四日市市教育委員会の御教示による。
25	椀	不明	不明	内外面黒漆塗りで、文様なし。		米田遺跡	B－2灰色粘質土	四日市小古曽三丁目	7	詳細は四日市市教育委員会の御教示による。
26	椀	不明	不明	内外面黒漆塗りで、内面底部に朱漆で円が描かれている。		米田遺跡	A－2灰色粘質土	四日市小古曽三丁目	7	詳細は四日市市教育委員会の御教示による。
27	椀	4.2		内外面黒漆塗り、内面に朱漆で同心円の文様あり。		糀屋垣内遺跡	井戸SE5　青灰色	亀山市羽若町字糀屋垣内	8	文献内遺物番号271
28	椀					六大A遺跡		津市大里窪田町字花村		平成6年度三重県埋蔵文化財センター調査
29	椀		6.0	外面黒漆、内面朱漆塗り。底裏に朱漆で「大井」の文字を記す。		六大B遺跡	A地区　井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号56
30		11.4	3.5	外面朱漆塗り。底裏に黒漆で「七」の文字を記す。		六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号57
31	椀		2.4	外面黒漆、内面朱漆塗り。底裏に朱漆で「井」の文字を記す。		六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号58
32	椀		6.4	外面黒漆、内面朱漆塗り。		六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号59
33	椀		3.6	外面黒漆、内面朱漆塗りで高台は低く逆台形を呈する。 体部は一旦横に広がりほぼ垂直に立ち上がる。		六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号60
34	椀		2.4	外面黒漆、内面朱漆塗りで外面に家紋が施される。		六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号61
35	椀		2.0	外面黒漆、内面朱漆塗りで外面に家紋が施される。		六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	文献内遺物番号62
36						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
37						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
38						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
39						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
40						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
41						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
42						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
43						六大B遺跡	A地区井戸7	津市大里窪田町字竹花	9	
44	椀	14	5.6			六大B遺跡	I－3地区井戸3	津市大里窪田町字竹花	10	

第35表　三重県内出土の漆器一覧表（2）

番号	器種	口径	器高	文様及び特徴	時期	遺跡名	遺構	所在地	文献	備考
45	椀	不明	不明	内外面とも黒漆塗り。内面には朱漆が残る。外面の三方向には二重輪の中に木葉をあしらった家紋らしき文様がある。	室町以降	森山東遺跡	A地区F－15自然流水路	津市長岡町	本書	文献内遺物番号1
46	椀	不明	不明	内外面とも黒漆塗り。内面には朱漆が残る。	室町以降	森山東遺跡	A地区F－16自然流水路	津市長岡町	本書	文献内遺物番号2
47	椀					峯治城跡		津市一身田上津部田字オの坪	11	
48	椀					戸木遺跡	A－2区井戸1の底部	久居市戸木町	12	
49	椀					戸木遺跡	A－2区井戸1の底部	久居市戸木町	12	
50	椀					戸木遺跡	A－2区井戸1の底部	久居市戸木町	12	
51	椀					四反畑遺跡	A区井戸	一志郡嬉野町中川下ノ庄地内	13	
52	不明					多気遺跡群	e1礫混じり黒褐色土	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号1
53	不明					多気遺跡群	d6床土下	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号2
54	Ⅲ					多気遺跡群	c8焼土混じり黒褐色土	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号3
55	不明					多気遺跡群	d8黄色粘土混じり黒褐土	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号4
56	不明			草木の文様		多気遺跡群	d8礫混じり暗褐色土	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号5
57	不明					多気遺跡群	c9SK185	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号6
58	Ⅲ					多気遺跡群	c13SK1011	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号7
59	Ⅲ					多気遺跡群	e13SZ901	一志郡美杉村上多気字土井沖	14	文献内遺物番号8
60	椀		6.2	外面黒漆塗り、内面朱漆塗りで外面に円帯文を朱彩する。		前沖遺跡	A地区D11	松坂市深長町野村	15	文献内遺物番号W51
61	椀	5.8	6.4	内外面黒漆塗りで、草木の葉の筆描き文様が両面に朱漆で描かれる。		上相田遺跡	井戸SE13A	松阪市伊勢寺上相田	16	
62	椀			表面黒漆塗り、内面には朱で模様が書かれている。		嵜谷遺跡	B区	松坂市矢津町	17	
63	椀			表面黒漆塗り、内面には朱で模様が書かれている。		嵜谷遺跡	B区	松坂市矢津町	16	
64				内面朱漆塗り。	室町	堀町遺跡	土坑	松坂市朝日町字斎宮ほか		平成6年度三重県埋蔵文化財センター調査
65						阿形遺跡		松坂市阿形町		平成3年度三重県埋蔵文化財センター調査
66					鎌倉末～室町前葉	下沖遺跡	A地区井戸	伊勢市上野町下沖	18	
67	椀					安養寺遺跡		度会郡二見町溝口割石	19	
68						喜春遺跡		上野市佐那具字喜春	20	
69	椀					小泉氏館跡	堀	上野市衣那具	21	
70	椀			高台部付近の破片。内外面とも黒漆塗りの後朱彩を施す。朱彩は高台部には及ばない。	室町	蓮花寺推定地遺跡	堀	上野市服部町字中之坊	22	詳細は上野市教育委員会の御教示による。
71	椀			底部の黒漆面の中央に「村」を朱書きする。	中世15C後半～16C代	風呂谷遺跡	ピット	阿山郡大山田村大字富永字風呂谷	23	漆皮膜のみ残存。
72	椀	11.2	3.5	高台まで削り出しで、外面黒漆内面朱漆塗り。	室町後期～江戸前期	神ノ木館跡	SD36Ⅲ層	上野市大野木神ノ木	24	文献内遺物番号108
73	椀	16.0	5.6～	朱漆地に外面のみ文様を描く。	室町後期～江戸前期	神ノ木館跡	SD31Ⅱ層	上野市大野木神ノ木	24	文献内遺物番号109

第36表　三重県内出土の漆器一覧表（3）

番号	器種	口径	器高	文様及び特徴	時期	遺跡名	遺構	所在地	文献	備考
74	椀			内外ともに黒漆をかける。	室町後期～江戸前期	神ノ木館跡	SD37	上野市大野木神ノ木	24	文献遺物番号110
75	椀			内外面黒漆塗り。	中世室町～江戸	木津氏館跡	堀FT第Ⅱ2層	上野市大野木字東出	25	文献遺物番号69
76	椀			高台部のみ残存。	中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	文献遺物番号70
77	椀			内面全体に朱漆が塗られる。	中世室町～江戸	木津氏館跡堀	CT第Ⅱ2層	上野市大野木字東出	25	文献遺物番号71
78	椀			朱漆の木葉状文様がある。	中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	文献遺物番号72
79	椀				中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	保存状態が悪い。
80	椀				中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	保存状態が悪い。
81	椀				中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	保存状態が悪い。
82	椀				中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	保存状態が悪い。
83	椀				中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	保存状態が悪い。
84	椀				中世室町～江戸	木津氏館跡		上野市大野木字東出	25	保存状態が悪い。
85	不明			内外面とも朱漆塗り。	16世紀頃	六地蔵B遺跡	溝	名賀郡青山町伊勢路		平成6年度三重県埋蔵文化財センター調査
86				破片。外面黒漆塗り		北門遺跡	井戸	上野市大谷字北門		上野市教育委員会の後教示による。

第37表　三重県内出土の漆器一覧表（4）

〈文献〉

1　伊東春夫『南小山廃寺発掘調査報告』多度町教育委員会1986.

2　久志本鉄也ほか『丹生川上城跡発掘調査報告』三重県教育委員会1985.

3　北野保・谷川博史『四日市都市計画道路富田山城線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査記録茂福城跡』四日市市茂福城跡調査会1978.

4　北野保・森逸郎・谷川博史『市立四日市病院敷地造成工事（その２）に伴う小判田遺跡の発掘調査』四日市市教育委員会1979.

5　名坂秀・北野保『四日市都市計画道路事業３．４．２４．堀木日永線に伴う緊急発掘調査赤堀遺跡』四日市市教育委員会1986.

6　春日井恒・上垣幸徳『赤堀城跡２－開発計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』四日市市遺跡調査会1989.

7　『三重県埋蔵文化財センター年報５．』三重県教育委員会1994.

8　亀山隆『糀屋垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会1994.

9　中村光司・本堂弘之「六大Ｂ遺跡（Ａ地区）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター－1994.

10　中村光司・本堂弘之・山口格・小菅文裕「六大Ｂ遺跡（Ｉ地区）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ｖ』三重県埋蔵文化財センター－1993.

11『三重県埋蔵文化財センター年報２．』三重県埋蔵文化財センター－1991.

12　山下雅春・田中喜久雄「戸木遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県教育委員会１９８８.

13　『三重県埋蔵文化財年報１７』三重県教育委員会1987.

14　伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター－1993.

15　増田安生『前沖遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会1986.

16　榎本義譲「上相田遺跡」『県道丹生寺一志線及び県道合ケ野松阪線道路改良工事敷地内埋蔵文化財報告書』松阪市教育委員会1989.

17　野田修久・野原宏司「嵜谷遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報』三重県教育委員会1987.

18　『三重県埋蔵文化財年報１６』三重県教育委員会1986.

19　『三重県埋蔵文化財センター年報４．』三重県埋蔵文化財センター－1993.

20　『三重県埋蔵文化財年報１２』三重県教育委員会1982.

21　『三重県埋蔵文化財年報１９』三重県教育委員会1989.

22　『三重県埋蔵文化財センター年報５．』三重県埋蔵文化財センター－1994.

23　森前稔・伊藤久嗣「風呂谷館跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調報告』三重県教育委員会1984.

24　森前稔・駒田利治「神ノ木館跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調報告』三重県教育委員会1980.

25　駒田利治「木津氏館跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調報告』三重県教育委員会1980.

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろけんせつじぎょうにともなうおごそいせき・やまごもりいせき・みやのまえいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	一般国道２３号中勢道路建設事業に伴う大古曽遺跡 ・ 山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５－４
編著者名	河北秀実・山口　格・清水正明・中村光司・穂積裕昌・本堂弘之・倉田直純・筒井昭仁
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒５１５－０３　　三重県多気郡明和町竹川５０３　　TEL ０５９６５－２－１７３２
発行年月日	西暦　　１９９５年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おごそいせき 大古曽遺跡	みえけんつしいっしんでん 三重県津市一身田 おごそあざやまのくち 大古曽字山ノ口	24201	１１	34 度 46 分 20 秒	136度 29 分 40 秒	910701～ 920116 930413～ 931110	5,160 4,210	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う事前調査
やまごもりいせき 山籠遺跡	みえけんつしこうべちょう 三重県津市河辺町 あざやまごもり 字山籠	24201	１９	34 度 44 分 30 秒	136 度 29 分 10 秒	91204～ 900323	1,100	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う事前調査
みやのまえいせき 宮ノ前遺跡	みえけんつしなかまちょう 三重県津市長岡町 あざみやのまえ 字 宮ノ前	24201	７３５	34 度 44 分 10 秒	136度 29 分 10 秒	890411～ 900317 930415～ 930426	2,700 100	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おごそいせき 大古曽遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 古墳～奈良時代 中世	溝 溝 掘立柱建物・土坑・溝 溝・墓	石器 石器 土師器・須恵器 陶器・磁器	
やまごもりいせき 山籠遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居	石器・弥生土器	
みやのまえいせき 宮ノ前遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世	土坑 竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建物 井戸・溝 掘立柱建物・井戸・溝 土坑	石器・縄文土器 弥生土器 須恵器・管玉 土師器・須恵器・円面硯 土師器・陶磁器	

平成7(1995)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年3月にデジタル化しました。

一般国道23号中勢道路建設事業に伴う

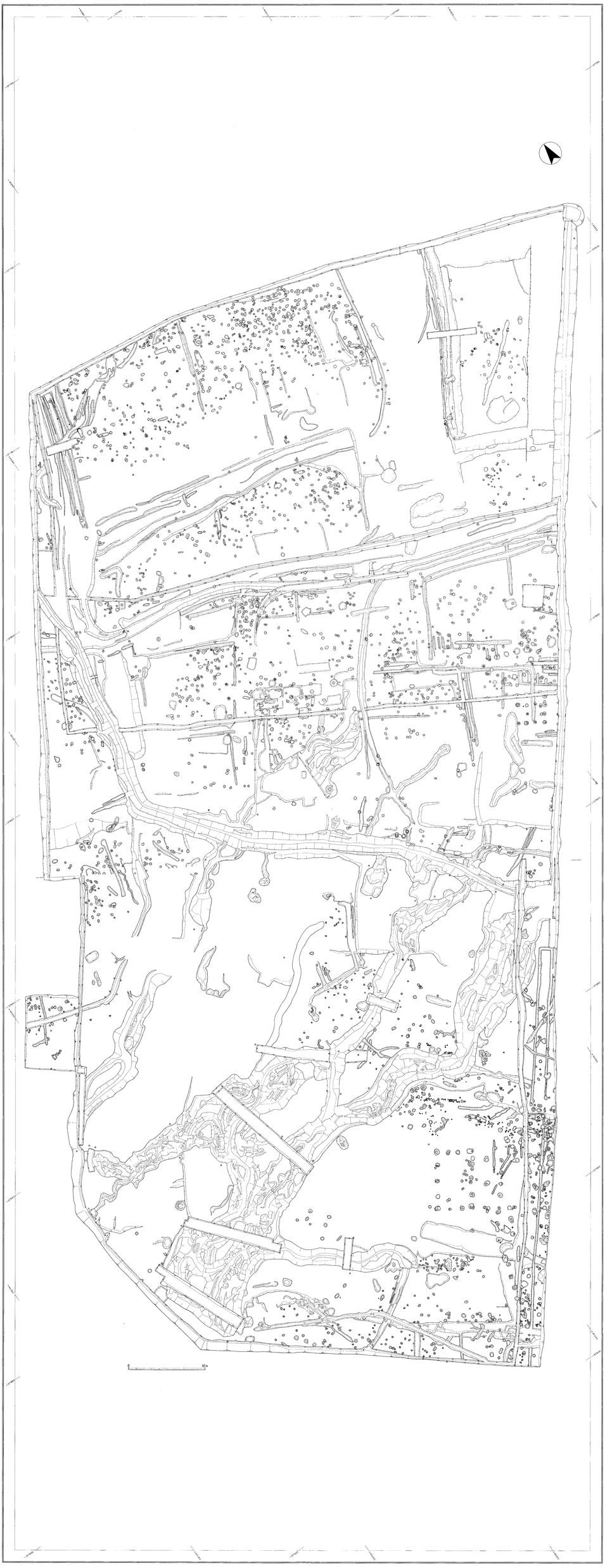
大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告

1995・3

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

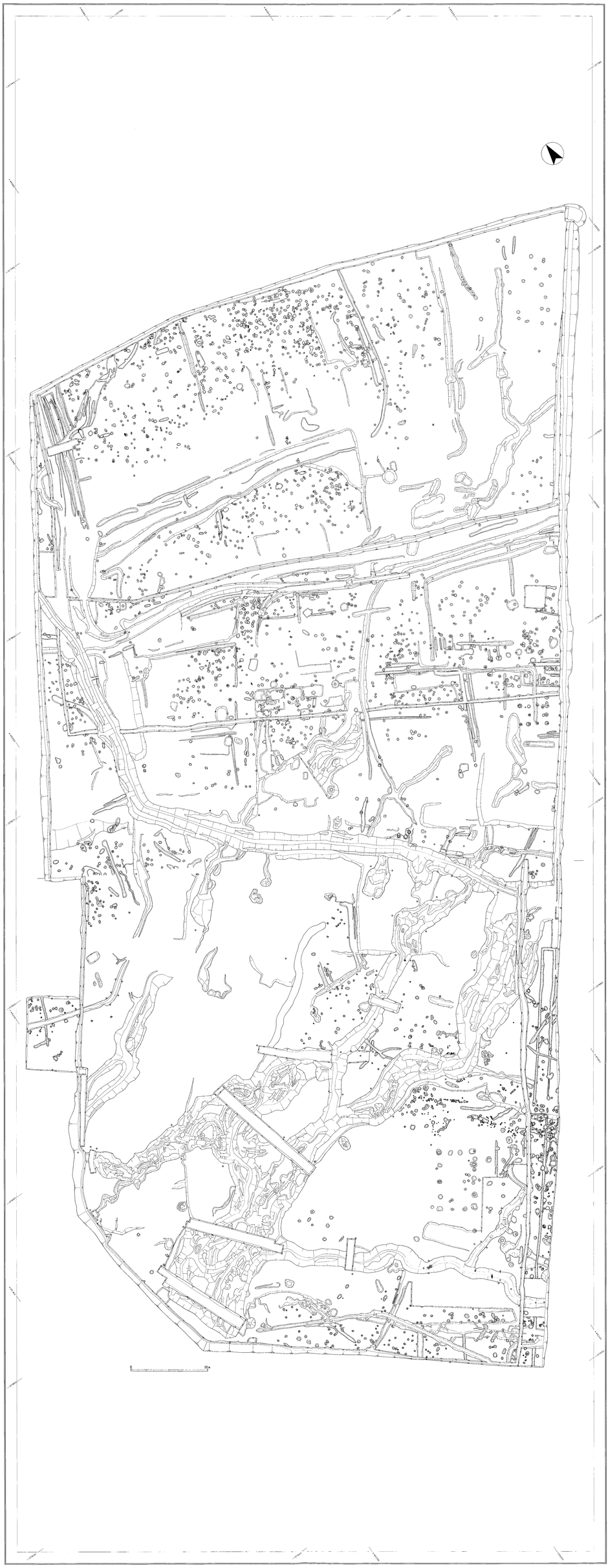
印刷　東海印刷株式会社

大古曽遺跡B・C地区遺構図（第Ⅰ面）



三重県埋蔵文化財センター

大古曽遺跡B・C地区遺構図（第２面）



三重県埋蔵文化財センター